



鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(140)

市ノ原遺跡(第3地点)

第II分冊

二〇〇九年三月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(140)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(XIX)

(伊集院IC～市来IC間)

いちのほら 市ノ原遺跡

(第3地点)

(鹿児島県日置市東市来町)

(第II分冊)

2009年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

第 II 分 冊 目 次

第 V 章 縄文時代の調査	7
第 1 節 遺構	7

第 2 節 遺物（土器）	57
第 3 節 遺物（石器）	228

挿 図 目 次

第 1 図 III, IV, V 層集石遺構位置図	8
第 2 図 V 層集石遺構位置図	9
第 3 図 1, 2, 3 号集石	10
第 4 図 4 号集石	11
第 5 図 5 号集石	12
第 6 図 6 号集石	13
第 7 図 7, 8 号集石	14
第 8 図 9, 10, 11, 12 号集石	15
第 9 図 IV 層集石遺構位置図	17
第 10 図 13, 14 号集石	18
第 11 図 15 号集石	19
第 12 図 16, 17 号集石	20
第 13 図 18, 19 号集石	21
第 14 図 20 号集石	22
第 15 図 21, 22 号集石	23
第 16 図 23 号集石	25
第 17 図 24 号集石	26
第 18 図 24 号集石出土遺物(1)	27
第 19 図 24 号集石出土遺物(2)	28
第 20 図 25, 26, 27 号集石	29
第 21 図 28 号集石	30
第 22 図 29, 30, 31, 32, 33 号集石	31
第 23 図 34, 35, 36 号集石	32
第 24 図 37, 38 号集石	33
第 25 図 39, 40 号集石	34
第 26 図 41 号集石	35
第 27 図 42, 43, 44 号集石	36
第 28 図 45, 46 号集石	37
第 29 図 47 号集石	38
第 30 図 48 号集石	39

第 31 図 49 号集石	40
第 32 図 III 層集石遺構位置図	42
第 33 図 50, 51 号集石	43
第 34 図 52, 53, 54 号集石	44
第 35 図 55, 56, 57, 58 号集石	45
第 36 図 59, 60, 61 号集石	46
第 37 図 62, 63 号集石	47
第 38 図 64, 65 号集石	48
第 39 図 66 号集石	49
第 40 図 67, 68 号集石	50
第 41 図 69 号集石	51
第 42 図 70 号集石	53
第 43 図 71 号集石	54
第 44 図 72, 73 号集石	55
第 45 図 71 号集石出土遺物	56
第 46 図 縄文時代全土器出土状況	60
第 47 図 縄文時代早期土器出土状況	61
第 48 図 縄文時代 1 類土器(1)	62
第 49 図 縄文時代 1 類土器出土状況	63
第 50 図 縄文時代 1 類土器(2)	64
第 51 図 縄文時代 1 類土器(3)	65
第 52 図 縄文時代 1 類土器(4)	66
第 53 図 縄文時代 1 類土器(5)	67
第 54 図 縄文時代 1 類土器(6)	68
第 55 図 縄文時代 2 - a 類土器(1)	69
第 56 図 縄文時代 2 類土器出土状況	70
第 57 図 縄文時代 2 - a 類土器(2)	71
第 58 図 縄文時代 2 - a 類土器(3)	72
第 59 図 縄文時代 2 - a 類土器(4)	73
第 60 図 縄文時代 2 - b 類土器(1)	75

第61図	縄文時代 2 - b 類土器(2)……………	76
第62図	縄文時代 2 - b 類土器(3)……………	77
第63図	縄文時代 2 - b 類土器(4)……………	78
第64図	縄文時代 2 - b 類土器(5)……………	79
第65図	縄文時代 2 - b 類土器(6)……………	80
第66図	縄文時代 2 - b 類土器(7)……………	81
第67図	縄文時代 2 - b 類土器(8)……………	82
第68図	縄文時代 2 - b 類土器(9)……………	83
第69図	縄文時代 2 - c 類土器(1)……………	84
第70図	縄文時代 2 - c 類土器(2)……………	85
第71図	縄文時代 2 - c 類土器(3)……………	86
第72図	縄文時代 2 - c 類土器(4)……………	87
第73図	縄文時代 2 - c 類土器(5)……………	88
第74図	縄文時代 2 - c 類土器(6)……………	89
第75図	縄文時代 2 - c 類土器(7)……………	90
第76図	縄文時代 2 - c 類土器(8)……………	91
第77図	縄文時代 3 類土器出土状況……………	92
第78図	縄文時代 3 類土器(1)……………	93
第79図	縄文時代 3 類土器(2)……………	94
第80図	縄文時代 3 類土器(3)……………	95
第81図	縄文時代 4 類土器(1)……………	96
第82図	縄文時代 5 類土器(1)……………	97
第83図	縄文時代 5 類土器(2)……………	98
第84図	縄文時代 5 類土器出土状況……………	99
第85図	縄文時代 5 類土器(3)……………	100
第86図	縄文時代 5 類土器(4)……………	101
第87図	縄文時代 5 類土器(5)……………	102
第88図	縄文時代 5 類土器(6)……………	103
第89図	縄文時代 5 類土器(7)……………	104
第90図	縄文時代 5 類土器(8)……………	105
第91図	縄文時代 6 類土器(1)……………	106
第92図	縄文時代 7 - a 類土器(1)……………	107
第93図	縄文時代 7 - b 類土器(1)……………	108
第94図	縄文時代 8 類土器(1)……………	109
第95図	縄文時代 8 類土器出土状況……………	110
第96図	縄文時代 8 類土器(2)……………	111
第97図	縄文時代 8 類土器(3)……………	112

第98図	縄文時代 8 類土器(4)……………	113
第99図	縄文時代 8 類土器(5)……………	114
第100図	縄文時代 9 類土器(1) ……………	115
第101図	縄文時代 9 類土器(2) ……………	116
第102図	縄文時代 9 類土器(3) ……………	117
第103図	縄文時代 9 類土器出土状況 ……………	118
第104図	縄文時代10 - a 類土器(1) ……………	119
第105図	縄文時代10 - a 類土器(2) ……………	120
第106図	縄文時代10類土器出土状況 ……………	121
第107図	縄文時代11 - a 類土器出土状況 ……………	123
第108図	縄文時代11 - a 類土器(1) ……………	124
第109図	縄文時代11 - a 類土器(2) ……………	125
第110図	縄文時代11 - a 類土器(3) ……………	126
第111図	縄文時代11 - a 類土器(4) ……………	127
第112図	縄文時代11 - a 類土器(5) ……………	128
第113図	縄文時代11 - b 類土器出土状況 ……………	129
第114図	縄文時代11 - b 類土器(1) ……………	130
第115図	縄文時代11 - b 類土器(2) ……………	131
第116図	縄文時代11 - b 類土器(3) ……………	132
第117図	縄文時代11 - b 類土器(4) ……………	133
第118図	縄文時代11 - b 類土器(5) ……………	134
第119図	縄文時代11 - b 類土器(6) ……………	135
第120図	縄文時代11 - b 類土器(7) ……………	136
第121図	縄文時代11 - b 類土器(8) ……………	137
第122図	縄文時代11 - b 類土器(9) ……………	138
第123図	縄文時代11 - b 類土器(10) ……………	139
第124図	縄文時代11 - b 類土器(11) ……………	140
第125図	縄文時代11 - b 類土器(12) ……………	141
第126図	縄文時代11 - b 類土器(13) ……………	142
第127図	縄文時代11 - b 類土器(14) ……………	143
第128図	縄文時代11 - b 類土器(15) ……………	144
第129図	縄文時代11 - b 類土器(16) ……………	145
第130図	縄文時代11 - c 類土器(1) ……………	146
第131図	縄文時代11類土器出土状況 ……………	147
第132図	縄文時代12類土器(1) ……………	148
第133図	縄文時代13類土器出土状況 ……………	149
第134図	縄文時代13類土器(1) ……………	150

第135図	縄文時代13類土器(2)	151	第172図	縄文時代17－c類土器(10)	189
第136図	縄文時代13類土器(3)	152	第173図	縄文時代17－c類土器(11)	190
第137図	縄文時代13類土器(4)	153	第174図	縄文時代17－c類土器(12)	191
第138図	縄文時代13類土器(5)	154	第175図	縄文時代17－c類土器(13)	192
第139図	縄文時代14類土器(1)	155	第176図	縄文時代17－c類土器(14)	193
第140図	縄文時代15類土器(1)	156	第177図	縄文時代18類土器検出状況	194
第141図	縄文時代前中期土器出土状況	157	第178図	縄文時代18－a類土器(1)	194
第142図	縄文時代15類土器(2)	158	第179図	縄文時代18－a類土器(2)	195
第143図	縄文時代16類土器出土状況	159	第180図	縄文時代18類土器出土状況	196
第144図	縄文時代16類土器(1)	160	第181図	縄文時代18－b類土器(1)	197
第145図	縄文時代16類土器(2)	161	第182図	縄文時代18－b類土器(2)	198
第146図	縄文時代16類土器(3)	162	第183図	縄文時代18－b類土器(3)	199
第147図	縄文時代17類土器出土状況	164	第184図	縄文時代18－b類土器(4)	200
第148図	縄文時代17－a類土器(1)	165	第185図	縄文時代18－b類土器(5)	201
第149図	縄文時代17－a類土器(2)	166	第186図	縄文時代18－b類土器(6)	202
第150図	縄文時代17－a類土器(3)	167	第187図	縄文時代18－b類土器(7)	203
第151図	縄文時代17－a類土器(4)	168	第188図	縄文時代18－b類土器(8)	204
第152図	縄文時代17－a類土器(5)	169	第189図	縄文時代18－c類土器(1)	205
第153図	縄文時代17－a類土器(6)	170	第190図	縄文時代18－c類土器(2)	206
第154図	縄文時代17－a類土器(7)	171	第191図	縄文時代18－c類土器(3)	207
第155図	縄文時代17－b類土器(1)	172	第192図	縄文時代18－c類土器(4)	208
第156図	縄文時代17－b類土器(2)	173	第193図	縄文時代18－c類土器(5)	209
第157図	縄文時代17－b類土器(3)	174	第194図	縄文時代18－c類土器(6)	210
第158図	縄文時代17－b類土器(4)	175	第195図	縄文時代18－c類土器(7)	211
第159図	縄文時代17－b類土器(5)	176	第196図	縄文時代19類土器(1)	212
第160図	縄文時代17－b類土器(6)	177	第197図	縄文時代19類土器(2)	213
第161図	縄文時代17－b類土器(7)	178	第198図	縄文時代20－a類土器(1)	213
第162図	縄文時代17－b類土器(8)	179	第199図	縄文時代19類土器出土状況	214
第163図	縄文時代17－c類土器(1)	180	第200図	縄文時代20類土器出土状況	215
第164図	縄文時代17－c類土器(2)	181	第201図	縄文時代20－a類土器(2)	216
第165図	縄文時代17－c類土器(3)	182	第202図	縄文時代20－b類土器(1)	217
第166図	縄文時代17－c類土器(4)	183	第203図	縄文時代21類土器(1)	218
第167図	縄文時代17－c類土器(5)	184	第204図	縄文時代22類土器(1)	219
第168図	縄文時代17－c類土器(6)	185	第205図	縄文時代22類土器(2)	220
第169図	縄文時代17－c類土器(7)	186	第206図	縄文時代23類土器(1)	221
第170図	縄文時代17－c類土器(8)	187	第207図	縄文時代23類土器出土状況	222
第171図	縄文時代17－c類土器(9)	188	第208図	縄文時代23類土器(2)	223

第209図	縄文時代23類土器(3)	224	第246図	出土石器	打製石斧(10)	266
第210図	縄文時代23類土器(4)	225	第247図	出土石器	打製石斧(11)	267
第211図	縄文時代23類土器(5)	226	第248図	出土石器	打製石斧(12)	268
第212図	縄文時代23類土器(6)	227	第249図	出土石器	打製石斧(13)	269
第213図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ層石器出土状況	231	第250図	出土石器	打製石斧(14)	270
第214図	出土石器 磨製石斧(1)	233	第251図	出土石器	打製石斧(15)	271
第215図	出土石器 磨製石斧(2)	234	第252図	出土石器	打製石斧(16)	272
第216図	出土石器 磨製石斧(3)	235	第253図	出土石器	打製石斧(17)	273
第217図	出土石器 磨製石斧(4)	236	第254図	出土石器	打製石斧(18)	274
第218図	出土石器 磨製石斧(5)	237	第255図	出土石器	打製石斧(19)	275
第219図	出土石器 磨製石斧(6)	238	第256図	出土石器	打製石斧(20)	276
第220図	出土石器 磨製石斧(7)	239	第257図	出土石器	打製石斧(21)	277
第221図	出土石器 磨製石斧(8)	240	第258図	出土石器	打製石斧(22)	278
第222図	出土石器 磨製石斧(9)	241	第259図	出土石器	石匙(1)	280
第223図	出土石器 磨製石斧(10)	242	第260図	出土石器	石匙(2)	281
第224図	出土石器 磨製石斧(11)	243	第261図	出土石器	石匙(3)	282
第225図	出土石器 磨製石斧(12)	244	第262図	出土石器	石匙(4)	283
第226図	出土石器 磨製石斧(13)	245	第263図	出土石器	石匙(5)	284
第227図	出土石器 磨製石斧(14)	246	第264図	出土石器	石匙(6)	285
第228図	出土石器 磨製石斧未製品(15)	247	第265図	出土石器	石匙(7)	286
第229図	出土石器 磨製石斧未製品(16)	248	第266図	出土石器	石匙(8)	287
第230図	出土石器 磨製石斧未製品(17)	249	第267図	出土石器	石匙(9)	288
第231図	出土石器 磨製石斧未製品(18)	250	第268図	出土石器	石匙(10)	289
第232図	出土石器 磨製石斧未製品(19)	251	第269図	出土石器	石匙(11)	290
第233図	出土石器 磨製石斧未製品(20)	252	第270図	出土石器	石匙(12)	291
第234図	出土石器 磨製石斧未製品(21)	253	第271図	出土石器	石匙(13)	292
第235図	出土石器 磨製石斧未製品(22)	254	第272図	出土石器	石匙(14)	293
第236図	出土石器 磨製石斧未製品(23)	255	第273図	出土石器	石匙(15)	294
第237図	出土石器 打製石斧(1)	257	第274図	出土石器	石槍, 組合せ式石銛, 石鏃(1)	296
第238図	出土石器 打製石斧(2)	258	第275図	出土石器	石鏃(2)	297
第239図	出土石器 打製石斧(3)	259	第276図	出土石器	石鏃(3)	298
第240図	出土石器 打製石斧(4)	260	第277図	出土石器	石鏃(4)	299
第241図	出土石器 打製石斧(5)	261	第278図	出土石器	石鏃(5)	300
第242図	出土石器 打製石斧(6)	262	第279図	出土石器	石鏃(6)	301
第243図	出土石器 打製石斧(7)	263	第280図	出土石器	石鏃(7)	302
第244図	出土石器 打製石斧(8)	264	第281図	出土石器	石鏃(8)	303
第245図	出土石器 打製石斧(9)	265	第282図	出土石器	石鏃(9)	304

第283図	出土石器	石鏃(10)	305	第320図	出土石器	石鏃(2)	345
第284図	出土石器	石鏃(11)	306	第321図	出土石器	楔形石器(1)	346
第285図	出土石器	石鏃(12)	307	第322図	出土石器	楔形石器(2), 小型両面調整石器,	
第286図	出土石器	石鏃(13)	308		石鋸		347
第287図	出土石器	石鏃(14)	309	第323図	出土石器	双角状石器, 石鏃	348
第288図	出土石器	石鏃(15)	310	第324図	出土石器	礫器(1)	350
第289図	出土石器	石鏃(16)	311	第325図	出土石器	礫器(2)	351
第290図	出土石器	石鏃(17)	312	第326図	出土石器	礫器(3)	352
第291図	出土石器	石鏃(18)	313	第327図	出土石器	礫器(4)	353
第292図	出土石器	石鏃未製品(19)	314	第328図	出土石器	礫器(5)	354
第293図	出土石器	石鏃未製品(20)	315	第329図	出土石器	礫器(6)	355
第294図	出土石器	搔器(1)	317	第330図	出土石器	礫器(7)	356
第295図	出土石器	搔器(2)	318	第331図	出土石器	礫器(8)	357
第296図	出土石器	搔器(3)	319	第332図	出土石器	異形石器, 穿孔礫	358
第297図	出土石器	搔器(4)	320	第333図	出土石器	磨製石庖丁未製品,	360
第298図	出土石器	搔器(5), 彫器	321	第334図	出土石器	加工痕・使用痕剥片(1)	360
第299図	出土石器	削器(1)	323	第335図	出土石器	加工痕・使用痕剥片(2)	361
第300図	出土石器	削器(2)	324	第336図	出土石器	加工痕・使用痕剥片(3)	362
第301図	出土石器	削器(3)	325	第337図	出土石器	加工痕・使用痕剥片(4)	363
第302図	出土石器	削器(4)	326	第338図	出土石器	石核(1)	365
第303図	出土石器	削器(5)	327	第339図	出土石器	石核(2)	366
第304図	出土石器	削器(6)	328	第340図	出土石器	石核(3)	367
第305図	出土石器	削器(7)	329	第341図	出土石器	石核(4)	368
第306図	出土石器	削器(8)	330	第342図	出土石器	石核(5)	369
第307図	出土石器	削器(9)	331	第343図	出土石器	石核(6)	370
第308図	出土石器	削器(10)	332	第344図	出土石器	石核(7)	371
第309図	出土石器	削器(11)	333	第345図	出土石器	石核(8)	372
第310図	出土石器	削器(12)	334	第346図	出土石器	石核(9)	373
第311図	出土石器	削器(13)	335	第347図	出土石器	石核(10)	374
第312図	出土石器	削器(14)	336	第348図	出土石器	石核(11)	375
第313図	出土石器	削器(15)	337	第349図	出土石器	石核(12)	376
第314図	出土石器	削器(16)	338	第350図	出土石器	石核(13)	377
第315図	出土石器	削器(17)	339	第351図	出土石器	石核(14)	378
第316図	出土石器	削器(18)	340	第352図	出土石器	石核(15)	379
第317図	出土石器	削器(19), 石錐(1)	341	第353図	出土石器	石核(16)	380
第318図	出土石器	石錐(2)	342	第354図	出土石器	石核(17)	381
第319図	出土石器	石鏃(1)	344	第355図	出土石器	石核(18)	382

第356図	出土石器	石核(19)	383	第389図	出土石器	磨石(12)	419
第357図	出土石器	石核(20)	384	第390図	出土石器	磨石(13)	420
第358図	出土石器	石核(21)	385	第391図	出土石器	磨石(14)	421
第359図	出土石器	石核(22)	386	第392図	出土石器	磨石(15)	422
第360図	出土石器	石核(23)	387	第393図	出土石器	磨石(16)	423
第361図	出土石器	石核(24)	388	第394図	出土石器	磨石(17)	424
第362図	出土石器	三角壩形石製品	390	第395図	出土石器	磨石(18)	425
第363図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層磨石敲石凹石出土状況		391	第396図	出土石器	磨石(19)	426
第364図	Ⅲ層磨石敲石凹石出土状況		392	第397図	出土石器	磨石(20)	427
第365図	Ⅳ層磨石敲石凹石出土状況		393	第398図	出土石器	磨石(21)	428
第366図	Ⅴ層磨石敲石凹石出土状況		394	第399図	出土石器	磨石(22)	429
第367図	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層石皿出土状況		395	第400図	出土石器	磨石(23)	430
第368図	軽石製品出土状況		396	第401図	出土石器	石錘, 敲石(1)	431
第369図	出土石器	砥石	399	第402図	出土石器	敲石(2)	432
第370図	出土石器	石皿(1)	400	第403図	出土石器	敲石(3)	433
第371図	出土石器	石皿(2)	401	第404図	出土石器	敲石(4)	434
第372図	出土石器	石皿(3)	402	第405図	出土石器	敲石(5)	435
第373図	出土石器	石皿(4)	403	第406図	出土石器	敲石(6)	436
第374図	出土石器	石皿(5)	404	第407図	出土石器	敲石(7)	437
第375図	出土石器	石皿(6)	405	第408図	出土石器	敲石(8)	438
第376図	出土石器	石皿(7)	406	第409図	出土石器	敲石(9)	439
第377図	出土石器	石皿(8)	407	第410図	出土石器	敲石(10)	440
第378図	出土石器	磨石(1)	408	第411図	出土石器	敲石(11)	441
第379図	出土石器	磨石(2)	409	第412図	出土石器	敲石(12)	442
第380図	出土石器	磨石(3)	410	第413図	出土石器	敲石(13)	443
第381図	出土石器	磨石(4)	411	第414図	出土石器	敲石(14)	444
第382図	出土石器	磨石(5)	412	第415図	出土石器	敲石(15)	445
第383図	出土石器	磨石(6)	413	第416図	出土石器	敲石(16)	446
第384図	出土石器	磨石(7)	414	第417図	出土石器	敲石(17)	447
第385図	出土石器	磨石(8)	415	第418図	出土石器	凹石	448
第386図	出土石器	磨石(9)	416	第419図	出土石器	軽石製品(1)	449
第387図	出土石器	磨石(10)	417	第420図	出土石器	軽石製品(2)	450
第388図	出土石器	磨石(11)	418				

第Ⅴ章 縄文時代の調査

遺物・遺構は、調査区のほぼ全範囲から検出されている。

遺構のほとんどが集石遺構であり、73基が検出されている。時期については、Ⅴ層については鬼界カルデラ起源の通称アカホヤ火山灰下位のため早期と判断されるが、アカホヤ上位に関しては、前期から晩期までの遺物が混在して出土した状況であったため、その明確な時期の特定は困難であったが、周辺から出土した土器に近い時期であろうと思われる。

遺物は、アカホヤ下位については、岩本式土器、前平式土器、塞ノ神式土器、平椀式土器等々が出土している。アカホヤ上位については、轟式土器、深浦式土器、曾畑式土器等々の前期の土器が大量に出土している。また、石器については、弥生・古墳時代の土器と混在して出土しているため、時期判別が困難なものも多かったことから、第3節で一括して記述したが、弥生時代や古墳時代の石器が混入している可能性も否めない。

第1節 遺構

1 集石遺構

Ⅲa層、Ⅲb層、Ⅳ層、Ⅳ層及びⅤ層において、計73基が検出されている。各層の集石遺構の検出数は、以下の通りである。

Ⅲa層・・・7基

Ⅲb層・・・14基

Ⅳ層・・・40基

Ⅴ層・・・12基

(1) Ⅴ層検出の集石遺構

土層の堆積状況で述べたように、Ⅳ層及びⅤ層はアカホヤ下位であり、層位的にはⅤ層は縄文時代早期前葉である。検出された集石の特徴は、Ⅴ層上面からのものが多いこと、数個から50個程度の小規模のものが多く掘込みがあるものは少なく、浅いものばかりである。また、用いられている石材は、安山岩の角礫が多く、分布状況は調査区の中央よりやや西側に若干多く位置する等の特徴が見られる。

1号集石（第3図）

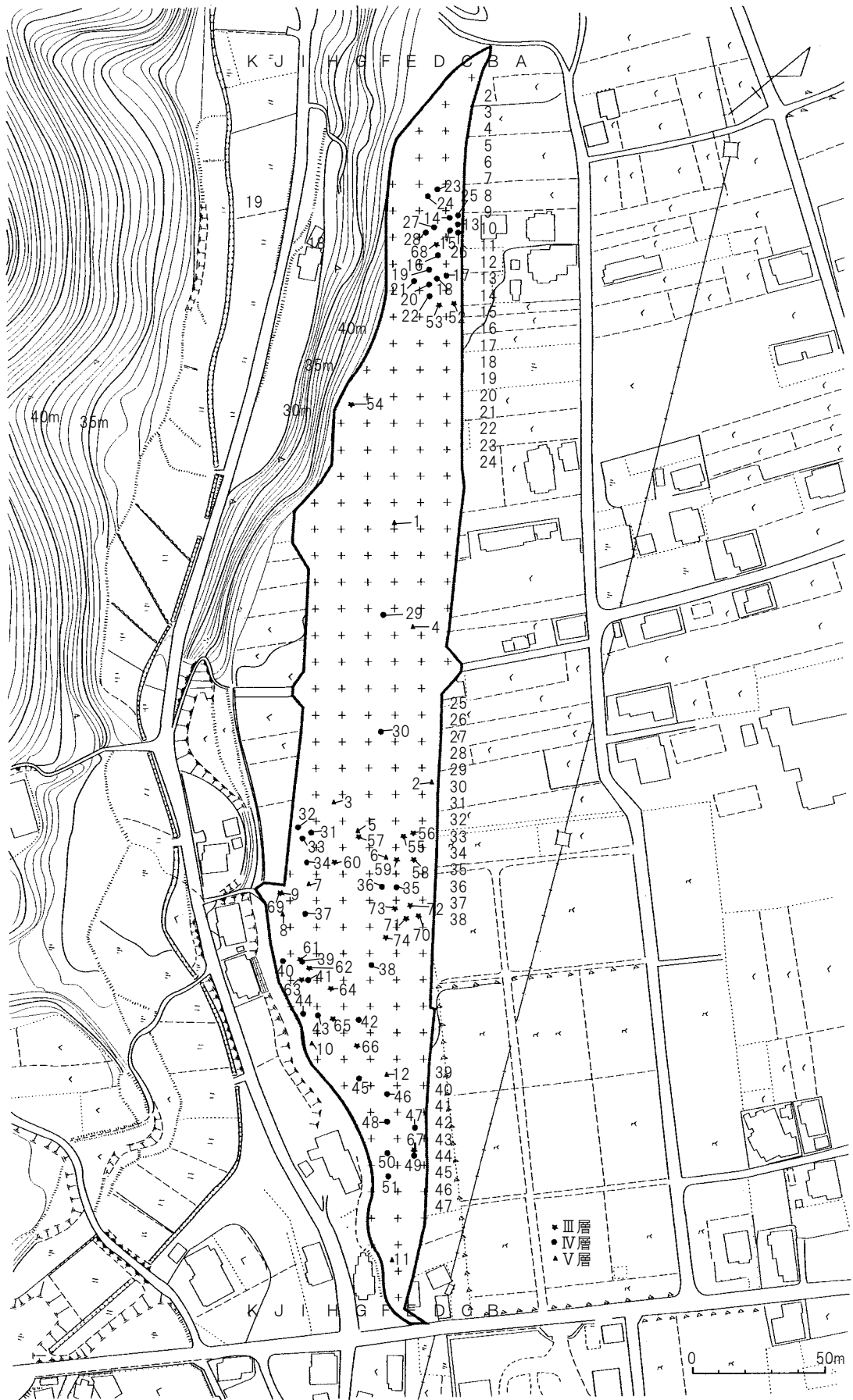
E・F-18区のⅤ層上面で検出されている。30～40cmの大き目の安山岩及び凝灰岩4個がほぼ平坦な状態で検出されたもので、他に小礫等は観察されなかった。

2号集石（第3図）

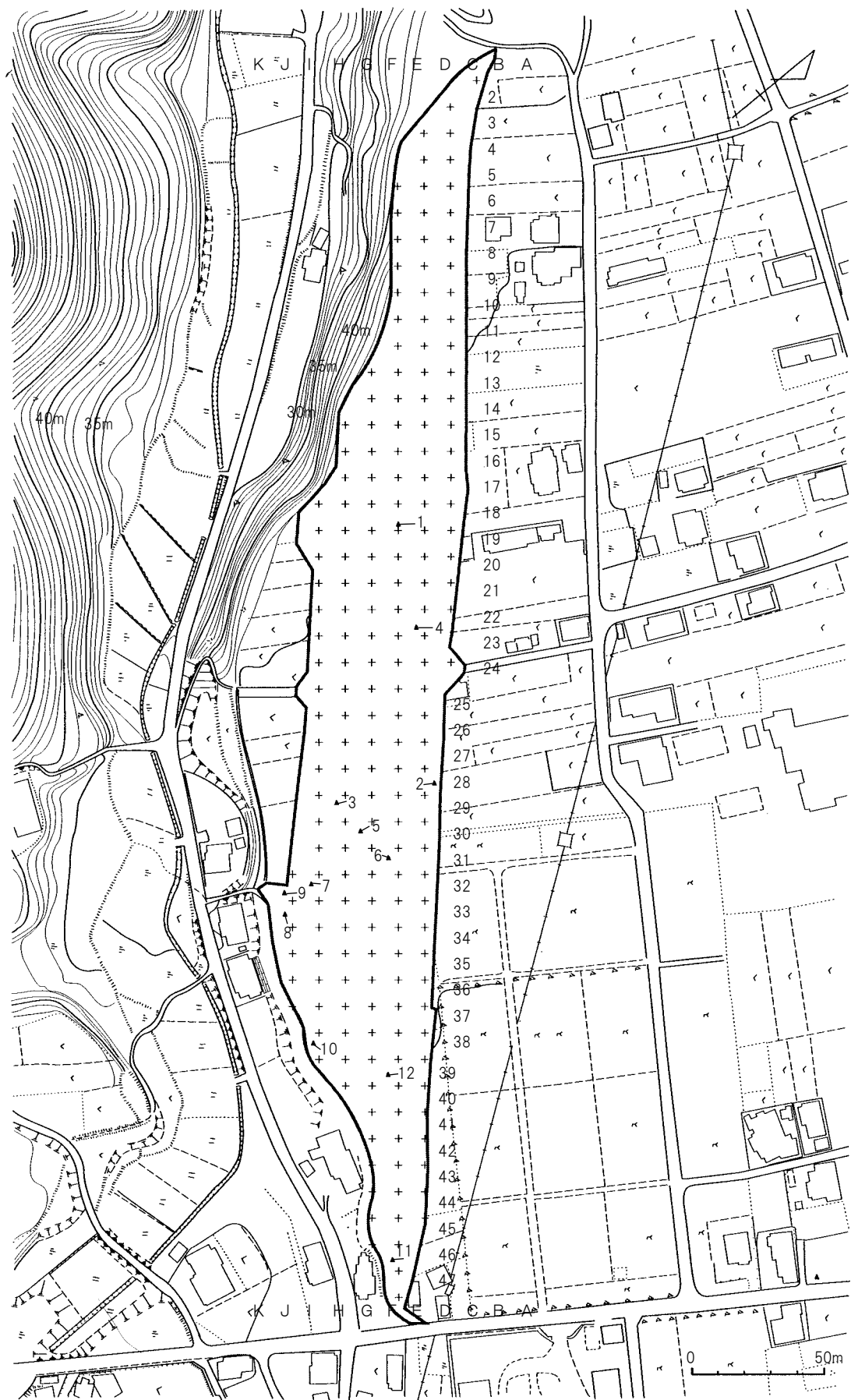
D-28区のⅤ層上面で検出されている。小児頭大から拳大の角礫を50個ほど用いているもので、約160×80cmで最深部の深さが約30cmの皿状の掘込みを有するものである。なお、長軸は、ほぼ南北である。

3号集石（第3図）

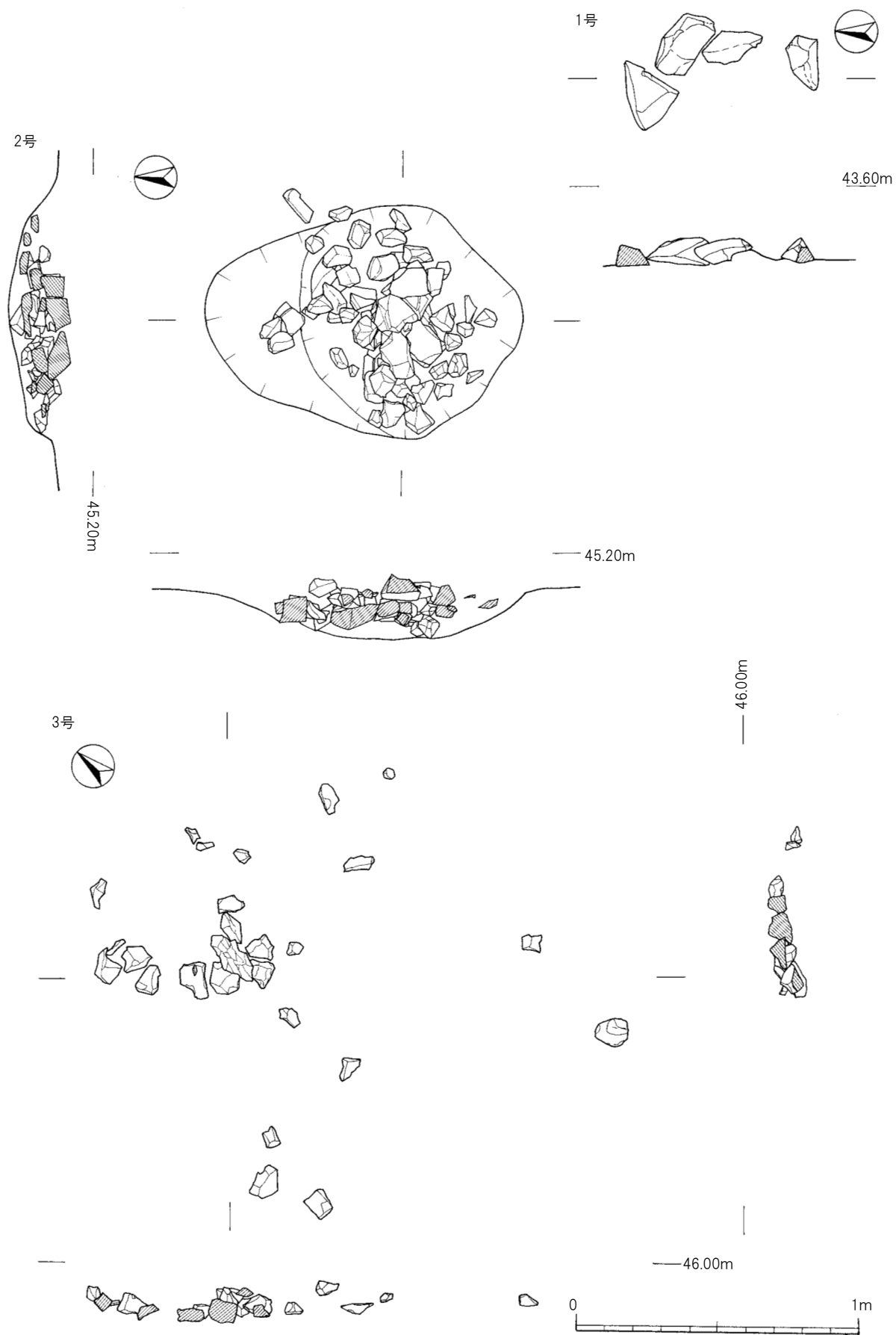
H-29区のⅤ層上面で検出されている。約10cmから20cmの角礫10数個が中心となり、その南西側周辺にやや小さめの角礫が点在している。また、その中には、磨石・敲石として使用された可能性のあるものも含まれていた。



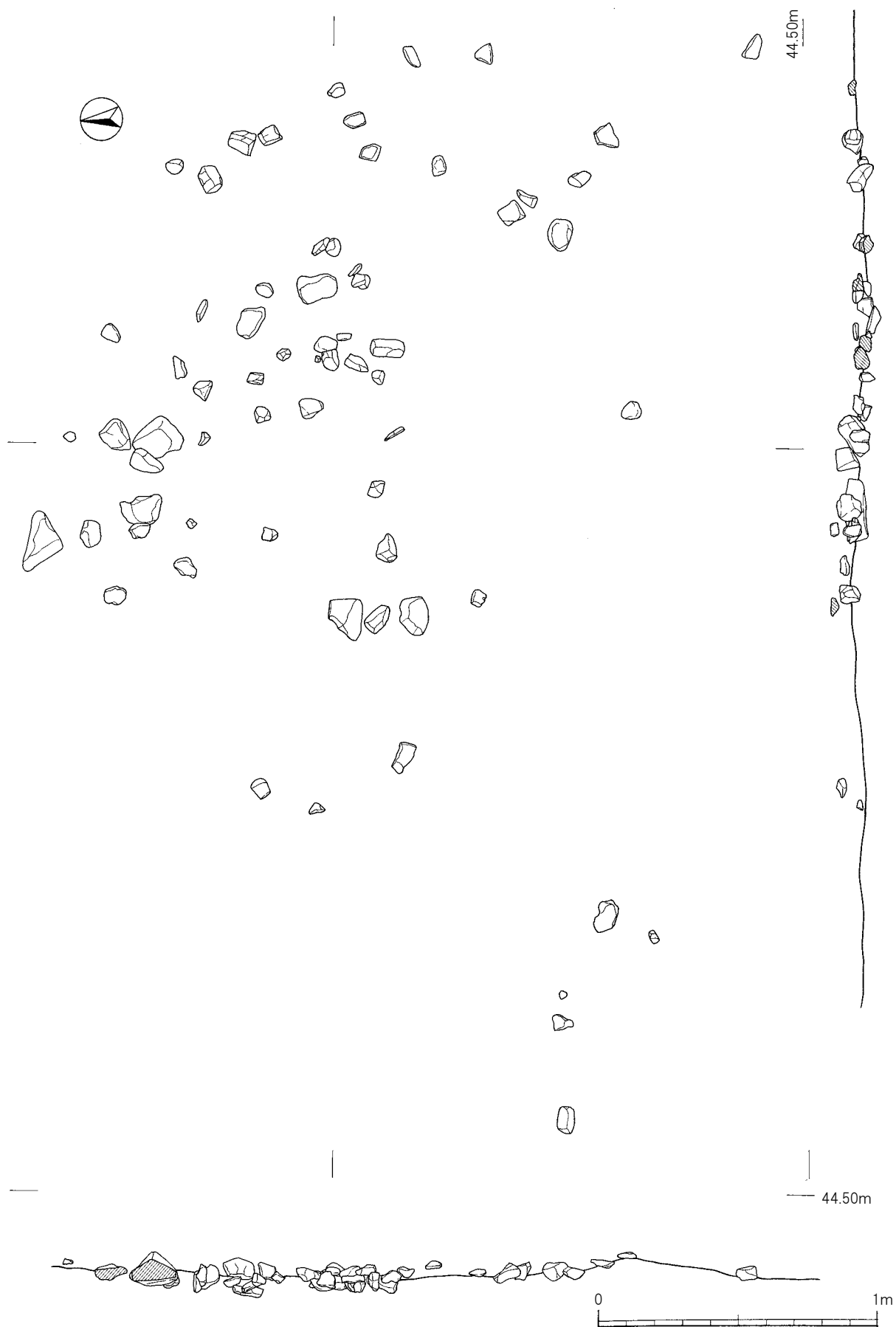
第1図 III, IV, V層集石遺構位置図



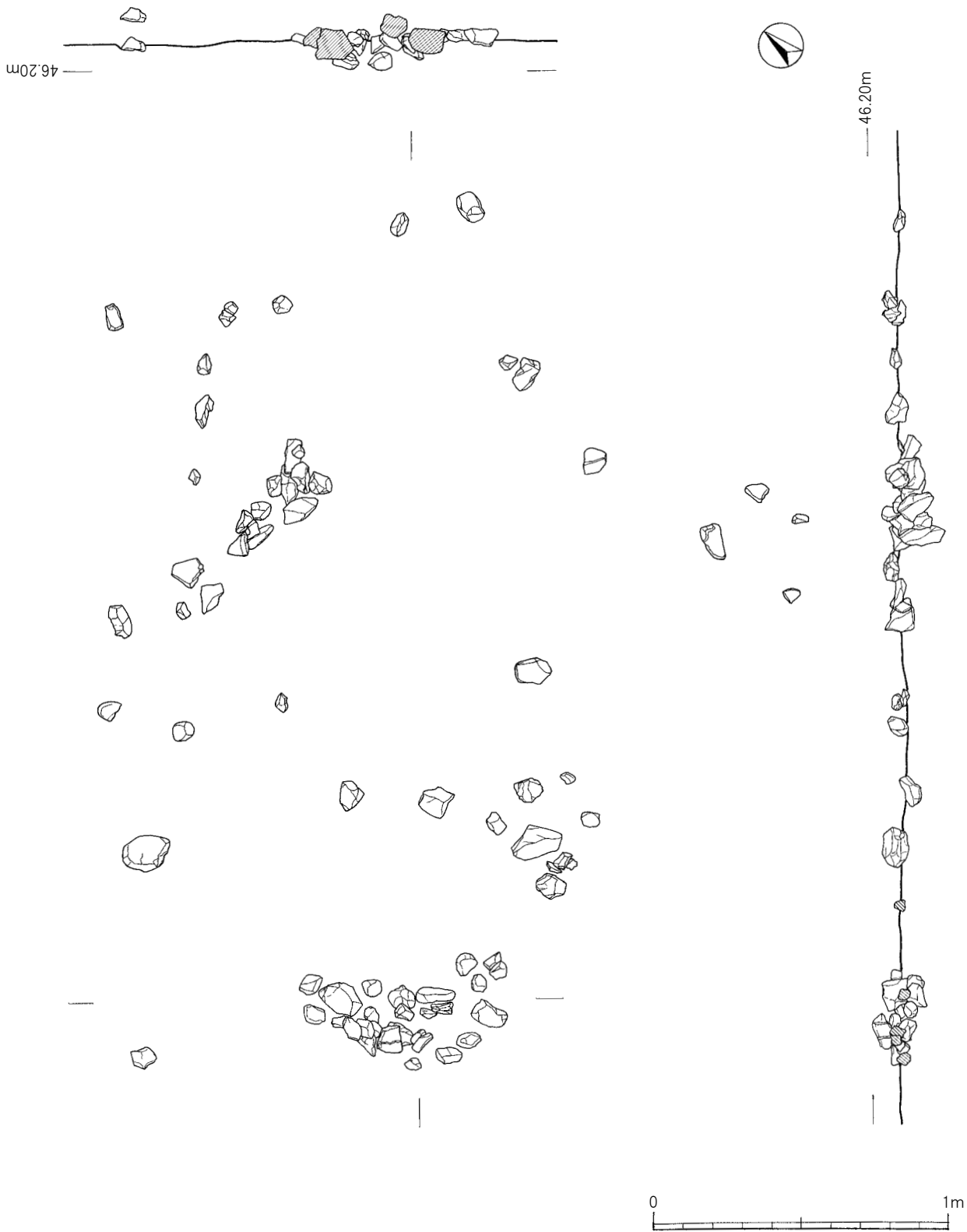
第2図 V層集石遺構位置図



第3図 1, 2, 3号集石



第4図 4号集石



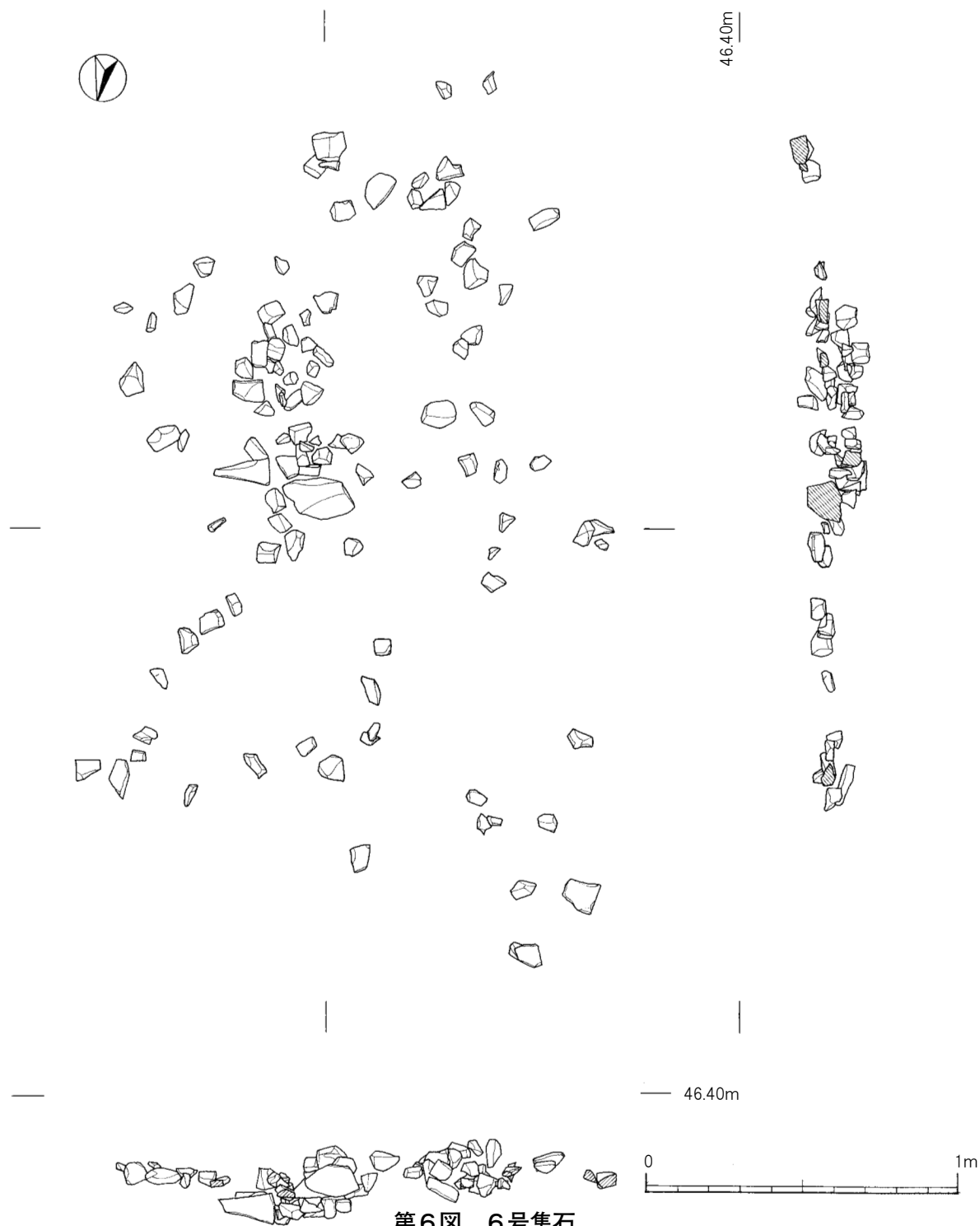
第5図 5号集石

4号集石（第4図）

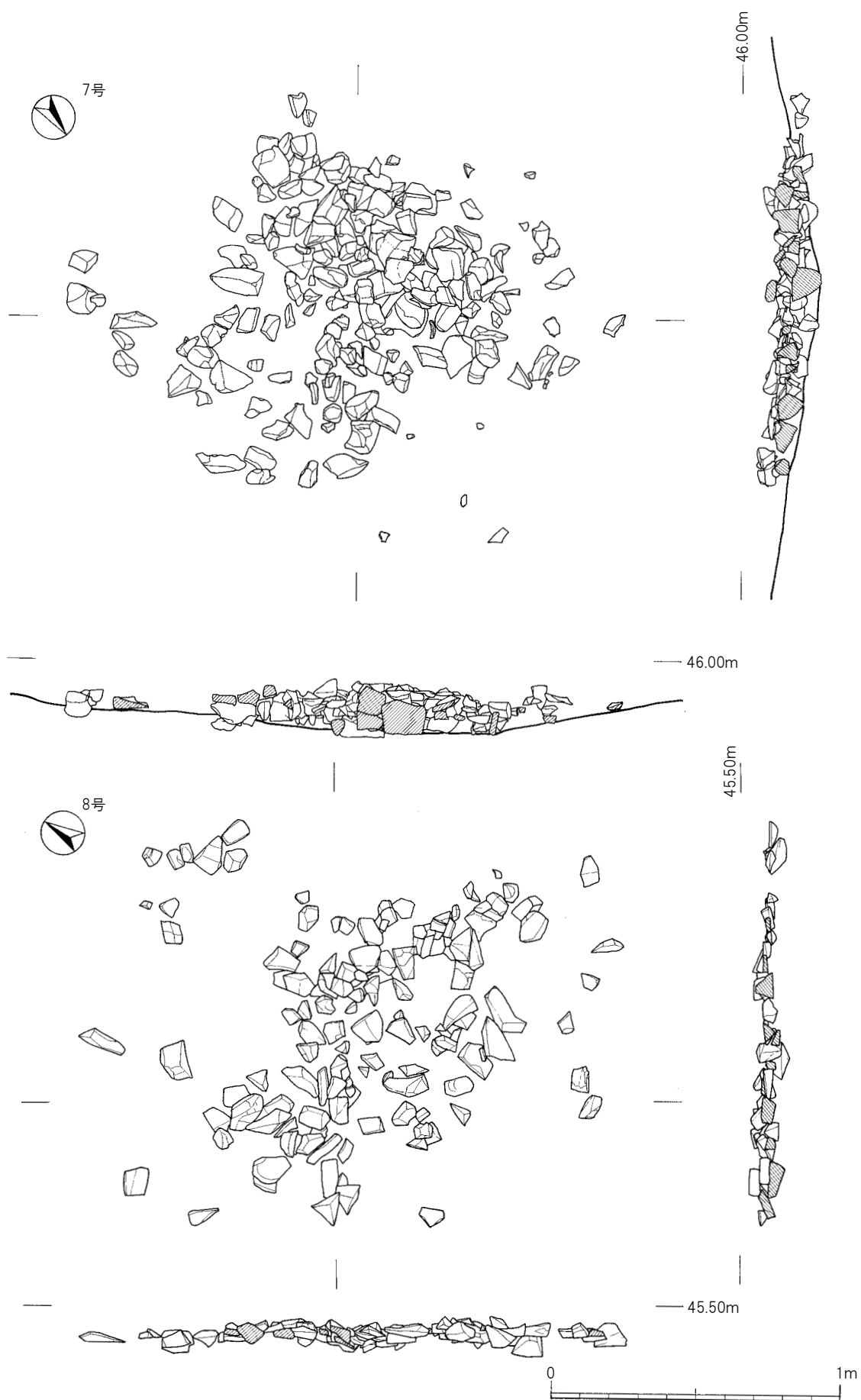
E-22区のV層上面で検出されている。1・2・3号集石と異なり、数cmから小児頭大の亜角礫が3×4m程度の範囲の中に散在している。石材は、安山岩と凝灰岩である。

5号集石（第5図）

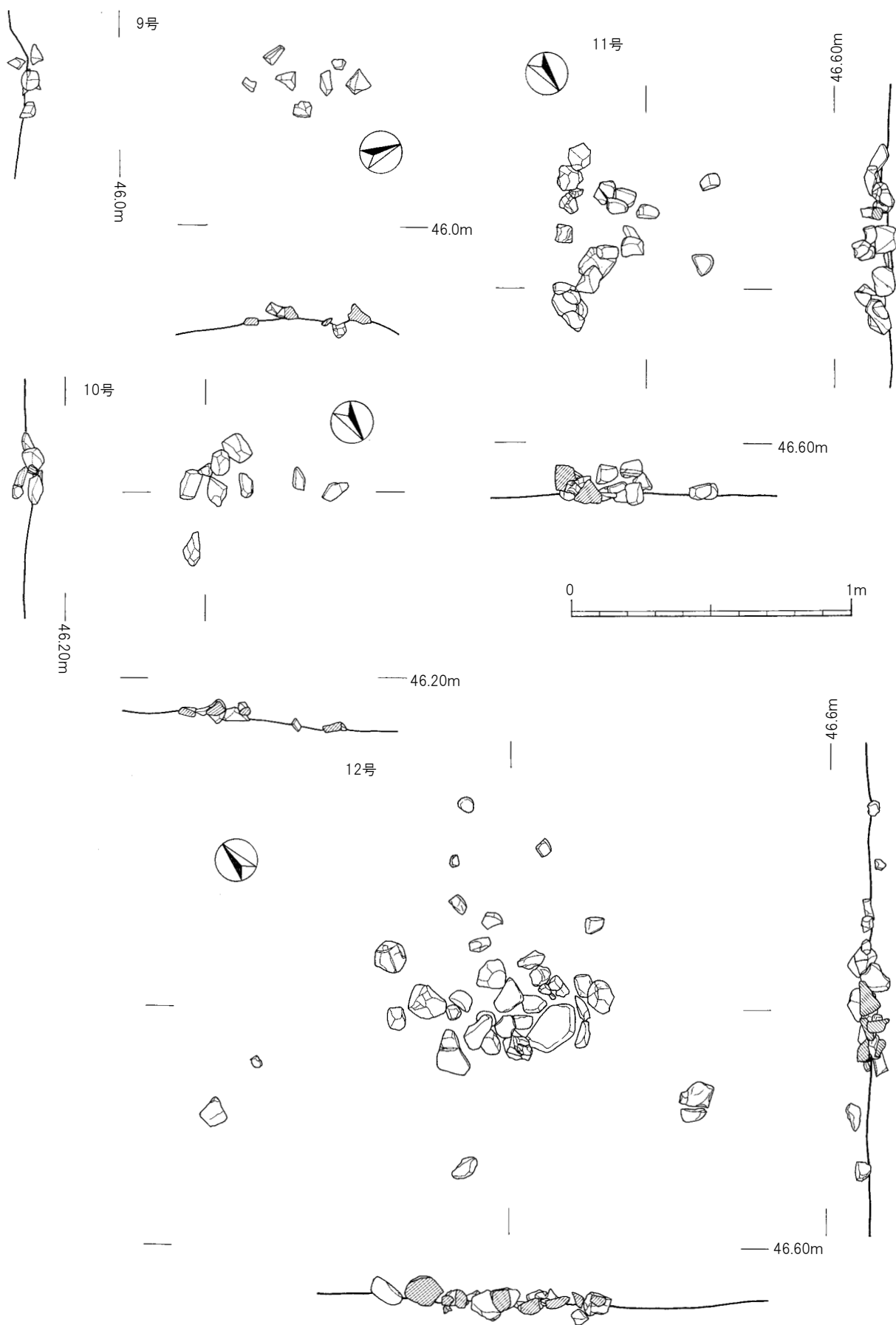
G-30区のV層上面で検出されている。その性格はやや規模は小さいものの、4号集石とはほぼ同様の状態で、数cmから小児頭大の亜角礫が散在した状態であった。石材は、安山岩と凝灰岩が主体



第6図 6号集石



第7図 7, 8号集石



第8図 9, 10, 11, 12号集石

であり、掘込み等は確認されなかった。

6号集石（第6図）

F-31区のV層上面で検出されている。南東部にやや大きめの角礫数個と拳大の角礫が集中しているが、他の礫は数メートルの範囲に散在している。掘込み等は確認されなかった。

7号集石（第7図）

I-32区のV層上面で検出されている。掘込みの床面の最深部と思われる部分に20cm以上の角礫数個を配し、それを中心に80個程度の角礫で構成されている。掘込みは浅く皿状であり、石質は安山岩や凝灰岩がほとんどである。被熱により破碎したと考えられる礫も多く、赤化したものもあった。

8号集石（第7図）

J-33区のV層で検出されている。掘込みはなく、礫の集中度は7号集石よりも低い、平面的な広がりや石質などは、7号集石の規模をやや小さくしたような状況であった。

被熱により破碎したと思われる礫の存在や石質も同様である。

9号集石（第8図）

J-32区のV層で検出されている。隣接するグリッドでは、7・8号集石が検出されている。20cm以下の角礫が7個で構成されている小規模なもので、他の集石遺構の礫が散在したものと考えられる。

10号集石（第8図）

I-38区のV層から検出されている。9号集石と同様に20cm以下の角礫数個で構成されているもので、他の集石遺構の礫が散在したものと思われる。

11号集石（第8図）

調査区の東端のV層上面で検出されている。構成されている礫は、拳大から小児頭大の亜角礫が数個である。北側の礫が大き目であり、南側の礫が小さ目のことから、その中心は、北側であると考えられる。

12号集石（第8図）

F-39区のV層から検出されている。南側に小児頭大の大き目の礫があり、北東へ拳大の礫が広がっている。

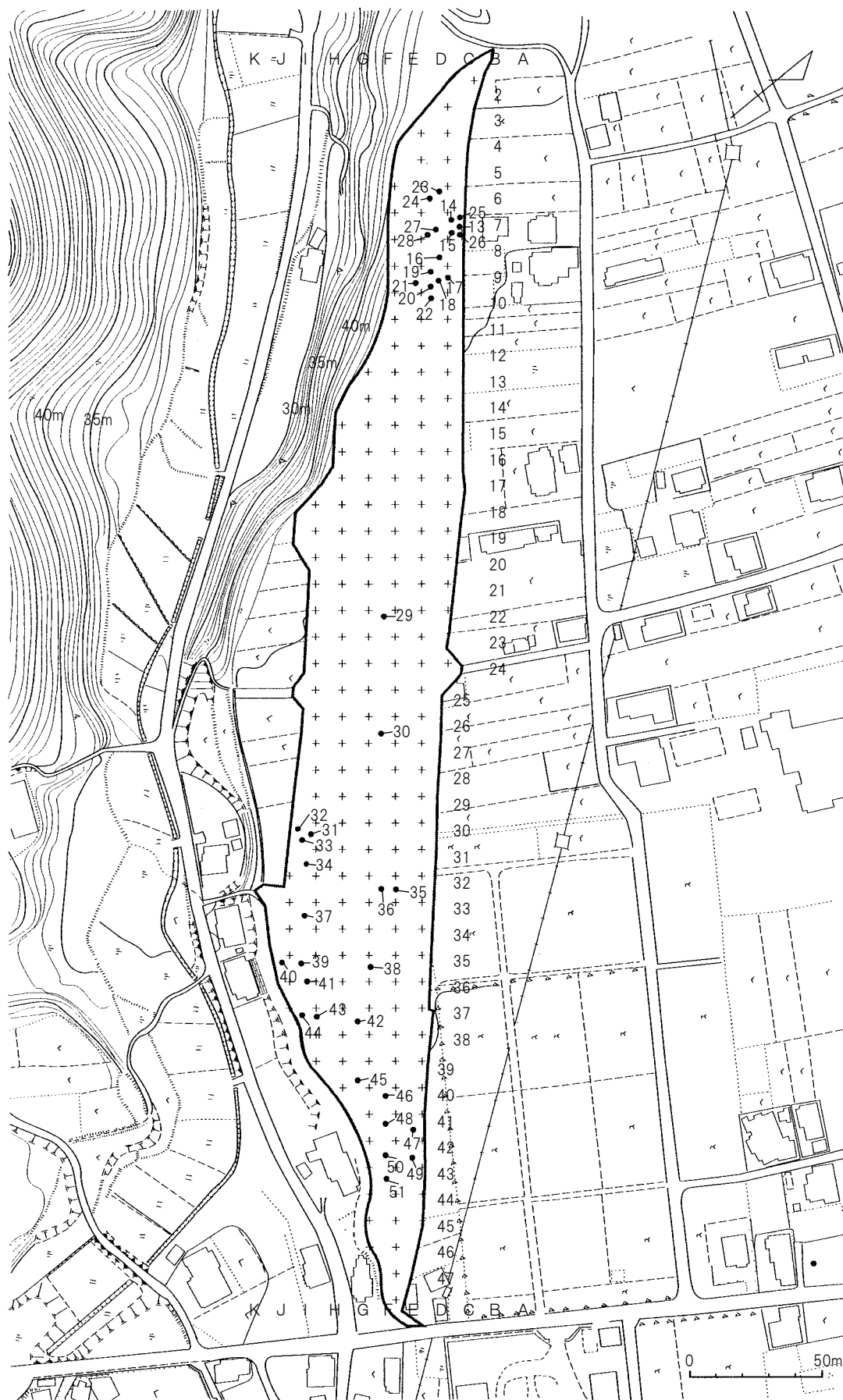
また、V層の集石遺構は、角礫で構成されているものがほとんどであるがこの集石は円礫に近いものが多いことが特徴である。

(2) IV層検出の集石遺構

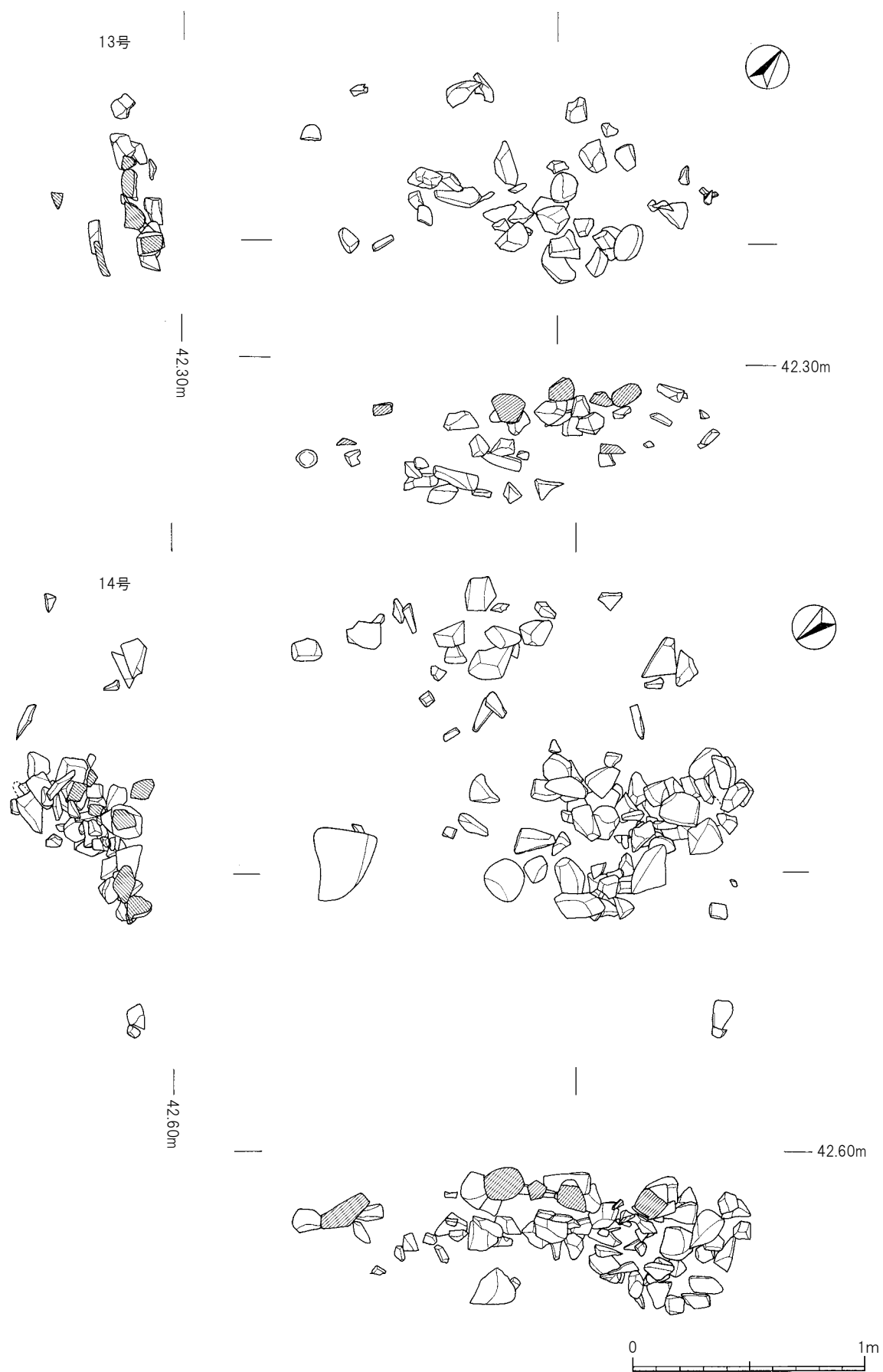
IV層は、時期的には縄文早期後葉の時期である。ただし、削平などにより表土直下にIV層が現れる場所などは、掘込みのあるⅢ層の集石上部が消失した結果、IV層面で検出されたものもあると思われる。

IV層検出の集石の特徴はその分布状況にある。調査区北東側のC・D・E-6・7・8・9・10区に15基もの集石が密集しており、中央部にはほとんど分布していないこと、中央部より東側には散在的に分布していることである。

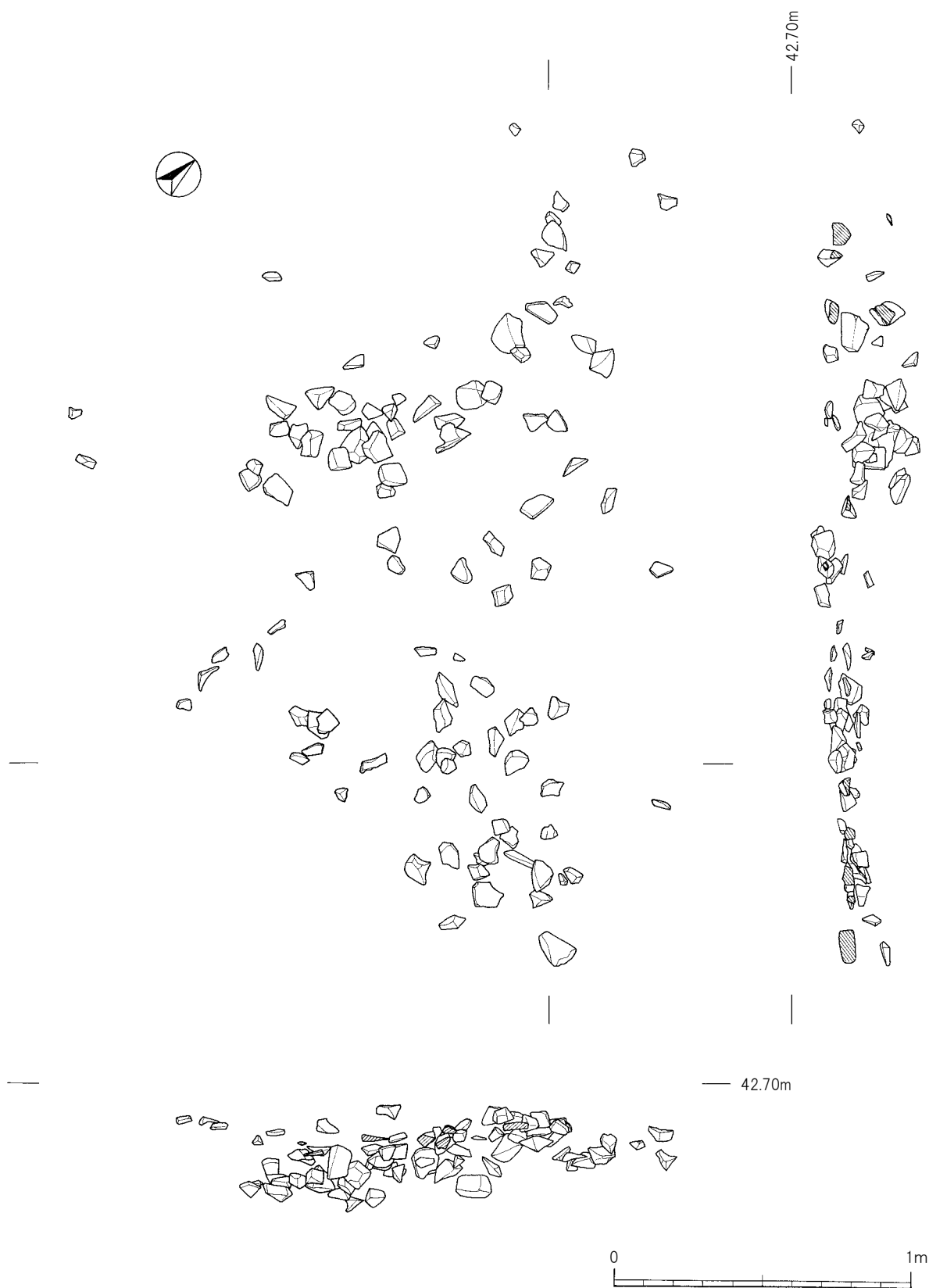
また、13号～22号集石はIV層の中位、23号～51号はIV層の上位から検出されている。分布状況



第9図 IV層集石遺構位置図



第10図 13, 14号集石



第11図 15号集石

と重ねると、IV層上位検出の集石は調査区の東側が多い。

13号集石（第10図）

C-7区のIV層から検出されている。拳大から小児頭大の礫が20個程度ややまとまった形で構成されているものである。この集石の特徴は検出された礫のレベル差が30cm程度である。ただし、断面図からもわかるように礫の数も少なく、掘込みと言うような状況ではない。

14号集石（第10図）

13号集石と同一グリッドのC-7区というIV層で一番集石の密集度の高いグリッドの西側部分で検出されている。他の集石からすると円礫に近いものが多く、東側にはかなり大きな礫が存在している。13号集石と同様に断面図では、一見掘込みがあるように見えるが、これは散在する礫の深さがバラバラなためである。礫の高低差は40cm程度あったことから、完掘後再度精査を行ってみたが、掘込みは確認されなかった。

15号集石（第11図）

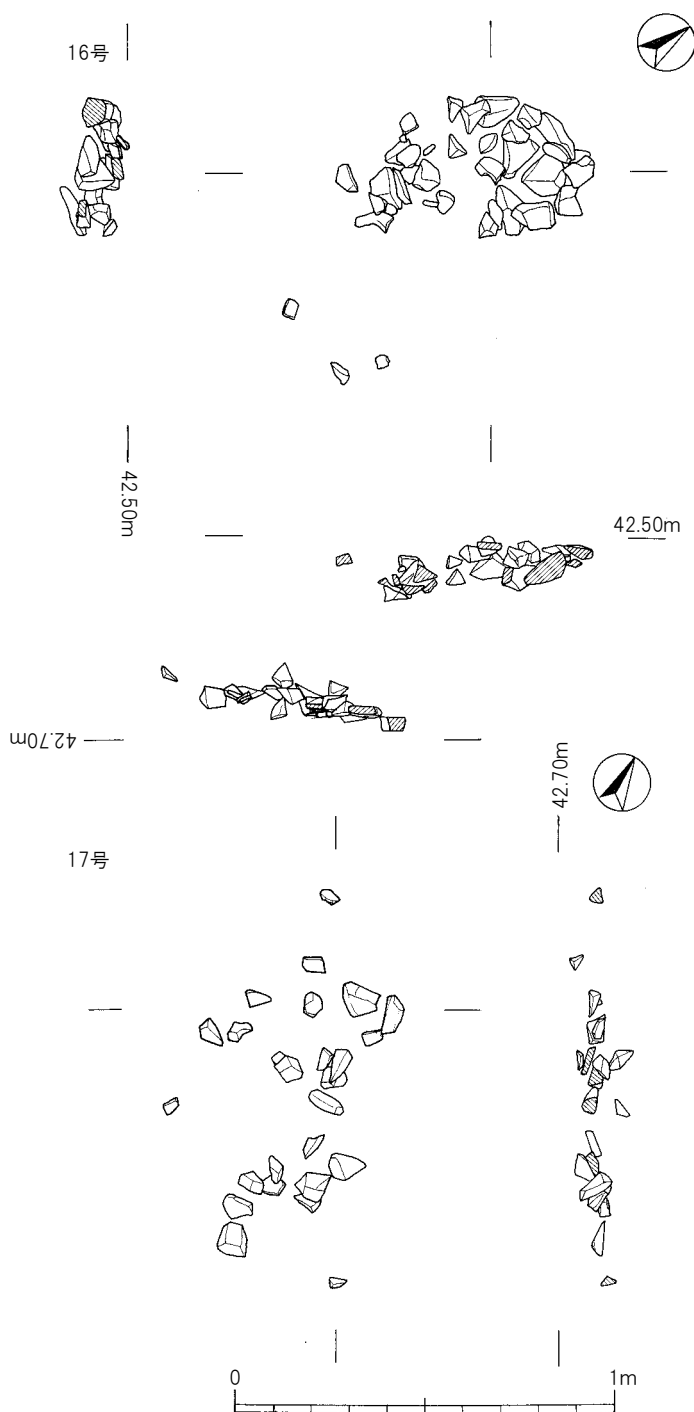
D-8区から検出されたものである。拳大程度の礫が約2×3m程度の範囲に散在しているもので、北西側と南東側にやや礫が集中している。13・14号集石と異なり、検出された礫の高低差はほとんどなかった。

16号集石（第12図）

13号集石で述べたように、最も集石が密に分布するC-7区の南側で検出されている。平面観からは、数個の大きな礫が破碎したように見えるものである。

17号集石（第12図）

C・D-9区で検出され、磨石と思われる砂岩の円礫1個と角礫及び亜角礫から構成されている。この集石の南側に存在する数基の集石の散在部分のような状態である。



第12図 16, 17号集石



第13図 18, 19号集石

18号集石（第13図）

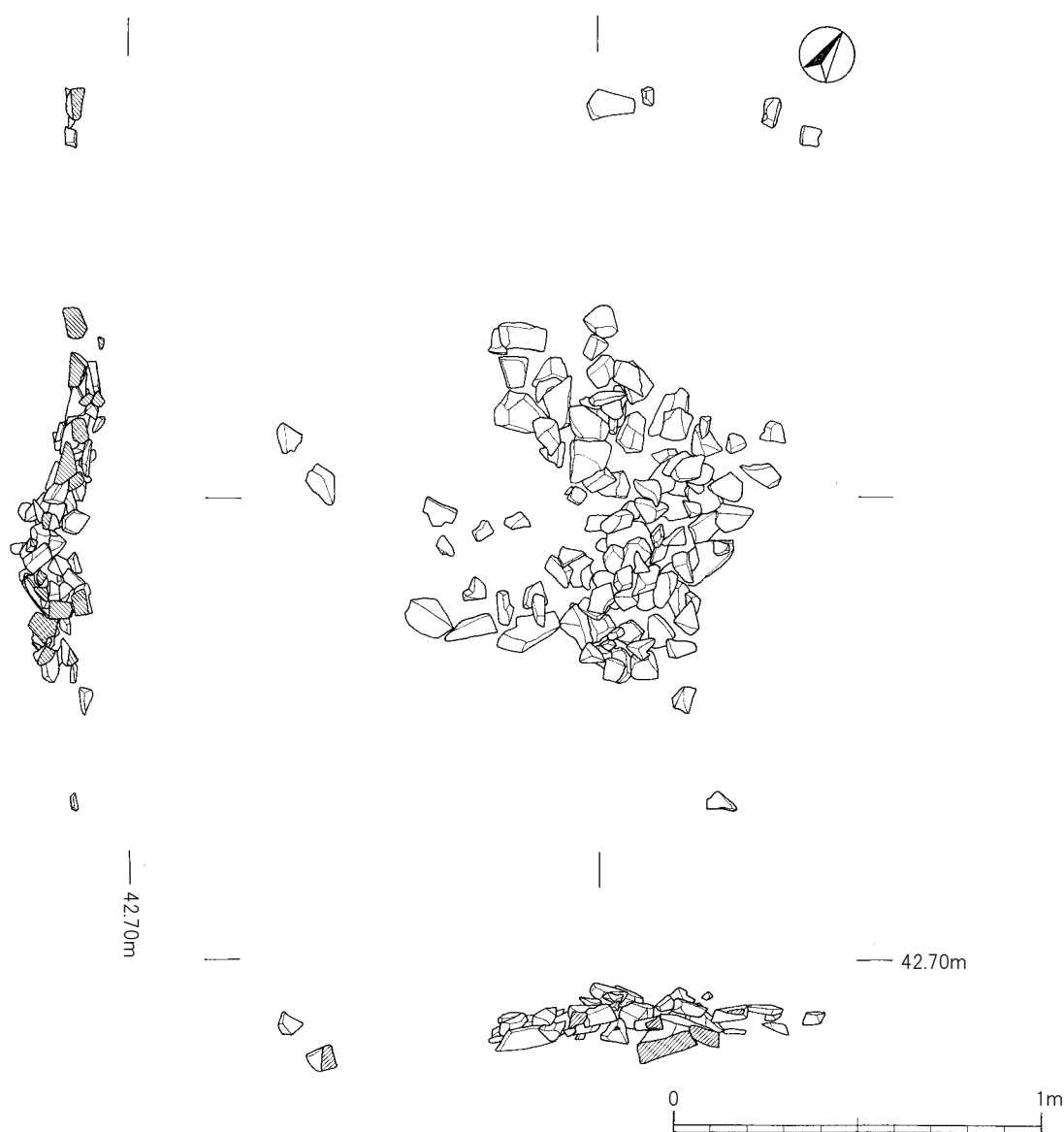
17号集石の数m南西に位置し、半径約1mの円形の中にほとんどの礫が散在している。中央部にやや空間があるのが特徴である。

19号集石（第13図）

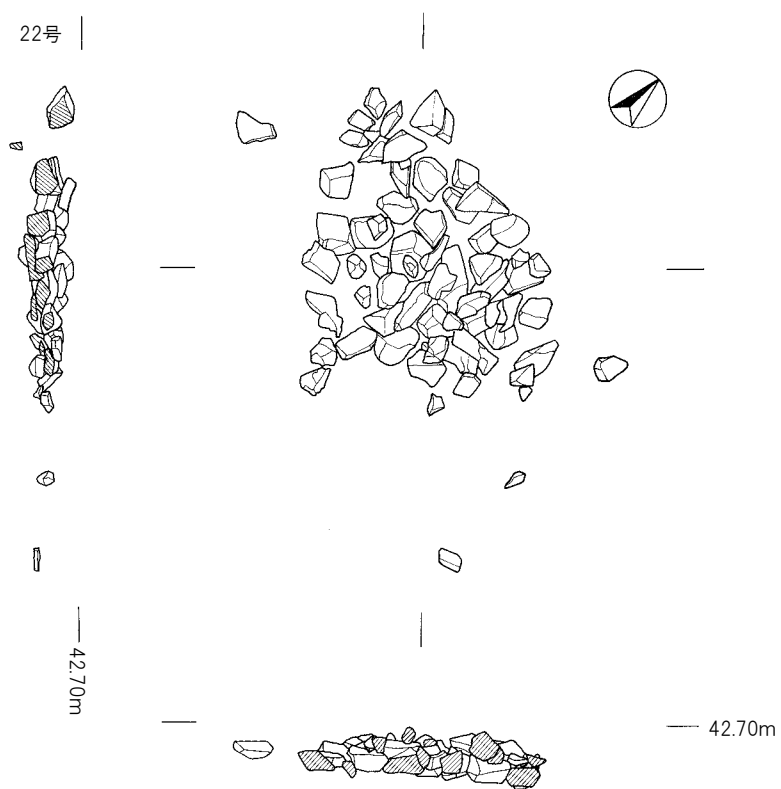
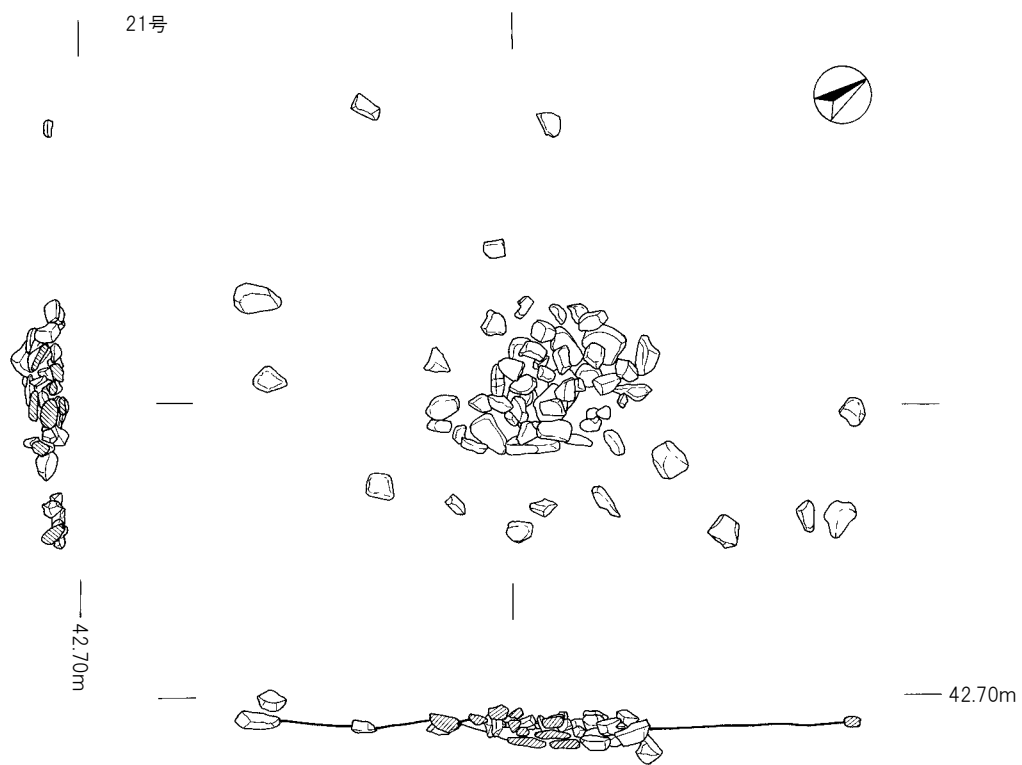
18号集石の数メートル西側に位置する。拳大の角礫がかなり広い範囲内に散在するもので、中央の数個の石が重なっていることからここを中心としてとらえ、集石として認定したものである。掘込み等はみられない。

20号集石（第14図）

E-9区から検出されている。大き目の礫を西側に配し、東側の礫は西側に比べると小さ目のものが多い。西側中央部に馬蹄形状の空間が存在する。断面図からもわかるように扁平な石が多くこれらの石の高低差もほとんどない。



第14図 20号集石



第15図 21, 22号集石

21号集石（第15図）

D－9区から検出されている。このD－9区は、17号・18号・19号・21号とひとつのグリッドに4基の集石が密集しており、その中でも南側に位置し、最もコンパクトにまとまったものである。周辺の集石が拳大から小児頭大の角礫が多いのに対し、拳大の亜円礫が多いのが特徴である。礫の最深部は、浅い皿状を呈する。

22号集石（第15図）

21号集石から南東に数メートルの距離、隣接するD－10区から検出されている。また、IV層の集石が密集するこの範囲では、調査区内の最も東側に位置する。この集石は、上下二段に分かれたような状況で検出された。周辺の土質及び石質についても、観察して慎重に掘り下げたが、この出土状況が時期差によるものなのか、同一の集石でこのような構造を呈しているのかは、判断し得なかった。

23号集石（第16図）

23号集石から51号集石はIV層から検出された中でも、IV層の上位部分から検出されたものである。

23号集石は、D－6区から検出され、南北3m、東西2mの範囲に広がるもので、見方によっては北側の広がりとは南側の広がりでは2基の集石にも見える。石質や被熱の状況がほとんど同じであったため、同一の集石として扱うことにした。北側と南側の広がりとは、やや北側の広がりの方が大きいものの、基本的にはその密度・高低差等は同じであり、掘込みも検出されなかった。

24号集石（第17図）

本遺跡で一般的な集石が密集するC－7区及びその周辺においては、特異なものである。配石遺構と呼んだほうが妥当なものかもしれないが、集石群中にあり1基だけであったため、集石遺構として扱うことにした。

中央部に拳大の小礫数個があり、それを取り巻くように小礫から1m～2mのところに、厚さ15～20cm、幅20cm～30cm、30cm程度のかかなり大きな砂岩を配している。①と②は中央部が滑らかであり、石皿あるいは台石として用いられていたものと考えられる。

25号集石（第20図）

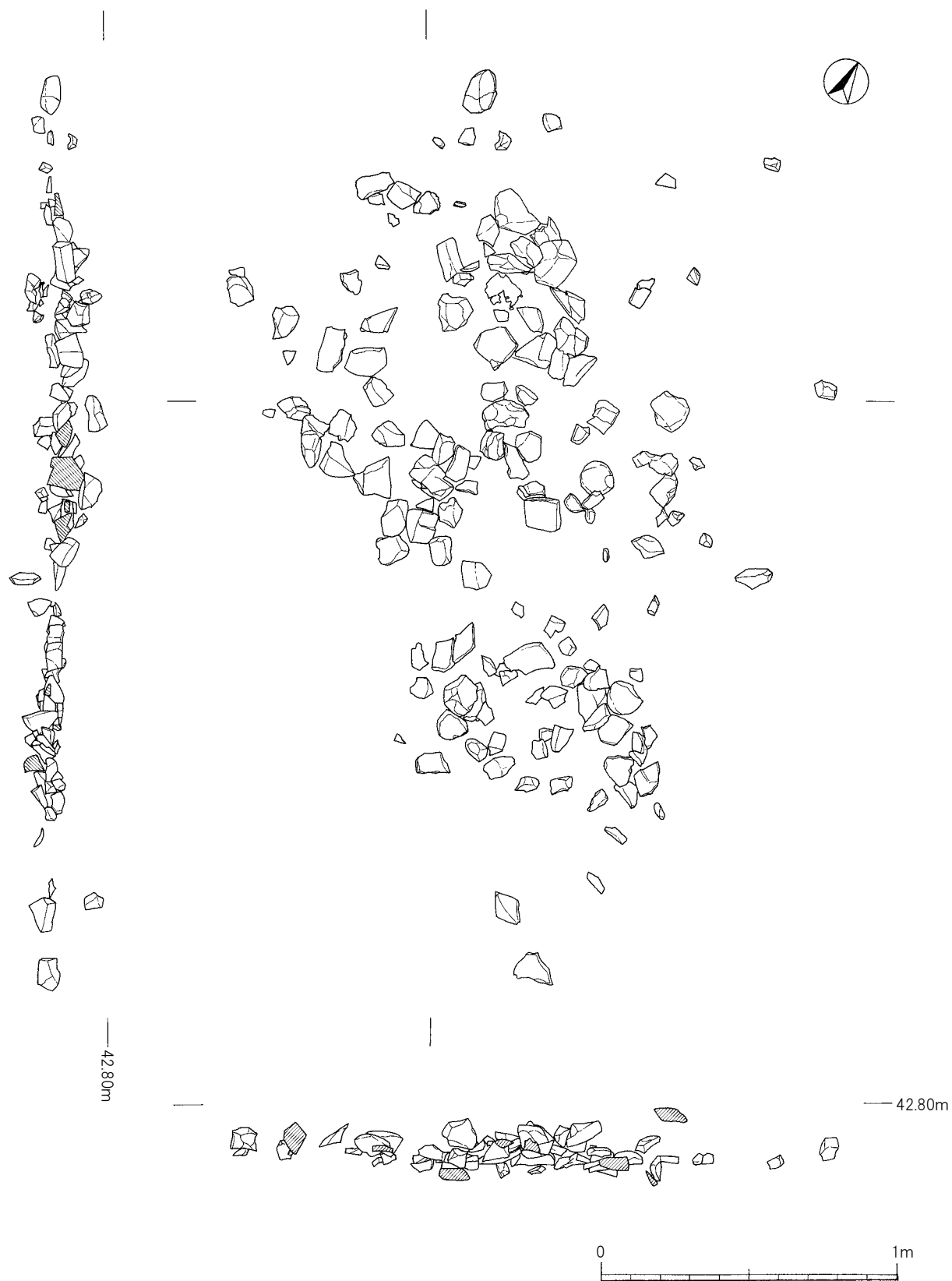
H－9のIV層上面で検出されたもので、礫の接合は行わなかったが、数個の礫が破碎したものであると思われる。中央に15個程度の礫があり、その周辺に小さな礫が散在しているものである。礫の数も少なく、掘込み等も検出されなかった。

26号集石（第20図）

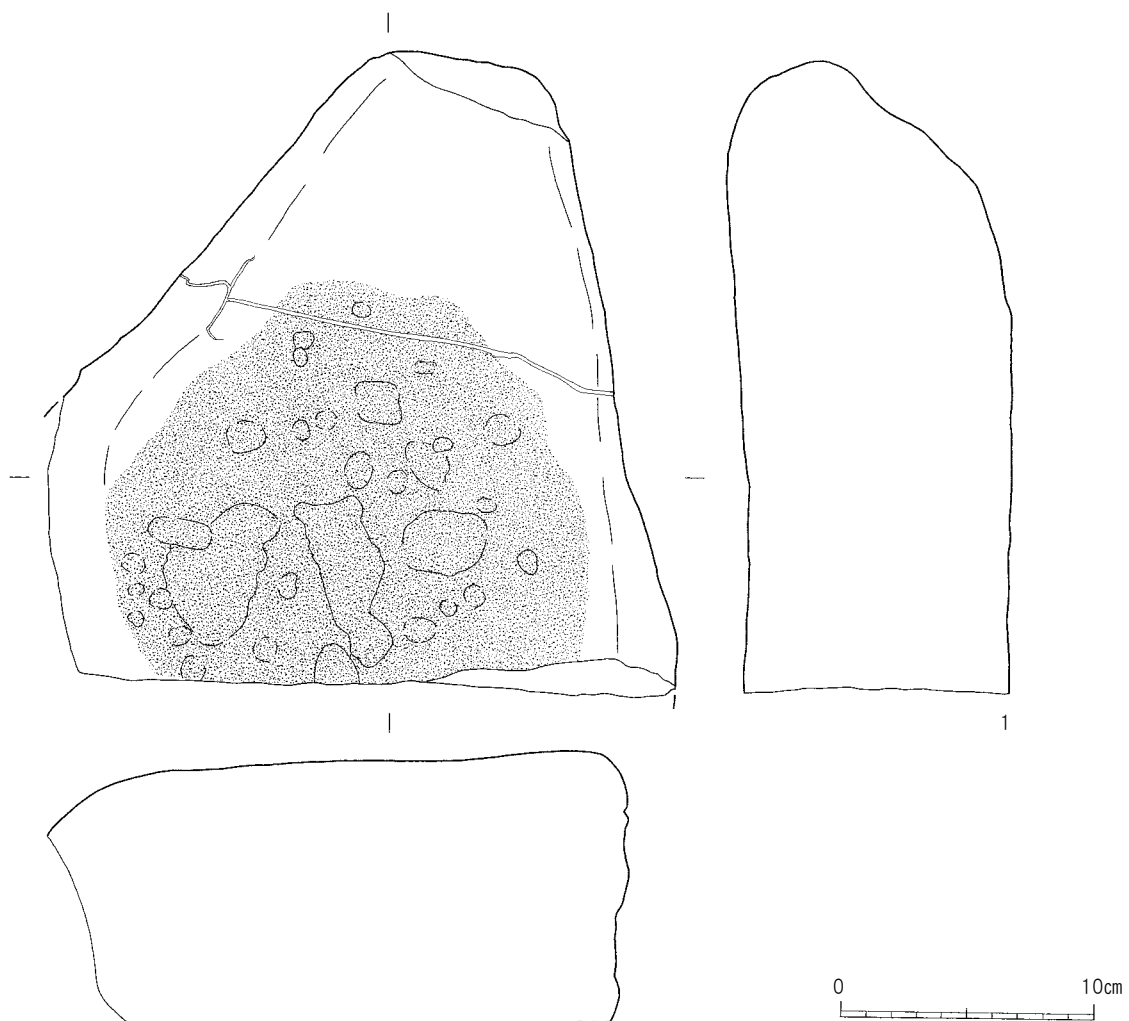
D－7のIV層上面で検出されたもので、25号と同様にいくつかの礫が破碎したもののようと思われる。特に石質が凝灰岩のためか、小さく不定形に破碎しているものが多い。

27号集石（第20図）

C－7区における5基の集石のうち、最も西側に位置するものである。数cmの小さな礫から小児頭大の礫までが用いられており、中央部にいくほど礫の大きさは大きいという特徴を有する。礫の重なりは、中央部分にはあるものの基本的には散在的であり、礫の高低差もほとんどなく、掘込みも検出されなかった。



第16図 23号集石



第18図 24号集石出土遺物(1)

28号集石（第21図）

D-7区のⅣ層から検出された。南側に80個程度の礫が集中した状態であり、最も大きく深い礫もこの中心部にある。北側の礫も南側の礫と同様の大きさのものも多いが、集中度に欠ける。断面形状より、浅い掘込みが存在していた可能性が考えられる。

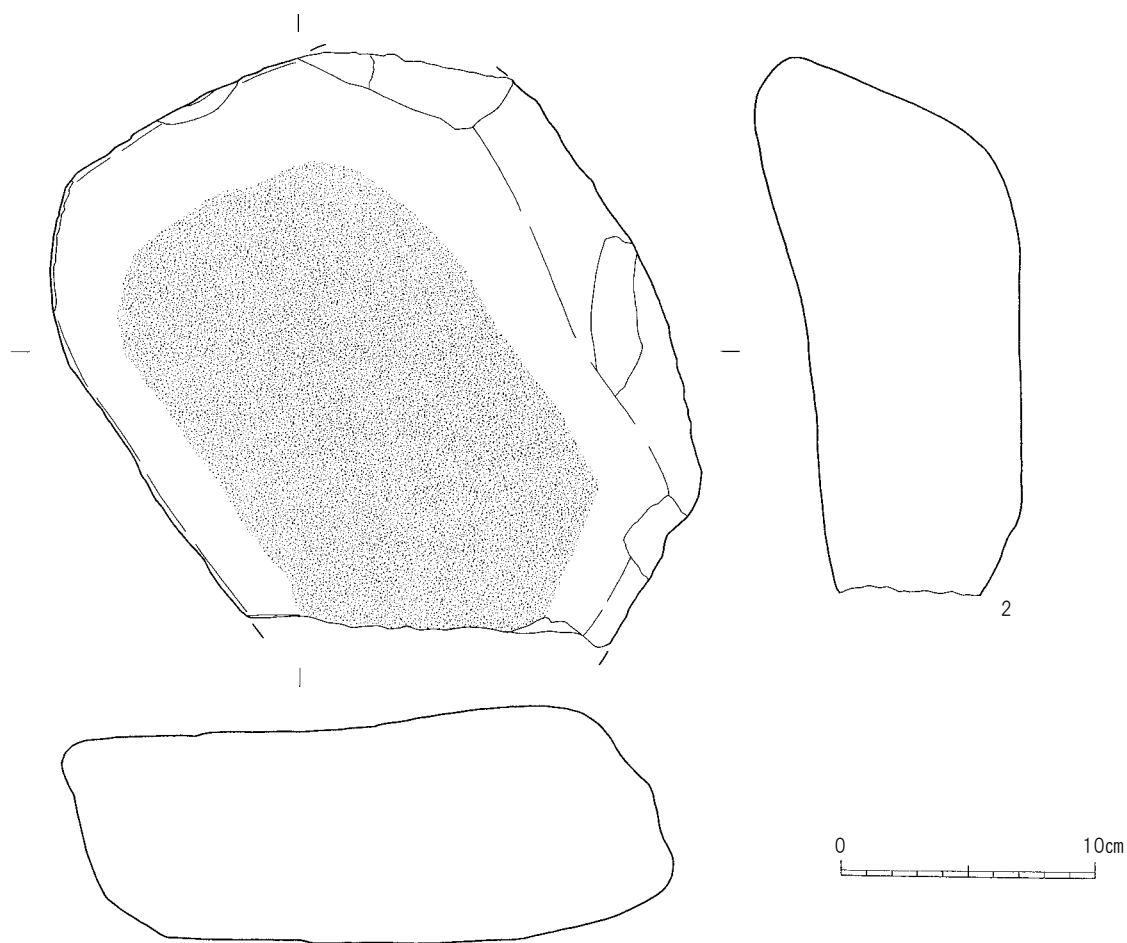
29号集石（第22図）

分布図からもわかるように、調査区のほぼ中央部分であるF-22区において単独で検出されたものである。

この集石は、東側1/3が削平されて消失している。もともとは、長径が東西1.5m、短径が南北に1m程度の楕円形で40cm程度の掘込みのある集石であったものと考えられる。この掘込みには、数百個の礫がぎっしりと詰め込まれていた。西側の散在する礫は、東側部分から流出したものと考えられる。

30号集石（第22図）

F-26区のⅣ層から検出されている。29号集石と同様に周辺に集石は、存在せず、単独で検出さ



第19図 24号集石出土遺物(2)

れたものである。29号集石と異なる点は、その規模である。29号集石は本遺跡で検出された集石の中では最大級のものであったが、30号集石は小規模で8個の亜円礫が敷石状にほぼ平坦に集まっている。

31号集石（第22図）

I-30区のIV層から検出された。I-30区からは他に32号・33号が検出されている。31号集石は、北側に10個程度の角礫が集中し、南側に3個と2個の礫が散在している。

32号集石（第22図）

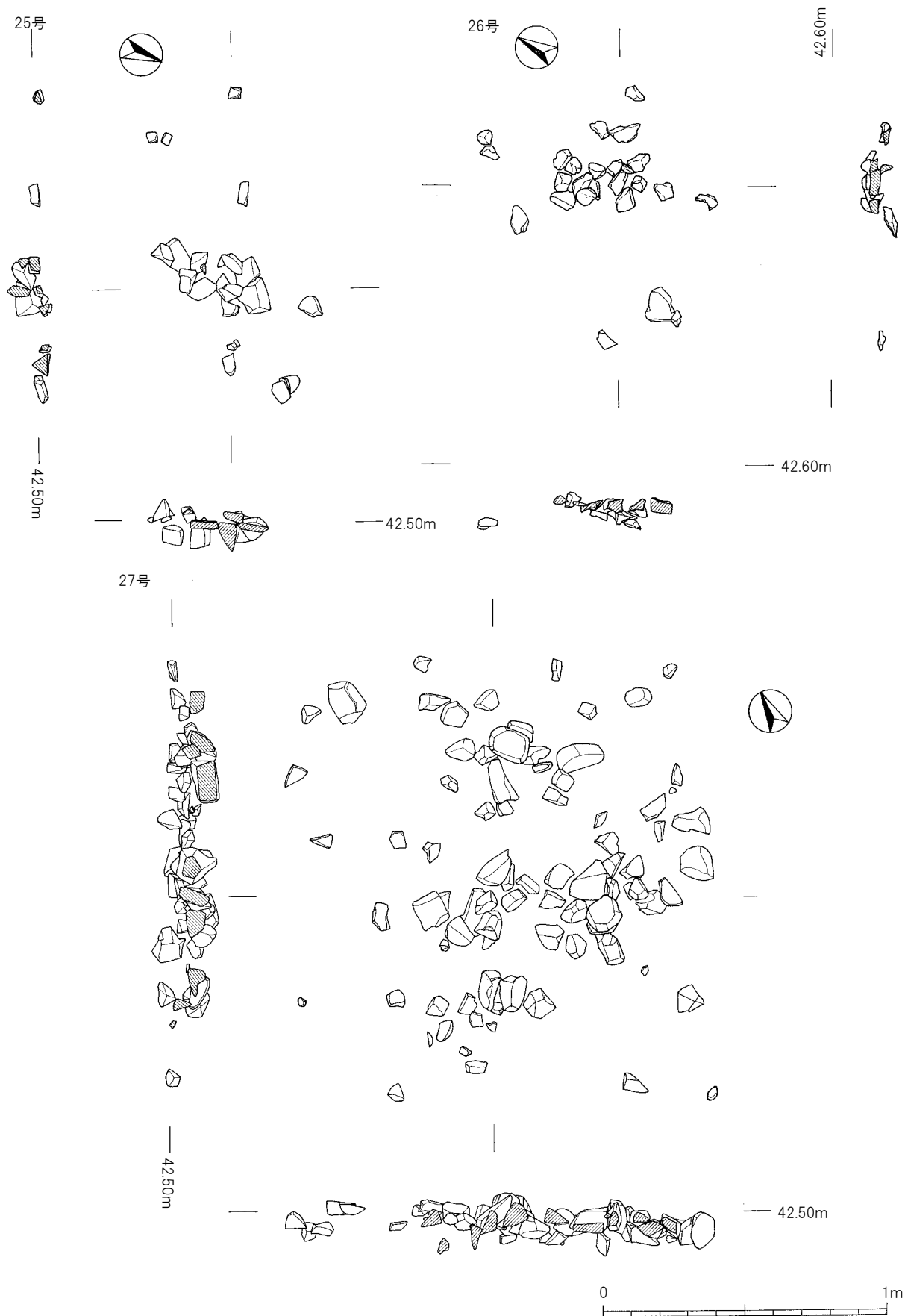
80cm程度の範囲内に四角柱・三角柱状の礫が散在しているものである。礫の高低差は見られず、ほとんど平坦である。

33号集石（第22図）

やや大きめの拳大の礫1個とそれより小さいサイズの角礫3個で構成されている。大き目の礫がやや立った状態であるが、礫の高低差もなくほとんど平坦である。

34号集石（第23図）

31号・32号・33号集石が検出された西側のI-31区のIV層から検出された。西側から東側へやや



第20図 25, 26, 27号集石



第21図 28号集石

傾斜した面に拳大以下の礫が散在した状況である。同一の面より、塞ノ神式土器片2点が出土している。

35号集石（第23図）

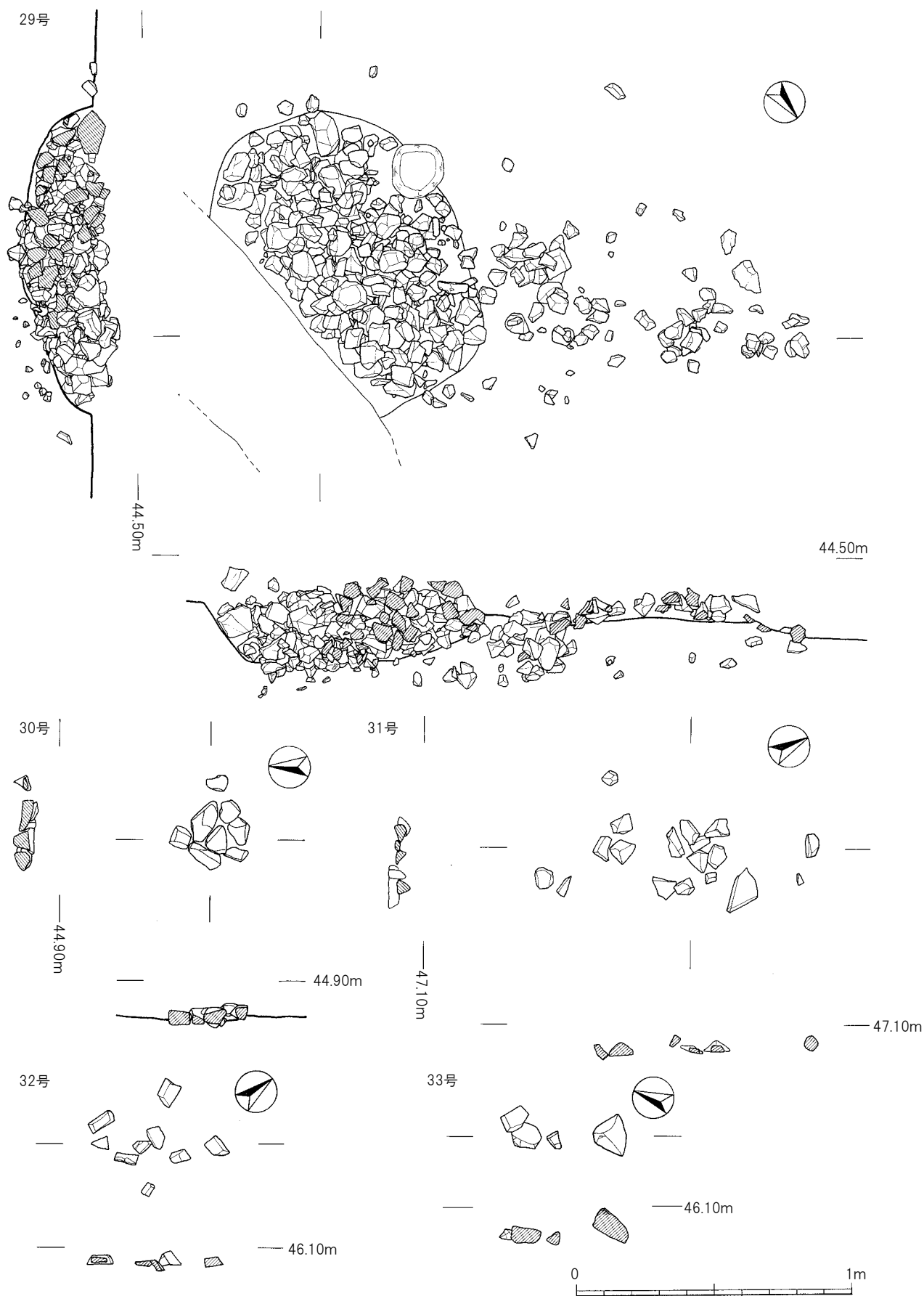
E・F-32区のⅣ層から検出された。拳大よりやや大きい礫を中心とし、西側に開く馬蹄形状を呈している。礫の高低差もほとんどなく、掘込みも検出されなかった。

36号集石（第23図）

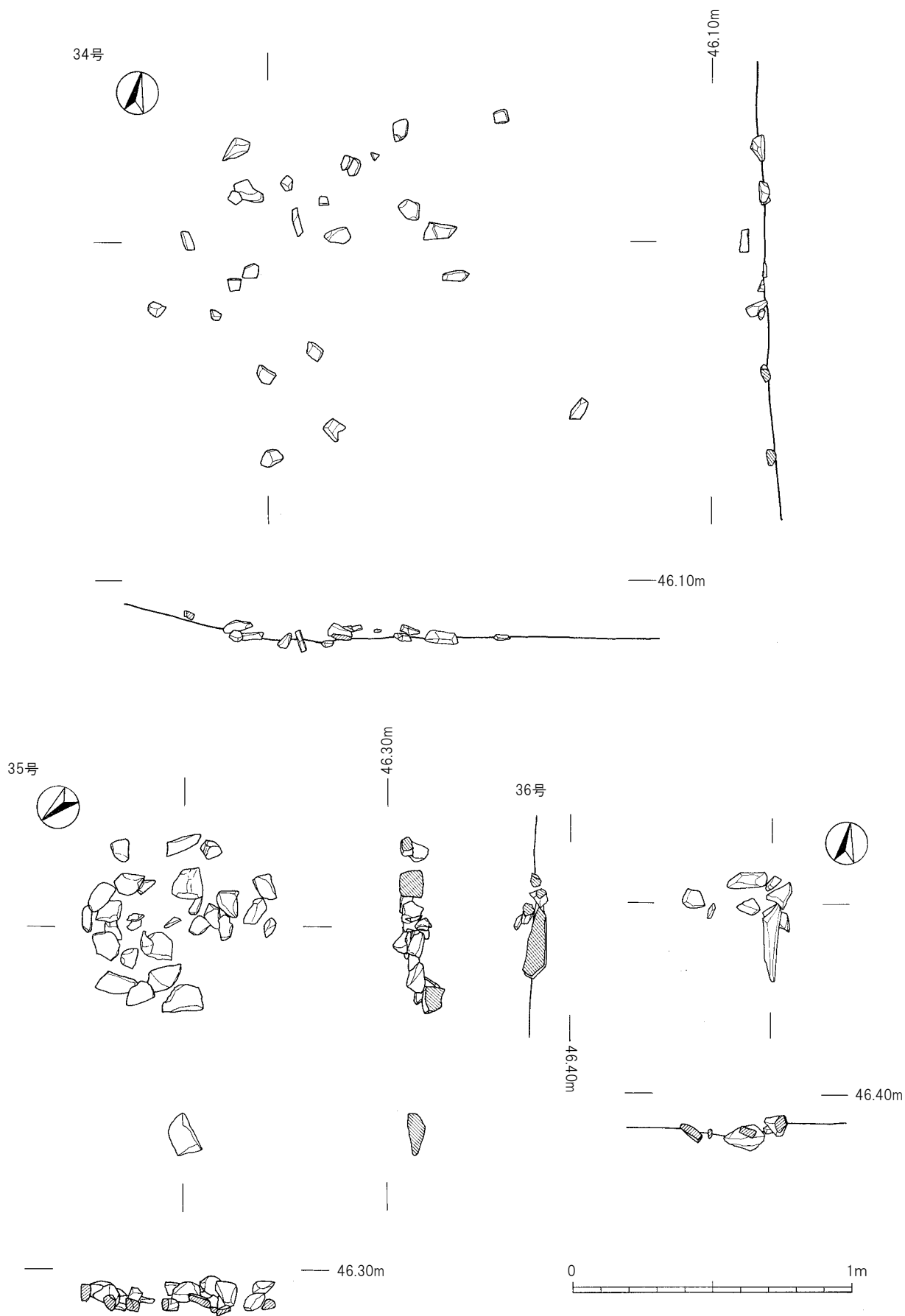
F-32区のⅣ層から検出され、数メートル北東には、35号集石が存在する。南西側に約40cm程度の長めの角錐状に近い礫を配し、そのすぐ北側に20cm以下の石が数個存在している。南側からみた断面では、もっとも北側の礫が深い位置にある。

37号集石（第24図）

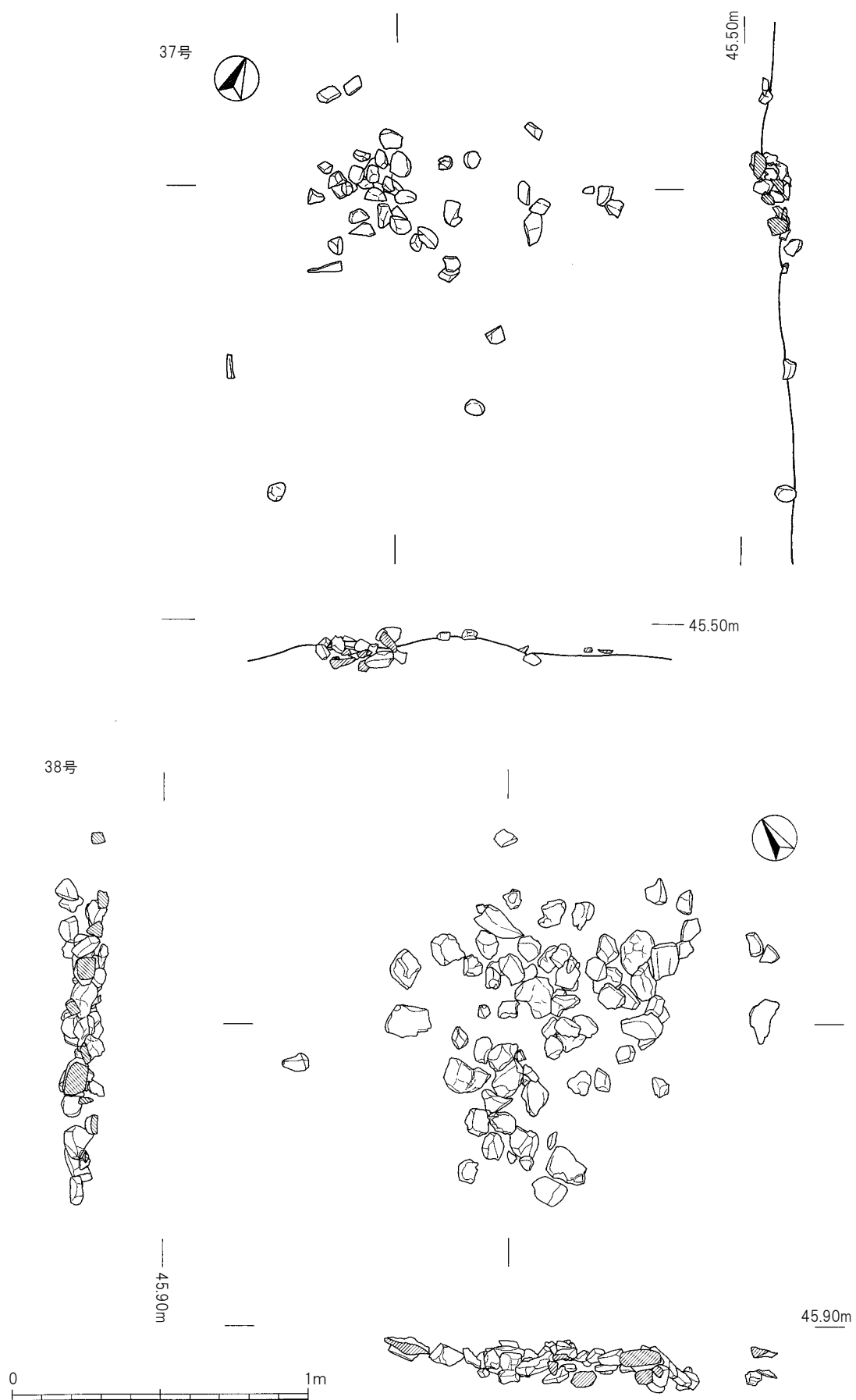
I-33区のⅣ層から検出されている。西側部分に拳大以下の礫が20程度集中し、東側へは散在した状態である。検出された37号集石周辺の地形は、やや起伏に富んでいる。



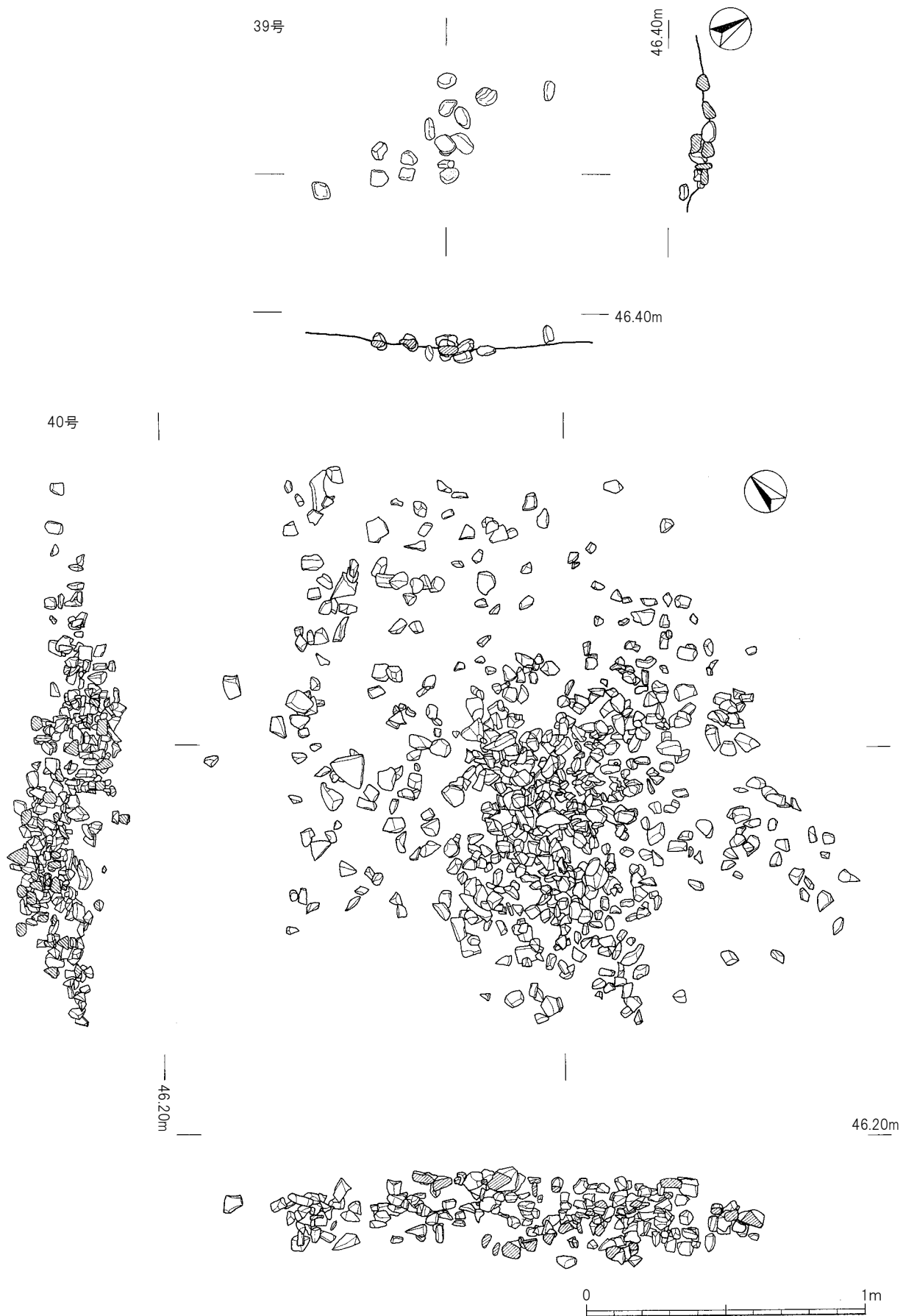
第22図 29, 30, 31, 32, 33号集石



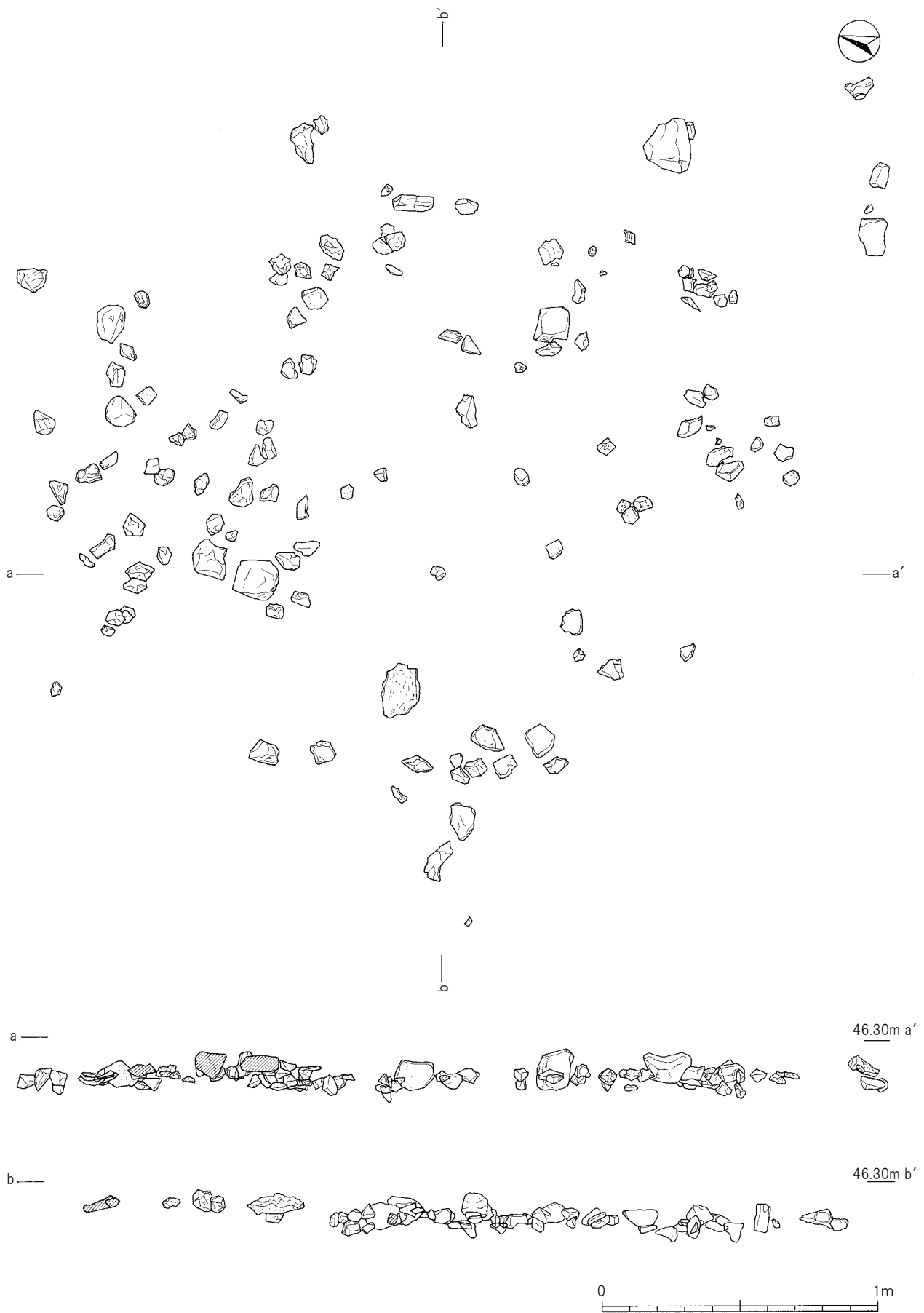
第23図 34, 35, 36号集石

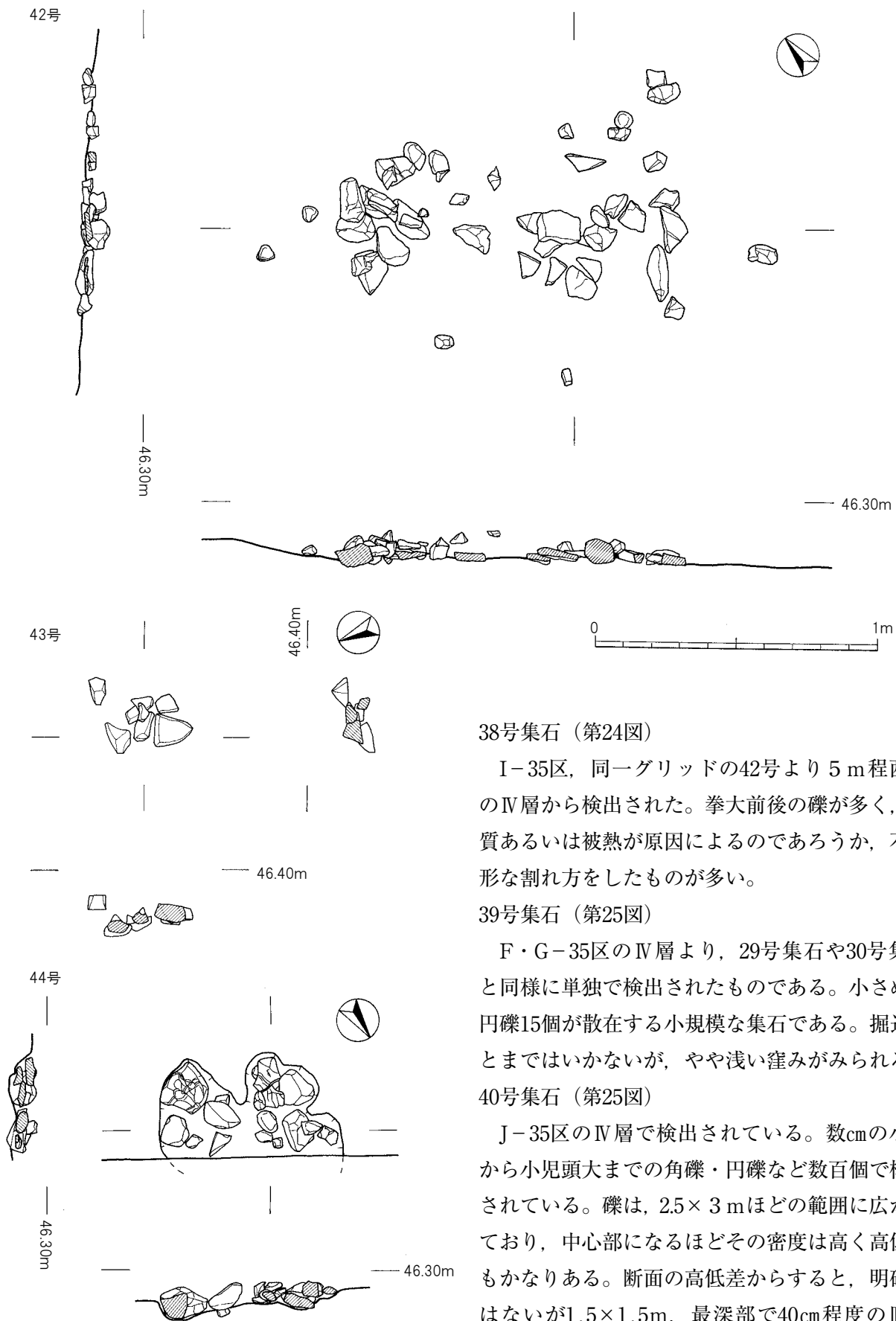


第24図 37, 38号集石



第25図 39, 40号集石





第27図 42, 43, 44号集石

38号集石 (第24図)

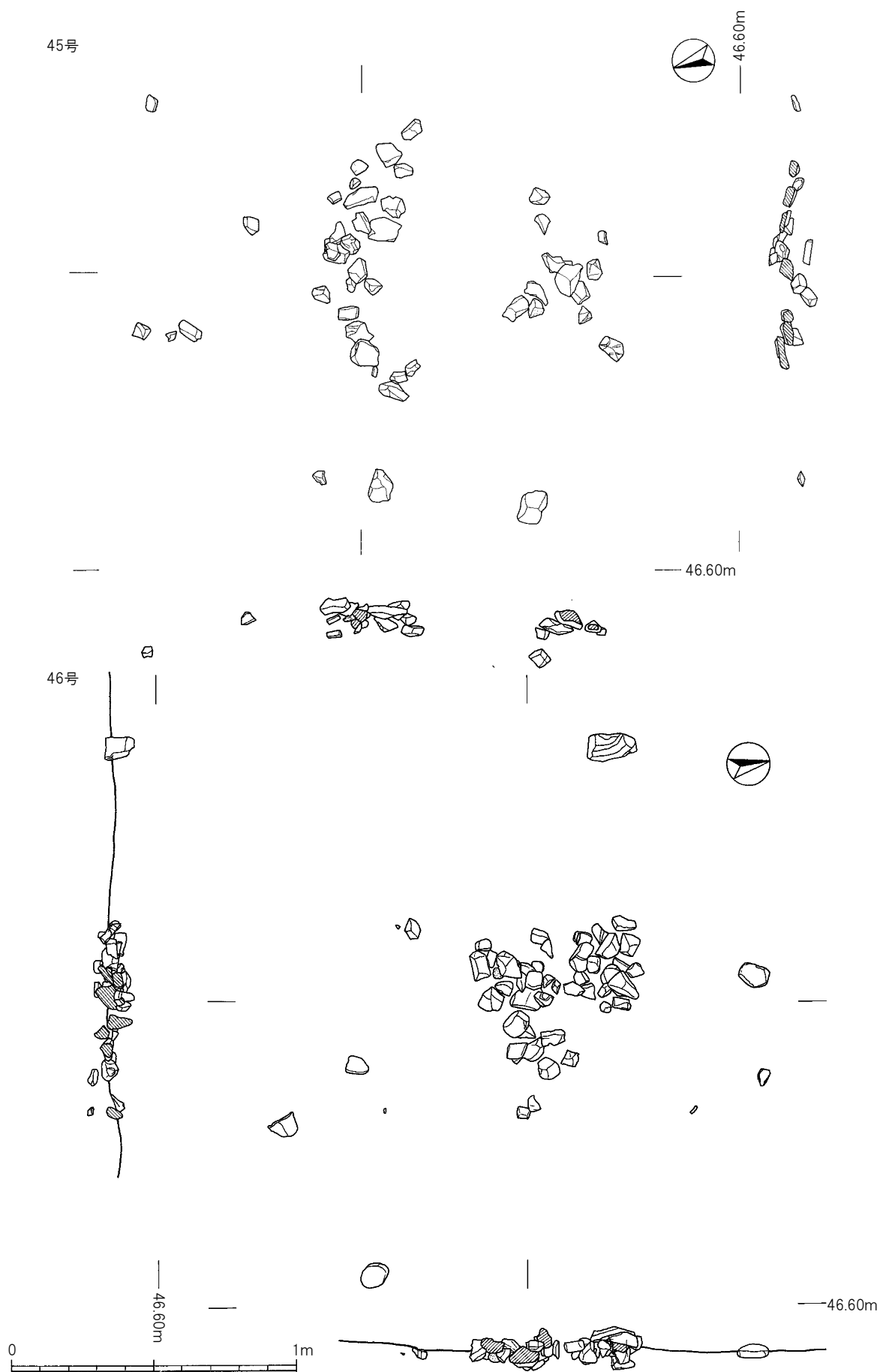
I-35区, 同一グリッドの42号より5 m程西側のIV層から検出された。拳大前後の礫が多く, 石質あるいは被熱が原因によるのであろうか, 不定形な割れ方をしたものが多い。

39号集石 (第25図)

F・G-35区のIV層より, 29号集石や30号集石と同様に単独で検出されたものである。小さめの円礫15個が散在する小規模な集石である。掘込みとまではいかないが, やや浅い窪みがみられる。

40号集石 (第25図)

J-35区のIV層で検出されている。数cmの小片から小児頭大までの角礫・円礫など数百個で構成されている。礫は, 2.5×3 mほどの範囲に広がっており, 中心部になるほどその密度は高く高低差もかなりある。断面の高低差からすると, 明確ではないが1.5×1.5m, 最深部で40cm程度の皿状の掘込みがあった可能性がある。



第28図 45, 46号集石

41号集石（第26図）

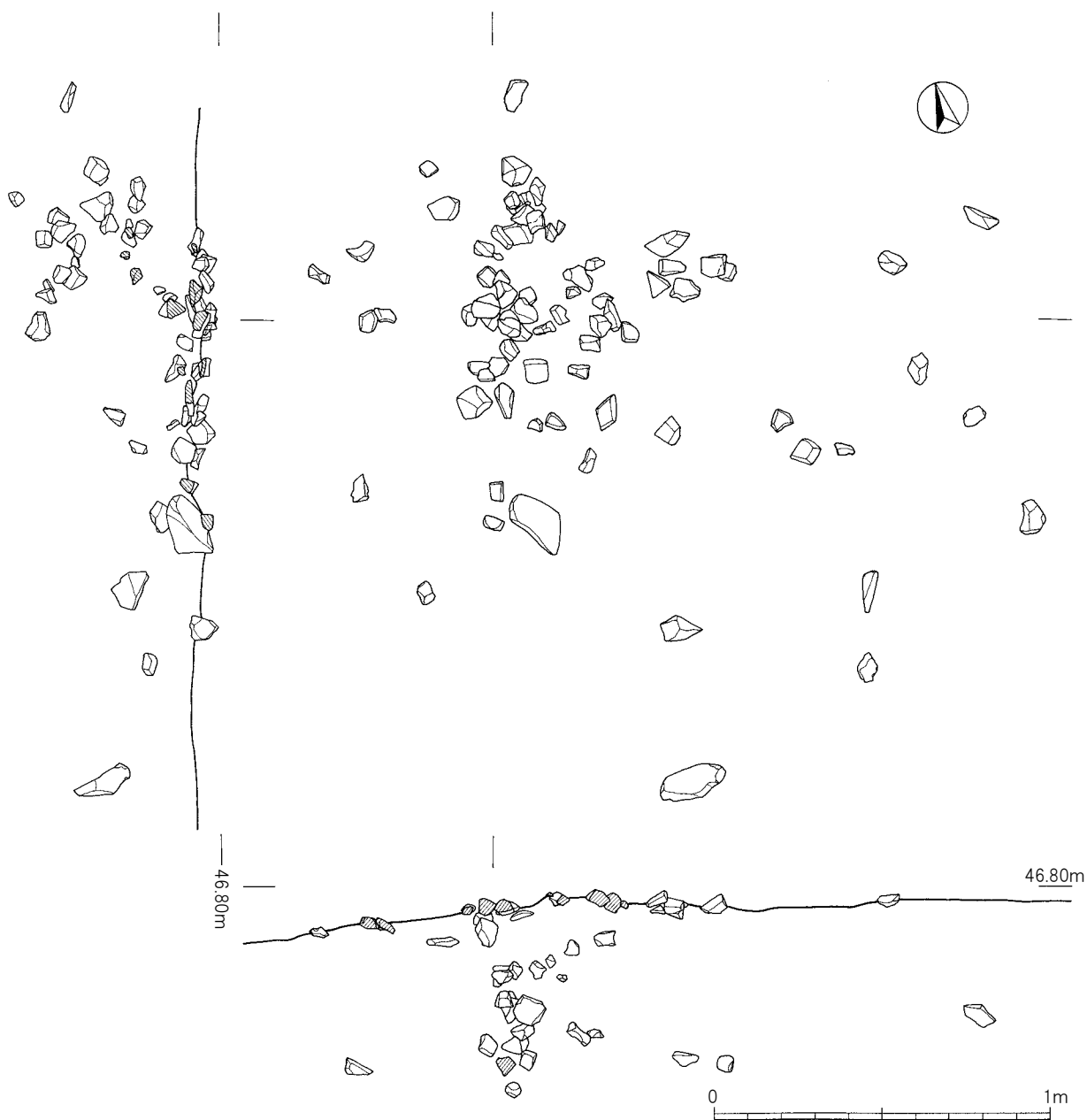
G-37区のⅣ層から検出された。3×3m程度の範囲の中に幾多の大きさ・石質の石が散在している。礫の高低差もなく、ほぼ同一の面から検出されたことから、掘込みはなかったと考えられる。また、これらの集石の中から、条痕のある土器の小片が3点確認された。

42号集石（第27図）

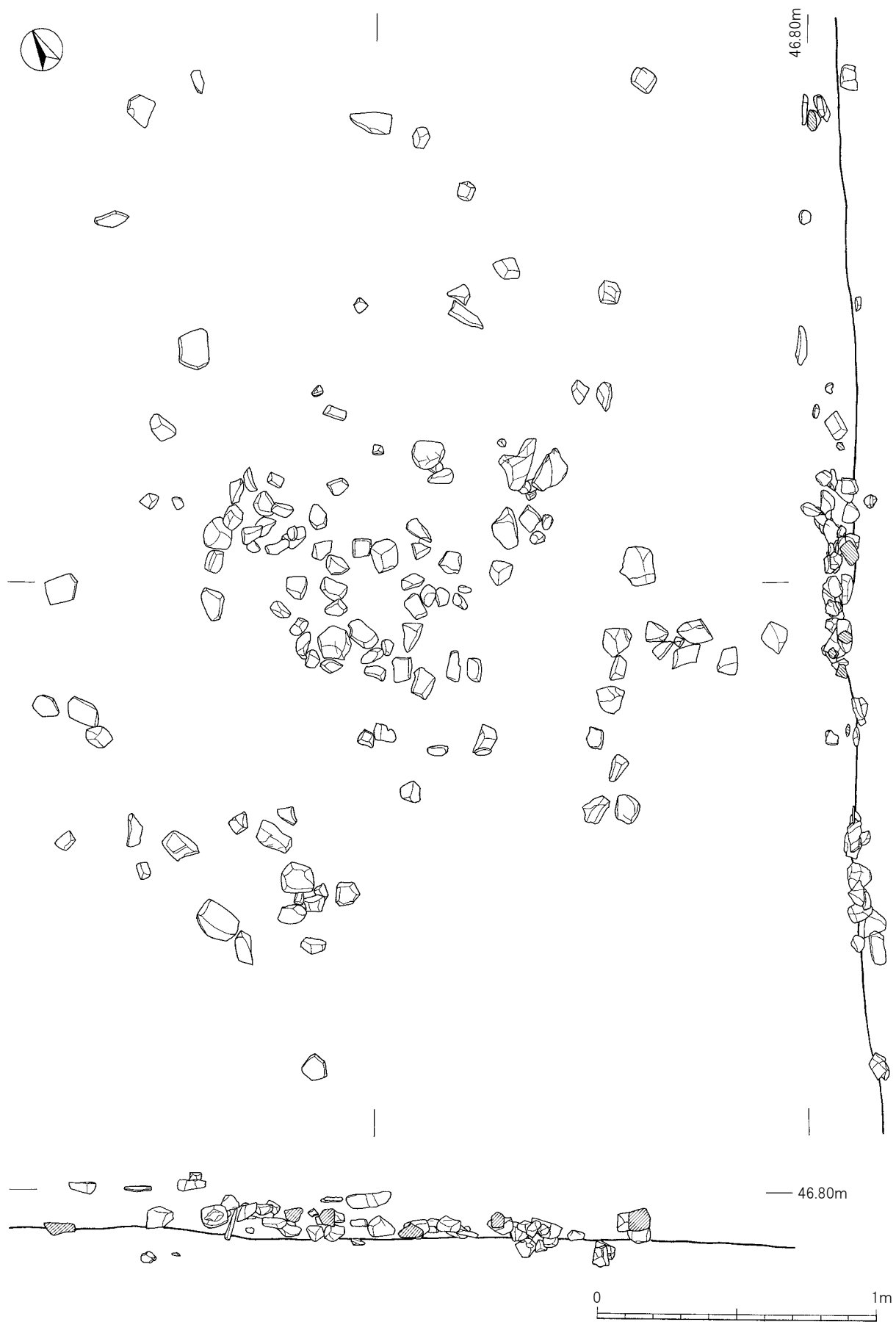
I-35・36区のⅣ層より検出された。西から東へやや傾斜した状況で小児頭大に近い大きめの礫が大半を占める。西側部分の礫の重なりが顕著なことから、西側部分が中心部であったことが考えられる。

43号集石（第27図）

H・I-37区のⅣ層から検出されている。厚さ10cm・長さ15cm程度の礫を最大に、東側の1個の



第29図 47号集石



第30図 48号集石

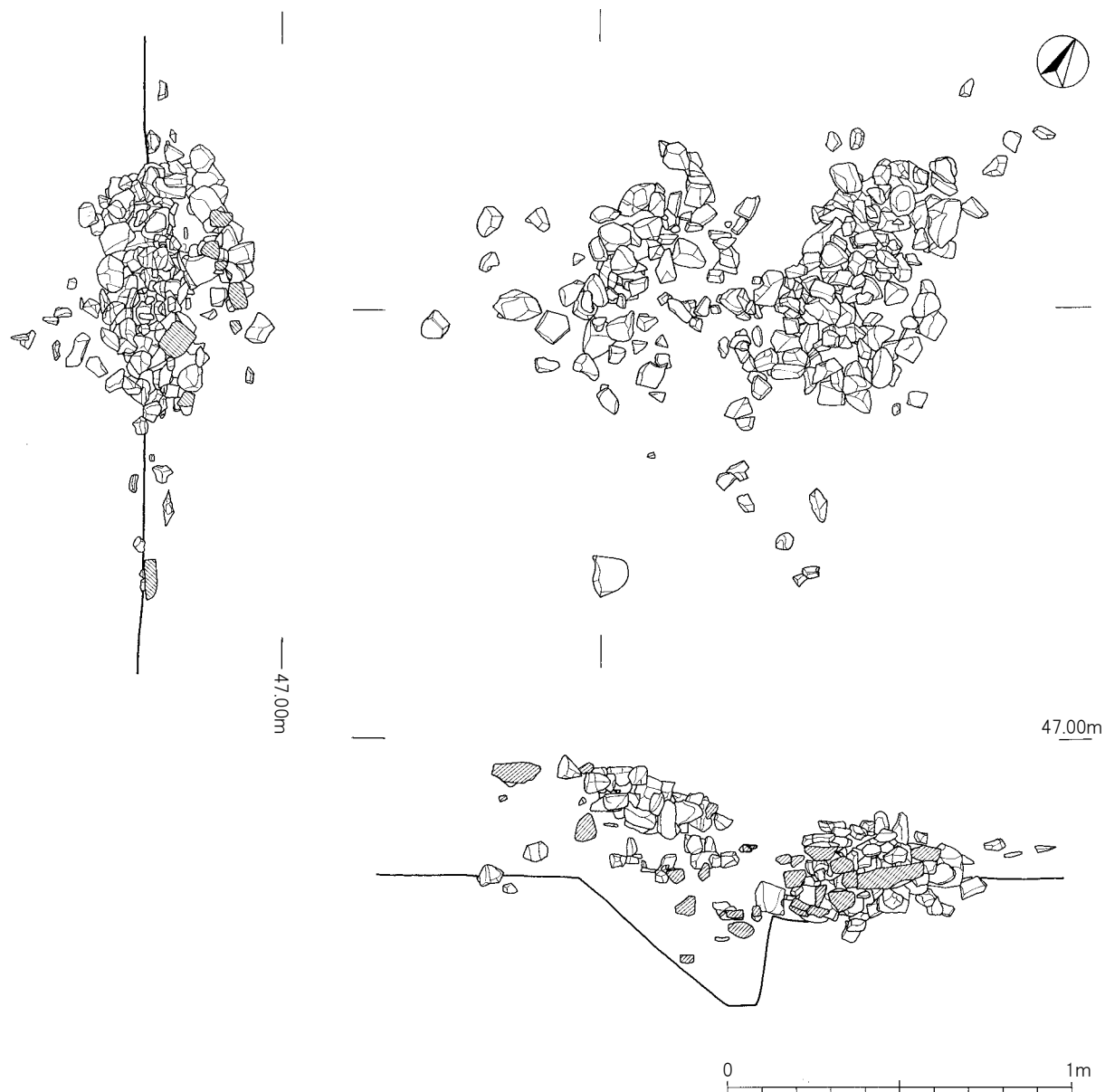
礫を除き近接した状況で検出された。またこれら近接している礫は北側へ傾斜している。小規模なものである。

44号集石（第27図）

I-37区のIV層から検出された。北側部分が削平により消失しているため全形は不明である。礫は数cmのものから拳大程度のものを用いており、20cm程度の掘込みがあり、床面は中央部がやや盛り上がった状態である。

45号集石（第28図）

G-39区のIV層で検出された。調査区西側の13号集石周辺ほどの密集度はないものの、この集石から東側へ列をなすように集石が検出されている。45号集石は、北側部分と南側部分に分かれるような状況で散在的に検出されているが、北側部分は、東西へやや弧状になっている。また、周囲から土器が数点出土しているが、細片のため図化し得なかった。



第31図 49号集石

46号集石（第28図）

45号集石の西隣のグリッドであるF-40区から検出されている。45号集石に比べるとかなりまとまりがある。北側と西側にまとまりがあり、東側は礫が散在しているが、集石を全体的にみると、北東側に開く馬蹄形状にも見えるものである。

47号集石（第29図）

46号集石の西隣のグリッドであるE-41区のIV層から検出されている。この集石は、部分的に礫の重なりはあるものの、概ね散在しているような状態である。特に、検出面は平坦であるものの、礫の高低差が激しいことが断面図からもよくわかる。

48号集石（第30図）

46号・47号に隣接するF-41区のIV層から検出されている。礫は3×4m程度の範囲に広く分布している。中央部分が拳大程度の礫が隣接したような状態である。検出面は平坦であり、掘込みは検出されなかった。

49号集石（第31図）

47号・48号・50号に隣接するE-42区から検出された。平面的には、2基の集石が隣接したような状態であり、東西の断面でも礫の高低差があることから、2基の集石の可能性が高い。

東西方向の断面では、西側に逆三角形で深さ約40cm程度、東側は20cm程度の掘込みが観察される。東側の部分は、礫が掘込みに沿うように位置していることから、集石に伴う掘込みと考えられるが、西側は集石と掘込み面とに差があるために集石に伴うものであるかは、疑問が残る。

50号集石（第33図）

47号・48号、49号・51号に隣接するF-42のIV層から検出されたものである。小児頭大の数個の周辺に小さ目の礫が飛散したような状況である。この小児頭大の礫はほとんどが最深部にあることから、これらは原位置を保っているものと考えられる。

51号集石（第33図）

49号と50号に隣接するF-43区にあり、IV層検出の集石の中では、最も東側に位置するものである。ほとんどの集石の床面は、平坦・皿状・掘込みをもつものであるが、この集石は緩やかな盛り上がり部分に位置している。西側の部分に礫の集中か所が観察されるが、密度の差はあるものの、全体的に礫が張り付いたような状況である。

(3) IIIb層検出の集石遺構

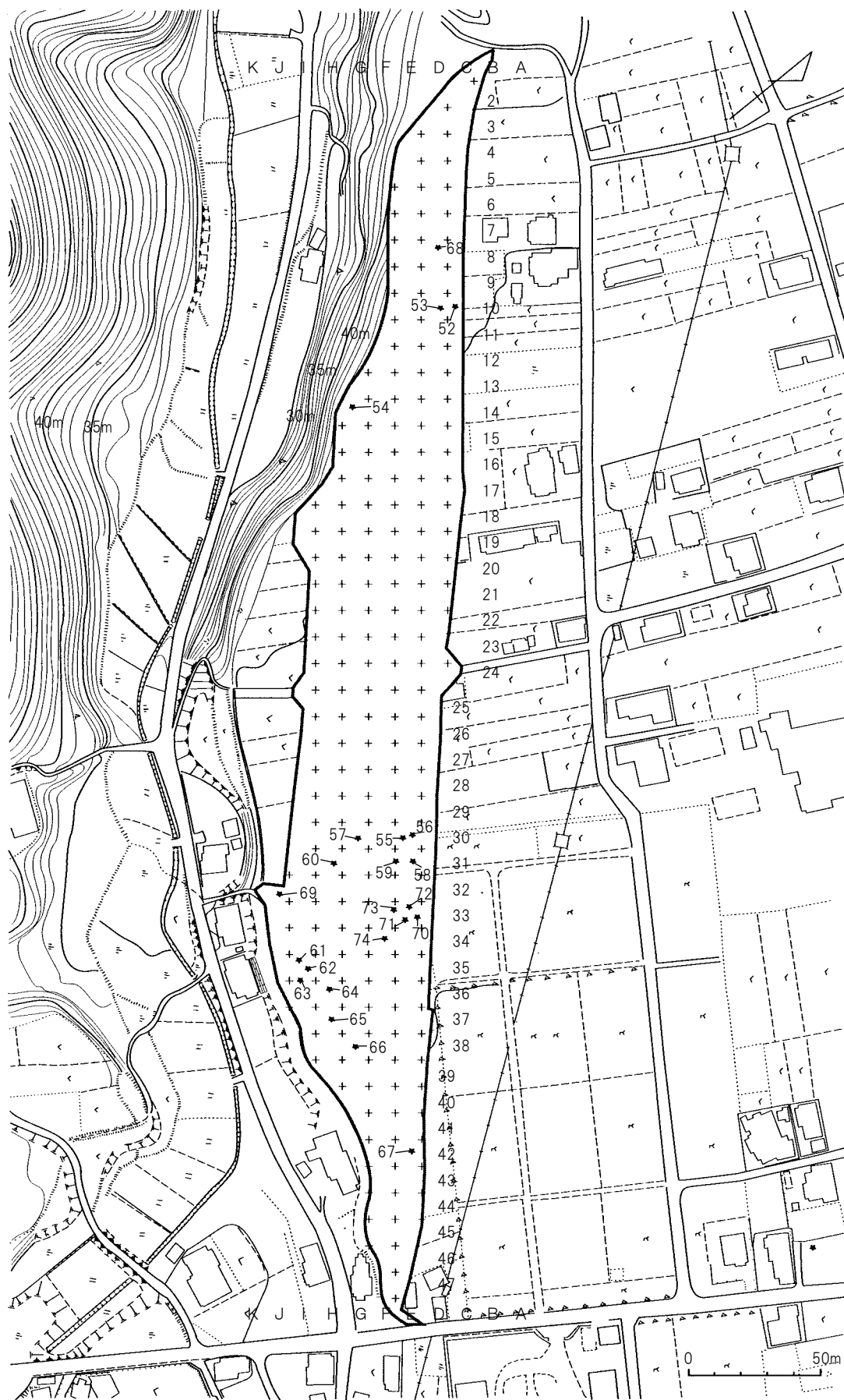
IIIb層検出の集石遺構は調査区の西側に3基、中央から東側にかけて13基が検出されている。比較的小規模の集石が多く、掘込みが確認されたものが5基であった。

52号集石（第34図）

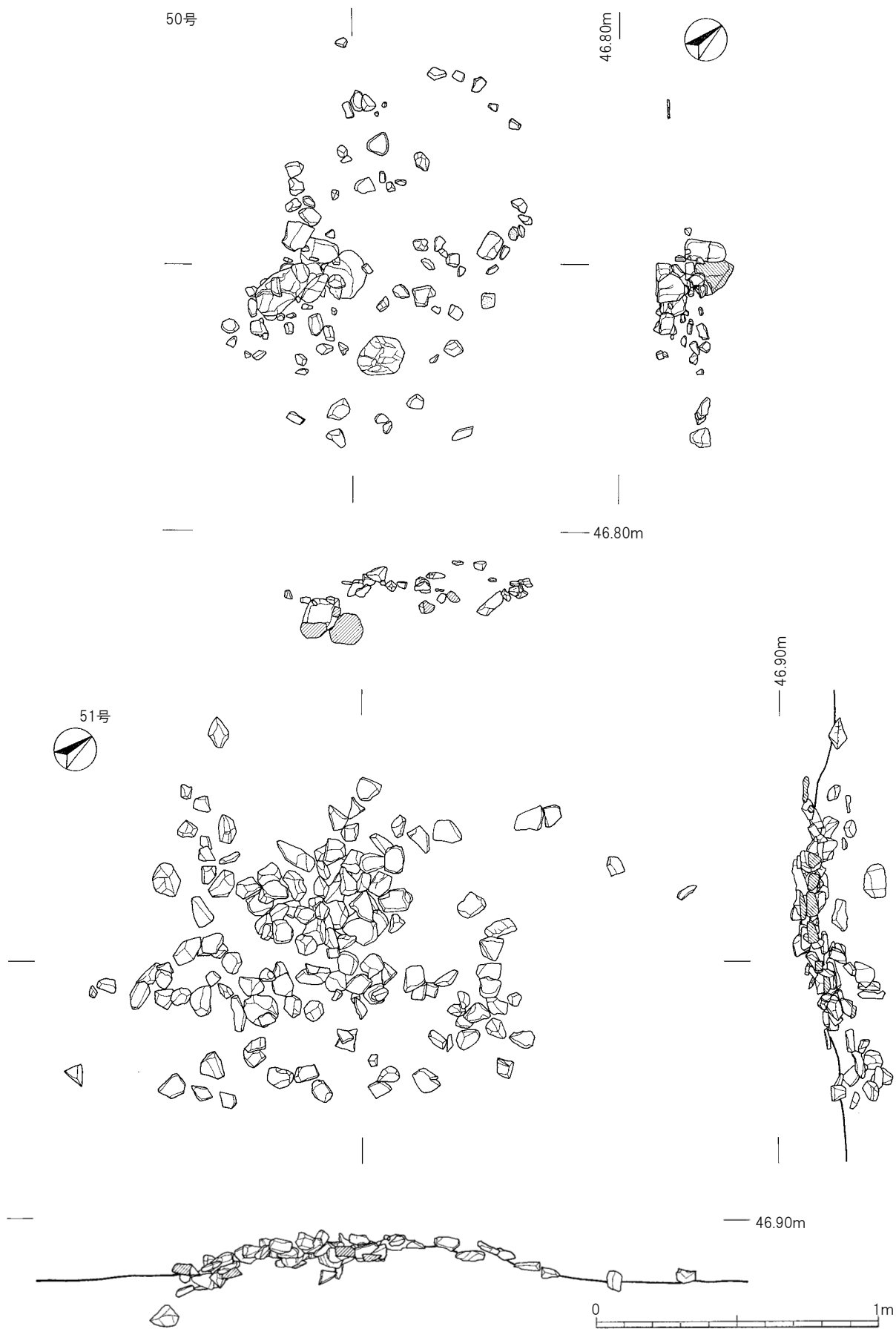
C-10区で検出されている。検出時に遺構の一部が削られており全形は明らかではないが、大部分が10cm以下の角礫よりなる。

53号集石（第34図）

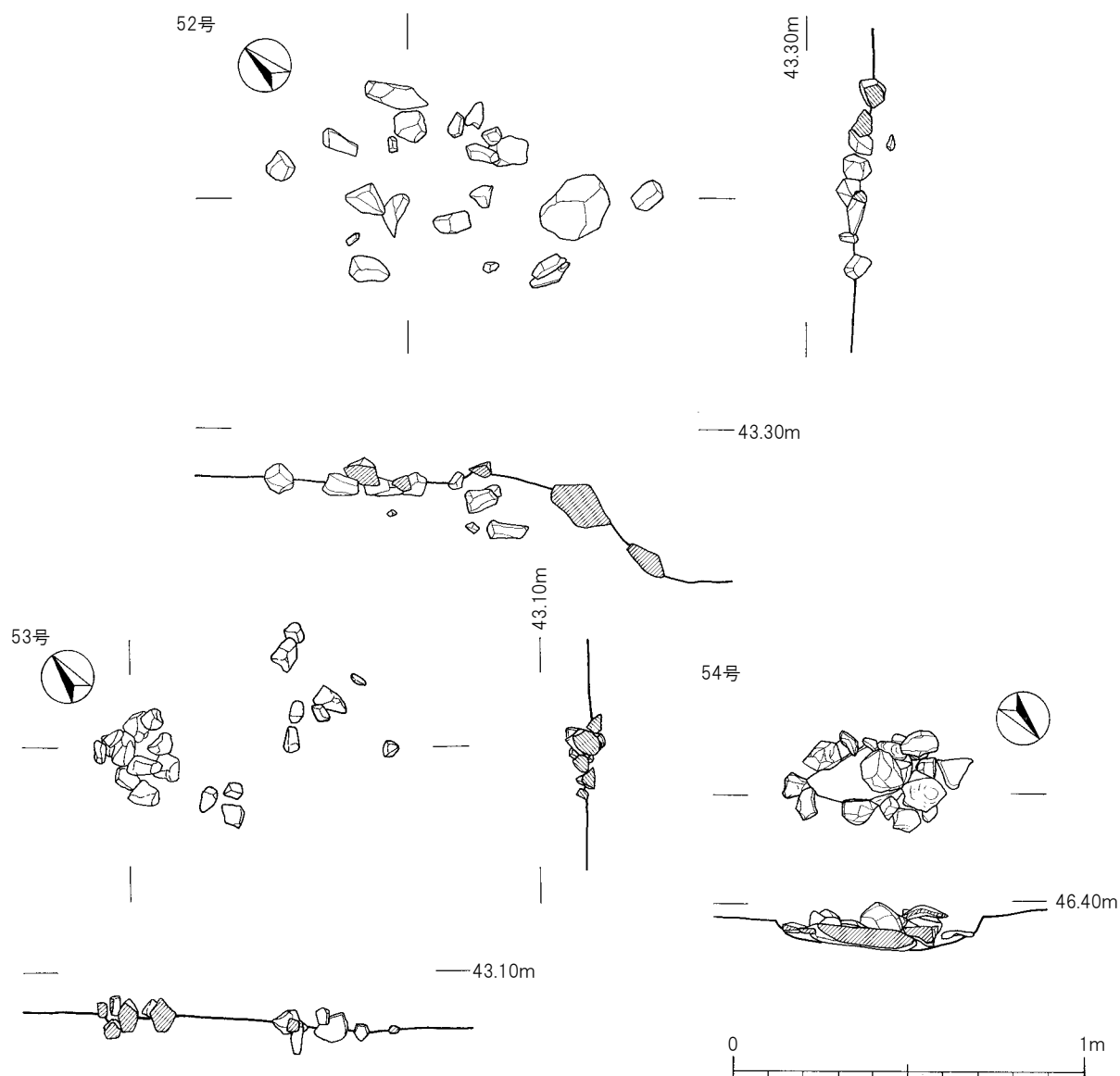
D-10区で検出されている。10cm前後の小礫が中央部に小さくまとまり、西側周辺部に10個散在している。掘込み等は確認されなかった。



第32図 III層集石遺構位置図



第33図 50, 51号集石



第34図 52, 53, 54号集石

54号集石（第34図）

E-30区で検出されている。明確な掘込みを有する。深さは検出面より約10cmで埋土は黒褐色である。内部に様々な形状の10～30cmの砂岩の角礫が充填している。熱で破碎されたものも見られる。土器片を1個含む。

55号集石（第35図）

E-31区で検出されている。56cm×110cm、深さ12cmの掘込みを中心に10cm以下の礫を確認している。また北西側周辺にも礫が点在している。礫は砂岩・頁岩よりなり、その約4割が赤化している。磨石の転用も見られる。土器片を1個含む。

56号集石（第35図）

E・F-31区で検出されている。礫11個からなる最も小規模な集石のひとつで、掘込み等を伴わない。

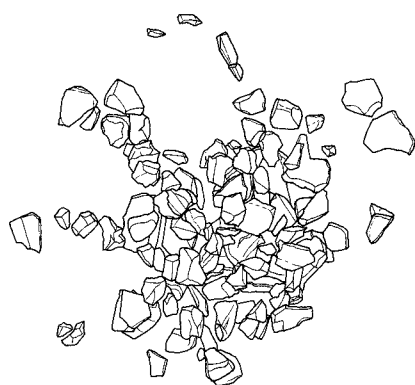


第35図 55, 56, 57, 58号集石

59号



46.30m



60号



46.30m



46.30m

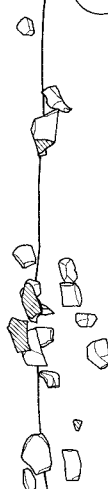


46.30m

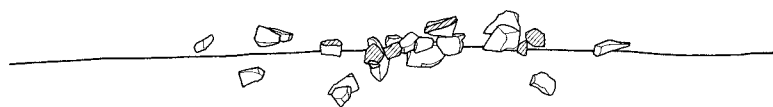
61号



46.40m



46.40m



第36図 59, 60, 61号集石

57号集石（第35図）

G-30区で検出されている。掘込みは42cm×41cmのほぼ円形を呈し、深さは約10cmである。内部に熱で破砕された礫が充填されている。土器片を1個含む。

58号集石（第35図）

G-14区で検出されている。109cm×65cm内に3cmから拳大の礫があつまる。掘込みが存在していた可能性は高い。

59号集石（第36図）

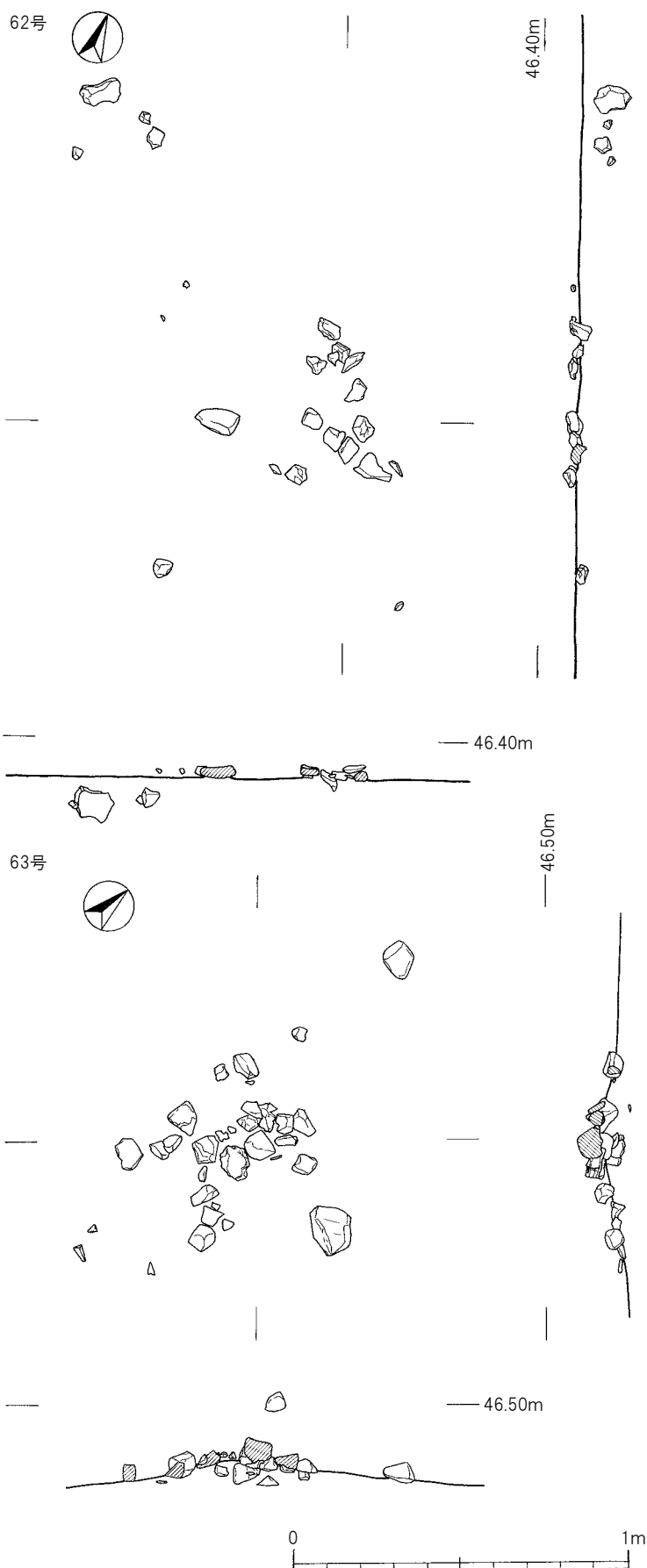
I-35区で検出されている。5cmから小児頭大の角礫を100個ほど用いている。礫は砂岩・安山岩からなり、火熱を受けて赤化しているものが多い。密集しており掘込みが存在していた可能性は高い。長軸はほぼ東西と一致する。

60号集石（第36図）

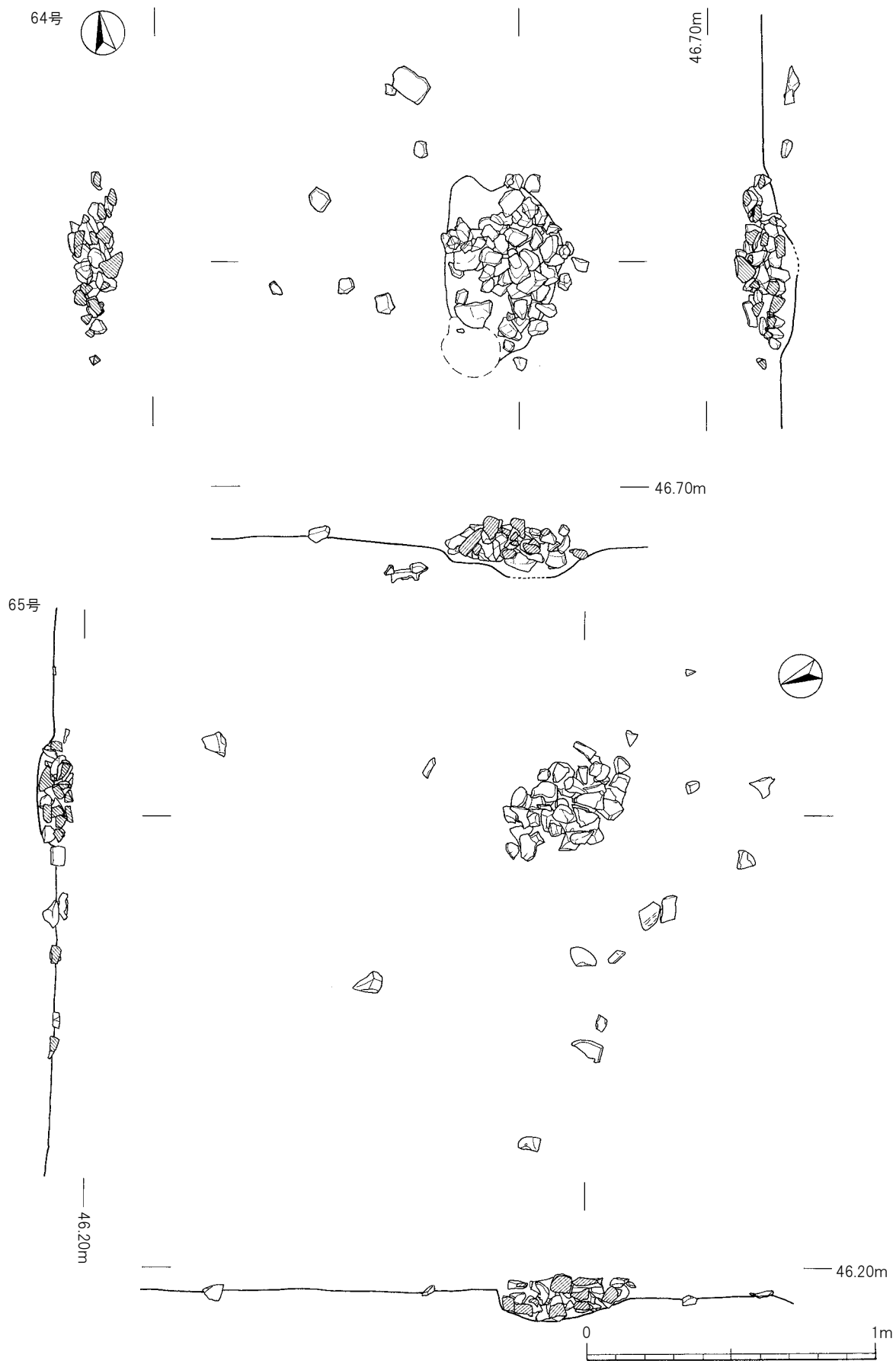
I-35区で検出されている。12個の硬質頁岩よりなるのが特徴である。掘込みや被熱が確認されず炭化物もなかったため、他の用途も想定できる。

61号集石（第36図）

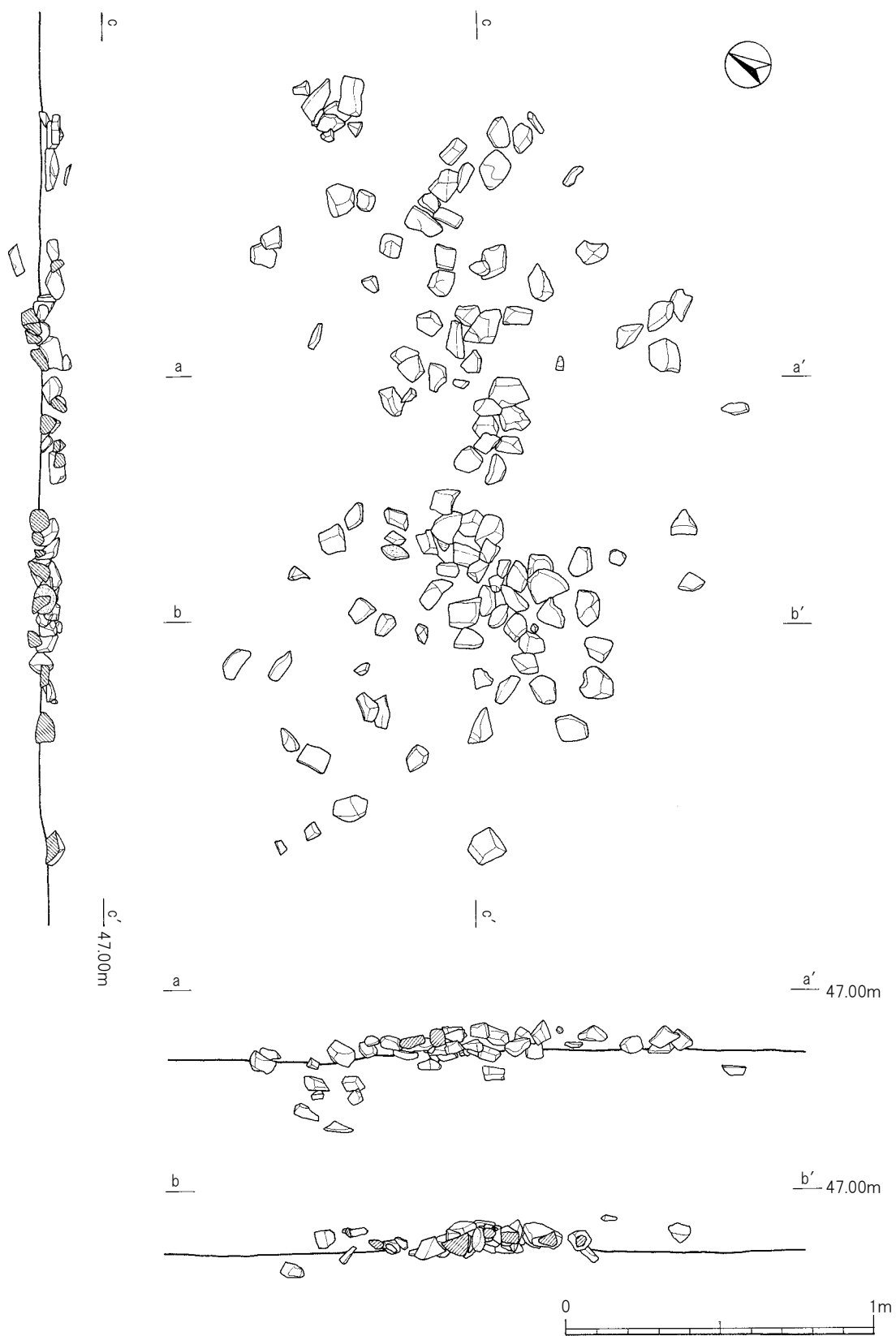
I-35・36区で検出されている。170cm×140cmの範囲に点在する。礫は拡散した状況が観察され、掘込み等も確認されなかった。61号～63号集石は同じグリッド内に隣接し合っており同時期か、または極めて近い時期に使用されていたことが想定される。



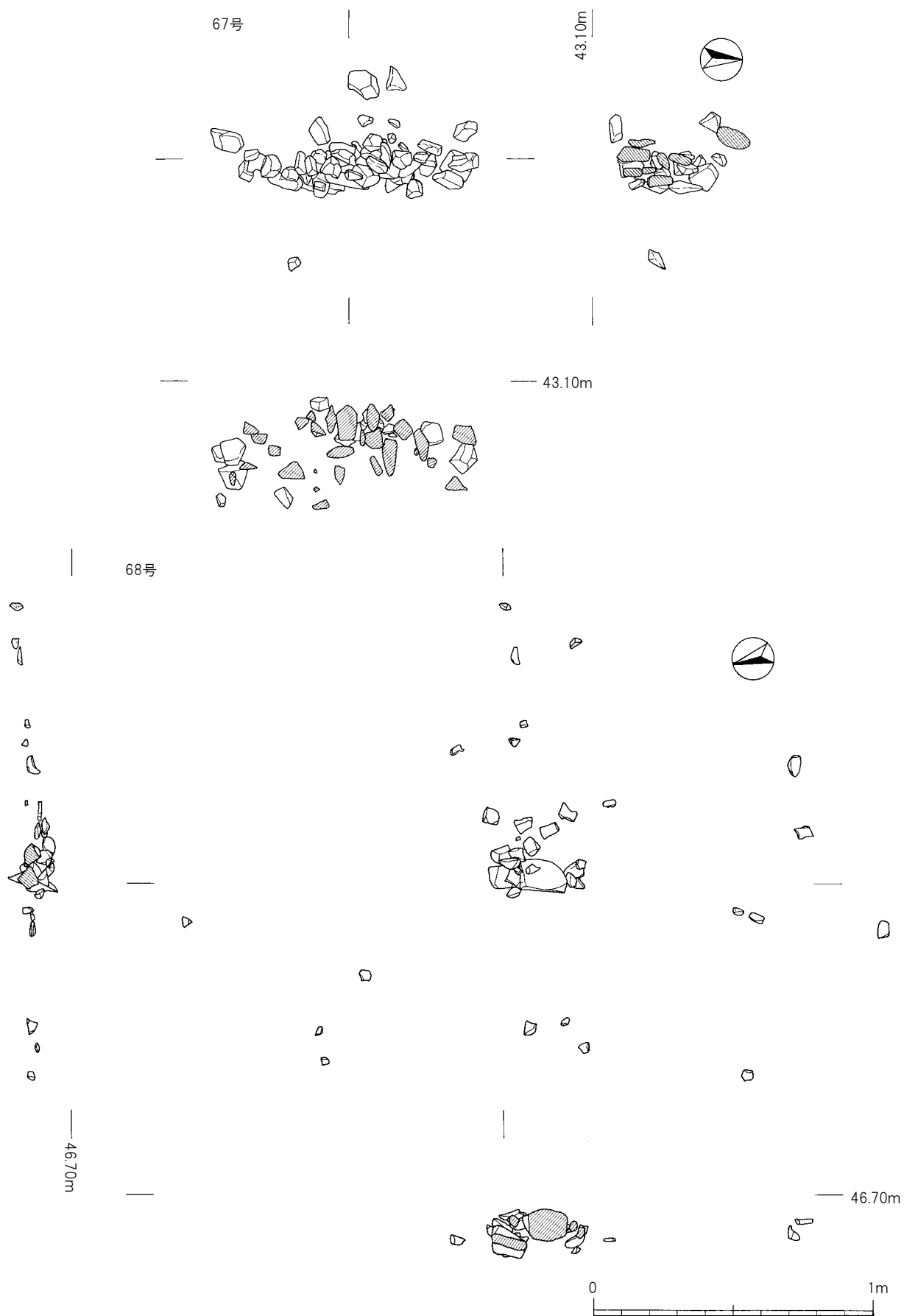
第37図 62, 63号集石



第38図 64, 65号集石



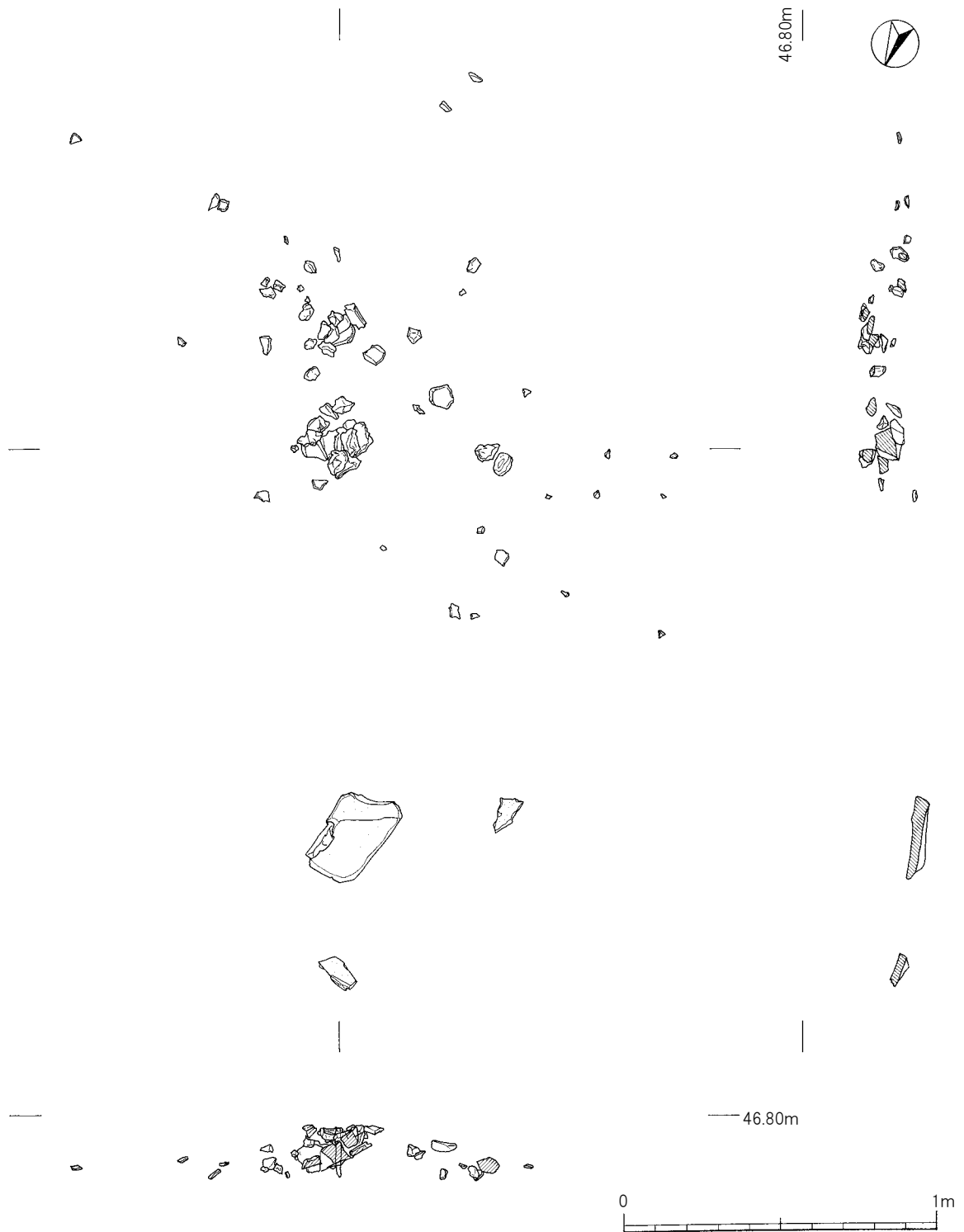
第39図 66号集石



第40図 67, 68号集石

62号集石（第37図）

H-36区で検出されている。10cm未満の小礫20個程度の小規模なものである。一部は北方向に礫が散逸している。周囲に黒曜石のチップと土器片が点在するが本遺構との関係は不明である。



第41図 69号集石

63号集石（第37図）

H-37区で検出されている。5cm～20cmの角礫よりなり、その約半数は火熱を受けて赤化している。炭化物や掘込み等は確認されていない。

64号集石（第38図）

G-38区で検出されている。64cm×56cm、深さ12cmの掘込みに礫が充填される。黒曜石のチップと曾畑式土器の小片が礫に混ざって入る。礫の半分以上は火熱を受けて破碎・赤化している。

65号集石（第38図）

H-31区で検出されている。50cm×36cm、深さ14cmの皿状を呈する掘込みに80個程度の礫が密集して残される。礫の殆どが10cm以下の安山岩である。遺構の周囲には礫15個が散逸し、掘込み内の礫群と関係すると見られる。

66号集石（第39図）

E-42区で検出されている。255cm×164cmの範囲に礫を116個有する。垂角礫・角礫が多い。約3分の2の礫に火熱による破碎と赤化が認められる。明確な掘込みは確認されないが、礫が拡散した状況と考えられる。Ⅲb層検出の集石遺構のなかでは最も広範囲に礫が拡散している。

（4）Ⅲa層検出の集石遺構

Ⅲa層検出の集石遺構は調査区の西側に6基、東側に1基が検出されており、Ⅲb層の集石遺構の分布と同様の傾向が見られる。

67号集石（第40図）

D-8区で検出されている。10cm以下の角礫が96cm×46cmの範囲に密集しており、掘込みが存在していた可能性は高い。磨石の転用が1個見られる。

68号集石（第40図）

E-33区で検出されている。中心部と考えられる場所に20cm大の安山岩とその周辺に10cm以下の小礫が集まる。周囲にも比較的広範囲に小礫が点在する。このなかには土器片2個も含まれるが本遺構との関係は不明である。

69号集石（第41図）

E-33区で検出されている。10cm以下の小礫が15個程度で中心部をなし、西側と南側に同様の小礫が散在している。また周辺部には土器片23個も散在するが小片なので詳しい型式は不明である。中心部から南側約1mに安山岩製の石皿があるが本遺構を構成する礫であるのかそうでないかは不明である。

70号集石（第42図）

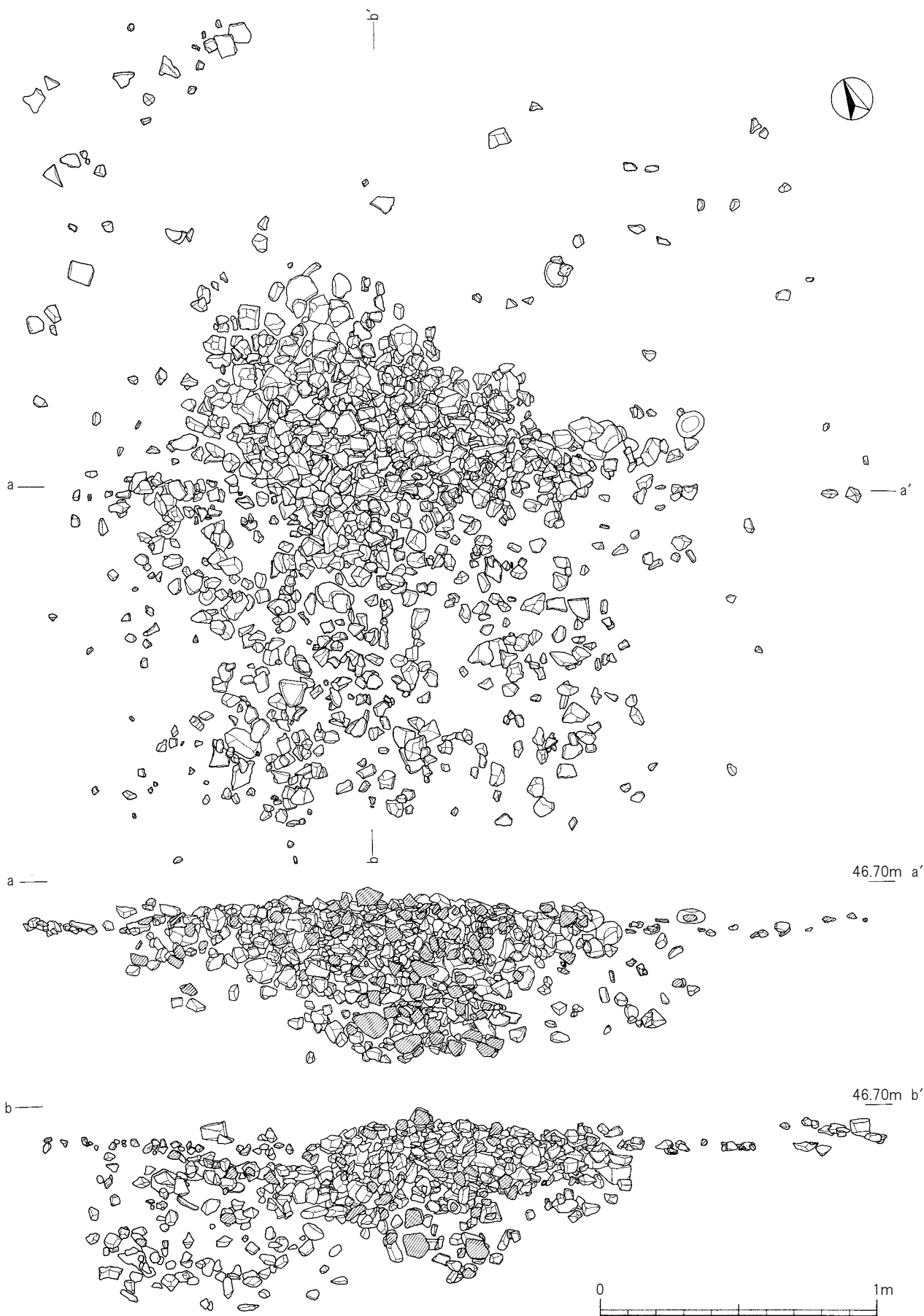
E-33区で検出されている。いわゆる集石が壊され、構成礫が周辺に拡散した様相を呈している。256cm×360cmと広範囲にわたり、礫の集中と散逸した礫で構成される。中心部と考えられる礫の集中が遺構の東側と西側にそれぞれあり、二つの集石の礫が拡散・混在していることも想定できる。土器片13個も散在するが小片なので詳しい型式は不明である。

71号集石（第43図）

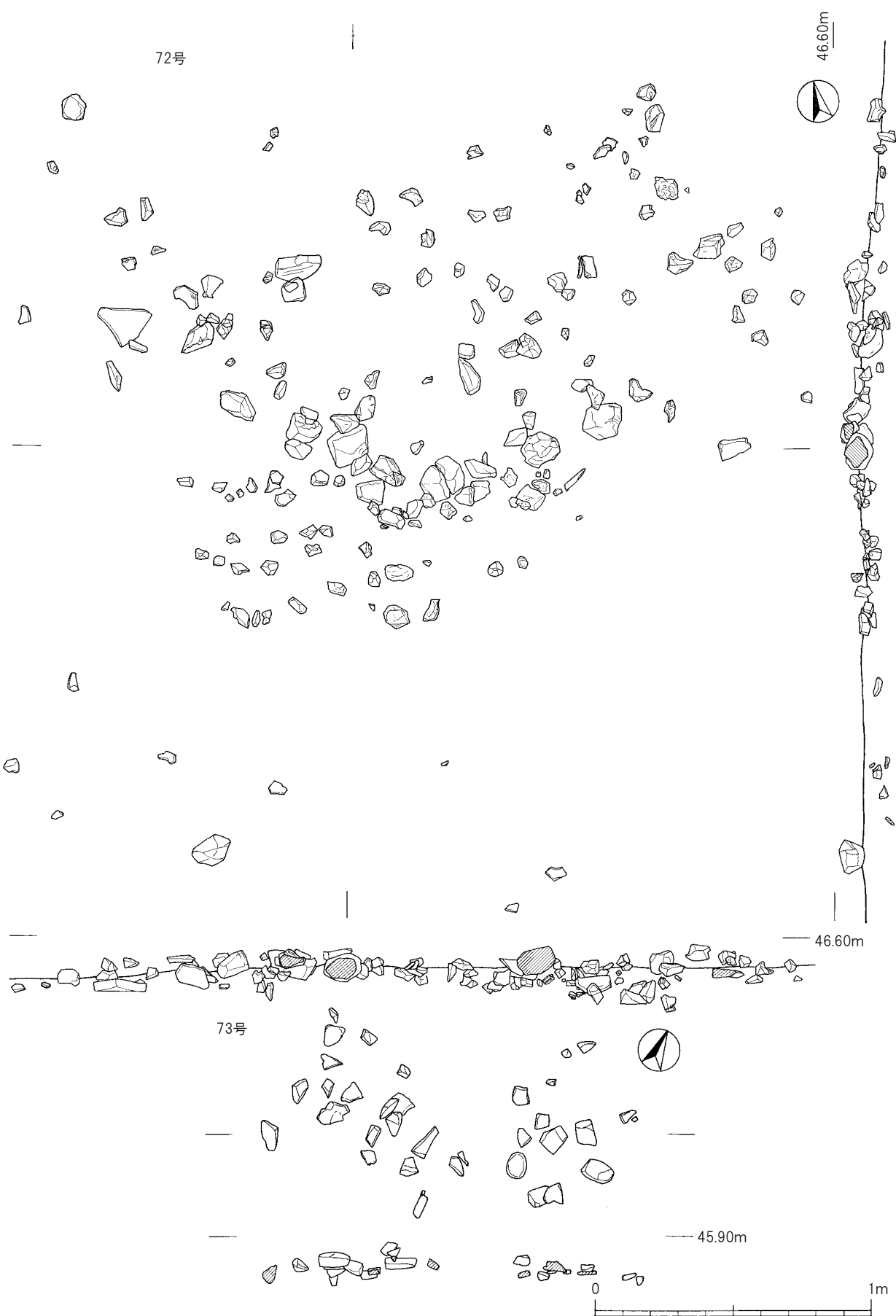
E・F-33区で検出されている。最も大規模な集石遺構であるといえる。上面観は約320cm×320cmの範囲に数cmから15cm程度の礫が密に集中している。礫の密集部分から外側の礫は二次的に拡散



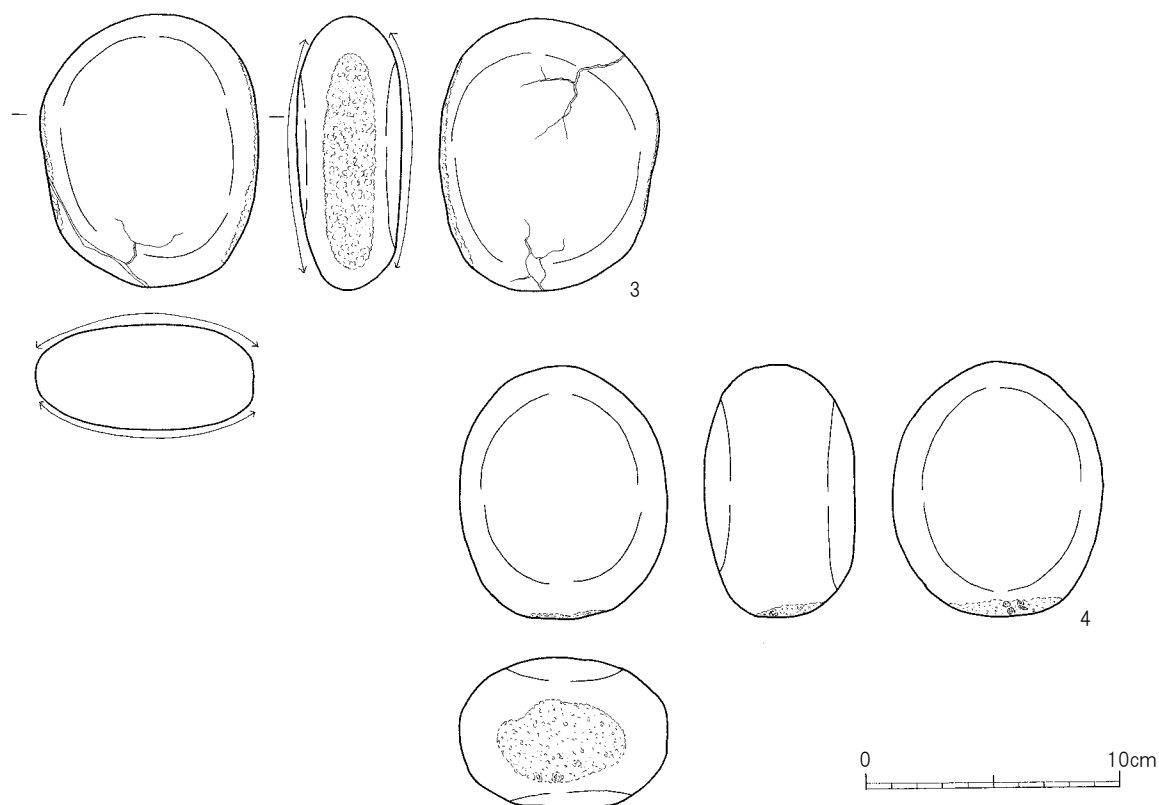
第42図 70号集石



第43図 71号集石



第44図 72, 73号集石



第45図 71号集石出土遺物

したものと考えられる。断面図より最も上に位置する礫より更に下方へ60cm前後の深さのある掘込みがあったことが考えられる。

72号集石（第44図）

F-34区で検出されている。掘込み等を伴わない。数cmから20cm程度の角礫を使用し、周辺にも拡散している。周囲には土器片も見られるが、本遺構との関係は不明である。

73号集石（第44図）

J-32区で検出されている。構成する34個の礫は角礫と円礫が混ざっており、磨石もみられる。その約半数は火熱を受けて赤化している様子が観察される。中心部分がはっきりせず、礫移動の可能性を提示している。炭化物や掘込み等は確認されていない。

第2節 遺物（土器）

第V章の冒頭で述べたように、本節では土器についてのみ報告する。

本遺跡では、縄文時代早期から晩期までのほとんどの時期の土器が出土している。これらを大別して23類に分類した。ただし、遺物の少ない時期のものは一括して一つの分類としたものもある。

なお、この分類や細分の順が絶対的な年代順ではないことを付記しておく。

出土遺物の量としては、縄文時代早期の塞ノ神式土器及び前期の曾畑式土器の量が圧倒的に多く、中期末から晩期にかけては、数点ずつの出土量であった。

1 類土器（第48図・第50図～第54図）

1 類土器は、口縁の文様を貝殻等による刺突を施す。口唇部はヘラ等で規則的な刺突を施すことから、正面観は、小波状を呈する。口縁内面の調整は横位のナデで、稜を持つ。また、調整は外面が横位の細かな条痕、内面も基本的には外面と同様の細かな条痕が主である。

2 類土器（第55図・第57図～第76図）

2 類土器は3つのタイプに分類できる。

2-a 類は、口縁の文様がヘラまたは貝殻による連続的なもので、口唇部の正面観は、やや波を打つものと水平なものがある。口唇部は水平か、やや外側へ傾斜。調整は、外面が斜位の条痕で内面が条痕、またはケズリである。

2-b 類は、口縁の文様は、横位・縦位の貝殻刺突の組み合わせ、口唇部上面に連続する浅い刻み、外面の文様は、貝殻による条痕調整の後に貝殻による縦位・斜位・曲線等の刺突や条痕。内面は、下から上へのケズリである。また、器形は薄手で、円筒、角筒、円・角混合、上面観がレモン状などがある。

2-c 類は、口縁の文様が貝殻の連続的な刺突で、その直下に刺突を施した楔形貼付文、口唇部は平坦で浅い刻みを施す。胴部は、斜位の条痕の上に縦位の刺突を施すもので、刺突が2本1組で、ある程度の間隔を持っているものもある。内面の調整は、主として縦位のケズリである。

3 類土器（第78図～第80図）

3 類土器は、外面の施文が貝殻による刺突や押引きを基本とするものである。口唇は平坦で鋸歯状や斜位の刻みを施す。口縁に刺突をV字状に密接に施文することで、楔状を意識したものもある。内面の調整は、丁寧なナデである。

4 類土器（第81図）

外面に綾杉状の条痕による調整を施し、内面の調整は丁寧なナデである。出土量は、数点と少ない。

5 類土器（第82図・第83図・第85図～第90図）

5 類土器は、口縁部が内湾し、口唇部の形態は平坦で内傾するもので、底部は平底である。口縁部から胴部に行くに従ってふくらみを持つ器形である。施文は貝殻の施文具で櫛描状に沈線文を施すものである。

6 類土器（第91図）

6 類土器は、口縁部はわずかに外湾し口唇部は丸味を持つ。器壁は厚く、口縁部下部に縦位の貝殻刺突文、口唇には浅い刻みを施す。内外面の調整にヘラミガキが施される部分がある。

7類土器（第92図・第93図）

7類土器は、2つのタイプに分類できる。

7-a類は口縁部がやや外反し、口唇部は丸く収め、最大径は胴部にある。器壁は厚く外面には条線状の条痕を施し、内面はナデ調整を基本とする。

7-b類は、胴部から口縁部にかけて直線状に開き、口縁部付近は横位の粗い条痕、それ以下は縦位と横位の組み合わせである。内面は基本的にはナデ調整である。

8類土器（第94図・第96図～第99図）

8類土器は、口唇部にやや丸味を帯びた平坦面を有し、口縁部が外反する。胴部は膨らんで平底の底部となると思われるものである。外面に押型を施すもので、楕円、山形、微細な条線状のものなどがある。

9類土器（第100図～第102図）

9類土器は、口縁部が大きく外反し、頸部でくびれて胴部中央部で張り出して屈曲しながら底部へと至るものである。外面及び口縁部内面には、山形押型文や曲線状の押型文が施されるものである。

10類土器（第104図・第105図）

10類土器は、その出土量は数点と少なく、本遺跡における10類の全容は明らかでない。特徴としては、結節縄文を有する一群である。

11類土器（第108図～第112図・第114図～第131図）

11類土器は、3つのタイプに分類できる。

11-a類は、円筒形の胴部にラップ状に開いた口縁部を有するもので、口縁部に幾何学文や刺突文を施し、胴部に主として撚糸文系の縄文を施すものである。11-b類は、円筒よりやや張る胴部にラップ状に開いた胴部を有するもので、口縁部に貝殻による連続的な刺突を施し、胴部には貝殻や櫛状の施文具により横位を基本とする条線を施すものである。11-cは当該期の無文土器である。

12類土器（第132図）

12類土器は、小片が数多く出土し接合を行ったところ、完形となったもので、1個体のみである。器形は、胴部が張り、緩くしまった頸部に長めの外反し波状となる口縁部を有するものである。

文様は貝殻または櫛状の工具による条線を格子状に施し、横位の押引状の刺突を口縁部・頸部・胴部に施すものである。

13類土器（第134図～第138図）

13類土器は、最大径が口縁部にあり緩やかに直線状または緩やかな曲線状に底部へと至るものと考えられる。口唇部には刻みを有し、板状のヘラ状工具を用いて横位・縦位・斜位の調整をおこなっている。内面はナデ調整を基本とする。

14類土器（第139図）

14類土器は縄文時代早期の土器の底部で帰属時期の不確かなものである。

15類土器（第140図・第142図）

15類土器は、13類に似た器形を呈するもので、最大径が口縁部にあり、ゆるやかに内湾しながら口縁部へ至るものと考えられる。調整は、貝殻あるいは板状のヘラ状工具により横位・斜位・縦位

に調整を施すものである。またこの土器群の特徴は内外面の調整が同じであることであり、口縁部内外面に曲線文を施すものが多い。

16類土器（第144図～第146図）

16類土器は、最大径が口縁部にあり、緩やかに内湾しながら丸底の底部を呈するものである。垂下状の隆帯を口縁部に部分的に施し、数条のミミズバレ状の突帯を胴部まで施すものと、口縁部に数条の密なミミズバレ状の突帯を施すものがある。いずれも、地文は条痕である。

17類土器（第148図～第176図）

17類土器は、丸底の底部からやや内湾気味に立ち上がり頸部がわずかにしまり、口縁部で外反する器形が基本で、器面全体に文様を施すものである。

17類は、便宜上3つのタイプに分類した。

17-a類は、第一文様帯に棒状の工具による連続刺突を数条施し、その下部に第二文様帯として横位の短沈線を数条施すものとした。

17-b類は、口縁の第一文様帯に刺突連点文がなく、横位の沈線文や短沈線文から始まるもので、胴部には羽状文・四角組合文等が施されるものとした。

17-c類は、粗い細沈線文を施すものやその他のもの、底部等を一括して扱った。

18類土器（第178図・第179図・第181図～第195図）

18類土器は便宜上3つのタイプに分類した。

18-a類は、底部からバケツ状に立ち上がる器形で、口縁部が若干内湾・外反するものがある。文様は、肋の大きな貝殻を用いて刺突するため連点状の文様となる。基本的に口縁は横位の連点文が多い、それ以下は、横位や縦位の連点文が施されるものである。

18-b類は、口縁部はやや内湾し頸部で締まる、口縁部の形状は波状と平坦の2種類があるが。本遺跡では、波状が多い傾向にあるようである。文様は突帯文を主とし、それに相交弧文を施すもので、内面にも相交弧文を施すものも多い。

18-c類は該期、あるいはそれに近い時期と思われる無文及び条痕文土器とミミズバレ状の不安定な突帯に粗い刻みを施すもので、胴部は斜位の条痕を、内面は横位の条痕を施すものを一括して取り扱った。

19類土器（第196図・第197図）

19類土器は、4脚あるいは5脚の脚部を有する土器で外面に縄文を施すものである。

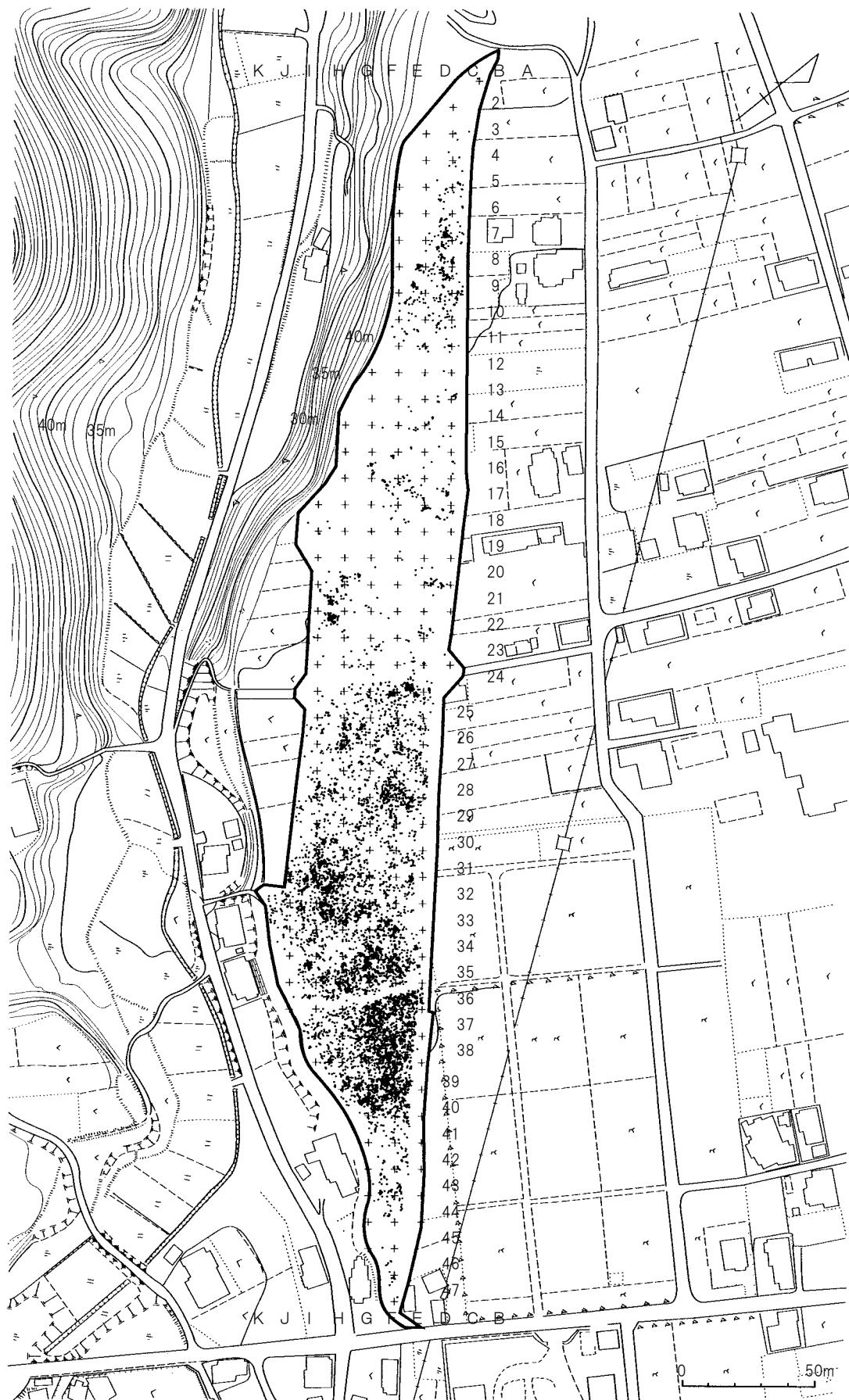
20類土器（第198図・第201図・第202図）

20類土器は2つのタイプに分類した。

20-a類は、基本的にキャリパー状の口縁を有し、波状口縁でその波状の横に鋭い瘤状の突起を有するものもある。文様は突帯により構成され、突帯の片方の裾部及び円形浮文の外側の裾部に連続的な刺突を施すもので、口縁部内面には縄文を施す。

20-b類は大型の器形で地文に粗い縄文を施し、縦位及び逆U字状の突帯に左右より刻みを施す。また、口縁には幅広の粘土を貼り付け、突帯の上に小さ目の2枚貝の背面による押圧文を施している。

21類土器（第203図）



第46図 縄文時代全土器出土状況

21類土器は、縄文時代中期後半の土器類で、数点の出土であったため、一括して扱った。

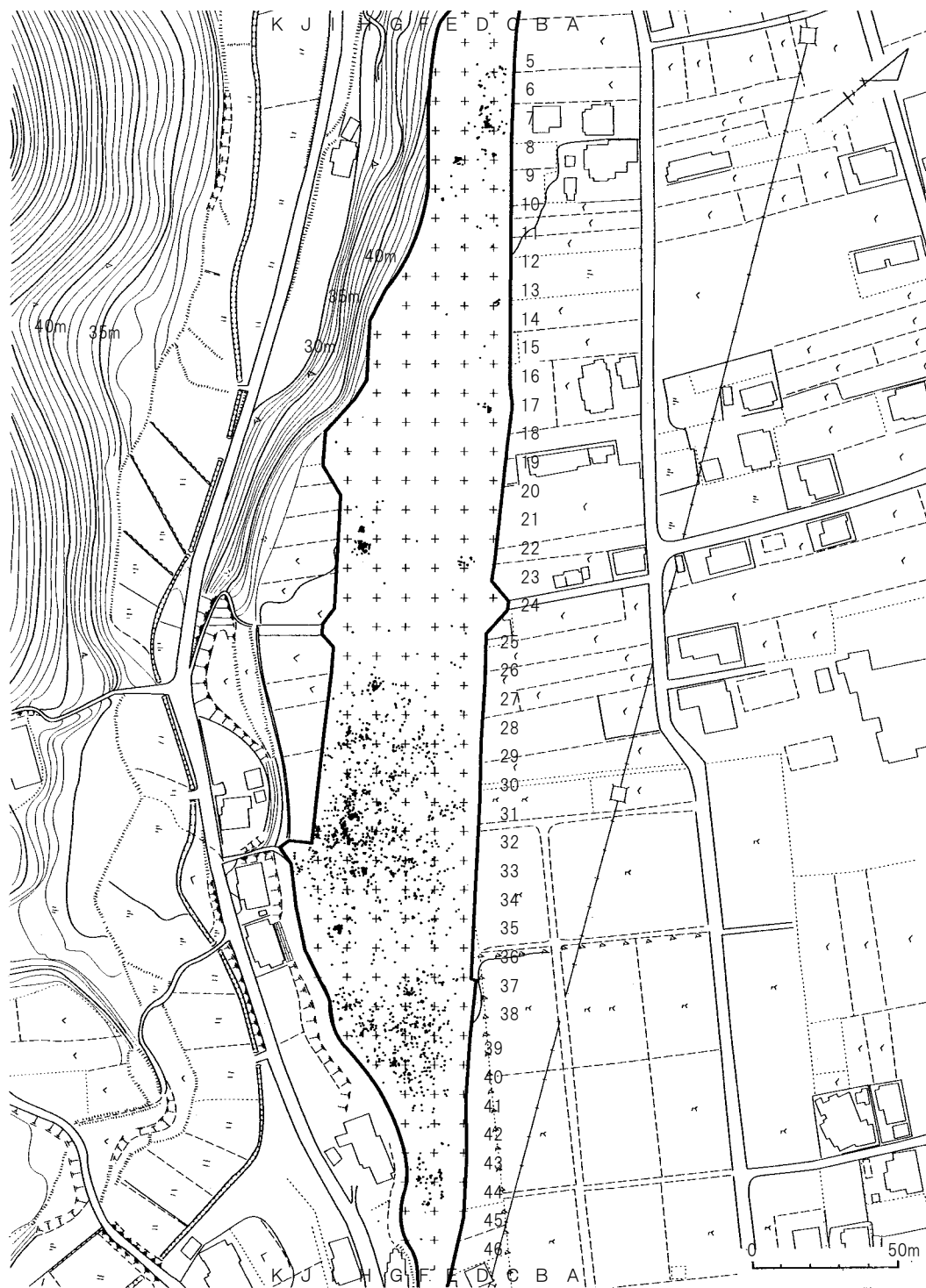
22類土器（第204図・第205図）

22類土器は、縄文時代後期の土器類で、数点の出土であったため、一括して扱った。

23類土器（第206図・第208図～第212図）

23類土器は、縄文時代晩期の土器で、21類・22類土器同様に少量であり一括して取り扱った。

・縄文時代早期（下図は縄文時代早期の全土器出土状況である。）



第47図 縄文時代早期土器出土状況

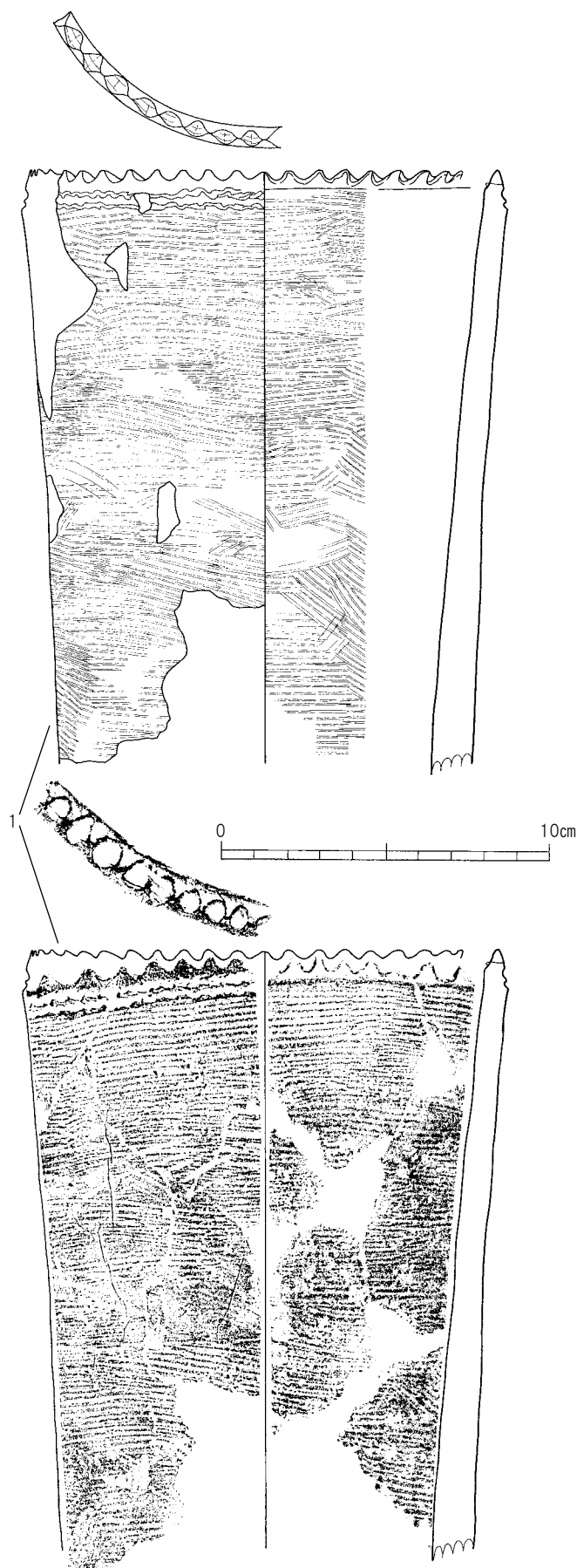
1 類土器 (第48図・第50図～第54図)

1 類は基本的に、バケツ状に直線的に開く器形を呈する。1・2は、口唇部は尖り、内面に段を有する。口唇部は、工具による押圧により、正面観は小波状である。口縁部に横位の貝殻による刺突を施す。内外面の調整は、貝殻あるいはヘラ状工具による丁寧な横位の調整である。

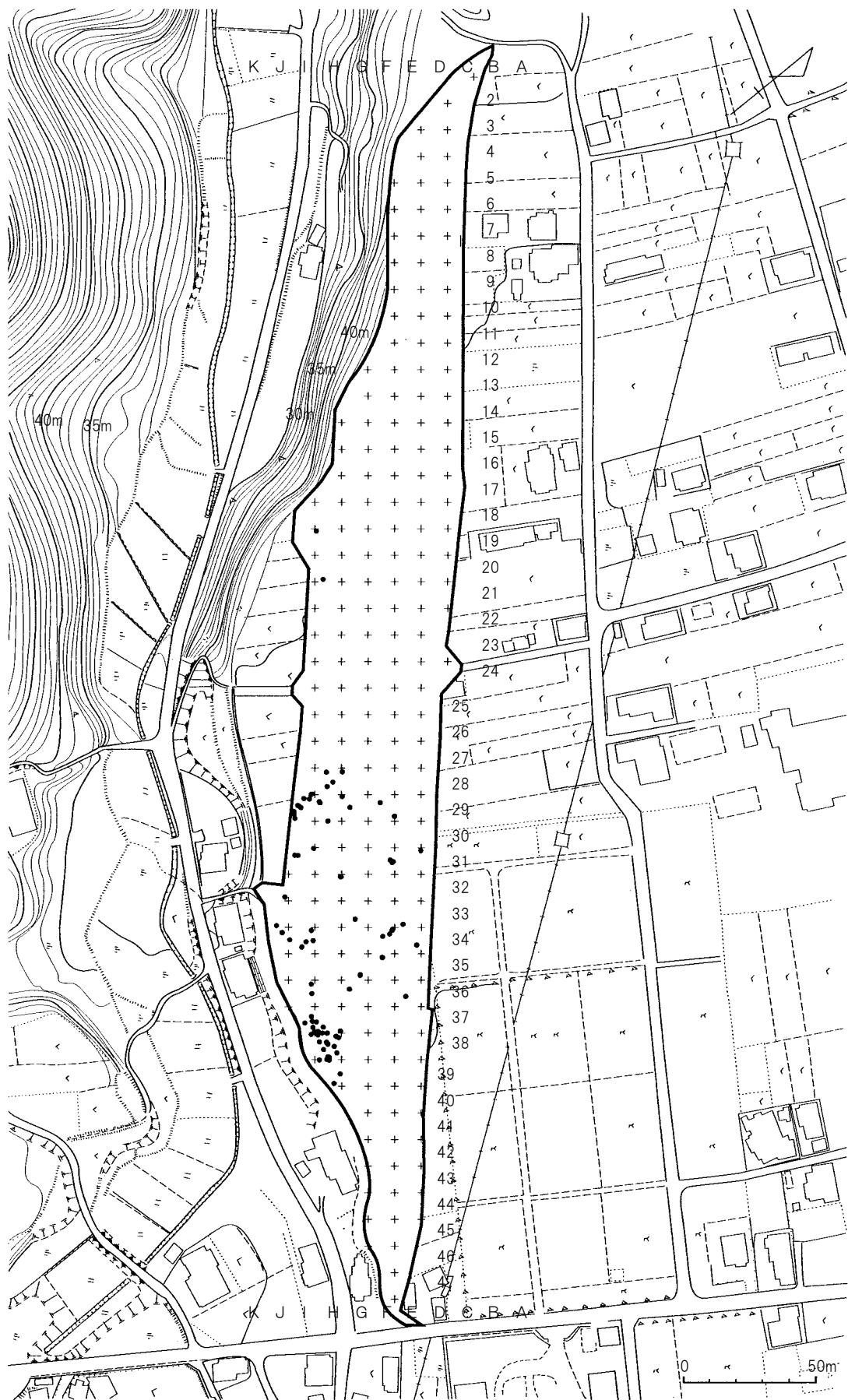
3は、1・2とほぼ同様であるが、内外面の調整が粗い。4～8・11は口縁下の刺突が1条であり、調整が粗い。9は造りが粗く、口縁部の刺突も乱雑であり、内外の調整も粗いナデ調整である。10・12は斜位の刺突文を施すもので、一見2条の刺突文に見える。内外面の調整はていねいである。

13は、10・12と文様については同様であるが、内面の調整が丁寧なナデである。14は、口唇部に明らかに貝殻の押圧が観察されるがその手法は粗く、正面観の小波状も高低差がある。

15は、口縁部の粘土をやや突帯状に厚くし、そこに斜位の貝殻による刺突を施している。口唇部の連続文も貝殻によるものである。口縁部や口唇部の造りの丁寧さに比べ、器面の調整は粗く、粗い条痕の後に粗なナデ調整を行っている。16の口縁部は、貝殻の背面を斜位に連続して押圧している。17は、貝殻の斜位の連続的な刺突、内外面の調整はやや粗い。18は、やや大きな貝殻を右下から押し上げるように連続刺突を施している。口唇の連続文も貝殻の背面を押圧したものである。内面の調整は、粗い条痕である。



第48図 縄文時代1類土器(1)



第49図 縄文時代1類土器出土状況

19・20も他の土器と同様に斜位に貝殻の連続刺突文を施している。ただし、19は口唇部の連続押圧文は真上からの押圧ではなく、口縁部外面側からのものである。

21の口縁部の刺突は粗く、口唇部の押圧も粗い。そのため口唇内面側へ粘土がはみ出している。22の口唇部も同様の状況である。

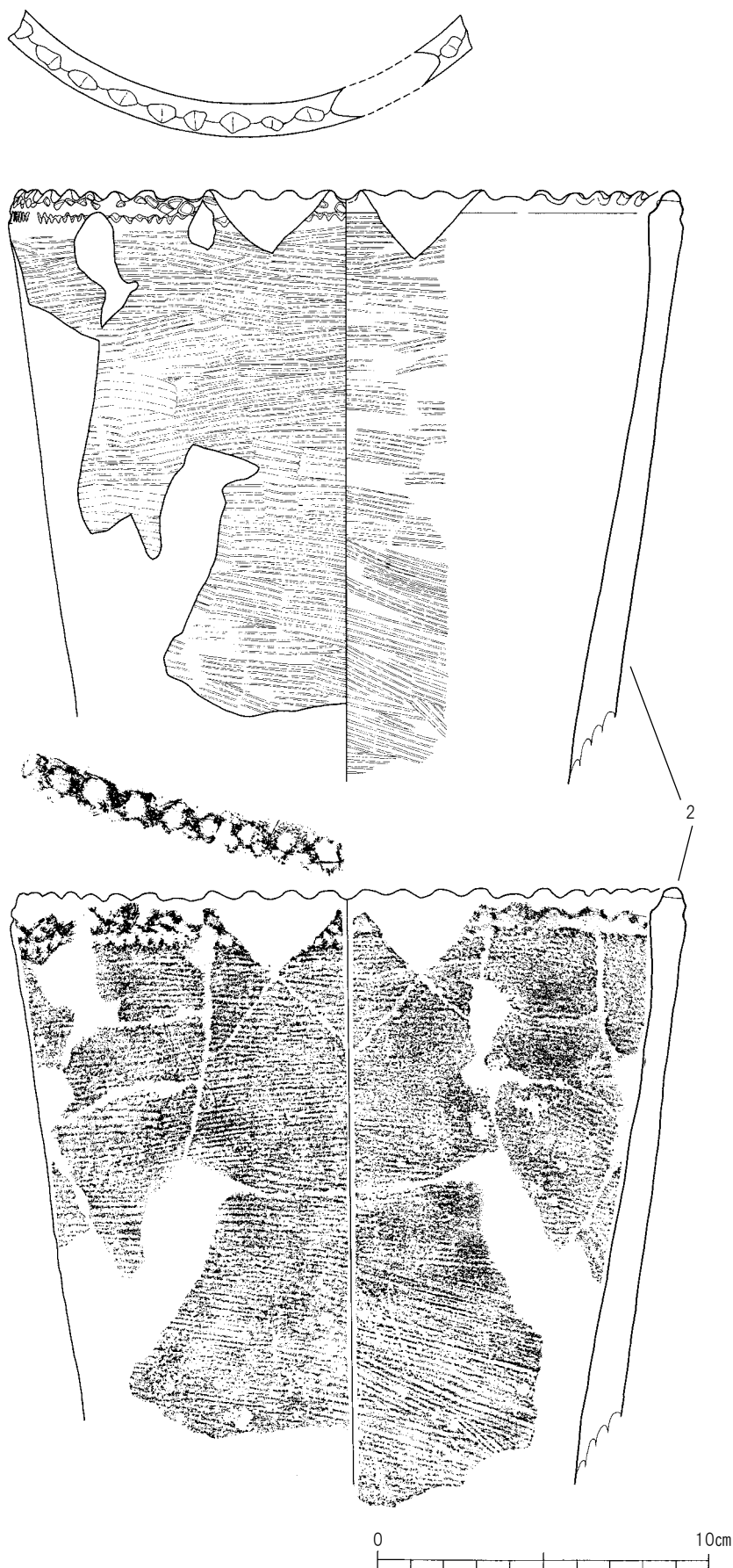
23の口縁部の連続刺突は丁寧に規則正しく施されている。口唇部の押圧は口縁部側からである。

24～32は、口縁部の貝殻による連続刺突文が右上から左下へかけてであり、口唇部の連続押圧文が口縁部外面からで左上から右下へであることから、口縁部と口唇部の施文が一体化して「く」の字状に見えるものである。

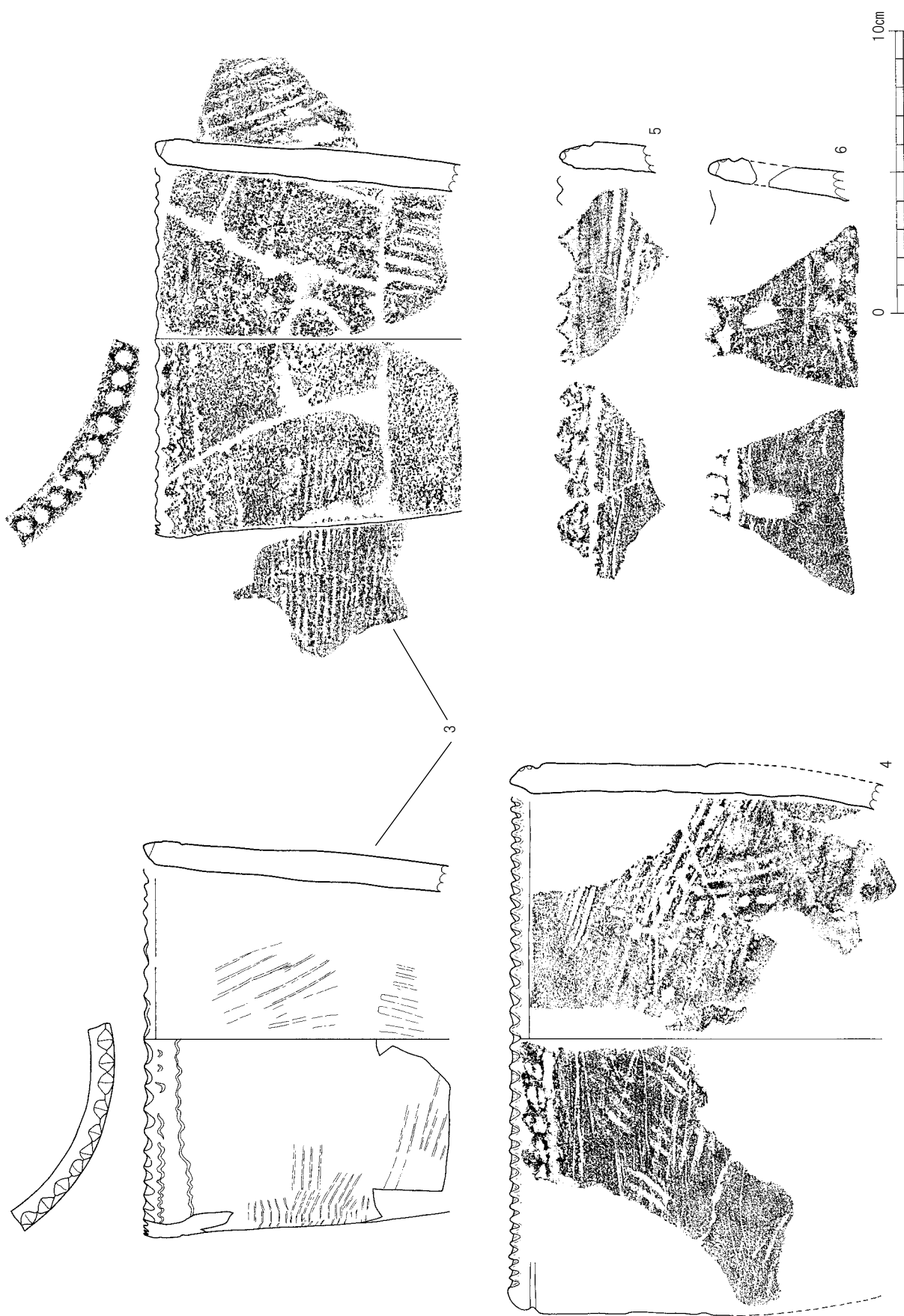
33～40は、1類の胴部である。

基本的には、内外面とも肋の細かい貝殻や板状のヘラ状工具による横位の調整である。

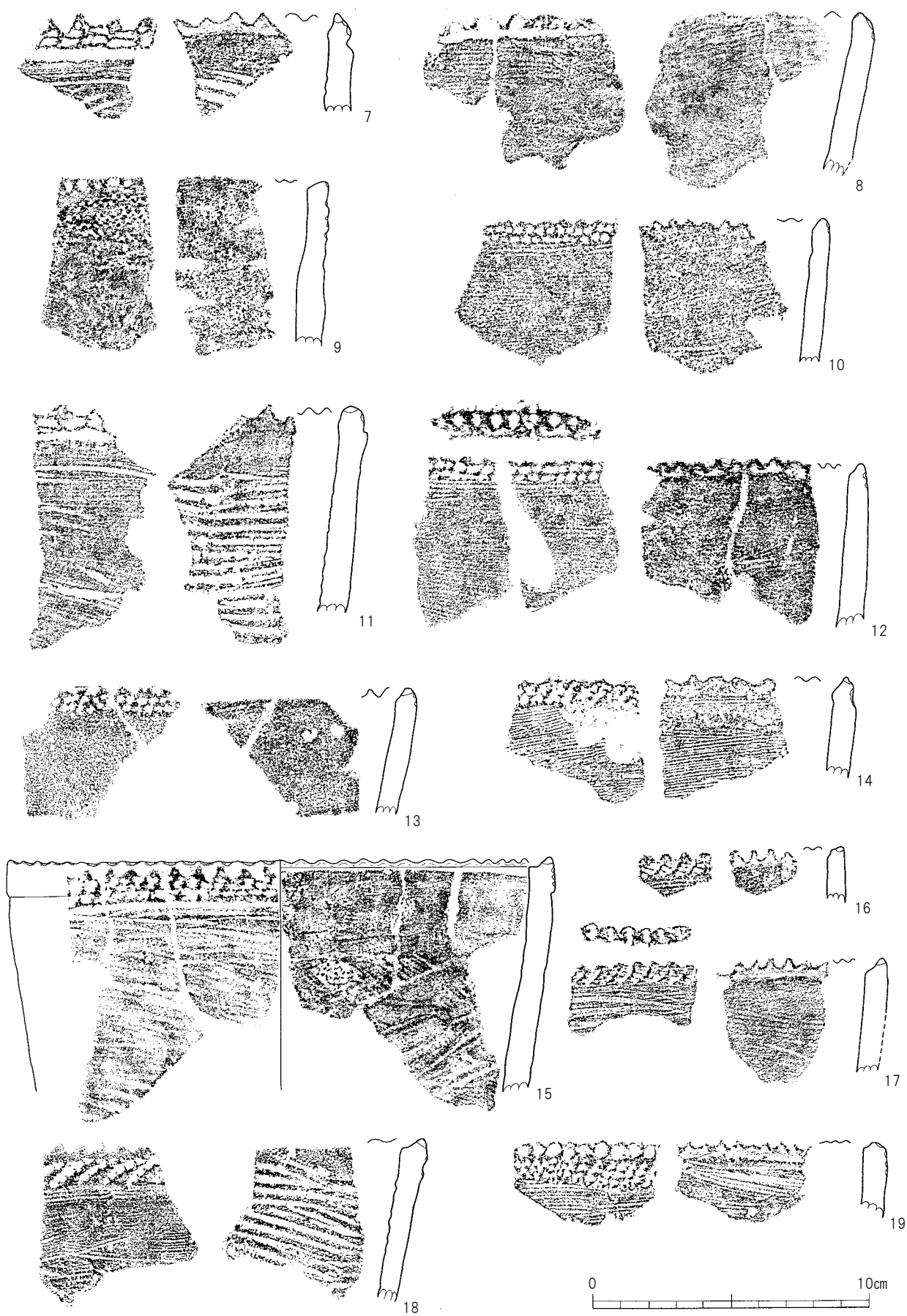
39・41は、基本的な調整の上からナデ調整を行っている。40は、粗い斜位の調整を行っている。



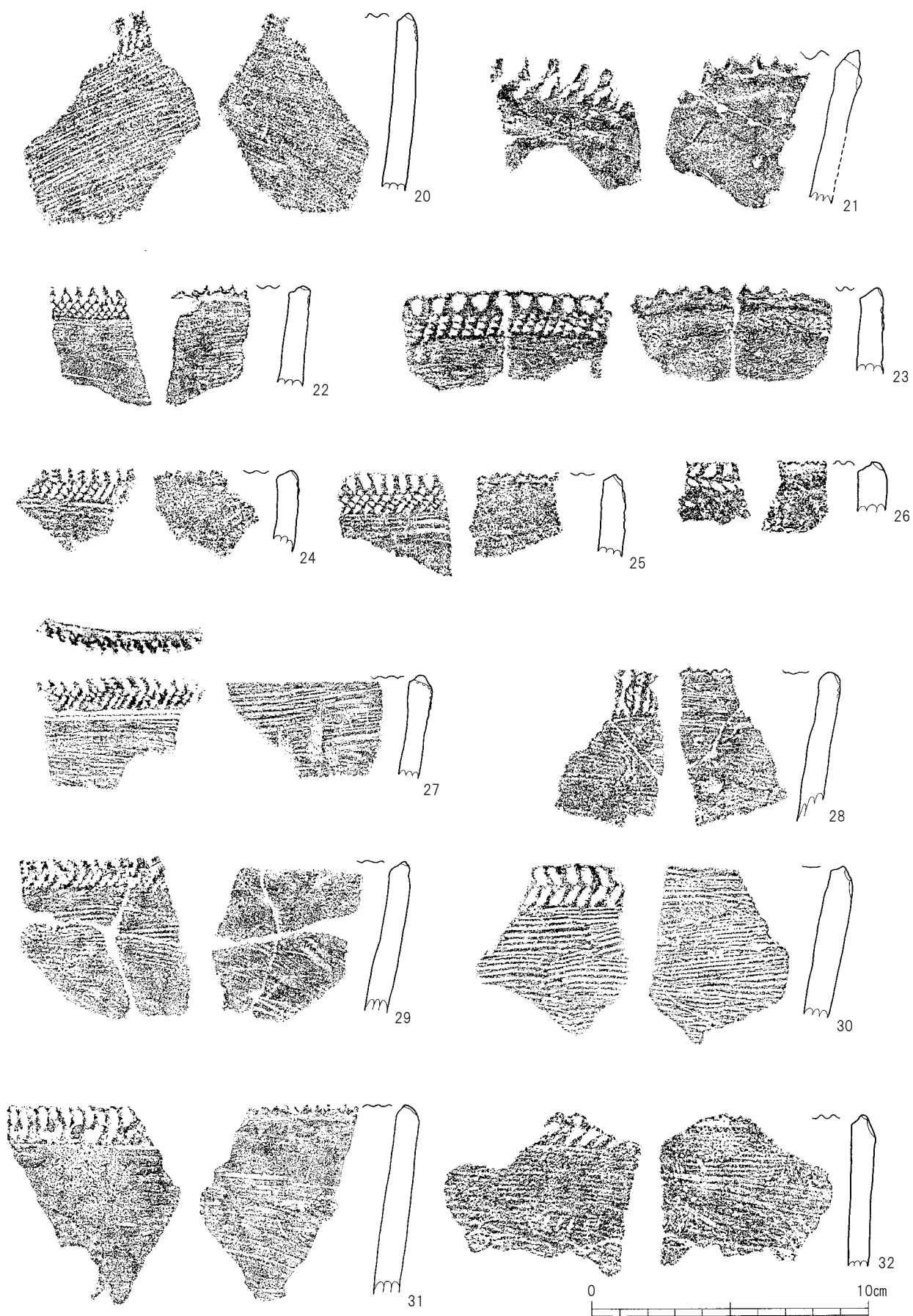
第50図 縄文時代1類土器(2)



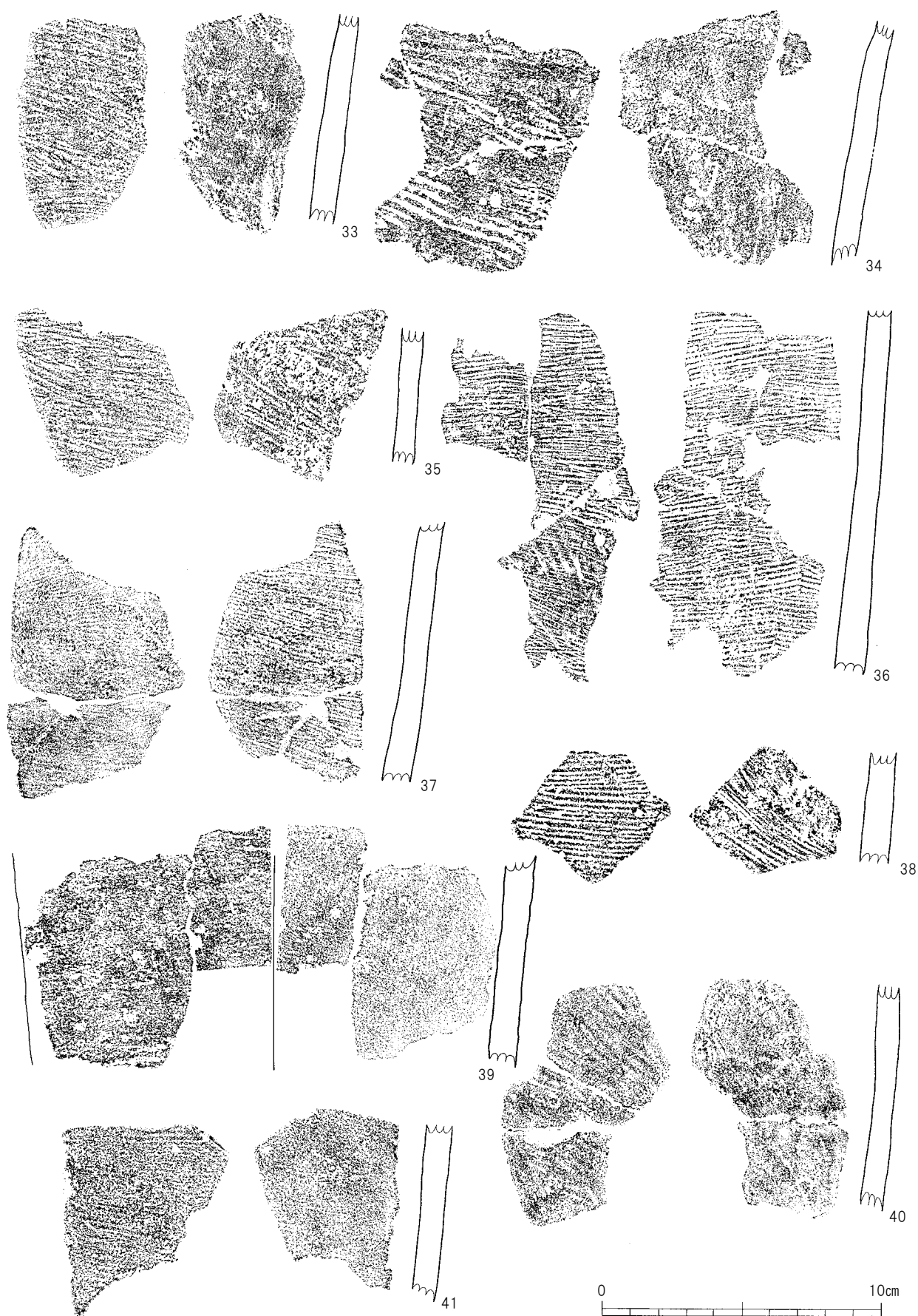
第51図 縄文時代1類土器(3)



第52図 縄文時代1類土器(4)



第53図 縄文時代1類土器(5)



第54図 縄文時代1類土器(6)

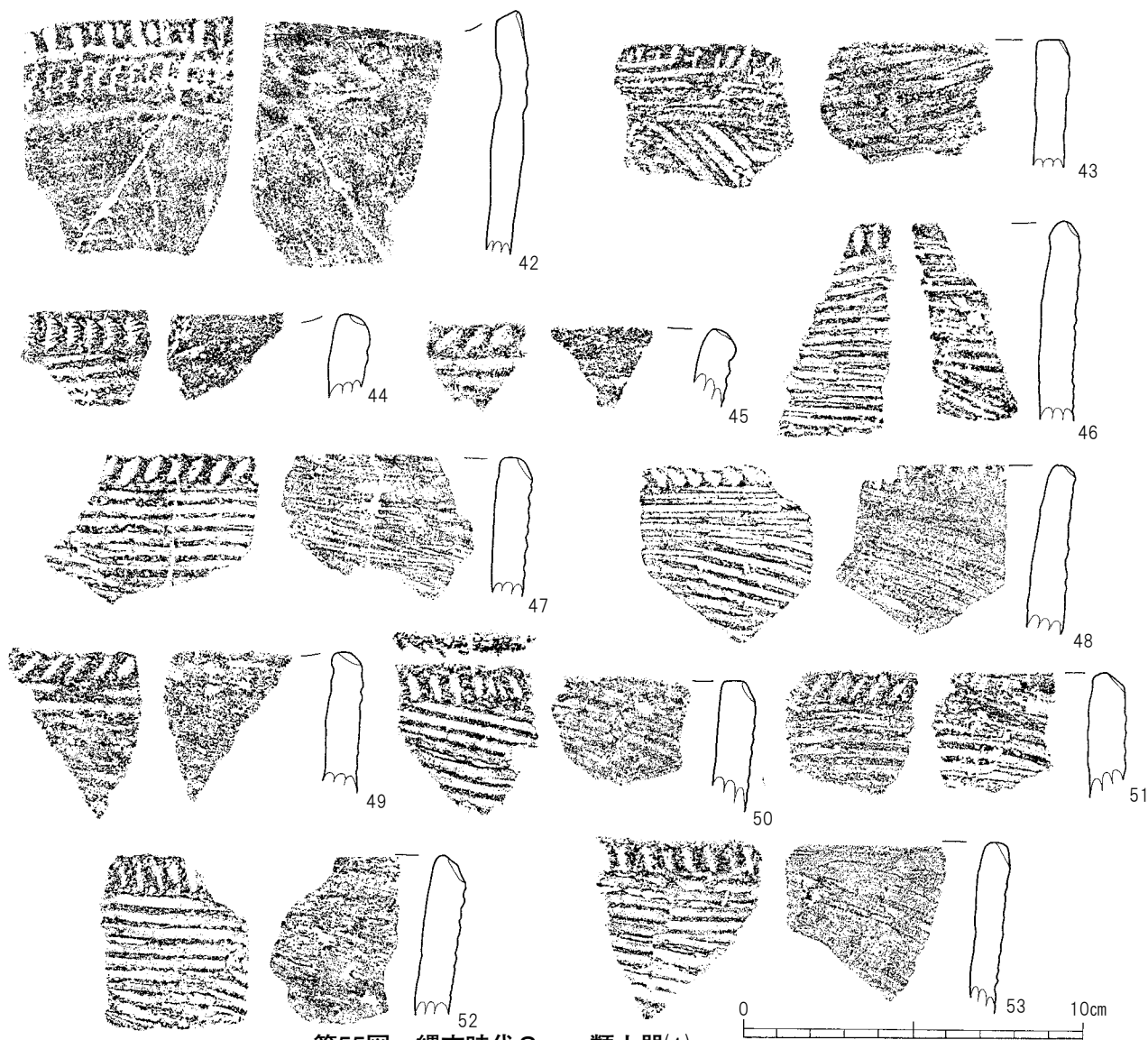
2-a 類土器 (第55・57図～第59図)

2-a 類は、口縁の文様がヘラまたは貝殻による連続的な刺突文で、口唇部の正面観は、やや波を打つものと水平なものがある。口唇部は水平かやや外側へ傾斜。調整は、外面が条痕で内面は条痕またはケズリである。口縁部が42～73, その胴部が74～84である。

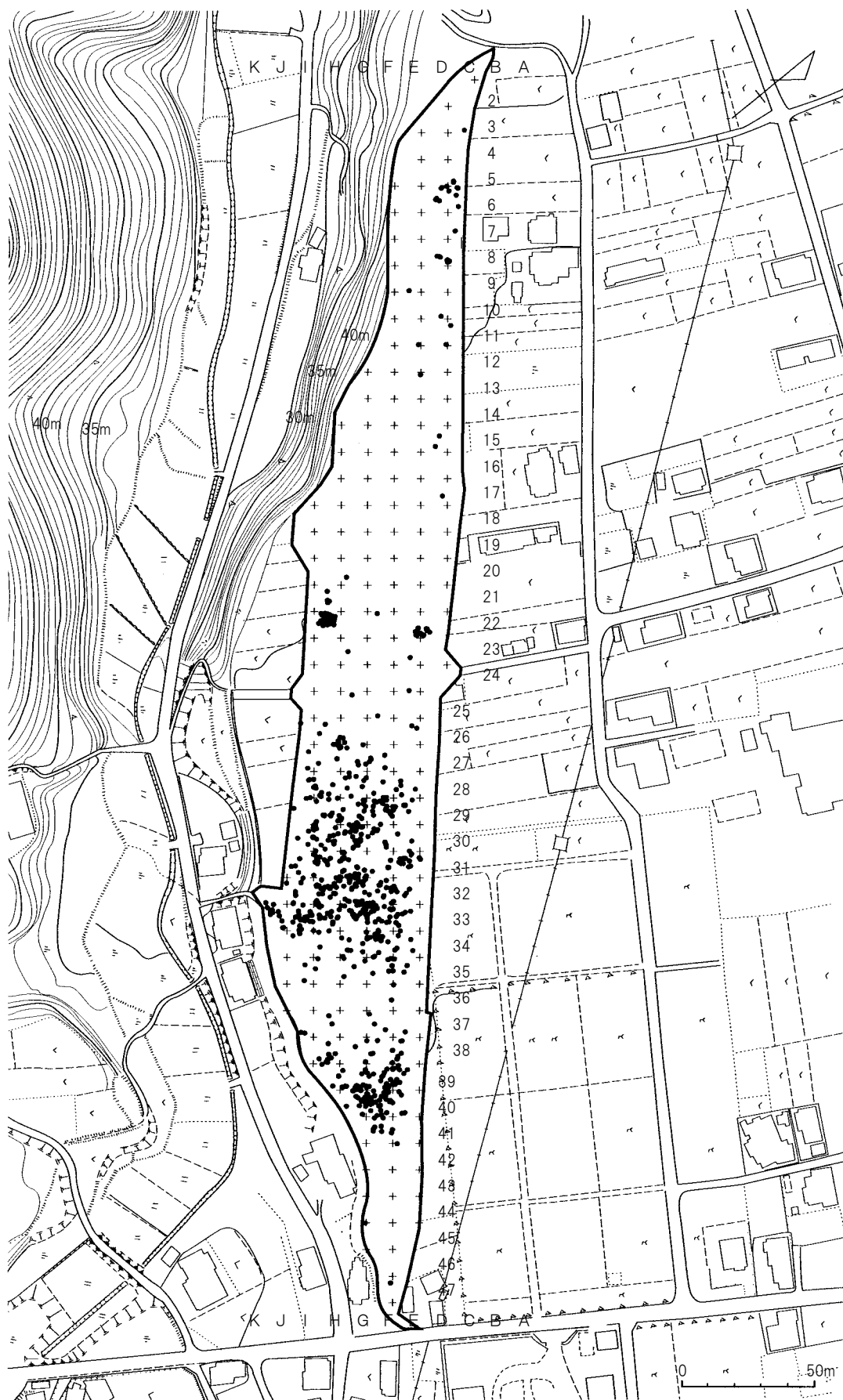
42は、口唇部がやや内傾するが内面に稜を有しないもので、1 類との中間的な存在である。43はランダムな刻みを口縁に施すものである。

その他は、口縁部の連続的な刺突の方向によって分類できる。口縁に対して斜位の方に刻みを施すものが多く、45～53, 56～63, 65～68・70～72までである。次に多いものが、口縁に対して平行な刻みをもつもので、44, 54・55, 64, 69などである。

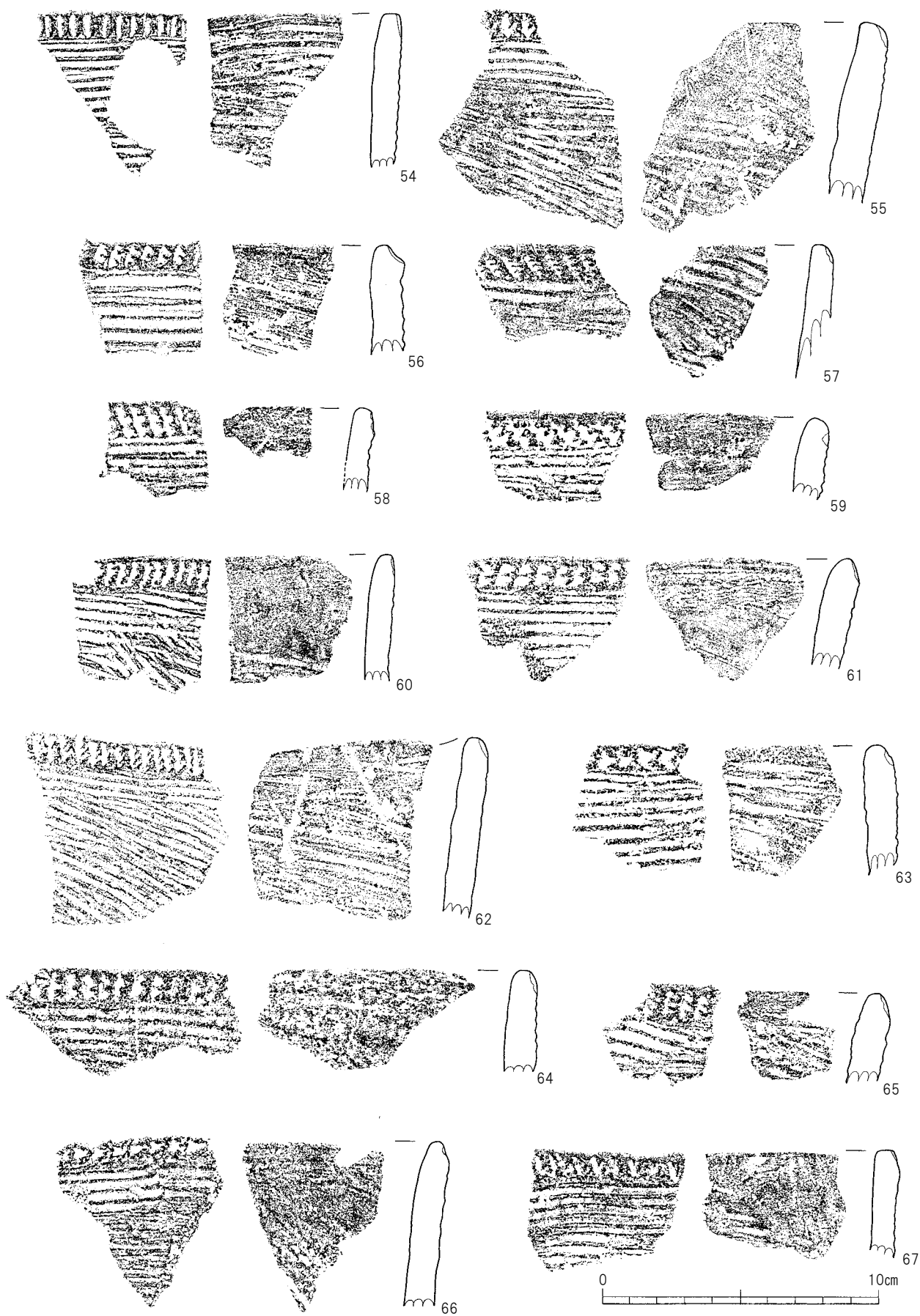
口縁に対して逆「く」の字の刺突を施すものが73で口縁部はやや内傾し、正面観は小波状である。外面の調整は、口縁部が横位の条痕であり、胴部が基本的に斜位の条痕となるが、65, 71のように斜位のみ調整のものもある。内面の調整は、46～48, 50・51, 54～57, 62・63・79のような条痕による調整のもの、60・70のようなナデ調整のもの、その他ケズリによるものがある。



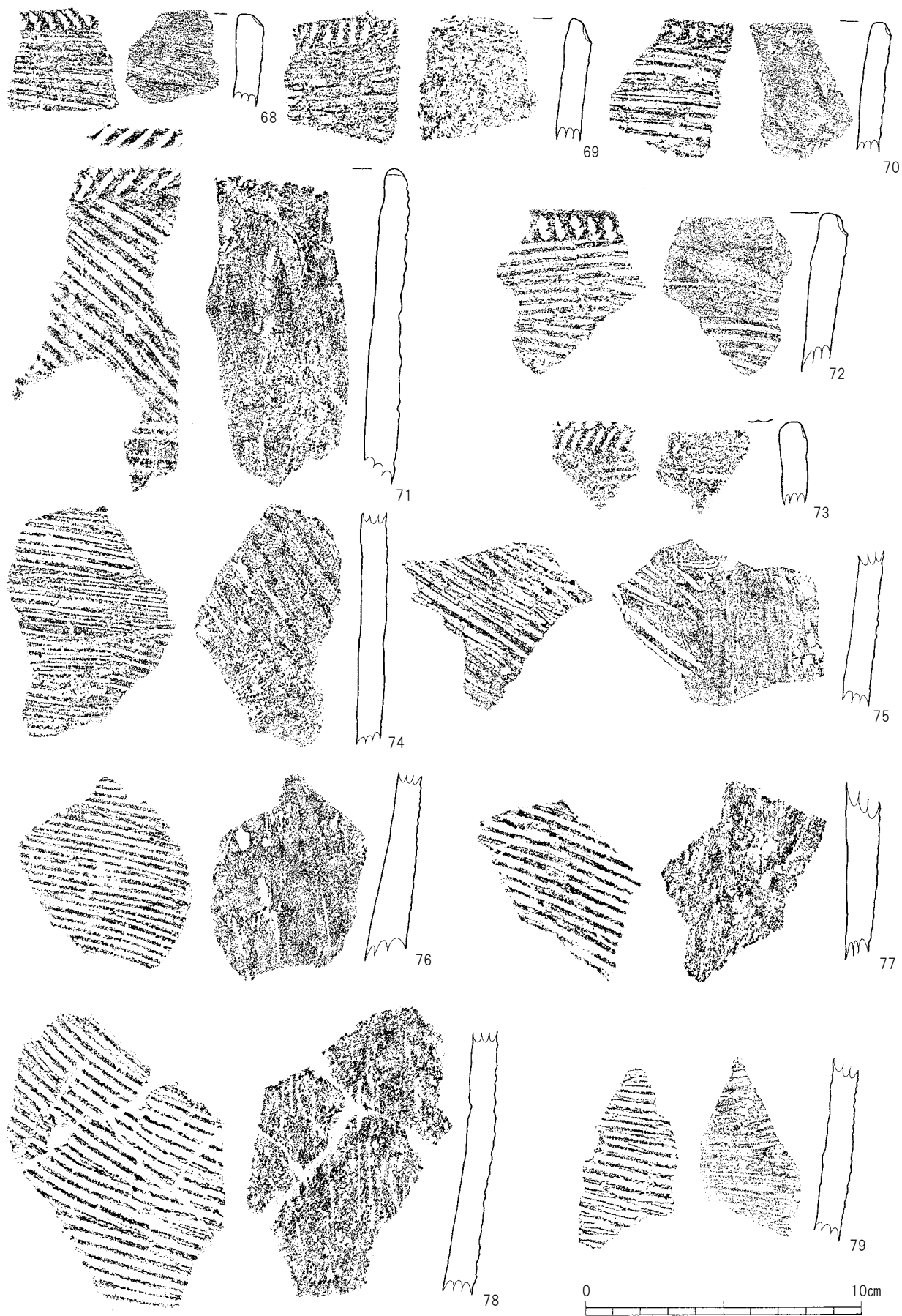
第55図 縄文時代2-a類土器(1)



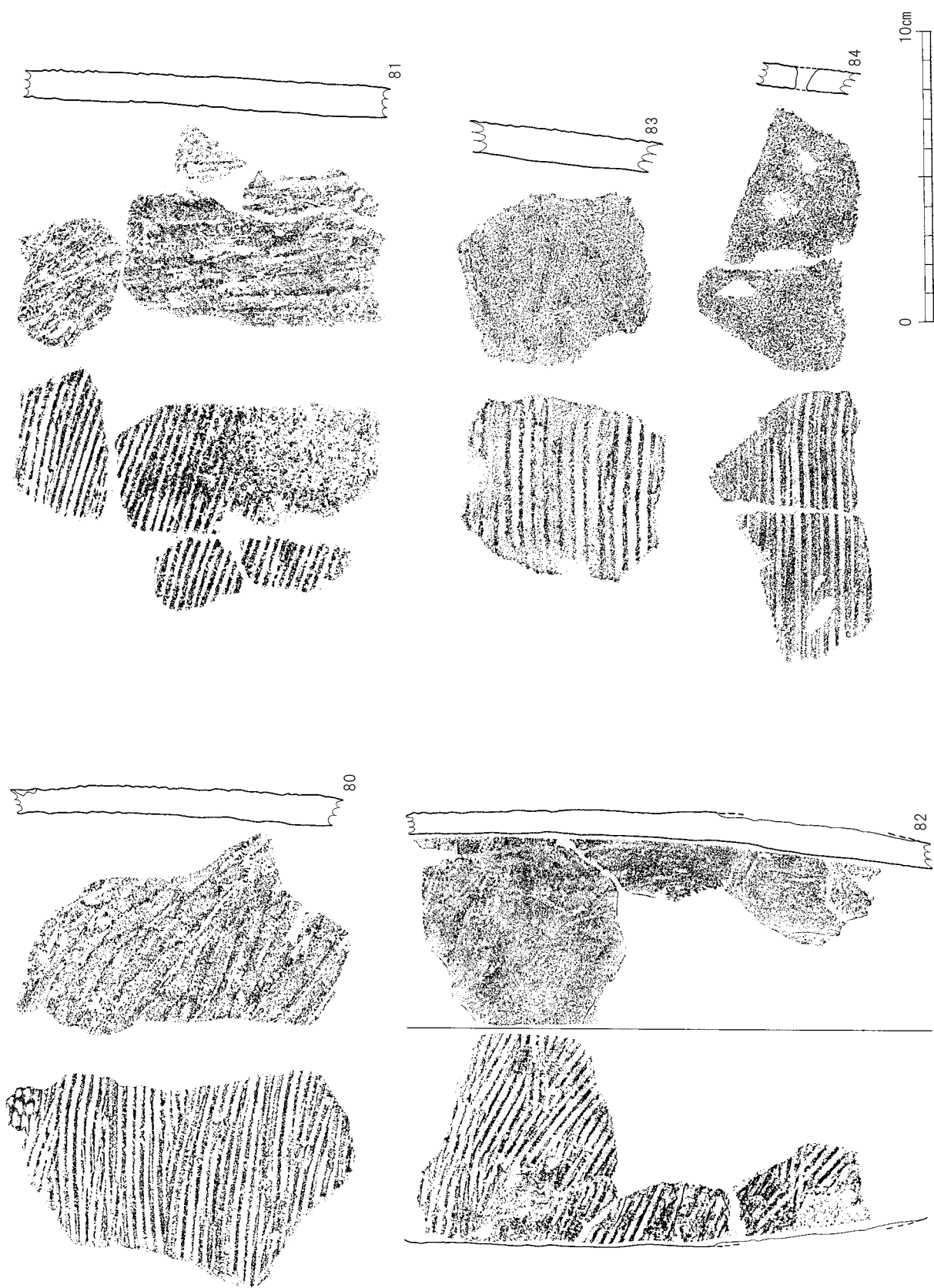
第56図 縄文時代2類土器出土状況



第57図 縄文時代2-a類土器(2)



第58図 縄文時代2-a類土器(3)



第59図 縄文時代2-a類土器(4)

2-b 類土器（第60図～第68図）

2-b 類土器は、口縁の文様は、横位・縦位の貝殻刺突の組み合わせ、口唇部上面に連続する浅い刻み、外面の文様は、貝殻による条痕調整の後に貝殻による縦位・斜位・曲線等の刺突や条痕。内面は、下から上へのケズリである。また、器形は薄手で、円筒、角筒、円・角混合、上面観がレモン状などがある。

85は、口縁部が内湾する器形で薄手である。破片であるため判然としないが、底部は円筒で口縁部にいくにしたがって角筒状を呈するものと思われる。口縁部に肋7条ほどの貝殻押圧の下に肋3条ほどの連続刺突を施す。胴部は横位の条痕であり、内面の調整は斜位のケズリである。86は、口縁部に肋6条ほどの連続刺突文を施し、胴部は横位の条痕の上に斜位の貝殻刺突条線を施すもので、内面の調整はケズリである。87は、口縁部に斜位の刺突文、胴部に斜位の条痕を施す。口縁部の文様帯の右側が広いことから、波状の可能性もある。

88～90は、口縁部に縦位の貝殻による貝殻押圧を施しその下には横位の条痕を施す。この条痕の上から刺突や縦位の短沈線を施すものである。91～93は口縁部の連続刺突の下部に横位の刺突文が観察される。94は肋が5条程度の縦位の貝殻による連続刺突文の下に肋が3条程度の連続刺突文が観察されるものである。

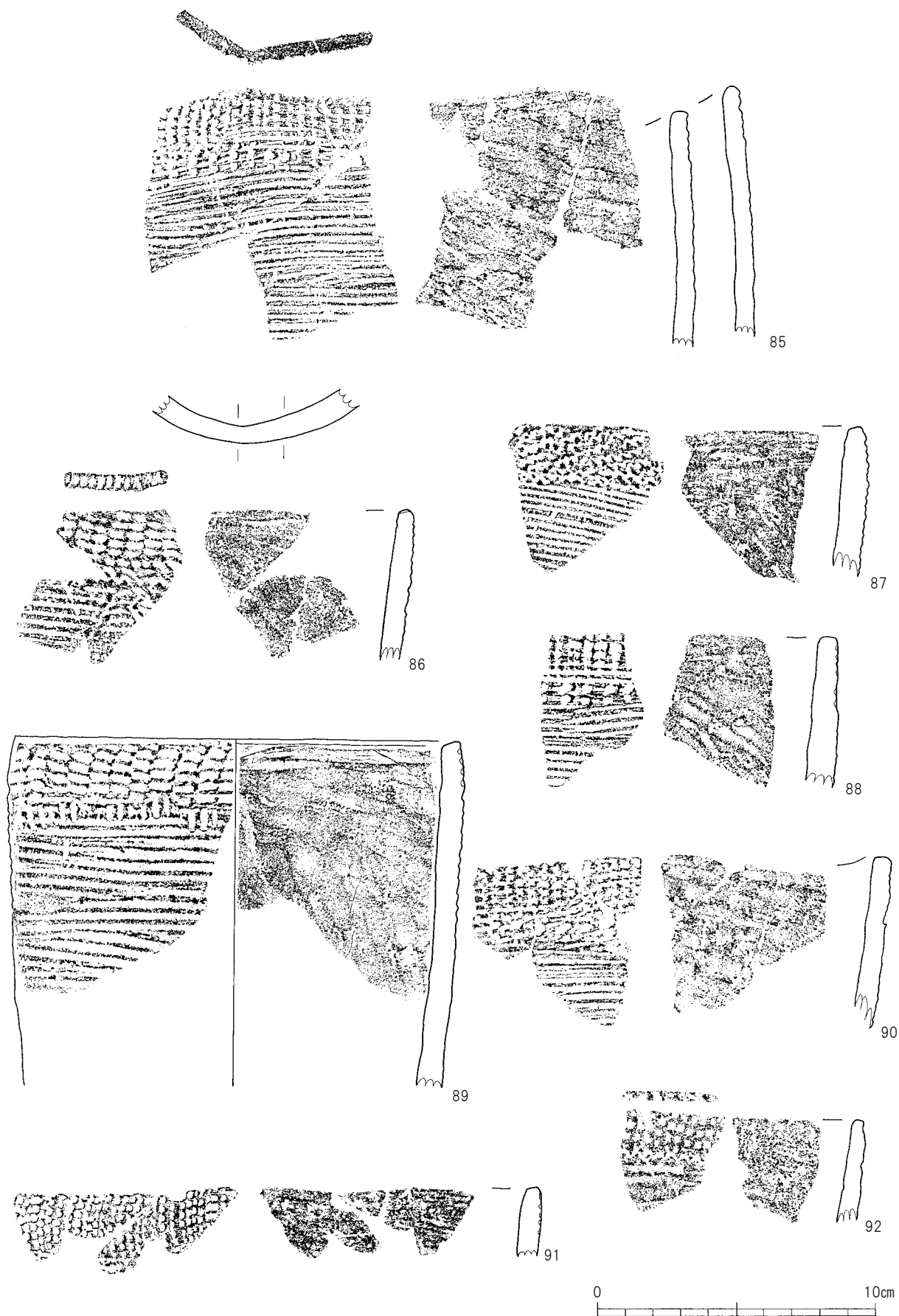
95は、口縁部に荒い斜位の貝殻による押圧文を施し、数cmのやや弧状の条痕を施す。内面は胴部から口縁部にかけて胎土の移動が観察できるほどのケズリである。96は風化が激しいが施文などは95に近いものと思われる。97は、内湾する波状口縁の頂頭部付近である。口縁部は、縦位の貝殻による刺突の下部に1条の横位の刺突を施すもので角筒形の器形を呈するものである。98は、円筒形の器形に波状口縁を呈するもので、口縁部に横位の貝殻による刺突を施し、角部には斜位気味の条痕の上から縦位の短沈線を施すものである。99は、口縁部は波状の角筒状となるとと思われる。口縁部には横位の刺突を施し、胴部の調整は左側の面が左上から右下へ、右側の面はその逆の条痕を施すものである。100は口縁部に横位の貝殻押圧文を施し、胴部に条痕による粗い調整を施すものである。

101・102は、角筒形の器形をし、口縁部には横位の貝殻による数条の刺突を施し、胴部は横位の条痕の上に沈線によるV字状の文様を施すものである。103は、口縁部上面観がレモン状を呈する可能性のあるものである。口縁部には肋6条程度の縦位の貝殻押圧文を施し、胴部は横位の条痕の上から2本を単位とする斜位の沈線文と縦位の貝殻刺突による連続文を施すものである。内面の調整は、胴部が斜位、口縁部が横位である。

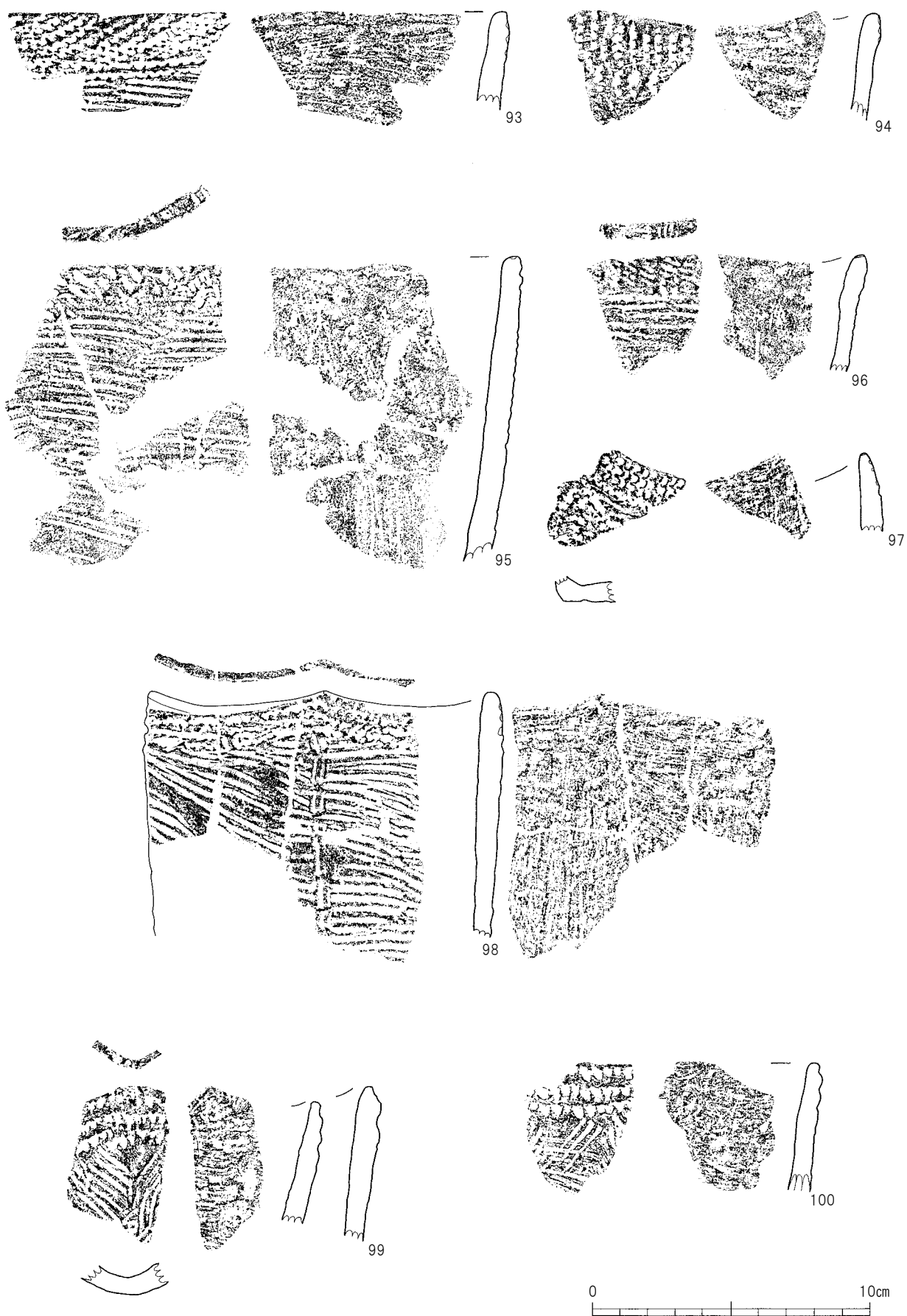
104・105の外面の施文は、基本的には103と同様であるが、角部に縦位の流水文を施すところが異なる点である。内面の調整はいずれも下から上へのケズリである。

106～114は角筒形の器形をし、流水文を施す一群である。

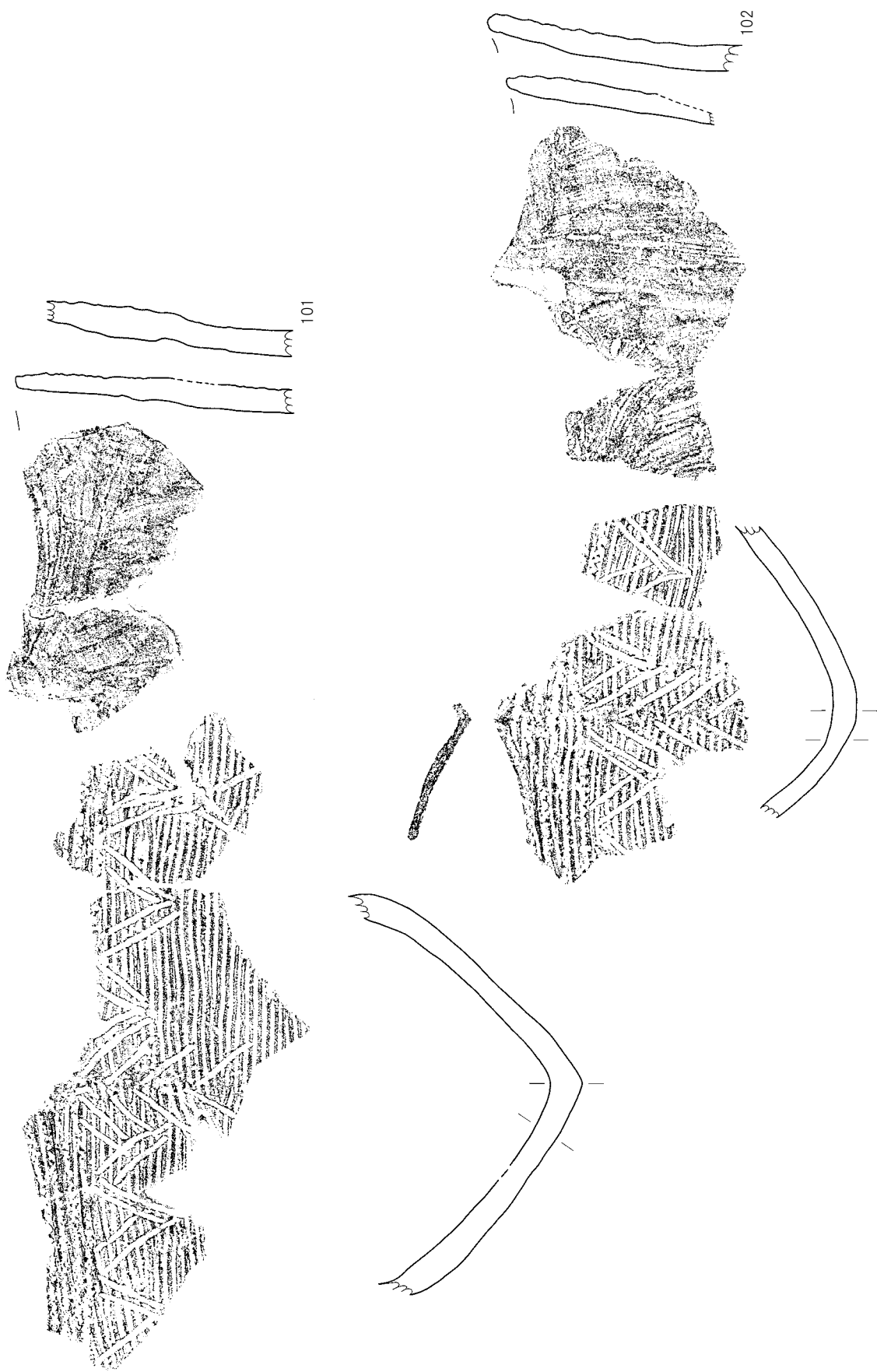
106は、肋2条の斜位の押圧を口縁部に施し、その下に貝殻刺突文を施す。胴部は斜位の条痕の上から流水文及び刺突条線文を描く。角部には、縦位の貝殻による連点文を施すものである。内面は、胴部が下から上へ、口縁部が横位の規則的なケズリである。107は、口縁部に肋3条の押圧を施し、その下部に横位の貝殻刺突を施す。胴部は横位の条痕の上から、縦位の流水文及び斜位の貝殻刺突文を施す。108は107の胴部付近に斜位の刺突のないものである。109は、斜位の地文の条痕と流水



第60図 縄文時代2-b類土器(1)



第61図 縄文時代2-b類土器(2)



第62図 縄文時代2—b類土器(3)

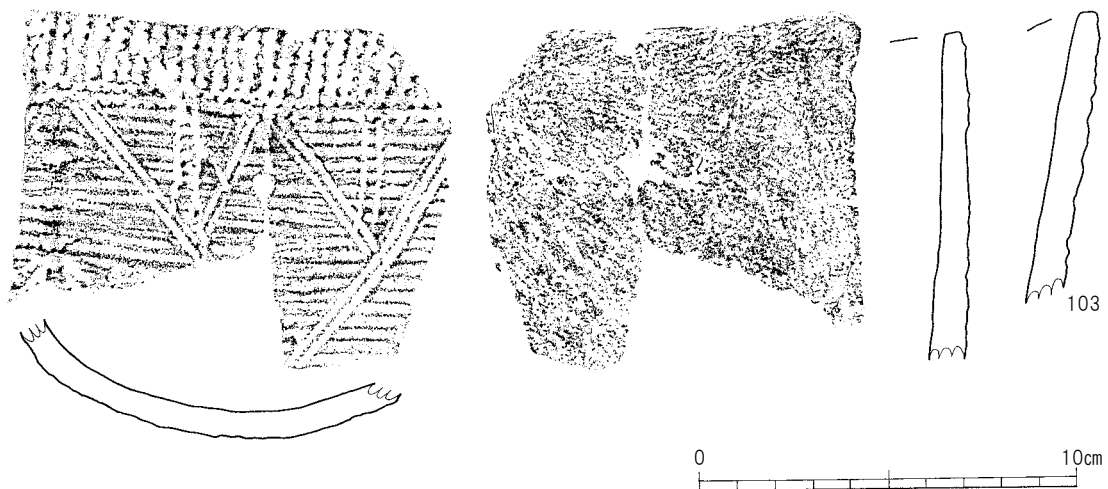
文及び縦位の貝殻連点文らしきものが観察される。110は、肋5状程度の貝殻押圧文を施すもので、右側に行くに従って文様帯が広くなることから、波状の可能性も考えられるものである。押圧文の下に横位の貝殻刺突を1～2状施し、横位に近い条痕の地文の上に斜位の流水文を施すものである。111は胴部の破片で、横位の条痕による地文の上から縦位の沈線と流水文を施すものである。112～114は、斜位の条痕による地文の上に流水文を施すものである。113は、中央の流水文付近に逆V字状の貝殻刺突条線を施している。

115～119は、横位の条痕が地文でその上から2本が1単位の縦位の流水文を施すものである。117は、2本が1単位の縦位の沈線文も観察される。120・121・123は、斜位の条痕が地文でその上に2本を単位とする流水文を施すものである。122もほぼ同様であるが中央の流水文はそれを挟むように縦位の貝殻刺突文が施される。124～131は、地文の条痕の上に基本的に2本を単位とする縦位や斜位の沈線を施すものである。115～131のほとんどの内面調整はケズリであり、胎土粒子の移動が明瞭に観察されるものが多い。ただし、117は斜位のケズリの後にナデ調整、119はケズリが見えないほどの丁寧なナデ調整である。

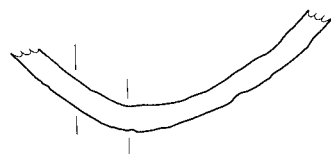
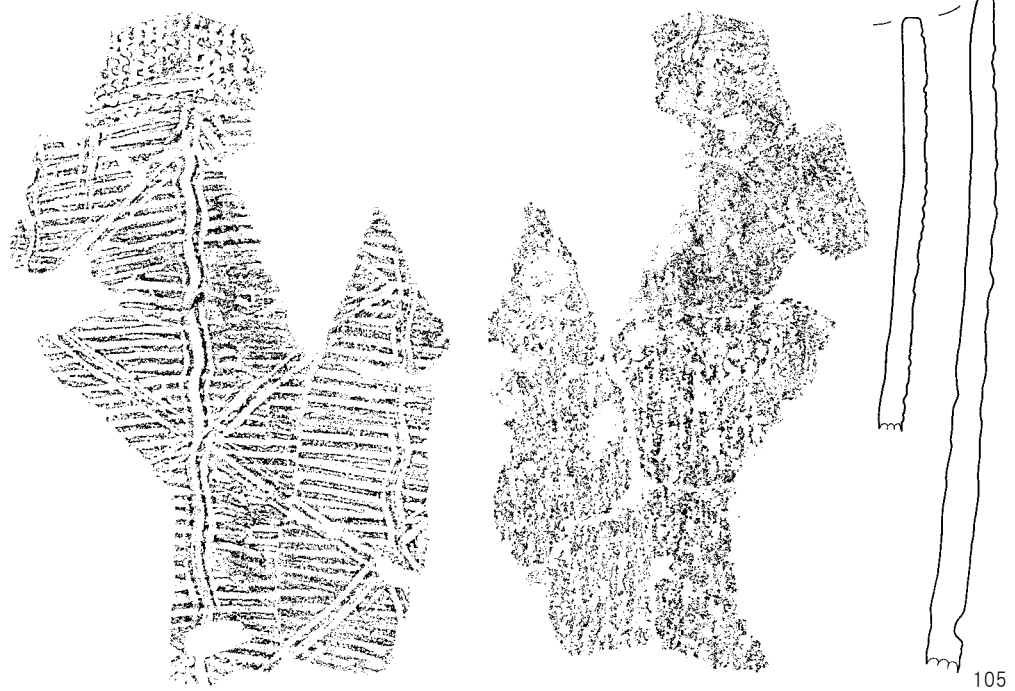
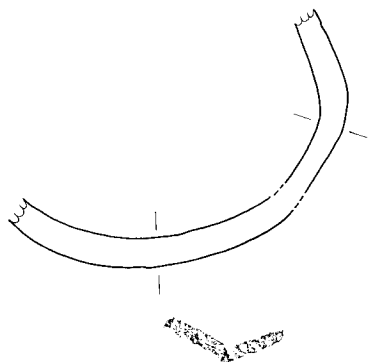
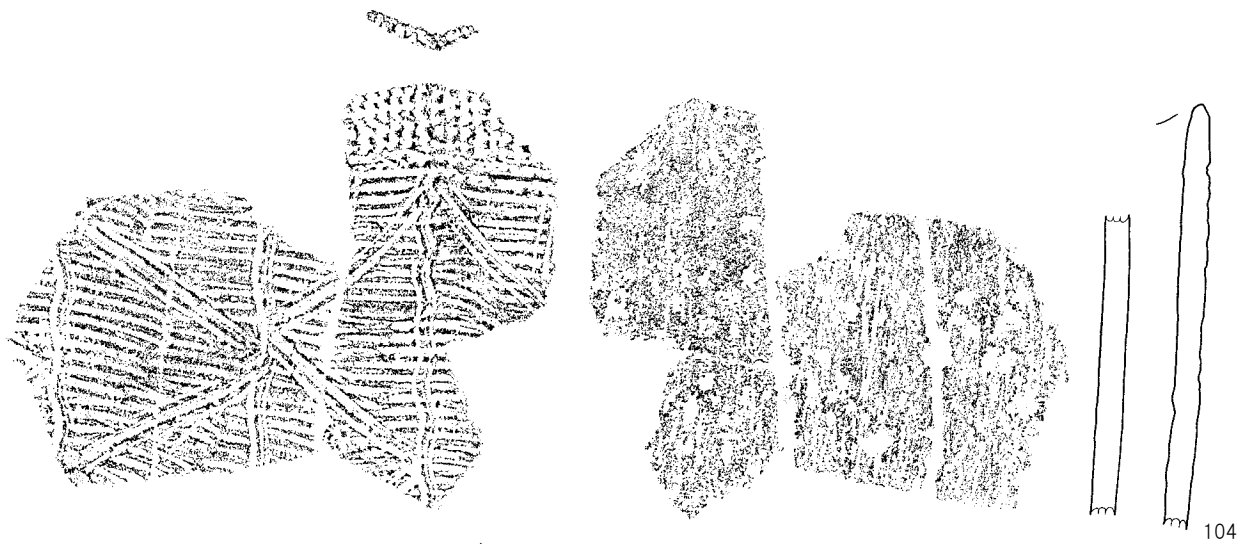
132～136は、斜位の条痕の地文に縦位の貝殻連点文を施す一群である。132・133は2条の連点が観察される。134は2条の連点の間に縦位の貝殻刺突文が施されている。135・136は2本あるいは数本の平行な連点文が観察されるが、破片のためその文様の全体像は判然としない。

138は角筒を呈する器形で、横位の条痕が地文に施され、角部に貝殻による縦位の連点を施すものである。これらのほとんどの内面調整は、下から上への縦位のケズリによるものである。

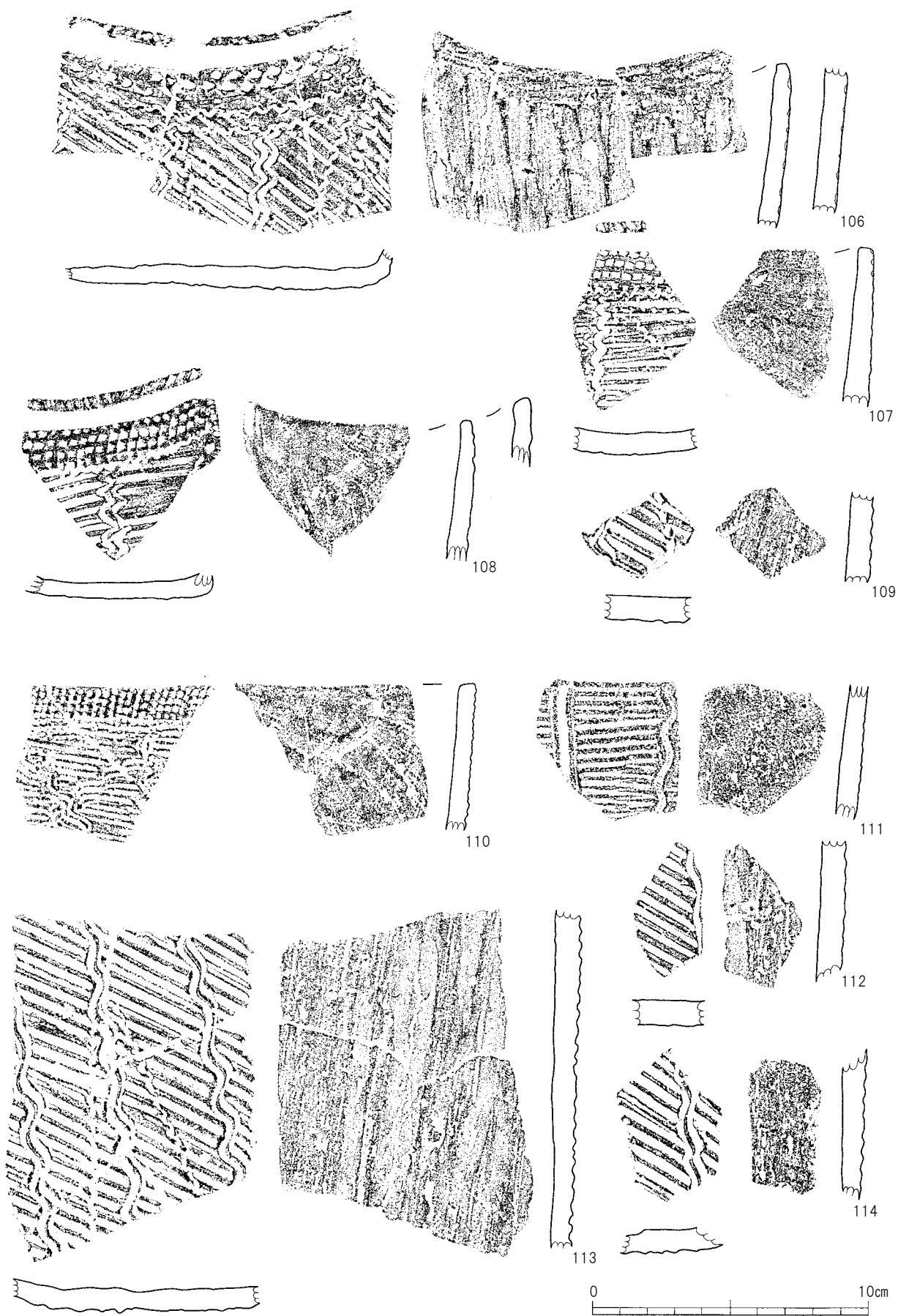
137～142は上述の遺物の底部から胴部への立ち上り部分である。胴部と底部の接合は、139・140のような粘土の接合の痕跡が観察される。また、底部からの立ち上りには、縦位の粗い条痕が施されている。142は、底部の施文と地文の施文の前後関係がよく判る資料で、地文が斜位の条痕の後に底部側面の縦位の文様を施している。



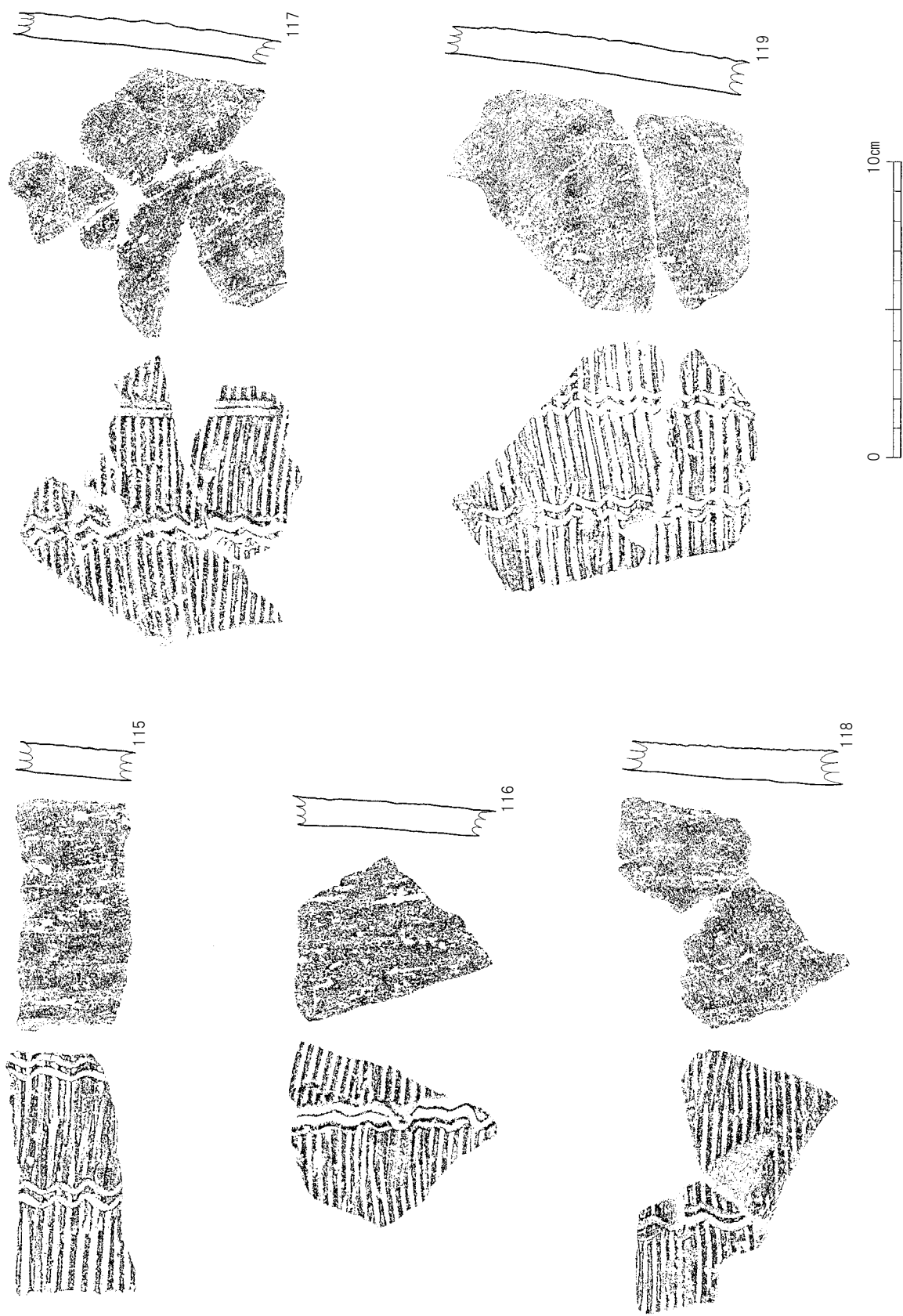
第63図 縄文時代2-b類土器(4)



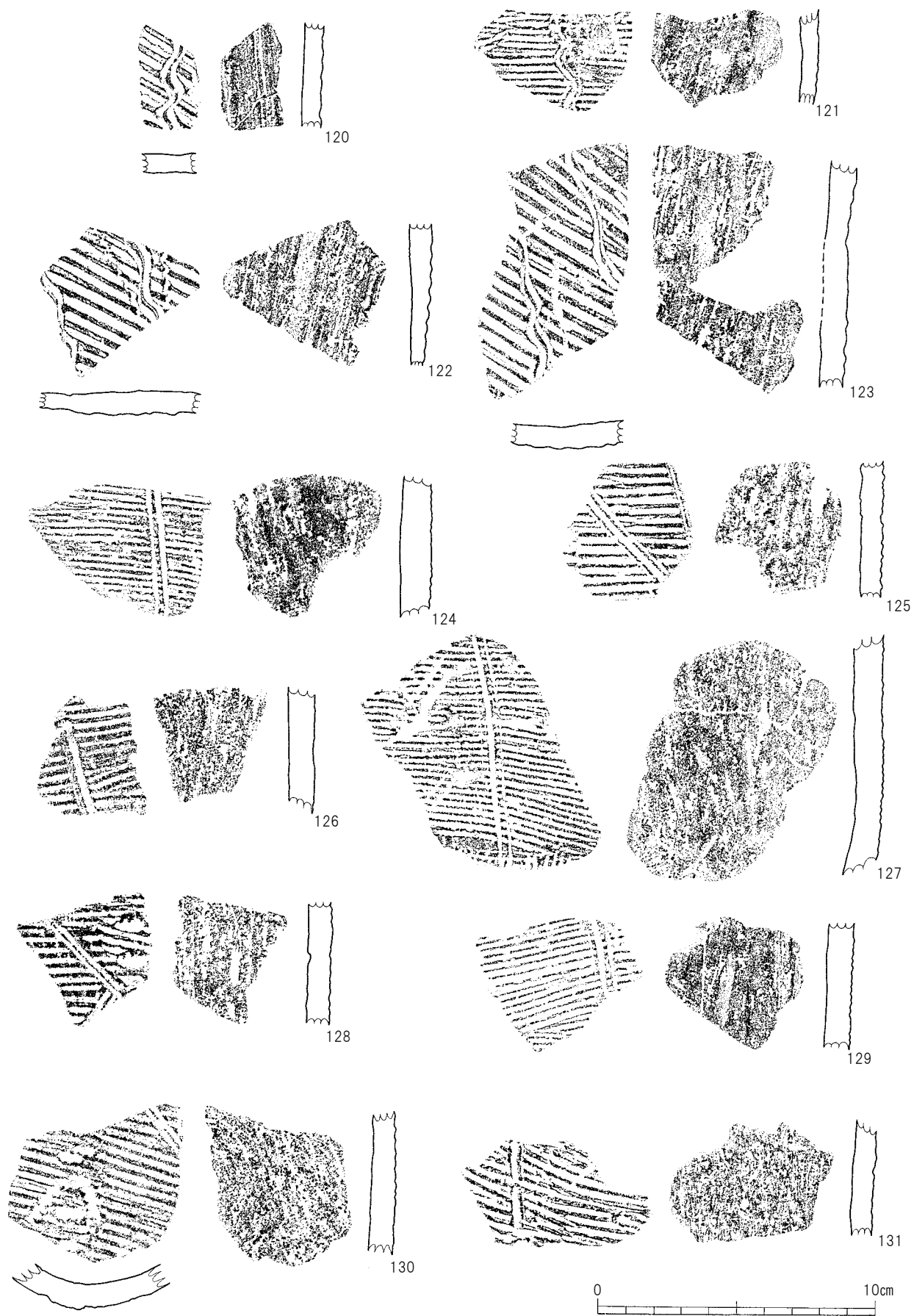
第64図 縄文時代2-b類土器(5)



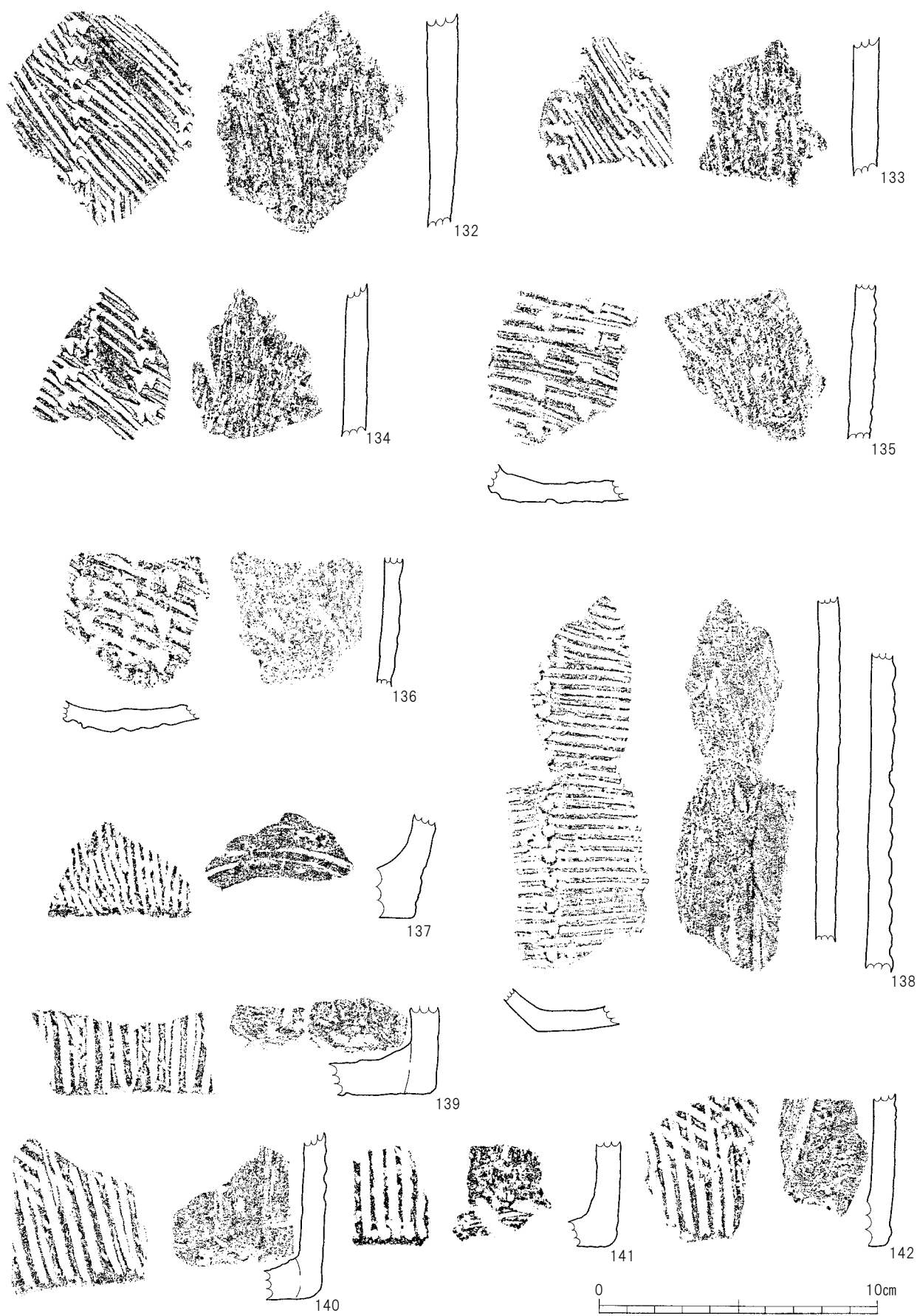
第65図 縄文時代2-b類土器(6)



第66図 縄文時代2—b類土器(7)



第67図 縄文時代2 - b類土器(8)



第68図 縄文時代2-b類土器(9)

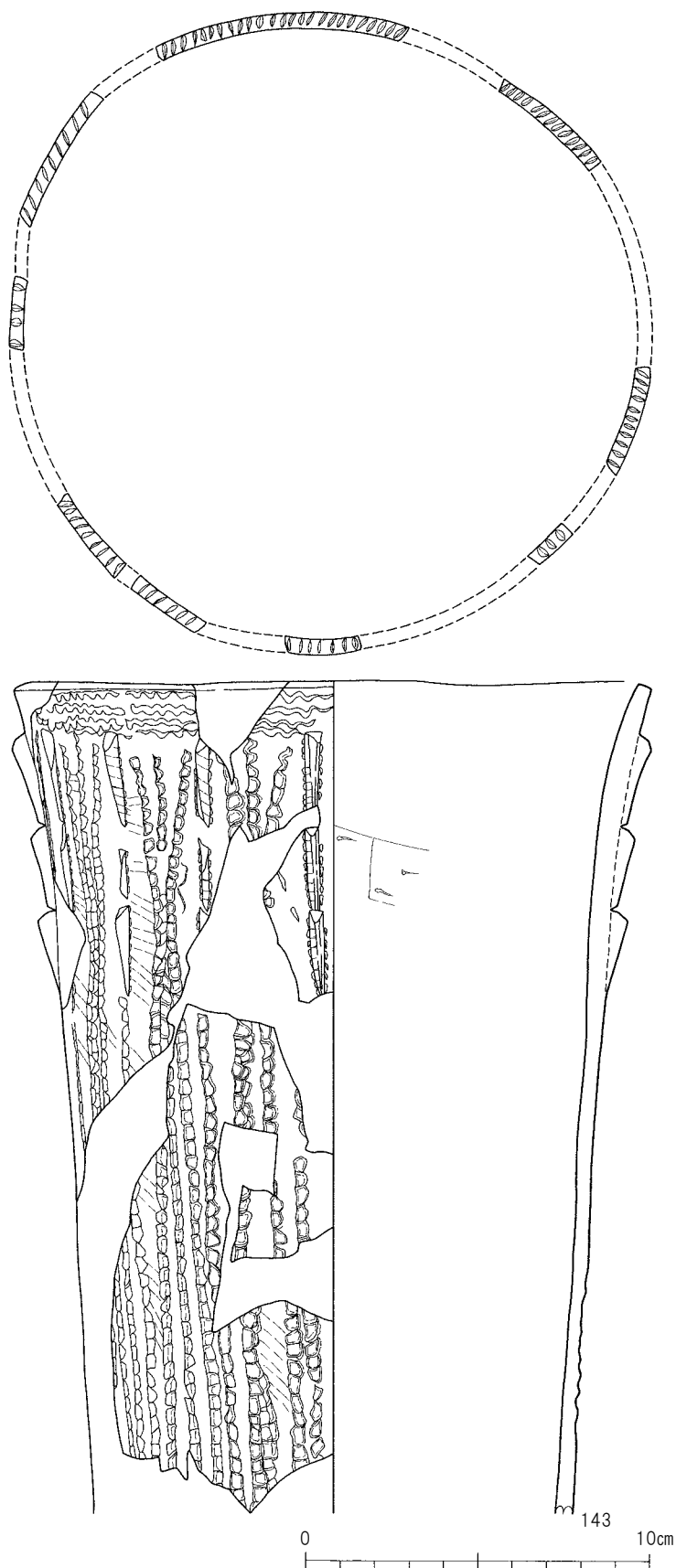
2-c 類土器 (第69図～第76図)

2-c 類は、口縁の文様が貝殻の連続的な刺突で、その直下に刺突を施した楔形貼付文を施し、口唇部は平坦で浅い刻みを施す。胴部は、斜位の条痕の上に縦位の刺突を施すもので刺突が2本1組で、ある程度の間隔を持っているものもある。内面の調整は主として縦位のケズリである。

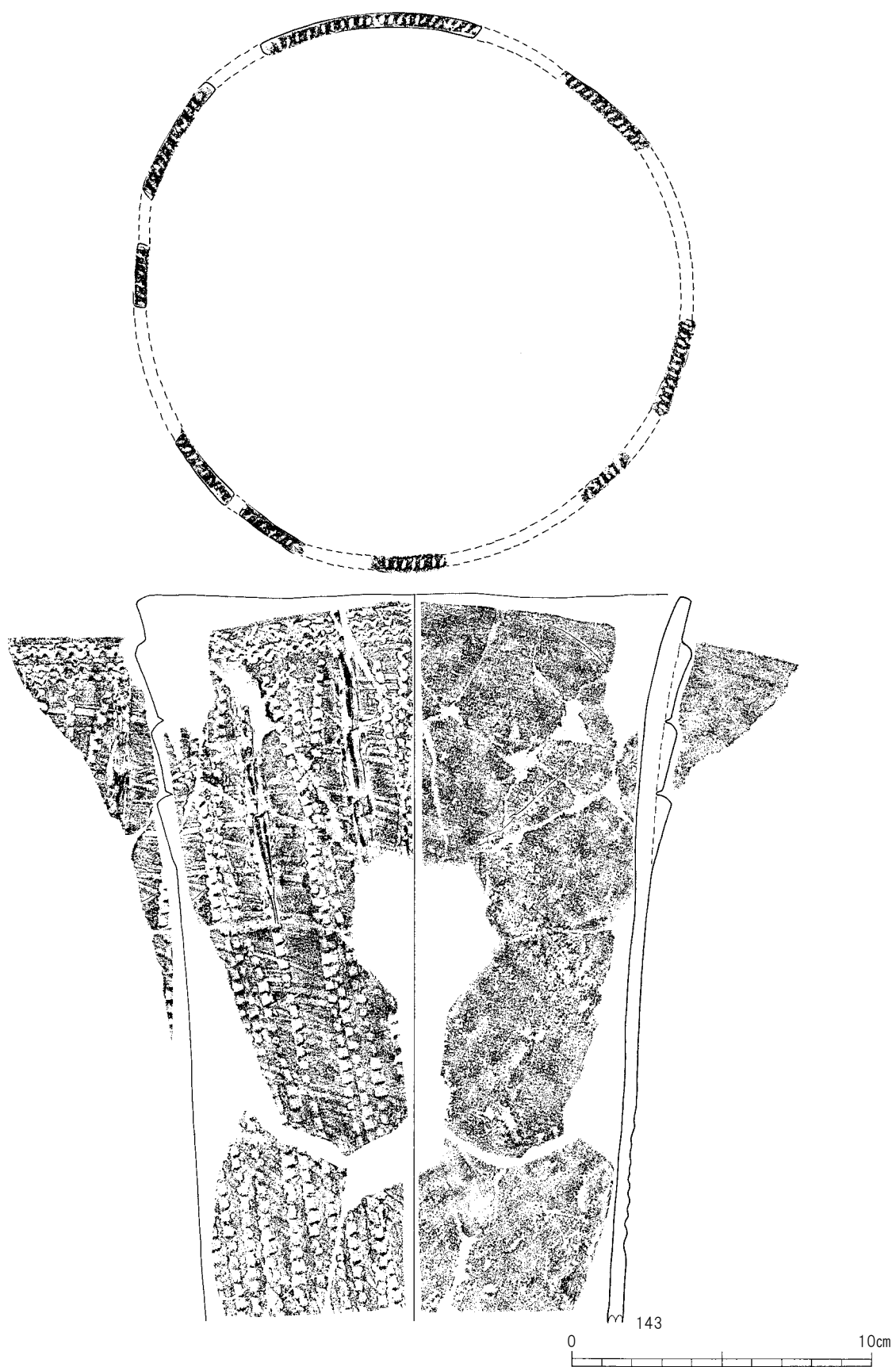
143は、口縁部がやや外反するもので、口唇部には浅い刻みを施し、口縁部には横位の4条の刺突を巡らす。その下に刺突を施した楔形貼付文を3段貼りつける。左上から右下への条痕の地文に縦位の刺突を施すものである。

144は、143とほぼ同様である。口縁部がやや外反し、口唇部には浅い刻みを施し、口縁部に横位の4条の刺突を巡らす。その下に刺突を施した楔形貼付文を3段貼りつける。左上から右下への条痕の地文に縦位の刺突を施すものである。

145は、底部の立ち上りから胴部にかけてやや張り、その後は直線状に立ち上がる器形である。口唇部には浅い刻みを施し、口縁部には横位の4条の刺突を巡らす。143や144のような楔形貼付文は施さず、左上から右下への条痕の地文に2条を単位とする縦位の刺突を施すものである。143～145の内面の調整



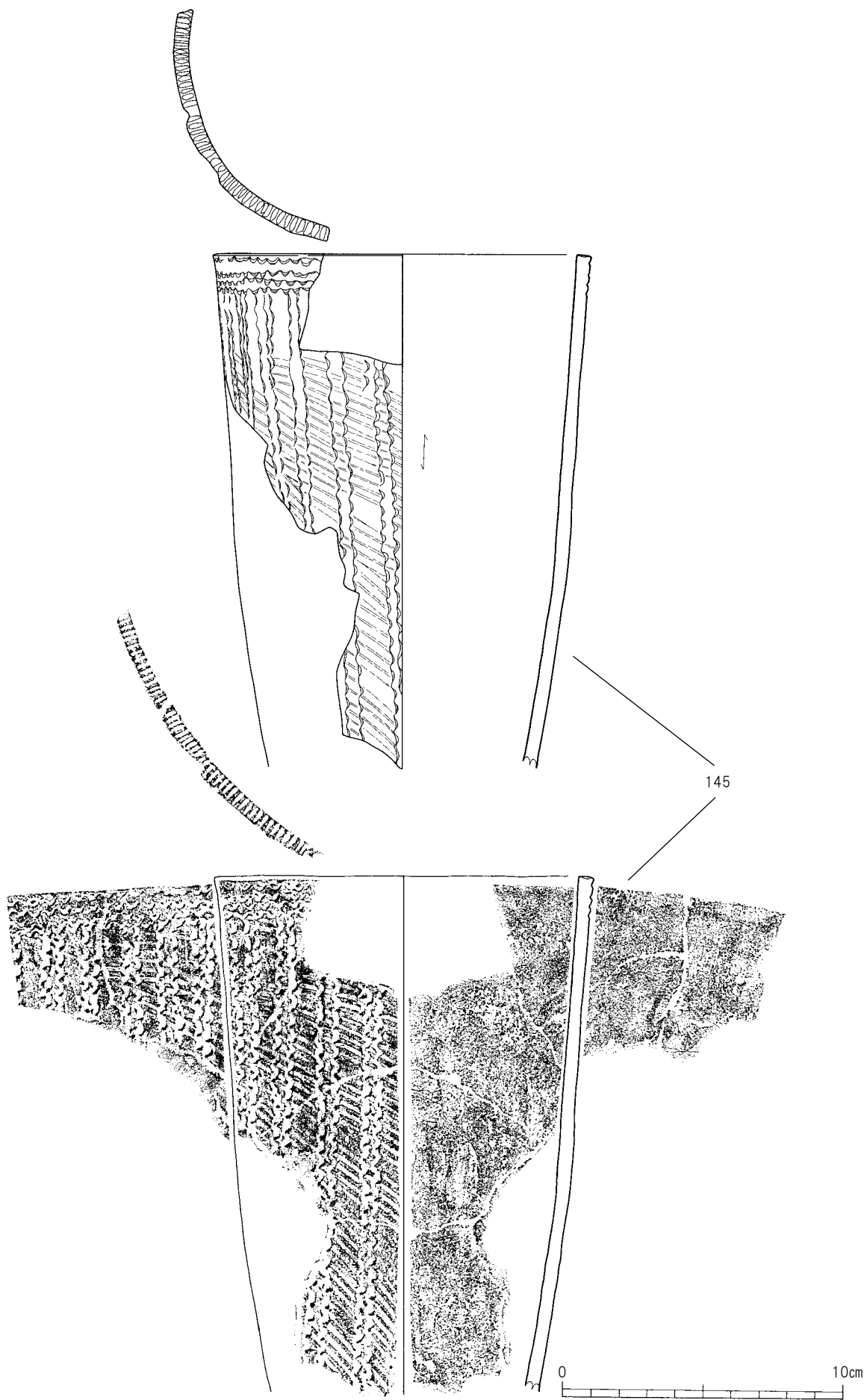
第69図 縄文時代2-c 類土器(1)



第70図 縄文時代2-c類土器(2)



第71図 縄文時代2-c類土器(3)



第72図 縄文時代2-c類土器(4)



第73図 縄文時代2-c類土器(5)

はケズリの後、丁寧なナデを行っている。146も143・144とほぼ同様である。口縁部がやや外反し、口唇部には浅い刻みを施すもので、口縁部には横位の4条の刺突を巡らす。その下に刺突を施した楔形貼付文を3段貼りつける。左上から右下への条痕の地文に縦位の刺突を施すものである。148も口縁部が内湾するところを除くと146とほぼ同様である。

147は、角筒形を呈する器形の頂頭部に近い破片である。口唇部に浅い連続的な刻みを施し、口縁部には肋4条の縦位の押圧を施し、その直下に横位の貝殻刺突を2条施す。その刺突の部分を開始点として、斜位の貝殻刺突文を2条を単位として施す。地文に横位の条痕が観察される。

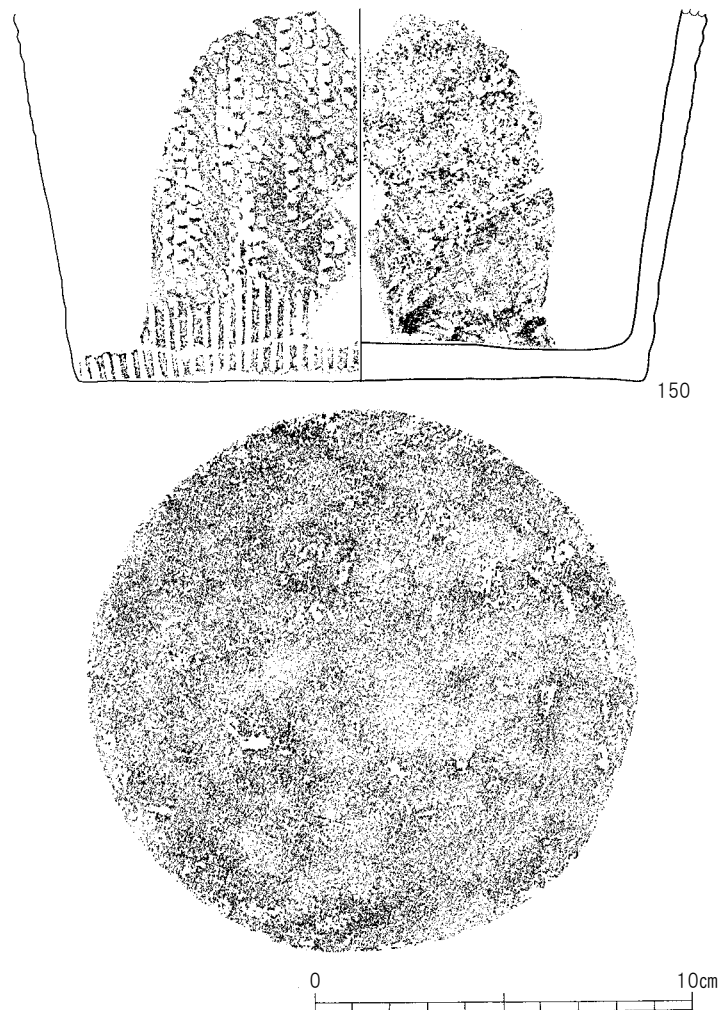
149も角筒形を呈する器形で、数段の刺突を施した楔形貼付文を施す。左上から右下への条痕の地文に縦位の貝殻刺突を143・144の土器よりも密に施すものである。150は底部付近の破片である。底部から外開きに直線的に立ち上がる器形である。斜位の地文の条痕の上に貝殻刺突文を縦位に施す。底部には、縦位の連続的な沈線を施す。底部は、丁寧なナデ調整であり、胴部との接合は円盤貼付である。

151は口縁部がやや外反する器形で、口唇部に浅い刻みを施し、口縁部には横位の4条の刺突を巡らす。その下に刺突を施した楔形貼付文を施し、2段貼りつける。左上から右下への条痕の地文に縦位の刺突を施すものである。

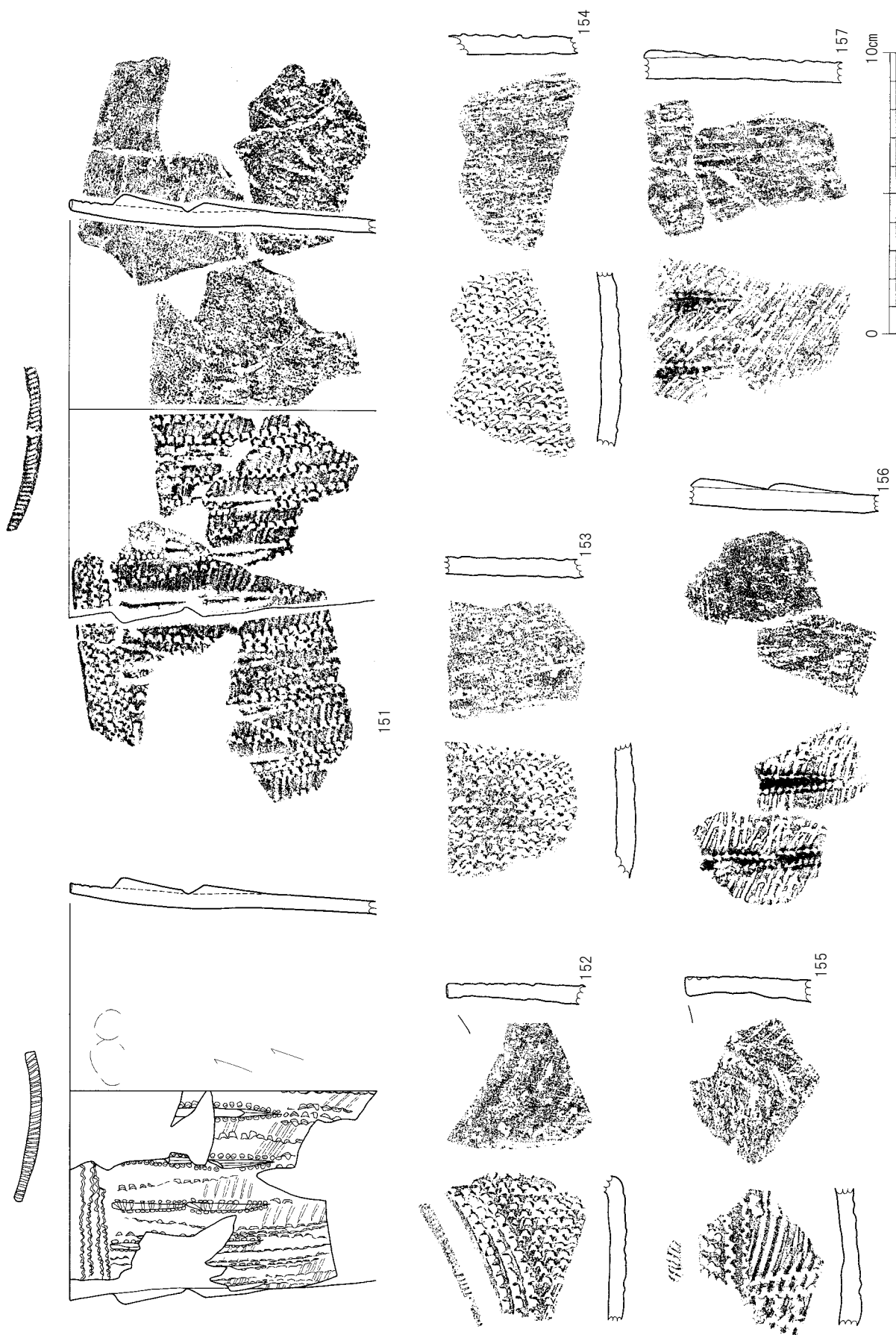
152は、角筒形を呈する器形の頂頭部付近の破片である。口縁部に横位の貝殻押圧文を3条施し、斜位の条痕の地文の上に縦位の刺突を密に施すものである。153・154は152と同類土器の胴部と考えられる。

155は、口唇部に斜位の刻み、口縁には肋3条の貝殻押圧文を施し、その下に横位の貝殻刺突文を2条施文する。胴部は、斜位の条痕の上から縦位の貝殻刺突文を施す。内面の調整は横位のケズリを中心とする。

156は、刺突を施した楔形貼付文数段貼りつける。左上から右下への条痕の地文にややランダムな縦位の貝殻刺突を施す。157も同様に刺突を施した楔形貼付文を貼りつけ、左上から右下への条痕の地文に縦位の貝殻刺突を施すものである。158～162は上述の土器と同様の施文と思われるもので、163～165は、その底部である。



第74図 縄文時代2 - c 類土器(6)



第75図 縄文時代2-c類土器(7)

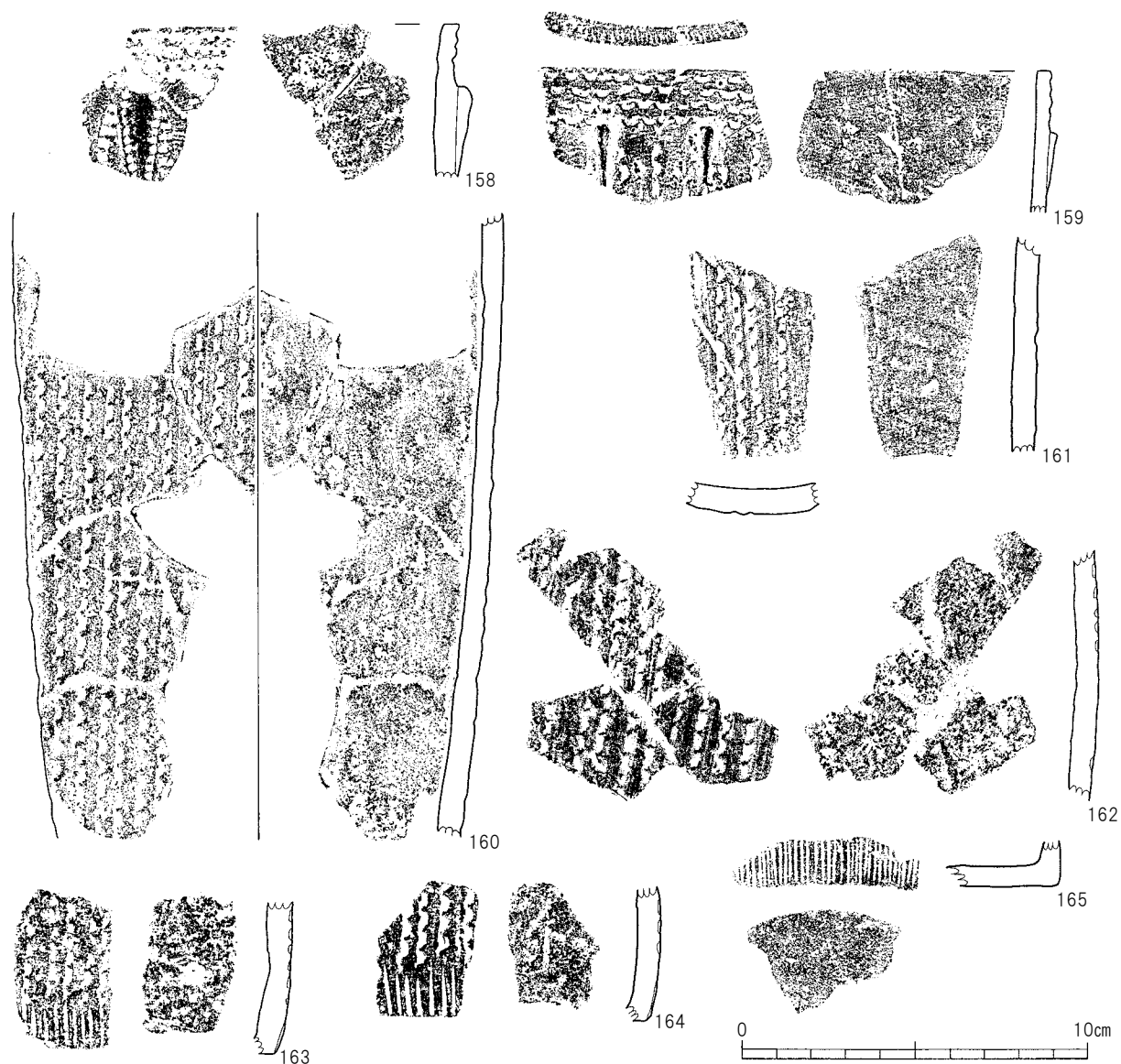
3類土器（第78図～第80図）

3類土器は、外面の施文が貝殻による刺突や押引きを基本とするものである。口唇は平坦で鋸歯状や斜位の刻みを施す。口縁部に刺突が刺突をV字状に密接に施文することで、楔状を意識したものもある。内面の調整は、丁寧なナデである。

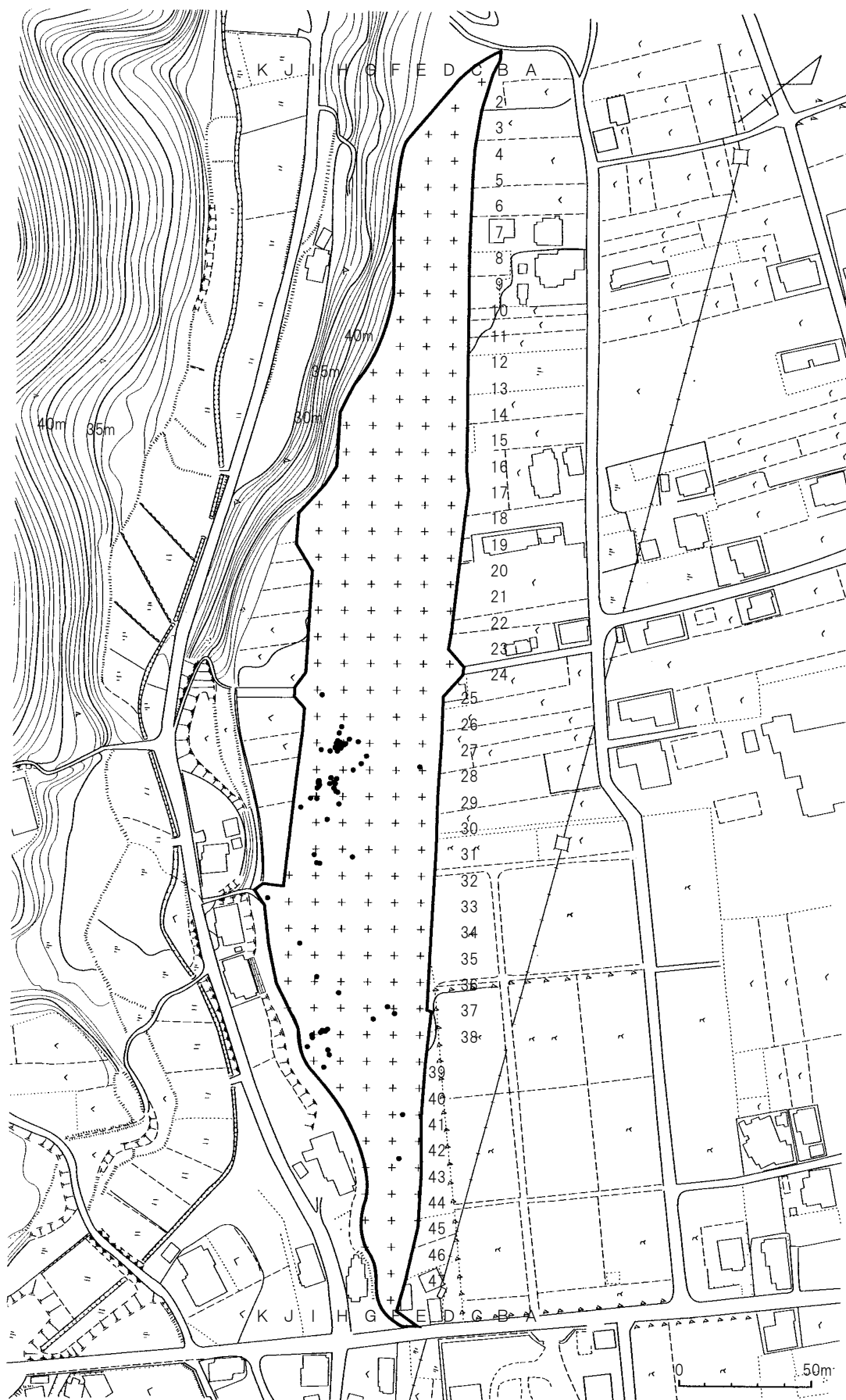
166・167は、口縁部が外反し胴部は直線的に底部へ至ると思われるものである。166は、口唇部に鋸歯状の刻みを施す。口縁部は、貝殻刺突を2条施し、その下部に大き目の貝による刺突を施す。胴部は、数種の肋の大きさの異なる貝を用いて、縦位の刺突文を施している。そのため、一見横位の縞模様のように見える。内面は丁寧なナデ調整である。

167は、口唇部に斜位の刻みを施し、口縁部には横位の貝殻押圧文を一条巡らす。その下に、肋1条の貝殻刺突、そしてその下に肋2条の縦位の貝殻刺突文を施すことで、口縁部の文様帯を構成している。胴部は横位の条痕の後にナデ調整を行っている。内面の調整は丁寧なナデ調整である。

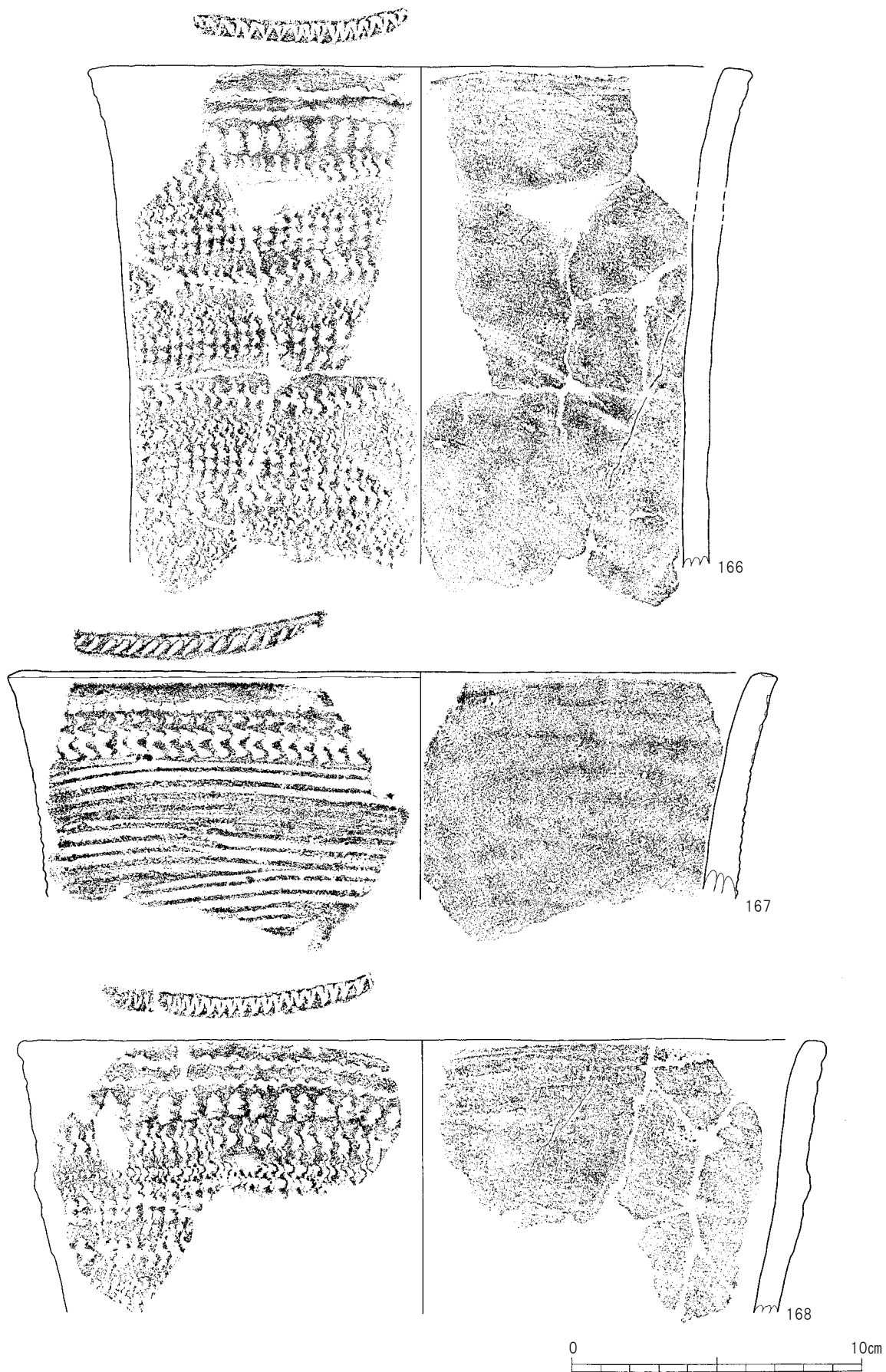
168は、やや口縁部の造りが粗いが、基本的には166と同様の文様構成のもので、口縁部に補修孔



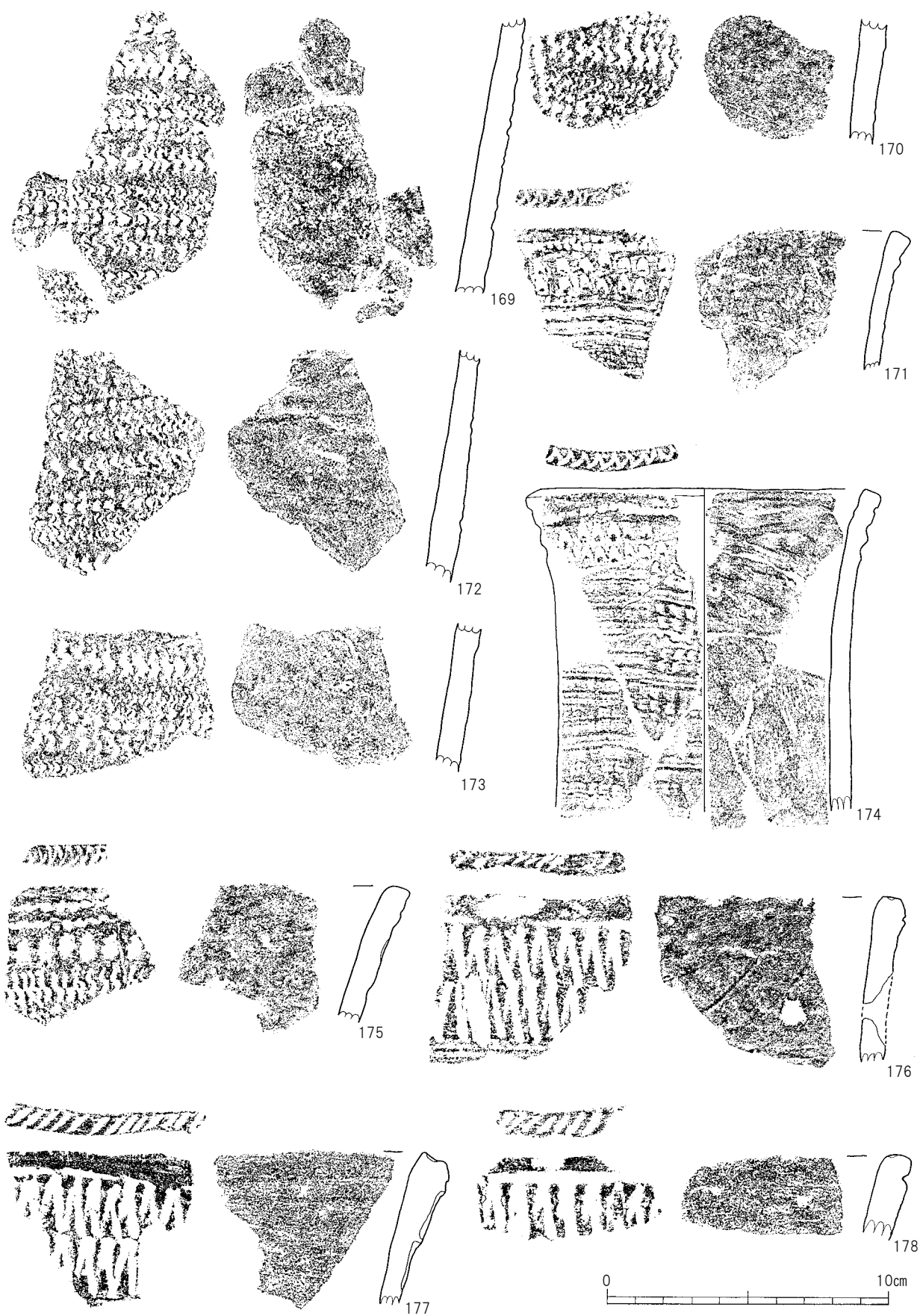
第76図 縄文時代2-c類土器(8)



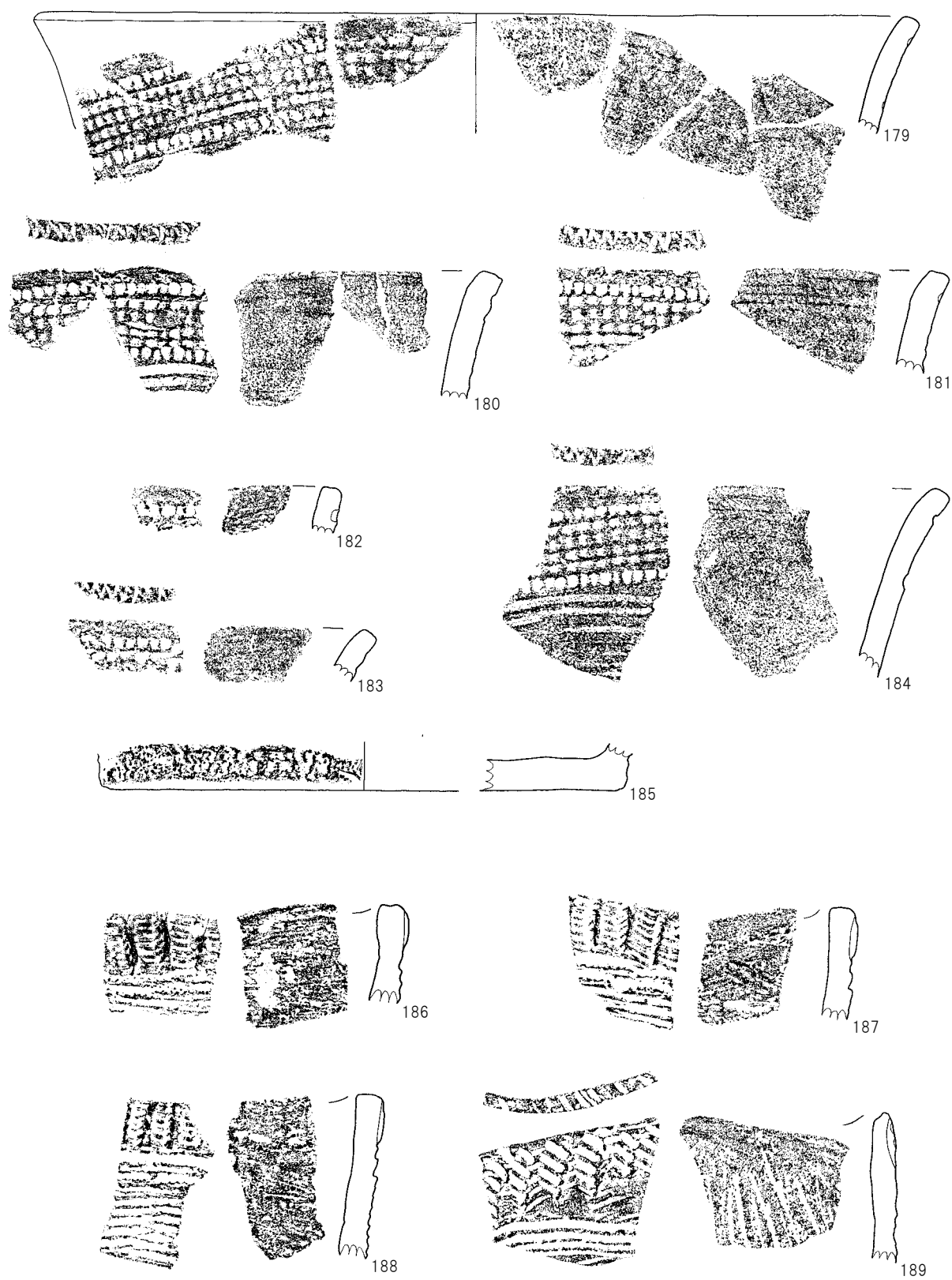
第77図 縄文時代3類土器出土状況



第78図 縄文時代3類土器(1)



第79図 縄文時代3類土器(2)



0 10cm

第80図 縄文時代3類土器(3)

が穿たれている。169・170, 172・173, 175も166と同様である。

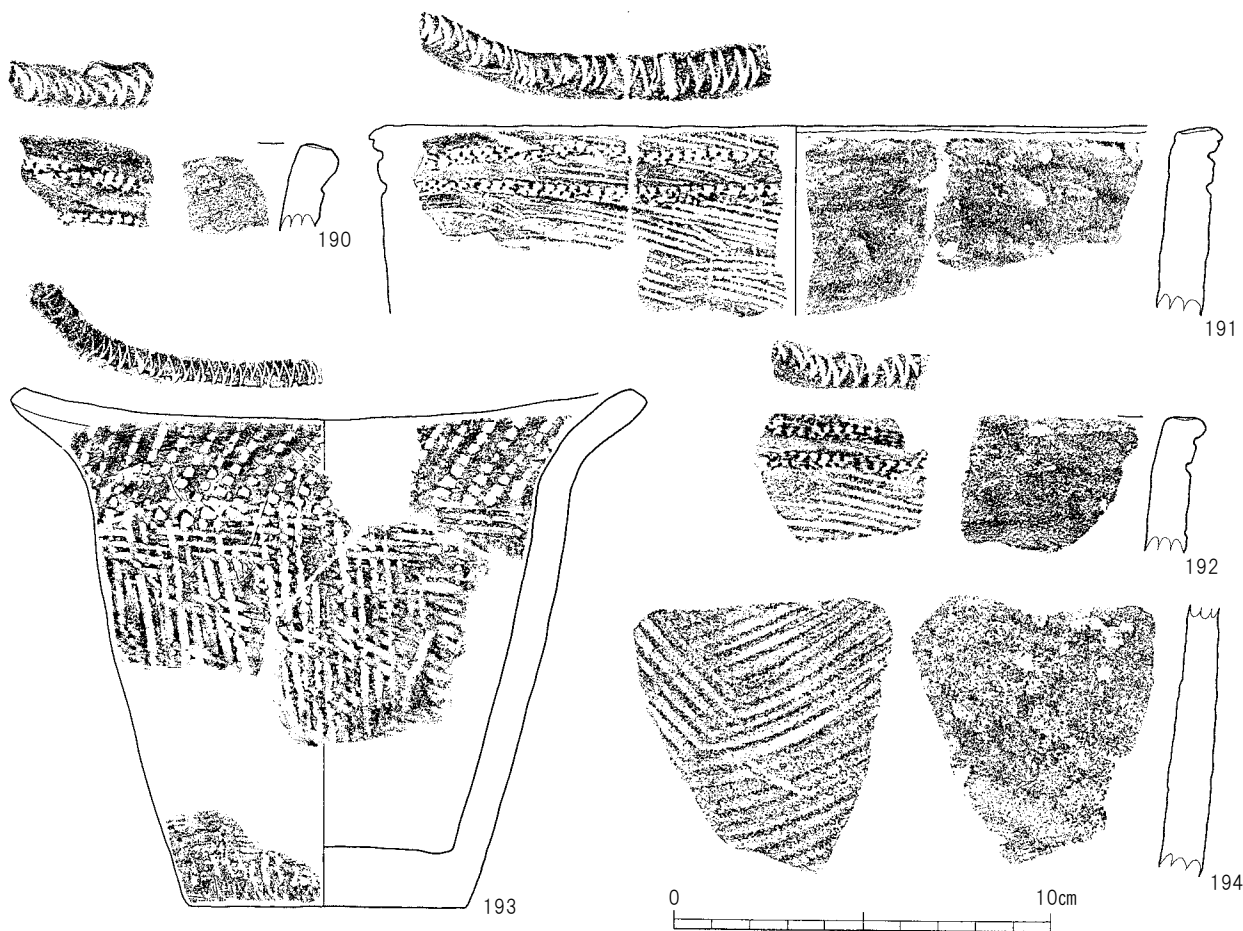
171は、口唇部に浅い刻みを施し、口縁部がやや膨らむ。口縁部上部には、貝殻による押圧文を1条施す（部分的に2条になっている部分もある）その下に逆U字状の工具による刺突文を2条施す。胴部は粗い条痕による調整であり、内面は丁寧なナデ調整である。174は、171と同一個体と思われる、胴部に押引の痕跡が部分的に観察される。

176～178は、口縁部に斜位の刻みを施し、口縁部がやや肥厚し外反する。口縁部に工具による横位の刺突を一条施し、その下に斜位の貝殻刺突文をV字状に施し、その粘土の盛り上がりをもって楔様とするものである。

179～181・184は、口唇部に斜位の浅い刻みを施し、外反する口縁を有するものである。口縁部に貝殻押圧文を1条施し、その下部に押引きを巡らし、その下に貝殻押圧文を施す。胴部は条痕調整を行った後にナデ調整を施している。182・183は、口縁部の貝殻押圧文と押引文が観察される。

186～188は、口唇部に刻みを施さず、口縁部がやや内湾する器形のものである。口縁部に肋7条程度の貝殻を刺突し、横位へやや動かした後、斜め上へ動かすことで楔様の粘土の盛り上がりを作り出し、その下には、横位の貝殻刺突文を2条施している。内面の調整は横位のケズリである。

189は、内傾する口唇部に斜位の刻みを施す。口縁部の造りは上述の土器と同様であるが、楔様の粘土の盛り上がり、斜位となっている。胴部は粗い条痕調整であり、条痕に対して文様帯が右へ上がっていくことから波状口縁になるものと考えられる。



第81図 縄文時代4類土器(1)

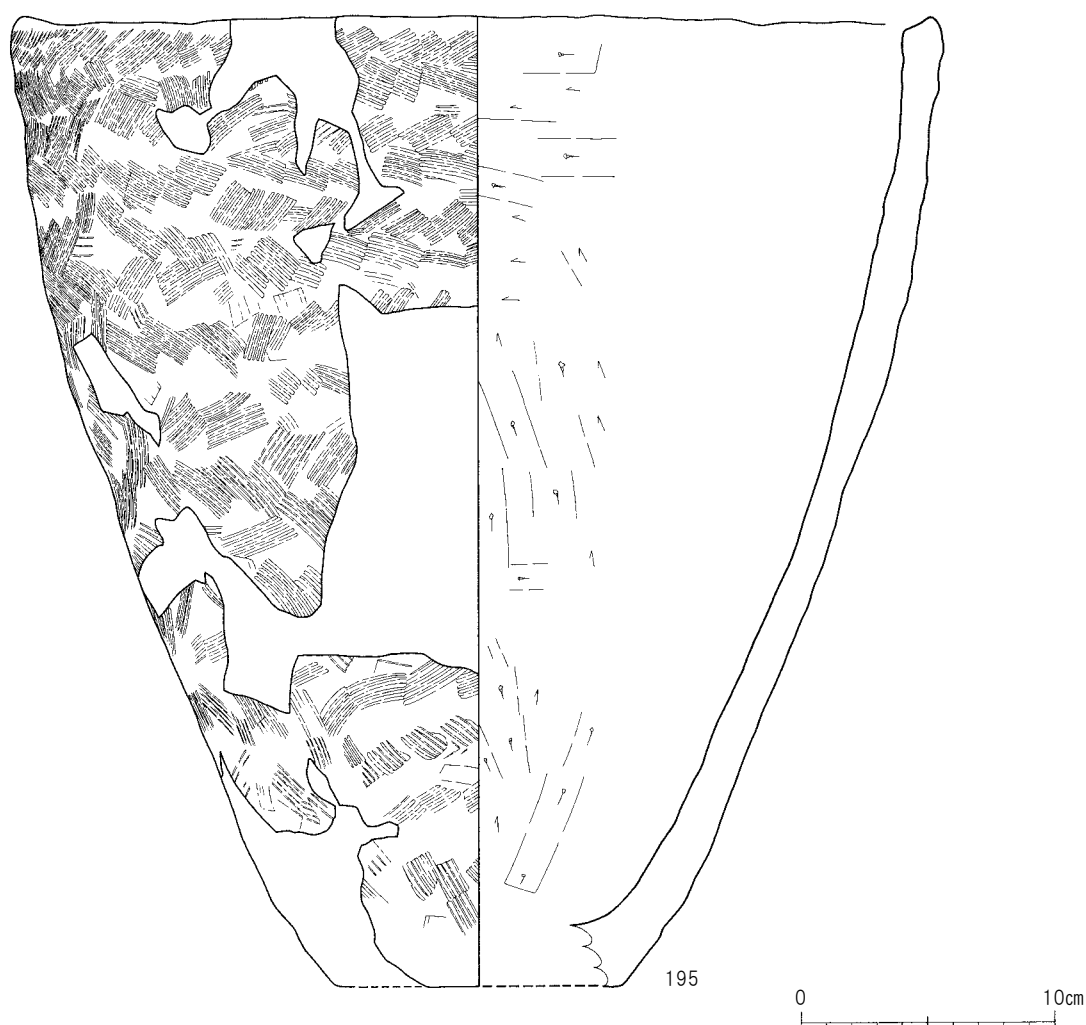
4類土器（第81図）

4類土器は、5点の出土である。190～192は、平坦な口唇部に鋸歯状の刻みを施す。口縁部には、横位の貝殻刺突文を2条施す。胴部は緩やかな弧状の条痕を連続的に施す。内面の調整は、丁寧なナデ調整である。193は、口縁部から直線状に立ち上り、頸部から外反するものである。左右2個の頂部を有し、口縁部には肋7条の斜位の連続刺突を施す。胴部は、粗い条痕調整、内面は削りである。194は、胴部片で、条痕による綾杉条の調整を施すものであり、内面の調整はナデ調整である。

5類土器（第82図・第83図）

5類土器は、口縁部が内湾し、口唇部の形態は平坦で内傾するもので底部は平底である。口縁部から胴部に行くに従って膨らみを持つ器形である。施文は貝殻の施文具で櫛描き状に沈線文を施すものである。

本遺跡において出土した5類土器は、器形・施文・色調・整調等において定義した範疇にほとん



第82図 縄文時代5類土器(1)

どが収まるものである。そこで、特徴的なもののみについて説明を行うものとする。

195は、5類の中で唯一完形に復元できたもので、5類土器の全容を窺えるものである。口縁径37cm、器高37cm、底部径10cm、器壁の平均が1.5cmである。外面はほぼ全面の貝殻による密な羽状文を施し、内面は胴部が縦位のケズリ、口縁部付近が横位のケズリである。焼成は良好で、胎土は、内面の調整の際に胎土粒子の移動が鮮明に観察されるほど粗く、砂粒が多く小礫に近いものを含むこともある。

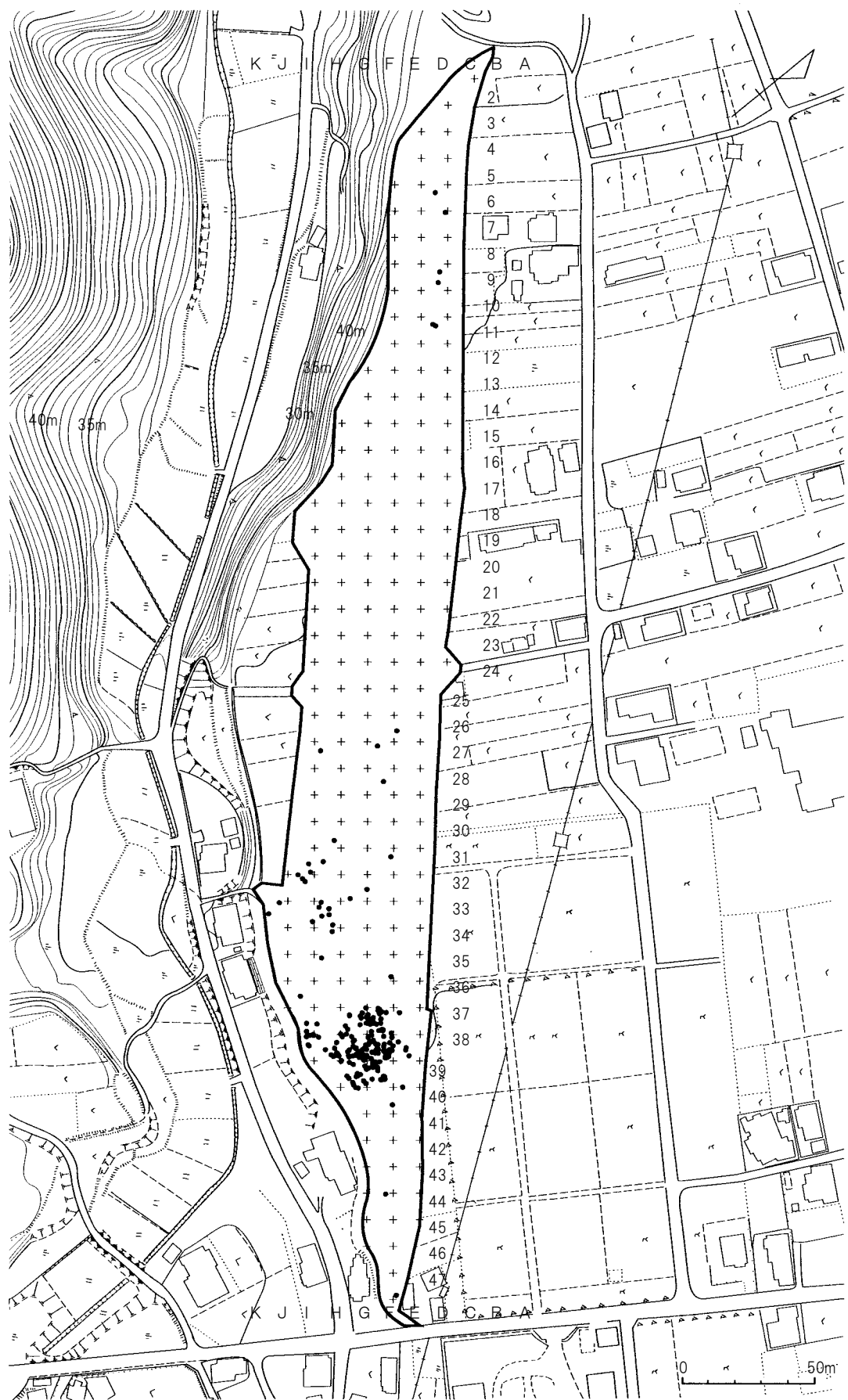
211・242は基本的な部分に変化はないが、胴部の内湾がやや弱く直口気味である。施文的には、上述の195のようにややランダム気味に施文されているものと、196・211・212のように横位に整然と施文されているもの、221のようにやや羽状が形骸化したものなどがある。

土器の色調は、外面が茶褐色、内面が暗茶褐色を呈するものが主流である。

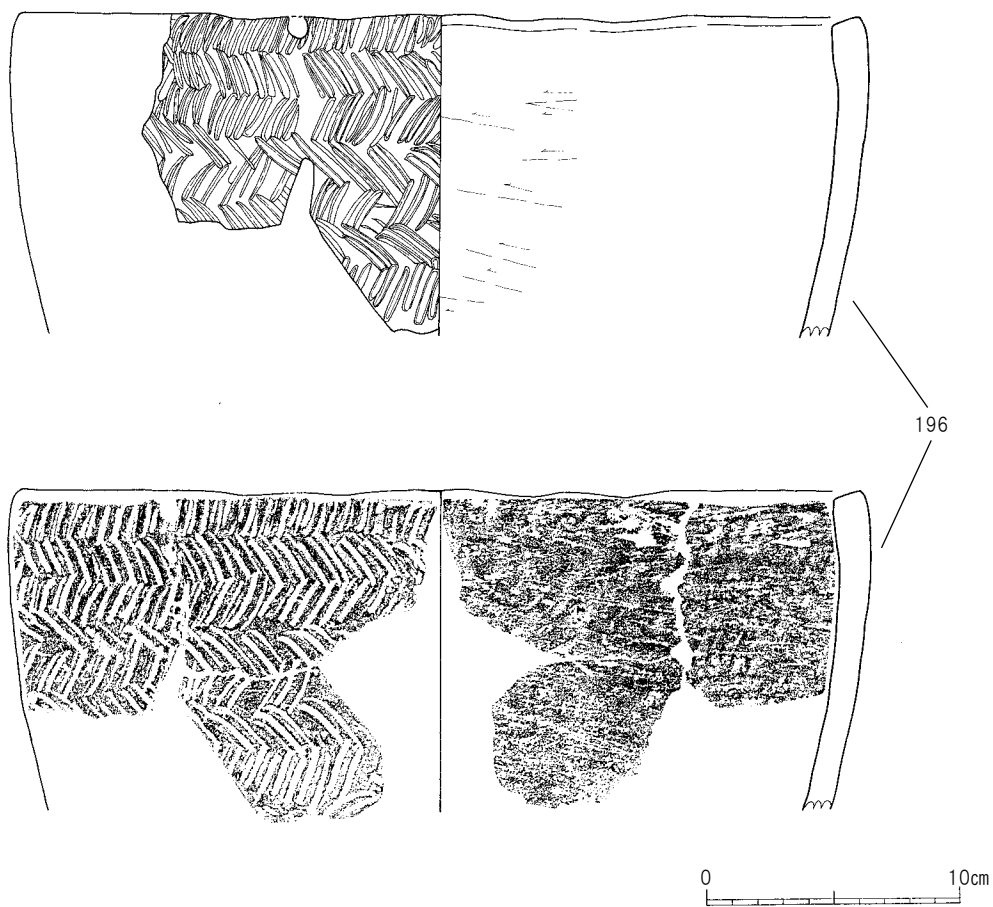
また、分布域は基本的には、1類や2類と同様に遺跡の南東部分であることは同様であるが、その分布範囲は、狭くF～H-36～38が中心である。



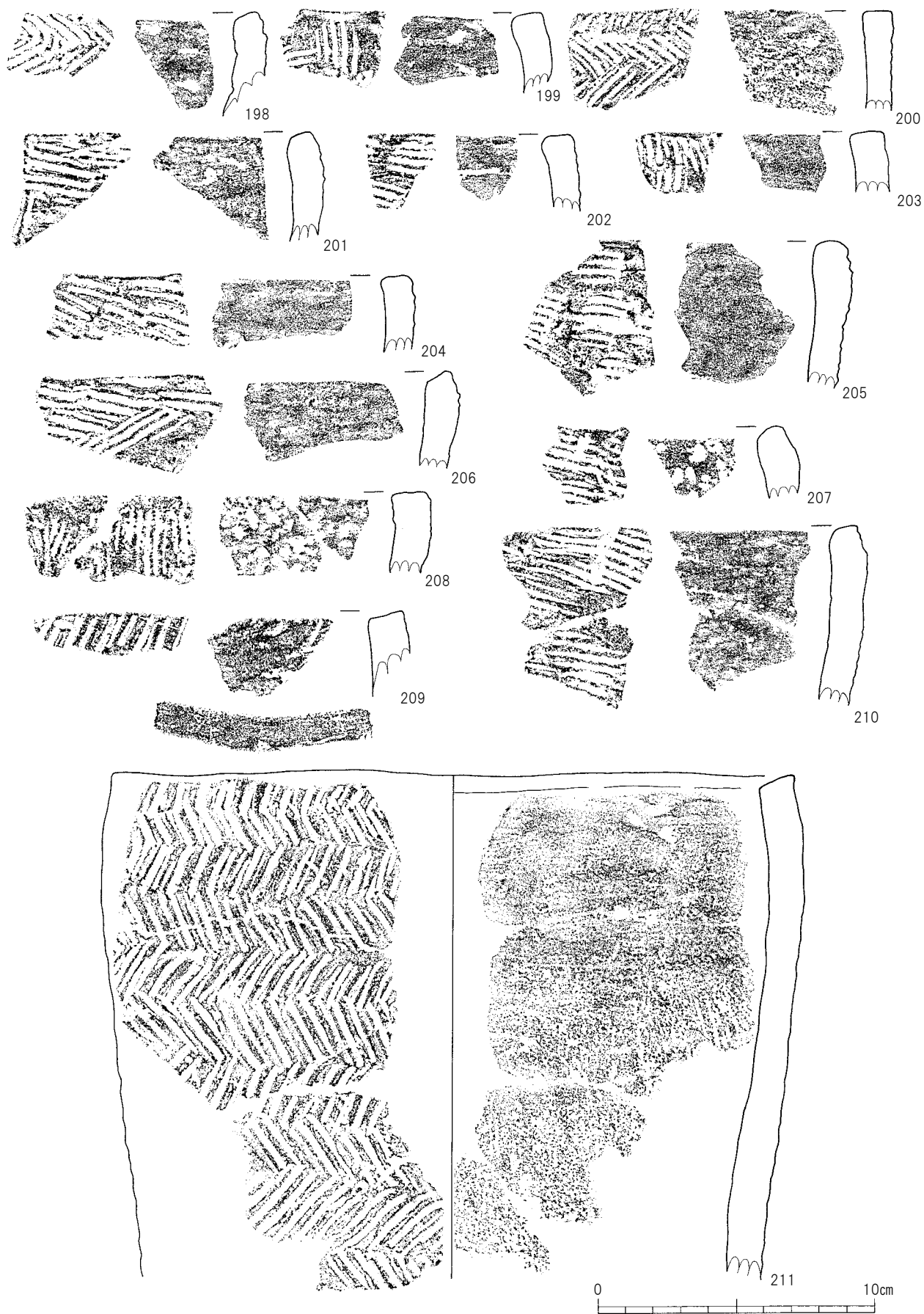
第83図 縄文時代5類土器(2)



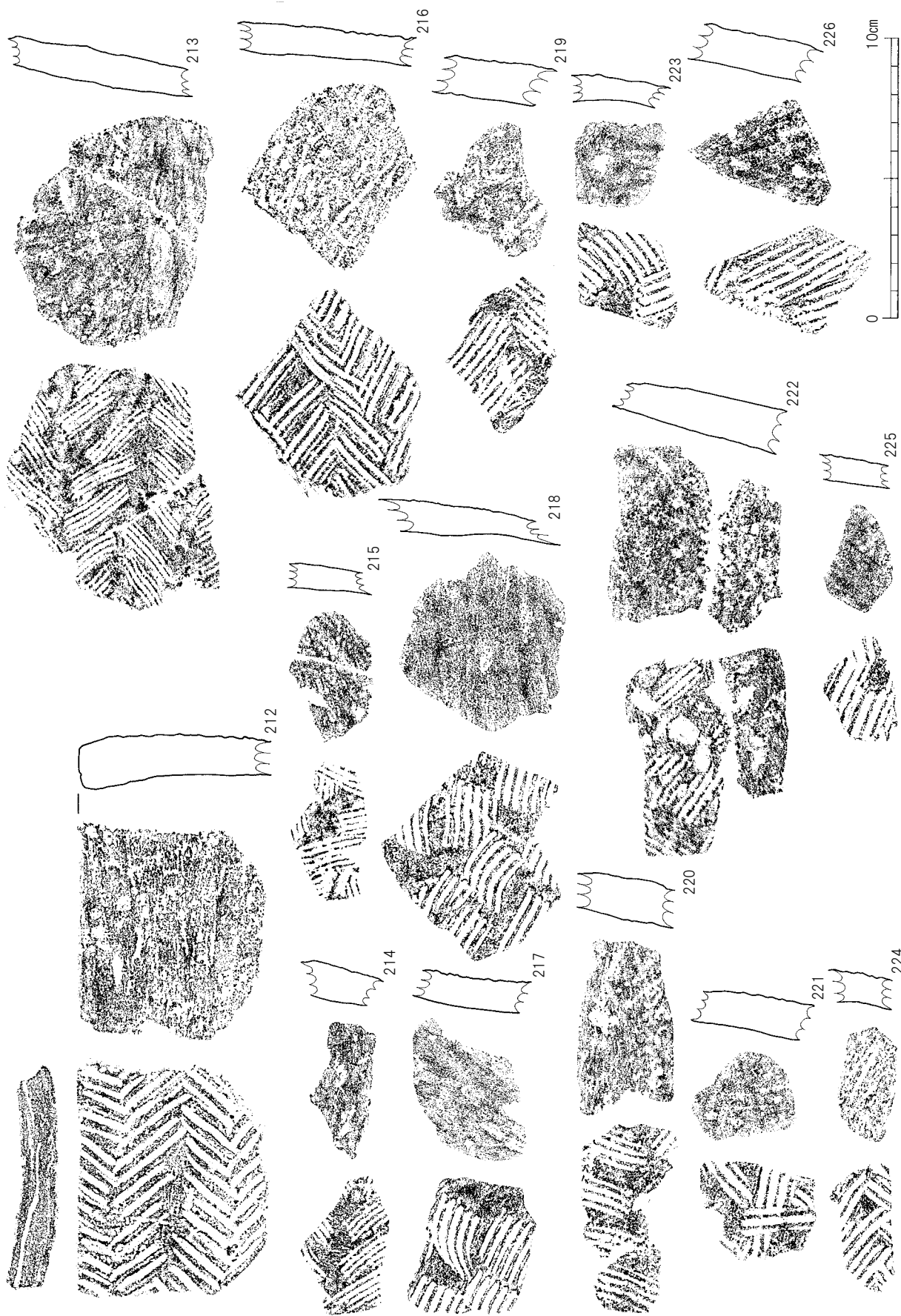
第84図 縄文時代5類土器出土状況



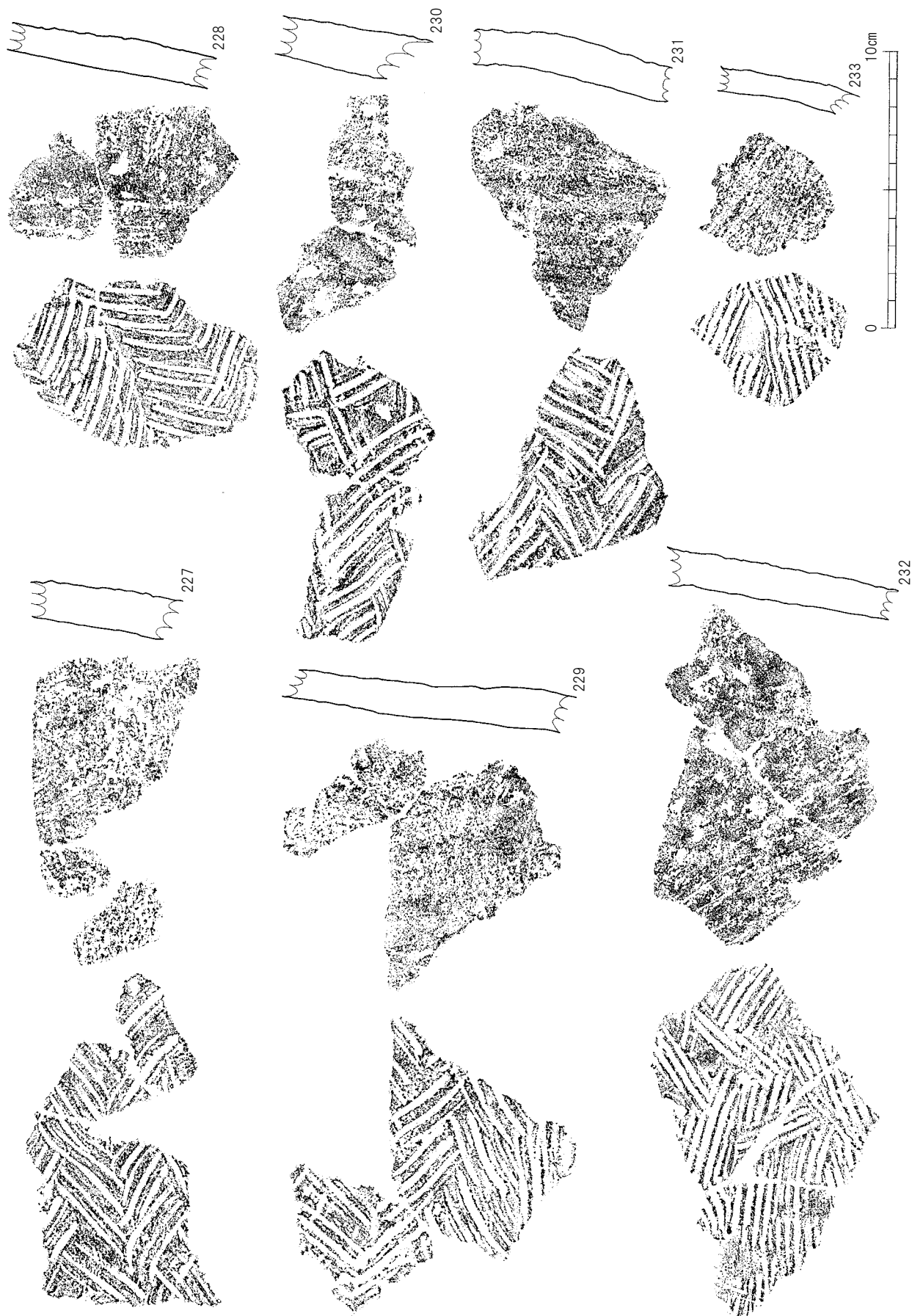
第85図 縄文時代5類土器(3)



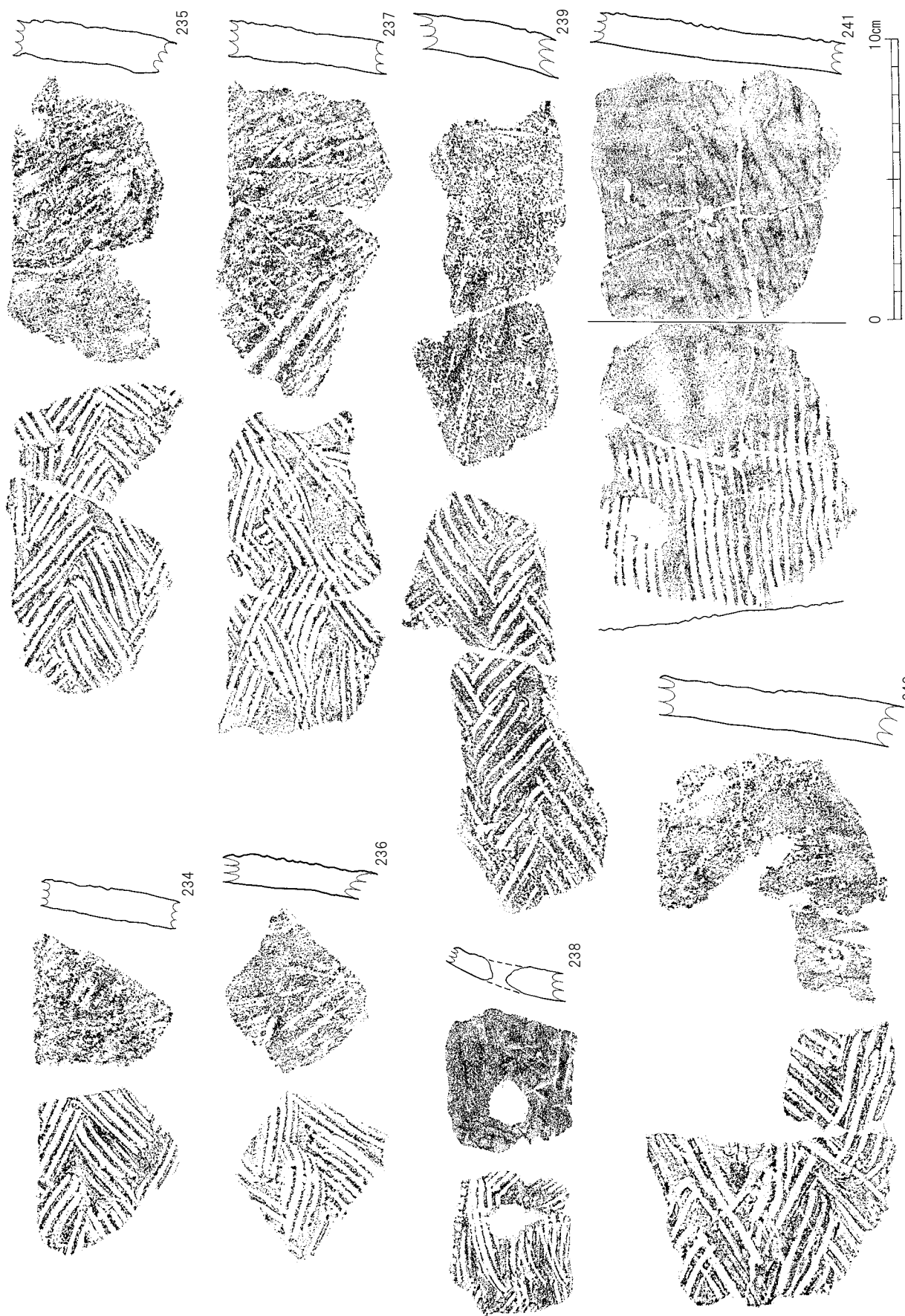
第86図 縄文時代5類土器(4)



第87図 縄文時代5類土器(5)



第88図 縄文時代5類土器(6)



第89図 縄文時代5類土器(7)

6類土器（第91図）

6類土器は、口縁部はわずかに外湾し口唇部は丸味を持つ。器壁は厚く、口縁部下部に縦位の貝殻刺突文、口唇には浅い刻みを施すものである。

6類土器は、本遺跡では1点のみの出土である。その特徴は、上述のようなものである。口縁部の刺突は肋7条のものである。調整は、外面がヘラミガキで器面が滑らかになるまで調整が行われ、部分的には光沢を有する。内面は丁寧なヘラミガキとナデ調整である。

7類土器（第92図～第93図）

7類土器は、2つのタイプに分類できる。

7-a類は口縁部がやや外反し、口唇部は丸くおさめ、最大径は胴部にある。器壁は厚く外面には浅い弧状の条痕を施し、内面はナデ調整を基本とする。

7-b類は、胴部から口縁部にかけて直線状に開き、口縁部付近は横位の粗い条痕、それ以下は縦位と横位の組み合わせである。内面は基本的にはナデ調整である。

7-a類

7-a類は244～249で、その出土量から1、2個体程度の出土と思われる。上述のように口唇部はやや尖り、底部から内湾気味に立ち上がり口縁部がやや外反する器形と考えられる。施文は、細かな肋による逆U字型の間延びした弧状の条痕である。底部の立ち上り付近には縦位の条痕が施される。

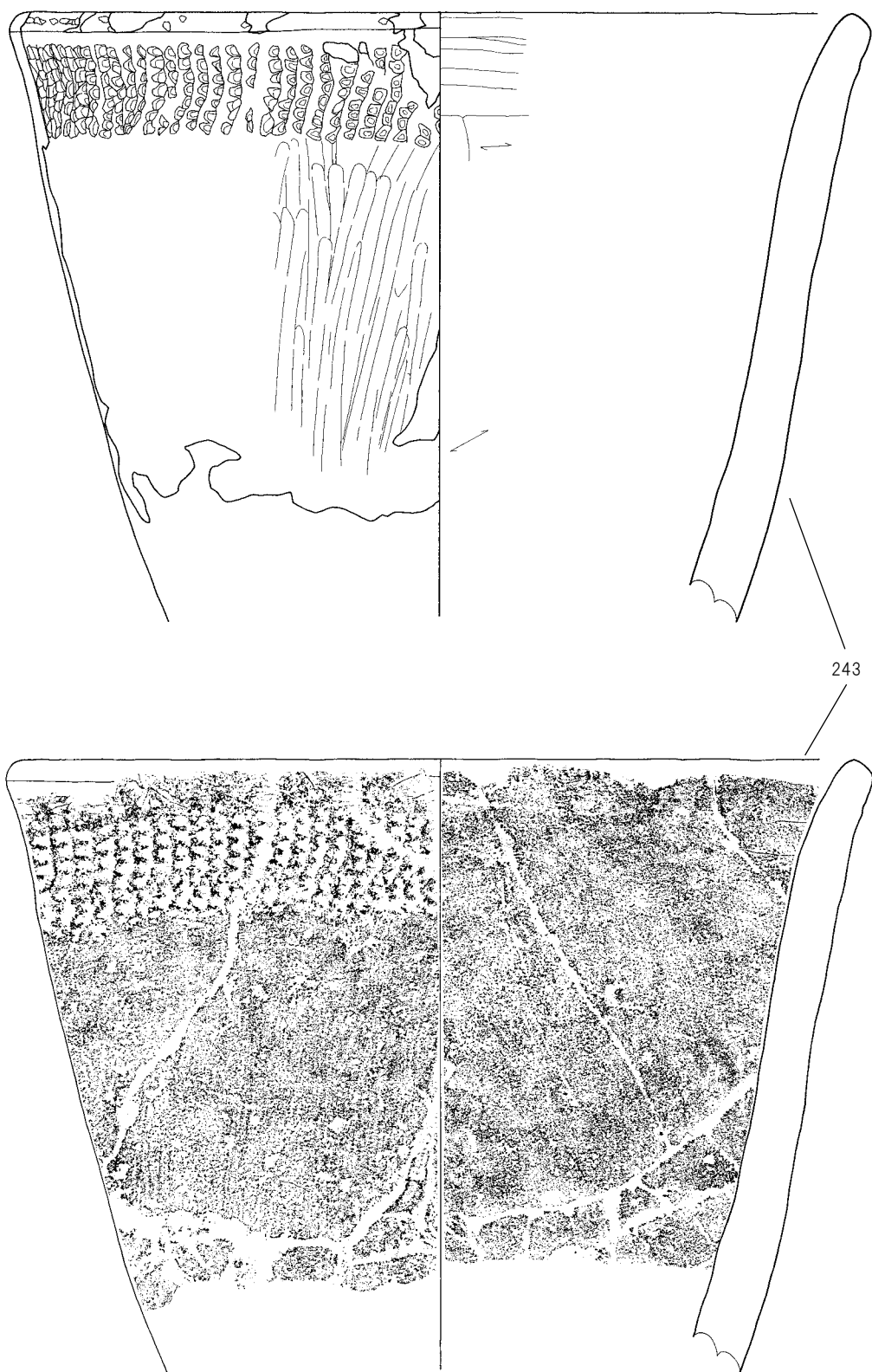
内面の調整は、ケズリの後に丁寧なナデが施されている。色調は外面が赤茶褐色、内面が茶褐色を呈するものがほとんどである

7-b類

7-b類は、250～255であり、バケツ状の器形を呈するものであると言える。口唇及び口縁端部等に刻みを施すものはなく、口縁部は横位の条痕を施し、胴部は縦位の条痕を施した後に横位の条



第90図 縄文時代5類土器(8)



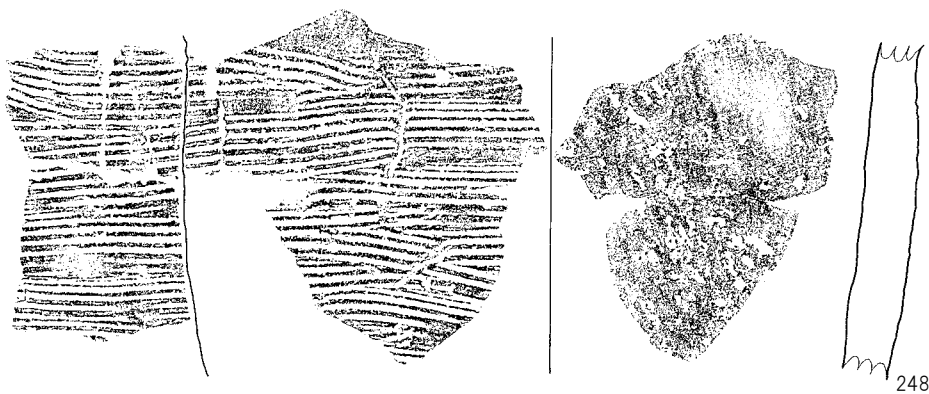
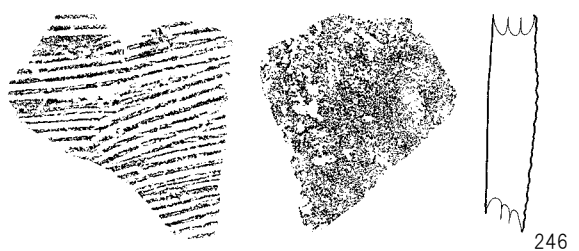
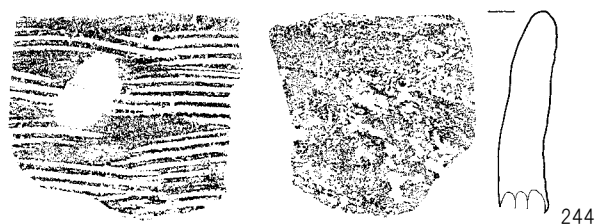
第91図 縄文時代6類土器(1)

痕を施す格子文状である。255は、縦位と横位の条痕の組み合わせであるため7-b類としたが条痕の貝殻の肋の大きさ等からすると、7-a類土器としたほうが妥当かもしれない。

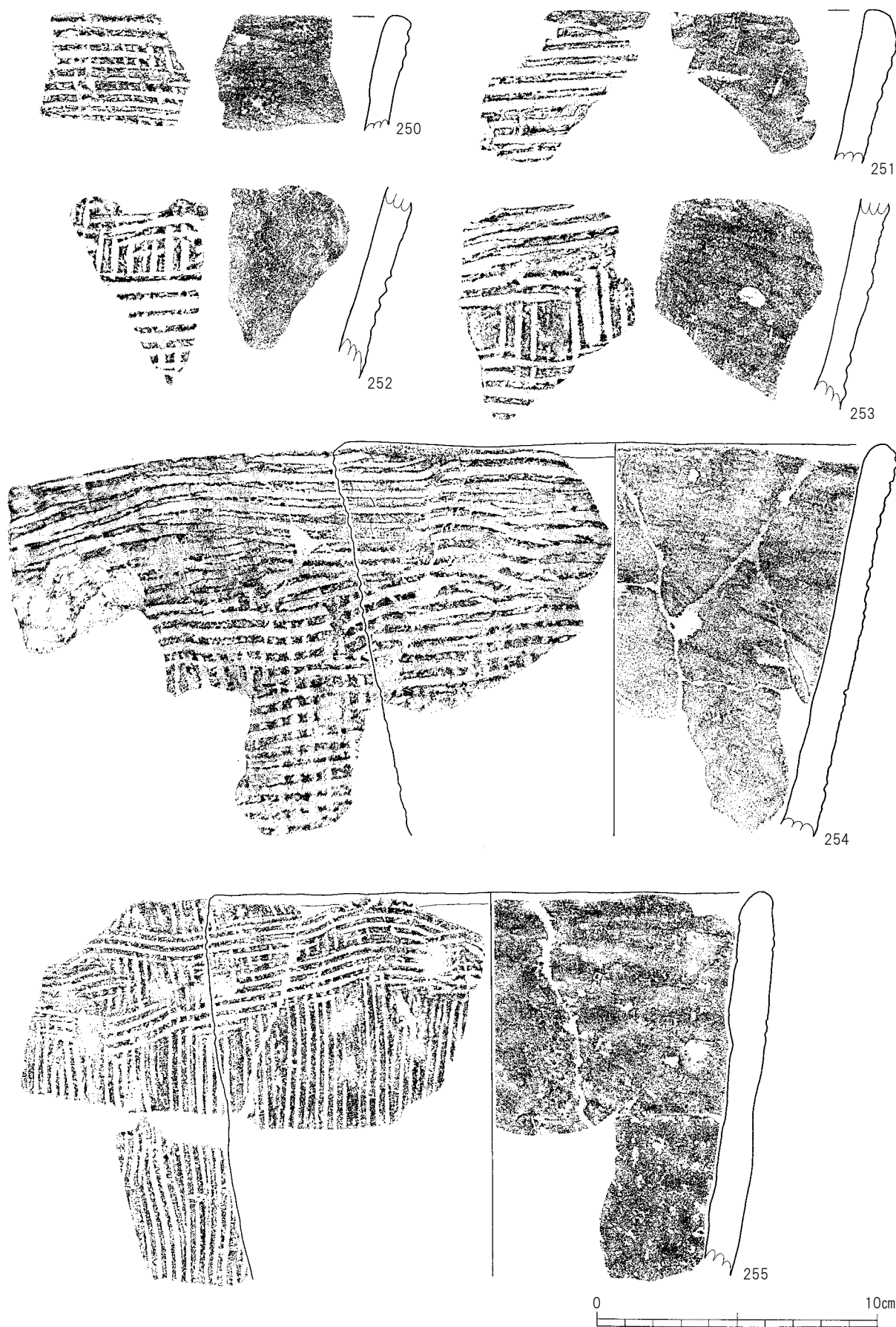
8類土器（第94・96図～第99図）

8類土器は、口唇部にやや丸味を帯びた平坦面を有し、口縁部が外反する。胴部は膨らんで平底の底部となると思われるものである。外面に押型を施すもので、楕円、山形、微細な条線状のものなどである。

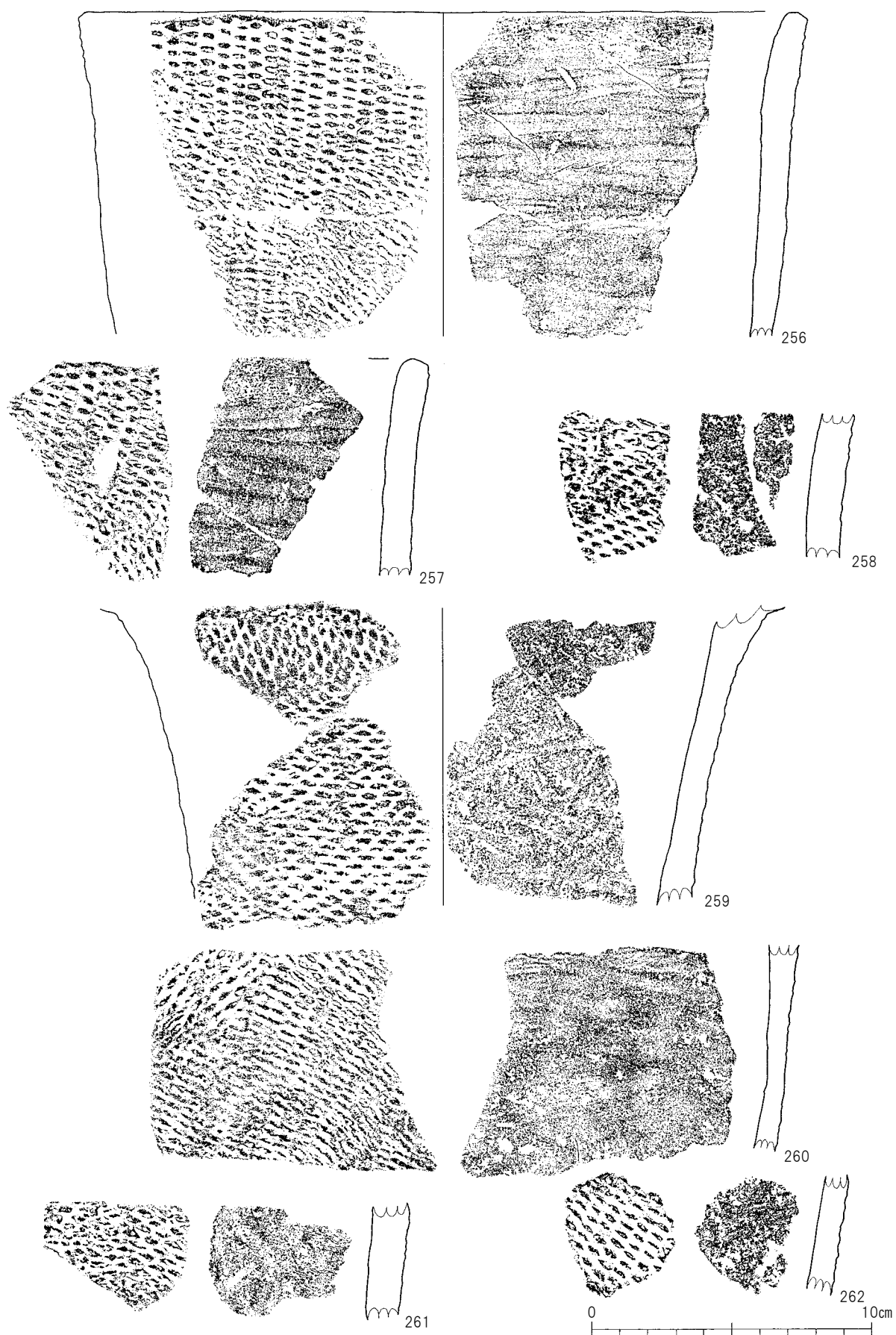
256～273は、楕円押型文である。この押型文の全容を知るような個体はないが、口縁部、胴部、底部等の資料から推測すると、「口縁部は平坦で、口唇部は丸味を帯びる。口縁部は直行し、胴部がやや張り気味で、すばまりながら底部へと至る。底部は平底である。口縁部内面には施文を行わない。内面の調整は、大き目のヘラ状の工具による丁寧なナデ



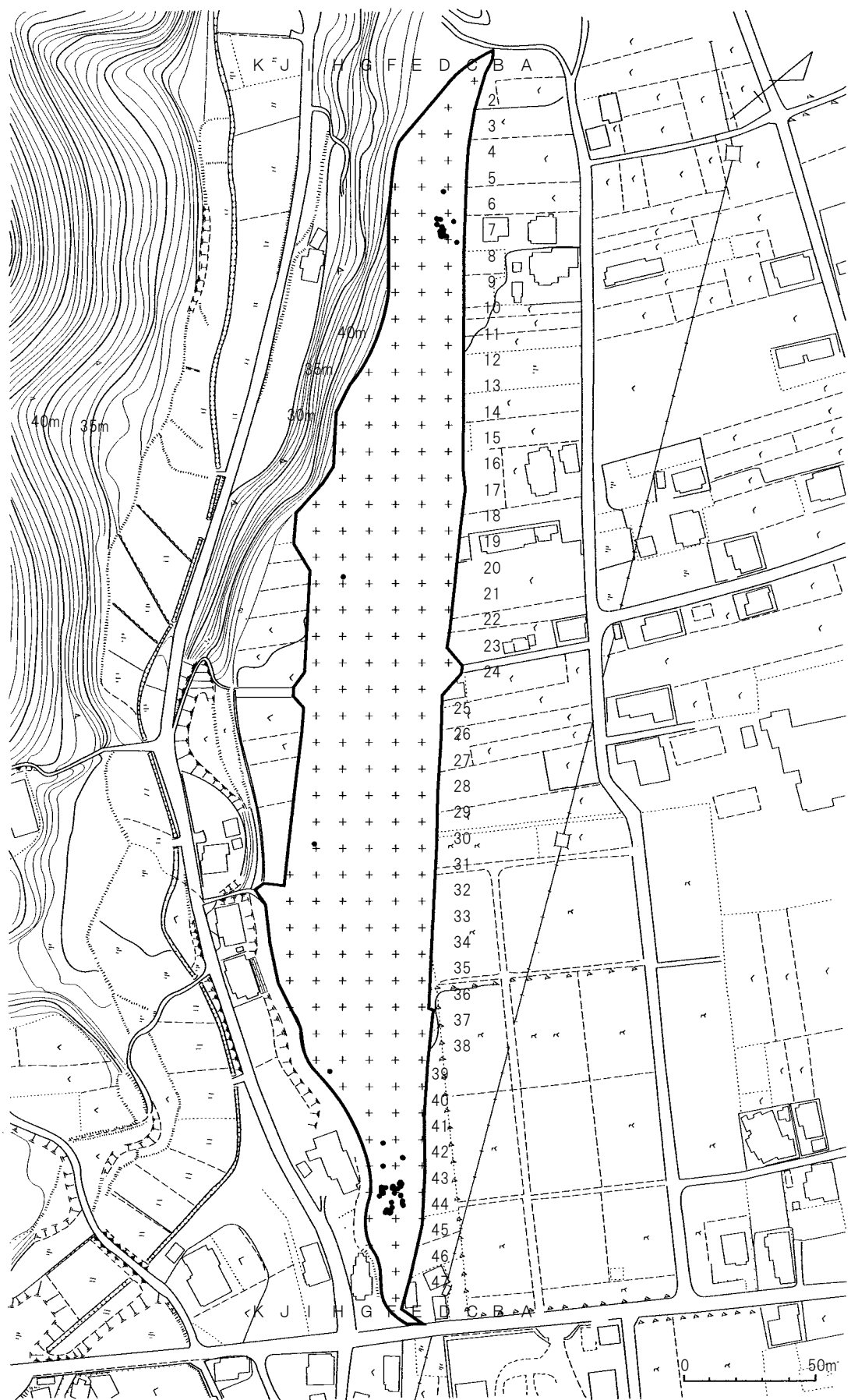
第92図 縄文時代7-a類土器(1)



第93図 縄文時代7-b類土器(1)



第94図 縄文時代8類土器(1)



第95図 縄文時代8類土器出土状況

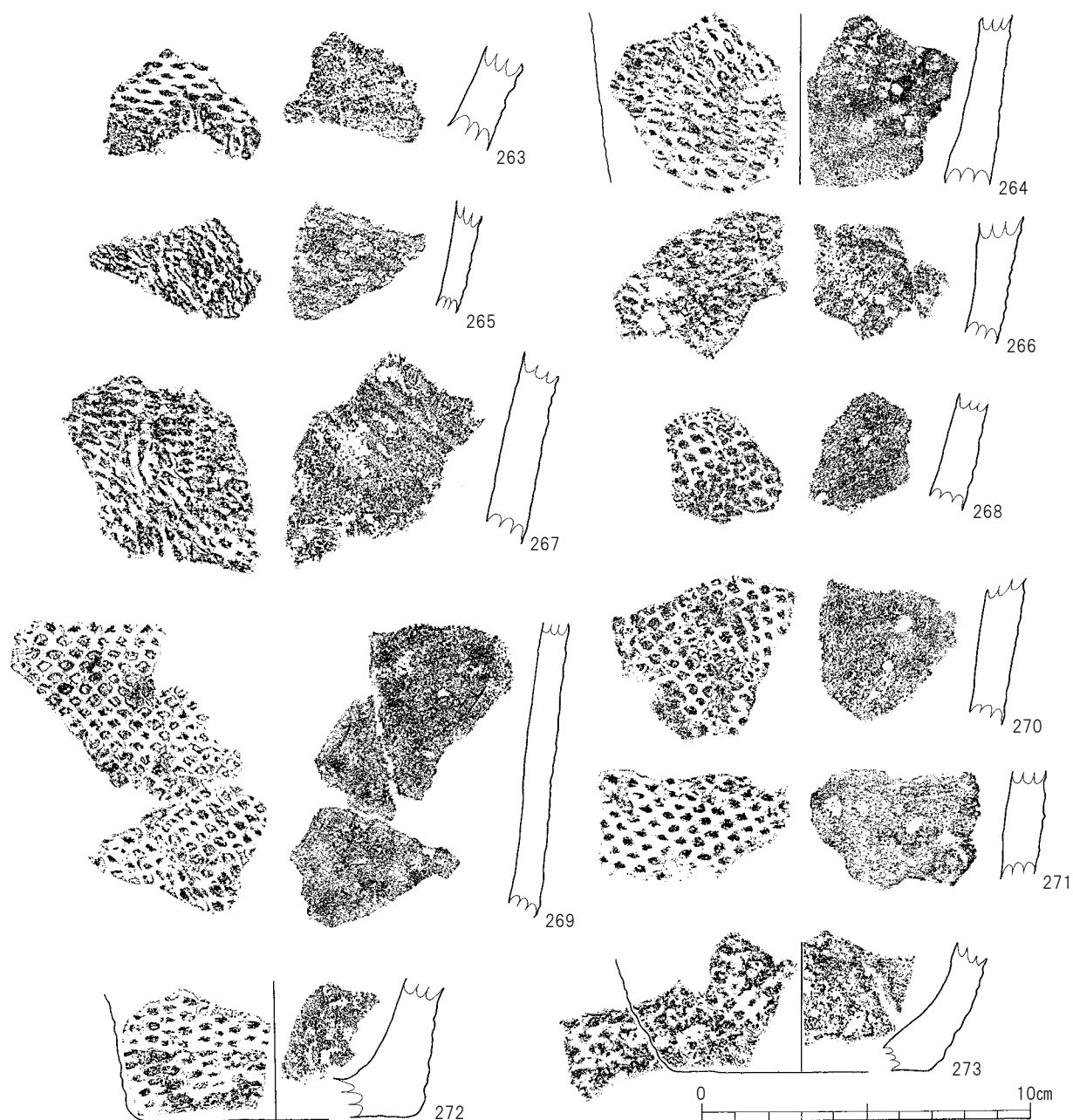
と思われる。」となる。

256・257は口縁部で、上述のような器形を呈すると思われる。256の口縁部は原体を横位に、胴部は斜位にころがして施文している。257もほぼ同様である。

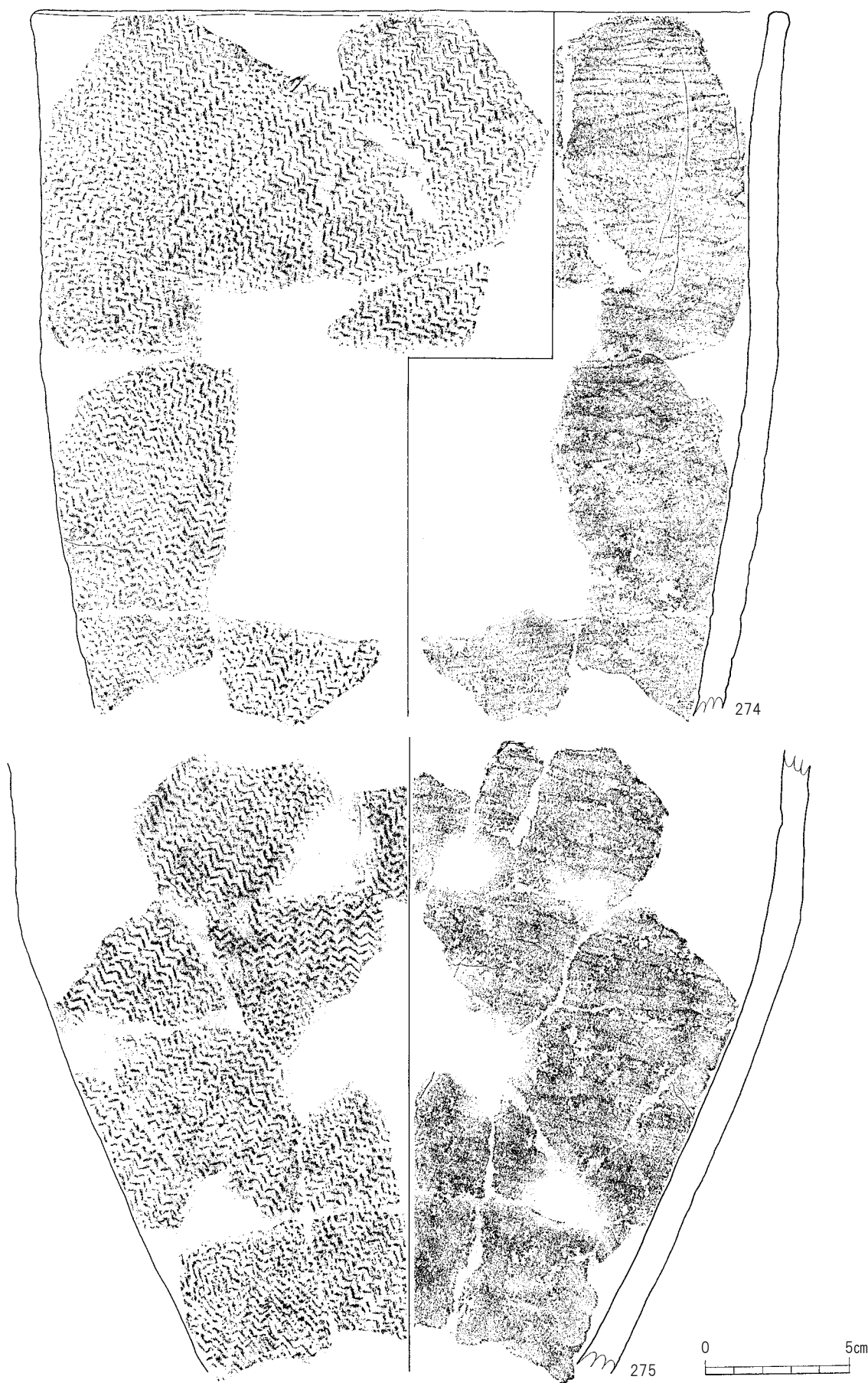
259は、上述の器形とはやや異なり、胴部から外反し、口縁部は肥厚するものと考えられる。施文は口縁部が縦位で、胴部が横位である。

258・260～271までは、胴部片である。258・260～267までは米粒状の楕円押型文の原体であるが、268～271は粗大な楕円押型文の原体である。272・273は底部である。両者とも平底であるが、272は直線的に胴部へ立ち上がるもので、273は内湾気味に立ち上がるものである。

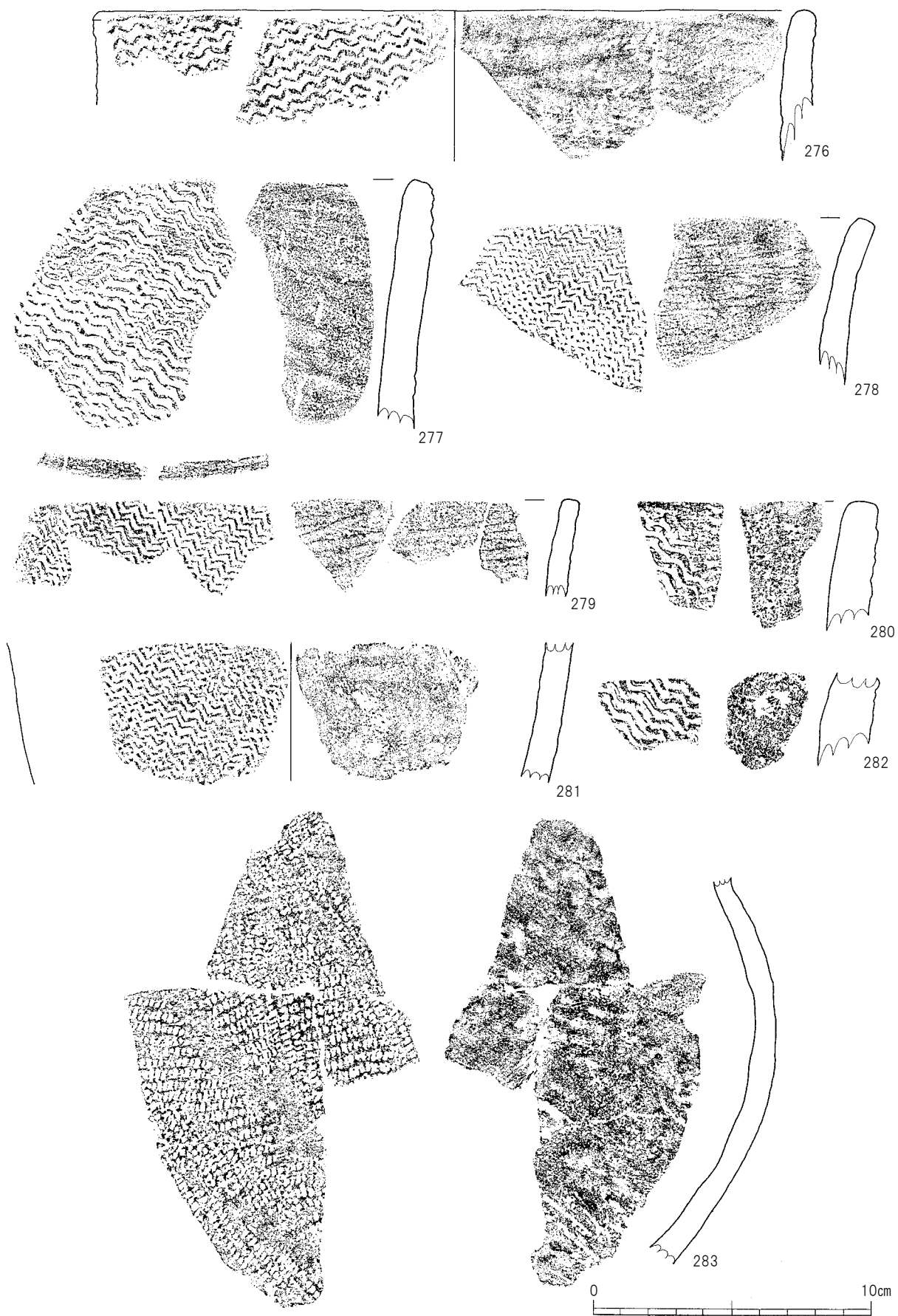
274～282は、山形押型文である。277、280、282はやや施文原体の文様が大きい。他は、微細山



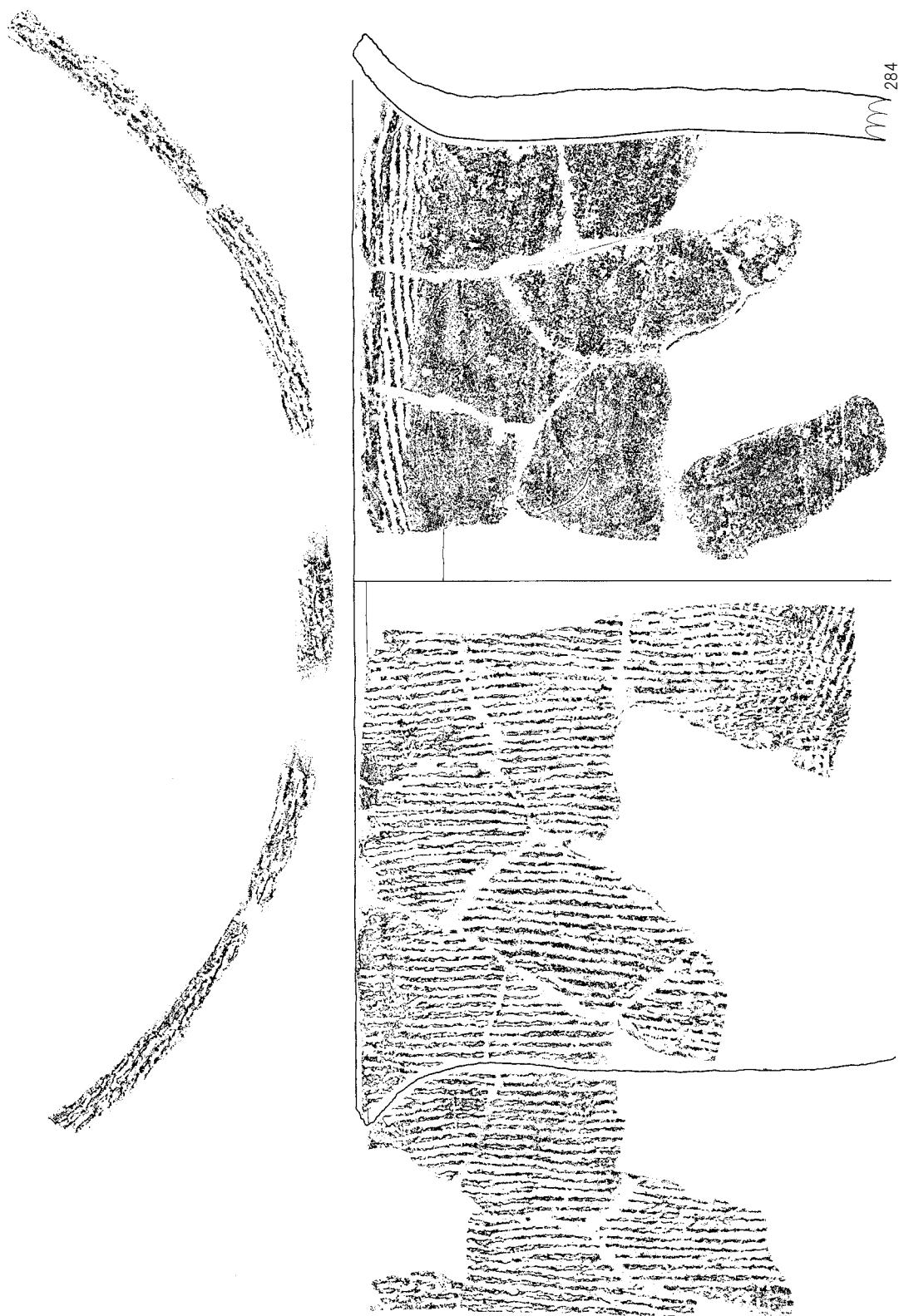
第96図 縄文時代8類土器(2)



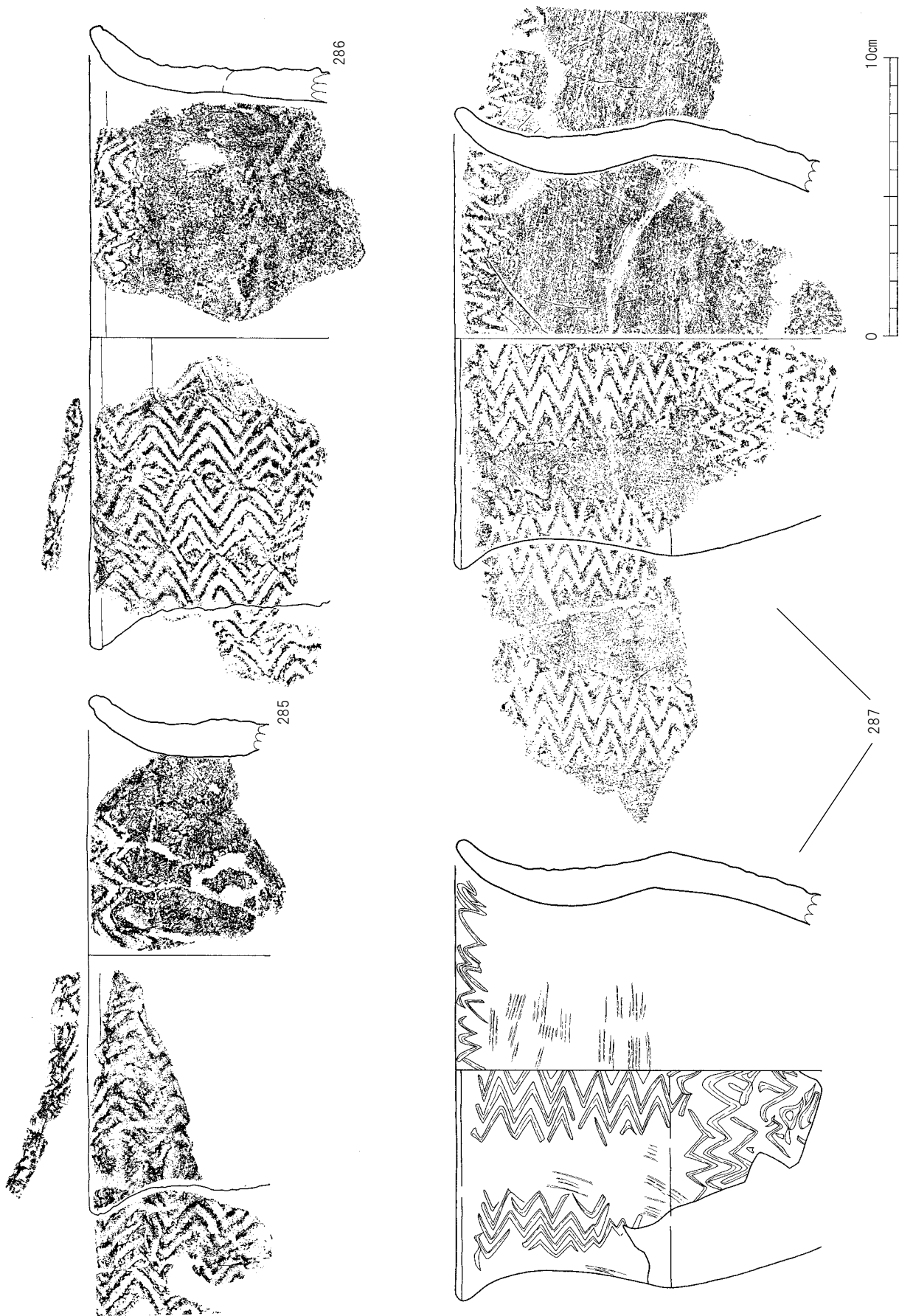
第97図 縄文時代8類土器(3)



第98図 縄文時代8類土器(4)



第99図 縄文時代8類土器(5)



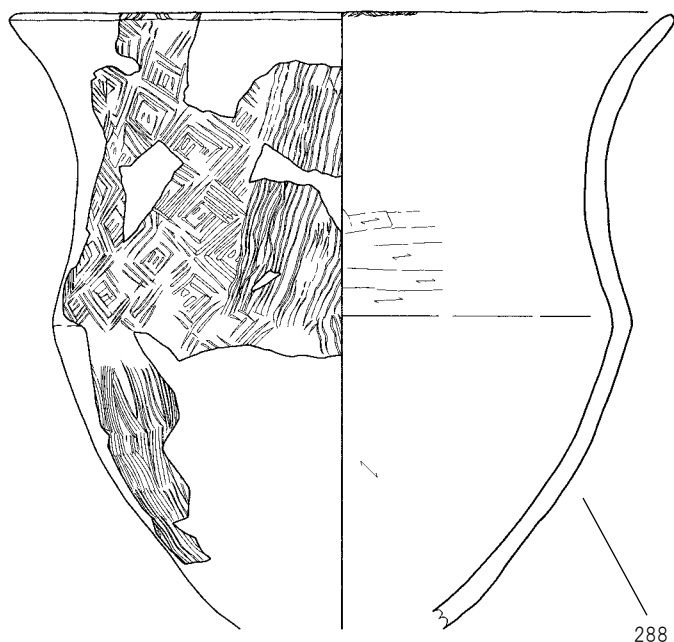
第100図 縄文時代9類土器(1)

形文と言えよう。この押型文の全容を知るような個体はないが、口縁部、胴部等の資料から推測すると、「口縁部は平坦で、口唇部はやや丸みを帯びる。口縁部は直行し、胴部がやや張り気味で、すぼまりながら底部へと至ると思われる。底部の出土がないため、底部の形状は不明である。また、口縁部内面には施文を行わない。内面の調整は、大きめのヘラ状の工具による丁寧なナデと思われ、器壁は薄い。

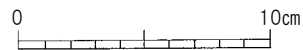
274は、ほぼ上述のような特徴を持つものである。施文は微細山形押型文の原体を斜位に全面に転がして施文している。275は、口縁先端部を欠損する。器形は、やや胴が張り、胴部の屈曲部から直線的に底部へ至るものである。施文は基本的に斜位を基本とするが、底部の立ち上り付近は施文が乱れる。

276～280は、口縁部の破片である。いずれも真っ直ぐに立ち上がる口縁で、施文は、斜位である。281・282は、胴部片で、281が微細山形文、282がやや大きめの山形が施文されたものである。

283は球形の胴部を呈す



288



第101図 縄文時代9類土器(2)

るもので、口縁部や底部の出土は見られず、また、施文も押型文と考えられるが、原体についてもはっきりせず、その全容が捉えられないものである。

284は、条線押型文である。口唇部は平坦で外傾し、口縁径31cmである。口縁部は外反し、緩やかに内湾しながら底部へと至るものと考えられる。外面には、縦位の条線押型文、口縁内面には、横位の条線押型文を施す。また、口唇部にも同様の文様を施すものである。色調は赤茶褐色であり、内面の調整は横位のケズリを主とするものである。

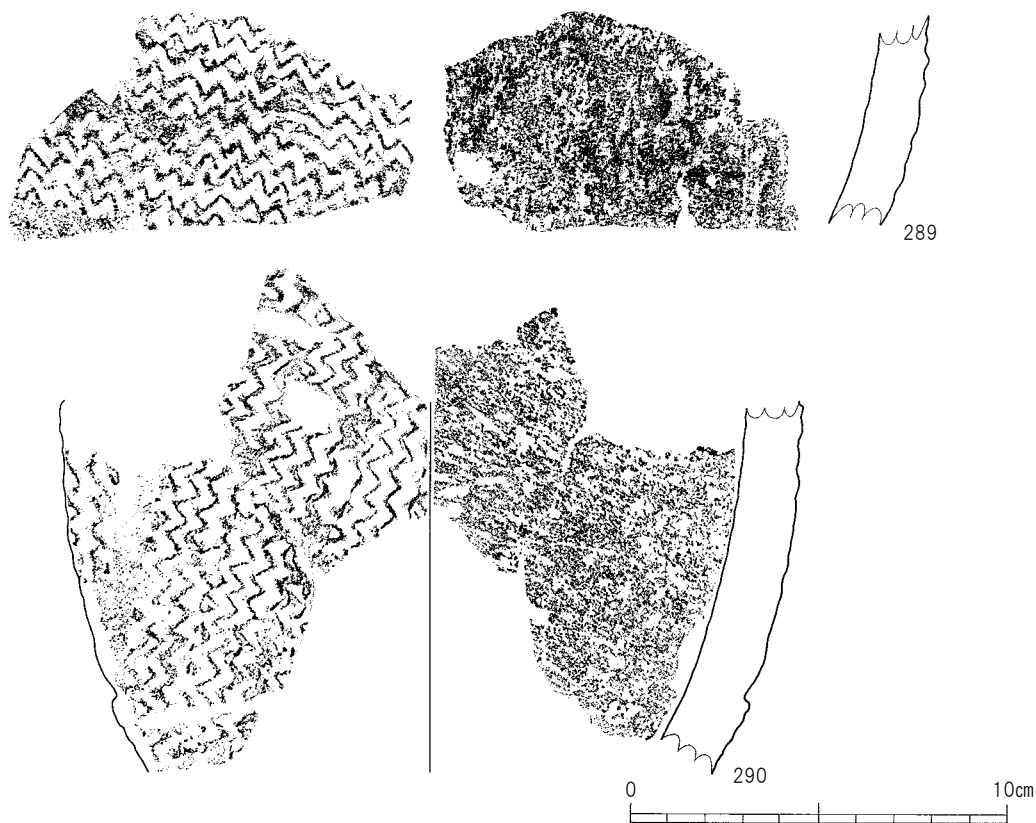
9類土器（第100図～第102図）

9類土器は、口縁部が大きく外反し、頸部でくびれて胴部中央部で張り出して屈曲しながら底部へ至るものである。外面及び口縁部内面には、山形押型文や曲線状の押型文が施されるものである。

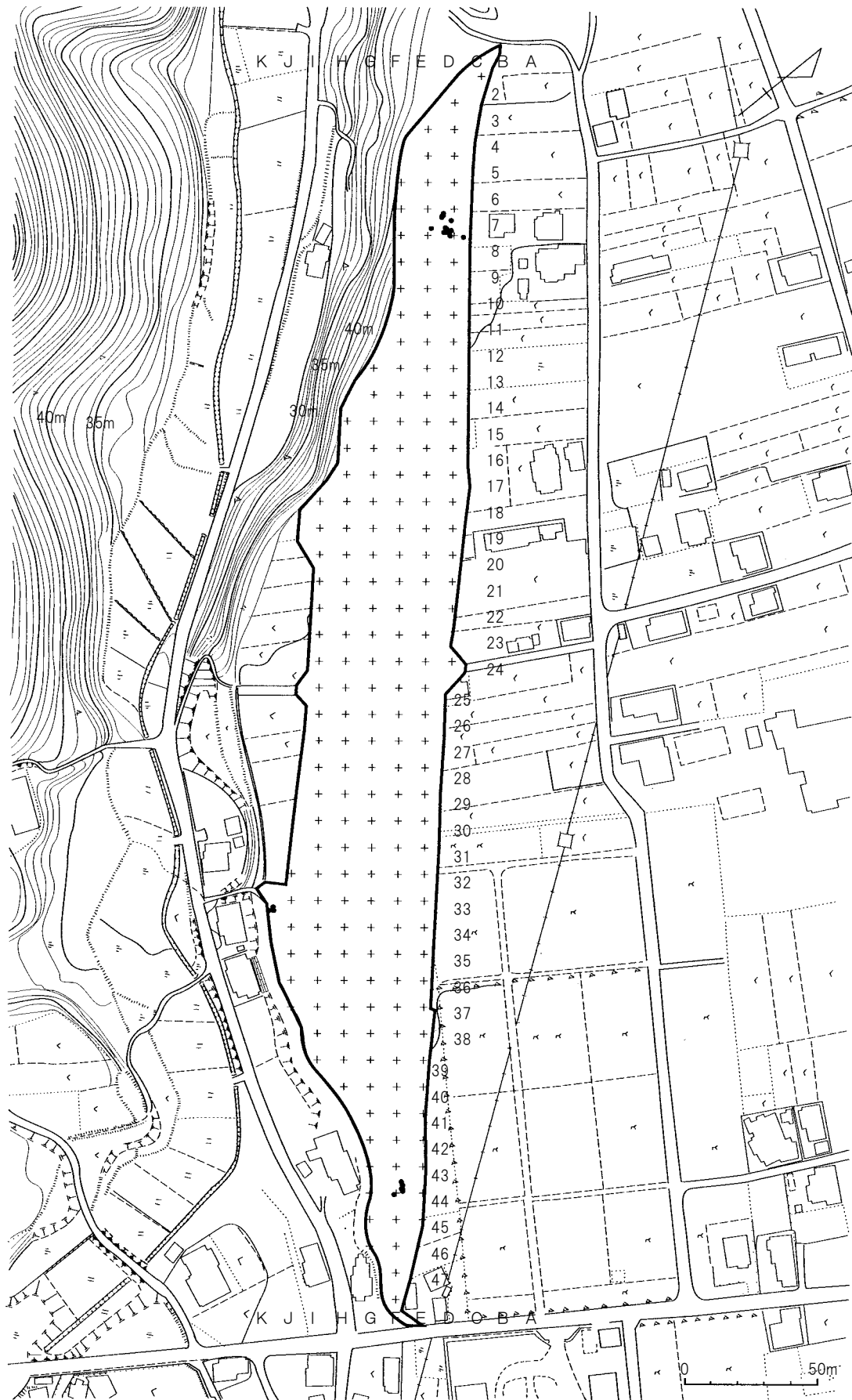
285は復元口縁径18cmを測り外反する口縁部である。口唇部、外面及び口縁部内面に押型文が施文されている。施文は、粗い山形の原体により、外面が縦位、内面が横位に施されている。286は、285よりややひとまわり大きく復元口縁径が23cmである。器形、施文、胎土、色調は285とほぼ同様である。

287は、口縁部が外反し、頸部でくびれて胴部中央部で張り出して屈曲しながら底部へ至るものである。復元口縁径18cm、外面の施文は、縦位の山形押型文を約3cmの間隔で有文部・無文部・有文部と交互に施文を行っている。口縁部内面には、横位の山形押型文を施している。口唇部の施文については、風化のため判然としない。内面の調整は、横位のケズリである。

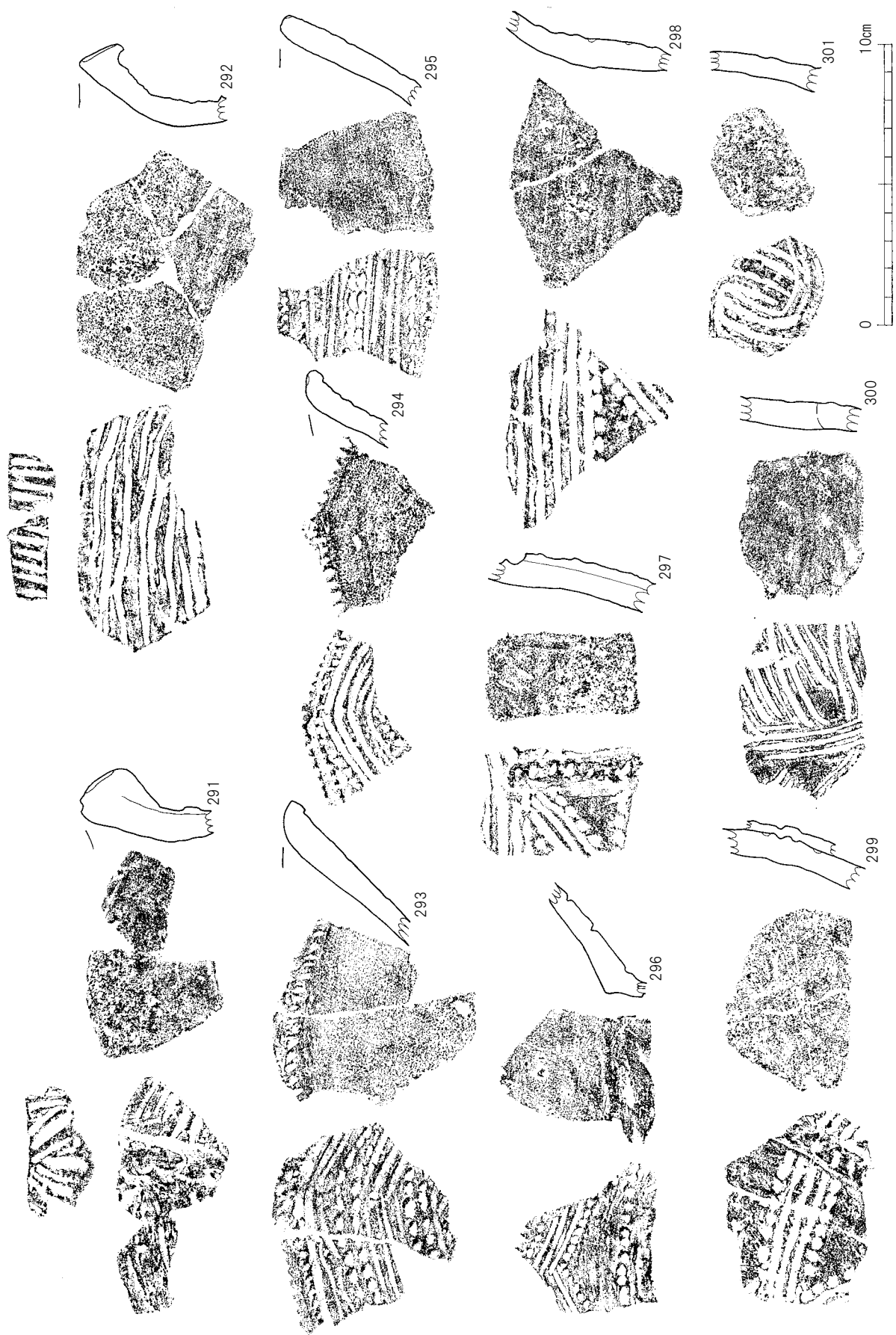
288は、本遺跡で出土した9類土器の中では最大のもので、復元口縁径27cm、残存部器高23cmを測るものである。285～287は、単一の施文原体を用いて施文を行っていたが、288は、胴屈曲部よ



第102図 縄文時代9類土器(3)



第103図 縄文時代9類土器出土状況



第104図 縄文時代10—a類土器(1)

り上位は、山型押型文と条線状の緩やかな曲線による押型文の施文を交互に行っている。また、胴部以下は、前述の曲線状の施文を残存部全面に施している。口唇部及び口縁部内面には5mmほどの幅で山形押型文の一部を施文している。

289は、底部近くの破片で、色調は赤茶褐色を呈し、器壁も1.8cmと厚い。外面は左上から右下への斜位の山形押型文、内面は縦位のケズリである。

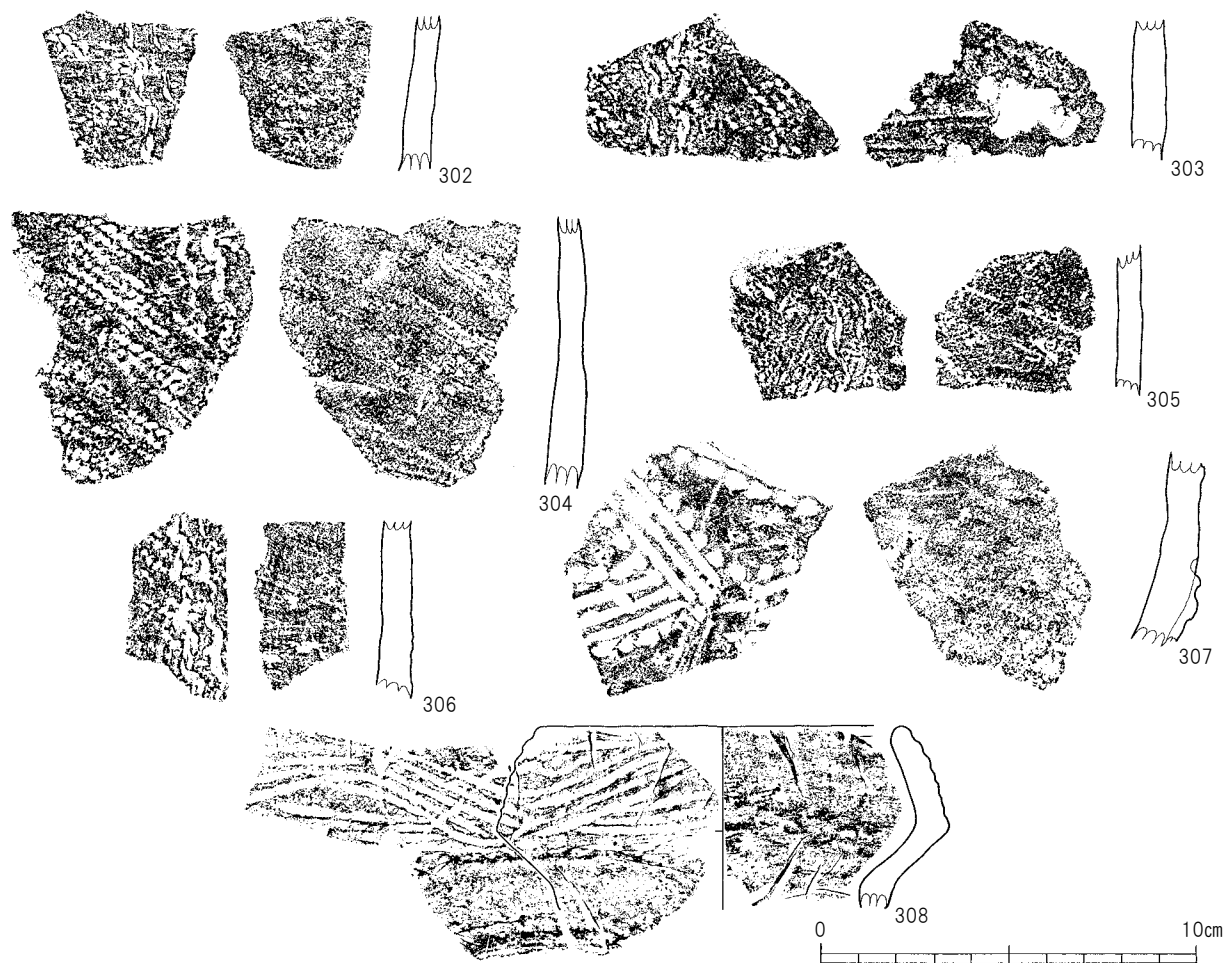
290は、胴部付近の破片で、内湾する部分である。色調は赤茶褐色を呈し、器壁も1.8cmと厚い。外面は右上から左下への斜位の山形押型文、内面は斜位のケズリである。

9類の出土状況は遺跡の北西部と南西部、南東部に部分的に出土しているのみである。

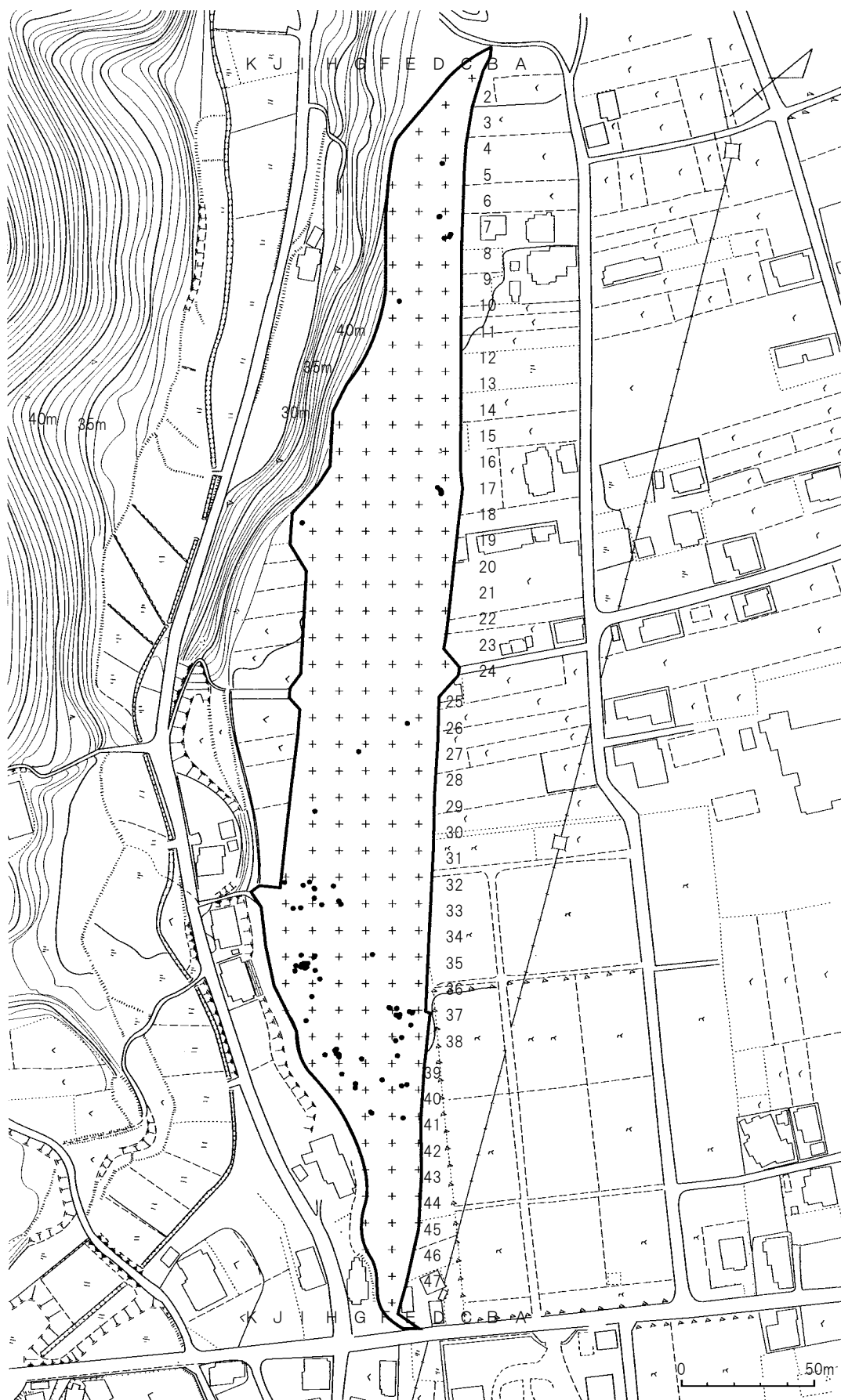
10類土器（第104図～第105図）

10類土器は、その出土量は数点と少なく、本遺跡における10類の全容は明らかでない。特徴としては、口縁部に幾何学文を施し、結節縄文を有する一群である。

291から295は口縁部片である。291・292は外反する口縁部で、端部は肥厚するものである。口唇部には縦位の刻みを施し、口縁部には、沈線などの文様を施す。293～296は、口縁部が大きく外反するもので、刻目突帯・沈線及び連点文によりその文様を構成するものである。297～301・307は、胴部片である。297～299は頸部へ至る部分の内湾する胴部で、口縁部と同様に沈線文及び連点文により文様を構成している。297・299は縦位・斜位の刻目突帯が施されている。



第105図 縄文時代10-a類土器(2)



第106図 縄文時代10類土器出土状況

300は縦位の沈線と横位の沈線、301は曲線状の沈線で文様を構成している。307も沈線と連点文および縦位気味の突帯状の粘土の盛り上がりにより文様が構成されている。302～306は、胴部片で外面に結節縄文を施すもので、内面は横位及び斜位のケズリによる調整である。

308は、頸部がしまり外反しながら立ち上り、口縁部で「く」の字状に屈曲するもので、口唇部は舌状となる。袋状口縁の壺形土器の口縁部であり、口縁部最大径は、約10cmである。口縁部には、櫛状の工具による横位の曲線文が施されている。

10類の出土状況は、遺跡の南東部に多く出土する傾向にあるが、出土状況は散在的で、破片も小さいものが多い。

11類土器（第108図～第112図・第114図～第131図）

11-a類（第108図～第112図）

11-a類は、円筒形の胴部にラッパ状に開いた口縁部を有するもので、口縁部に幾何学文や刺突文を施し、胴部に主として撚糸文系の縄文を施すものである。

309～315・318・321は、頸部から口縁部にかけての破片である。器形は口縁部で大きくラッパ状に外反し、やや内湾しながら立ち上がる、口縁部の中ほどでさらに屈曲する。いわゆる二重口縁を呈するもので、口縁部は基本的に波状が多い。

309は、口唇部に斜位の浅い刻みを施し、口縁外側の端部にも刻みを施す。その下に横位の刻目微隆帯を施し、数条の沈線文、一条の連点文、数条の沈線文、刻目微隆帯文と順に施文している。内面の調整は、丁寧なナデである。310は、口唇部には斜位の刻みを施し、口縁部上端は2条の横位の沈線文、その下には斜位の沈線文、刻目微隆帯文の順で施文している。口縁部内面には、縦位の2条の沈線文を施している。311は、波状を呈する口縁部である。施文は、310とほぼ同様である。

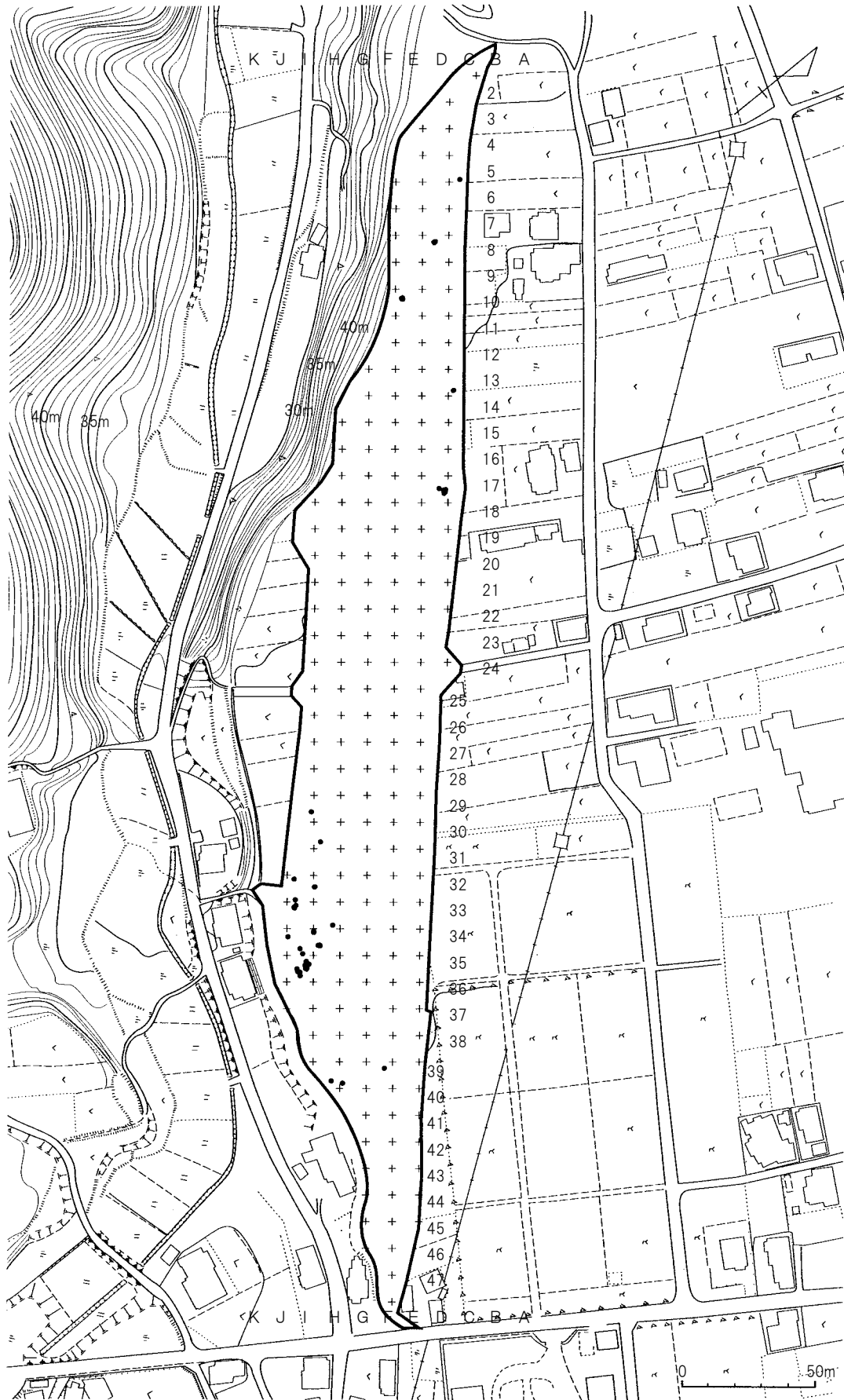
312は、波状を呈する口縁である。口唇部に縦位の刻みを施し、口縁には3条の刻目微隆帯文、連続刺突文、沈線文、連続刺突文、刻目微隆帯文をやや間隔を開けながら施し、頸部へと至るものである。口縁中央の屈曲部はやや肥厚する。口縁部内面には施文は行われていない。313・314・315もほぼ312と同様の施文である。321は口縁部先端のみの破片であるが、刻目微隆帯文、沈線文、連続刺突文、その下に沈線文、刻目微隆帯文と続くものと思われる。

316は、平坦な口縁を呈し、口縁端部は右上から左下への刻みとその逆の刻みにより、羽状に見える。その施文の下に沈線文、連続刺突文、刻目微隆帯文を施して頸部へ至るものである。317は、平坦な口縁を有し、頸部から内湾しながら口縁端部へと至る器形である。頸部内面には明瞭な稜が観察される。施文は、口縁端部に刻みを施し、その下に波状の連点文、同じく沈線文、連点文を施し、頸部へと至る。刻目微隆帯文及び口縁内面には施文は行わない。320・322も同様の施文と思われる。318は頸部から口縁の屈曲部までの破片で、数条の刻目微隆帯文が観察される。

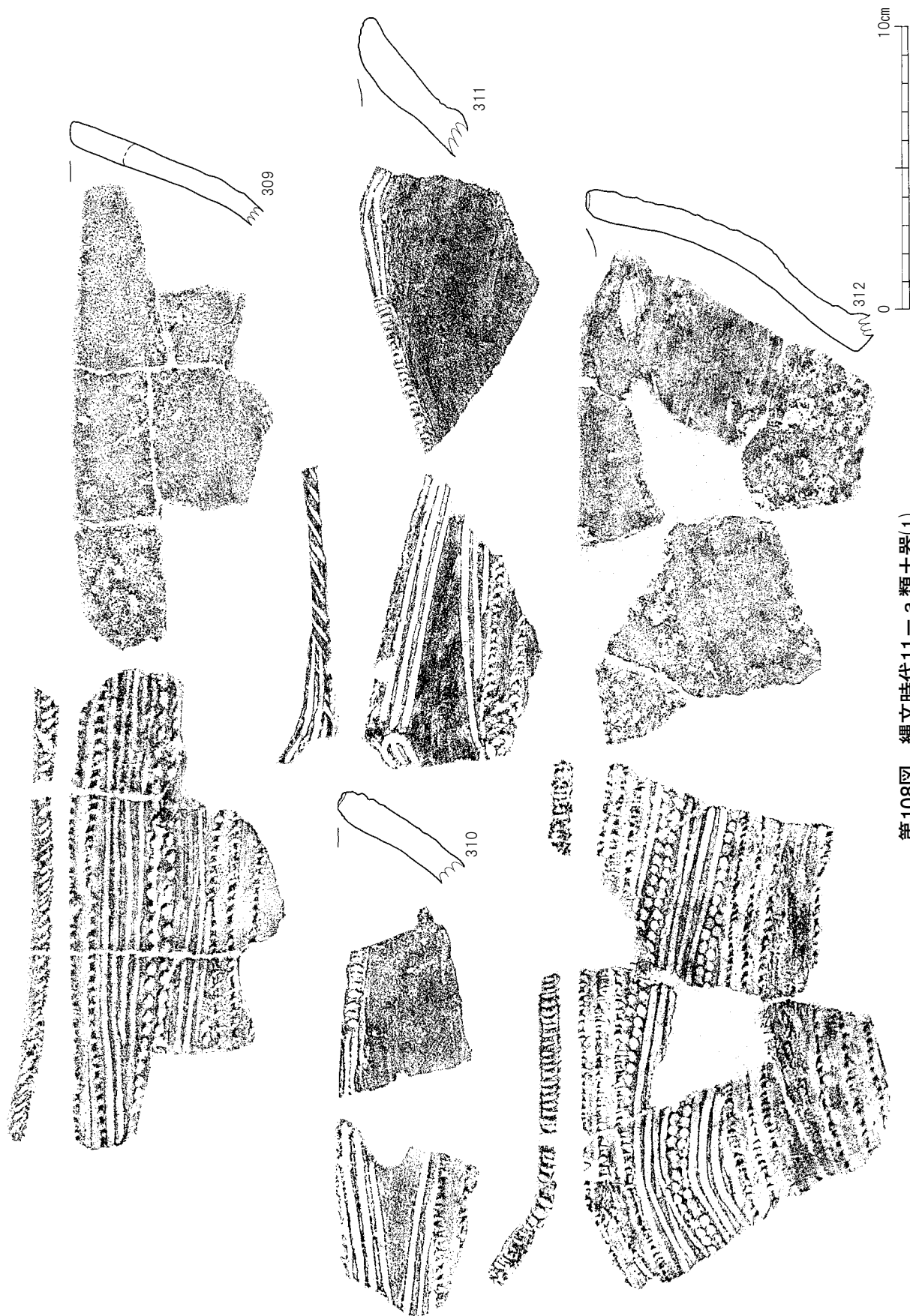
319・323・324は、内傾する胴部から大きく外反する口縁部の破片である。頸部外面に3条の刻目微隆帯文を施す。323は胴部屈曲部と思われる部分にも刻目微隆帯文が観察される。この2個体は壺形土器の可能性がある。

325～339は、円筒状の胴部であるが、その施文から2つのタイプに分けられる。

325～330までは、胴部に撚糸文や網目文が施されるものである。329は、その施文の上に横位の3条のヘラによる沈線が巡る。331～339は、ヘラ書き文の中に縄文系の文様を満たすものである。



第107図 縄文時代11-a類土器出土状況



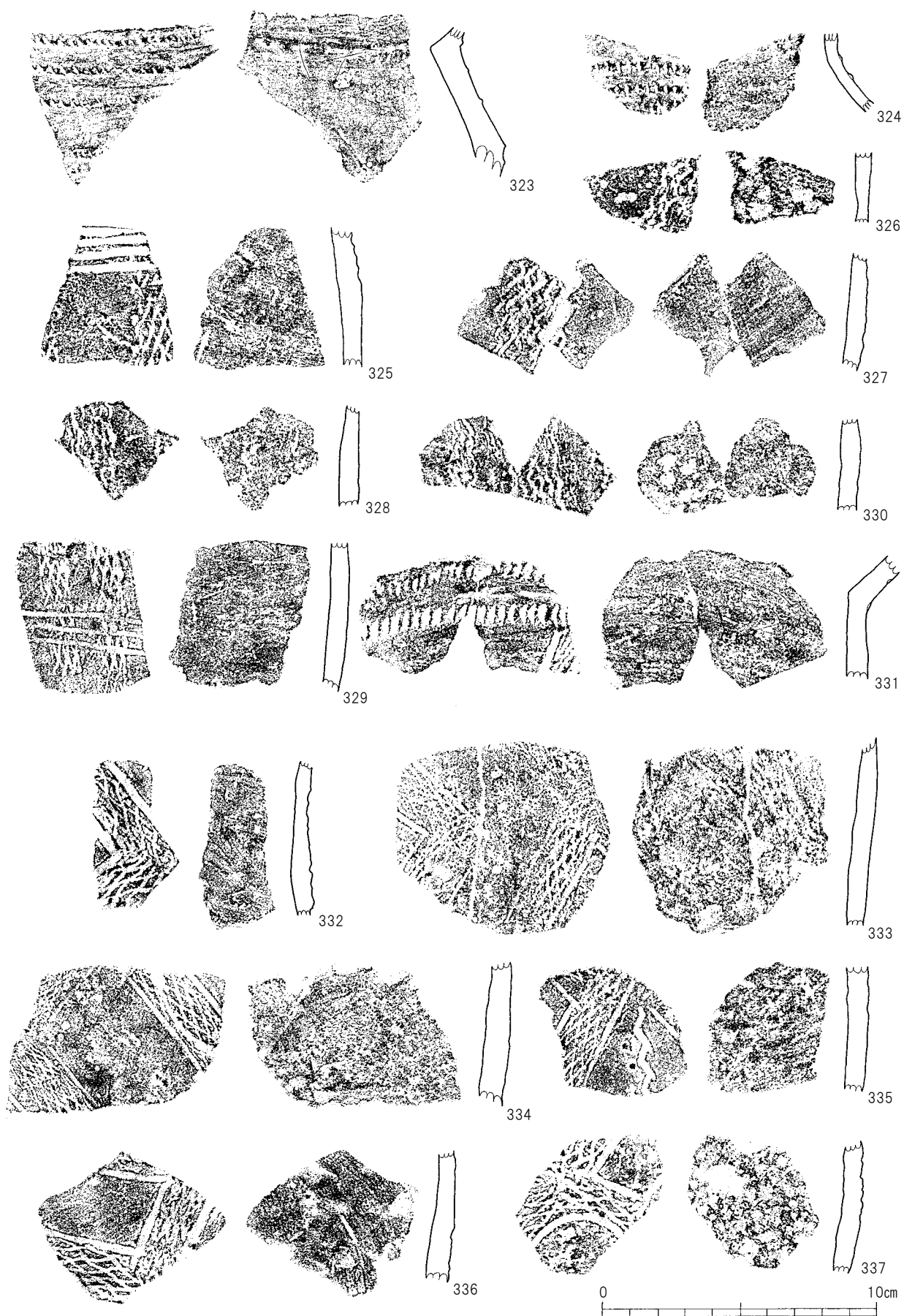
第108図 縄文時代11-a類土器(1)



第109図 縄文時代11-a類土器(2)



第110図 縄文時代11-a類土器(3)



第111図 縄文時代11-a類土器(4)

340は、ヘラで施した中に縄文を施すものである。341は胴部に縄文状の文様が若干見えることから、11-aとしたものである。

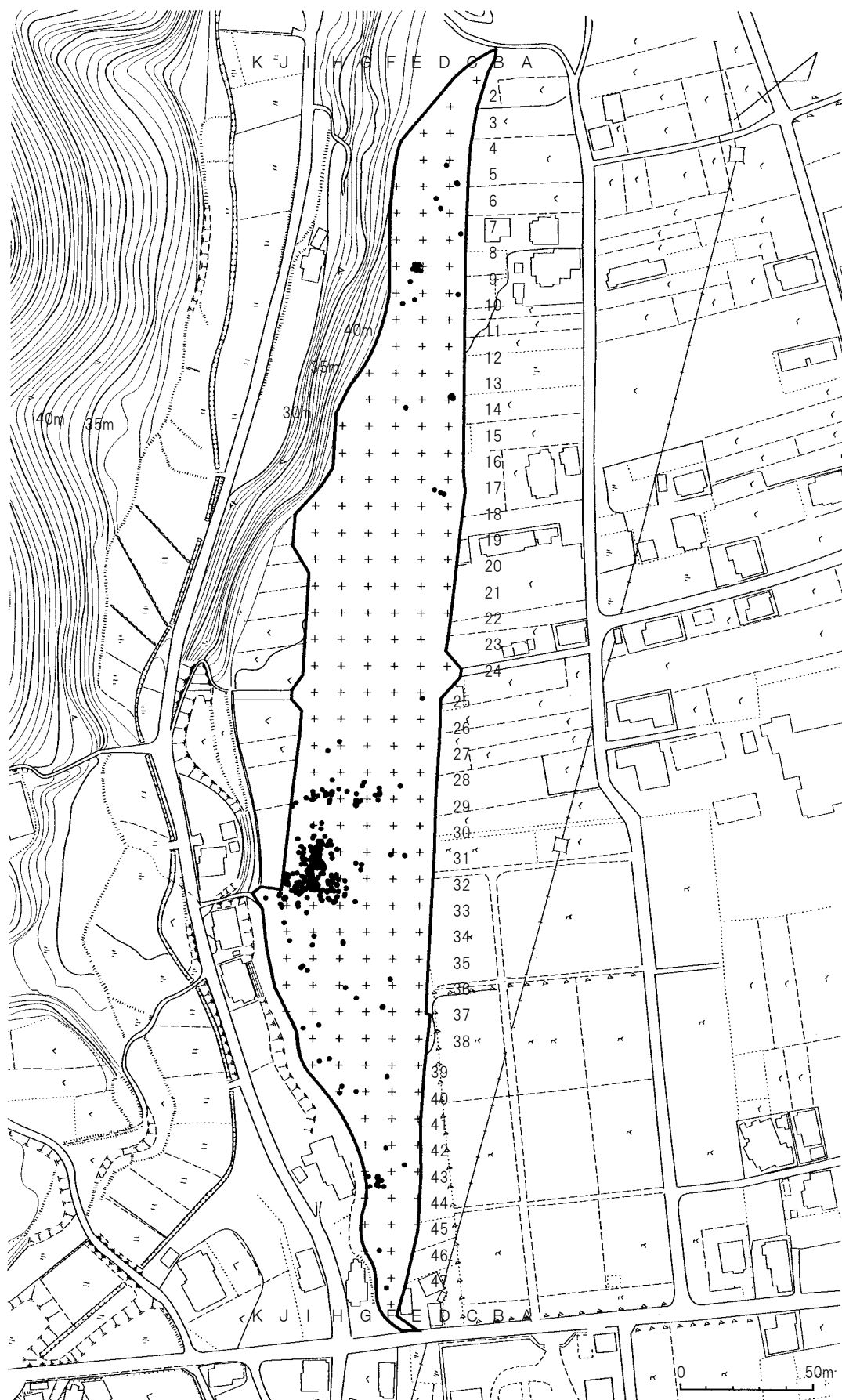
11-b類 (第114図～第129図)

342～436は、11-b類である。

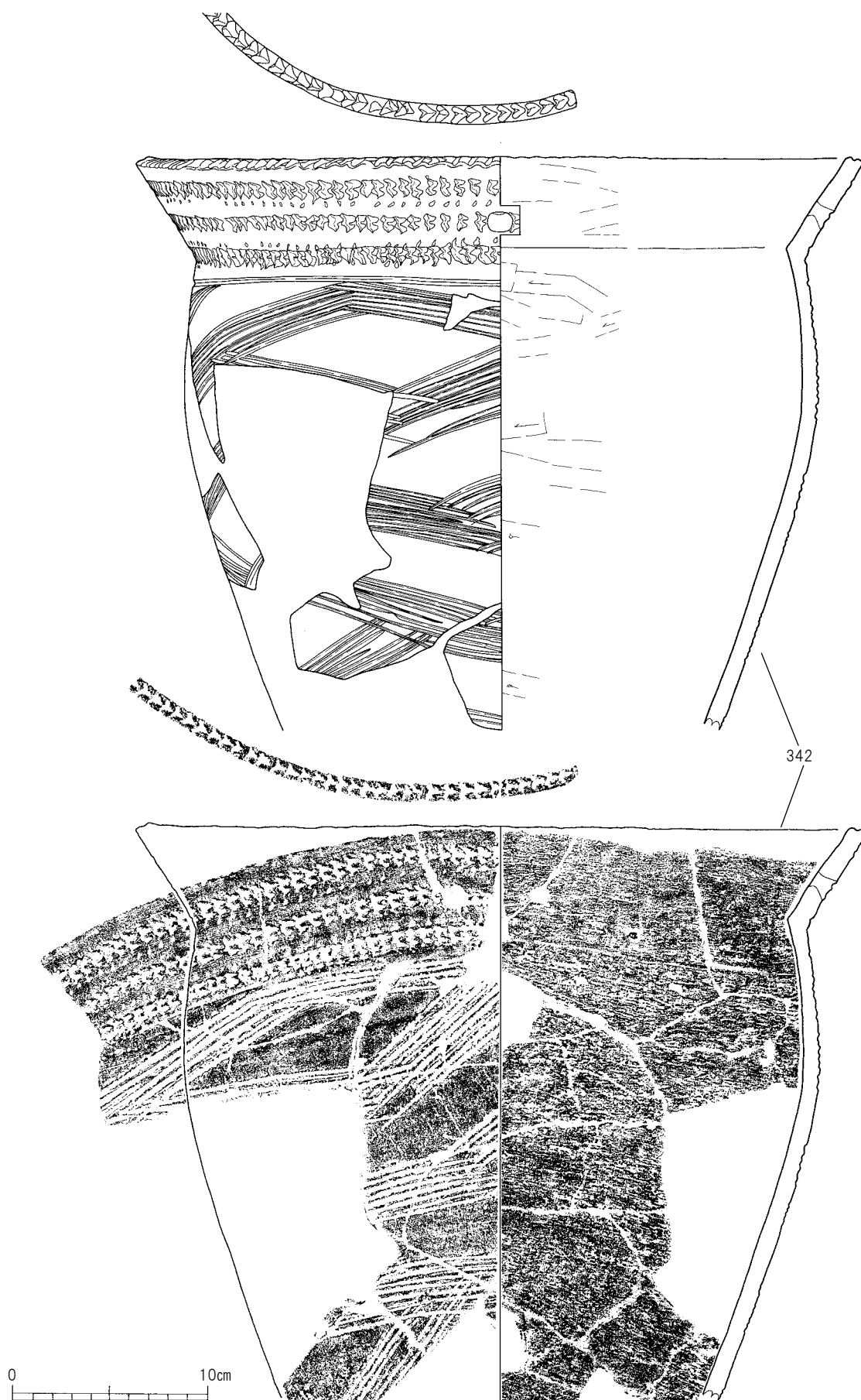
11-b類は、外反する口縁部に、締まった頸部、胴部は張りがあり、内湾しながら底部へと至るものである。施文は、口唇部には連続的な刻みを施す。口縁部は、貝殻による連続刺突文や横位や縦位の条痕文、胴部は同様の刺突文と帯状の貝殻経条痕が施されるものや帯状の貝殻条痕のみが施されるものなどがある。内面には文様は施さず、調整は横位のケズリが中心である。



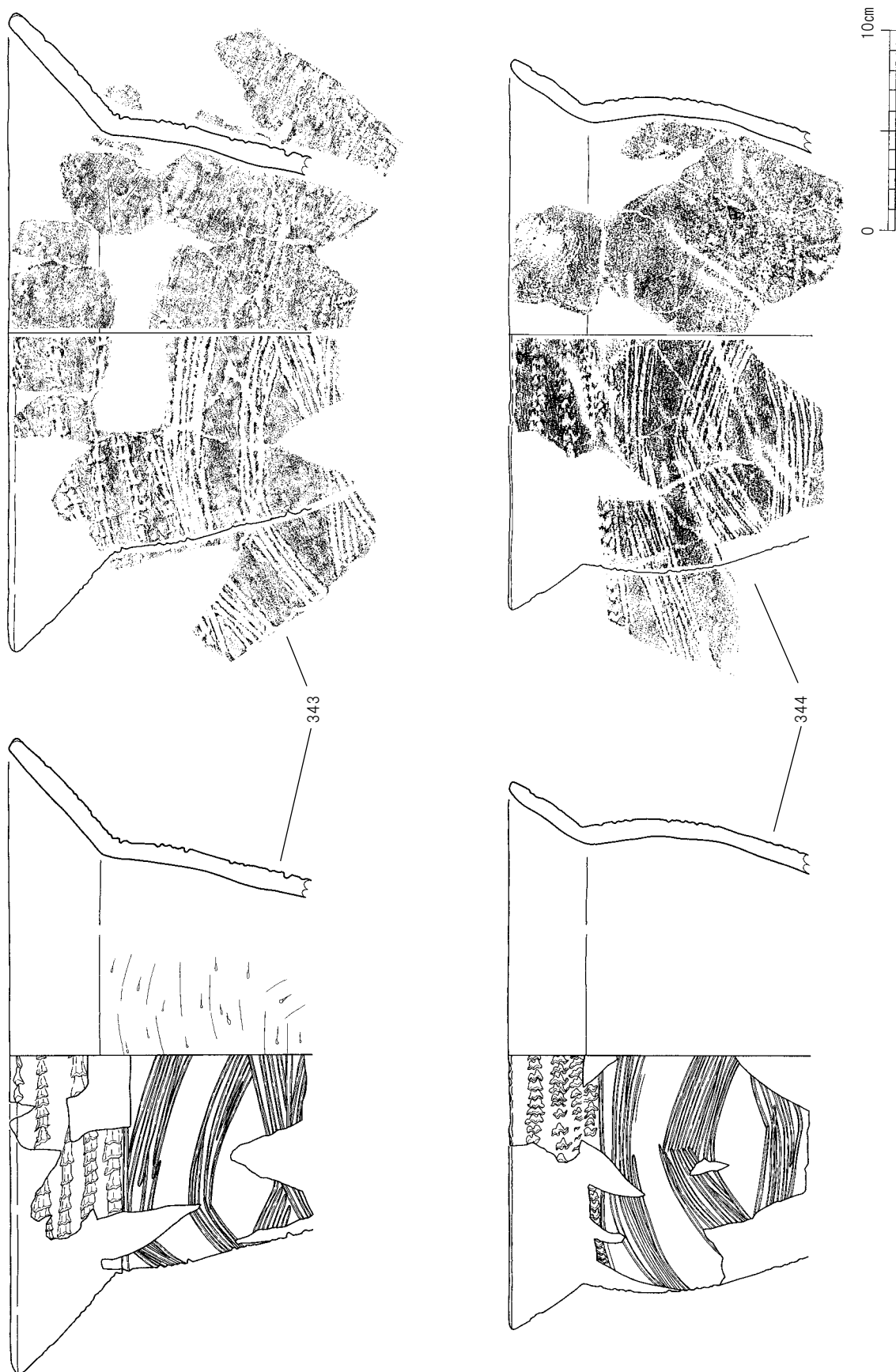
第112図 縄文時代11-a類土器(5)



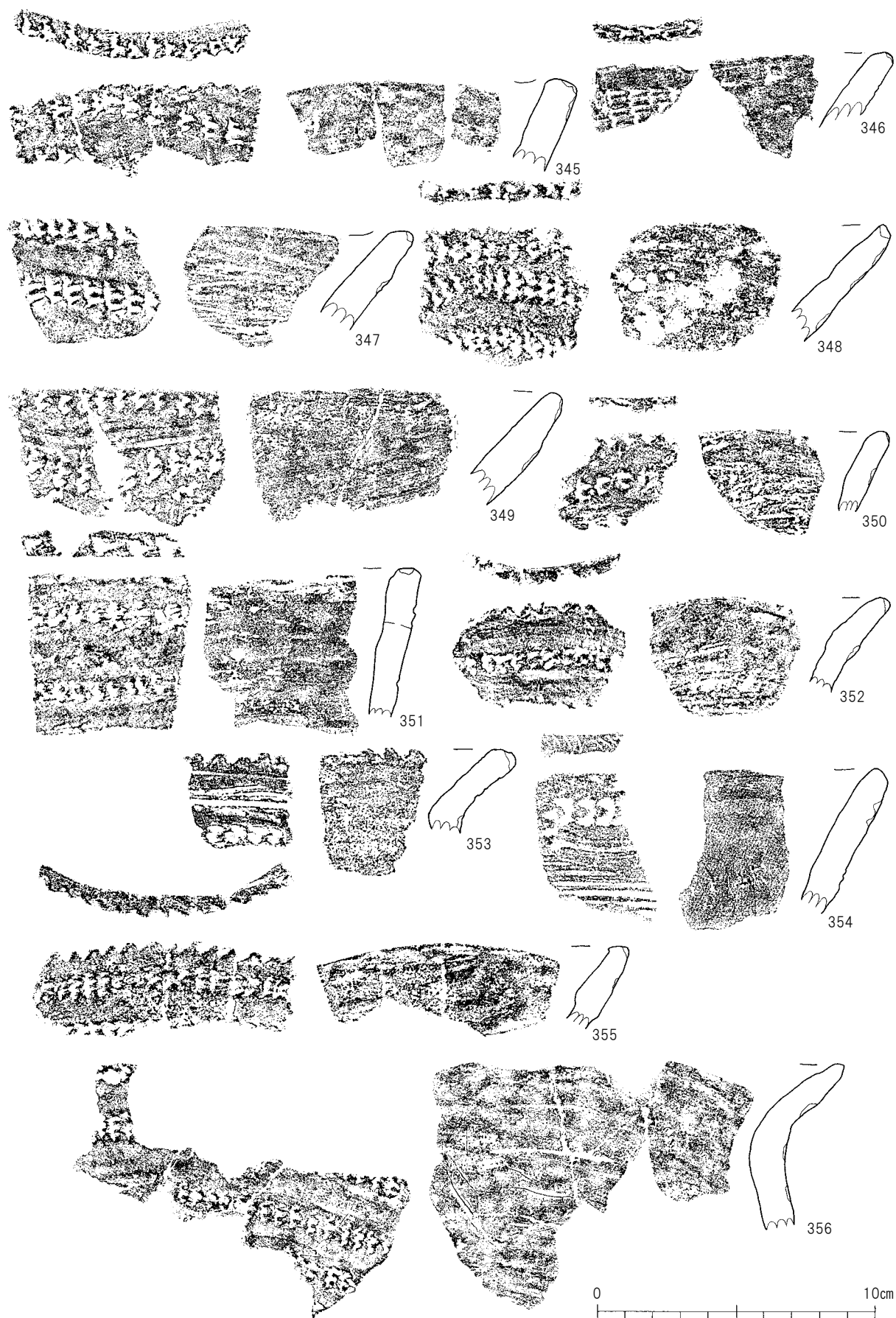
第113図 縄文時代11-b類土器出土状況



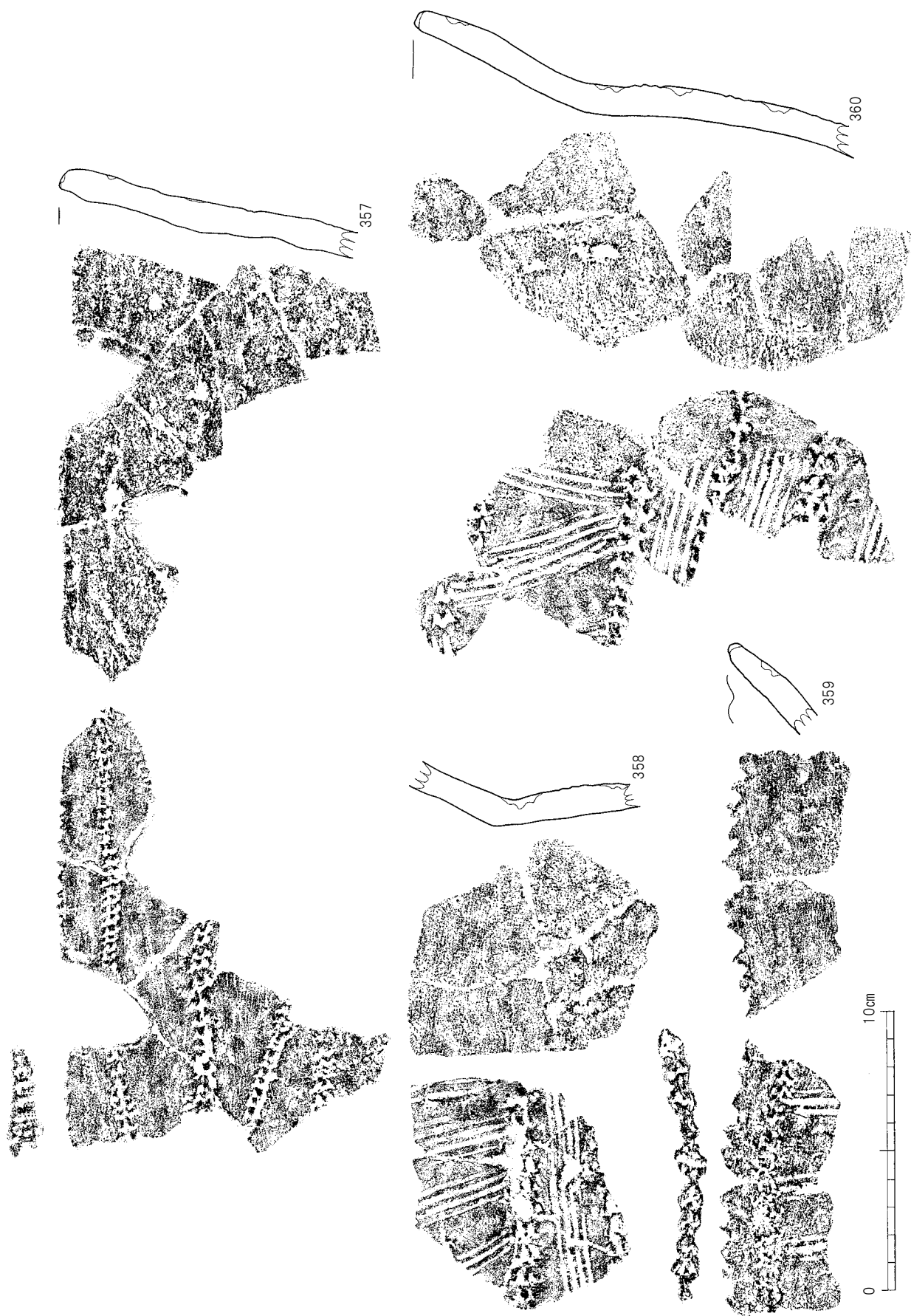
第114図 縄文時代11-b類土器(1)



第115図 縄文時代11－b 類土器(2)



第116図 縄文時代11-b類土器(3)



第117図 縄文時代11—b 類土器(4)

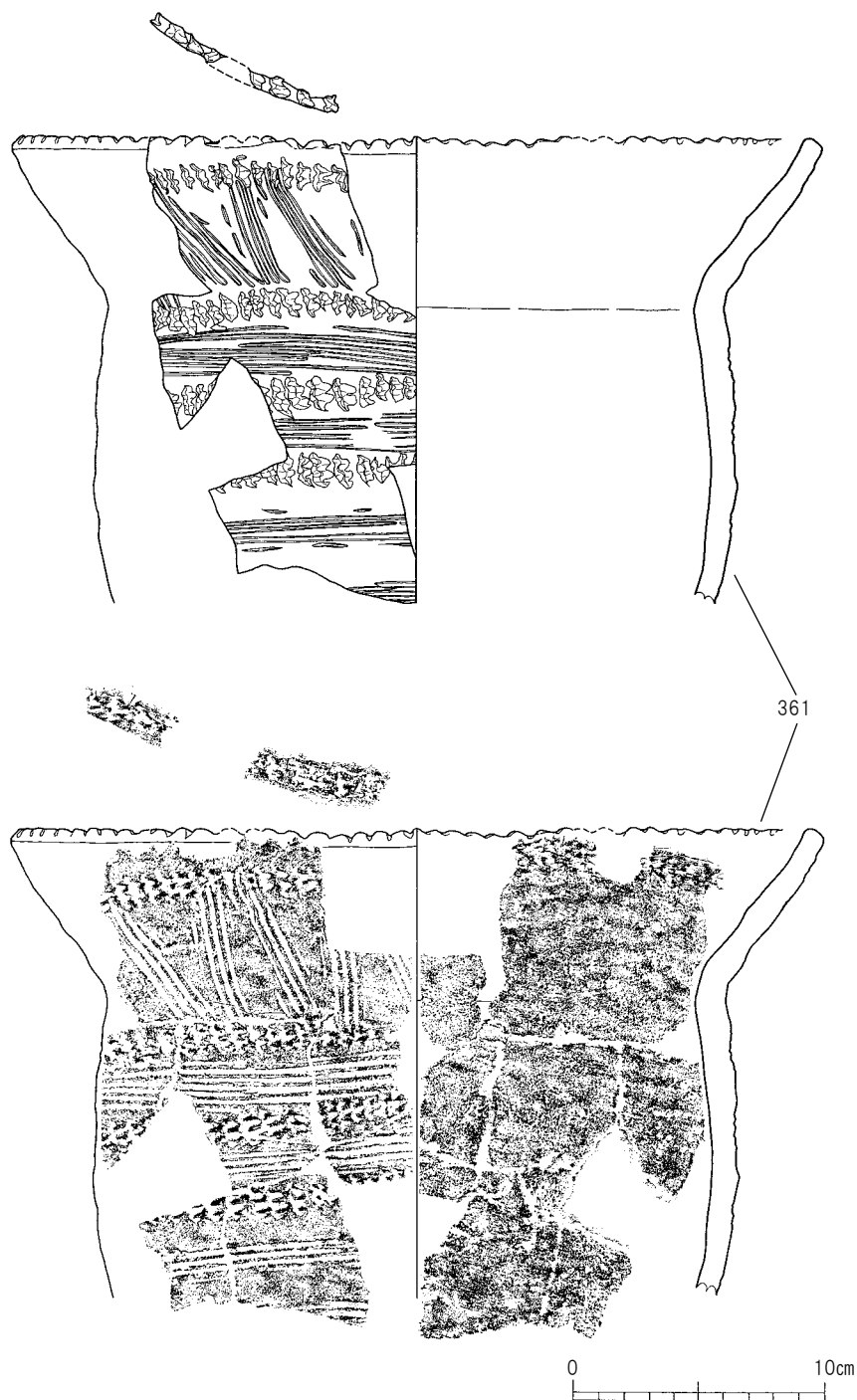
342～357は、口唇部に貝殻による連続的な刻み、口縁部には、横位の貝殻刺突による連続文を数条、胴部は斜位の帯状の貝殻文条痕を施すものである。

342は、復原口縁径が、約45cmと本類でも大きめのものである。344の器形及び文様は342と同様であるが、やや小ぶりである。343は、342と文様の構成はほぼ同様であるが、口縁部が大きくラッパ状に開き、胴部最大径が頸部付近にあるものである。

345～357は、上述と同様な個体の口縁部の破片である。

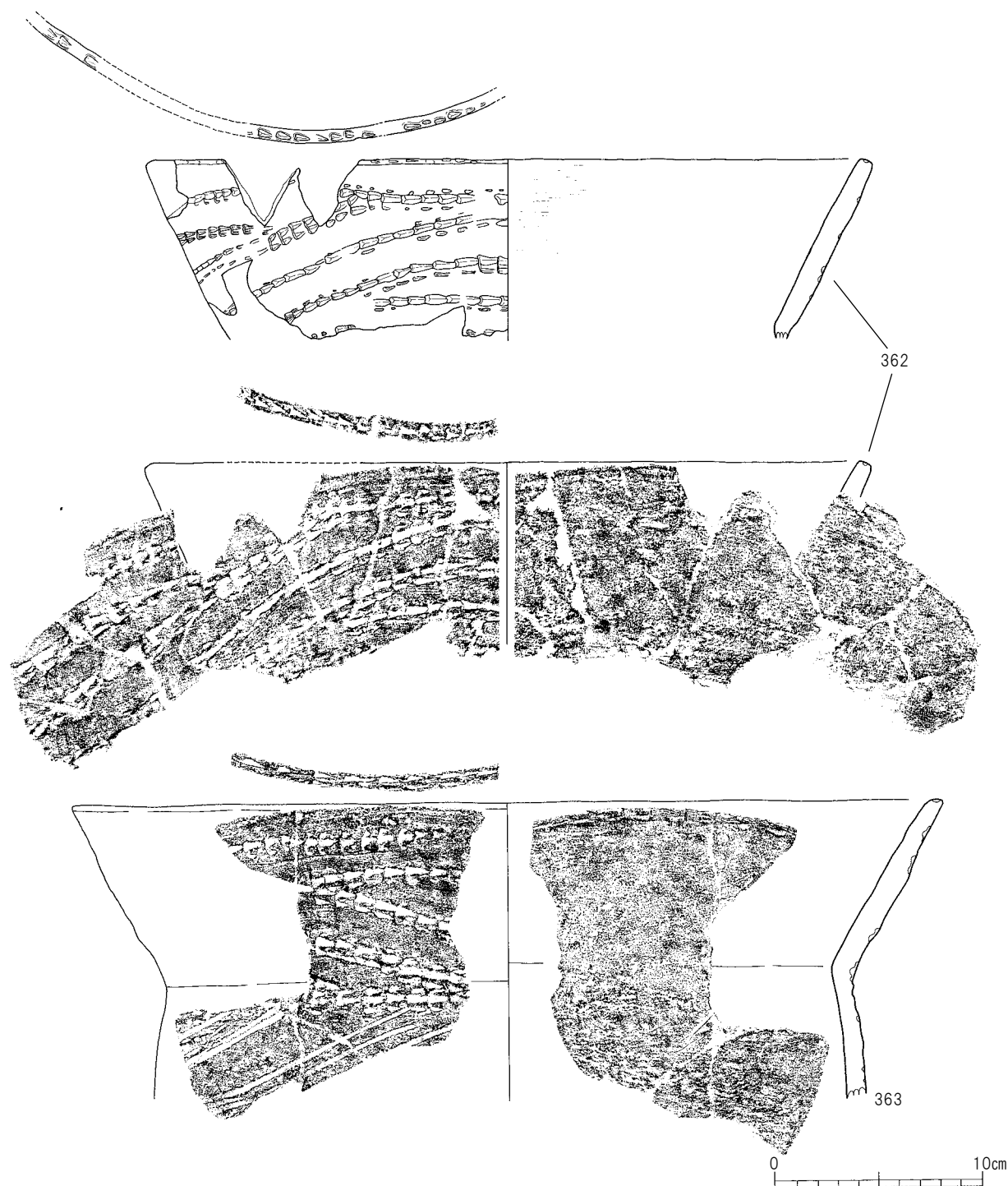
358～361は342～357の文様に加えて、口縁部に肋4～6条を単位とする縦位の条痕を、胴部には横位の条痕に加えて口縁部と同様の連続刺突を施すものである。362・363・368～373は、口縁部に楔状の連続刺突文を施すものである。365は、胴部と口縁部の文様が従来の施文と逆である。364・366・367もその可能性がある。367の口縁部の傾きは定かでない。

375は胴部が張り、口縁部がやや短く、頸部及び口縁部には連続刺突文が施され、胴部には幅広の沈線状の条痕が施されている。374・376～391、393・395・397は頸部から胴部にかけて連続刺突文が施されるものである。392・394は格子状の条痕、398～428は肋5条程度の条痕が横位や斜位に施される胴部片である。

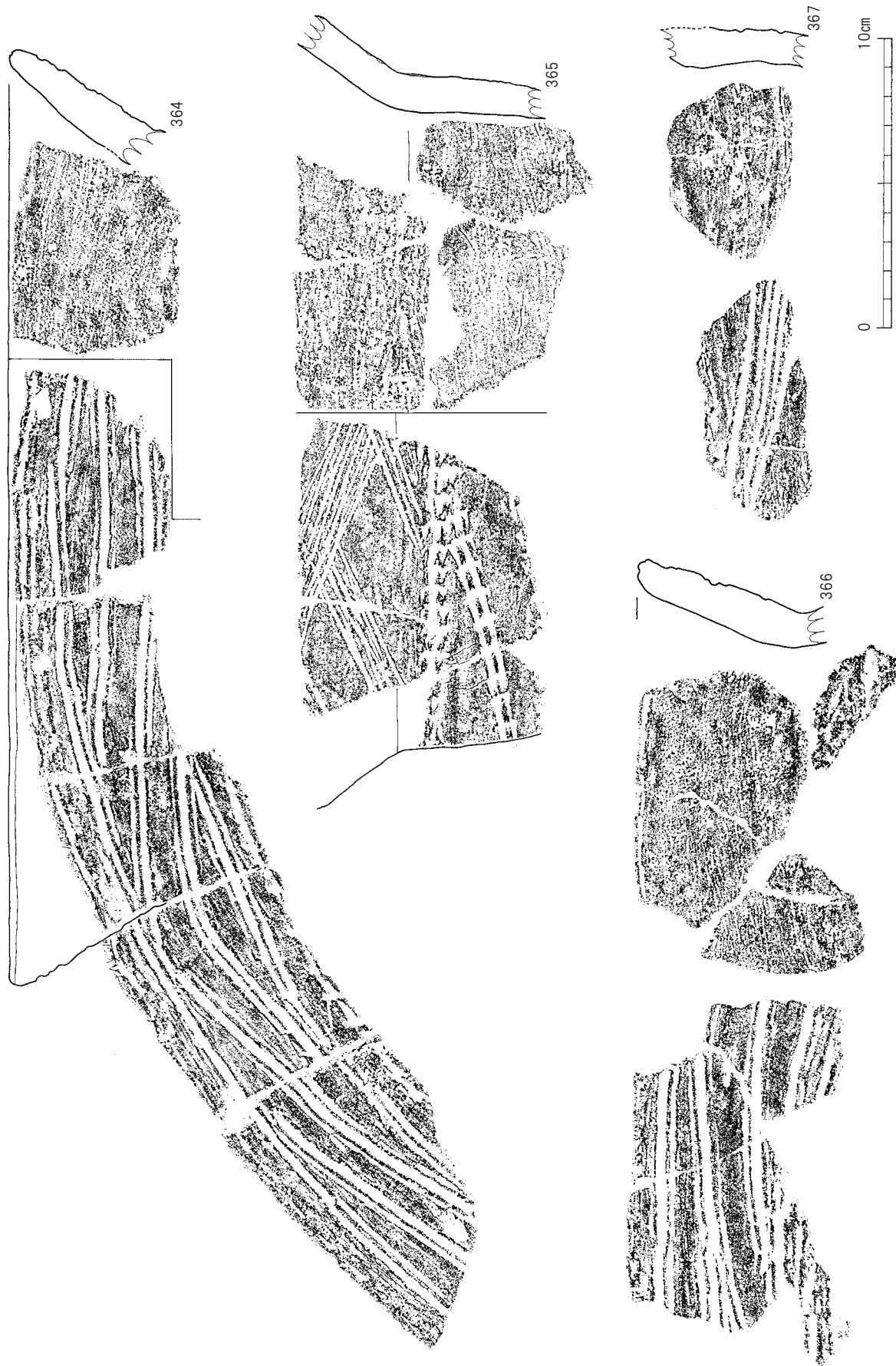


第118図 縄文時代11－b 類土器(5)

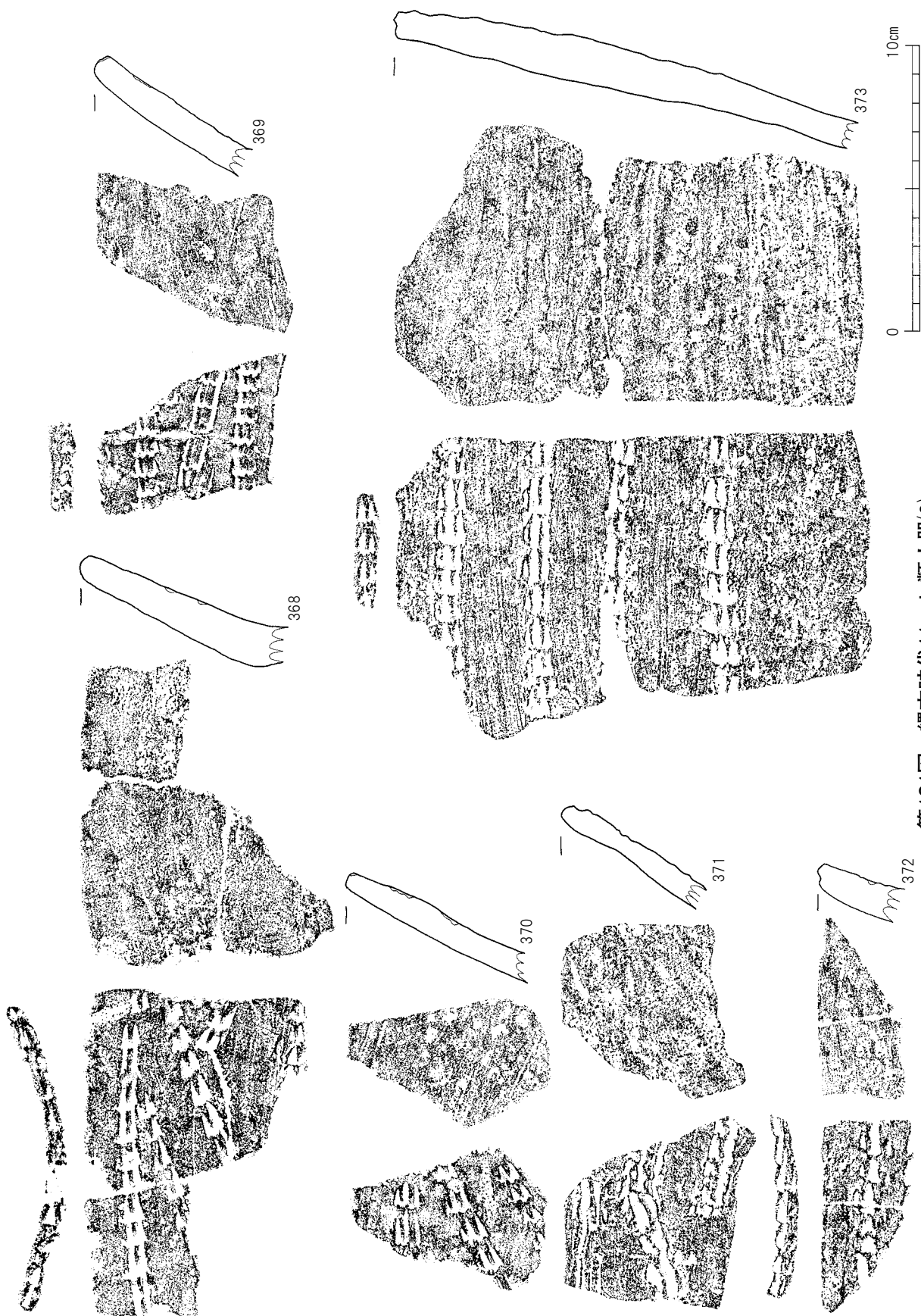
429は、11-b類土器の底部とされているものである。円筒形を呈し、底部の厚みは、胴部の2倍近くと、かなり厚いものである。外面は粗な条痕であり、内面の調整はナデ及びケズリである。また、底部外面は削りの後にナデ調整を施している。430は、胴部下半の破片であり、条痕が細いため一見沈線に見えるが、肋4条程度の条痕を縦位・横位・斜位に施したものである。431は、頸部の口径が10cmと小さめの個体であり、外面は、櫛状の施文具により「V」字状の斜位の文様と弧状の文様を施す。「V」字状の中央部には縦位の沈線が施してある。



第119図 縄文時代11-b類土器(6)



第120図 縄文時代11－b類土器(7)



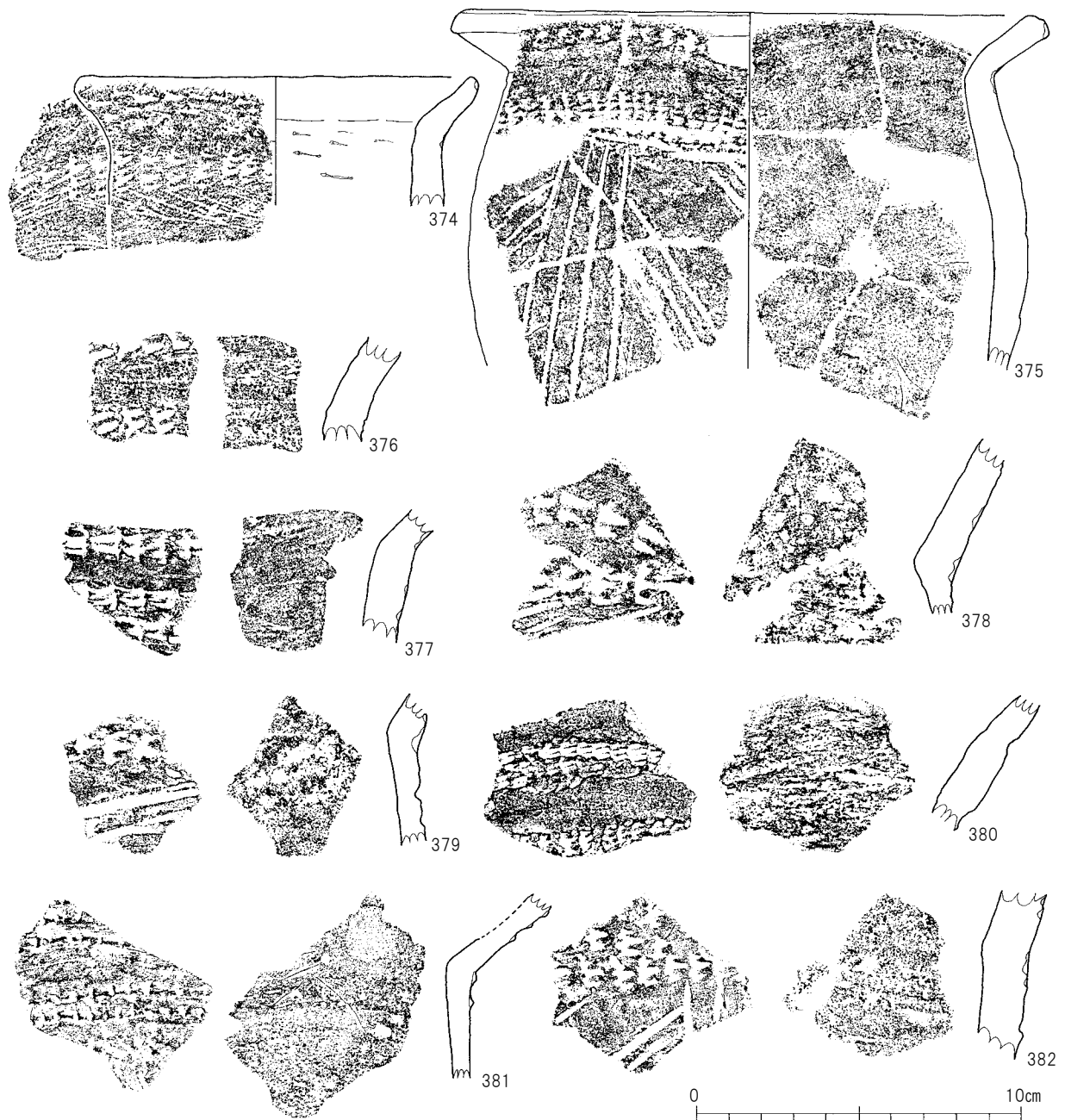
第121図 縄文時代11—b類土器(8)

11-c 類 (第130図)

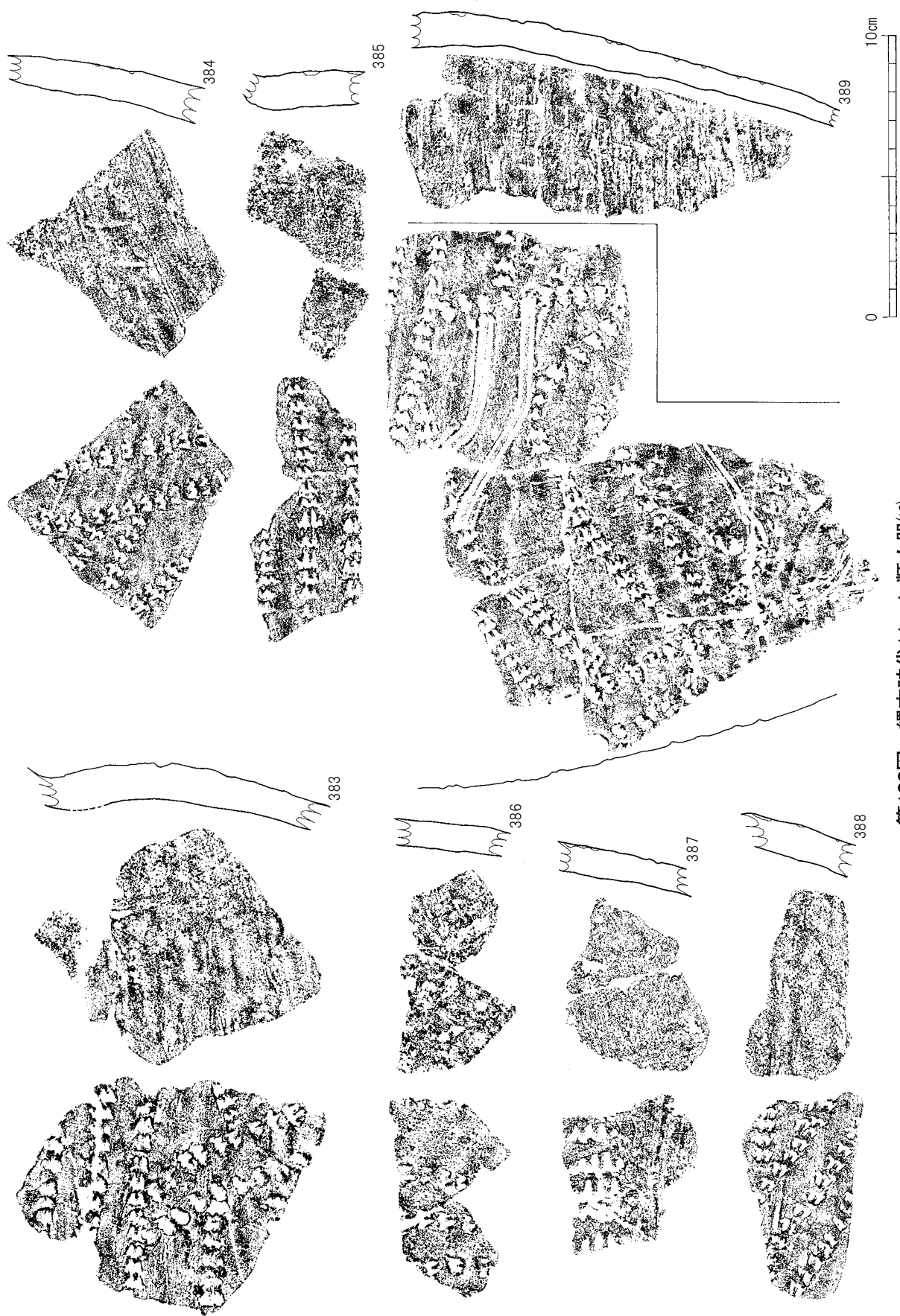
11類は、縄文及び貝殻により多彩な文様を施すところに特徴があるが、433～436は、11類の中でも特異な一群である。

433は、直行気味の口縁部に口唇部は平坦であり、口縁外面にはススが付着している。外面の調整は、粗いナデ、内面は丁寧なナデである。434は、433と同様に直行気味の口縁部であるが、口唇部は舌状である。調整は、内外面とも繊維状のものを工具とするナデのようである。

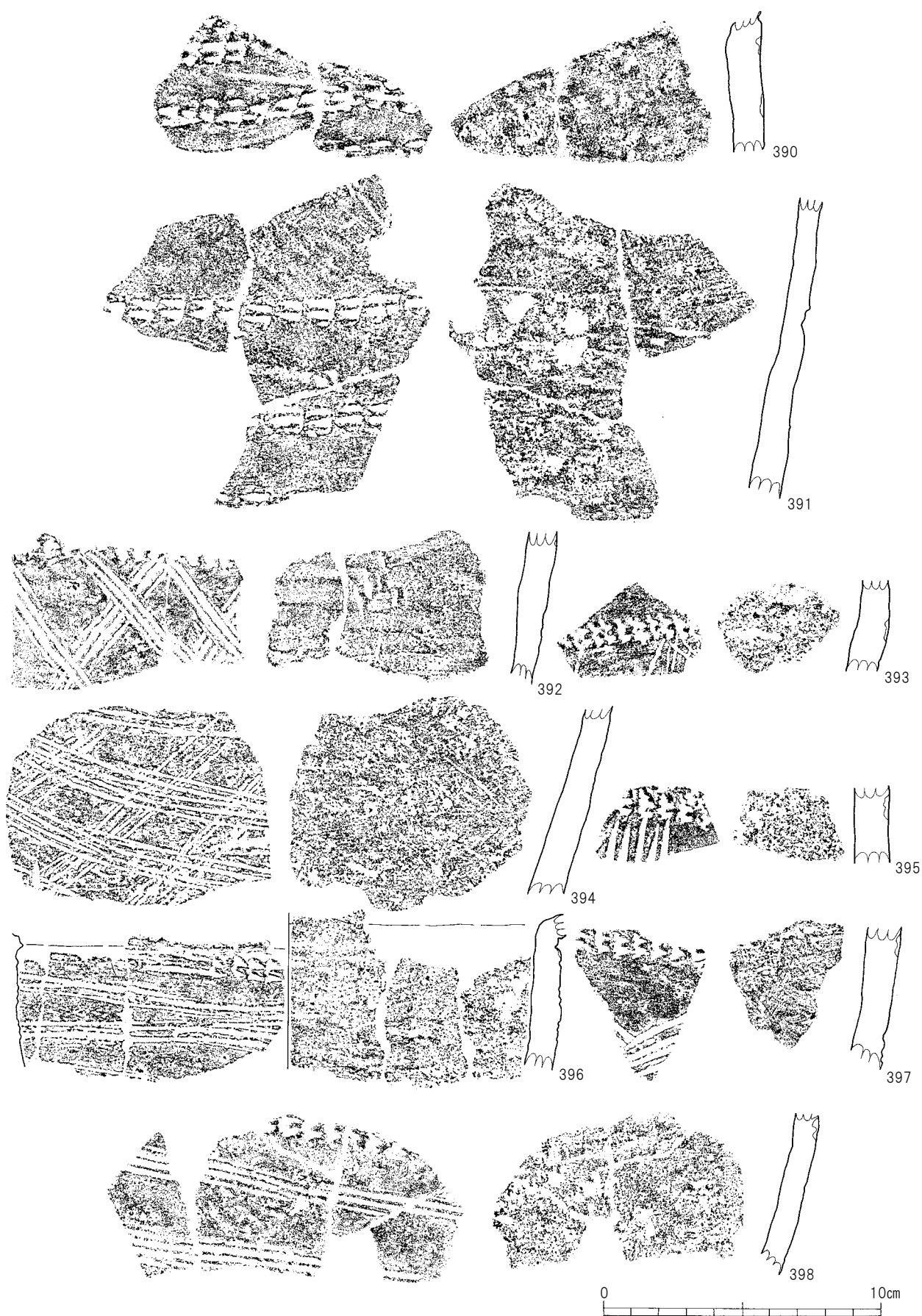
435は、やや内湾気味の口縁で、平坦で内傾する口唇部である。造りは粗雑で、粘土の接合面と思われる凹凸が明瞭に観察される。調整は、内外面とも繊維状のものを工具とするナデのようである。436は、内湾気味に大きく外反する口縁部で大型の土器と思われる。435と同様に造りは粗雑で



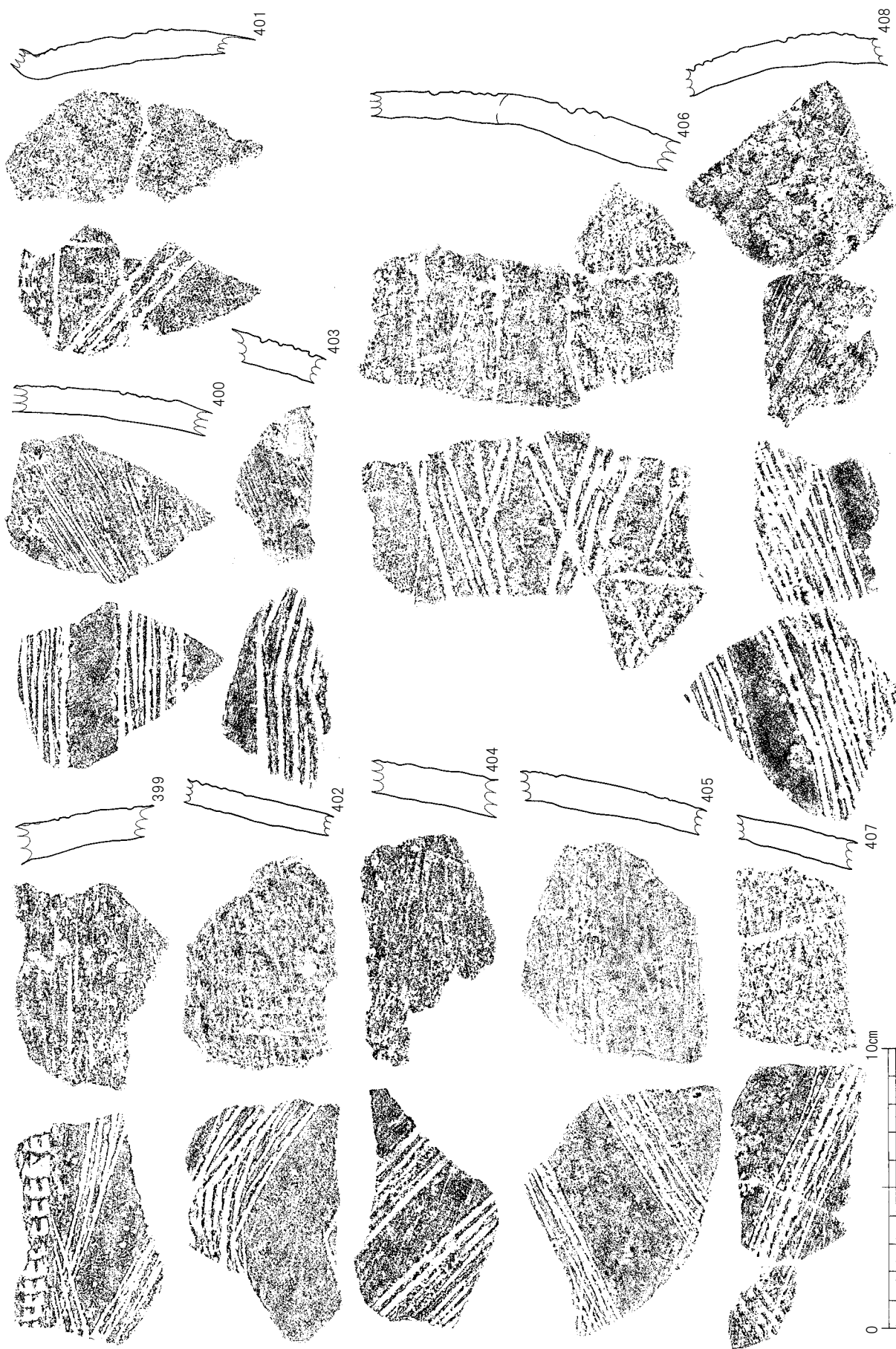
第122図 縄文時代11-b 類土器(9)



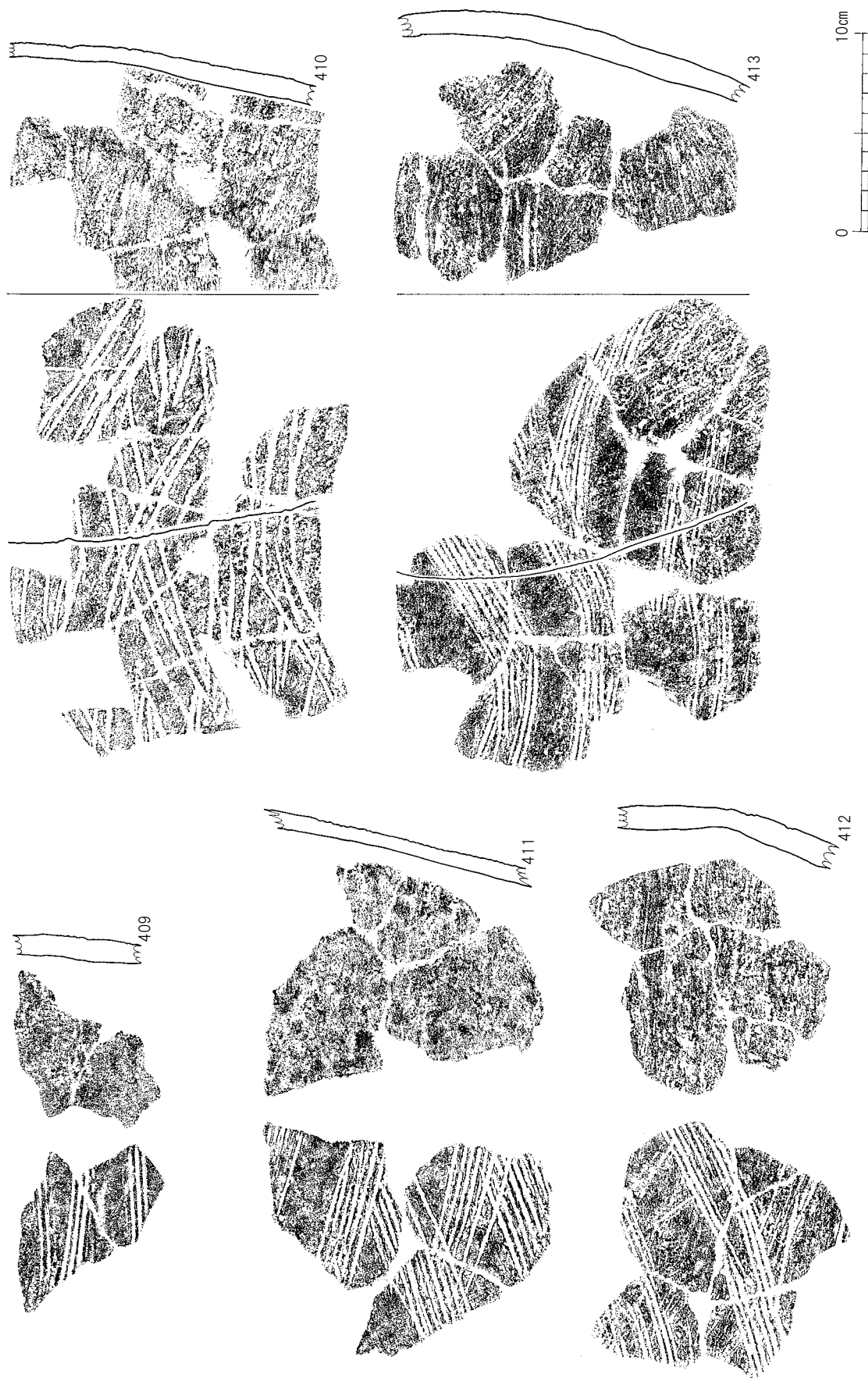
第123図 縄文時代11—b 類土器(10)



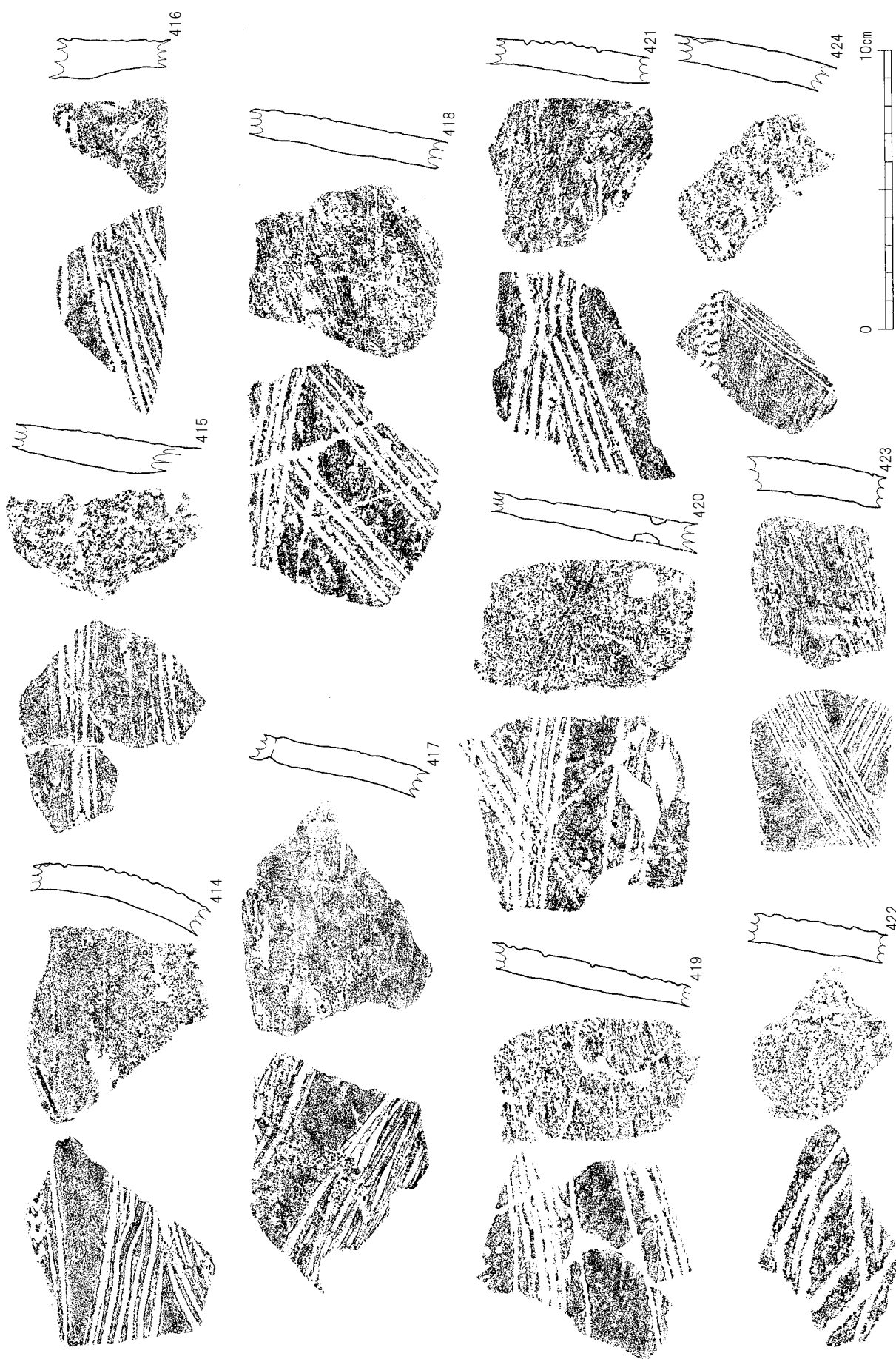
第124図 縄文時代11-b類土器(11)



第125図 縄文時代11—b類土器(12)



第126図 縄文時代11—b 類土器(13)



第127図 縄文時代11—b 類土器(14)

ある。調整は、内外面とも繊維状のものを工具とするナデ調整と考えられる。

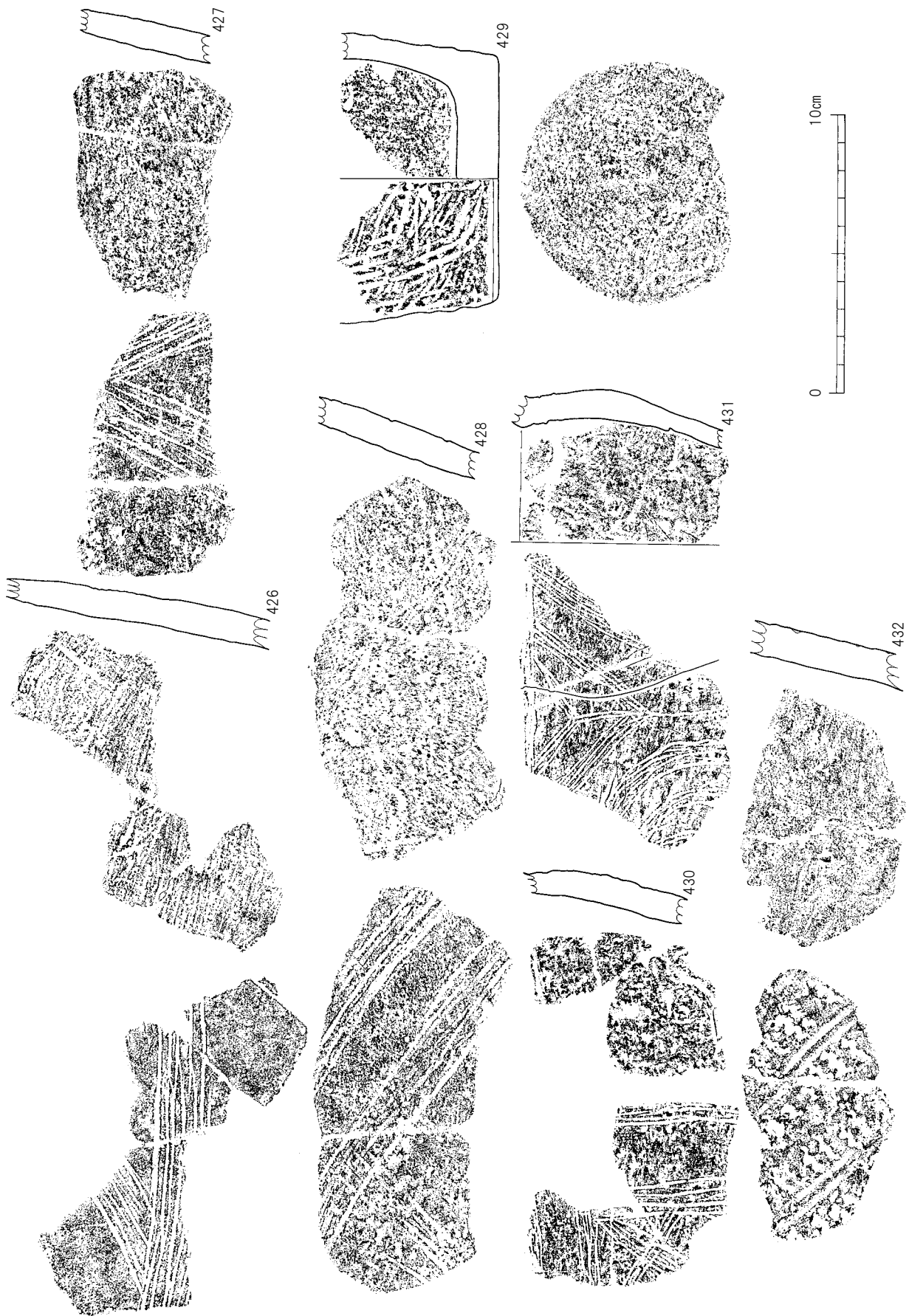
12類土器（第132図）

12類土器は、H-21区を中心にして小片が数多く出土し、接合を行ったところ、完形となったもので、1個体のみである（437）。器形は、胴部がやや張り、緩くしまった頸部に長めの外反し、波状となる口縁部を有するものである。

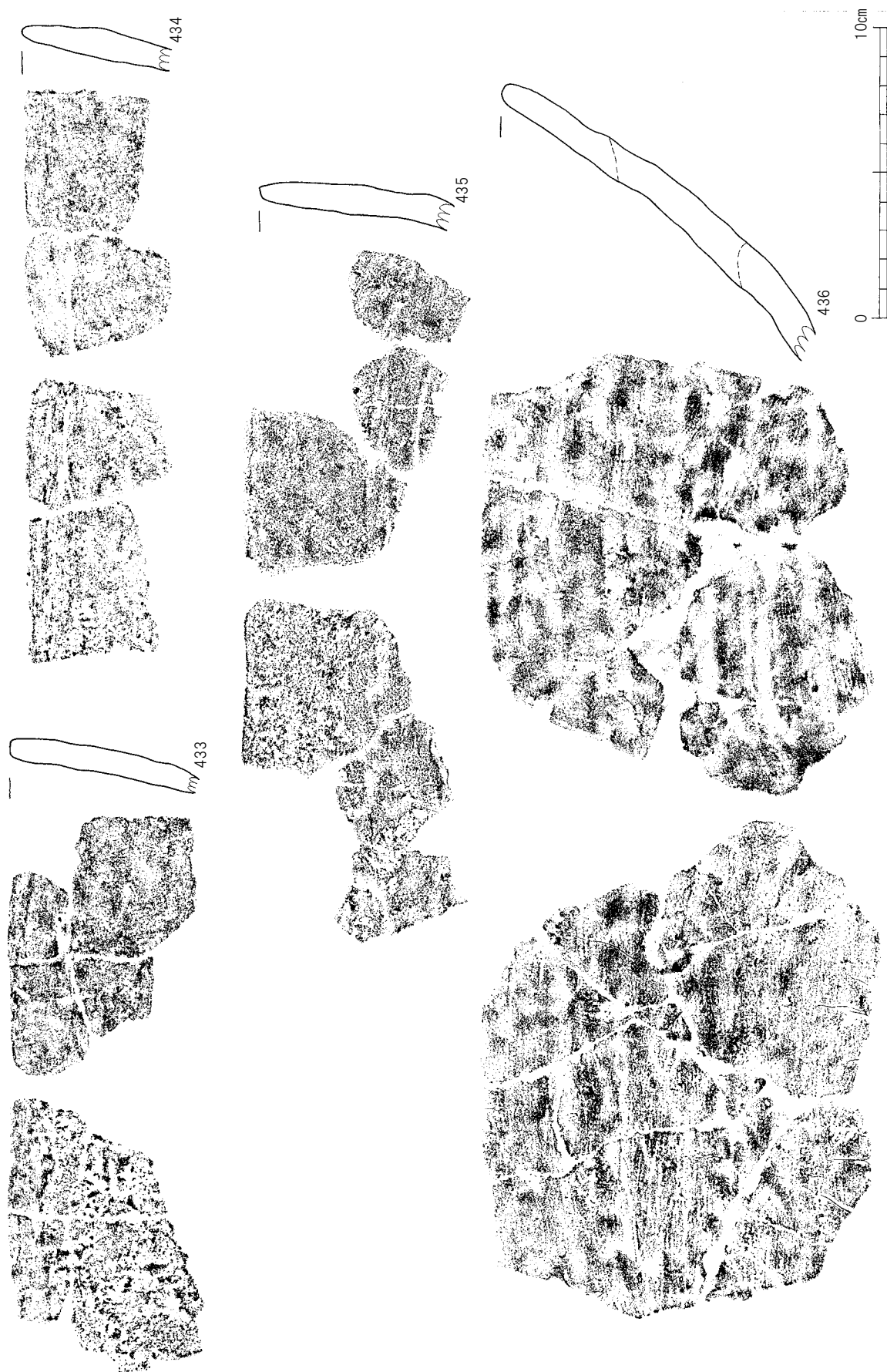
文様は貝殻または櫛状の工具による条痕を波状部下部の胴部には弧状及び縦位に施し、波状部と波状部の間の胴部には格子状に施す。頸部下には横位の条痕を施し、口縁部・頸部・胴部には横位の押引状の刺突を施すものである。内面はナデ調整である。



第128図 縄文時代11-b類土器(15)



第129図 縄文時代11－b 類土器(16)



第130図 縄文時代11—c 類土器(1)



第131図 縄文時代11類土器出土状況

13類土器（第134図～第138図）

13類土器は、最大径が口縁部にあり、緩やかな曲線状に底部へと至るものと考えられる。口唇部には刻みを有し、板状のヘラ状工具を用いて横位・縦位・斜位の調整を行っている。内面はナデ調整を基本とするものである。

438は、復元口縁径約20cm、口縁部から内湾気味に胴部へ至るもので、器壁の厚さに部分的に偏りがある。口縁部外面に刻目を施し、板状の工具により口縁部には横位、胴部は縦位の調整を行った後に、斜位の調整を行っている。内面は、ナデ調整である。439・440・442・443も同様である。

441は、縦位の調整が曲線状のものである。446は縦位の調整を主とするものである。内面に工具による調整の痕跡が観察される。447～471は、基本的に外面は438などと同様であるが、内面の調整が細かな条痕によるものである。

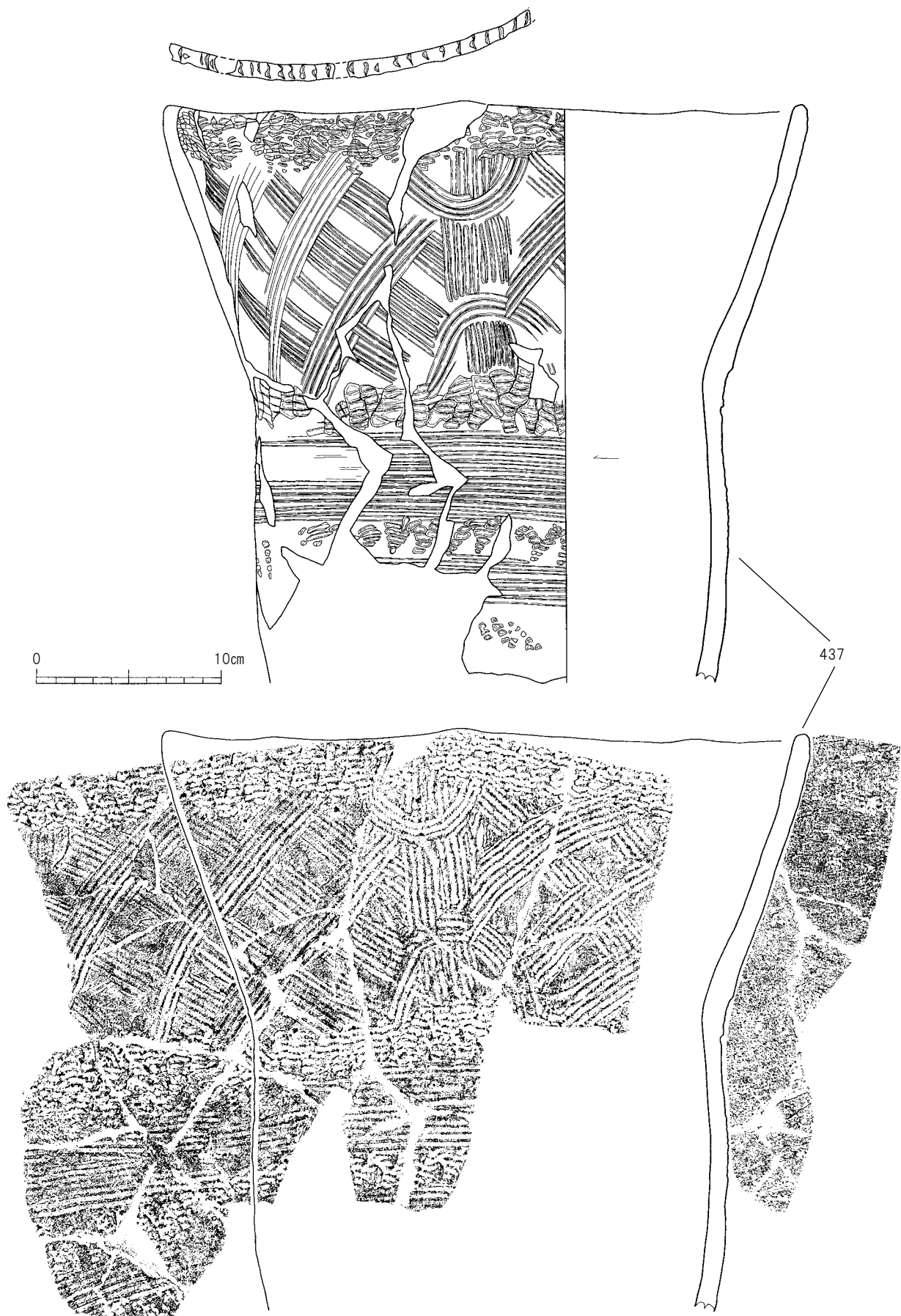
472は口縁部先端に粗い刻目を施し、条痕あるいは板状工具による調整の後に、渦巻き状の文様を描くものである。内面は、条痕等の調整の後にナデを最終調整として行っている。

14類土器（第139図）

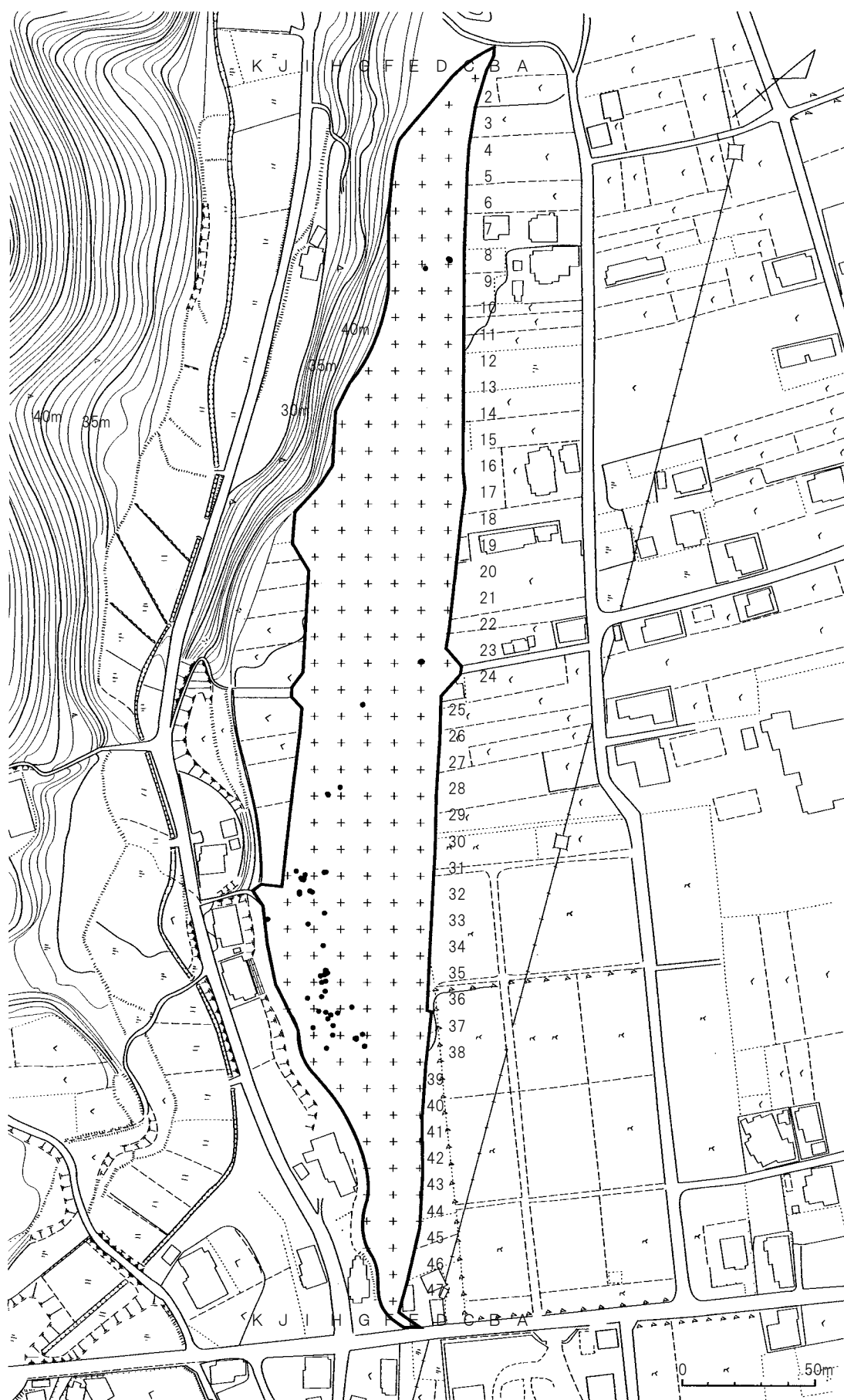
14類土器は縄文時代早期の底部であるが、詳細な時期不明なものを一括した。

473～475・477は、底部側面に縦位の刻目が施されていることから、早期前葉と思われる。

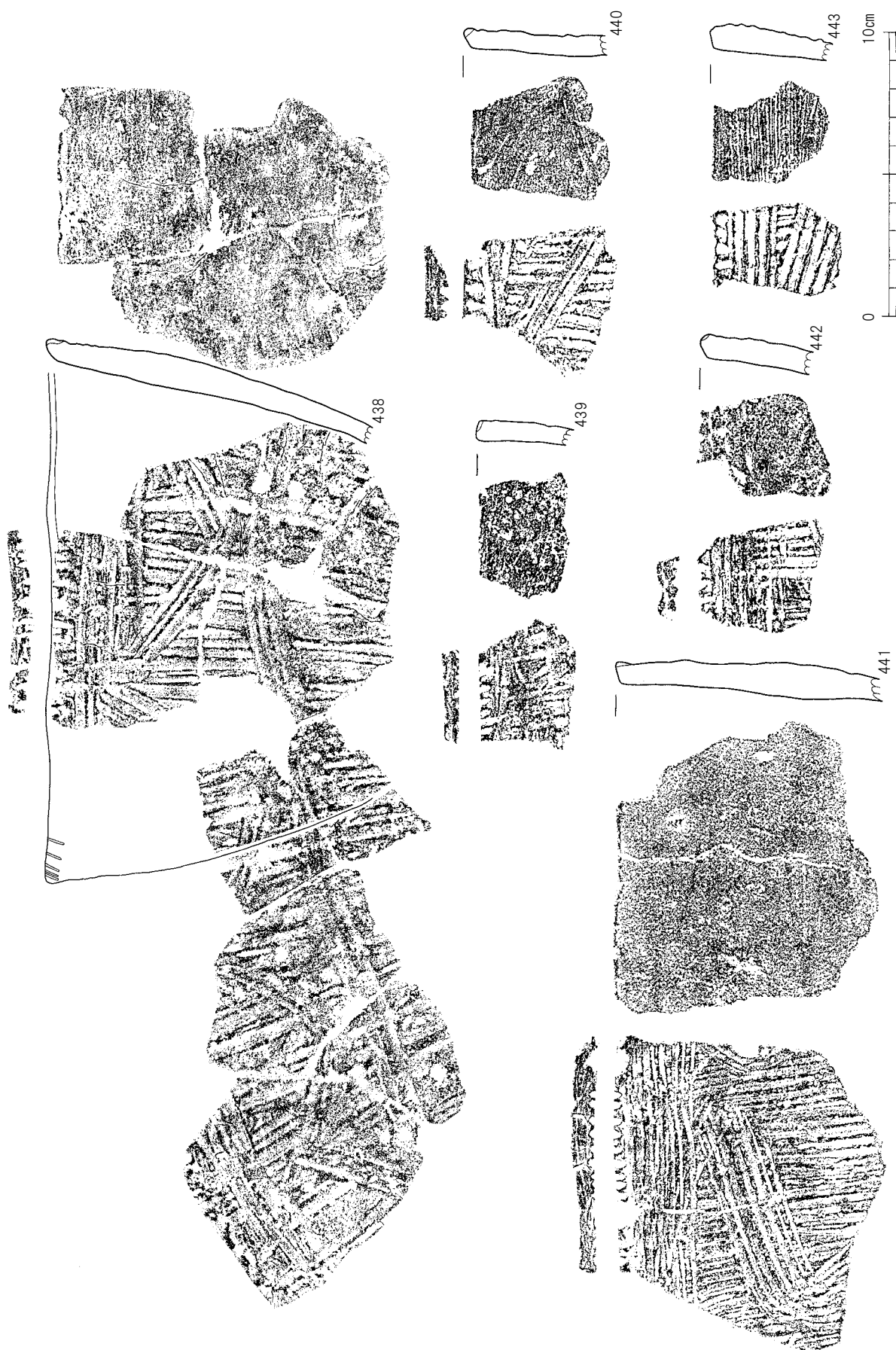
476は胴部と底部の接合面が薄く、外底部には工具状の調整を施した後、最終調整としてナデ調整を行っている。478は底部径に比し底部が厚いもので、内湾気味に胴部へと立ち上がっていくものと考えられる。479は上げ底の底部である。480は、底部径18cmで扁平な底部である。底部の側面に条痕による横位の調整が観察される。



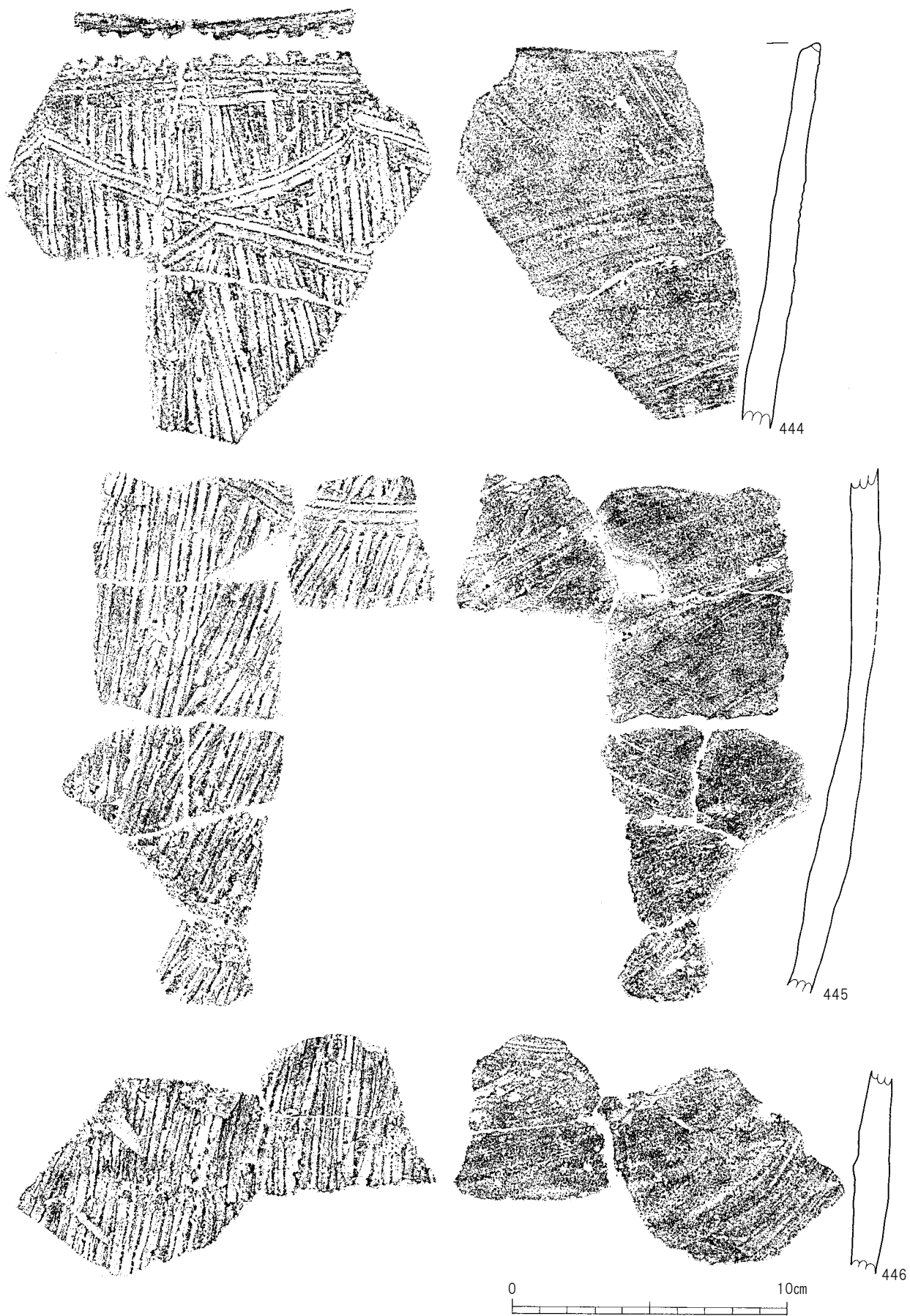
第132図 縄文時代12類土器(1)



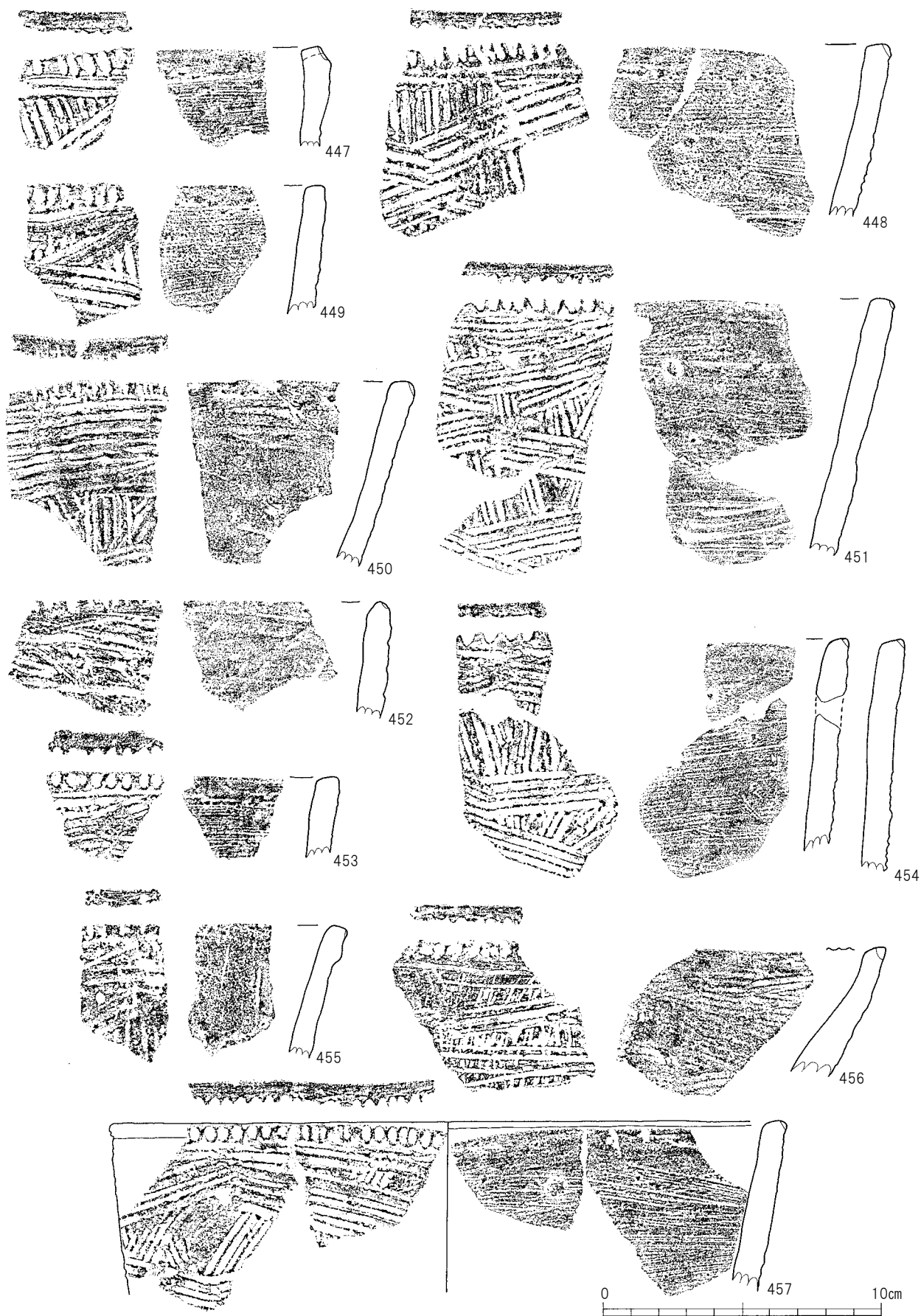
第133図 縄文時代13類土器出土状況



第134図 縄文時代13類土器(1)



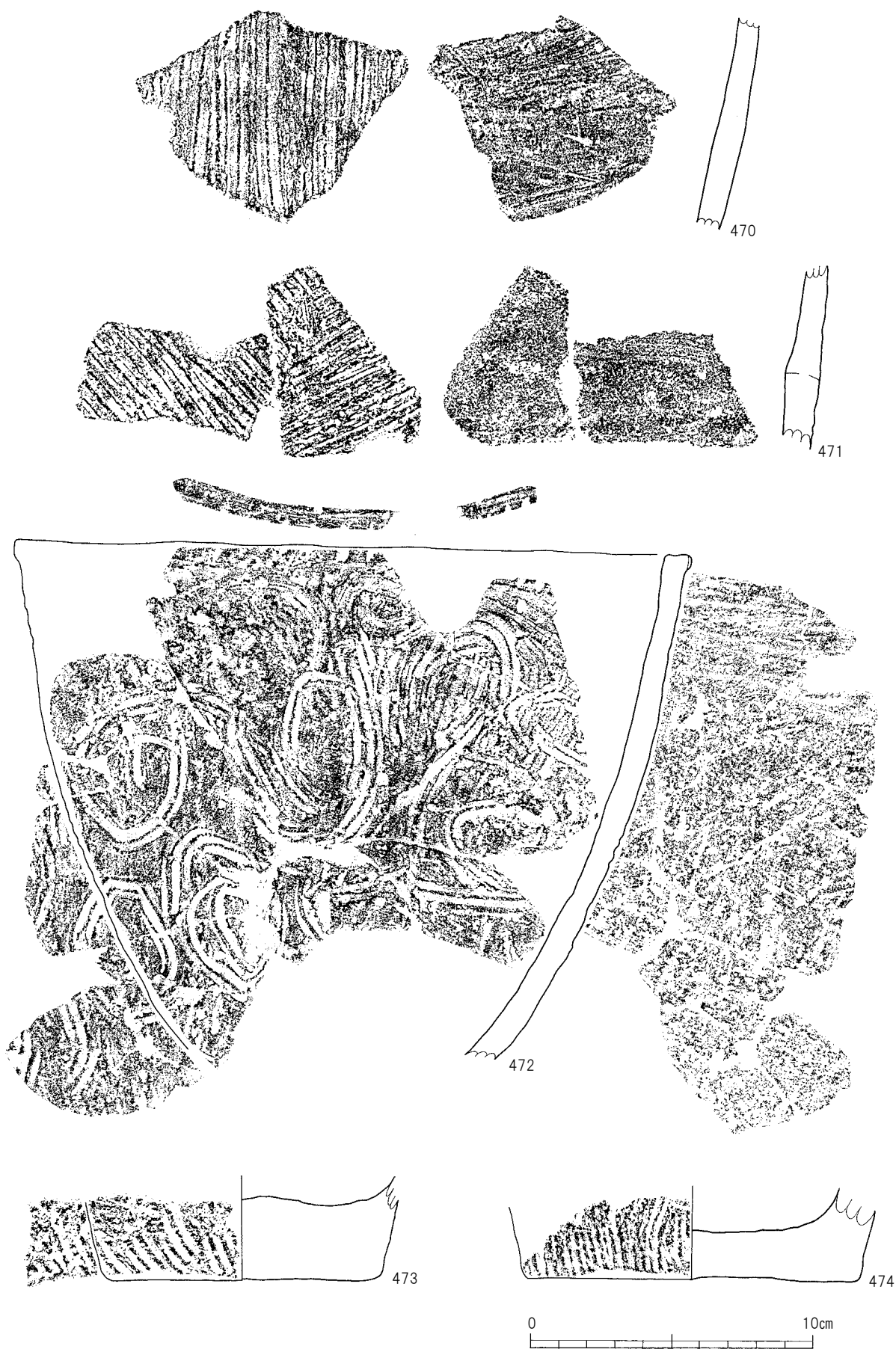
第135図 縄文時代13類土器(2)



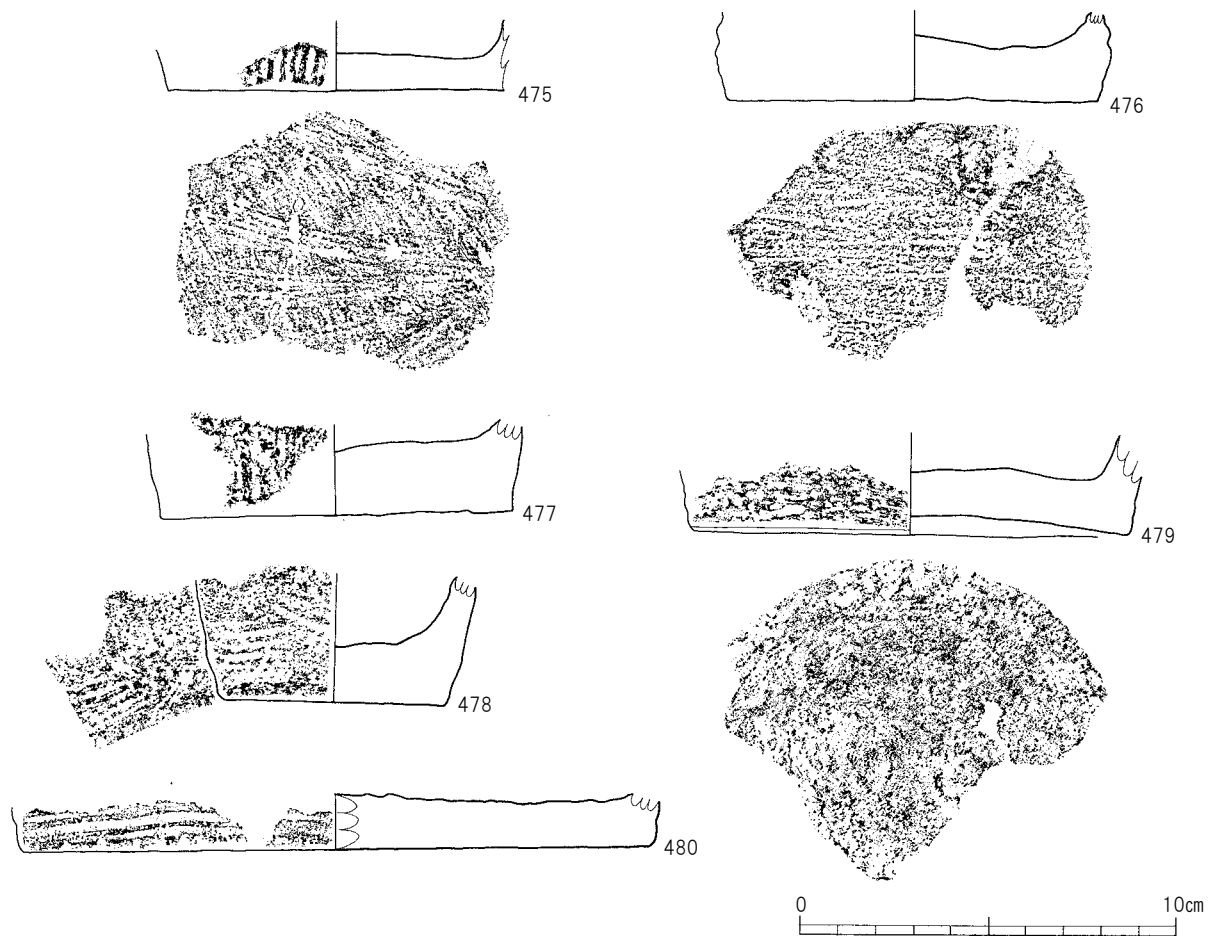
第136図 縄文時代13類土器(3)



第137図 縄文時代13類土器(4)



第138図 縄文時代13類土器(5)



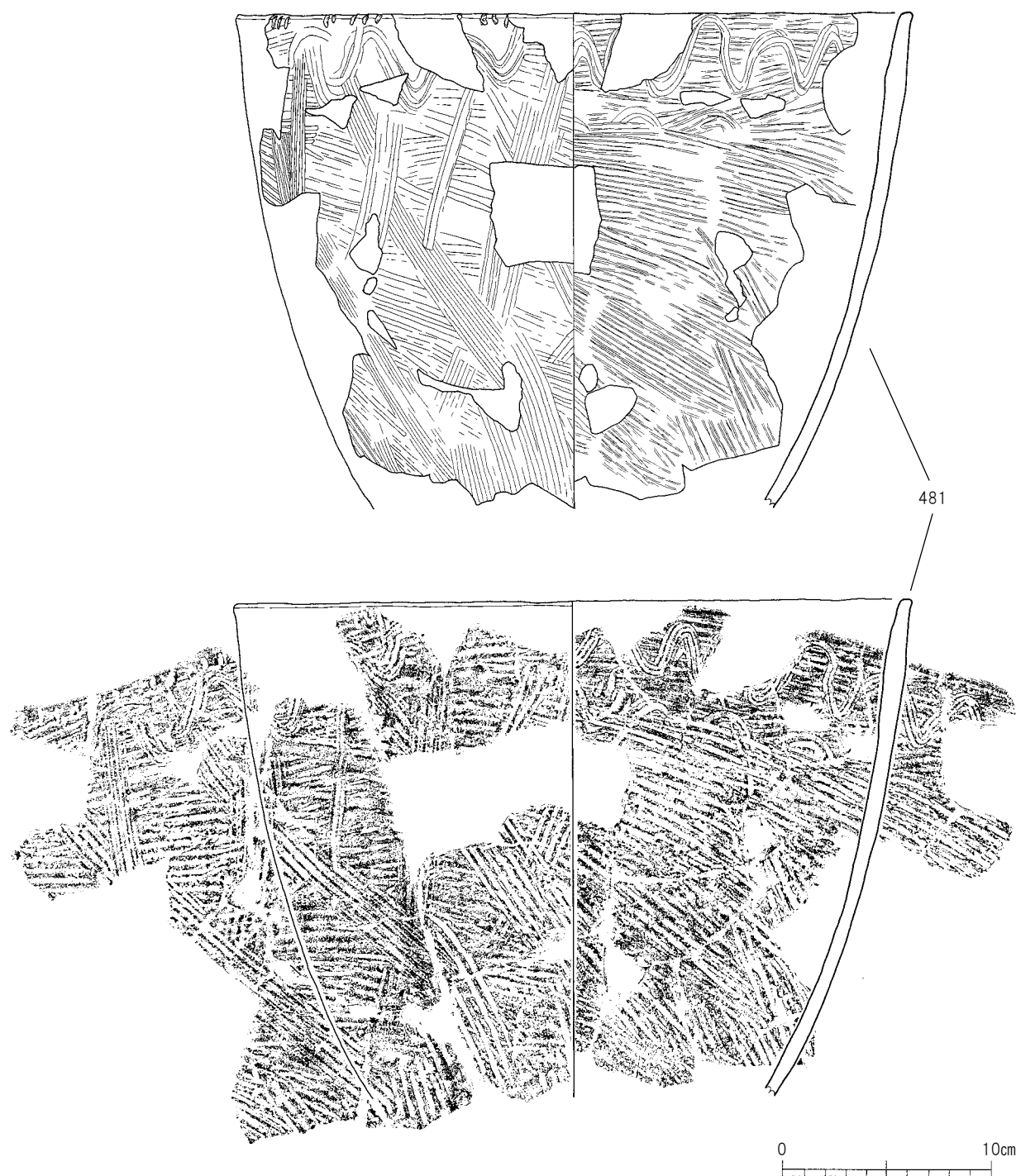
第139図 縄文時代14類土器(1)

・縄文時代前中期

縄文時代前期・中期の土器は、主としてⅢ層及びⅣ層から出土した。出土状況はⅢ層より前期が出土し、Ⅳ層より中期が出土したりし、出土層位は不安定であったことから、前中期として報告する。

15類土器（第140図・第142図）

15類土器は、13類に似た器形を呈するもので、最大径が口縁部にあり、ゆるやかに内湾しながら口縁部へ至るものと考えられる。調整は、貝殻あるいは板状のへら状工具により横位・斜位・縦位



第140図 縄文時代15類土器(1)



第141図 縄文時代前中期土器出土状況



に調整を施すものである。
またこの土器群の特徴は
内外面の調整が同じであ
ることであり、口縁部内外
面に曲線文を施すものが
多い。

481の口唇部は平坦で、
内湾気味に胴部から底部
へとすぼまっていくもの
と考えられる。口縁部先端
に刻みを施し、貝殻あるい
は板状の工具によりラン
ダムに調整を行いその後、
口縁部に曲線文を施すも
のである。内面の調整及び
施文も外面と同様である。

482～485も同様のもの
である。

16類土器（第144図～第
146図）

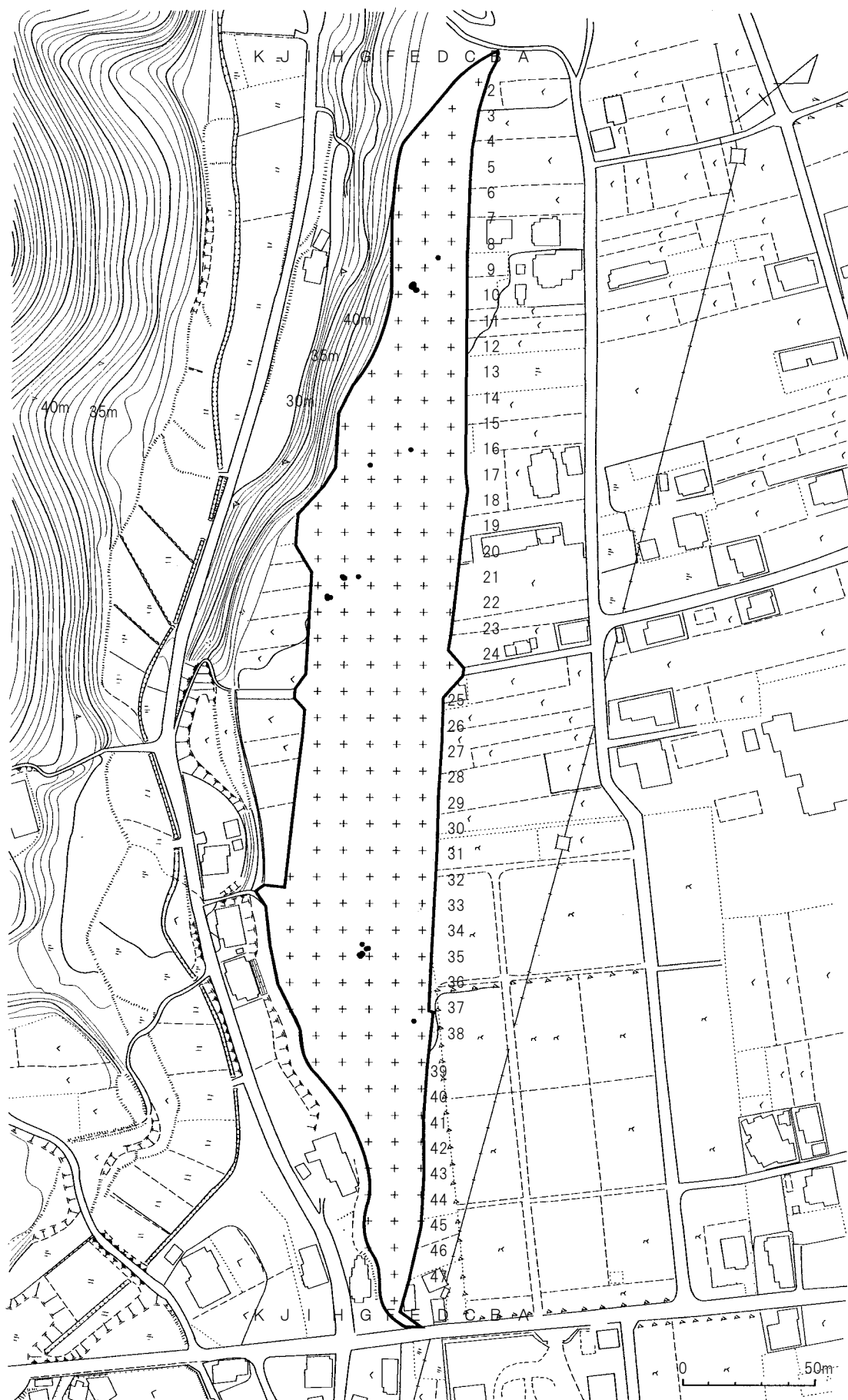
第142図 縄文時代15類土器(2)

16類土器は、最大径が口縁部にあり、緩やかに内湾しながら丸底の底部を呈するものである。垂下状の隆帯を口縁部に部分的に施し、数条のミミズバレ状の突帯を胴部まで施すものと、口縁部に数条の密なミミズバレ状の突帯を施すものがある。いずれも、地文は条痕である。

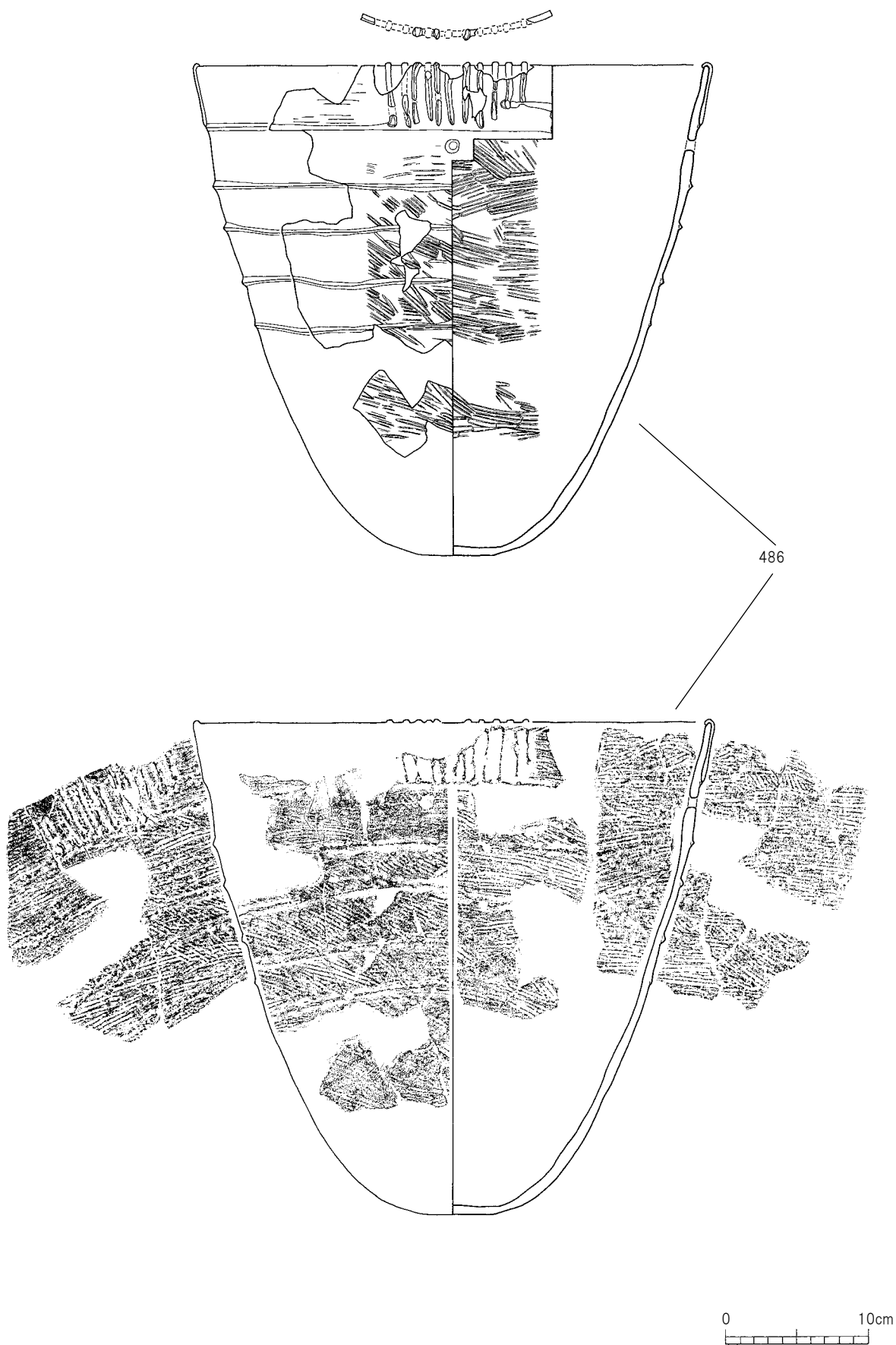
486は、復元口径36cm、器高34cmである。地文には条痕を施し、口縁には10本程度の垂下状の隆帯（推定で5か所）を施す。胴部には、約4cmの間隔で、横位のミミズバレ状の突帯を数条施す。内面の調整も条痕によるものである。

487～494は、数条の密接したミミズバレ状突帯を口縁部に施すものである。496・497は、内外共に条痕を施すもので、内面の調整が外面の調整に類似しており、15類の可能性もある。また、この16類の出土状況は非常に散在的で、G-34・35、G・H-21・22、E-9からの出土である。

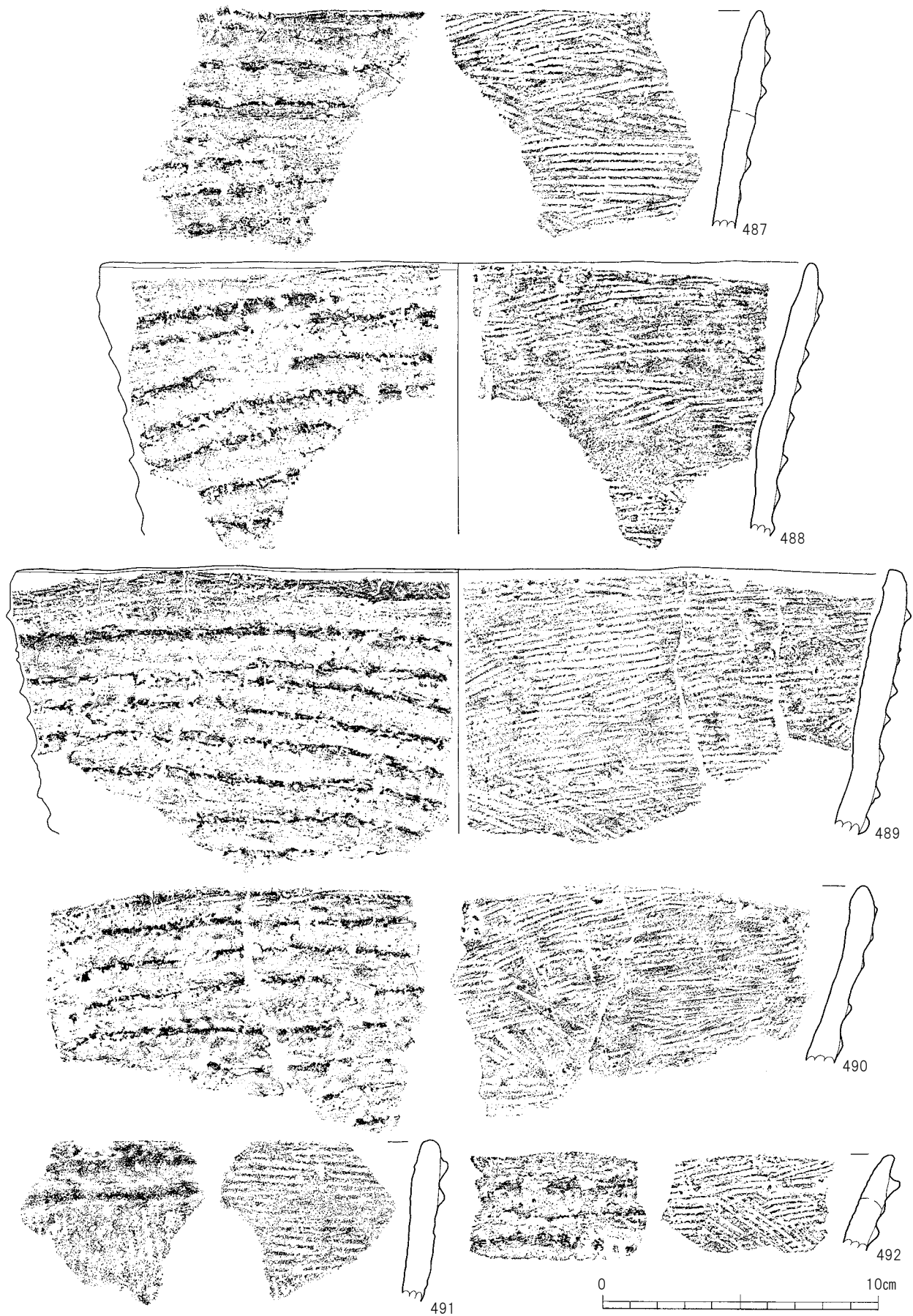
17類土器（第147図～第176図）



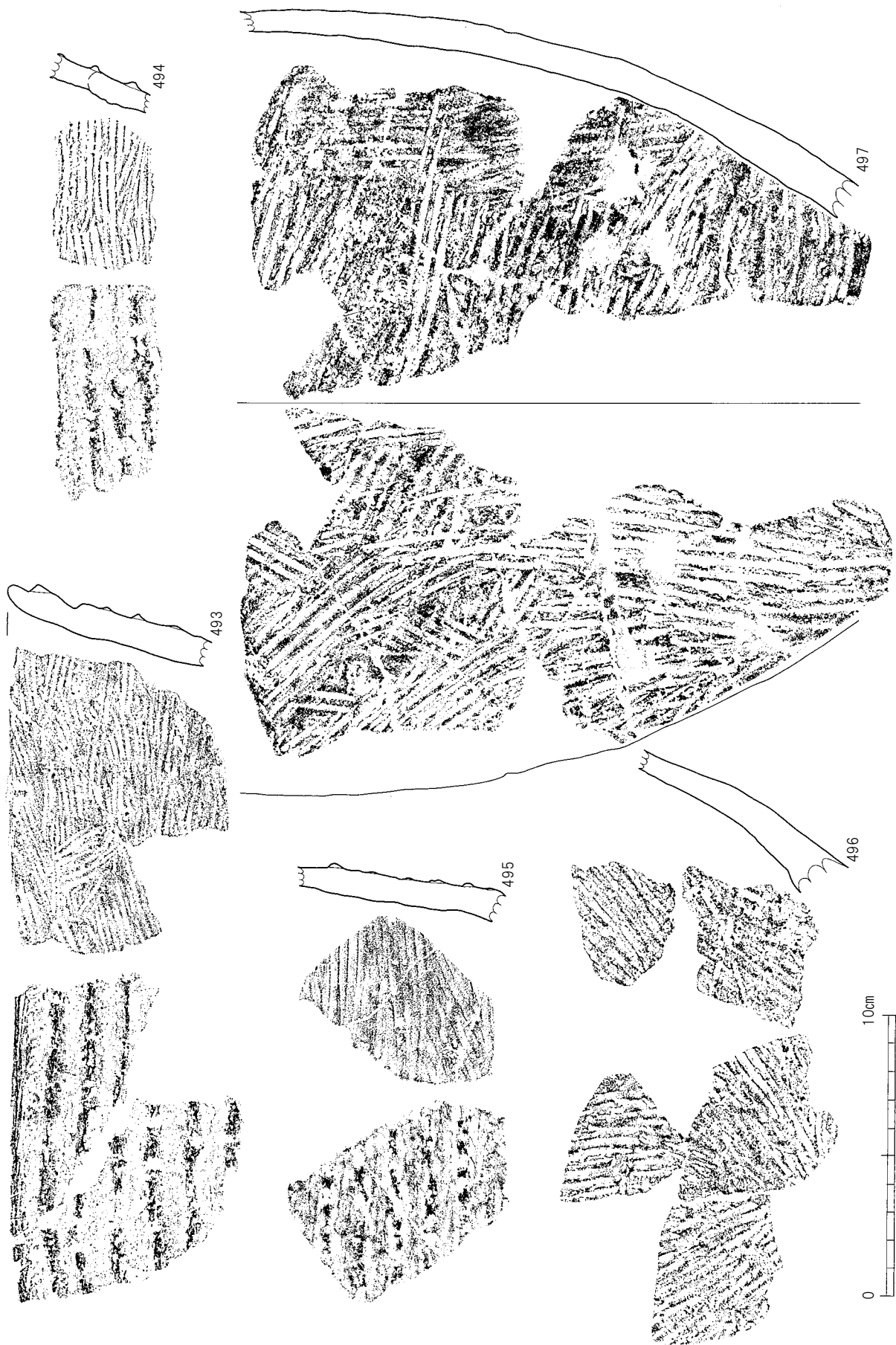
第143図 縄文時代16類土器出土状況



第144図 縄文時代16類土器(1)



第145図 縄文時代16類土器(2)



第146図 縄文時代16類土器(3)

17類土器は、丸底の底部からやや内湾気味に立ち上がり頸部がわずかにしまり、口縁部で外反する器形が基本で、器面全体に櫛描き状の文様を施すものである。

17類土器は、便宜上3つのタイプに分類した。

17-a類は、第一文様帯に棒状の工具による連続刺突を数条施し、その下部に第二文様帯として横位の短沈線を数条施すものとした。

17-b類は、口縁の第一文様帯に刺突連文がなく、横位の沈線文や短沈線文から始まるもので、胴部には羽状文・四角組合文等が施されるものとした。

17-c類は、粗い細沈線文を施すものやその他のものや底部を一括して扱った。

17-a類（第148図～第154図）

498は、外反する口縁部である。口唇部には、深い沈線を施し、その両側に串状の施文具により連続刺突を施す。口縁部に2条の連続刺突文、その下に横位の数条の短沈線、横位の連続刺突文その下にまた横位の沈線文を施すものである。口縁部内面には、横位の刺突文を1条と沈線文を数条廻らす。499も同様の施文である。

500・501は、口唇部の施文が刻みである以外、498・499と同様である。

502は、隣接して山形の口縁を有するもので、口縁端部は舌状を呈する。口縁部の施文は、連続刺突文、ヘラ状工具による粗い沈線文、連続沈線文という順で施されている。頸部には1条の沈線文と縦位の沈線文が若干観察される。口縁部内面には、同心円状の弧が山形の口縁をまたぐように施されている。

503の口縁端部は舌状を呈し、口縁部はゆるやかに外反しながらやや張る胴部へと至る。口唇部及び口縁部に連続刺突が施され、頸部には横位の短沈線が施され、その下部に1条の横位の連続刺突文、胴部には櫛状の縦位の沈線が無数に施されている。

504～524は、外反する口縁部で、口唇部に連続刺突文、口縁部にも連続刺突文、その下部に横位の短沈線、そして横位の連続刺突文を施すものである。口縁内部も横位の連続刺突文・短沈線で構成されているものがほとんどである。510・511・524は、胴部に綾杉状に短沈線が施されている。

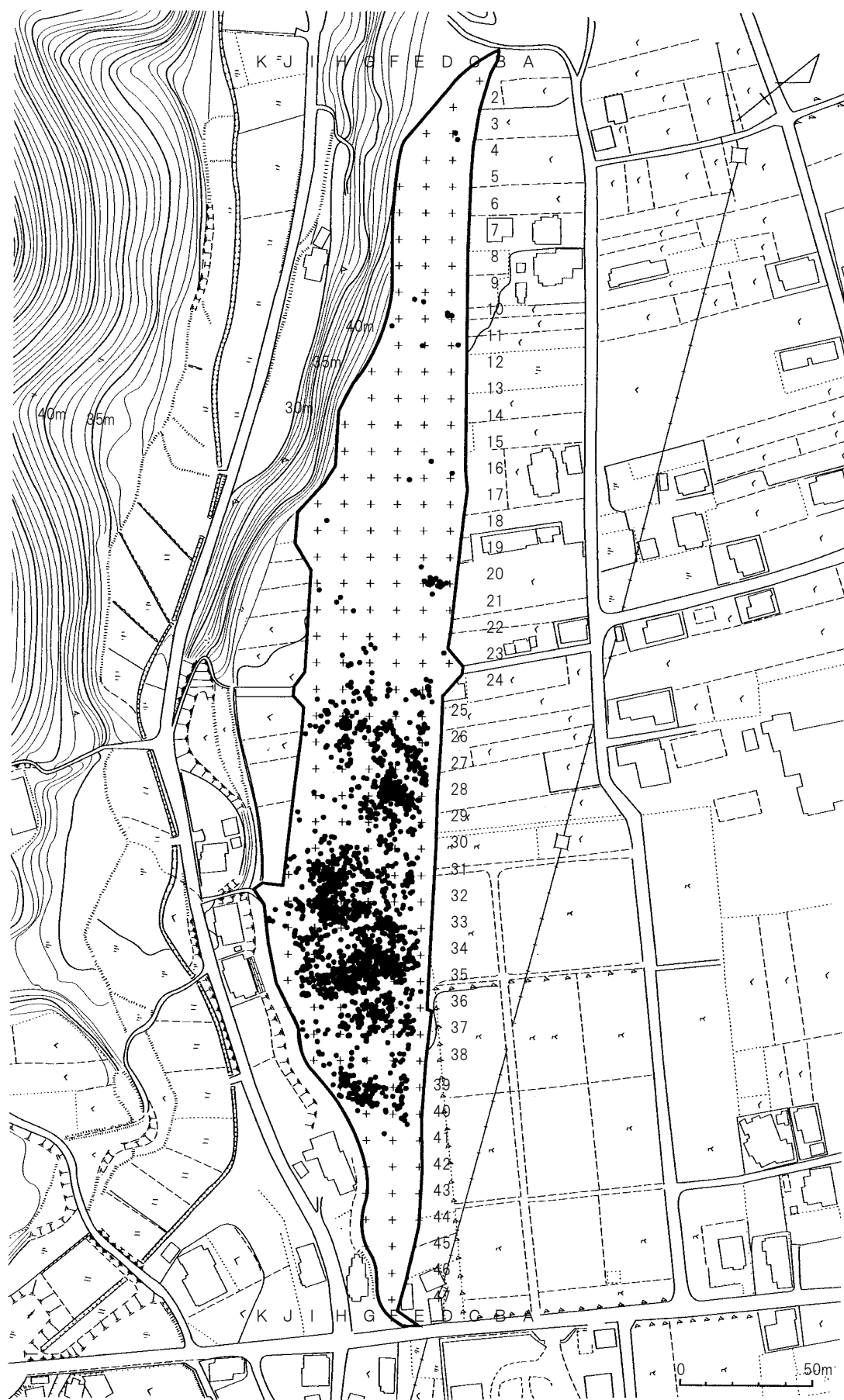
525～531は頸部から胴部にかけての破片である。口縁部と同様に横位の刺突文と短沈線文で文様帯が構成されていたことから、第1文様帯から第2文様帯にかけてのものとして判断し、17-a類とした。

532～536は頸部付近から胴部にかけての破片である。頸部が横位の連続刺突文より下位の第2文様帯である。532は、他の土器と異なり口縁部が内湾するものと思われる。533・535は、503や524と近い関係にある文様である。ただし、第2文様帯の綾杉については、施文がやや粗雑である。

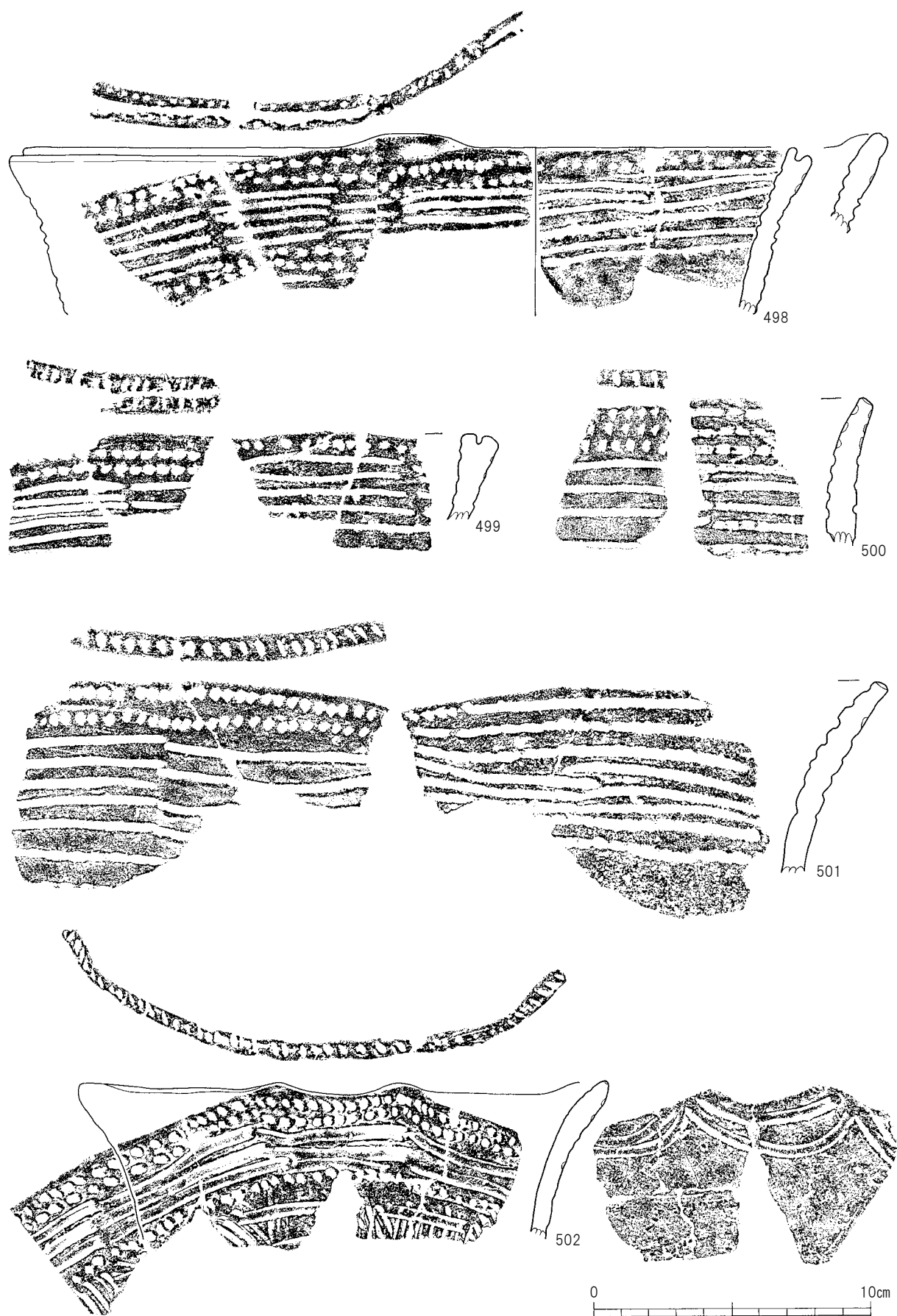
17-b類（第155図～第162図）

17-b類は、口縁部の第1文様帯に横位の連続刺突文を施さず、横位の短沈線文を文様帯とするもので、その下部に連続刺突文もほとんど見られず、第2文様帯に縦位や綾杉状の沈線を施すものである。

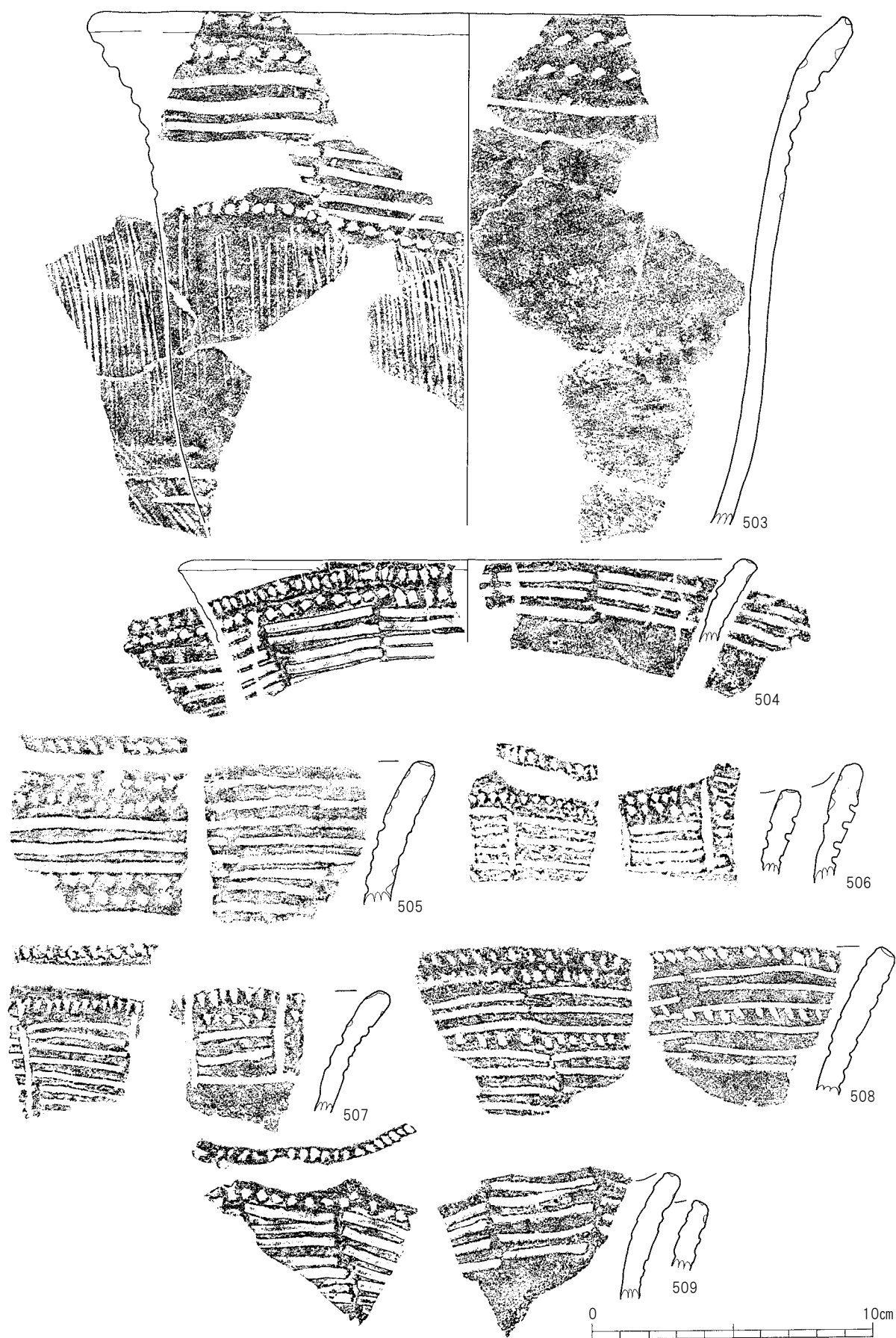
537・538は胴部からゆるやかに外反し、口唇部はやや丸みを帯びた平坦に近いものとなる。口唇部には、連続刺突を施し、横位の短沈線文を数条施し第1文様帯とする。続いて第2文様帯として斜位あるいは、綾杉状の短沈線文を施すものである。539～544は、17-b類の第1文様帯である口



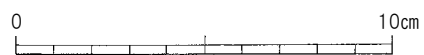
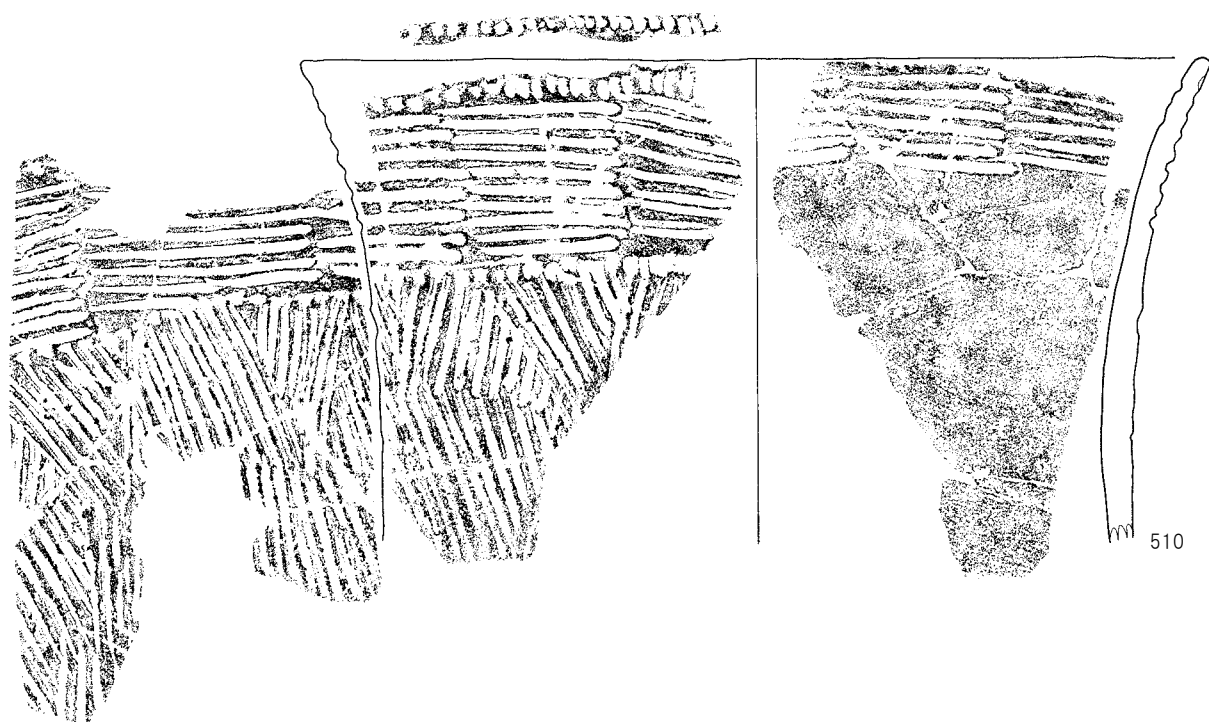
第147図 縄文時代17類土器出土状況



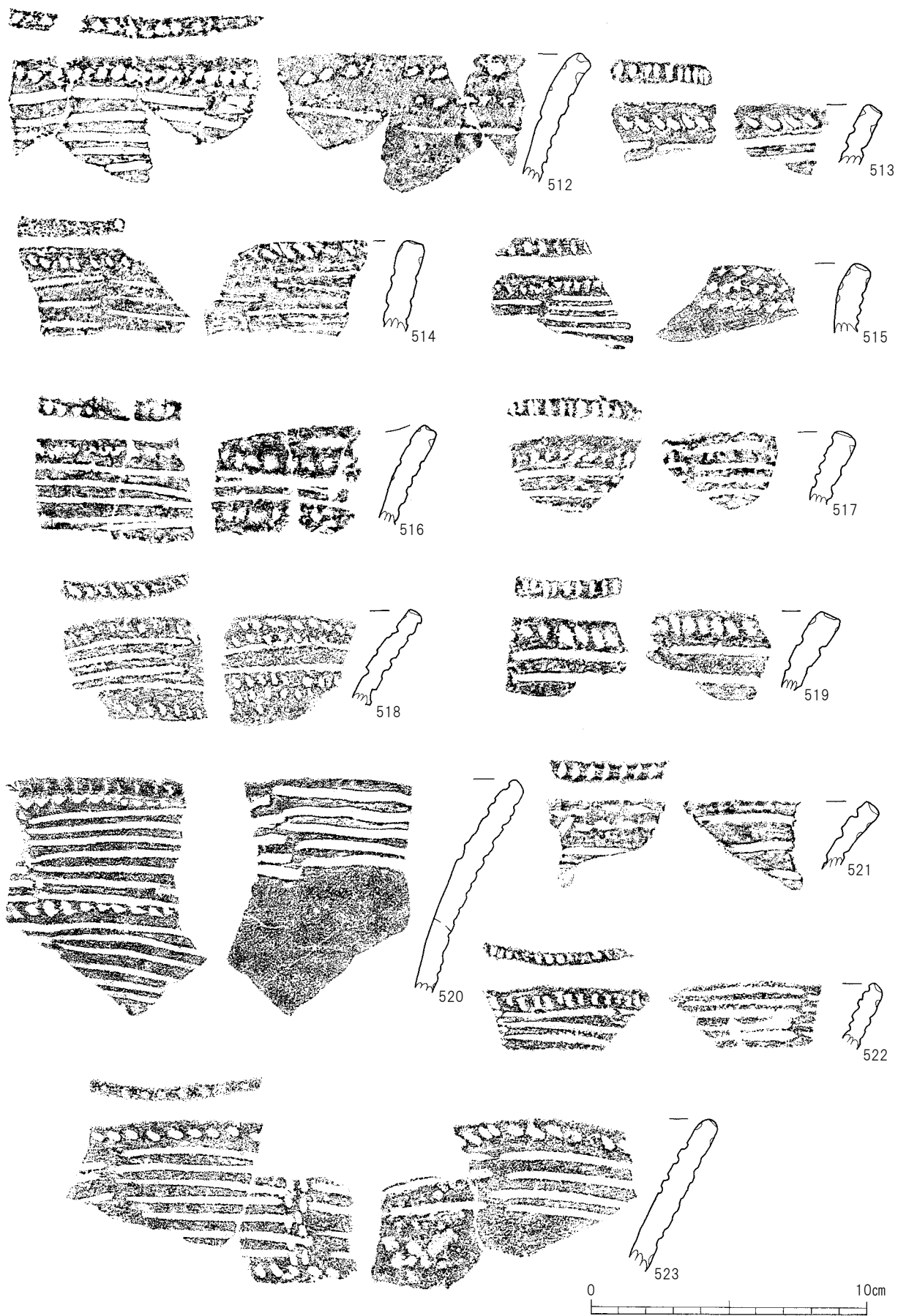
第148図 縄文時代17-a類土器(1)



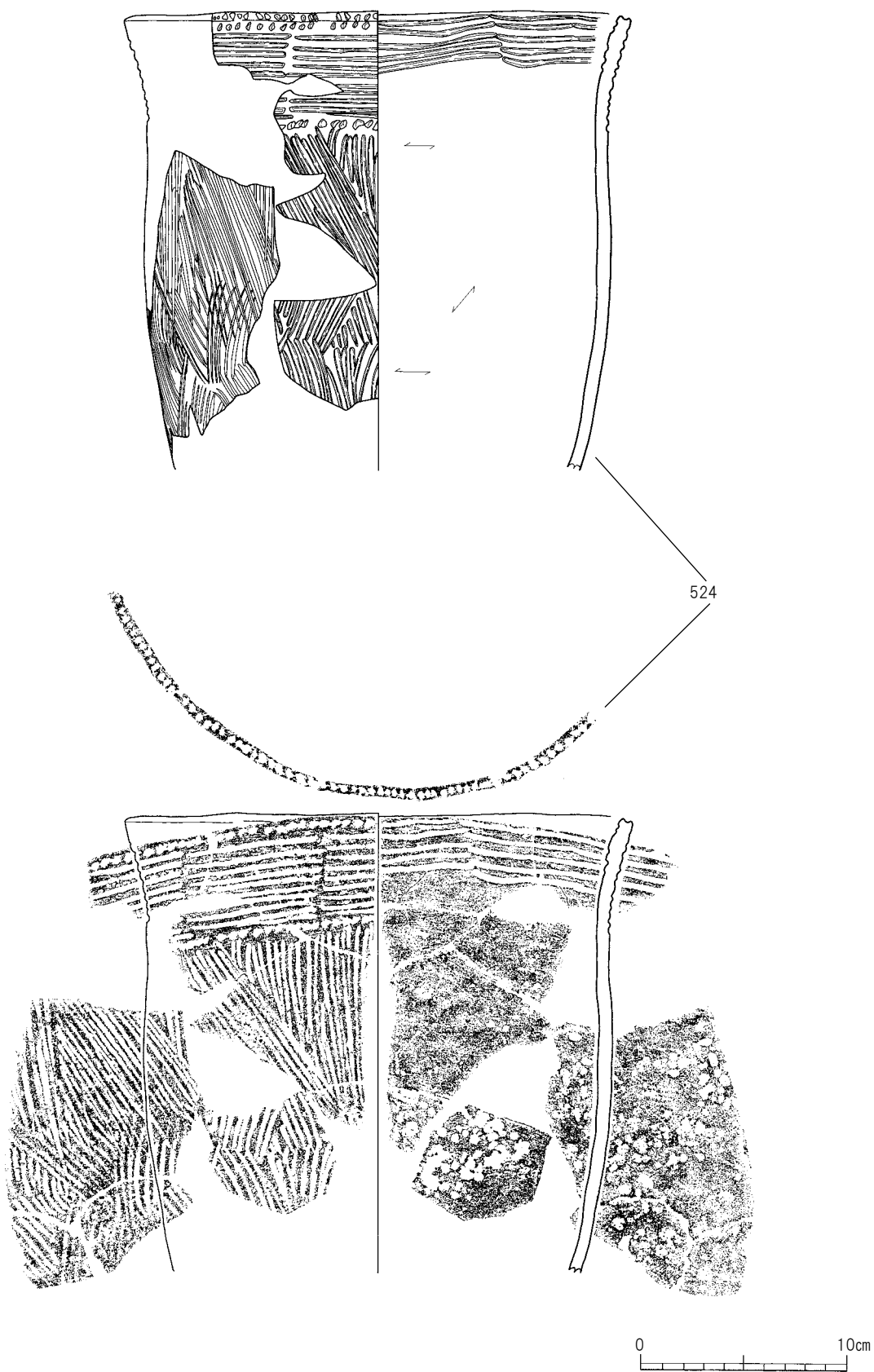
第149図 縄文時代17-a類土器(2)



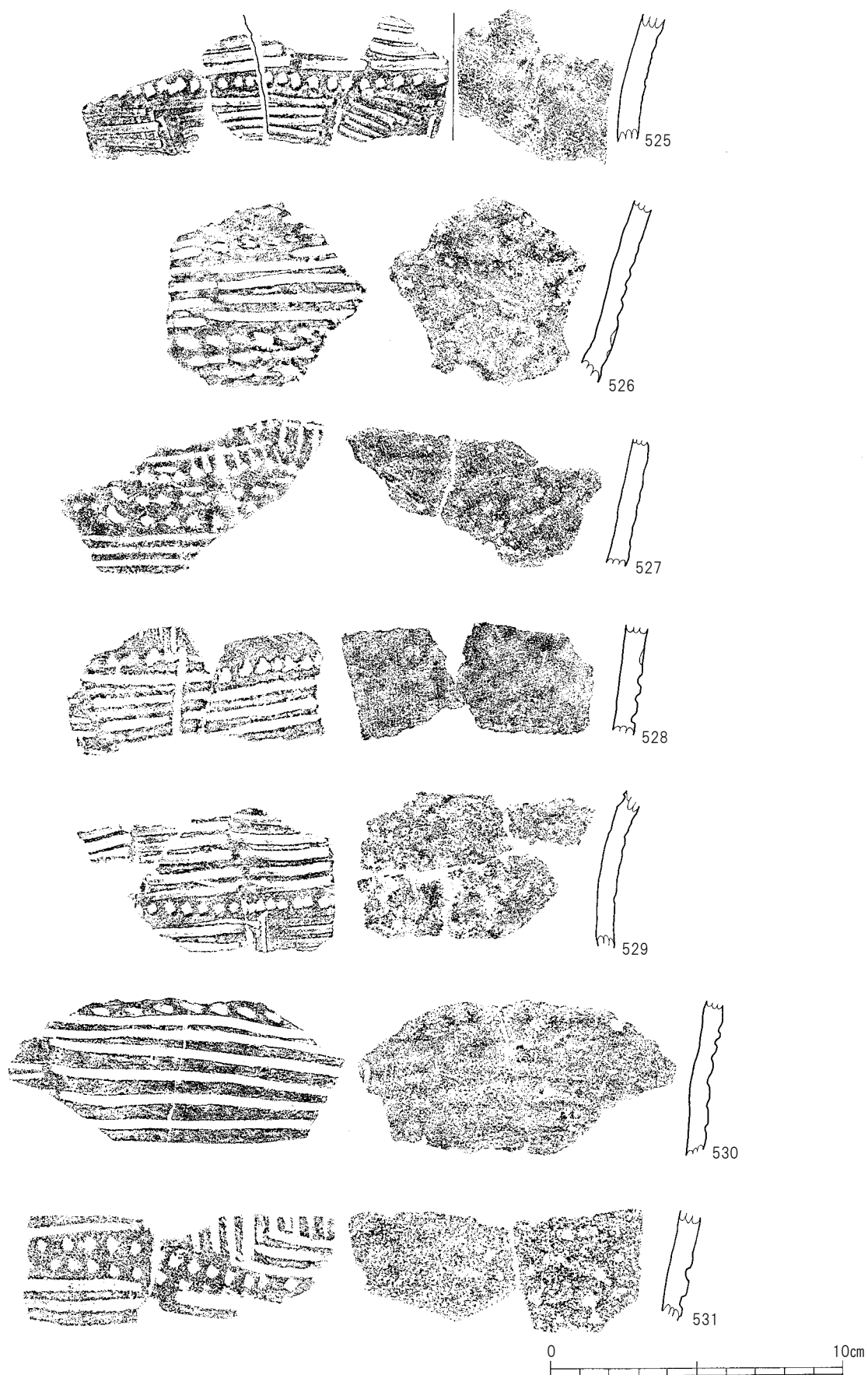
第150図 縄文時代17-a 類土器(3)



第151図 縄文時代17-a類土器(4)



第152図 縄文時代17-a 類土器(5)

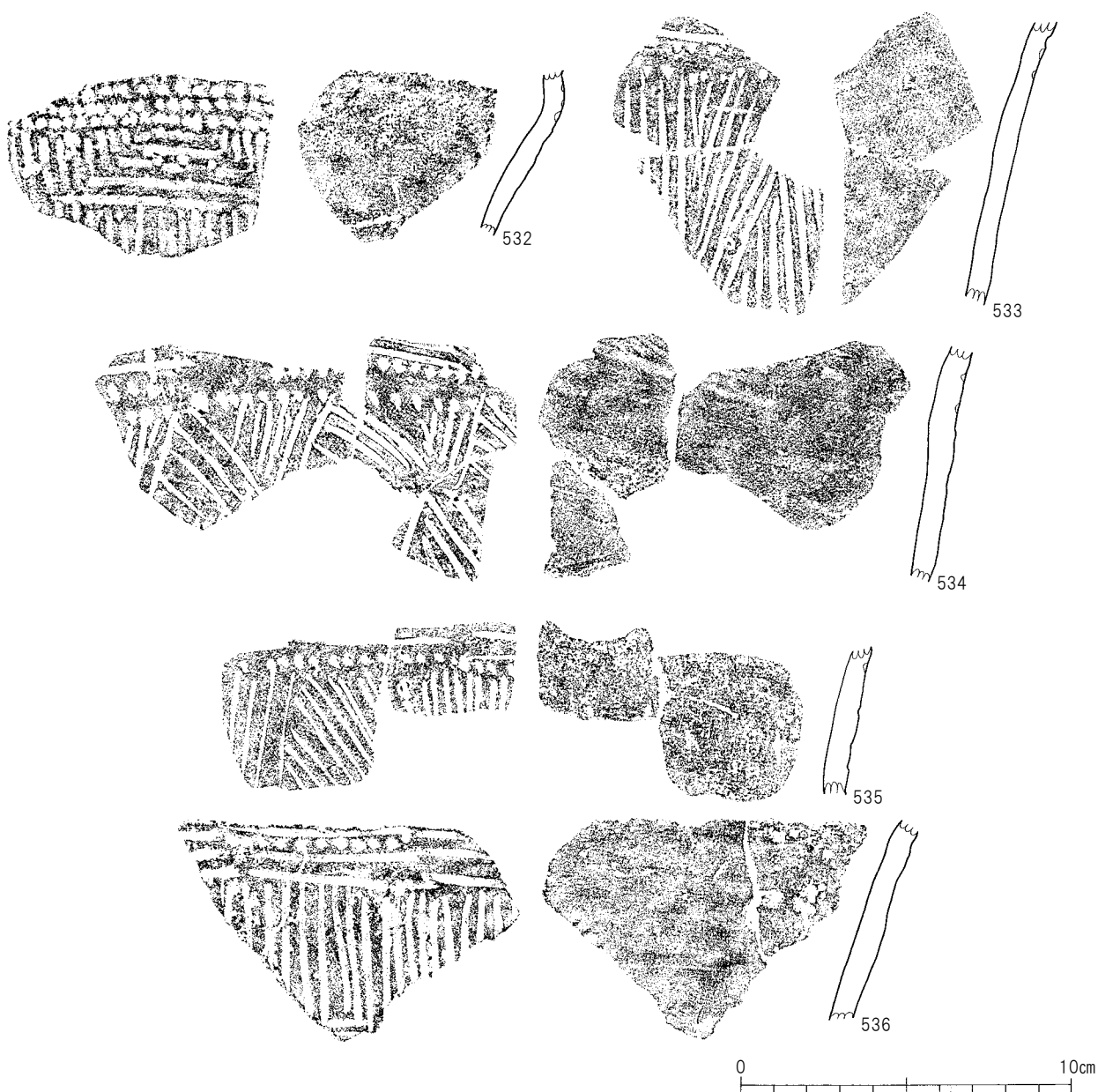


第153図 縄文時代17-a類土器(6)

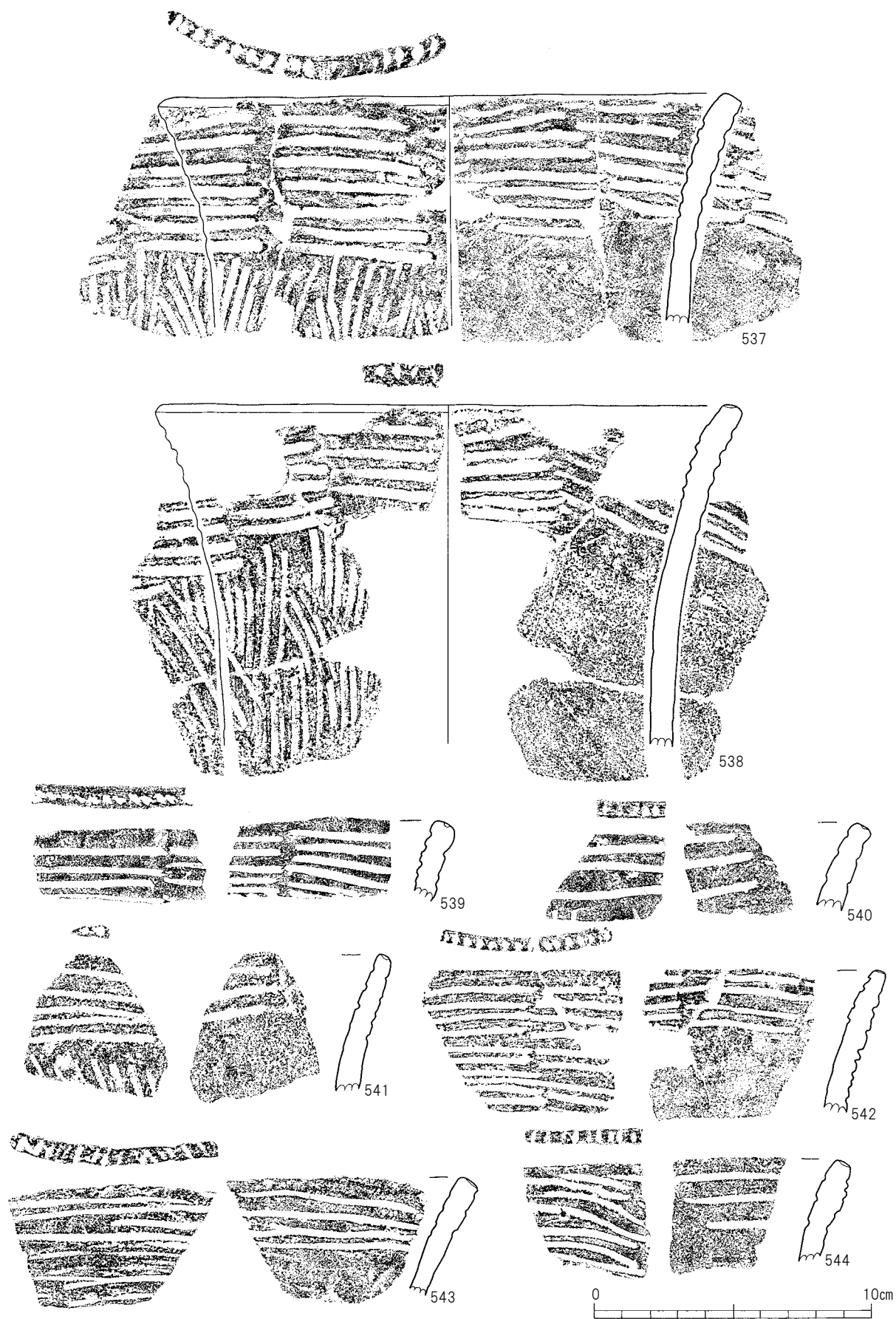
縁部である。

546・547は横位の短沈線文を主として第1文様帯が構成され、部分的に連続刺突文が施されるものである。547は直行する口縁部で、粗な沈線により第1文様帯、第2文様帯が構成されているものである。548～556は、口縁部の横位の短沈線文による第1文様帯であり、口縁部内面の文様もほぼ同様の沈線文によって構成されている。556は、沈線間に刻みが施されている。また、549, 552, 553, 554は波状口縁と思われる。

557は、波状口縁であり、横位の短沈線の第1文様帯間に部分的に刺突が見られるものである。558は、横位の沈線と連続刺突を組み合わせる第1文様帯としている。560, 561も基本的には、557と同様に連続刺突と沈線文を組み合わせる文様帯としている。561は、小破片のため、疑問が残る。



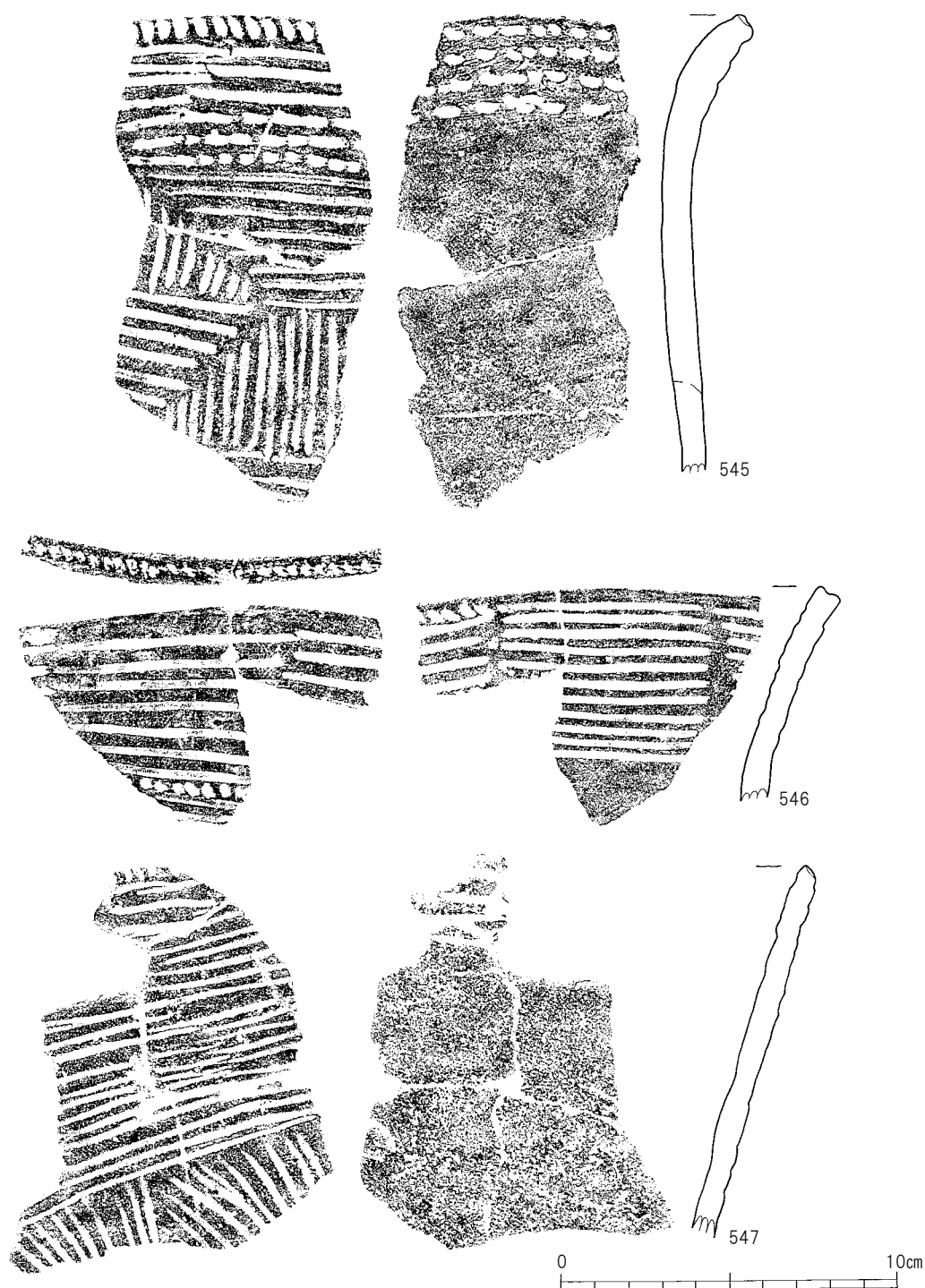
第154図 縄文時代17-a類土器(7)



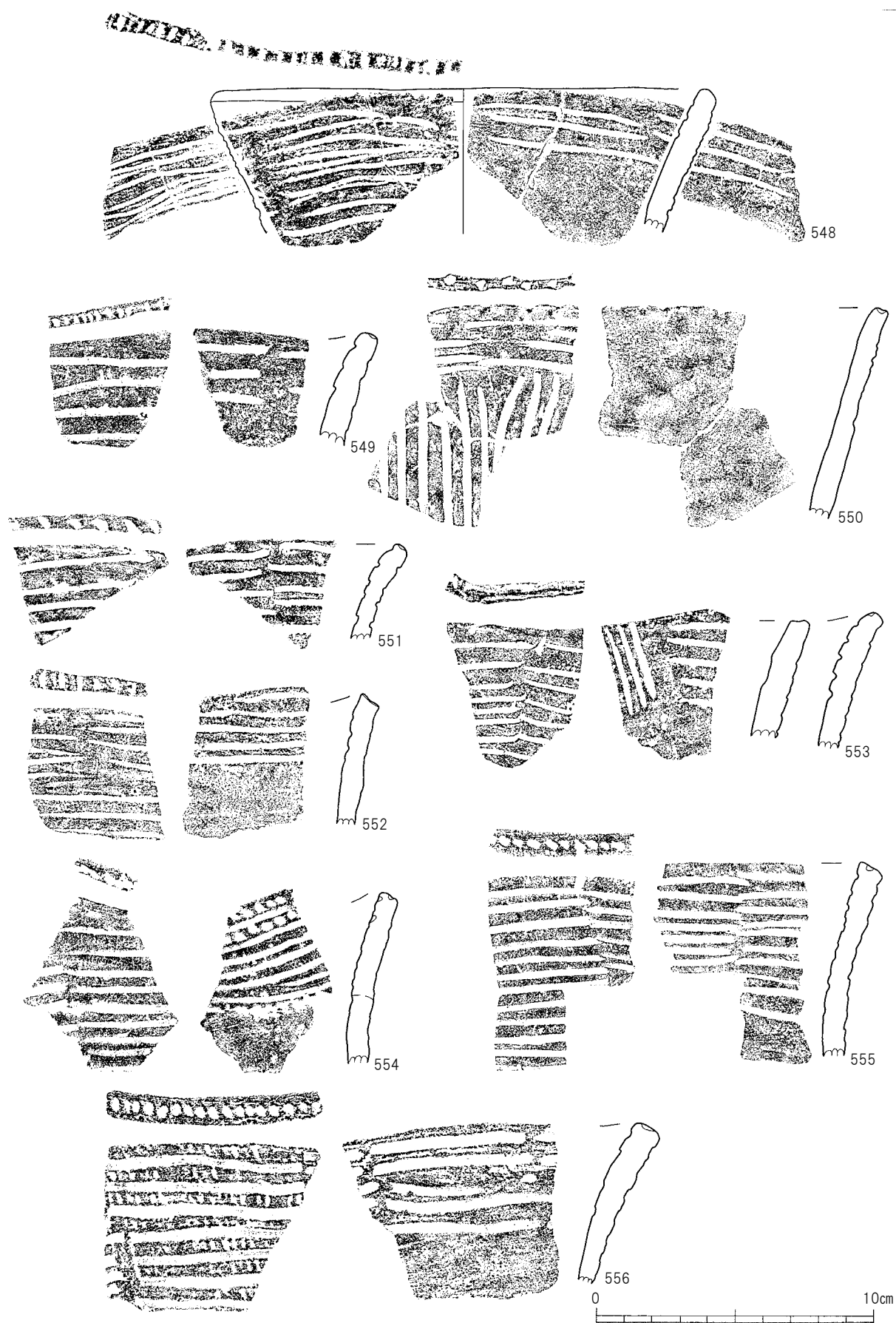
第155図 縄文時代17-b類土器(1)

562～567は器形的に口縁がラッパ上に大きく外反し胴部下半が張り丸底となる器形（557・558・560・561も同様であるが）であることから、17-b類としたものである。566・567は波状口縁を呈するものである。562・563の口縁内面の施文は、外面と同様の刺突文であるが、565～567は、横位または波状の沈線文である。565は、その下に、曲線状の沈線も観察されるものである。

568は、口縁先端部を欠損したもので、横位の沈線文を第1文様帯としているものである。569は、胴部から底部にかけての破片で、胴部中央の文様帯が四角文、底部へかけての横位の沈線文である。



第156図 縄文時代17-b類土器(2)



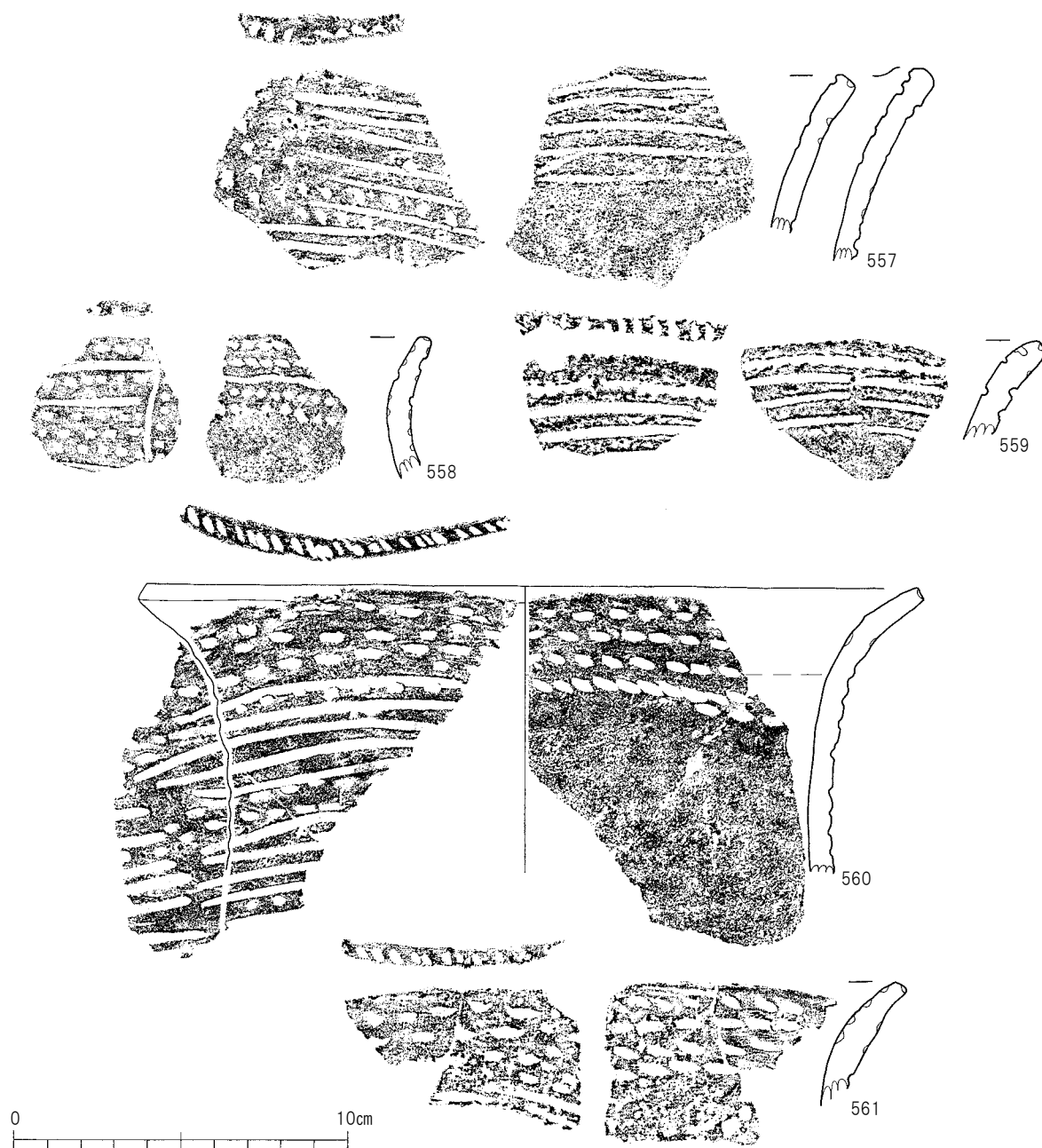
第157図 縄文時代17- b類土器(3)

570・571も胴部片で、四角文と思われる文様帯である。572は、胴部最大径から頸部へと立ち上がる部分である。縦位の沈線文及び四角文で文様帯を構成しているものと思われる。573～576は、胴部片であり、572と似たような文様帯であろうか。

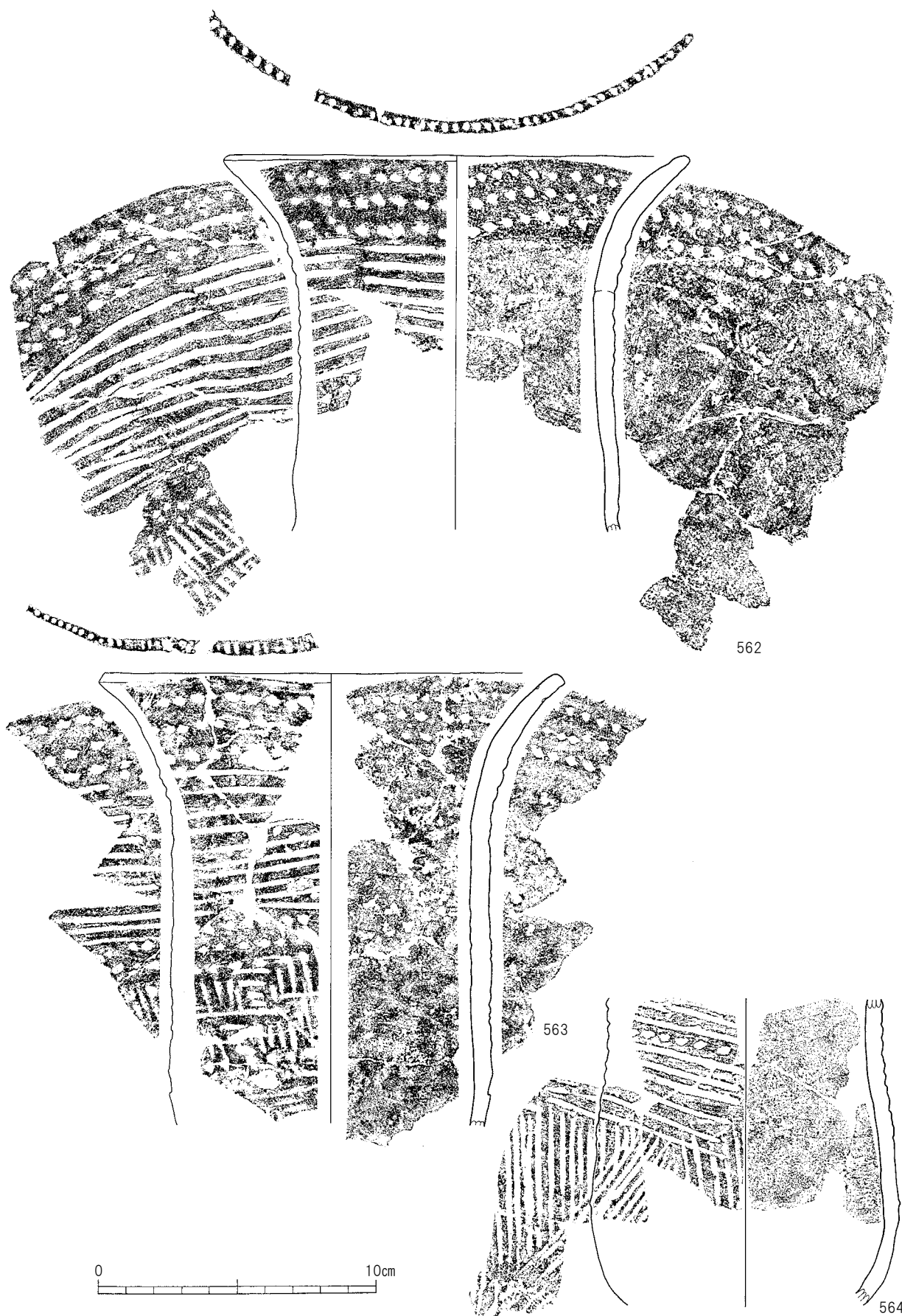
577は口縁部先端が欠損しているが、第1文様帯が連続刺突文でない事から、本類で掲載したものである。578・579は、胴部中央部の破片と思われ、横位の沈線文及び、綾杉状の沈線文により、文様帯を構成している。

17-c類（第163図～第176図）

17-c類は、文様帯としての構成意図が希薄なもの及びその他の沈線状の施文や底部を一括した



第158図 縄文時代17-b類土器(4)



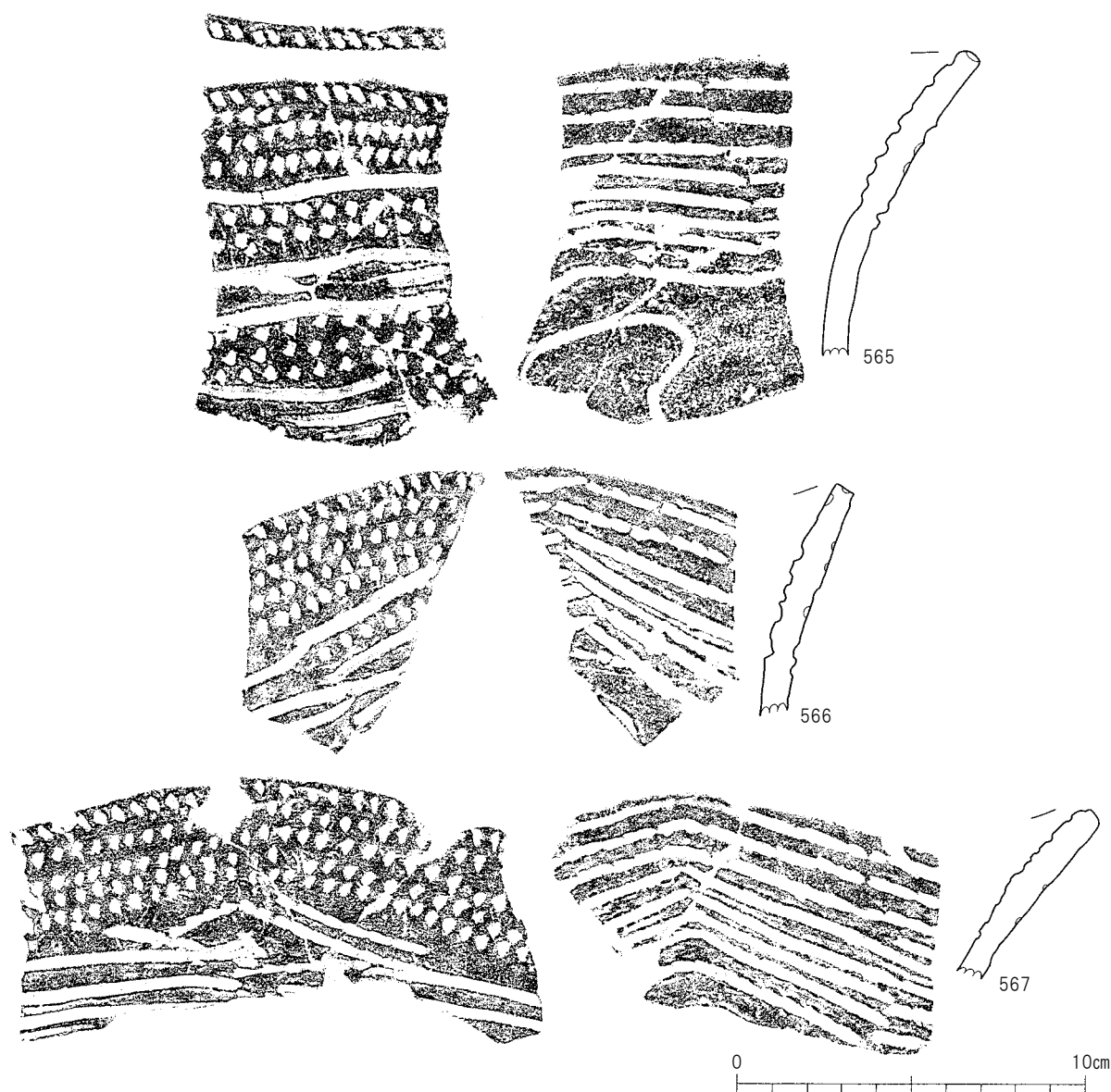
第159図 縄文時代17-b類土器(5)

ものである。

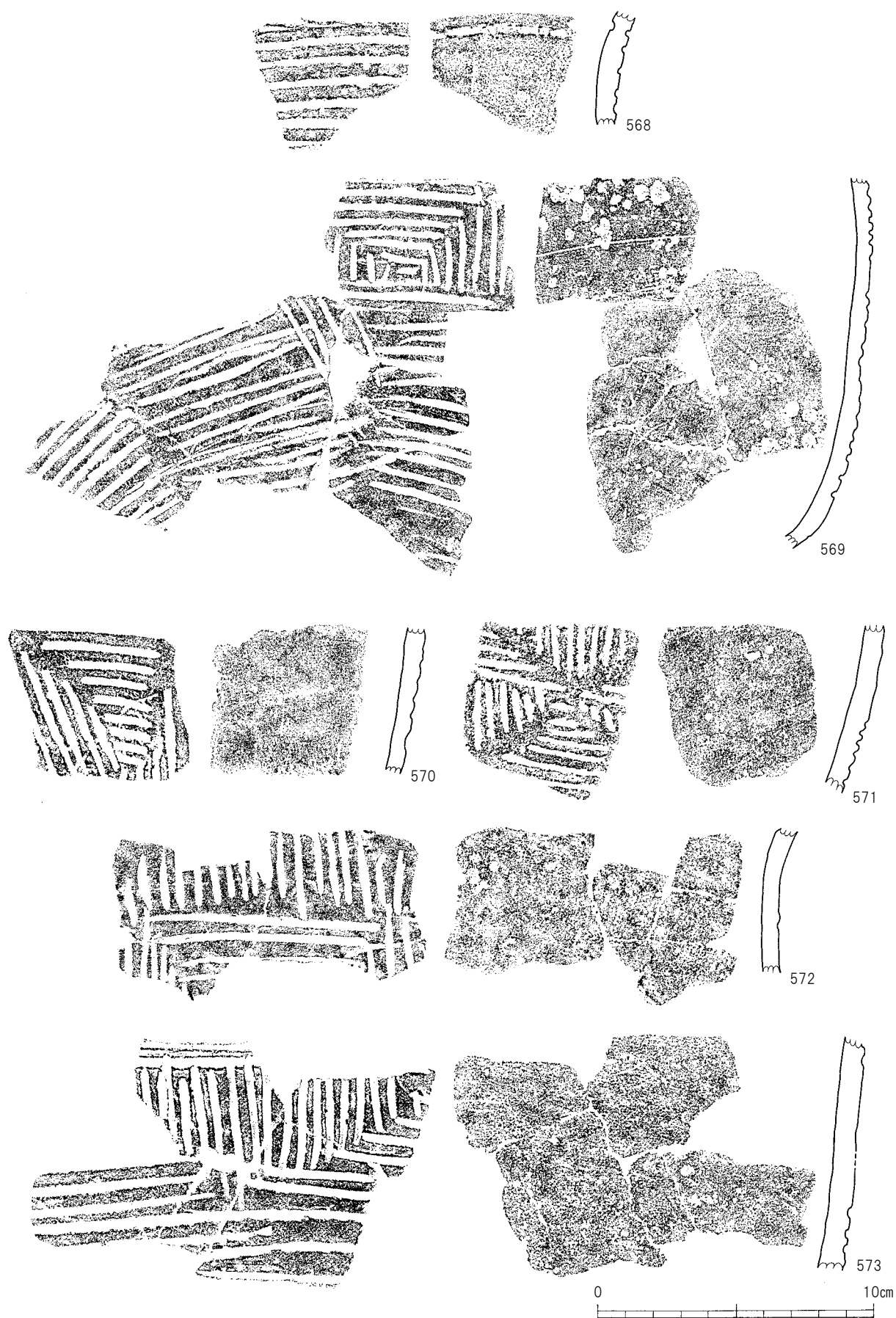
580は胴部下半で屈曲し、そのまま直行気味に頸部へと至り、やや外反して口縁先端部を丸く収める器形である。口縁部には、2か所ほどの山形の突起が見られる。口唇部は連続的な刻みを施し、口縁部の第1文様帯は櫛状の工具により、横位の沈線を施している。底部付近まで縦位及び斜位の沈線文が粗雑に施されている。

581は、やや張った胴部からゆるやかに口縁部へ外反しながら至るもので、やや口縁部が波打つ。復元口縁径34cm、残存部器高が17cmである。口唇部に刻みを施し、口縁部を中心に横位のやや波打つ沈線文を施す。胴部へ行くに従って沈線文は少なく、短くなる。部分的に縦位の沈線文を乱雑に施し、その上から頸部には横位の曲線状の沈線文を数条施すものである。内面は外面と同様の横位の沈線文を施す。

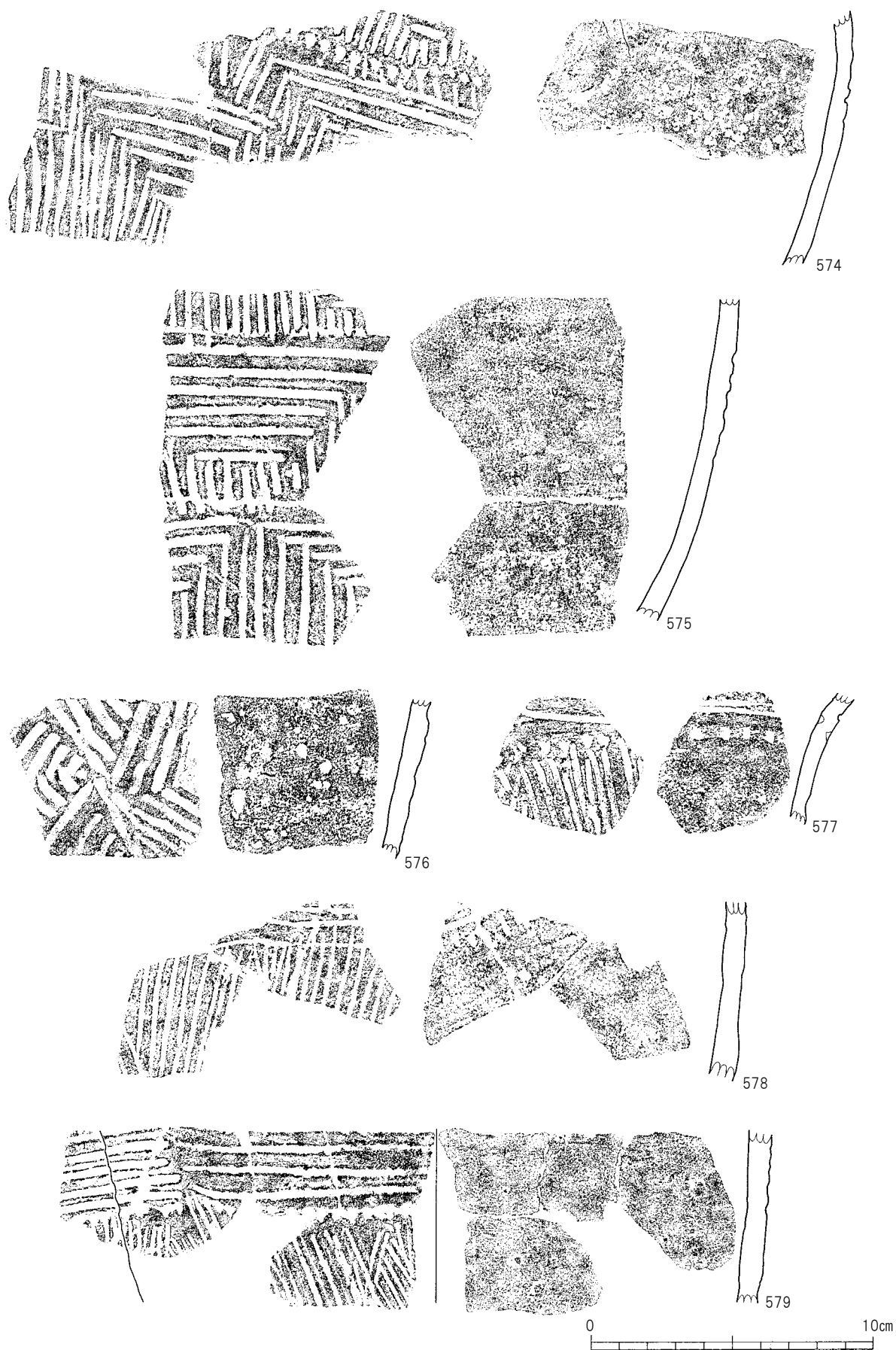
582は、胴部からゆるやかに外反する器形で、口縁端部はやや肥厚する。口縁部に横位の連続刺突文を2条施し、その下に横位の短沈線を数条そしてまた、横位の連続刺突文を2条施す。頸部以



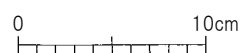
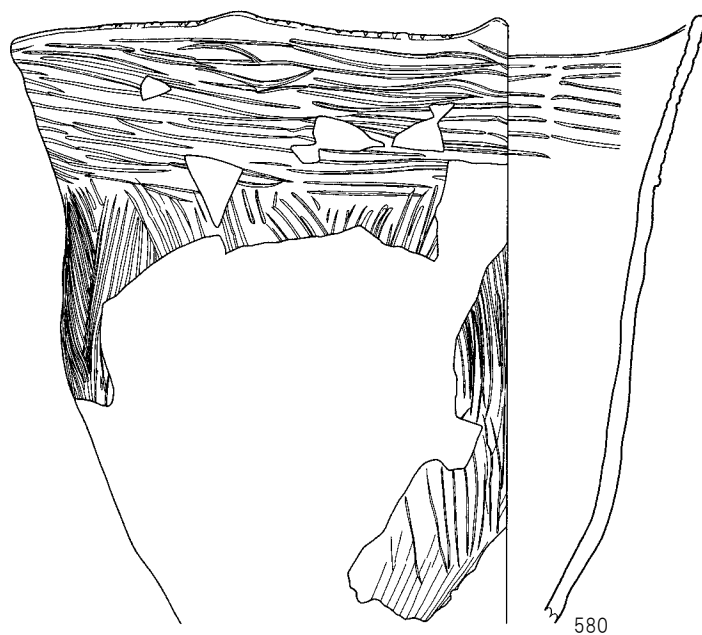
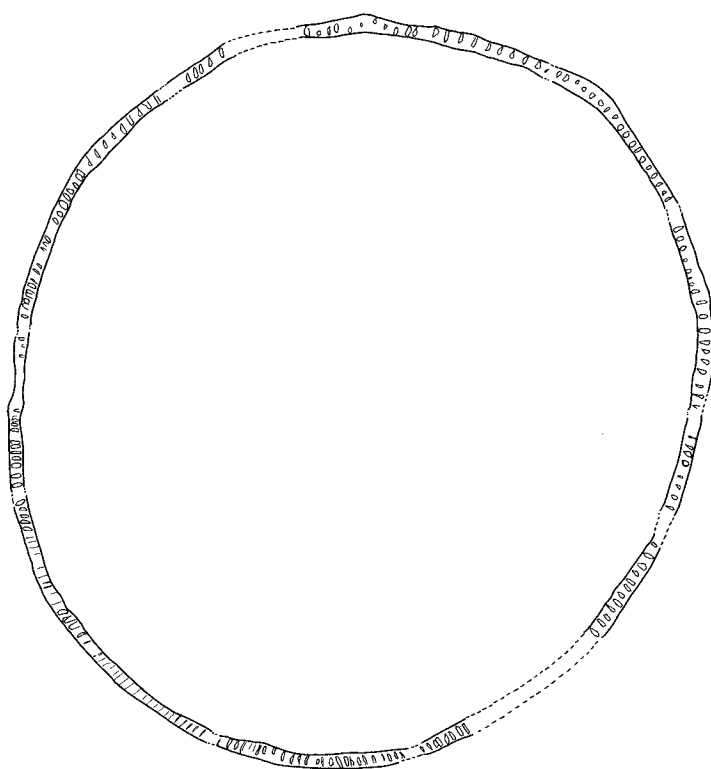
第160図 縄文時代17-b類土器(6)



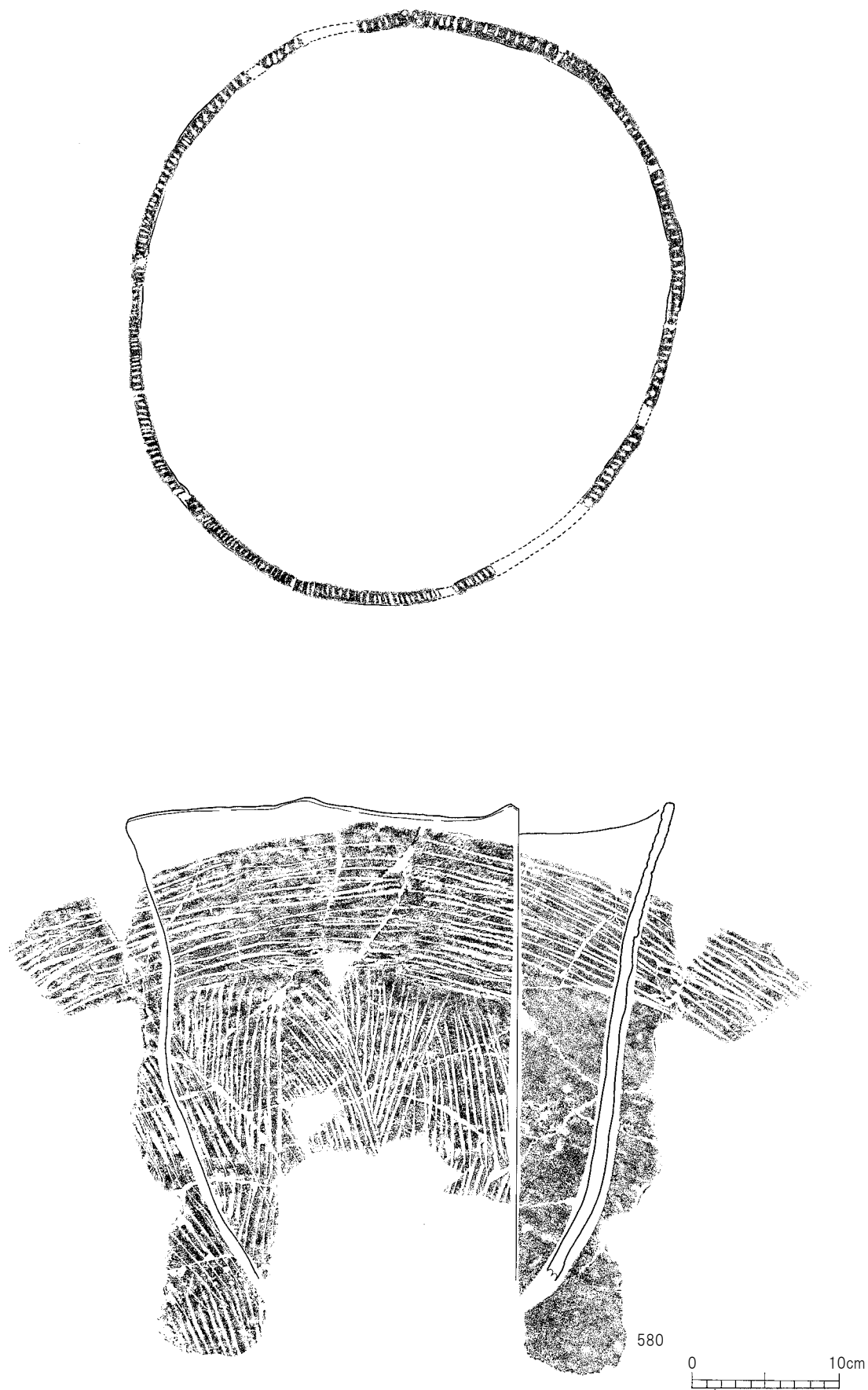
第161図 縄文時代17-b類土器(7)



第162図 縄文時代17-b類土器(8)



第163図 縄文時代17-c 類土器(1)



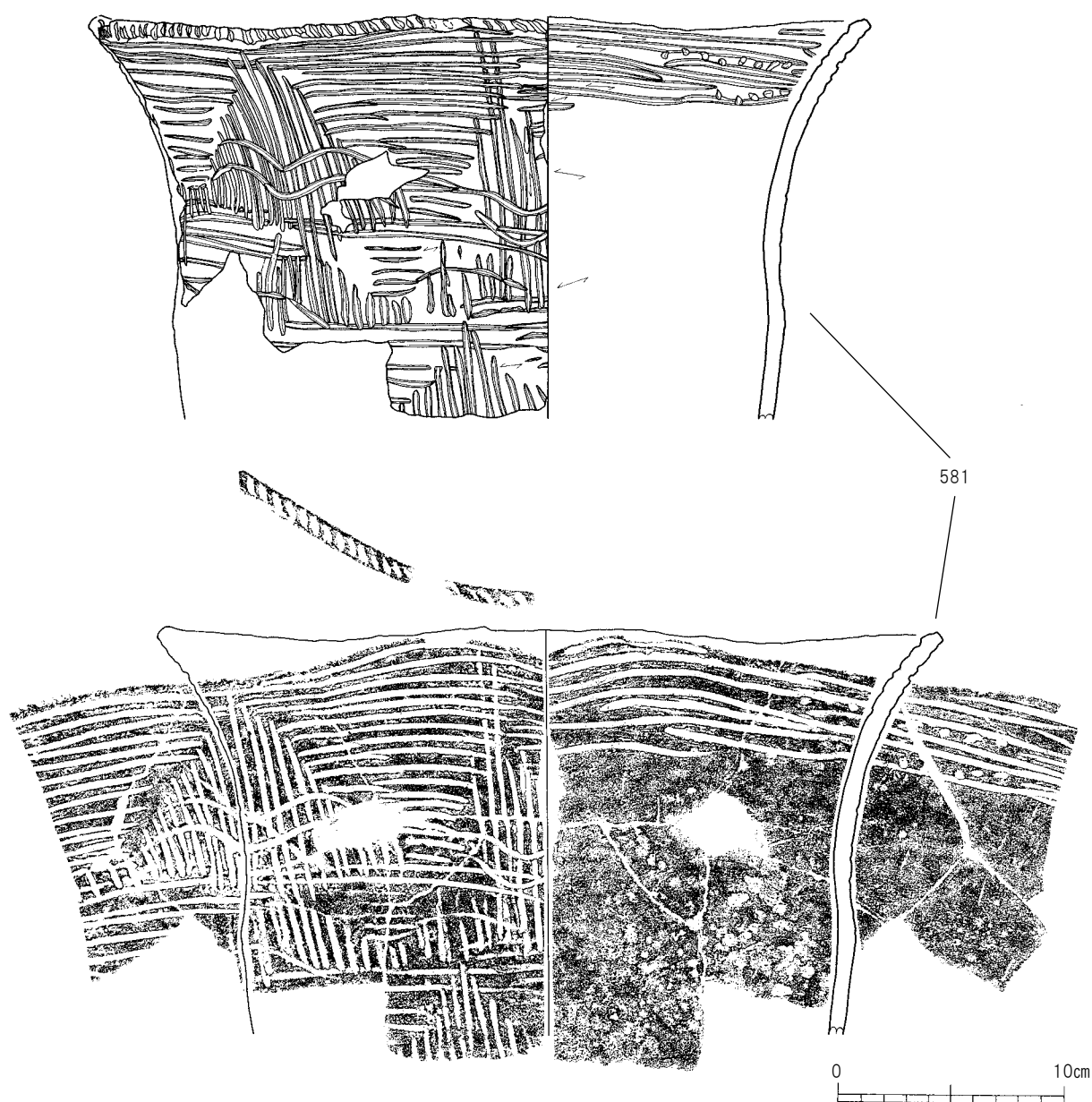
第164図 縄文時代17- c 類土器(2)

下は、ハケ状の工具により縦位の細かな細沈線を施し、その上の曲線文を描くものである。口縁部内面には、2条の横位の連続刺突文が施されている。

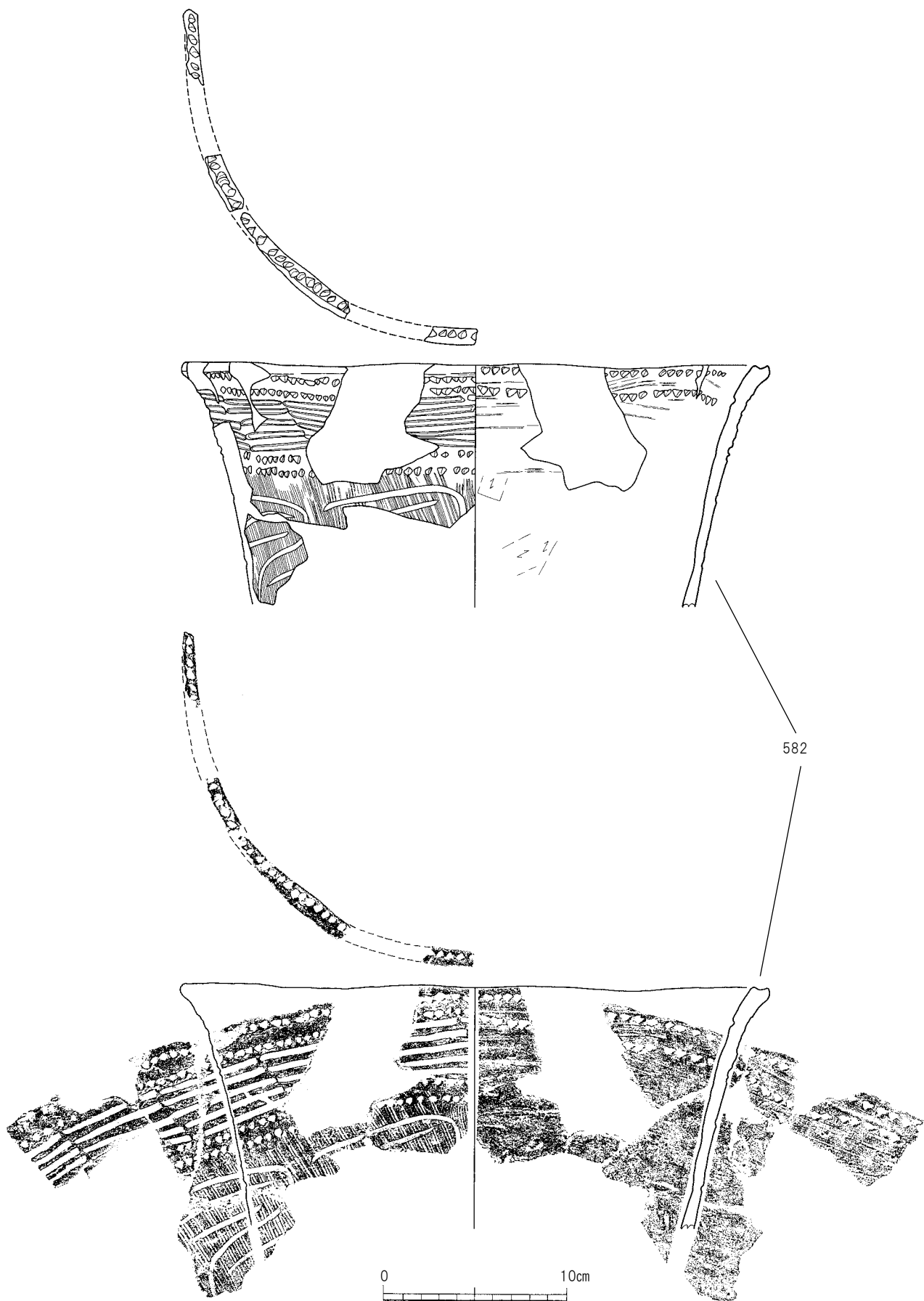
583～587は、口唇部の深い沈線及び外面の地文である細かいハケ状の工具による細沈線などから同一個体の可能性が高い。地文の上には、ヘラ状の工具で横位の沈線文が施されている。口縁部内面にも同じ工具による施文がみられる。

588はやや張る胴部からゆるやかに口縁部へ至るもので、口唇部は平坦である。復元口縁径は18cmを測る。外面は器面全面に縦位の粗い沈線文を施し、部分的に横位のやや太めの沈線がみられる。口縁内面は、重弧文を施すものである。590は、588と同一個体の可能性がある。

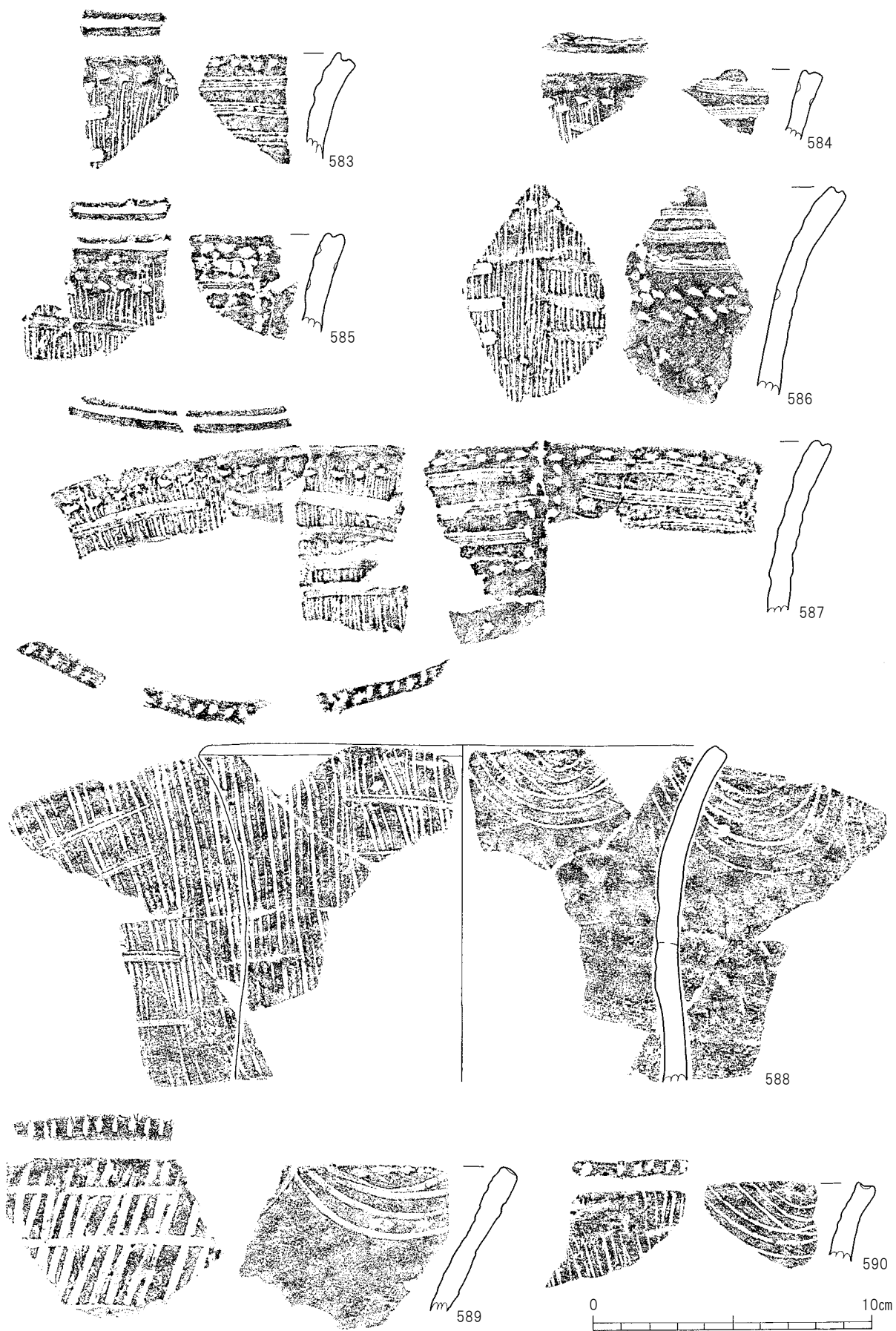
589は、口唇部に連続する刻みを施し、口縁部には、斜位の沈線文を施した後に数条の横位の沈線文を施す。口縁部外面は、588と同様の重弧文である。591は、588に比して最大径が胴部にあり、



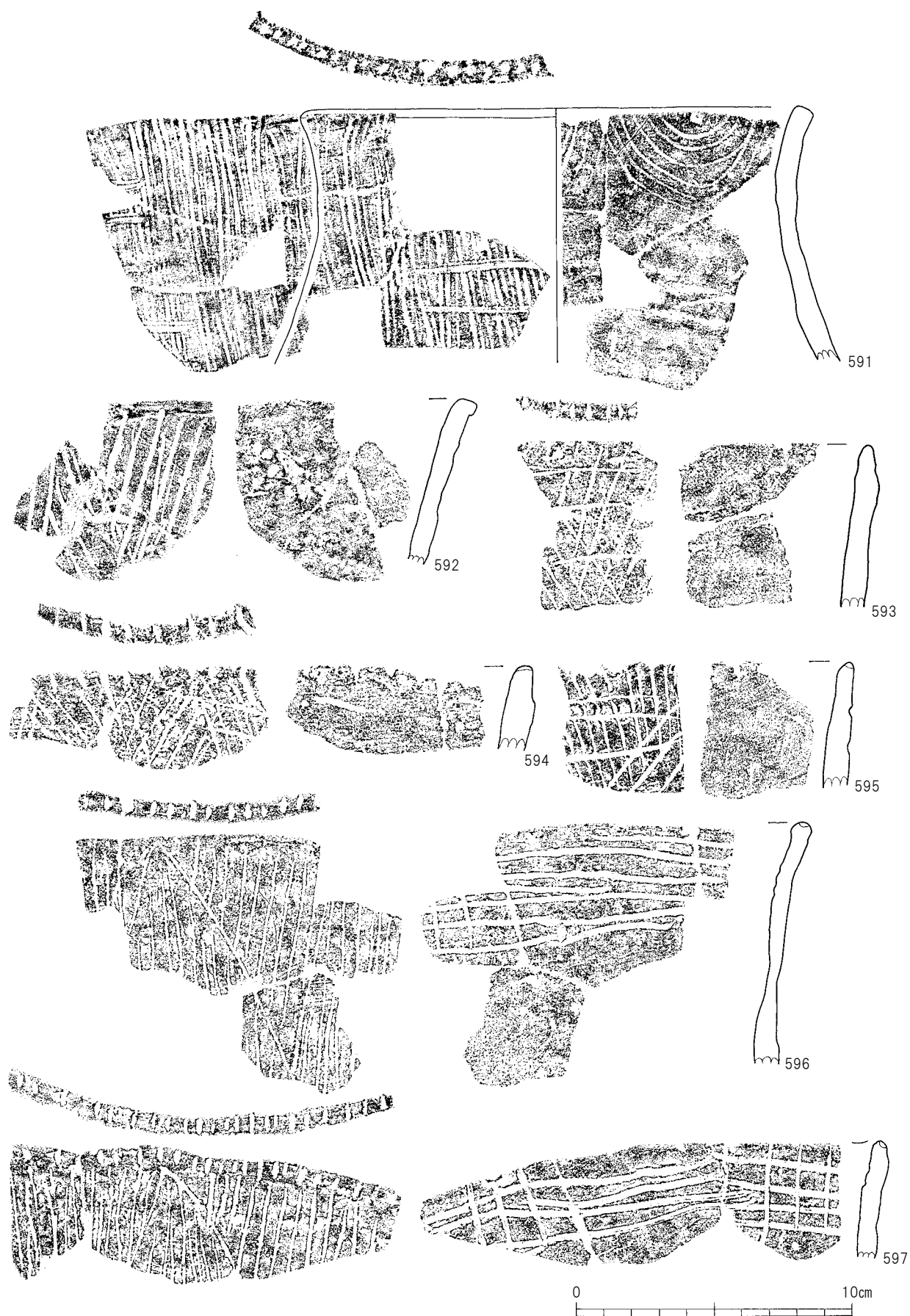
第165図 縄文時代17—c 類土器(3)



第166図 縄文時代17- c 類土器(4)



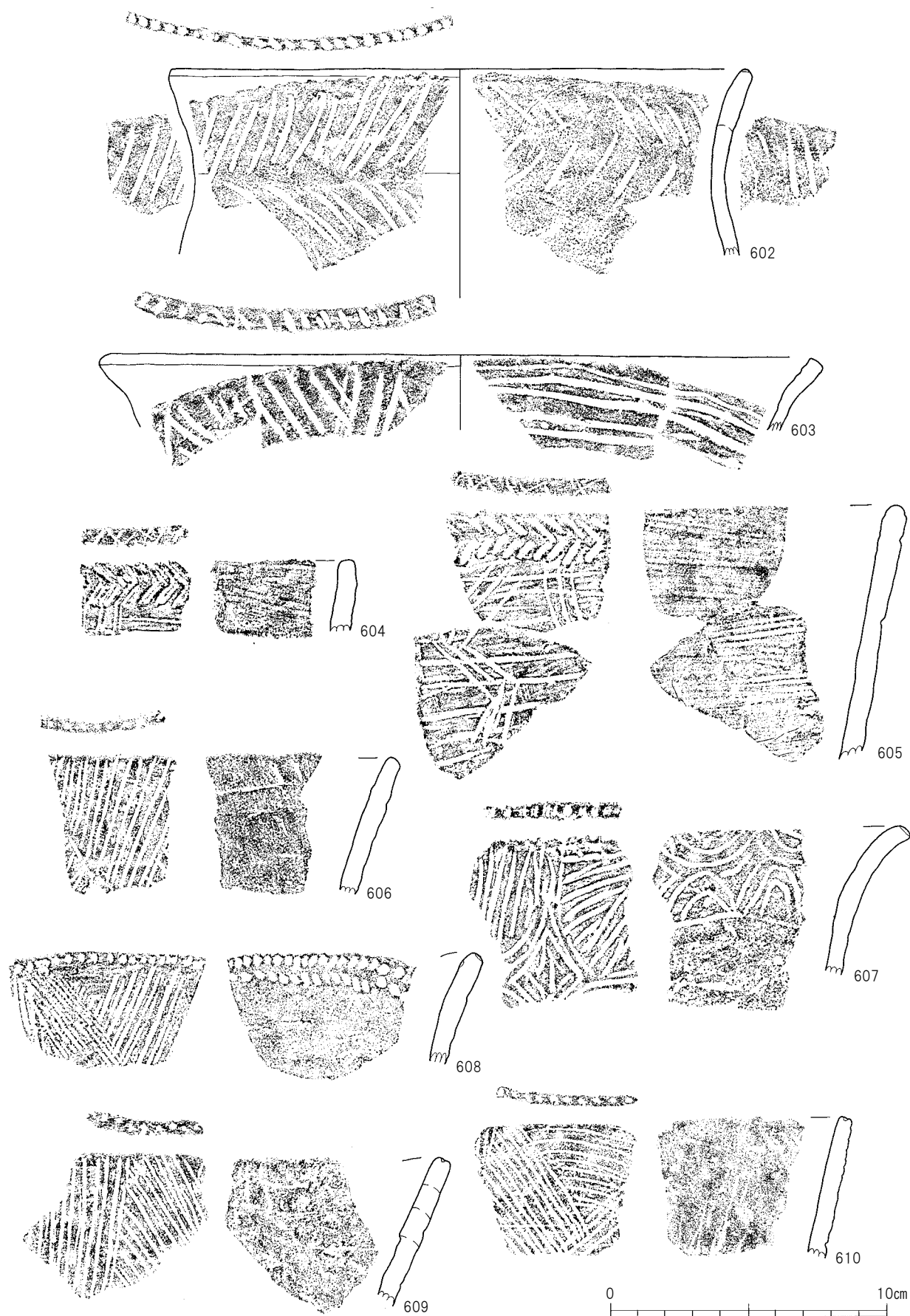
第167図 縄文時代17-c類土器(5)



第168図 縄文時代17-c 類土器(6)



第169図 縄文時代17-c類土器(7)

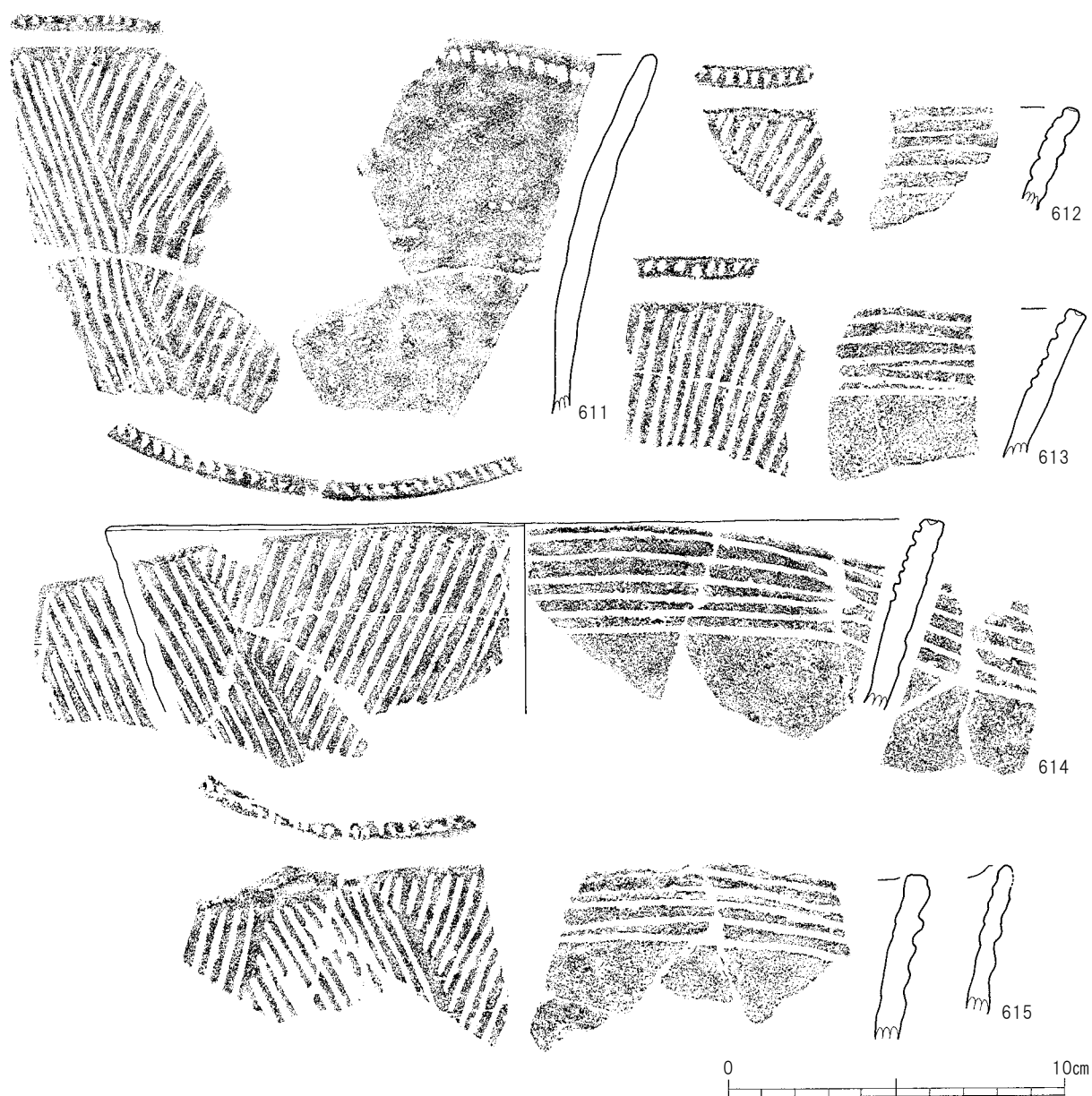


第170図 縄文時代17-c類土器(8)

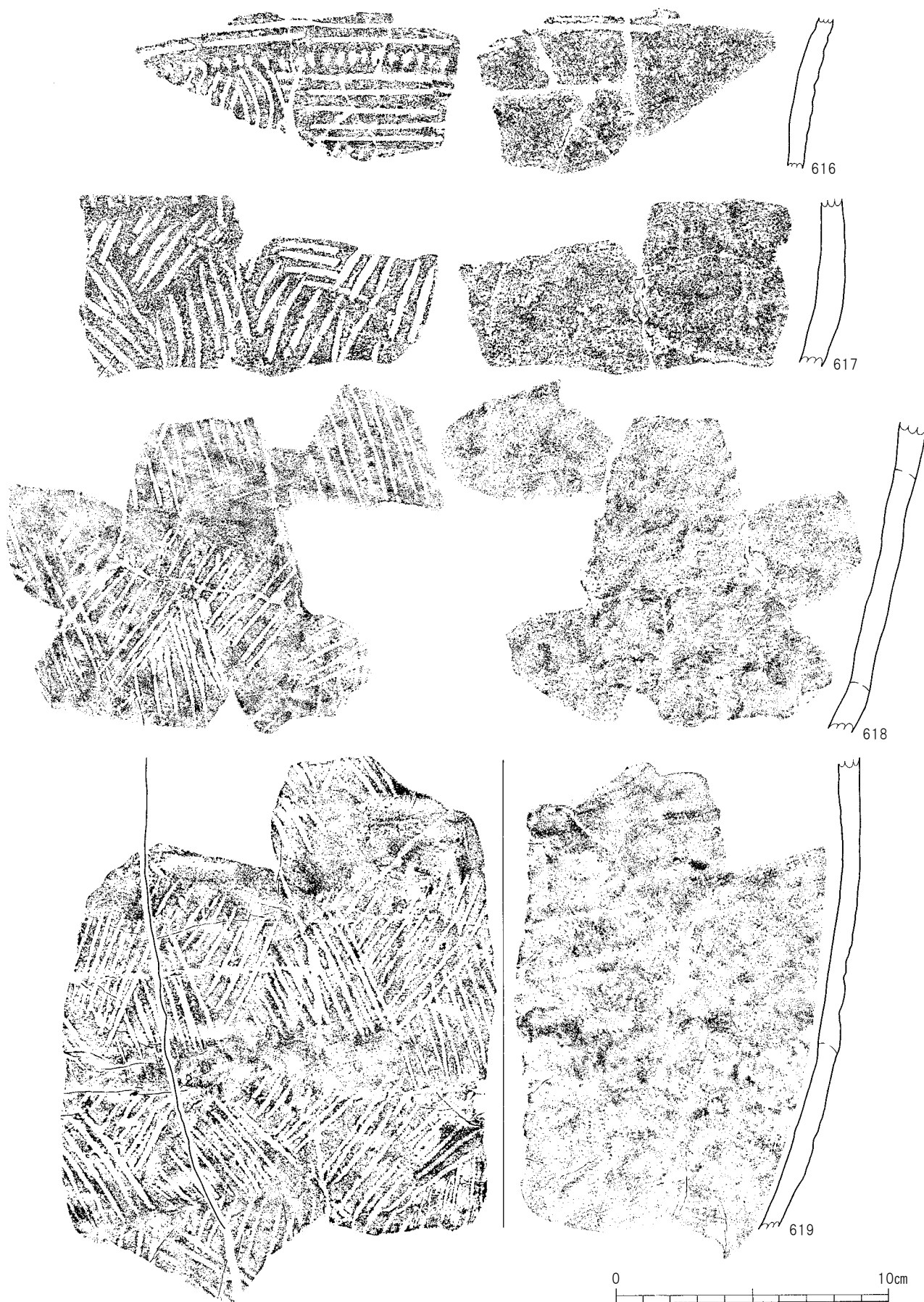
頸部がややしまるが、基本的な施文は同様である。592は、口縁部に粗い綾杉状の沈線文を施すが、内面の施文はみられない。593は、直行する口縁部でやや肥厚が見られる。施文は粗い格子状の沈線文を外面には施すが、内面の施文は見られない。594・595もほぼ同様である。

596・597は直行する口縁で、口唇部に刻みを施し、口縁部には縦位の沈線文の上から逆「V」字状の沈線文を描く、内面は数条の横位の沈線文を主とし、部分的に縦位の沈線を施す。

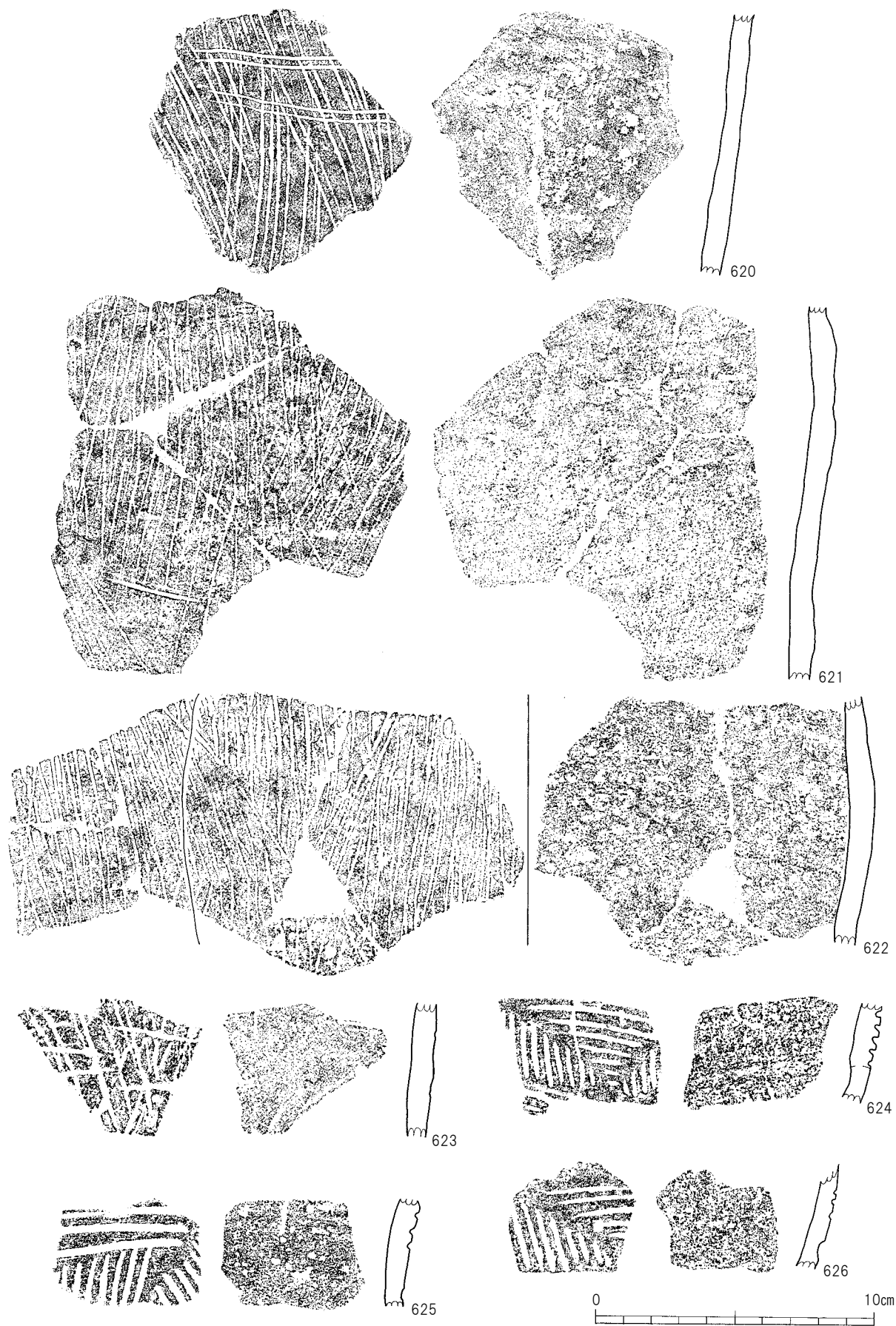
589の口縁部は大きく外反し、口縁端部が肥厚する。造りが粗いために、正面観は口縁部が波打っている。599・600は、588と同様の器形であるが造りが丁寧である。601は直行する口縁である。これら598～601は、口唇部には連続的な刻みが施され、口縁部は縦位・斜位の粗い櫛描状の文様が施される。口縁内面に施文がみられるのは、601が横位の沈線を主とし、部分的に縦位の沈線3本を単位として施している。



第171図 縄文時代17- c 類土器(9)



第172図 縄文時代17—c 類土器(10)



第173図 縄文時代17－c類土器(11)

602は、胴部は張り気味と思われ、頸部はゆるく絞まり外反しながら丸く収めた口縁端部へと至る。口唇部には刻みを施し、口縁部は左下がりの沈線、頸部からは右下がりの短沈線を施すもので、口縁部内面も同様の文様である。603は、口縁部に粗い綾杉状、口縁部内面には、横位の沈線を施すものである。604・605は口唇部に「×」状の刻み、口縁部には「く」の字状の連続文を施す。604は沈線文らしき文様が観察されるが、小片の上に風化が激しいため詳細は定かでない。605は、横位の沈線文の上から3本を単位とする鋸歯状の文様を縦位に施す。両者とも口縁部内面には施文は行われぬ。

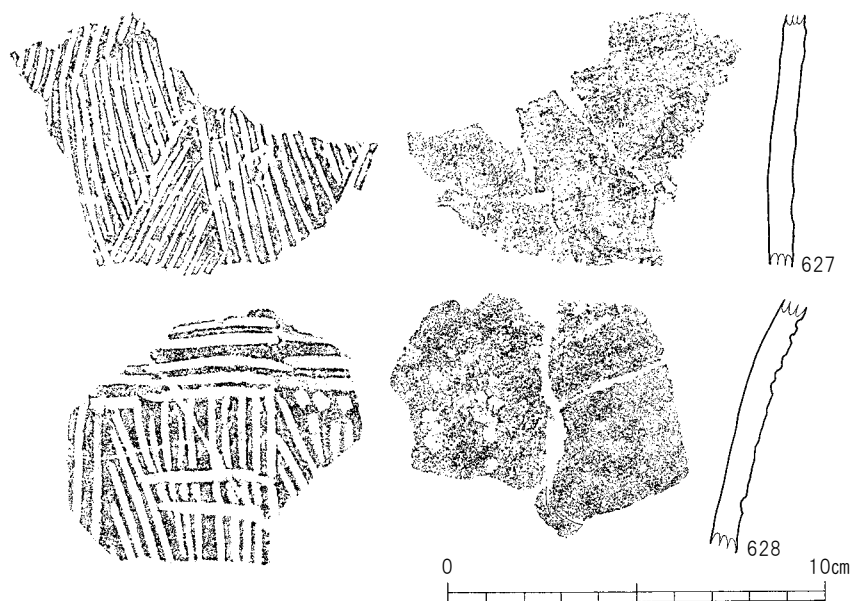
606・608～610は、口縁部に斜位の細い櫛描きを施すものである。608は口縁部上端に1条と口縁部内面に2条の横位の連点文を施す。610は、609などとほぼ同様であるが、弧状の施文が見られる。607は、口縁部外面には縦位・横位・斜位・弧状の沈線文により幾何学文を、内面には重弧文状の文様を施している。

611～615の口縁部は、堅固な櫛状の工具により、深い斜位の端正な櫛描き文を、口縁部内面には、横位の沈線文が数条施されている。

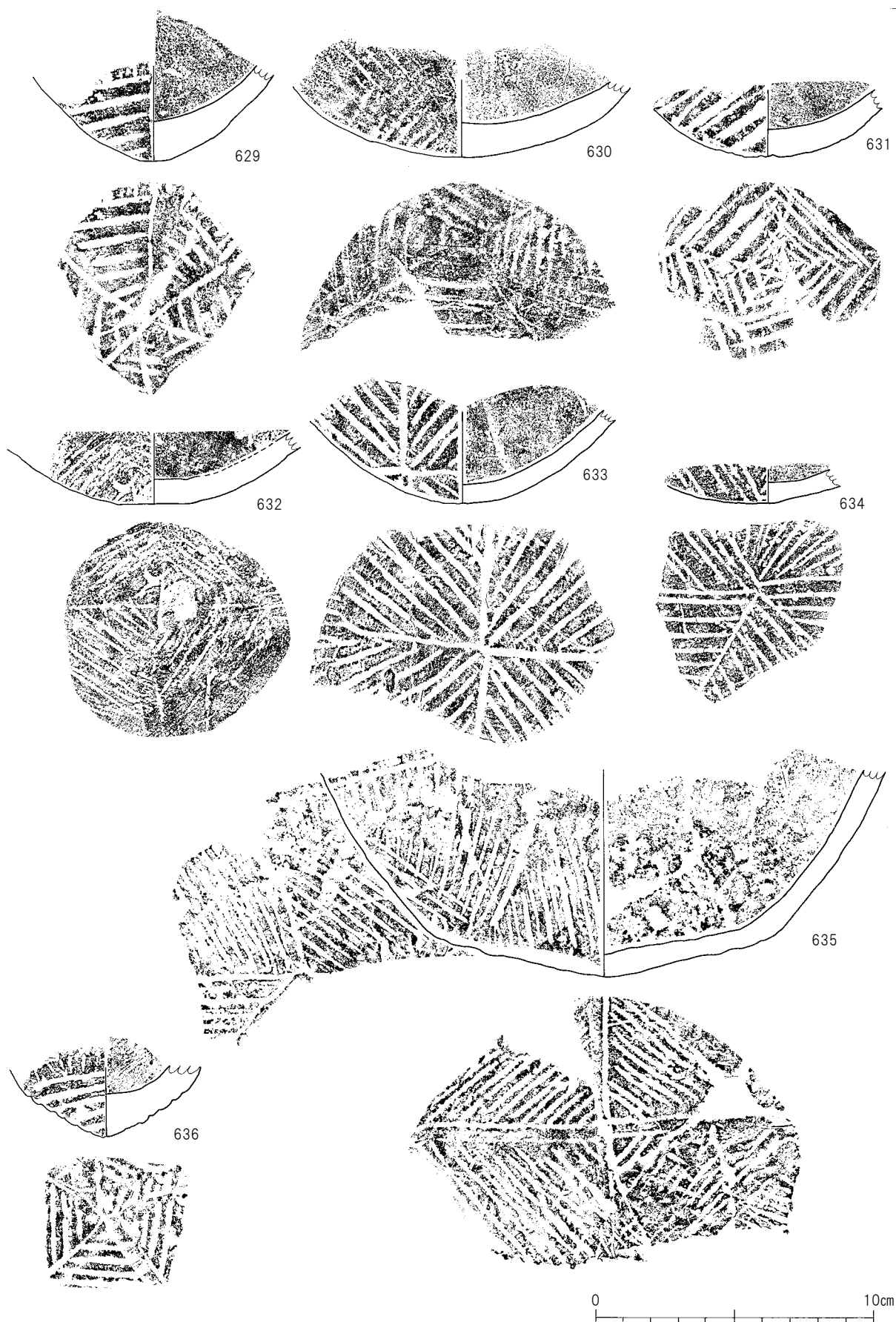
616～628は、胴部片である。616は口縁部付近と思われ、2条の横位の沈線文、連点文その下に沈線文と曲線文を施す。内面には、沈線文が観察される。617～619は、綾杉あるいは鋸歯状の粗い櫛描き文を施す。内面はナデ調整である。591・620～623は、口縁部の破片である。598～601は胴部の破片の可能性のあるものである。623は、斜位及び横位の粗い沈線文が施されている。624・626は569～573と近い関係にあるものであろうか。625は、611～615などの胴部片と考えられる。627・628は胴部片で文様帯としての構成が判然としないが、17-b類に属するものであろうか。

629～645は、底部片である。形状からは、尖底・丸底・平底などに分類される。また、文様からは、クモの巣状のもの（629～632、635・636）、放射状のもの（637～641）同心円状のもの（642）などがある。

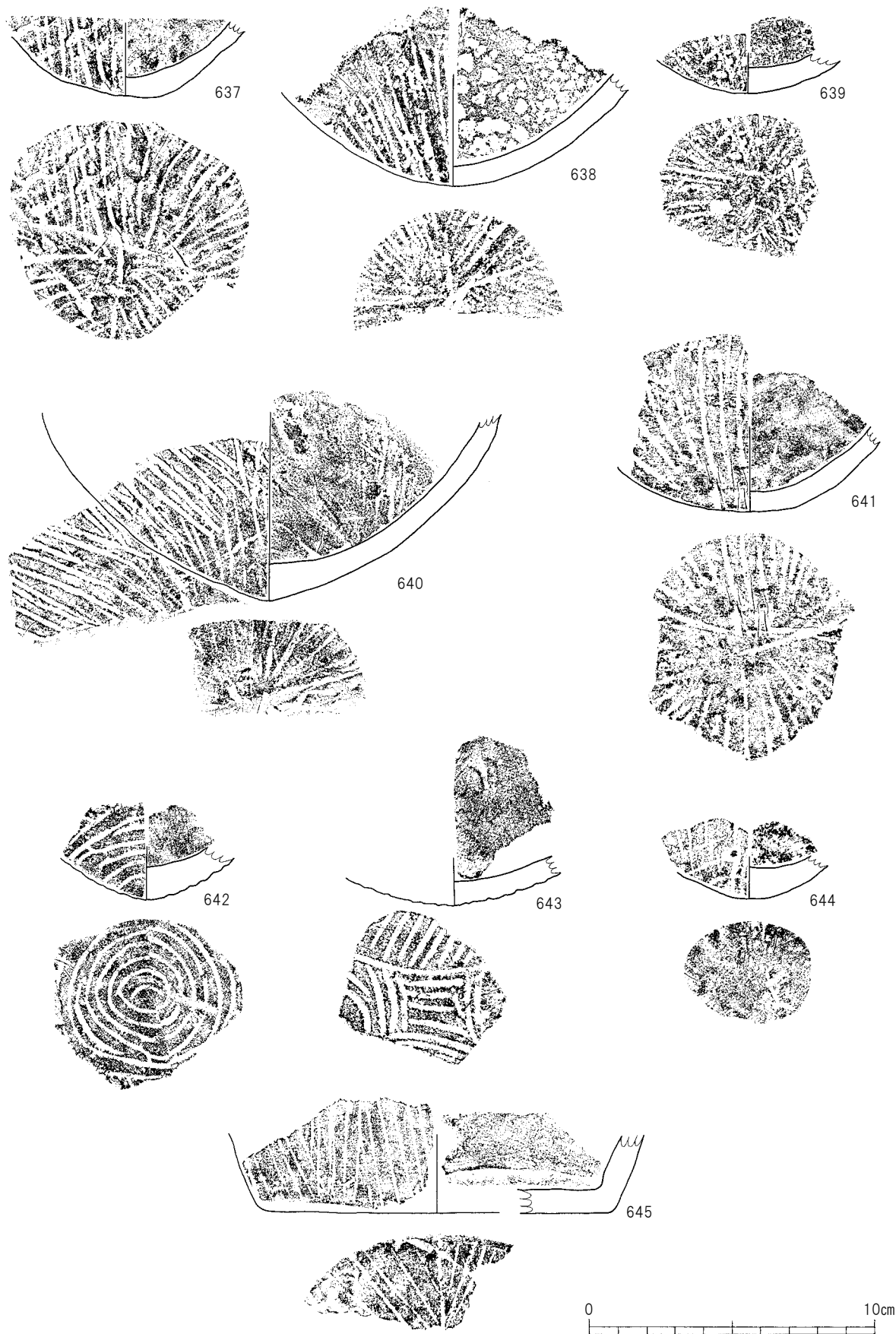
中でも特異なものが、645である。平底を呈し、直行気味に胴部へと立ち上がるものである。胴部側面には、斜位の櫛描き状の沈線文が施され、外底部にも櫛描き状の沈線が施されるものである。



第174図 縄文時代17-c類土器(2)



第175図 縄文時代17—c 類土器(13)



第176図 縄文時代17-c 類土器(14)



第177図 縄文時代18類土器検出状況

第178図 縄文時代18-a類土器(1)

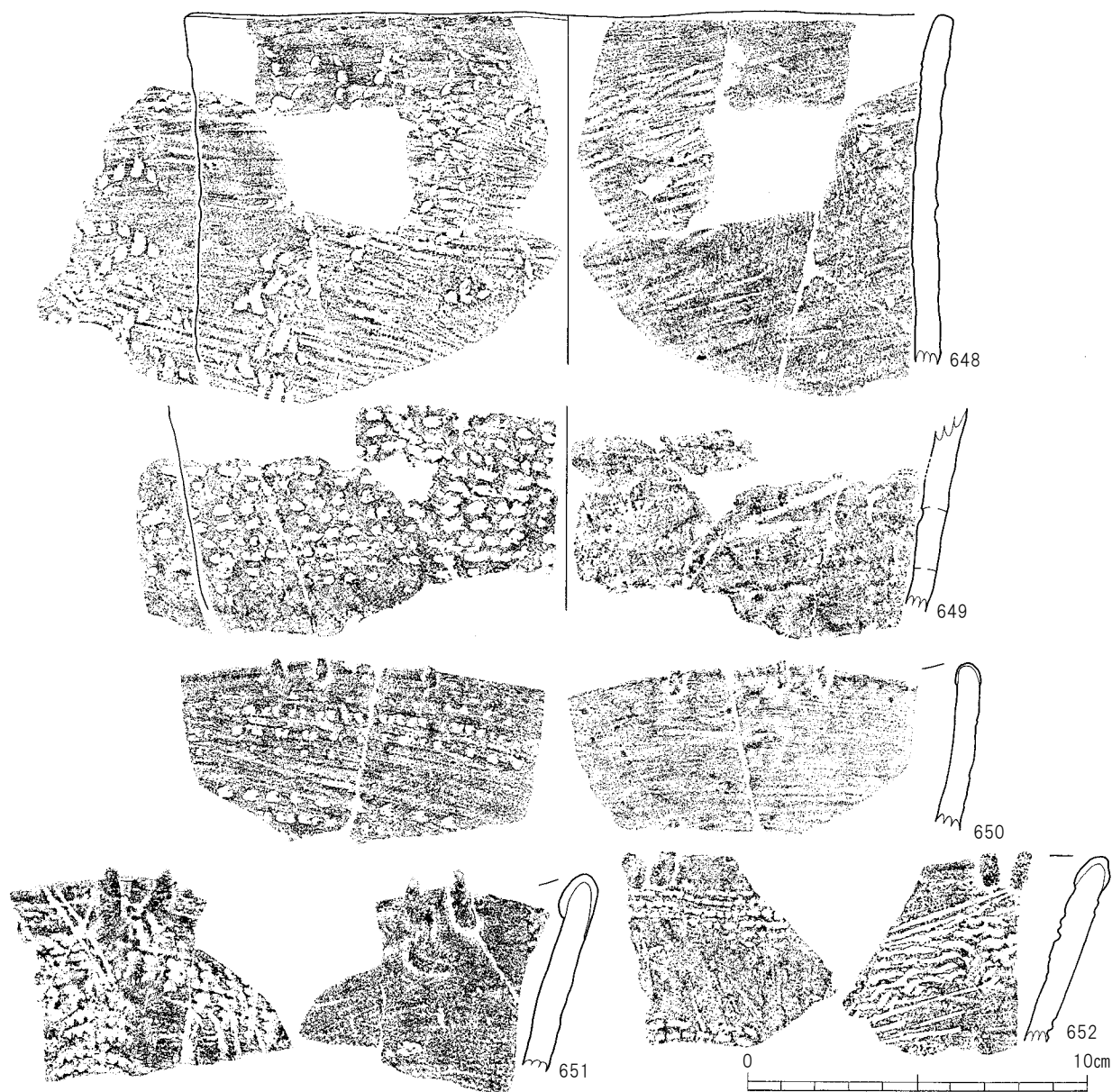
18類土器（第178図～第179図・第181図～第195図）

18類土器は便宜上3つのタイプに分類した。

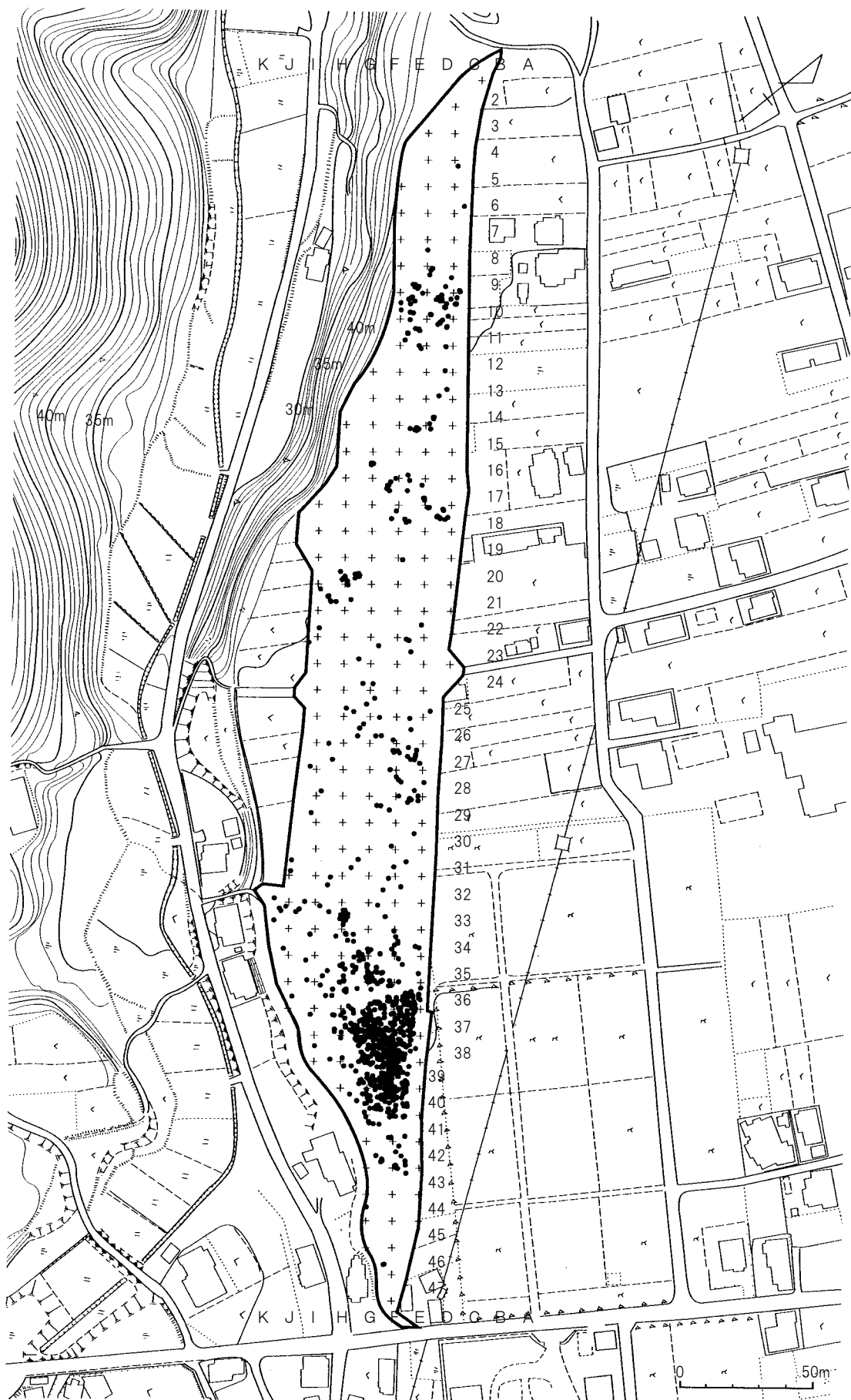
18-a類は、底部からバケツ状に立ち上がる器形で、口縁部が若干内湾・外反するものがある。文様は、肋の大きな貝殻を用いて刺突するため連点状の文様となる。基本的に口縁は横位の連文が多い。それ以下は、横位や縦位の連点文が施されるものである。

18-b類は、口縁部はやや内湾し頸部で締まる。口縁部の形状は波状や平坦の2種類があるが、本遺跡では、波状が多い傾向にあるようである。文様は突帯文を主とし、それに相交弧文を施すもので、内面にも相交弧文を施すものも多い。

18-c類は該期に、あるいはそれに近い時期と思われる時期の無文及び条痕文土器とミミズバレ状の不安定な突帯に粗い刻みを施すもので、胴部は斜位の条痕を、内面は横位の条痕を施すものを一括した。



第179図 縄文時代18-a類土器(2)



第180図 縄文時代18類土器出土状況



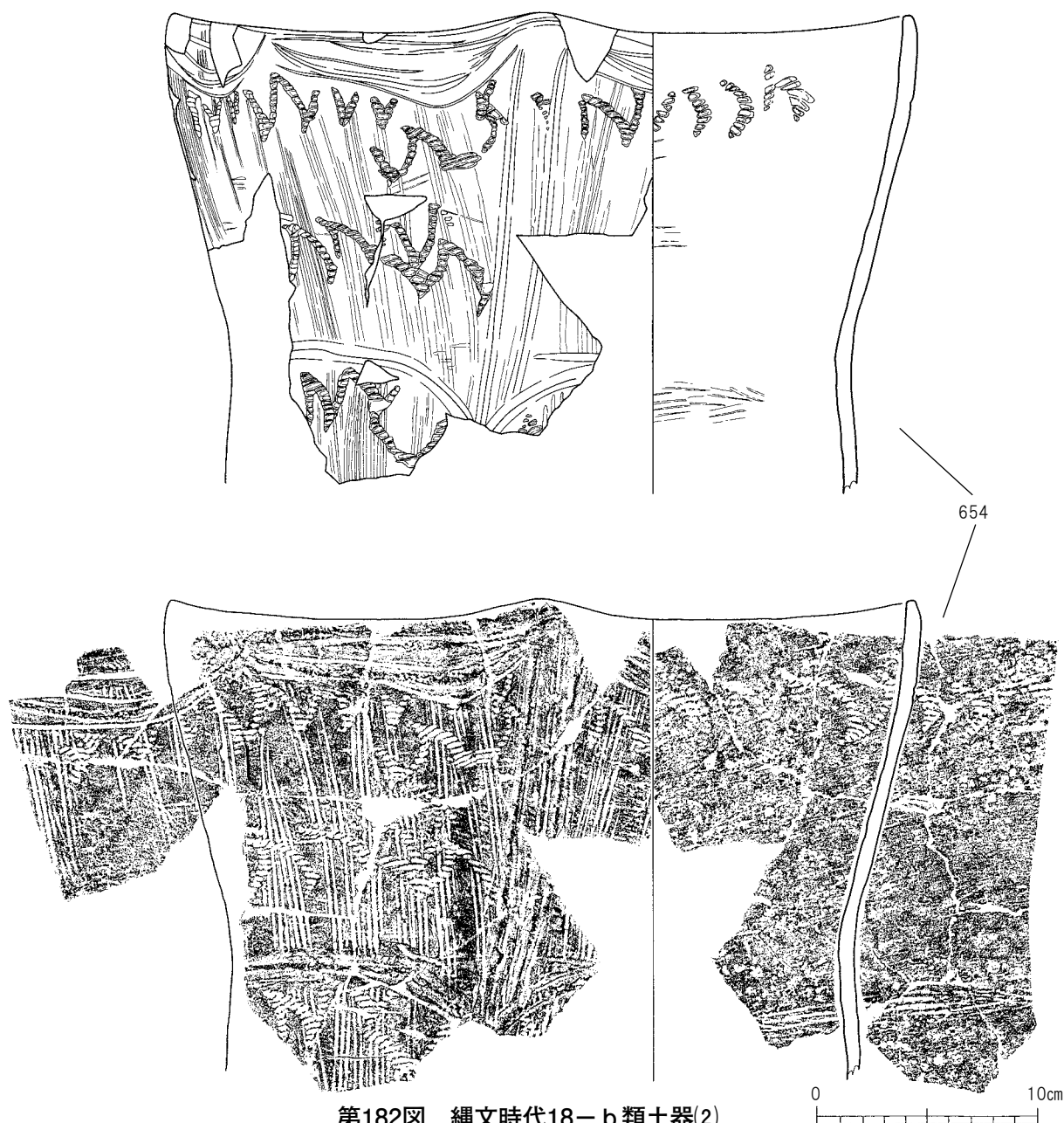
第181図 縄文時代18-b類土器(1)

18-a 類 (第178図・第179図)

18-a 類土器は、646から652までである。

646は復元口縁径約30cm, バケツ状に直線的に立ち上がり, 波状口縁を呈するもので, 4つの頂頭部を持つ。施文の中心は, 貝殻刺突による連点文で, ひとつの単位が帯状を呈し, 両脇が大きめの刺突, その間に肋3条程度の押引き状の刺突を施すものである。

この帯が, 口縁部内外面に横位に土器を1周巡る。また, 各頂頭部から土器の残存部の中間よりやや上位まで一帯ずつ縦位に施されている。頂頭部で区切られた4面の内, 3面は面の中央に縦位に一帯ずつ施されるが, 1面のみは縦位に二帯施され, 胴部中央には横位に一帯が土器を1周巡る。その他の施文は縦位の粗い縦位の沈線が部分的に施されている。調整は内外共に条痕であり, 明黄茶褐色を呈する。左下はその出土状況であり, 1個体が潰れた状態であるが, 底部は検出されなかつ



第182図 縄文時代18-b 類土器(2)

た。

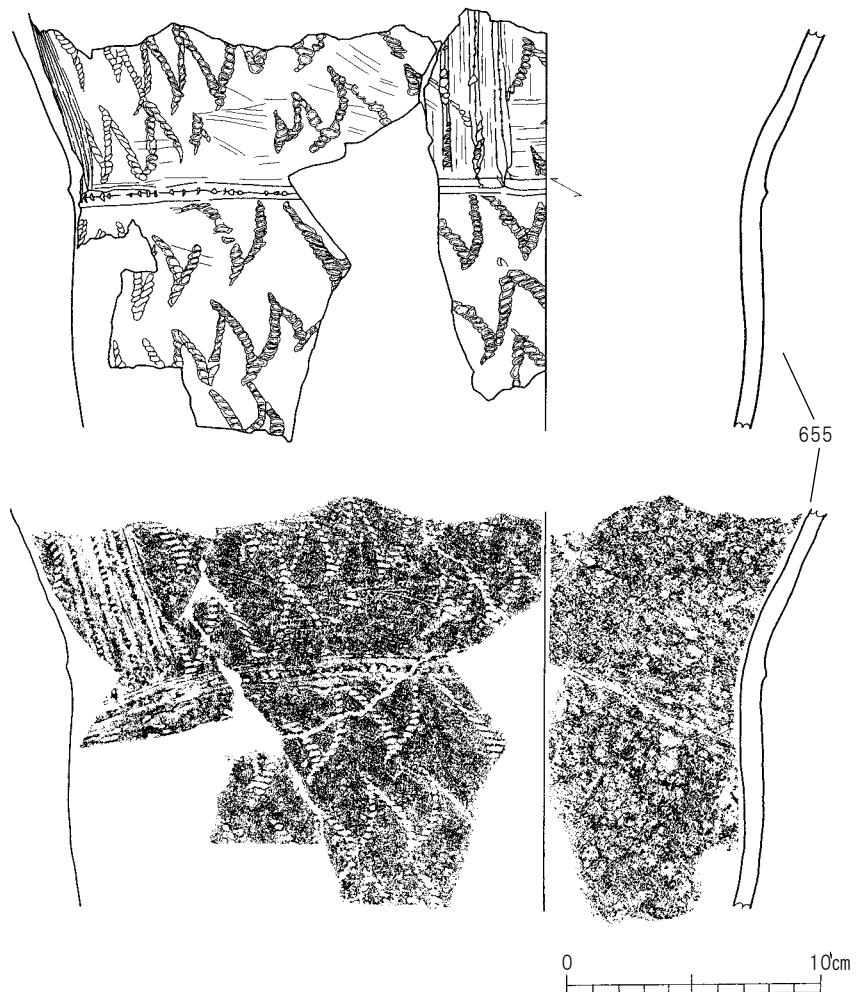
647は、胴部片の縦位の貝殻による連点文であり、内面には横位の条痕による調整が観察される。648は、復元口縁径約20cm、口縁部はやや外反し、胴部はやや張るものと思われる。相交弧文状の連点文が口縁部で横位、胴部で縦位に施されて、内面は斜位の条痕による調整である。649は胴部片で、横位の連点文が全面に施されている。650は、口縁部が内湾するもので、口縁部には、縦位の粘土紐が3本あるいは4本貼り付けられ、その下に横位の連点文が観察される。651・652も縦位の粘土紐が口縁内面から外面にかけて貼り付けられている。651は、縦位の相交弧文、652は横位の帯状の連点文が口縁部に施されている。

18-b類（第181図～第188図）

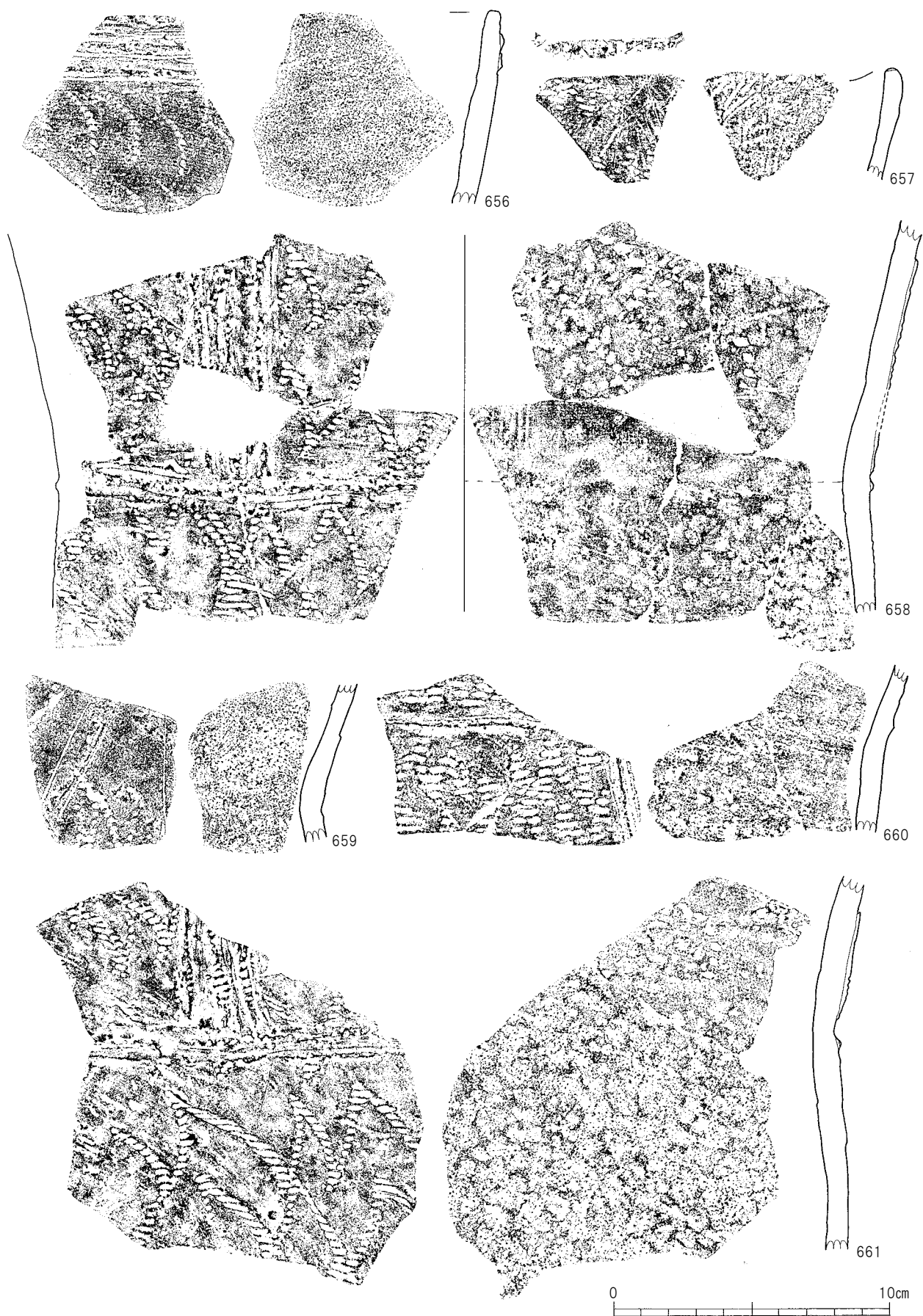
653は、復元口縁径37cm、平坦な口唇部に連続する刻みが施される。胴部はやや張り、頸部は軽く絞まり、内湾しながら口縁部へと立ち上がる。口縁の形状はゆるやかな波状を呈し、4つの頂頭部を持つ。施文は、各頂頭部から縦位に頸部まで微隆帯が施され、頸部には同様の微隆帯が横位に土器を1周巡る。また、頂頭部と頂頭部間に微隆帯と沈線文をセットとした重弧文様の文様を2つ、計8個施すものと思われる。土器の内外面には肋10条程度の貝殻による相交弧文が施されている。654・673も基本的な施文は、微隆帯・沈線文・相交弧文等と653と同様である。ただし、外面に地文として条痕状の沈

線が縦位に多数施されている。655は口縁部と底部を欠損する破片であり、口縁部の様相は不明であるが、縦位の刻目微隆帯が頸部まで施され、頸部にはこれと同様の隆帯が一巡する。

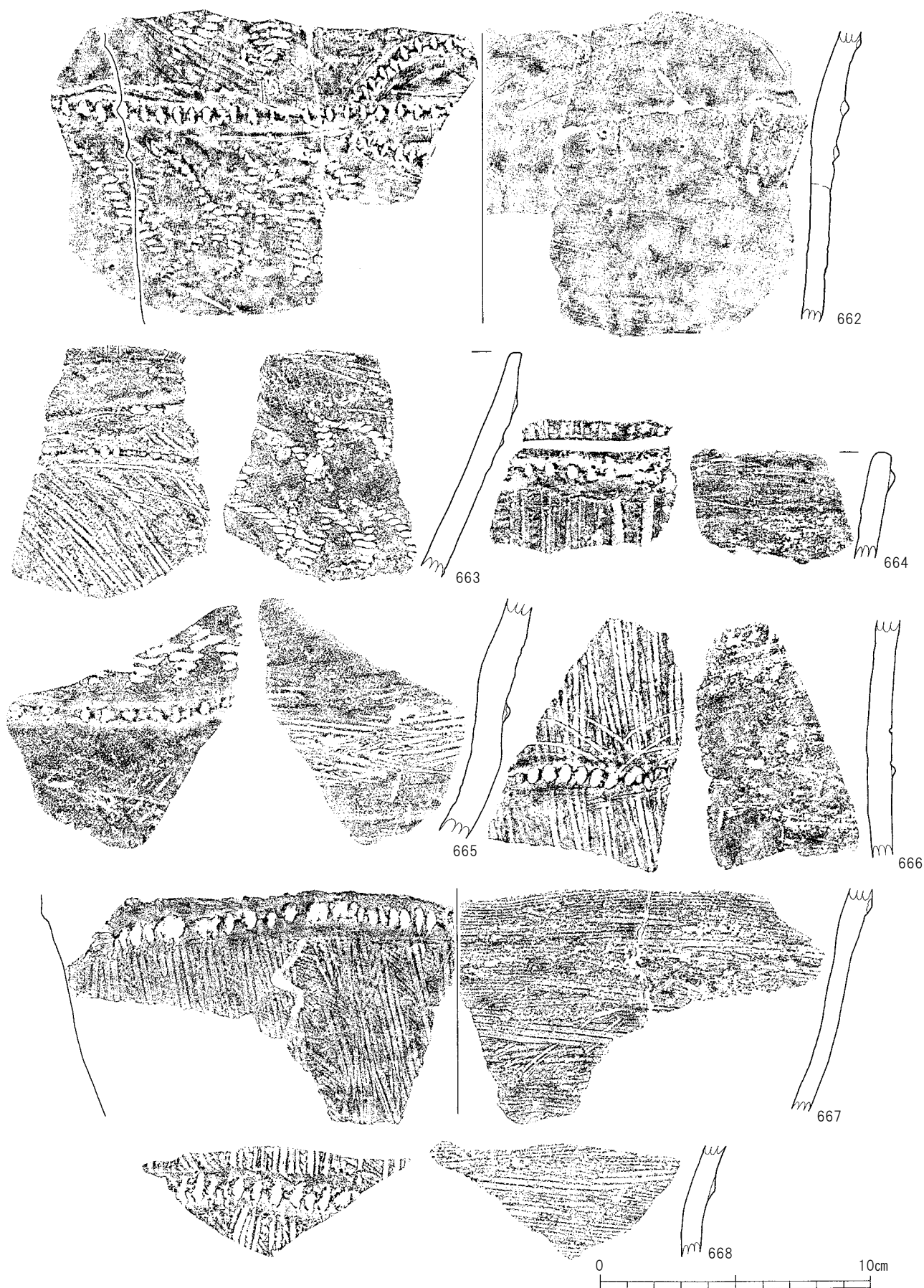
656～663・665は相交弧文を施す土器で、658は頸部径が30cmを越えるものである。また、658・660・661・671・674には、653と同様の微隆帯が施されている。663～670は条痕の地文の上に刻目突帯文を施すものである。675は波状口縁の頂頭部で、2条の突



第183図 縄文時代18-b類土器(3)



第184図 縄文時代18-b類土器(4)



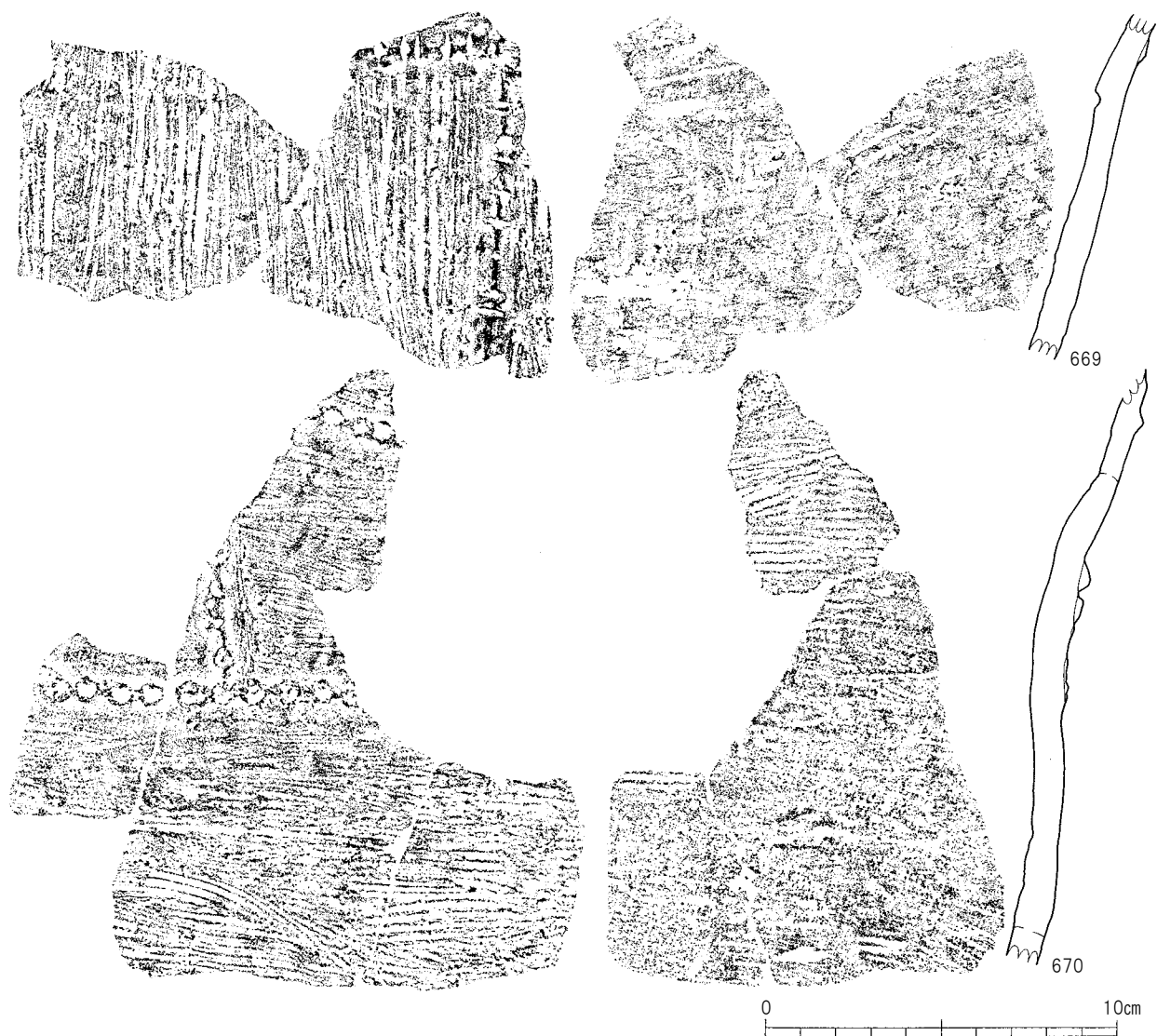
第185図 縄文時代18-b類土器(5)

帯に竹管状の刺突が施され、内面には横位の条痕が明瞭に観察される。676・678・679は、口縁部に2条の刻目突帯文、その下に斜位の沈線状の文様が観察され、内面には相交弧文が施されている。

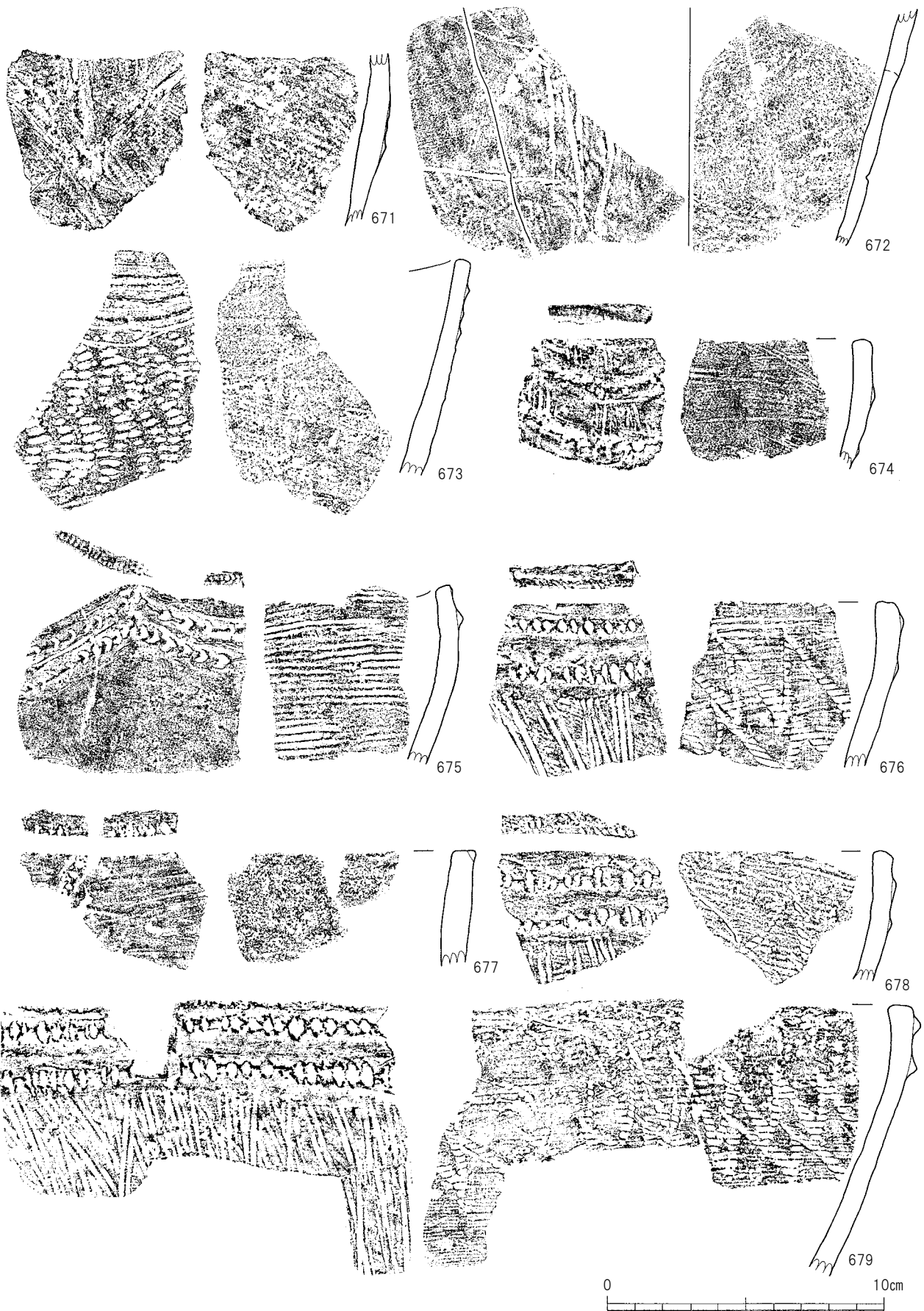
680～686は、653や654と同様の文様構成と思われるものの破片である。

654・673も基本的な施文は、微隆帯・沈線文・相交弧文等と653と同様である。ただし、外面に地文として条痕状の沈線が縦位に多数施されている。655は口縁部と底部を欠損する破片であり、口縁部の様相は不明であるが、縦位の刻目微隆帯が頸部まで施され、頸部にはこれと同様の隆帯が一巡する。

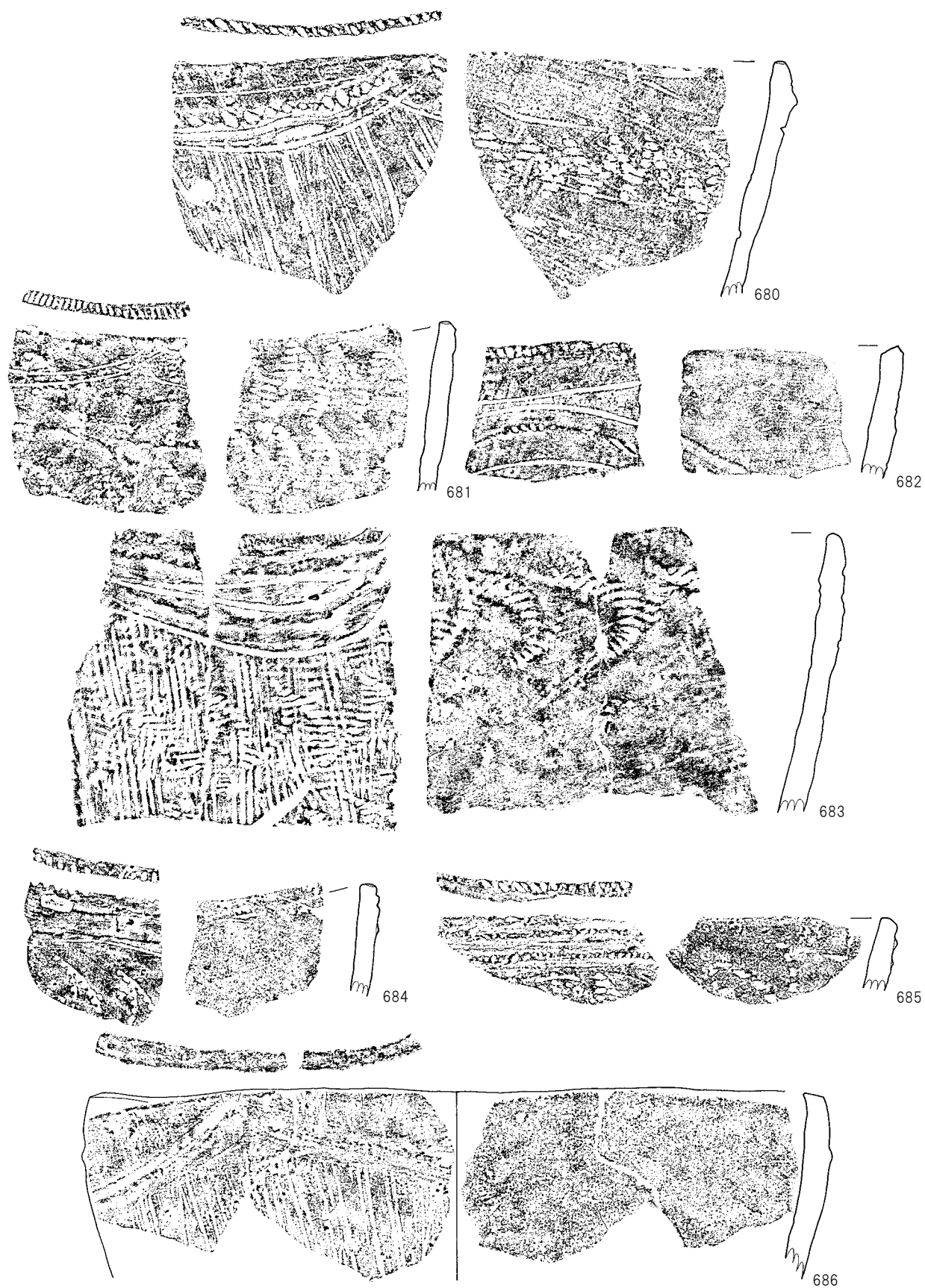
656～663・665は相交弧文を施す土器で、658は頸部径が30cmを越えるものである。また、658・660・661・671・674には、653と同様の微隆帯が施されている。663～670は条痕の地文の上に刻目突帯文を施すものである。675は波状口縁の頂頭部で、2条の突帯に竹管状の刺突が施され、内面には横位の条痕が明瞭に観察される。676・678・679は、口縁部に2条の刻目突帯文、その下に斜位の沈線状の文様が観察され、内面には相交弧文が施されている。



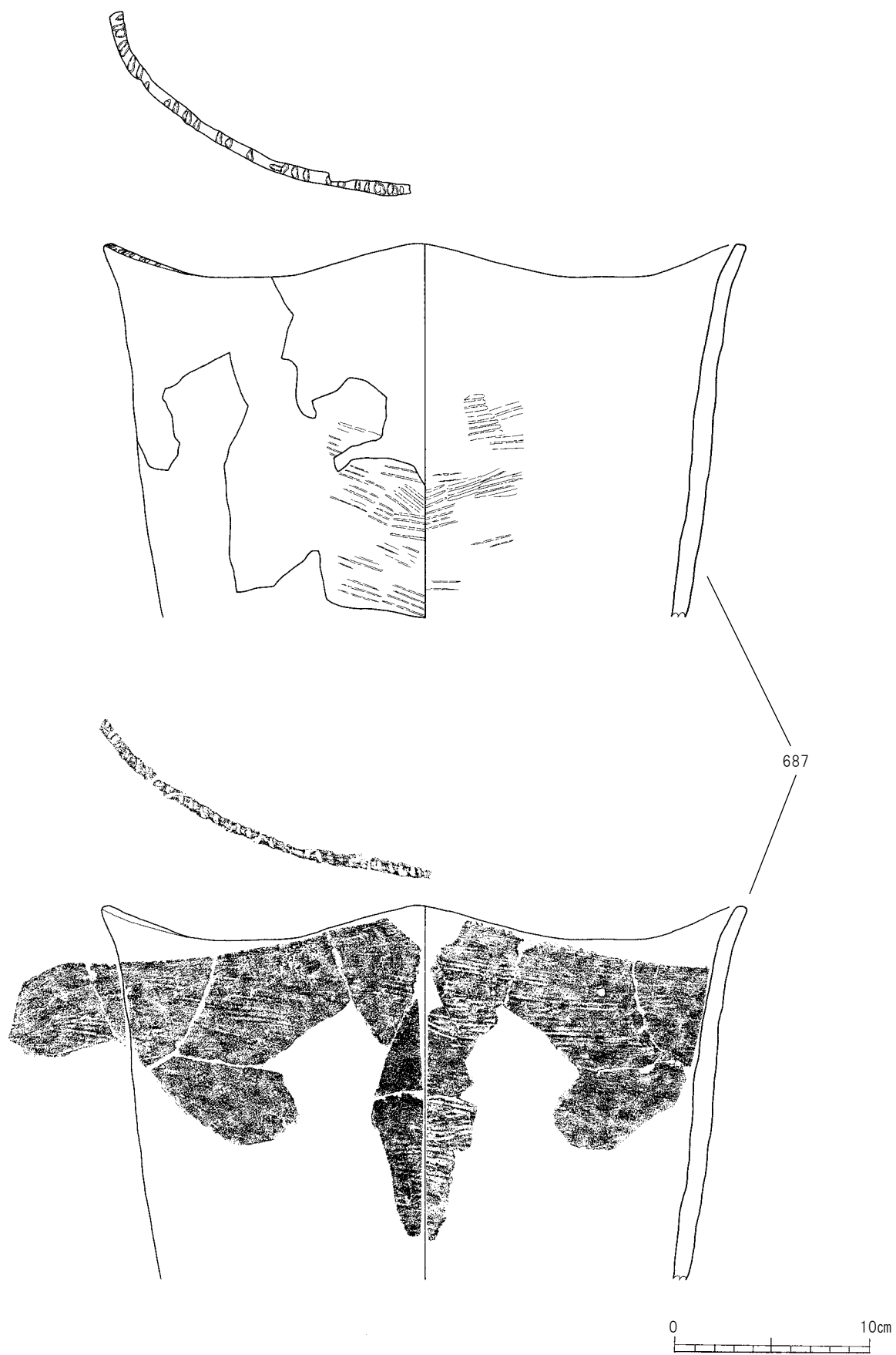
第186図 縄文時代18-b類土器(6)



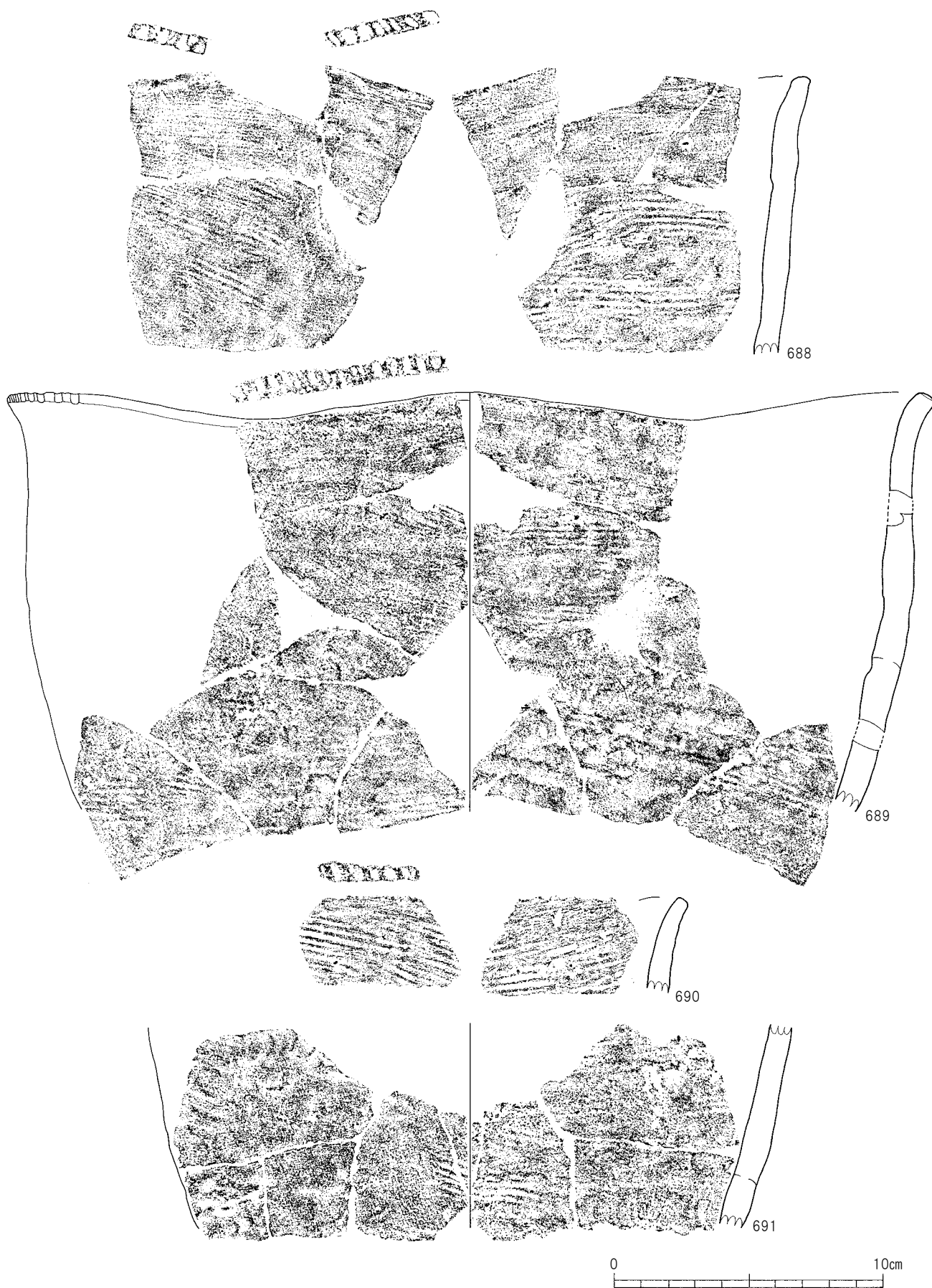
第187図 縄文時代18-b類土器(7)



第188図 縄文時代18-b類土器(8)



第189図 縄文時代18-c 類土器(1)



第190図 縄文時代18—c 類土器(2)

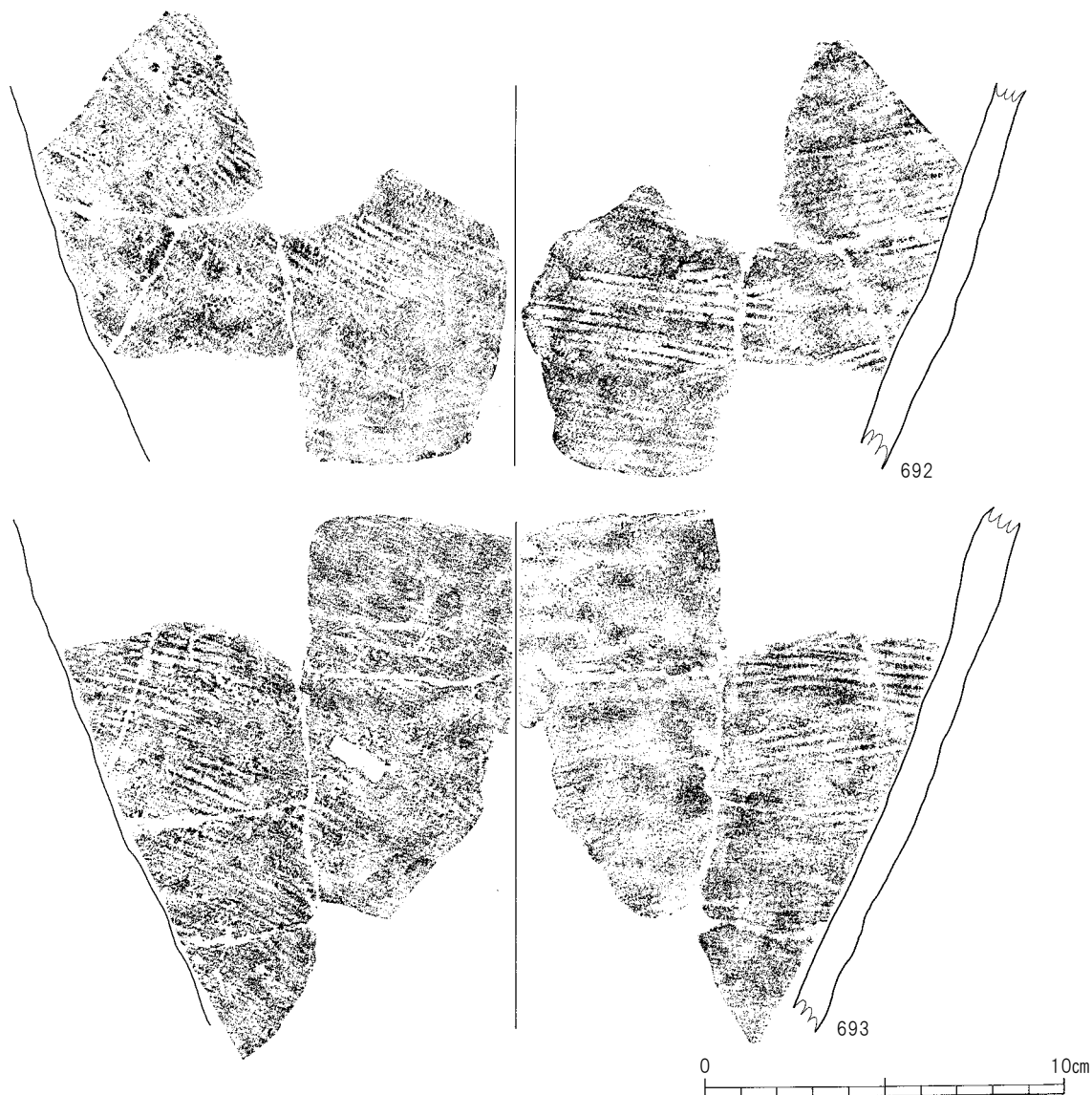
680～686は、653や654と同様の文様構成と思われるものの破片である。

18-c類（第189図～第195図）

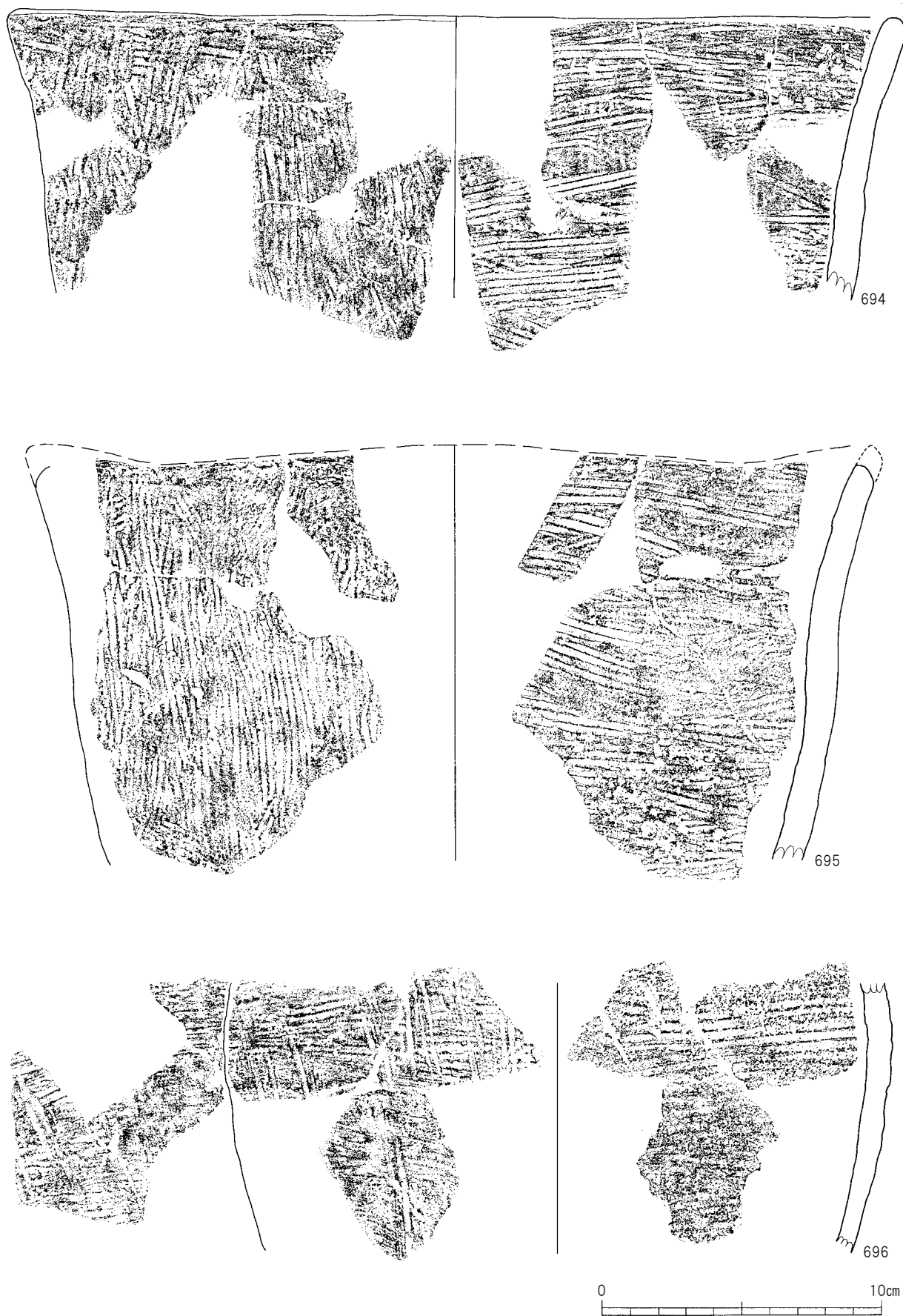
18-c類土器は、該期における無文や条痕文土器などである。

687は、復元口縁径が約30cmで平坦な口唇部に刻みが施されている。口縁部はゆるやかな波状を呈し、4つの頂頭部を有する。口縁端部のみがやや外反し、頸部から胴部へかけては、直線的に近い状態ですぼまっていく。調整は、内外面共に横位の条痕の後に丁寧なナデを施している。688～690もほぼ同様のものと考えられる。691～693・696～698は胴部片で、外面は、縦位と横位の条痕であり、内面は横位の条痕を施すものである。

699～706は、口縁部に刻目突帯を施し、胴部に斜位を中心とする条痕を施す一群である。699は近接した2本の突帯に右上からと左上からの刻みであるために「く」の字状に見えるものである。700は、同様の近接した刻目突帯であるが、699とは異なり、縦位の刻目である。701は2条の突帯であるが、風化などにより施文が定かでない。702は701と同一個体の可能性がある。



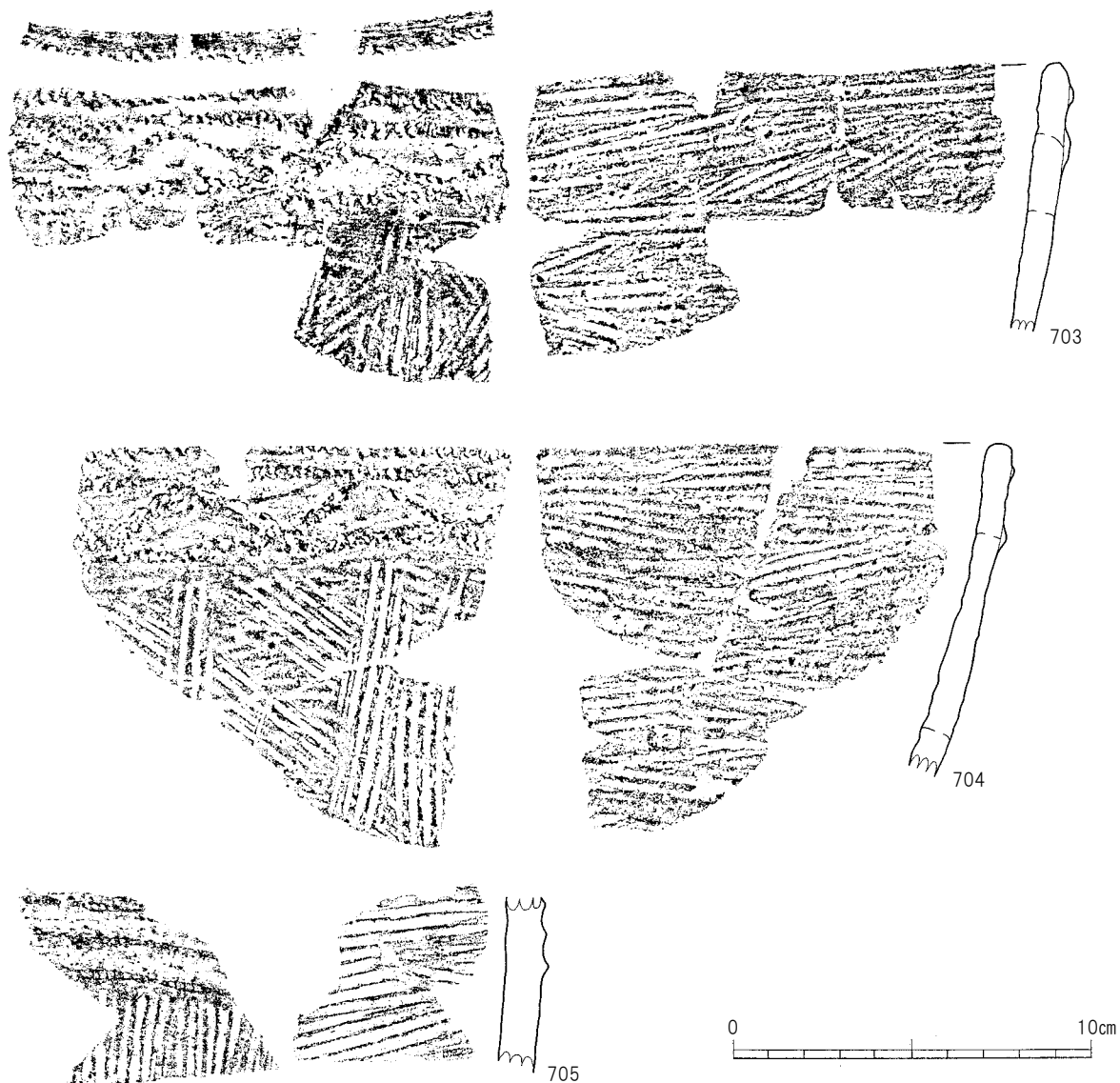
第191図 縄文時代18-c類土器(3)



第192図 縄文時代18—c 類土器(4)



第193図 縄文時代18—c 類土器(5)



第194図 縄文時代18-c類土器(6)

703～705は、基本的には2条の曲線状の刻目突帯であるが、部分的に3条となる部分もある。口縁下の条痕については、ほとんど同様である。

706は、眼鏡状の刻目突帯を口縁部に施すもので、内面には貝殻刺突による調整と思われるが、胎土が粗く、風化が激しいため定かでない。

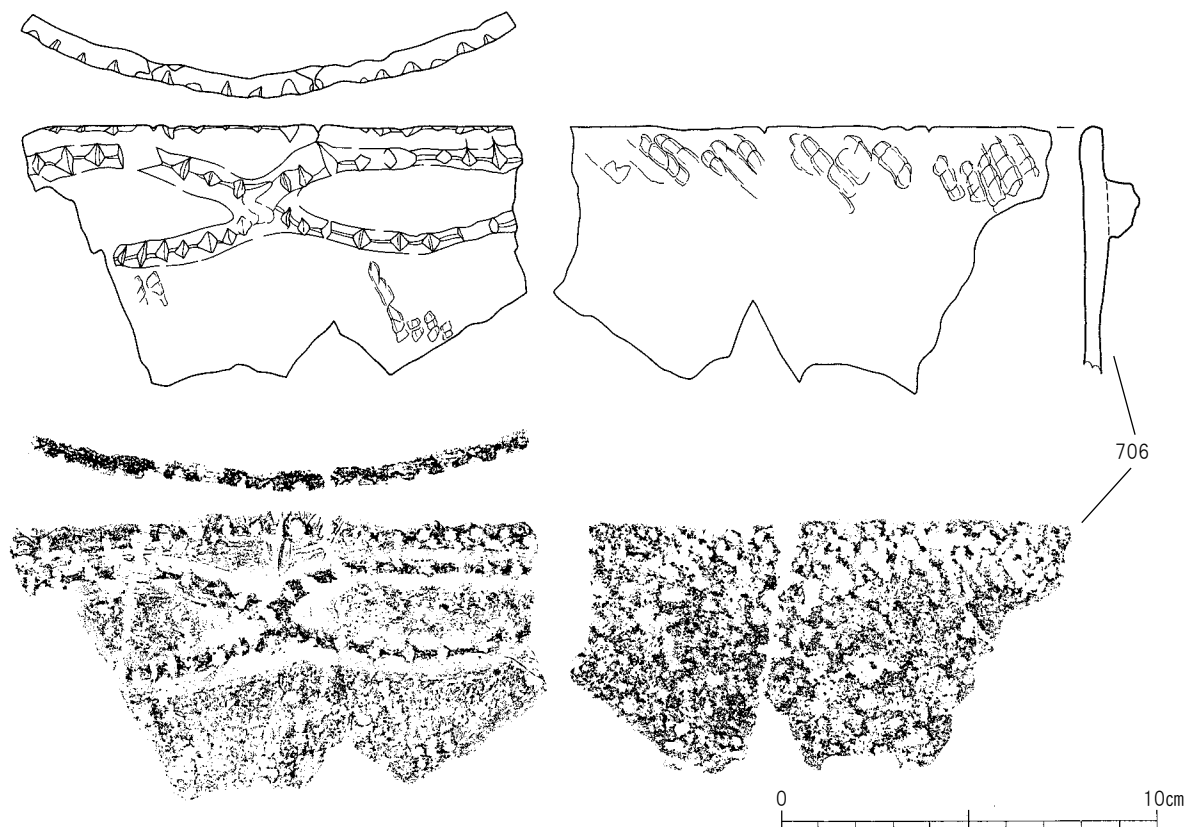
19類土器（第196・197図）

19類土器は、4脚あるいは5脚の脚部を有する土器で外面に縄文を施すものである。

707は、播鉢状の底部に逆三角錐状の脚を4脚貼り付けるもので、底部周辺には、縄文が観察されるものである。また、708は707と同様であるが、貼り付けの脚が、5脚であったものと思われる。

20類土器（第198・201・202図）

20類土器は2つのタイプに分類した。



第195図 縄文時代18-c類土器(7)

20-a類は、基本的にキャリパー状の口縁を有し、波状口縁でその波状の横に鋭い瘤状の突起を有するものもある。文様は突帯により構成され、突帯の片方の裾部及び円形浮文の外側の裾部連続的な刺突を施すもので、口縁部内面には縄文を施す。

20-b類は大型の器形で地文に粗い縄文を施し、縦位及び逆U字状の突帯に双方向よりの刻目を施す。また、口縁には幅広の粘土を貼り付けその上に小さめの2枚貝の背面による押圧による文様を施している。

20-a類 (第198・201図)

709は、波状口縁でその波状の横に鋭い瘤状の突起を有するもので、やや外反する。口唇部は肥厚し舌状を呈する。文様は突帯により構成され、突帯の片方の裾部及び円形浮文の外側の裾部連続的な刺突を施すもので、口縁部内面には縄文を施す。

710は、ゆるやかな波状を呈し、口縁部はキャリパー状を呈する。文様構成は709とほぼ同様である。頸部以下に逆「V」字状の突帯と縦位の条痕及び縄文が観察される。いずれの土器も胎土に黒色の砂粒を含んでいることが特徴で、他の土器には見られない胎土である。

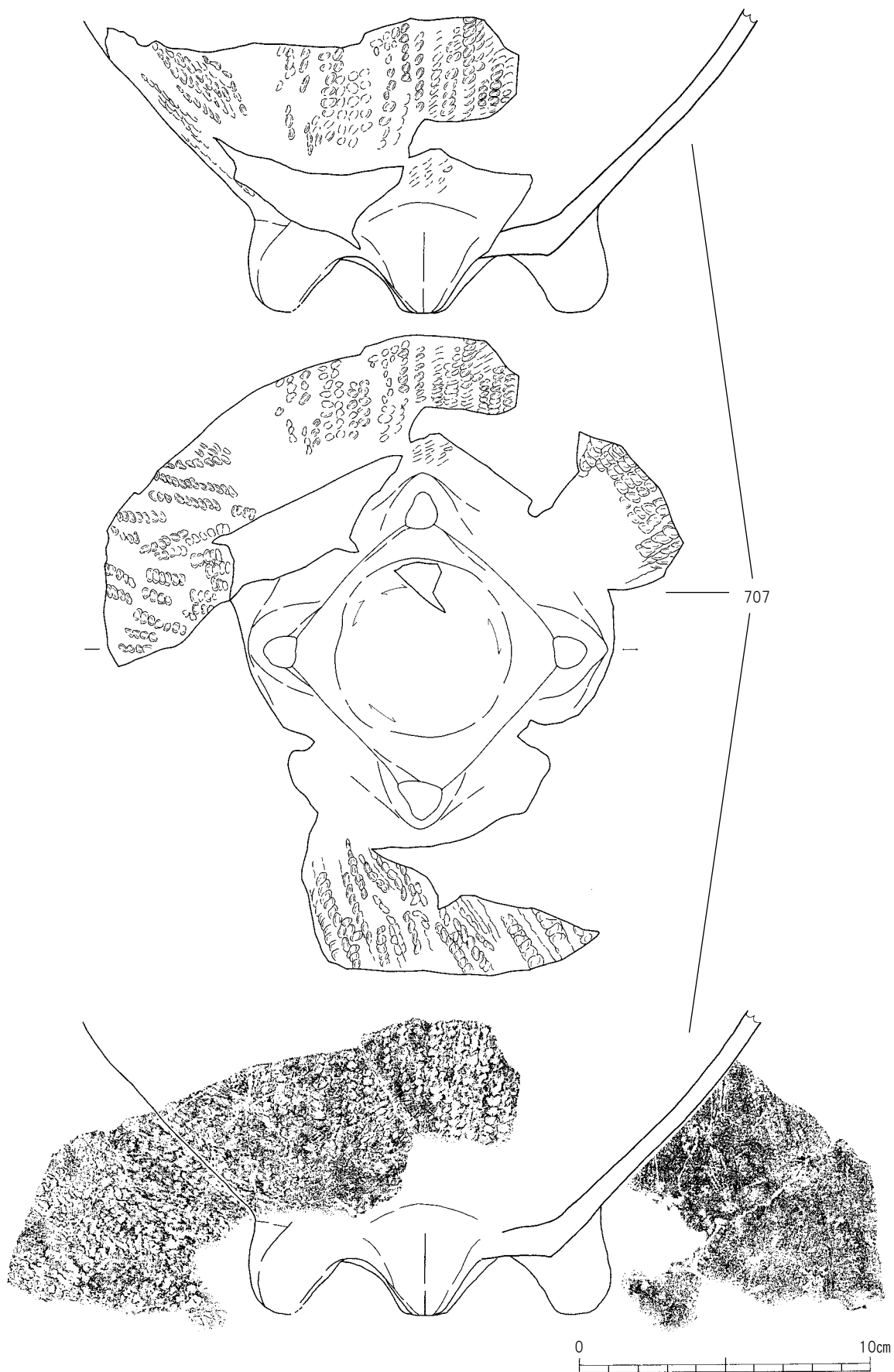
20-b類 (第202図)

20-b類は復元口縁径約60cmと本遺跡で出土した土器の中では最大のものである。また、単体による出土である。その土器の特徴は、上述のようなものである。

21類土器 (第203図)

21類土器は、縄文時代中期後半の土器で、数点の出土であったため、一括して扱った。

712は、内湾する胴部から「く」の字状に外反する口縁を有するもので、口唇部に部分的に刻み



第196図 縄文時代19類土器(1)

を施すものである。713は、口唇部の中央に窪みを持つ楕円状の突起を有し、口縁部に斜位の凹線及び凹点を、714は「Z」字状の凹線を施す口縁部である。715は波状口縁を有し、頂頭部には縄に似せた粘土紐の突起が、外面には粗い沈線による格子状の文様が施されるものである。

716は口唇部に連続する刻みを施し、直行する口縁部には2～3本の凹線を施すものである。717はヘラ状の工具により鋸歯の文様を施すものである。

前・中期における土器の出土状況は、17類土器では調査区の南半分に多くが分布し、その中でも数か所の集中箇所がある。18類土器は散在的な分布であるがD・E-36～40区の部分にのみ集中箇所がある。また、19類はE-36区、E-39区から、20類はE・F-36～38区において出土している。

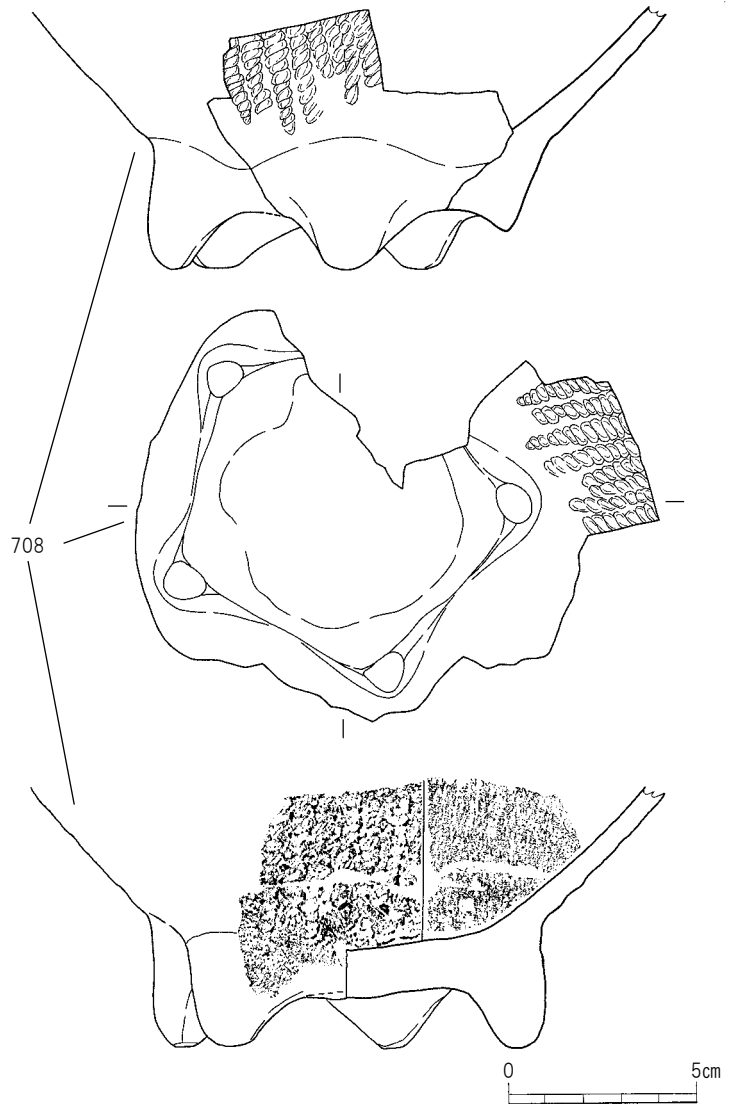
・縄文時代後期

縄文時代後期の遺物は、各形式の遺物が数点ずつの出土であったため、一括して22類として扱った。

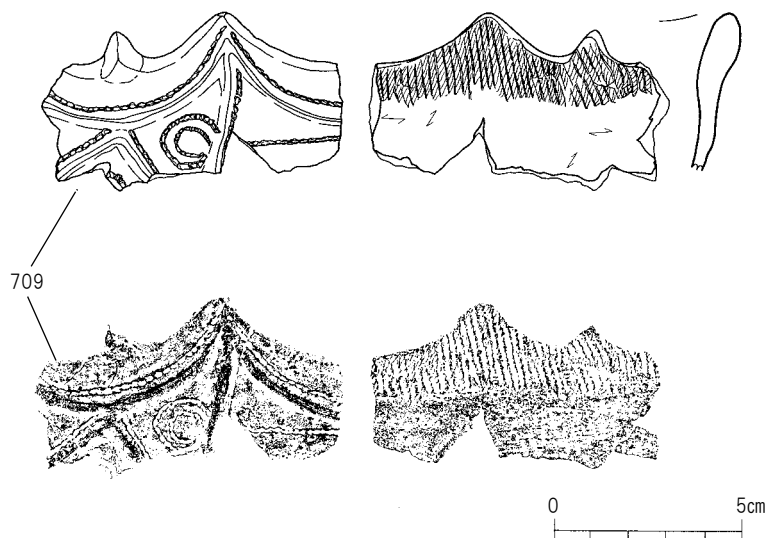
22類土器（第204図・第205図）

718は、胴部がやや張り内湾しながら頸部で屈曲する。頸部からは外反しながら口唇部へと至るものである。口唇部には、深めの沈線が1巡するものと考えられる。外面には、2本の凹線を1単位とする曲線文が描かれている。

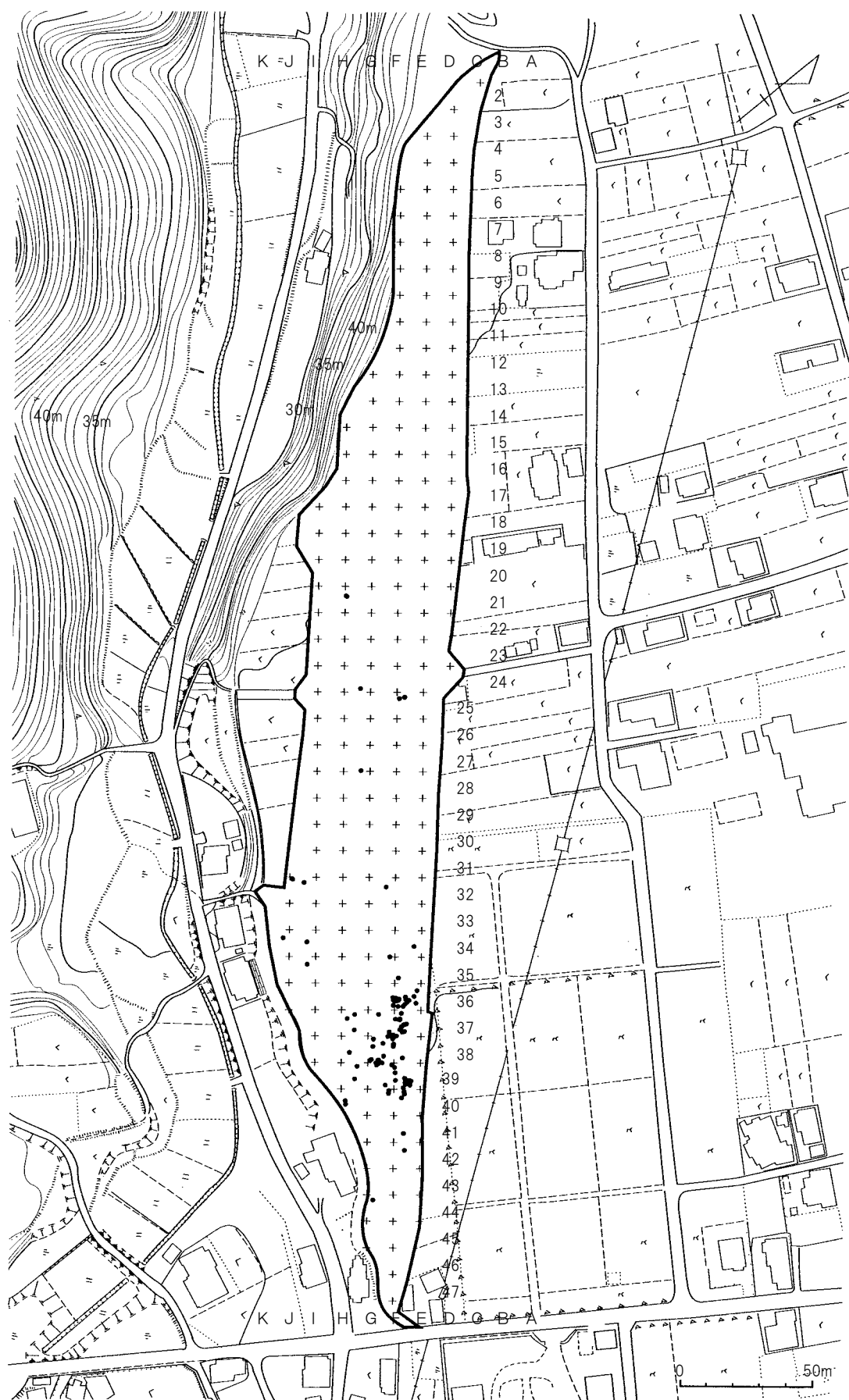
719は口縁部の断面が三角形状を呈するもので、外面に貝殻による連続刺突文が施されている。720・721は内湾する口縁部で、口縁部には2本から3本の沈線が施され、その沈線間に擦



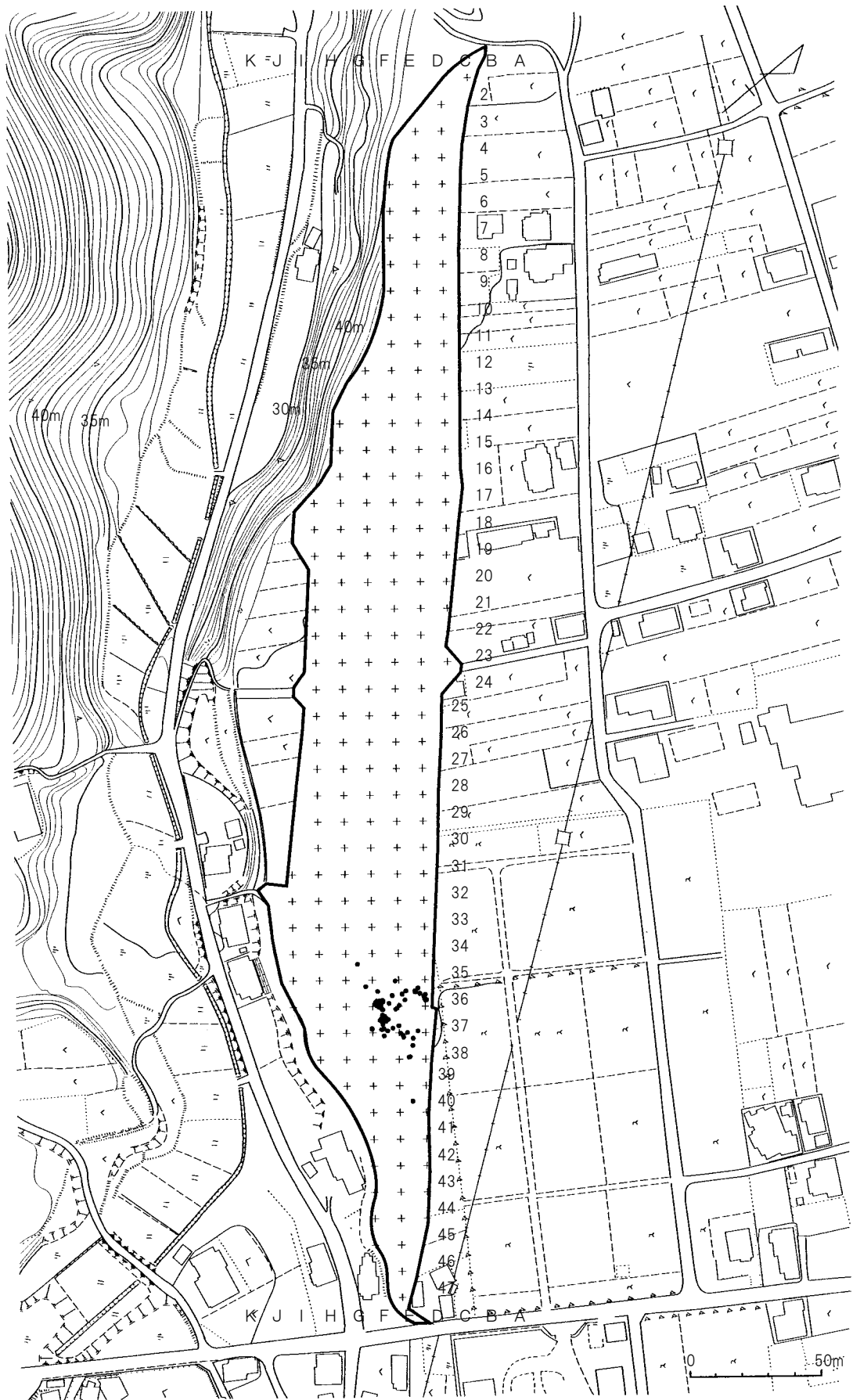
第197図 縄文時代19類土器(2)



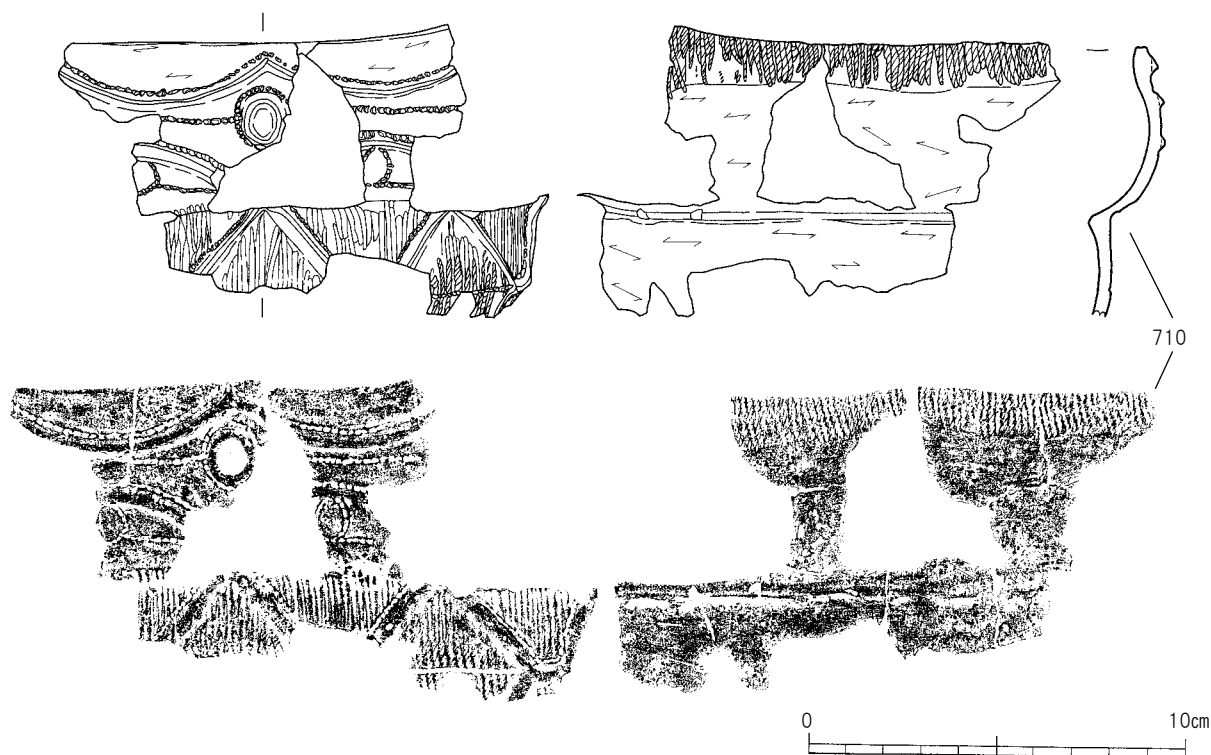
第198図 縄文時代20-a類土器(1)



第199図 縄文時代19類土器出土状況



第200図 縄文時代20類土器出土状況



第201図 縄文時代20— a 類土器(2)

り消し縄文が施される。

722～724は「く」の字状に口縁部が屈曲する浅鉢で内外面ともにヘラ状工具による丁寧な研磨が施されている。725は、胴部で「く」の字状に内湾する深鉢で、屈曲部に2本の沈線を施す。前述の浅鉢同様に内外ともにヘラ状工具により、丁寧な研磨が施されている。

726・727は、口縁部が「く」の字状に屈曲し、その断面が三角形を呈するもので、短く内湾する文様帯には浅い沈線が施される。

・縄文時代晩期

縄文時代晩期の遺物は、後期の遺物と同様に各形式の遺物が数点ずつの出土であったため、一括して23類として扱った。

23類土器（第206・208図～第212図）

728～732・734は、口縁部が直行あるいはやや外反し、狭い口縁の文様帯に数条の凹線が施される深鉢形土器である。

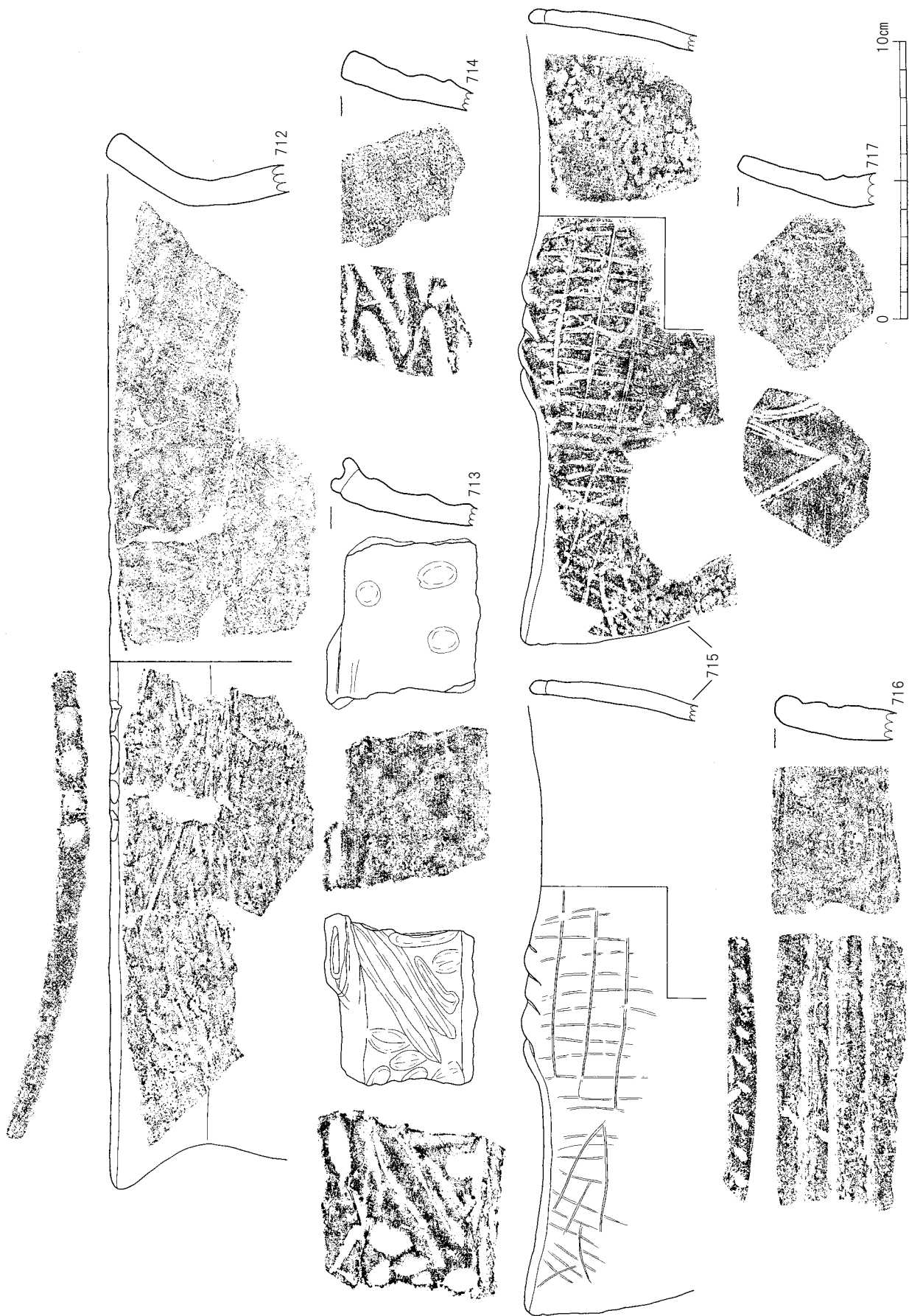
733・735～737は、浅鉢形土器の同部の屈曲部から大きく外反し、上述の深鉢形土器同様に狭い文様帯に1～2条の沈線が施されるものである。内外の調整は丁寧なヘラ磨きである。

738～745は、深鉢形土器である。738は、復元口縁径約30cmの外反する頸部から口縁部にかけての部分で、内外面共に条痕と粗いナデ調整が施されている。739は、屈曲する胴部から頸部にかけての部分で738に比して調整が丁寧である。

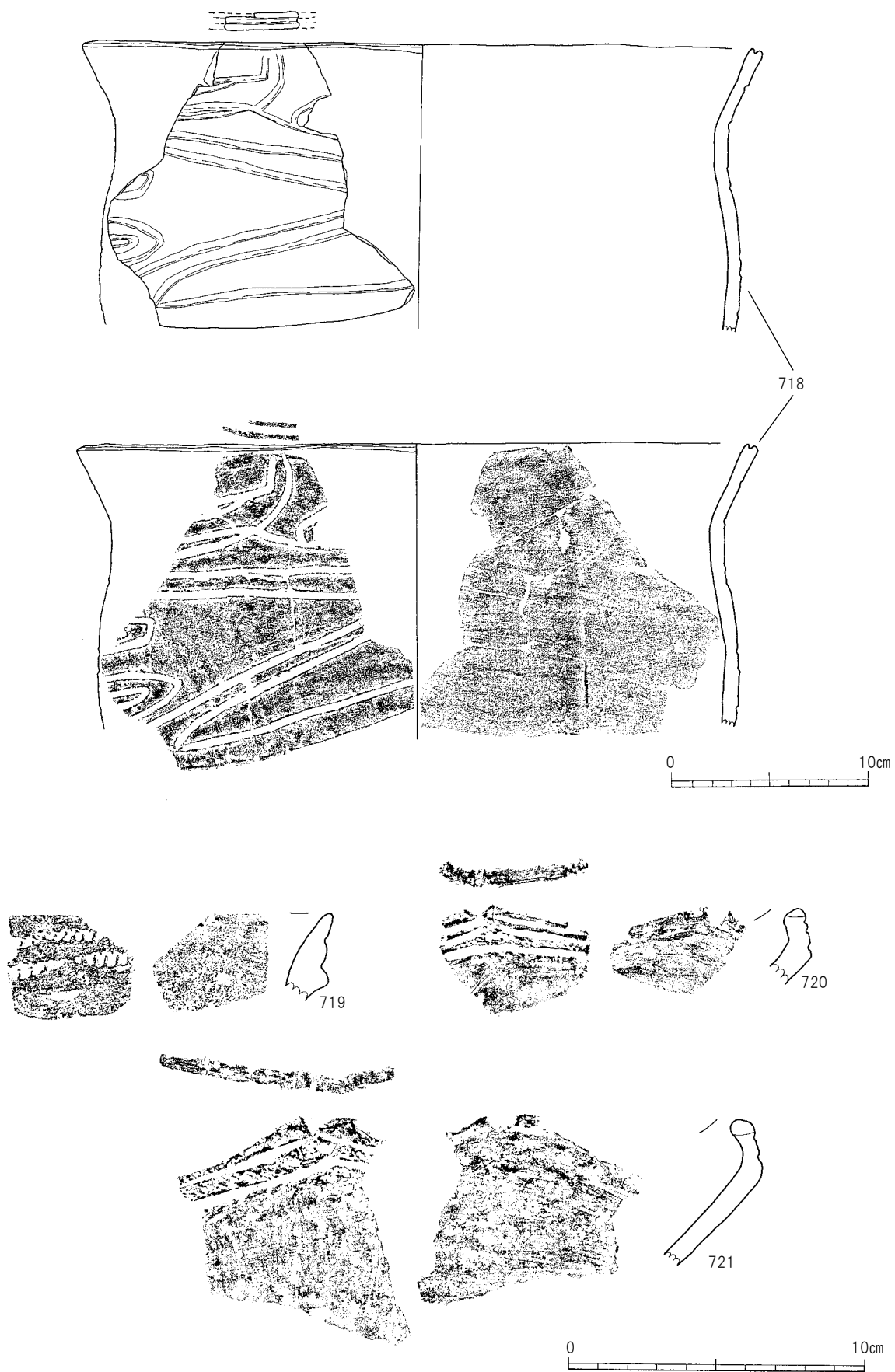
740は、底部から内湾して立ち上がり、胴の低い位置で屈曲して口唇部まで真っ直ぐに延びる。幾分肥厚した口縁部に粗い条痕状の条線が観察される。741～745は、ほぼ同じ角度で外反する口縁



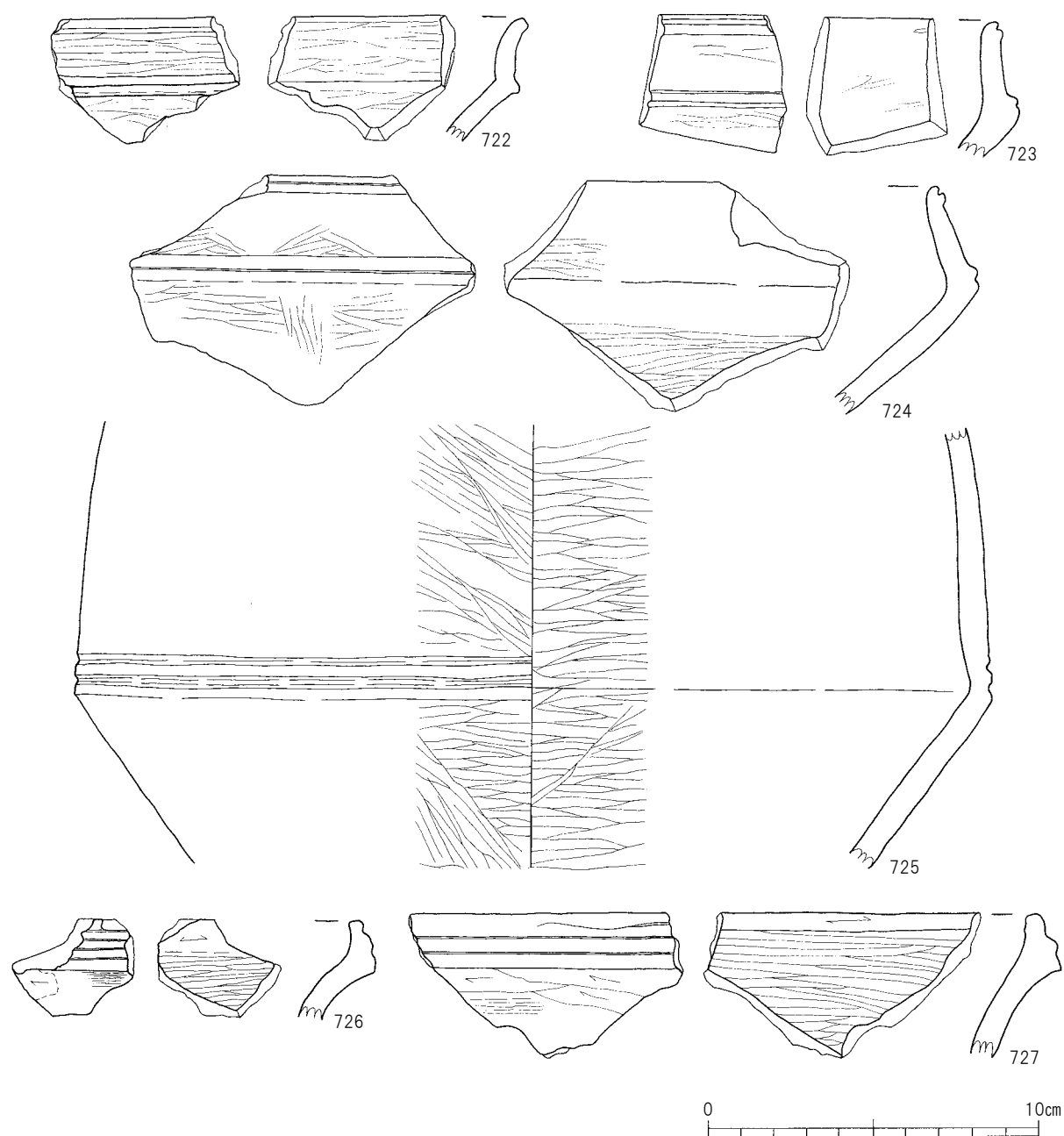
第202図 縄文時代20-b類土器(1)



第203図 縄文時代21類土器(1)



第204図 縄文時代22類土器(1)



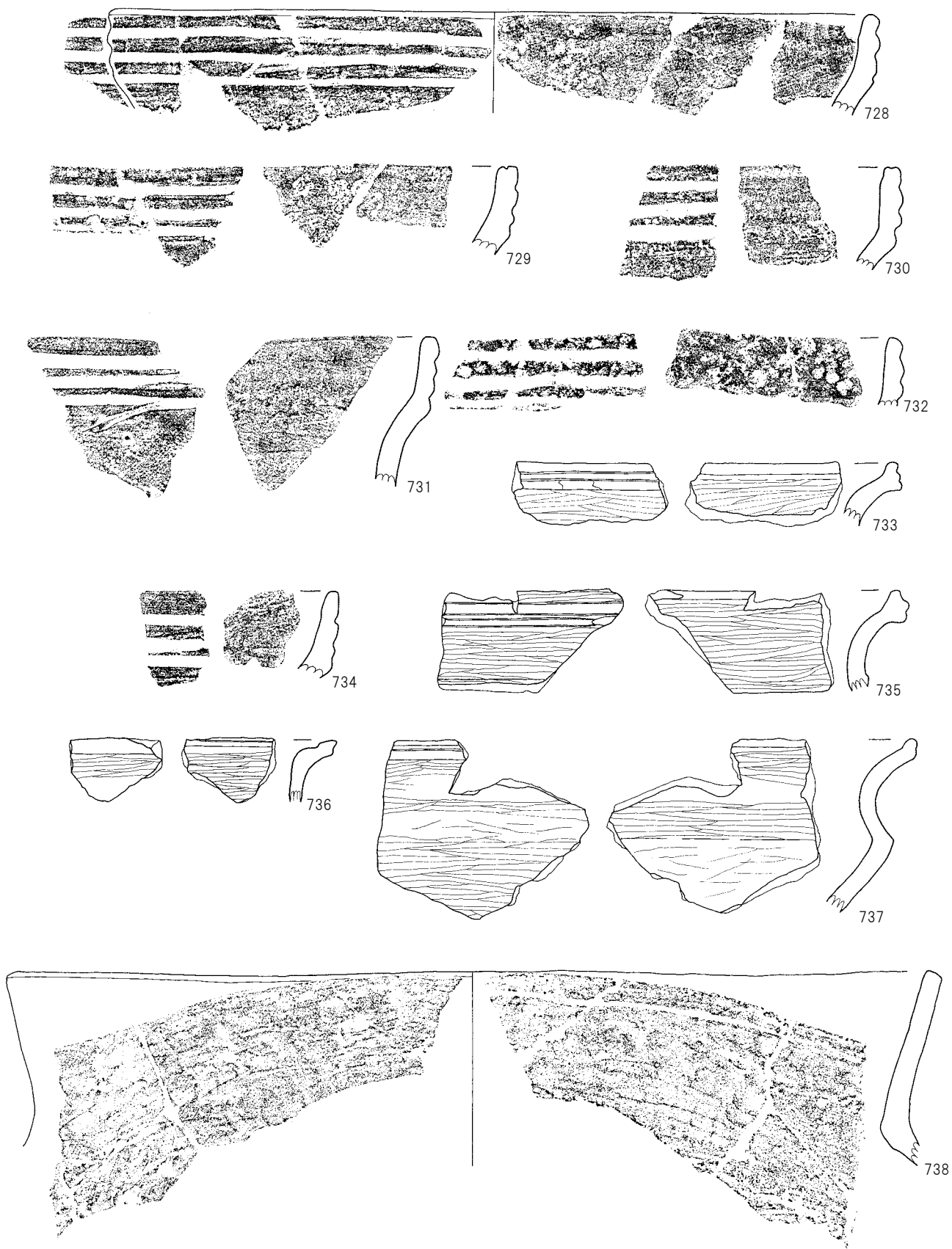
第205図 縄文時代22類土器(2)

部で、742はやや内湾し肥厚する。また、743は、斜位の粗い条痕が観察されるものである。

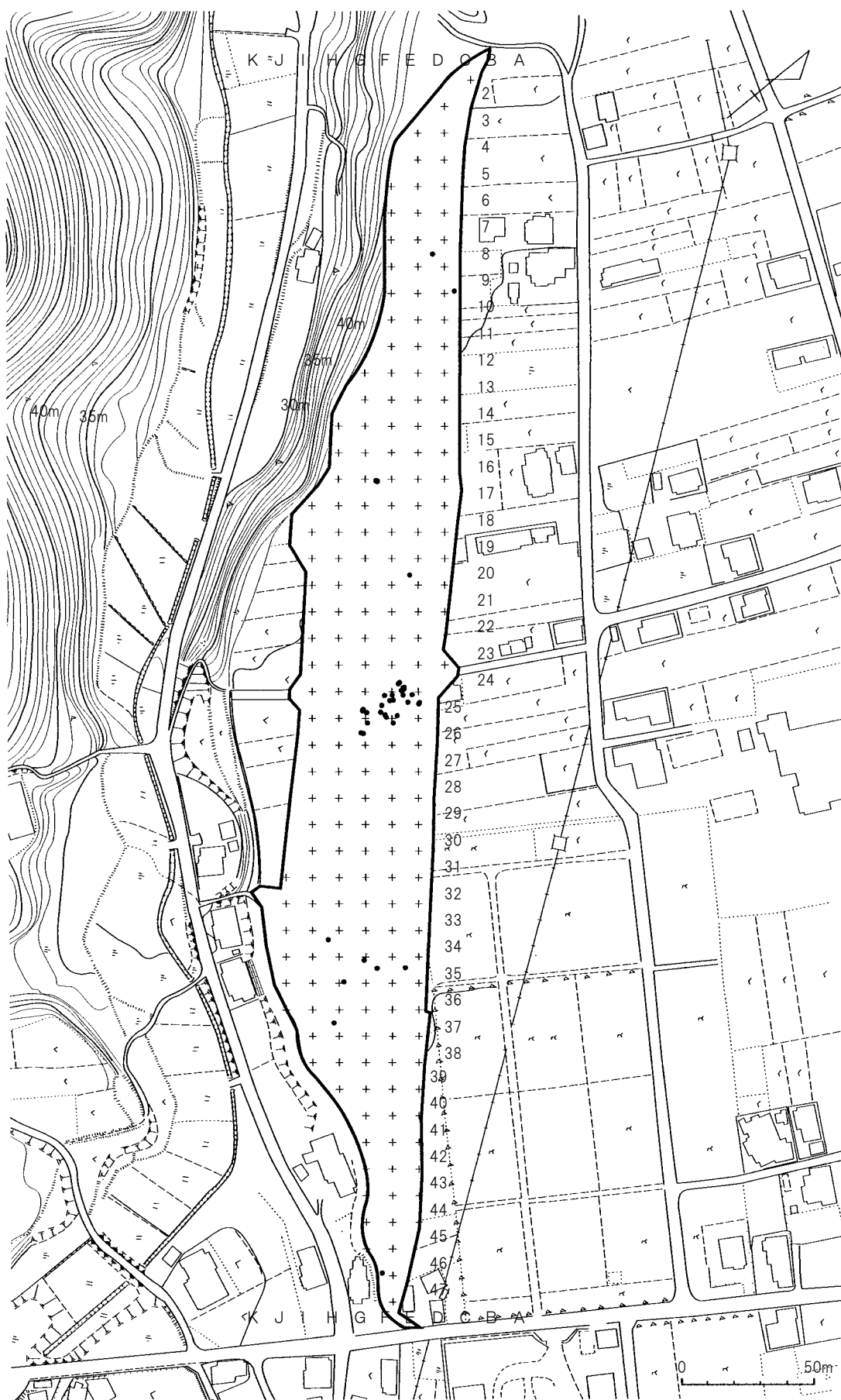
746～750は浅鉢形土器の口縁部であり、外反する短い口縁部の文様帯には一条の沈線が施されるもの、無文のものがある。どの土器も内外面ともに丁寧なヘラミガキである。751は胴部が内湾し、口縁部は大きく外反するものであり、胎土、調整、土器の造り等は粗である。

753・755は浅鉢形土器の底部から胴部屈曲部下にかけての破片である。753の調整は他の土器と若干異なるものである。

752～754・756・757はマリ状の器形を呈するものと思われる。757は短く外反する口縁部を有する。757はやや内面の調整が粗いが、他は丁寧な調整である。



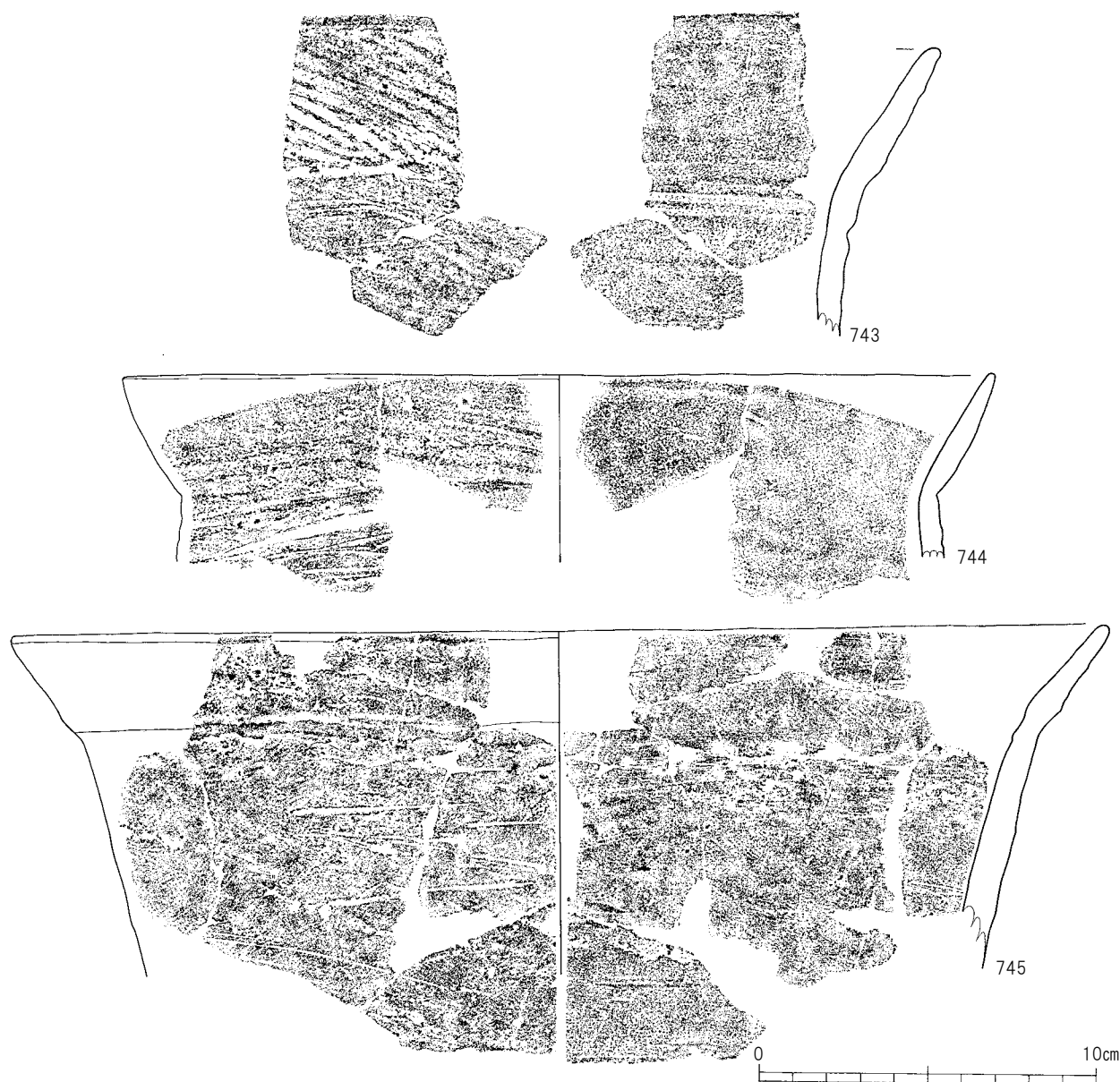
第206図 縄文時代23類土器(1)



第207図 縄文時代23類土器出土状況



第208図 縄文時代23類土器(2)

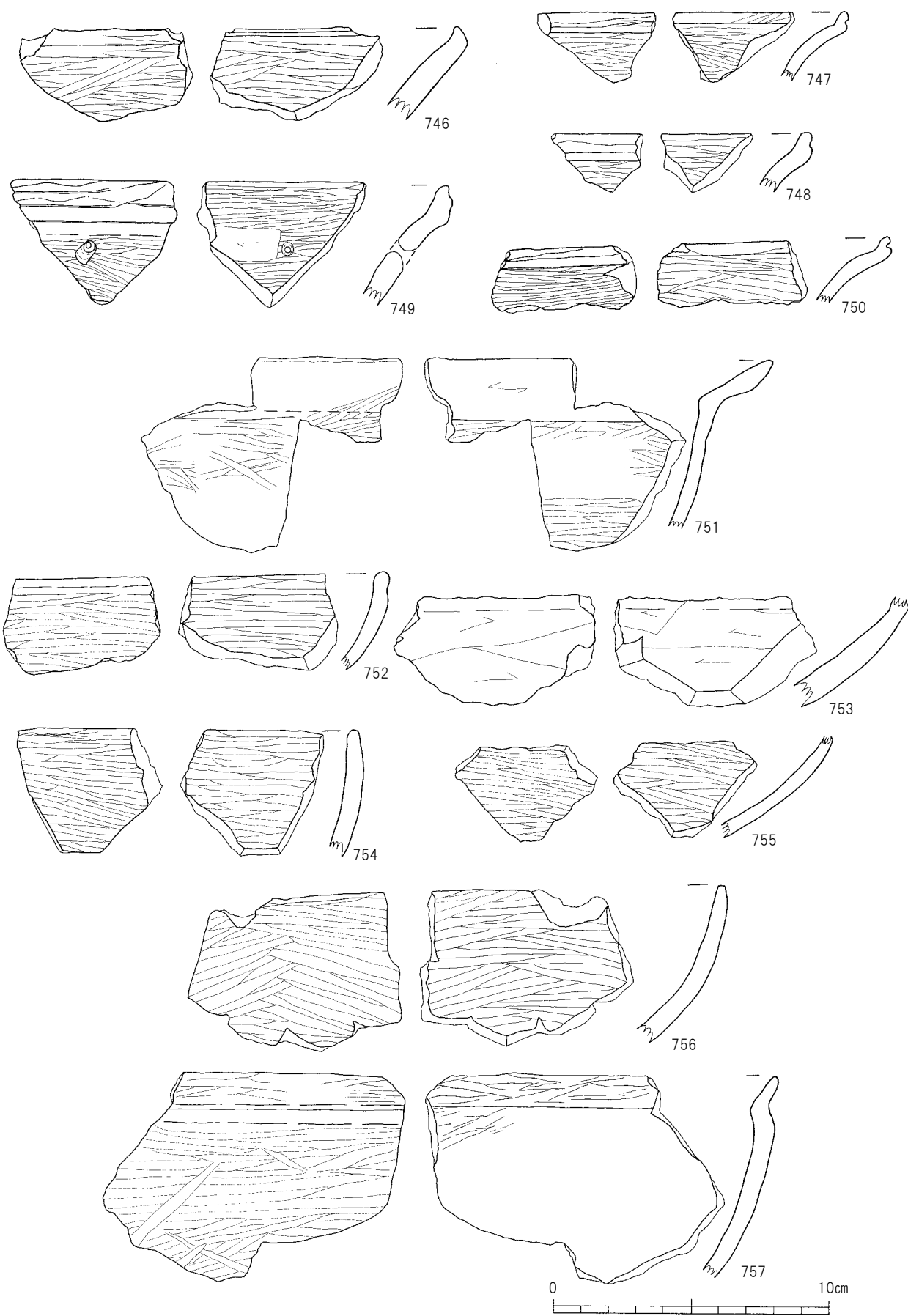


第209図 縄文時代23類土器(3)

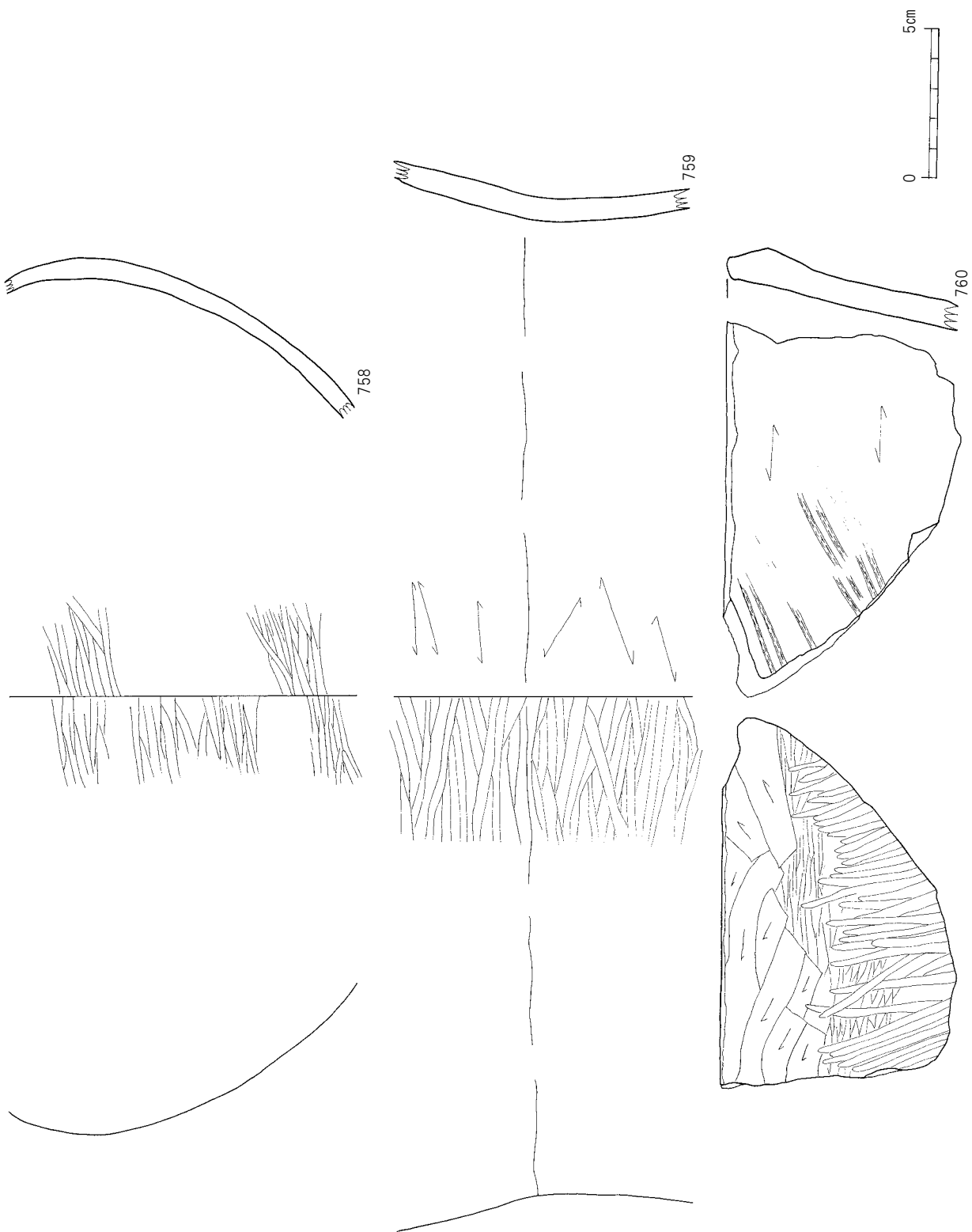
758～761は、器形・調整が浅鉢形土器と深鉢形土器の中間形態のものである。758は、胴部最大径が約30cmで球形に近い器形を呈し、ヘラミガキが部分的に観察される。759は器形としては、深鉢形土器と思われる。外面は丁寧なヘラミガキであり、内面はナデ調整である。760は、頸部からやや外反気味に立ち上がるものと思われ、口縁部が肥厚するものである。外面の調整はケズリ・横位のミガキ・縦位のミガキの順である。内面は、条痕による調整の後にナデが施されている。

761は、758とほぼ同様であるが、内面が丁寧なナデ調整である。762～764は深鉢形土器の底部で、底部接地面が外側へ張り出すもので、調整はヘラケズリが中心である。

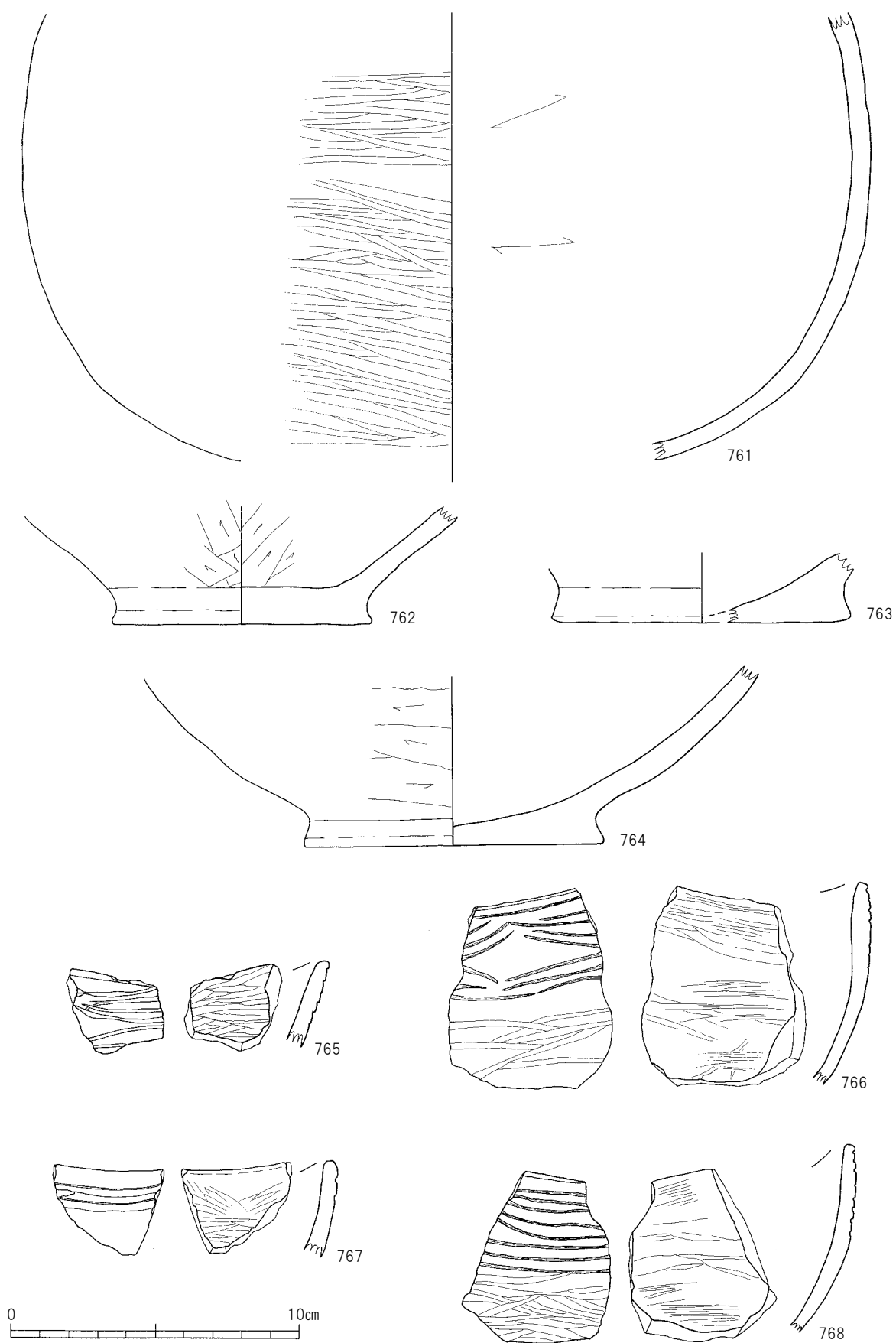
765～768は波状を呈し、マリ状の器形となるものであろうか。器壁は風化によりややざらつくが丁寧な造りで、口縁部には丁寧な沈線が施されている。また、766・768は沈線内に赤色顔料が塗布されていた。化学分析の結果からベンガラであることが判明した。



第210図 縄文時代23類土器(4)



第211図 縄文時代23類土器(5)



第212図 縄文時代23類土器(6)

第3節 遺物（石器）

1 器種分類とその定義

本遺跡は層序の項でも述べたように、層位が不安定であり、Ⅲ層から出土した土器片とⅤ層からのそれが接合するような状況があった。そこで、本節では、Ⅱ層からⅤ層までに出土した石器について一括して報告することとした。当然ながらその中には縄文時代、弥生時代、古墳時代の石器が混在し、砥石等の中には古代、中世のものも含まれる可能性がある。個々の石器について叙述する際に、可能な限りその区別を付けていくこととしたい。ただ、本石器群を通覧した時、その大部分は縄文時代の石器であり、器種分類にあたっては縄文文化の所産であることを前提に分類基準を設けた。以下、器種名とその分類基準を述べる。

1 磨製石斧

剥片素材、礫素材を問わず、方形、台形もしくは三角形の平面形状を呈し、その1辺に研磨による刃部を持つ石器とその残欠。

2 打製石斧

剥片もしくは扁平な礫を素材とし、剥離のみによる器面調整を施し、磨製石斧に似た刃部を持つ石器とその残欠。ただし、刃部形成は研磨ではなく剥離による。

3 石匙

両側からの抉入によって作られるつまみ部分と周縁に削器のような両刃の刃部を有する石器。

4 石槍

剥片を素材とし、両面調整加工によって断面凸レンズ状に仕上げ、先端部を作り出した石器のうち推定長6cm以上のもの。

5 石鏃

剥片を素材とし、両面調整もしくは半両面調整によって先端部を作り出した石器のうち推定長6cm未満のもの。なお、西北九州の縄文後期に見られる石銛と同じ形状を呈する石器も出土しているが、以上のような基準で石鏃に含めたうえで細分した。また、石匙に分類した石器のうち先端部を持つものもあるが、石鏃でいうならば基部に当たる部分のノッチのいれかたの違いで石匙と石鏃を区別した。石匙のつまみはノッチ部分でいったん狭まるが、有茎の石鏃の場合は茎がいったん狭まることはない。

6 搔器

剥片石器のうち、片面調整によって急角度の片刃の刃部をつけた石器。素材とする剥片の形状は一定しない。

7 彫器

剥片石器のうち、周縁を調整したうえで、槌状剥離を施した石器。2点だけ抽出した。

8 削器

剥片石器のうち、半両面調整によって両刃の刃部をつけた石器で、器面調整がほとんど施されず、調整は刃部を中心とする周縁に限られるもの。

9 石錐

剥片石器のうち、素材剥片の一部に狭小な先端部をつけた石器。狭小な先端を錐刃と理解している。

10 篋状石器

剥片石器のうち、両面調整によって素材剥片の形状を大きくかえたうえで、周縁に両刃の刃部をつけた石器で、先端部が形成されていないもの。先端があるものは石槍として分類する。

11 楔形石器

剥片石器のうち、対面する2辺に階段状剥離がある石器。ただし、磨製石斧の残欠もしくは刃こぼれの剥片で、対面する2辺に同様の剥離がある場合もこれに分類した。

12 小型両面調整石器

両面調整によって整形された石器のうち、周縁の断面角や大きさ等で、削器に分類しがたいもの。

13 石鋸

剥片石器のうち、一辺に研磨による両刃の刃部がつけてある石器。1点だけの出土であるが、従来攻玉もしくは擦切り石斧の擦切りの機能・用途が推定されていた石器と同じである。

14 双角状石器

研磨により整形され、その平面形が三日月形を呈し、その両端が尖り、中央部は太くなる石器。1点だけ出土した。

15 石鎌

両面調整によって「鎌」のように整形され、内湾する側縁に削器様の刃部を持つ石器。2点出土している。

16 礫器

主に、柱状節理の発達した安山岩の岩塊から、その節理によって割れてできた礫を素材とし、縁辺に粗雑な剥離による刃部が形成されている石器。ごく少数ではあるが、砂岩や頁岩の偏平な礫を用いているものもある。

17 異形石器

剥片石器のうち、従来の定形石器とは全く異なる形状をした石器。周縁に施された複数の抉入部と、ほぼシンメトリーな形状が特徴である。

18 穿孔礫

穿孔のある小さな礫が1点出土した。

19 石錘

偏平な小円礫を素材とし、長軸の両端に敲打や小剥離によって抉入を施した石器。抉入部が紐掛けと解釈されている。

20 磨石

礫石器のうち、円礫を素材とし、「磨る」作業によってできたと考えられる平滑な面を持つ石器。側面に敲打痕を持つものもこれに分類した。

21 凹石

偏平な円礫の片面もしくは両面に敲打によると推定できるくぼみを持つ石器。平滑面や側面

に敲打痕を持つもので、くぼみがある場合はこれに分類した。

22 敲石

円礫や折損した石斧の一端もしくは両端に、敲打の結果と考えられる割れや敲打痕を持つ石器。

23 石皿・砥石

柱状節理の発達した安山岩の岩塊からその節理によって割れてできた板状の礫や砂岩などの円礫などのうち、自然面ではないと判断できる平滑面もしくはくぼんだ滑らかな面を持つ石器。石皿と砥石は短辺15cmを基準とする大きさで分けた。砥石と磨石は長幅比でほぼ1.0:1.5を基準として分けた。

24 軽石製品

研磨や穿孔が施された軽石

25 磨製石庖丁未製品

1点だけの出土であるが、粘板岩の剥片に調整剥離と穿孔を加えた石器があり、その形状から磨製石庖丁の研磨する前段階で折損したものと判断した。

26 使用痕剥片・加工痕剥片

最小の剥片石器よりも一回り大きい剥片で、使用の結果と考えられる微細な剥離痕のある剥片と、使用によるとは見なしがたい意図的な剥離と判断できるが搔器や削器のような刃部を形成するに至らない小剥離の施された剥片。

27 石核

礫もしくは剥片を素材とし、器面調整とは見なしがたいネガティブな剥離面がある石器で、その剥離面の大きさが最小の石器よりも一回り大きいもの。

28 三角擣形石製品

柱状節理に沿って割れた三角柱形の礫を、敲打や研磨によって整形した石器。

以上29器種を設定した。

これらは、ほとんどが縄文時代の所産と考えられるが、一部弥生時代等、他の時代の石器も混在しているであろうと考えられる。

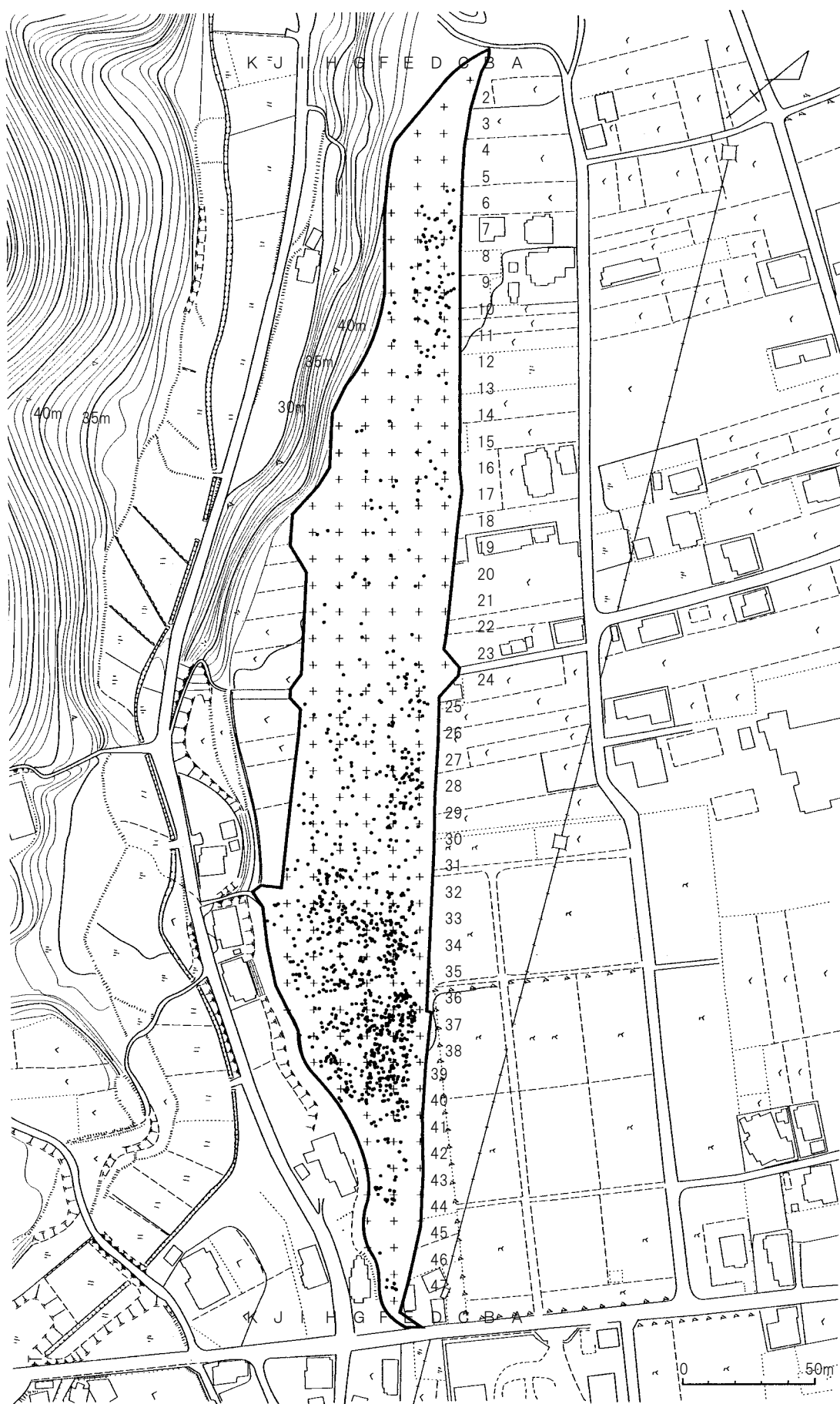
以下、各機種ごとに概観しておく。

なお、挿図の縮尺は第362図までは全て80%に統一してある。

2 磨製石斧

磨製石斧は47点を図示した。このうち39以下は研磨による仕上げの前段階で廃棄もしくは遺棄されたものと判断している。また、24と25は磨製石斧の刃部破片であると判断するのが相当であると考えここに掲載した。

1, 4, 6, 9, 10, 11等は、作ろうとする石斧の大きさ、平面形に見合い、かつ必要な厚みを持つ、石斧に適した石質の礫を採集し、整形剥離や敲打調整を極力省略して作られたものである。このような石斧は南九州においては縄文時代早期から散見されるもので、縄文時代人の性向の一つとして認知されるべきものである。言葉を換えれば縄文時代人も「楽しんで必要な石斧を作りたい、



第213図 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ層石器出土状況

無駄な労力は省きたい。」のである。さらに換言すれば、縄文時代人の合理性を証するものである、と言える。

このような石斧の研磨直前の未製品が38である。これは、先に述べたような礫を採集し、裏面胴部下半に最小限度の整形剥離を行ったうえで、細かな周縁調整を加えている時、左側縁中央部の周縁調整の剥離に失敗して廃棄されたものであろう。なぜこれが廃棄されなければならなかったかというと、側面図を見れば分かるように、製作を進めてもこの部分の側縁は大きく湾曲し、着柄に致命的な支障がでるからであろう。それは、使用時には着柄の仕様上、この部位は大きな負荷がかかり、折損しやすい部位であるからである。そこが湾曲したということは、使用してもすぐに折損することが予見されるから、廃棄したのである。12、13、17などの折損品は、いずれもこの部位で折れており、着柄の仕様でここに負荷がかかることが分かる。なお、この周縁調整の剥離に失敗した原因は、彼の技術的なミスタッチではなく、この剥離を加えた箇所に、彼が見とおせなかったヒビが内在していたことである。剥離の打点部にある小剥離がそれである。

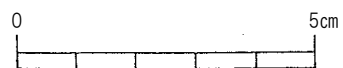
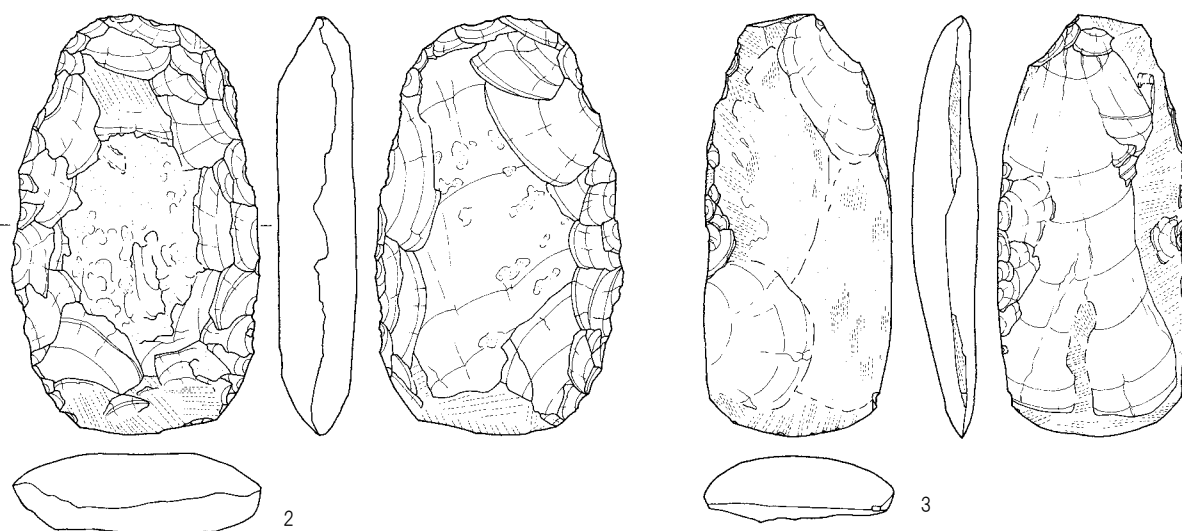
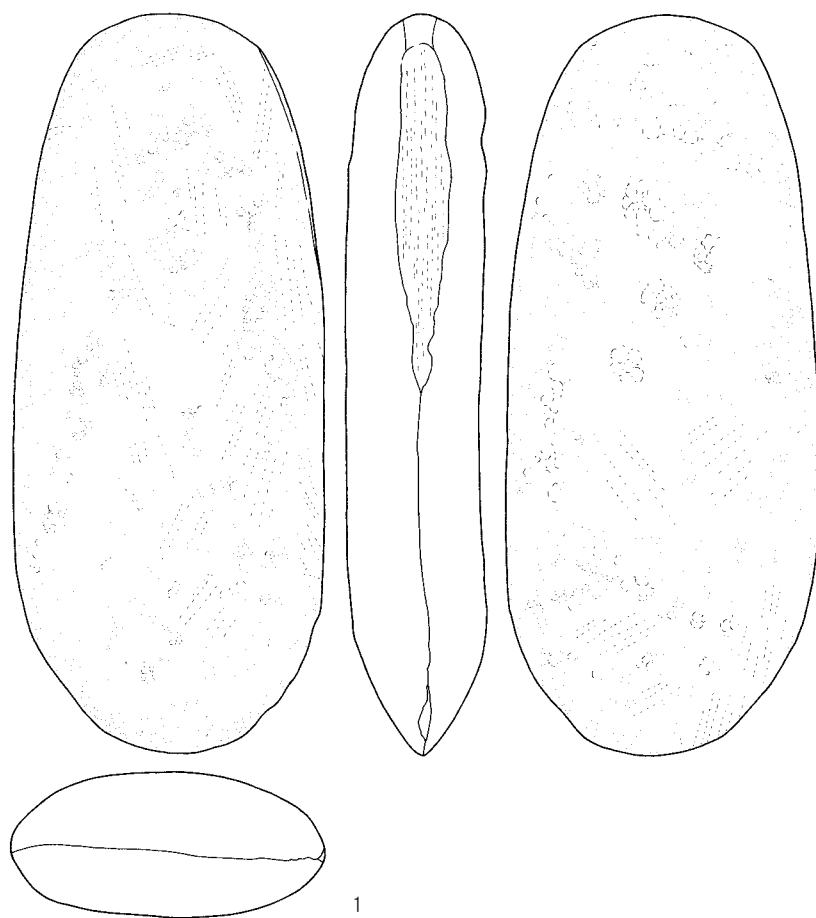
5、7、8等は縄文時代早期後葉位からよく見る石斧である。その特徴は、幅7cm内外、長さ10cm内外、厚さ1cm内外の大きさと製作方法にある。製作方法は、剥片素材を用いて、整形剥離と周縁調整で形状を整え、敲打整形をほとんど施さずに研磨仕上げをする、というものであり、その未製品が44である。この44は、刃部の一部が研磨され始めているが、完成には至っていない。この製作者が、完成させなかったのは刃部見通しの図で明らかなように、器軸面と刃部とを一致させられなかったことが原因であろう。器軸面と刃部を一致させるためには、刃部右側を上げ、左側を下げる必要がある。その様に調整すると、器体の右側縁側が薄いために、正面図で見た場合刃部が極端な右上がりになり、バランスが取れなくなるからであろう。

9、10については、その合理的製作方法について先に触れたが、この二者は形状にも特徴がある。端的に言えば、鑿形をしていることである。鑿形の石斧は、南九州では縄文時代早期前葉、貝殻紋円筒土器段階から散見され、同後葉、塞之神・平梅段階になると大きさにもバリエーションが見られるようになる。この石器の存在は、高度な木工技術の存在をも推定させるものであり、その意味で、重要な資料である。なお、10の頭部の小剥離はタタキ鑿として使われたさいについたものであろう。9にそのような小剥離が見られないのは、ソケットが付けられていたからと想定できる。また、23も鑿形石斧で、小形薄手のバリエーションを示すものである。

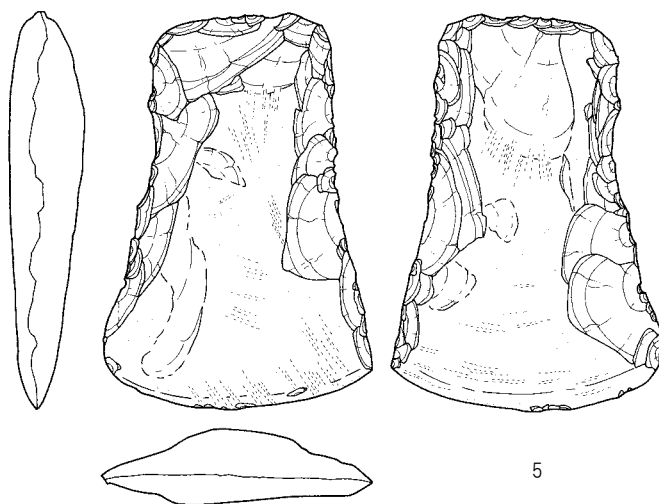
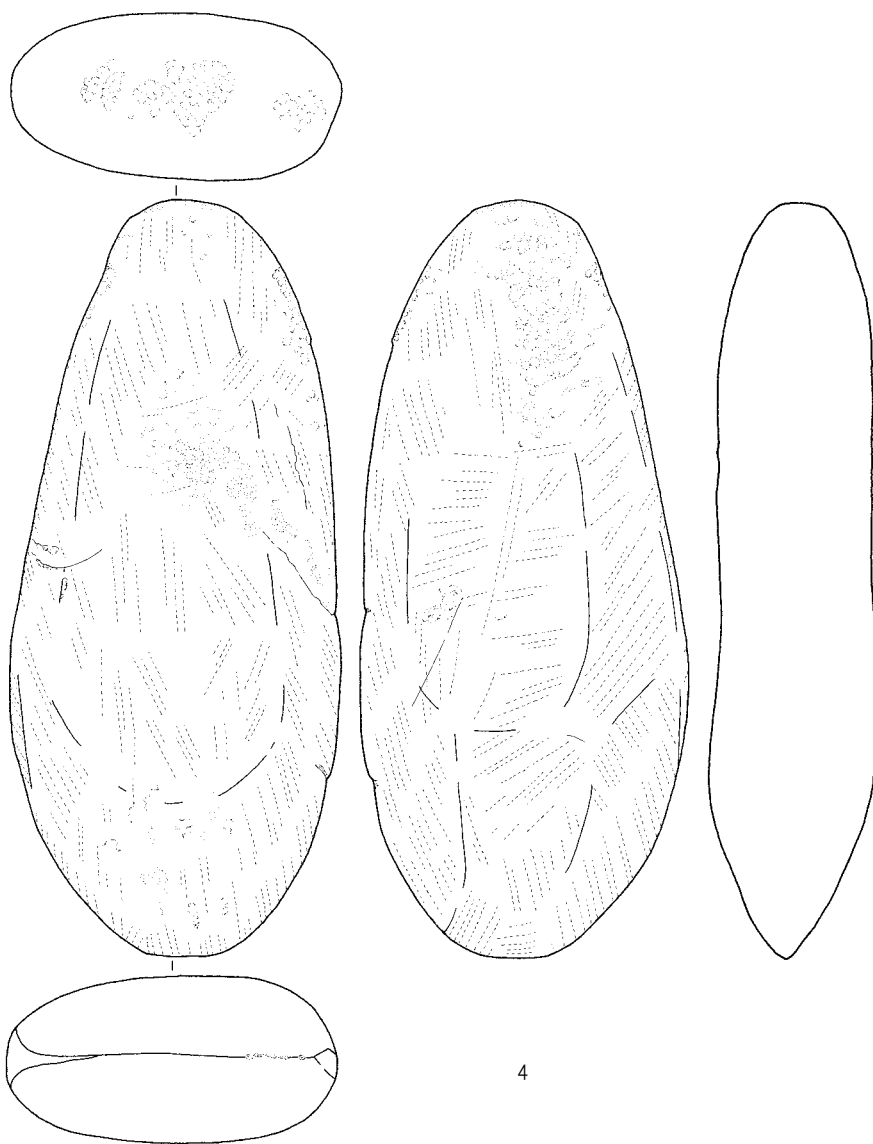
12～23は胴部上半、頭部を欠損した資料である。先に述べたように、着柄の仕様によって、特に負荷がかかる部位で折れるのであろうと推測できる。これらのうち18は、刃部が大きく欠けたにもかかわらず、刃部を研ぎ直して再利用するさい、このようないびつな形状になったのであり、この形状で使用されてさらに折損したものである。

12、14については、頭部を欠損しているので若干不安であるが、弥生時代の太形蛤刃石斧の蓋然性が高いと判断している。今宿産のそれと比較すれば、やや細く、側縁も湾曲しているが、在地生産であるため技術的に若干劣るのではないか。なお、縄文時代の所産であることも一概に否定できない。

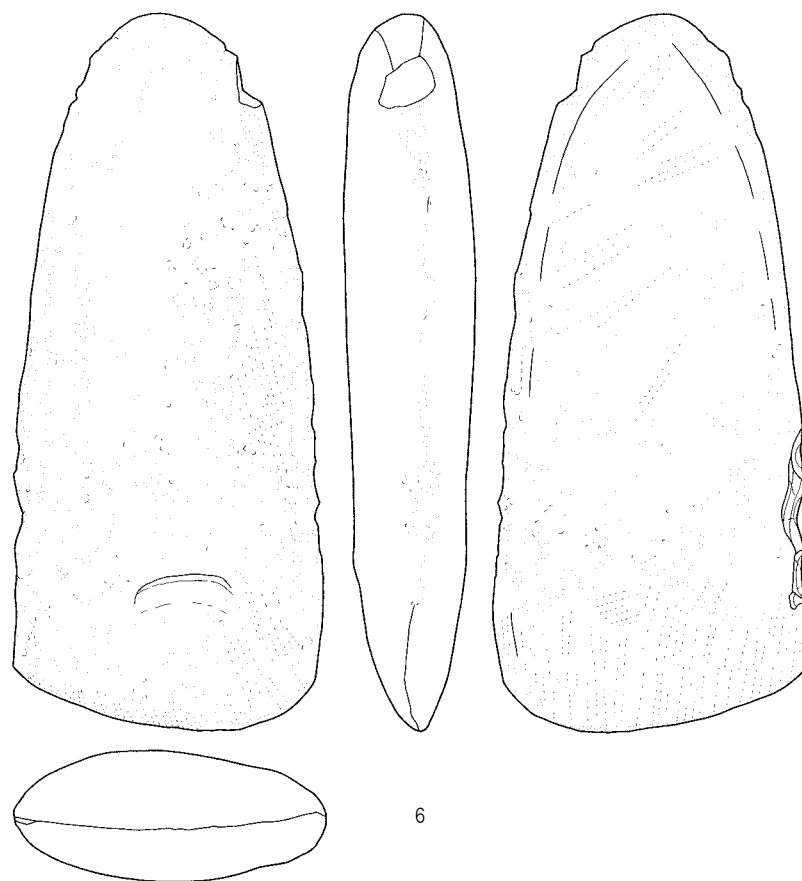
また、24、25は刃部の刃こぼれの破片であり、このような刃こぼれが生じたら18のような研ぎ直しが行われるものである。



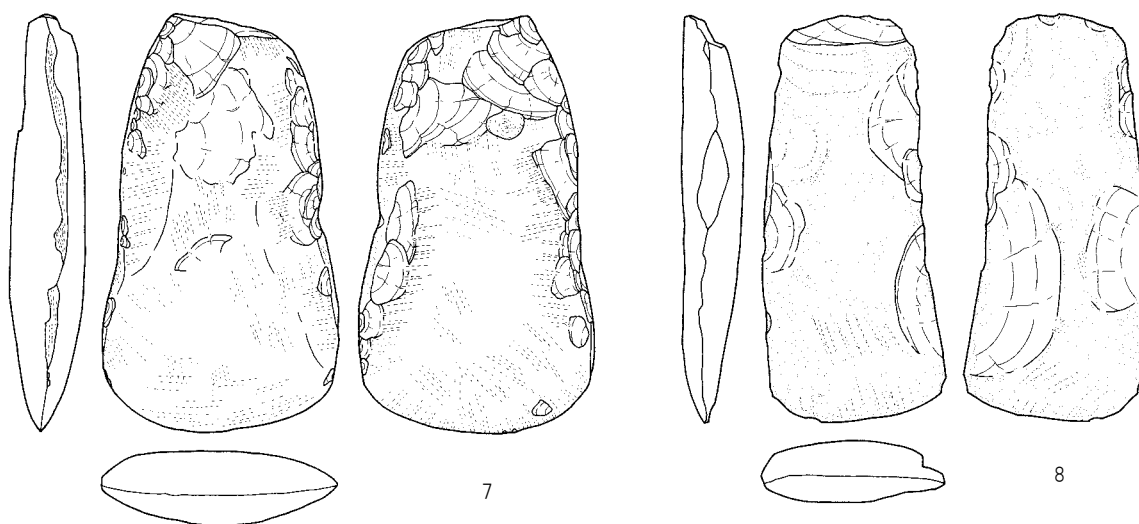
第214図 出土石器 磨製石斧(1)



第215図 出土石器 磨製石斧(2)



6

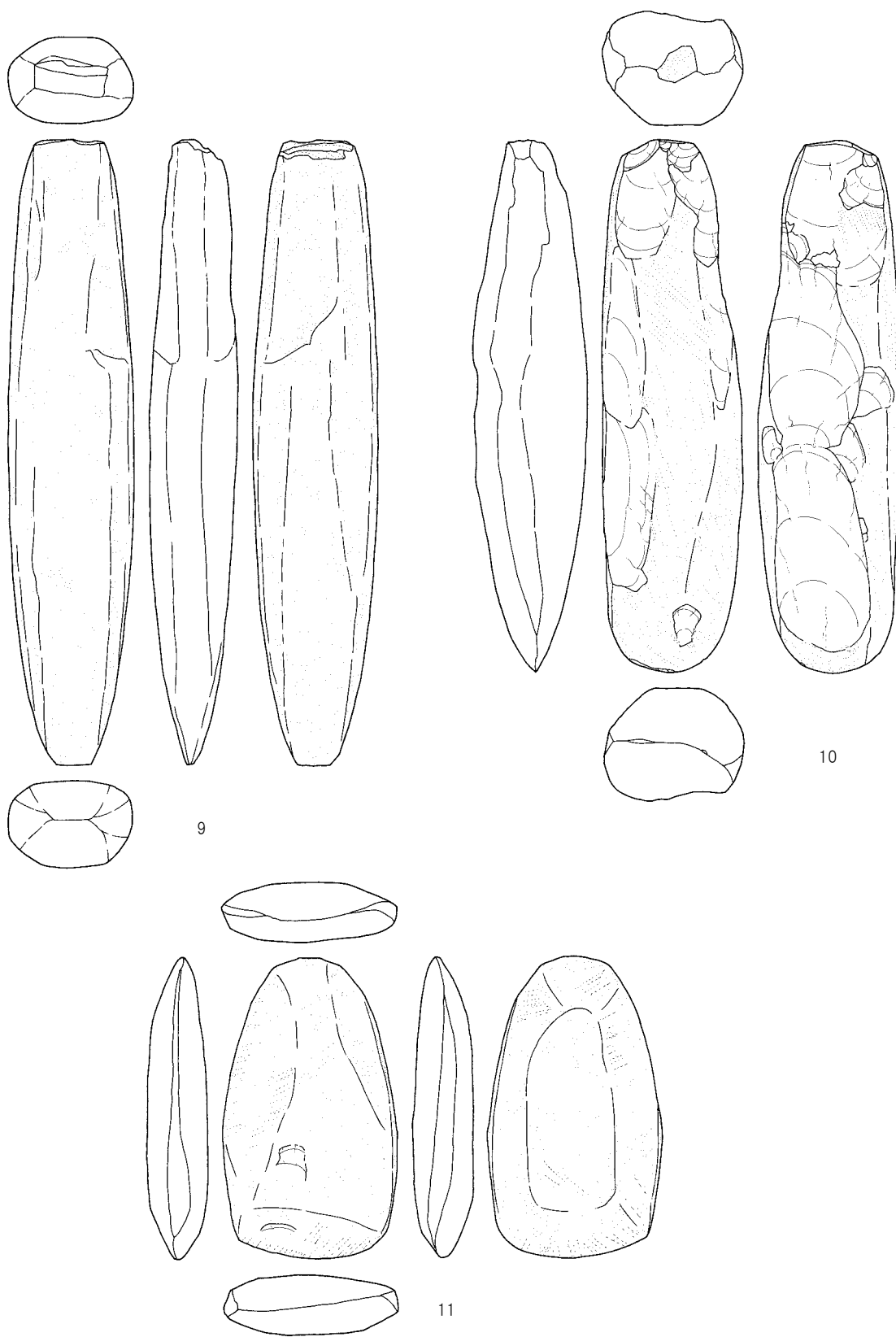


7

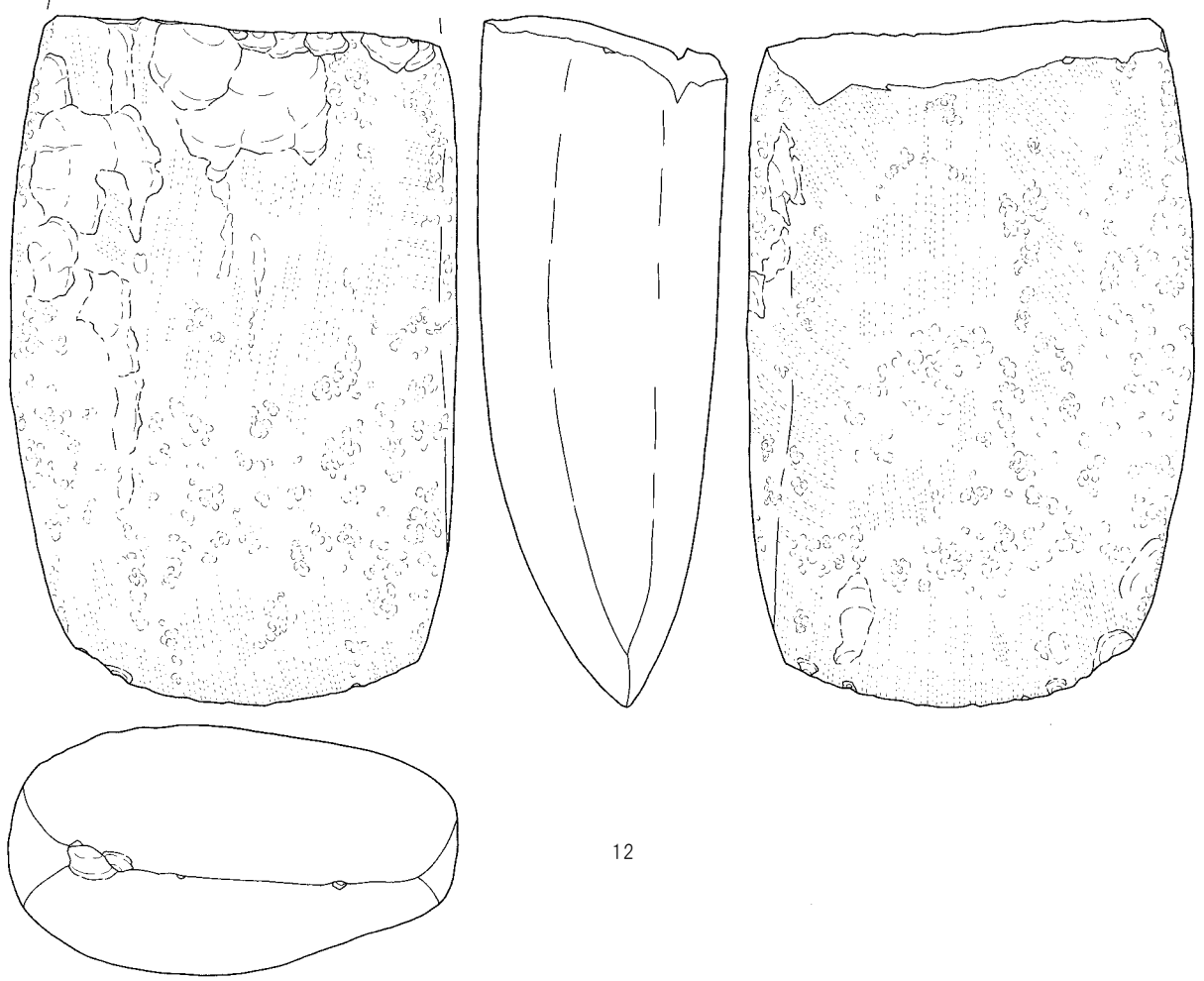
8



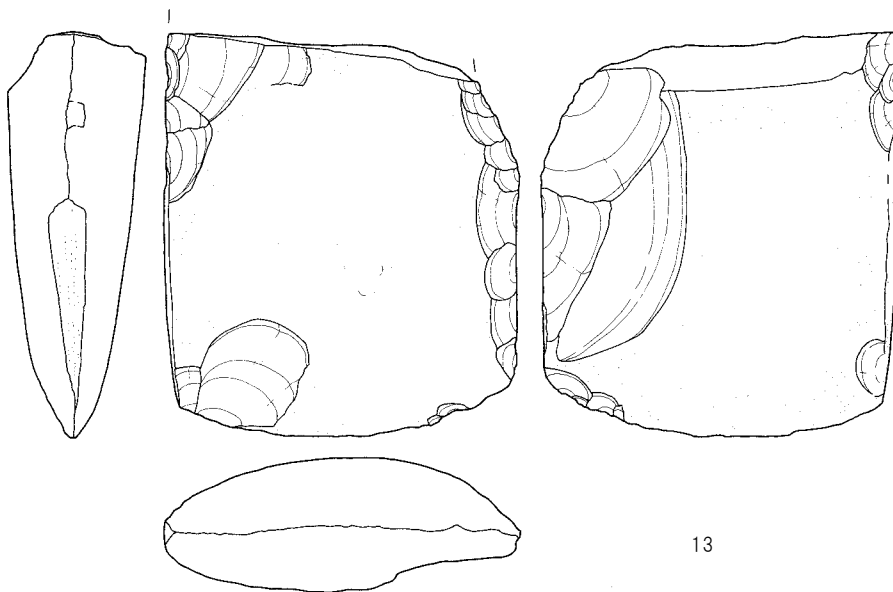
第216図 出土石器 磨製石斧(3)



第217図 出土石器 磨製石斧(4)



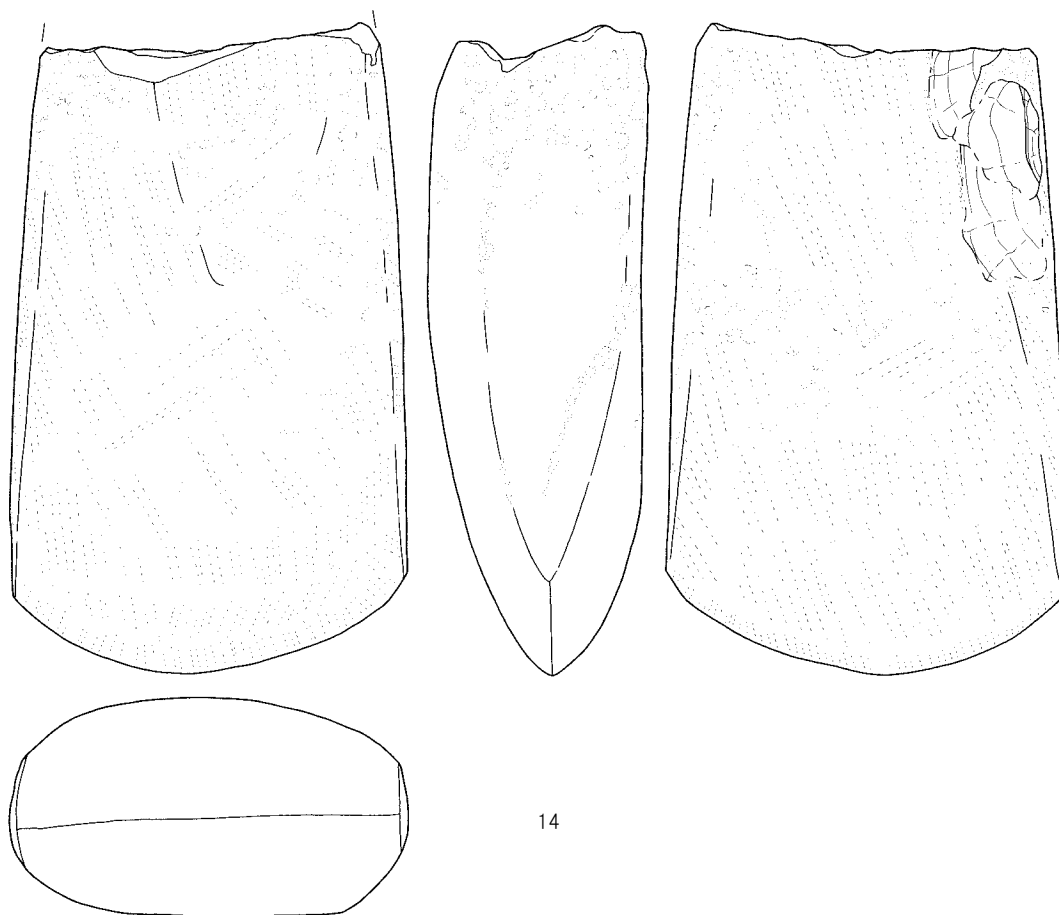
12



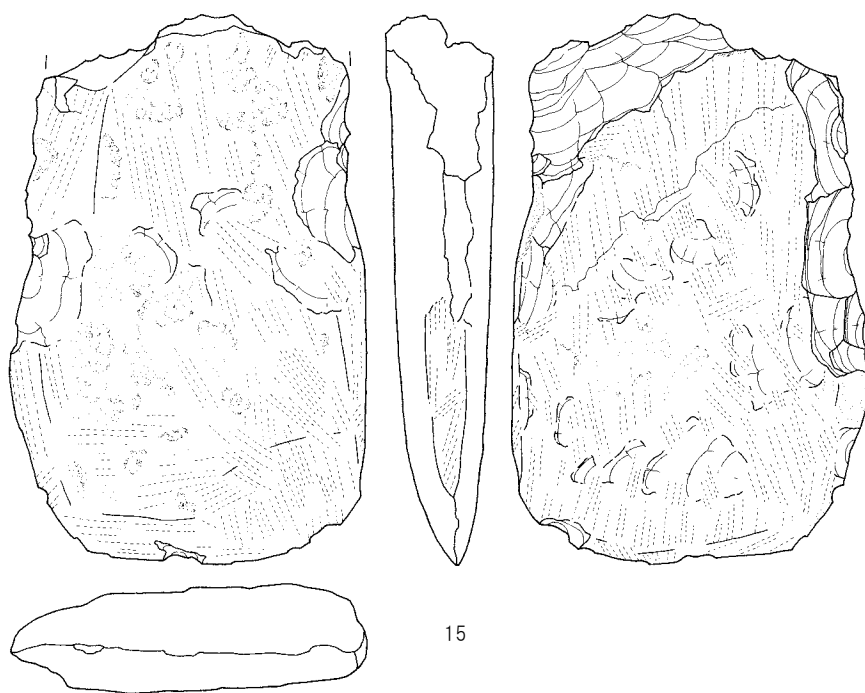
13



第218図 出土石器 磨製石斧(5)



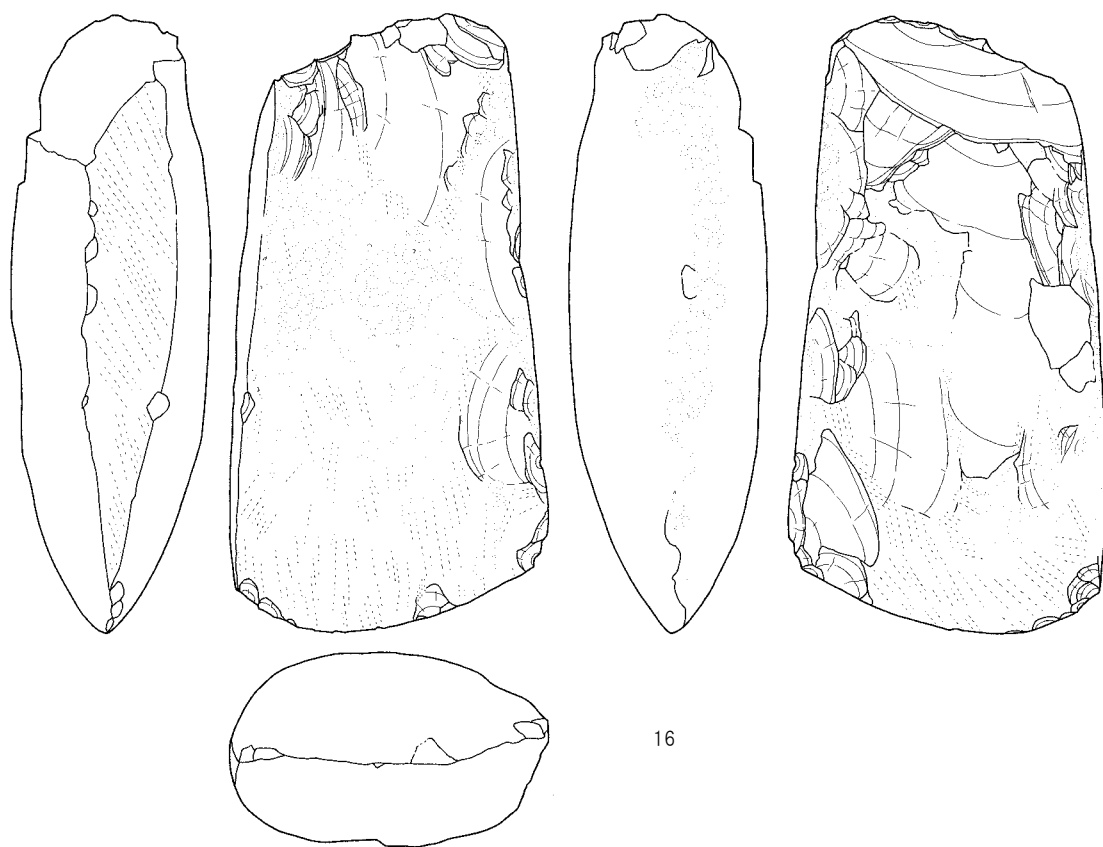
14



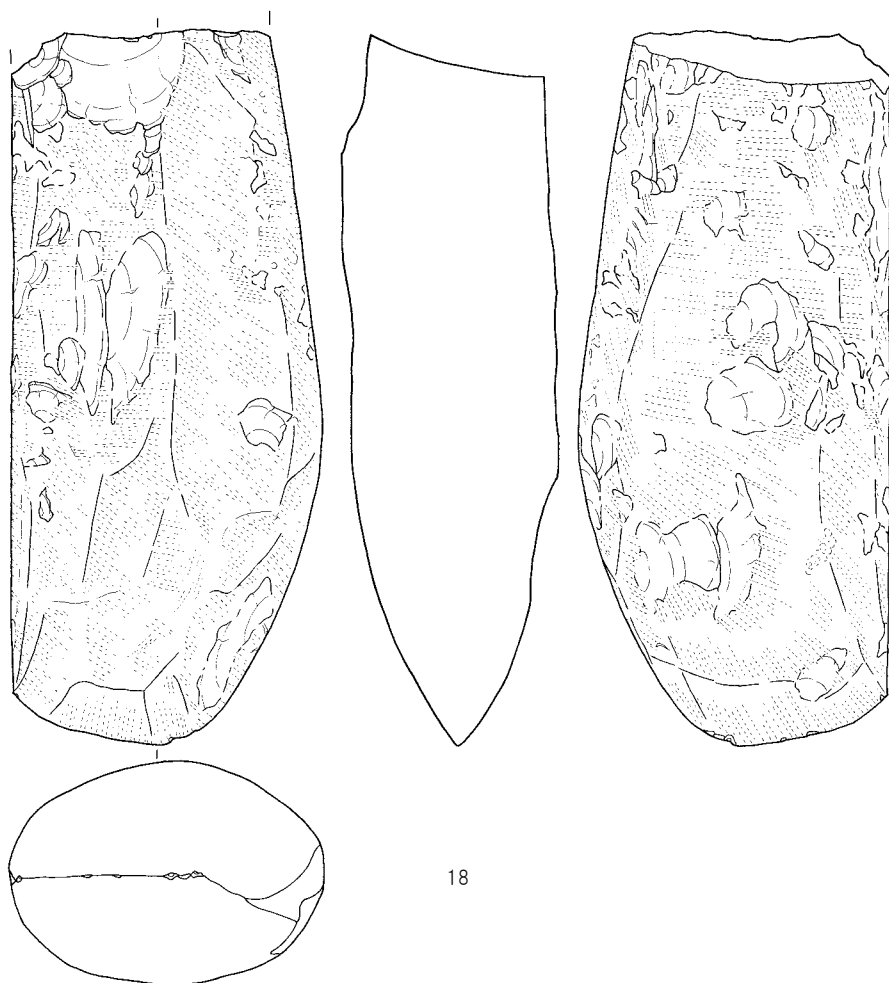
15



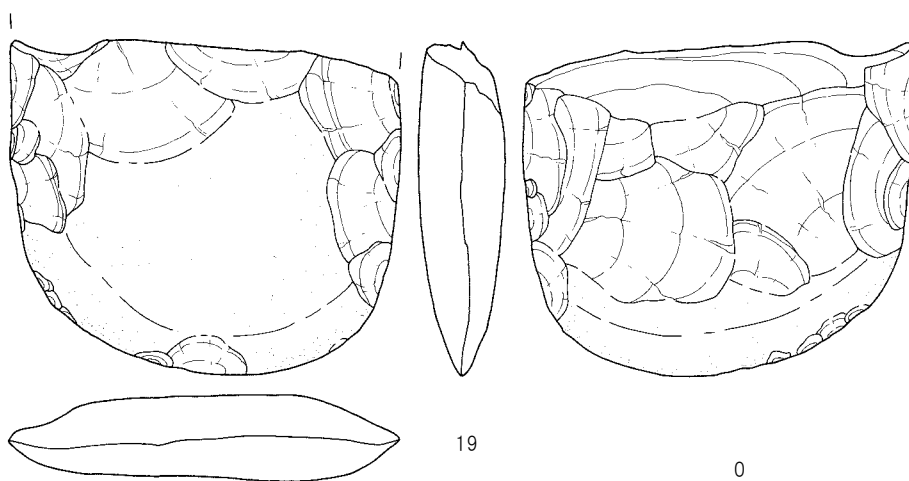
第219図 出土石器 磨製石斧(6)



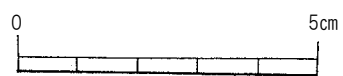
第220図 出土石器 磨製石斧(7)



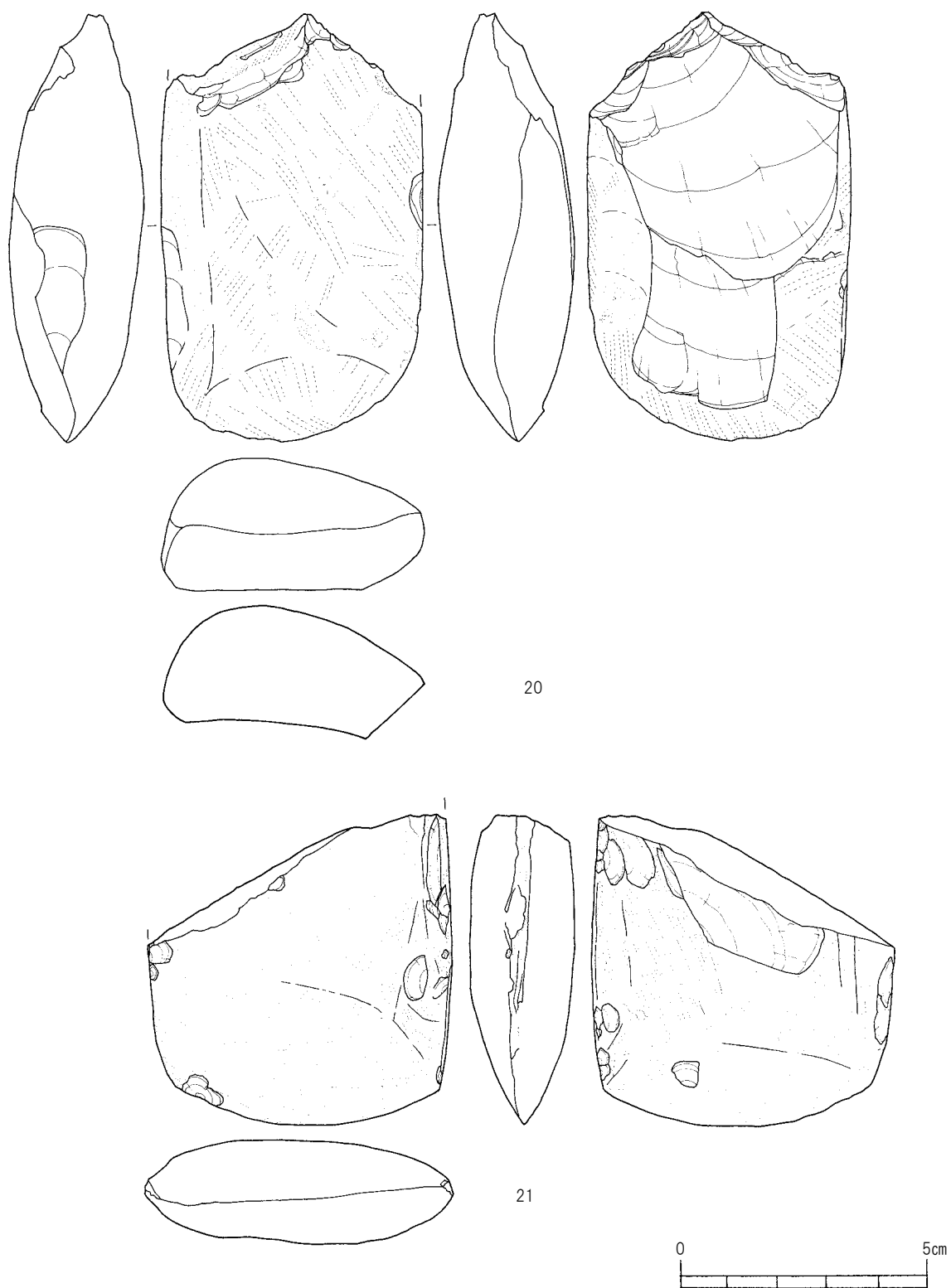
18



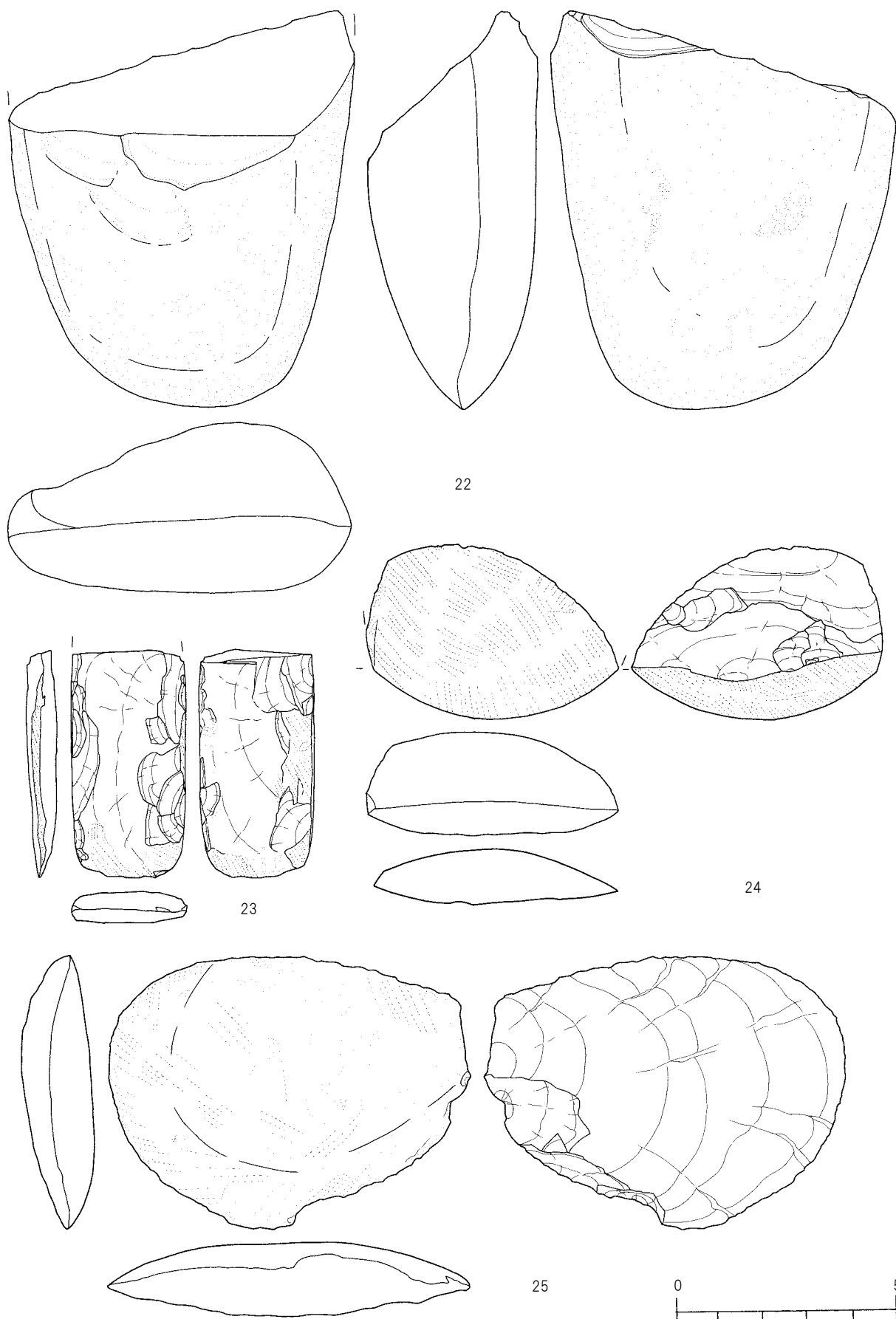
19



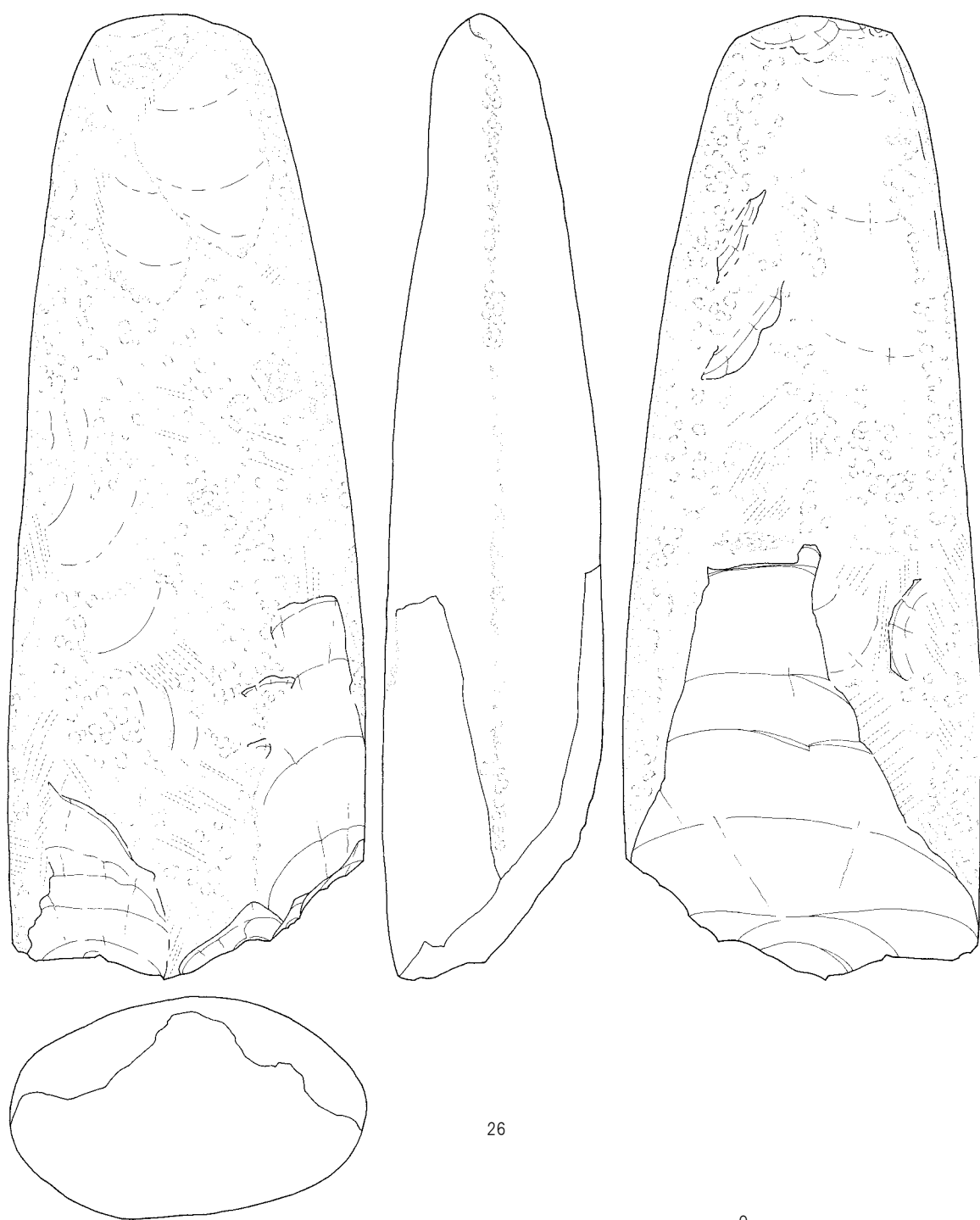
第221図 出土石器 磨製石斧(8)



第222図 出土石器 磨製石斧(9)



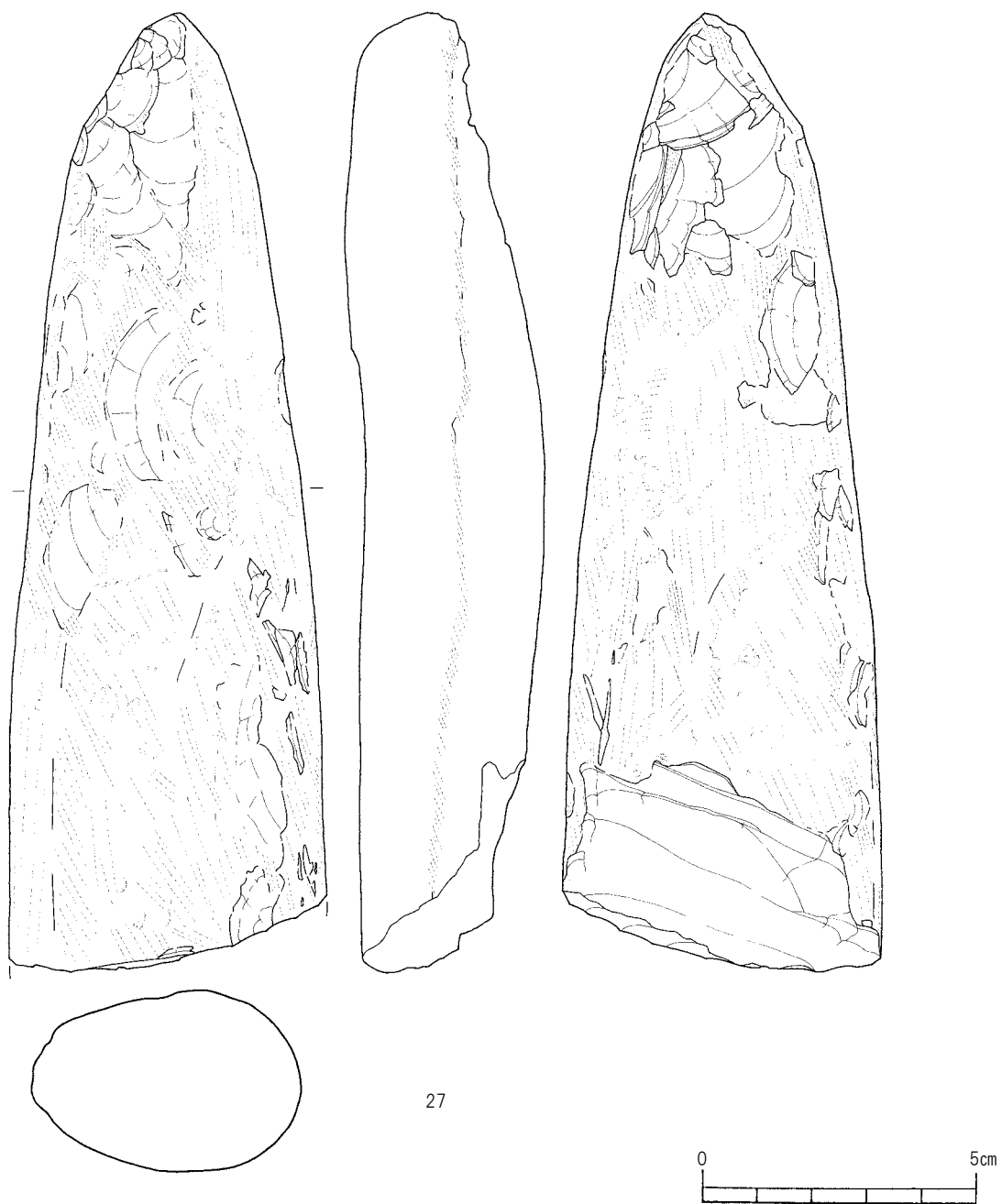
第223図 出土石器 磨製石斧(10)



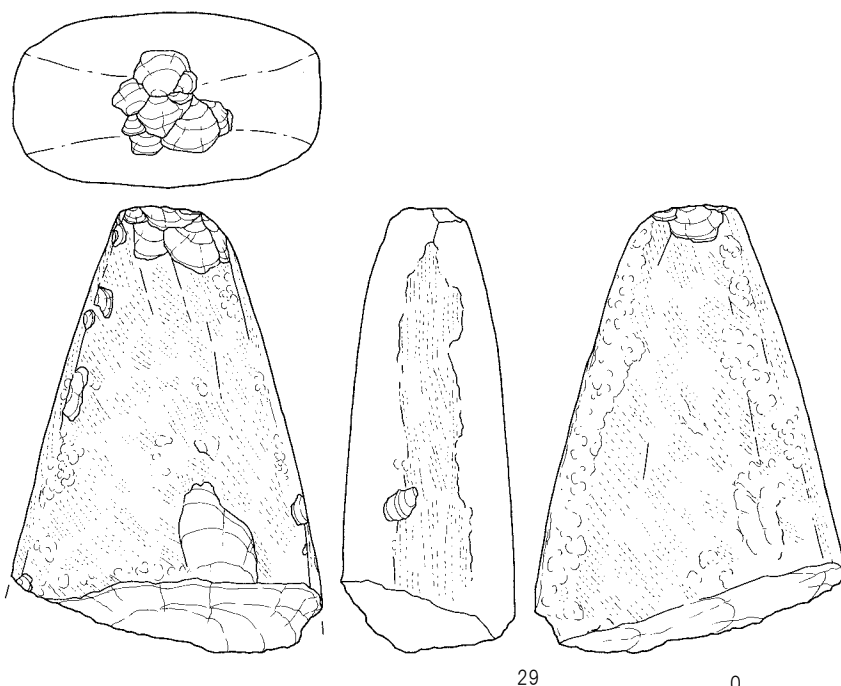
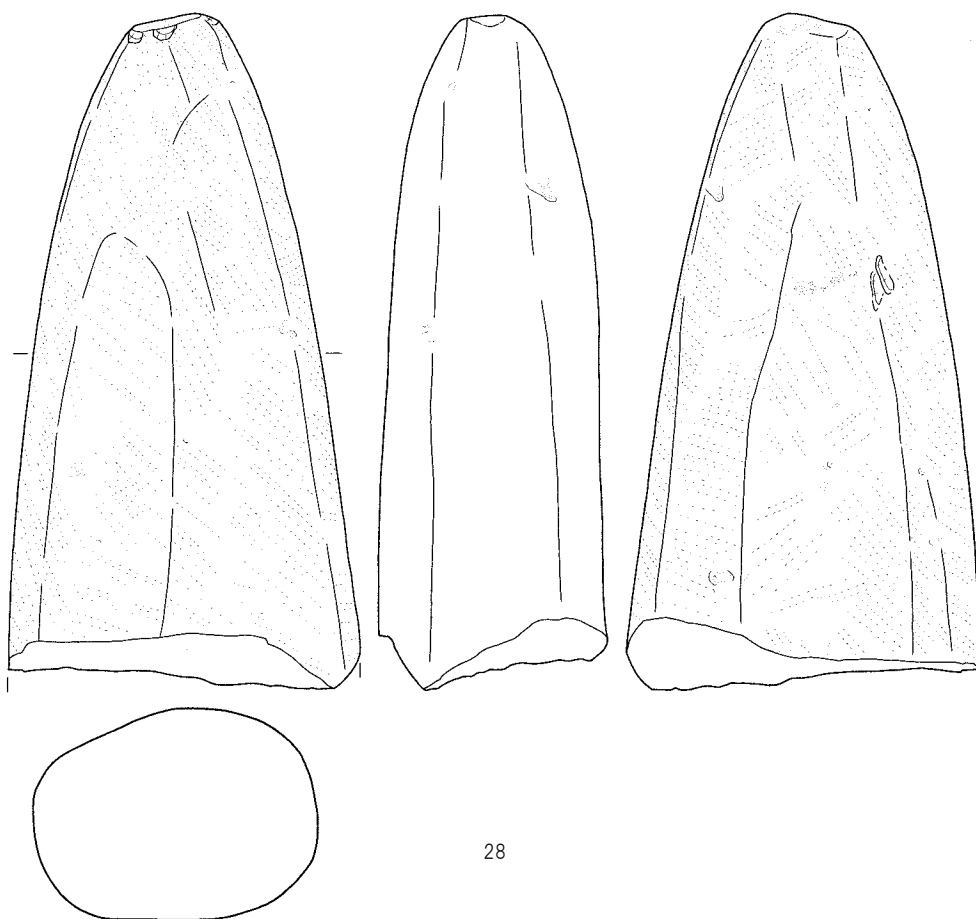
26



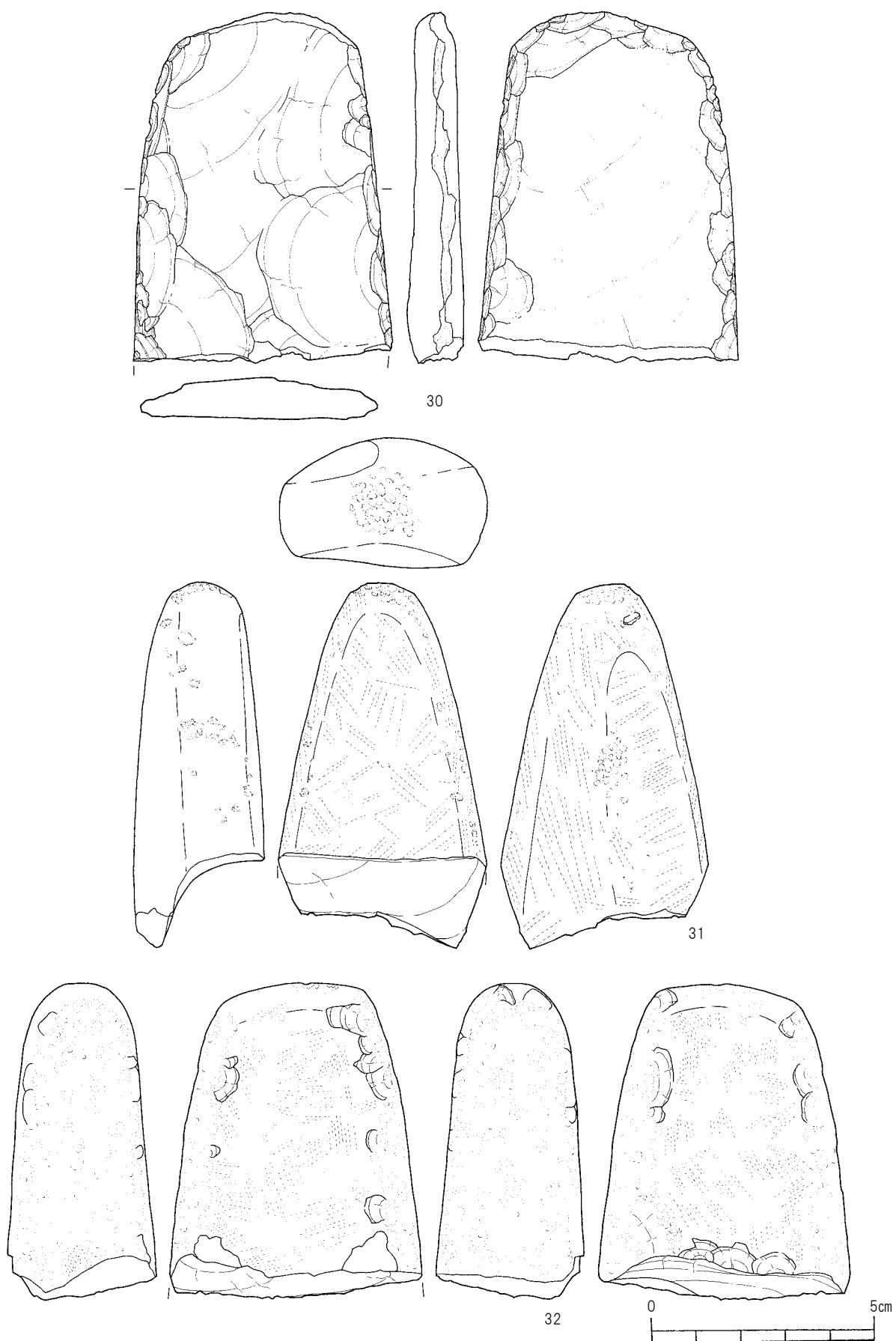
第224図 出土石器 磨製石斧(11)



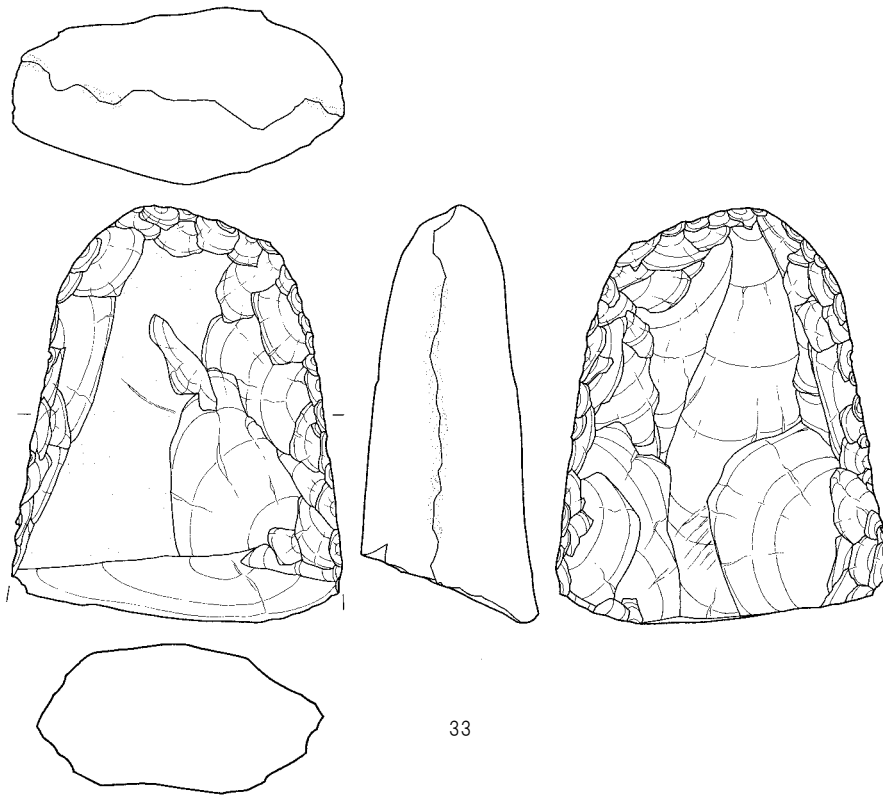
第225図 出土石器 磨製石斧(12)



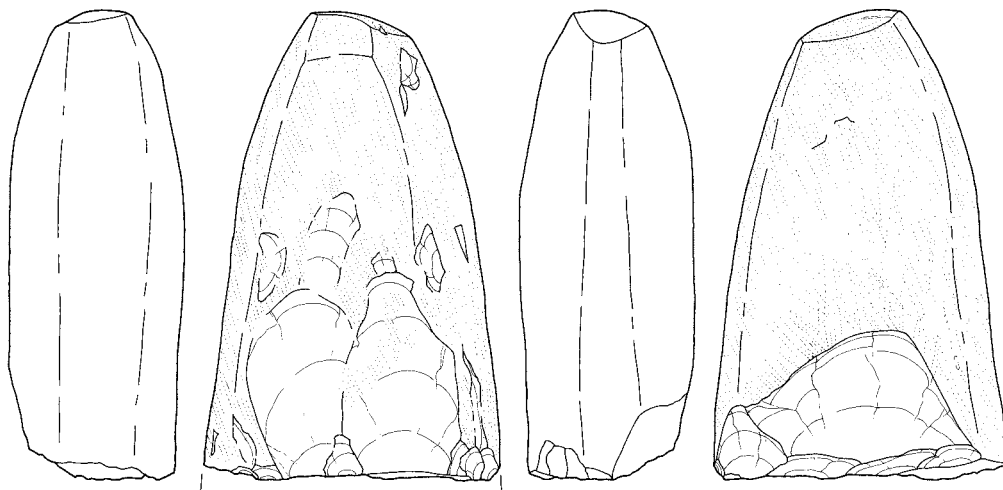
第226図 出土石器 磨製石斧(13)



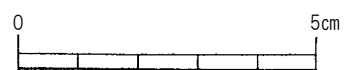
第227図 出土石器 磨製石斧(14)



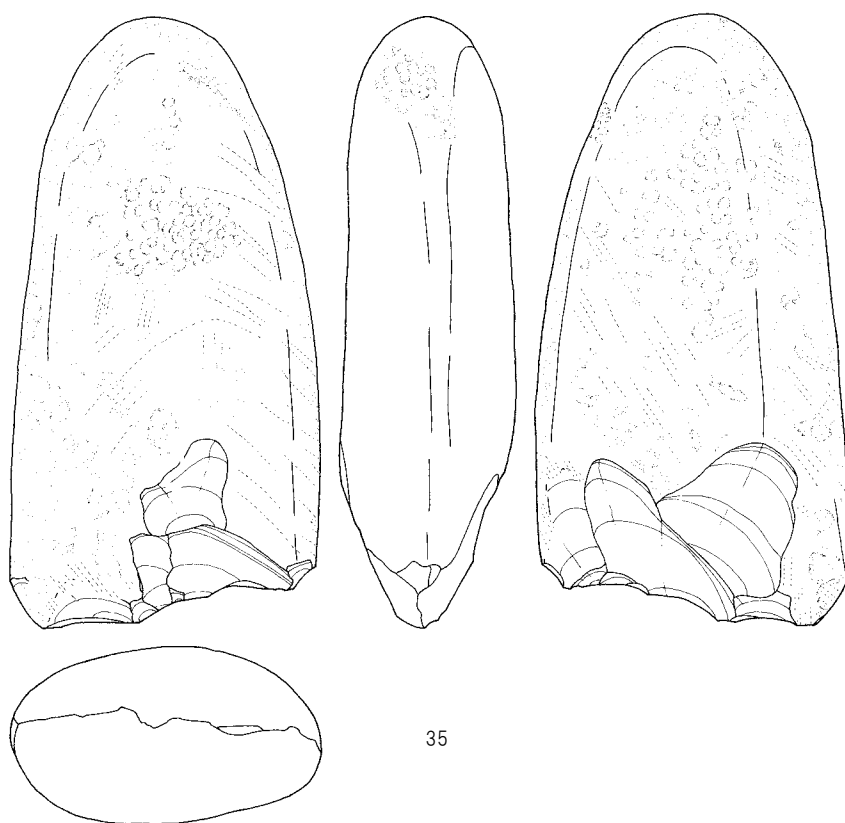
33



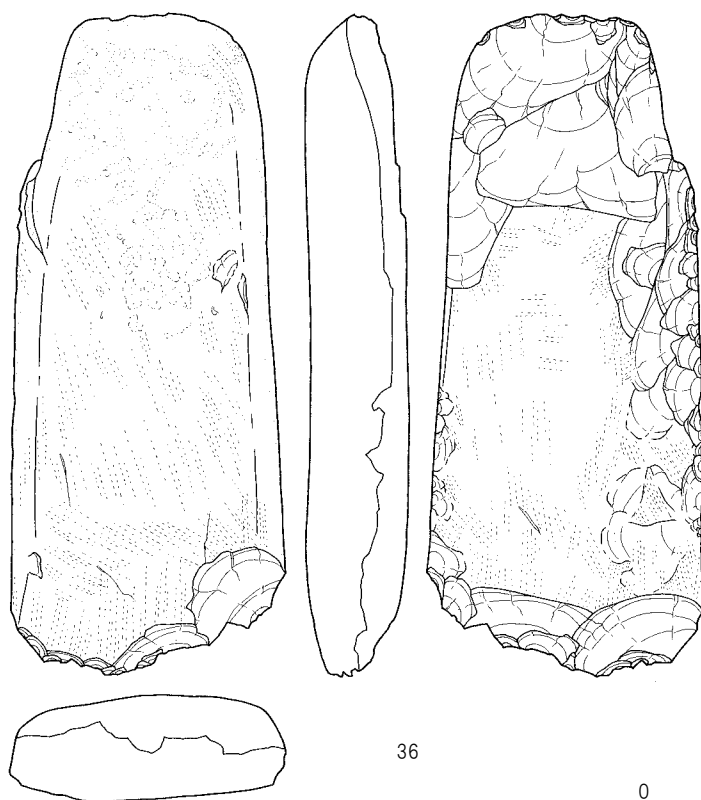
34



第228図 出土石器 磨製石斧未製品(15)



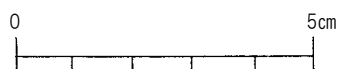
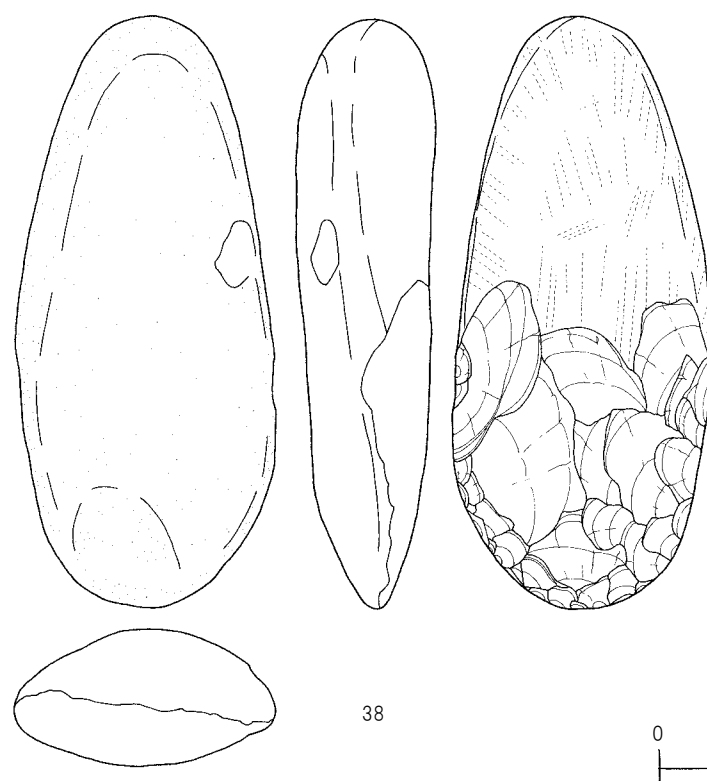
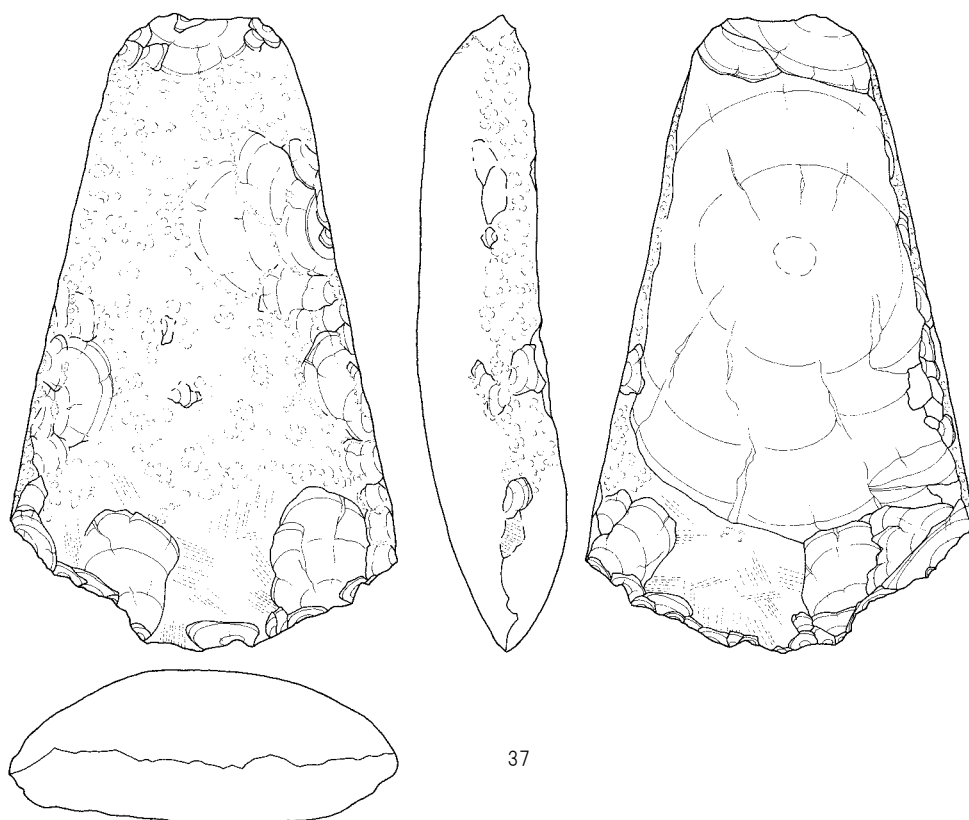
35



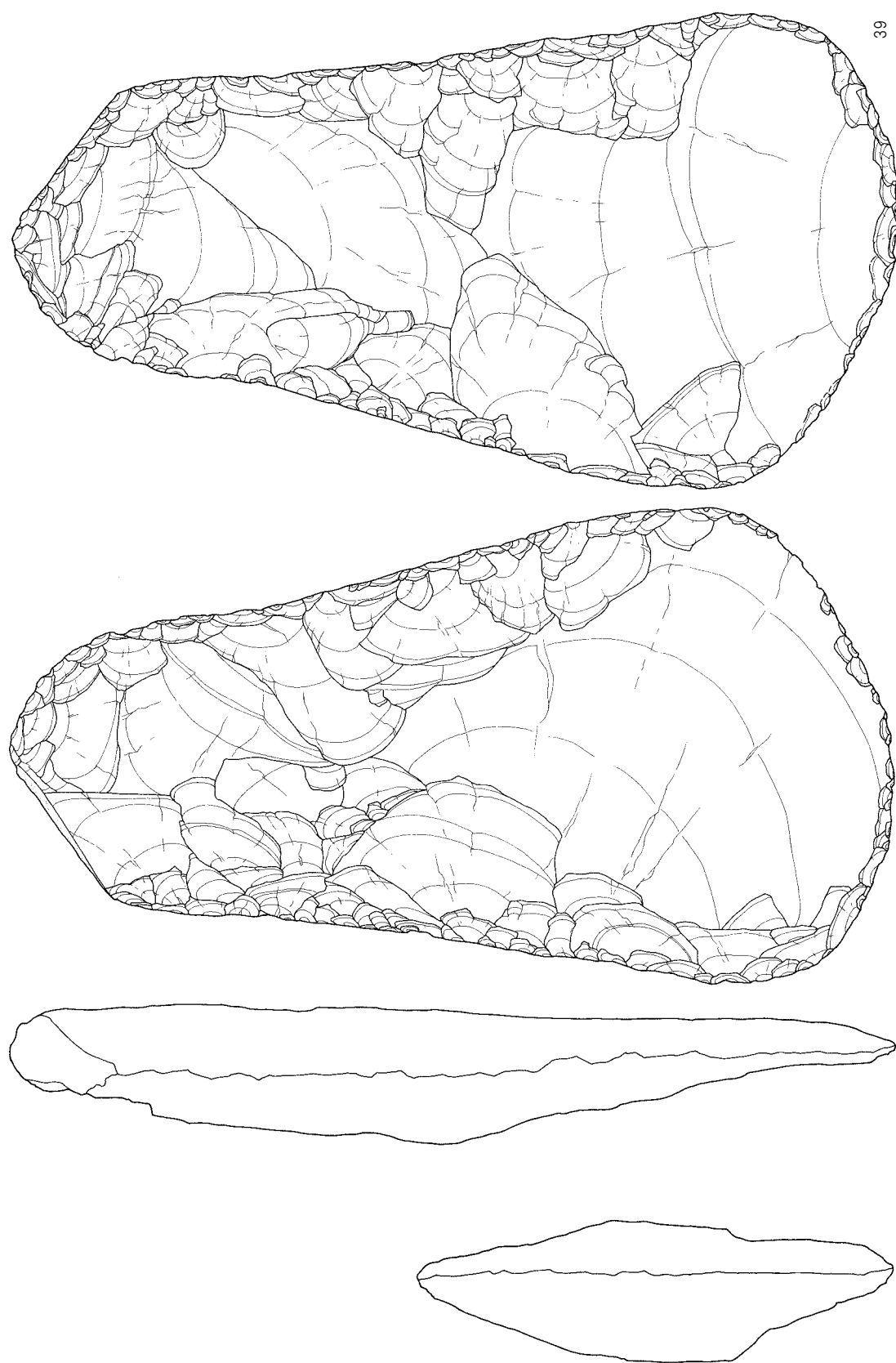
36



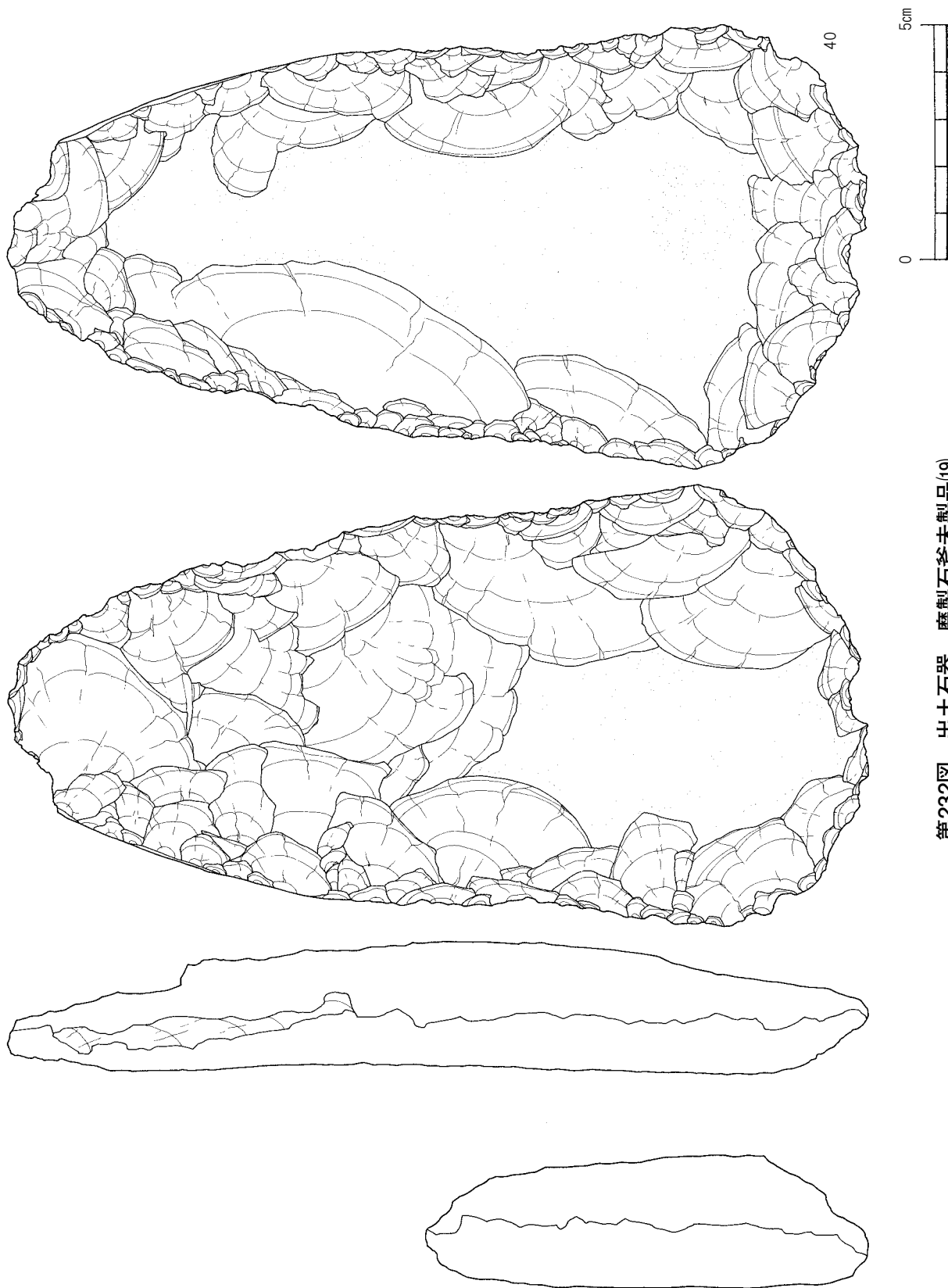
第229図 出土石器 磨製石斧未製品(16)



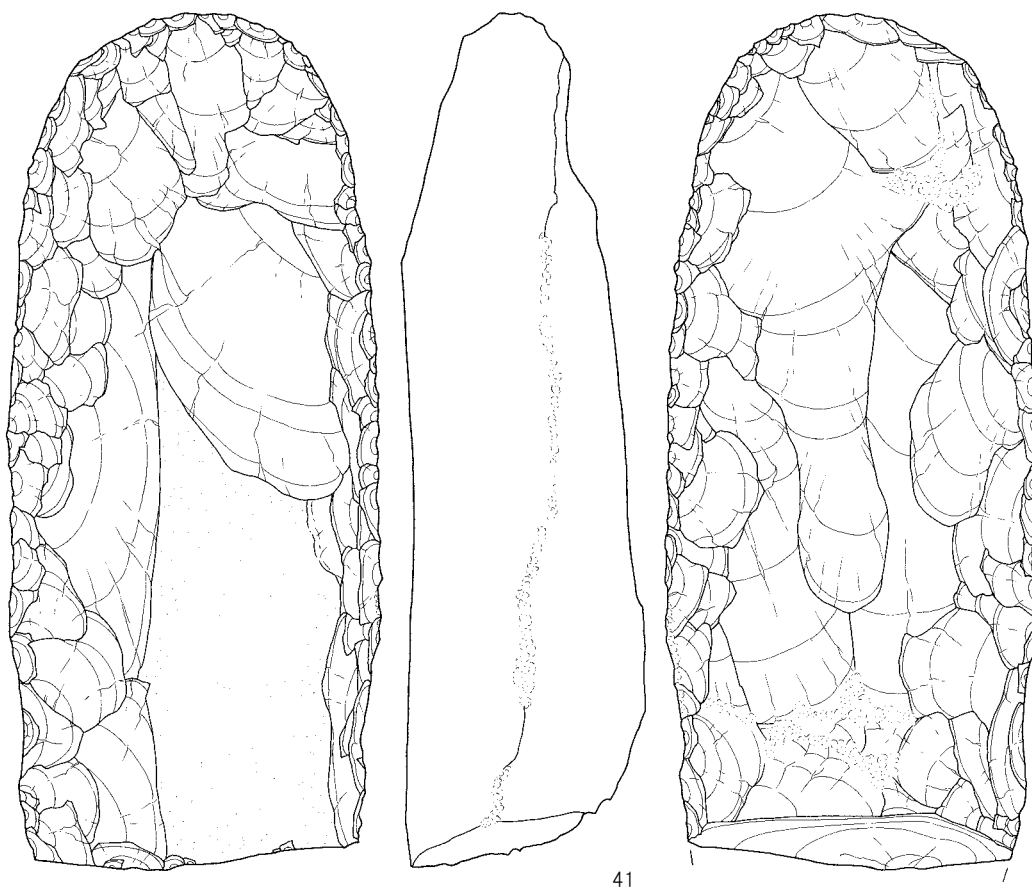
第230図 出土石器 磨製石斧未製品(17)



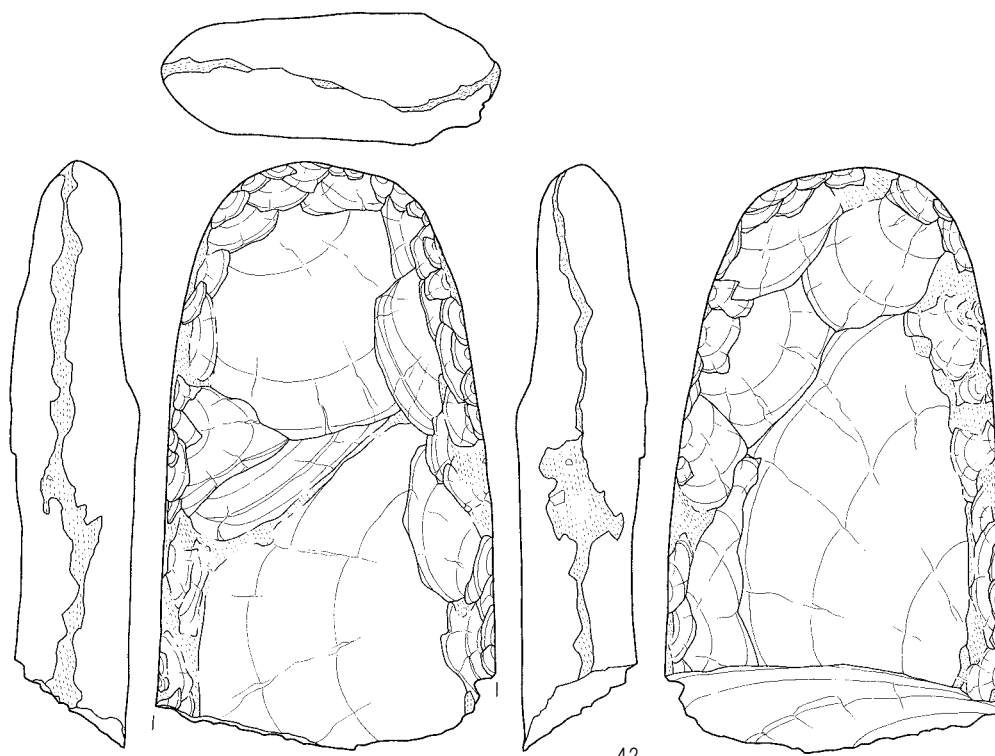
第231図 出土石器 磨製石斧未製品(18)



第232図 出土石器 磨製石斧未製品(19)



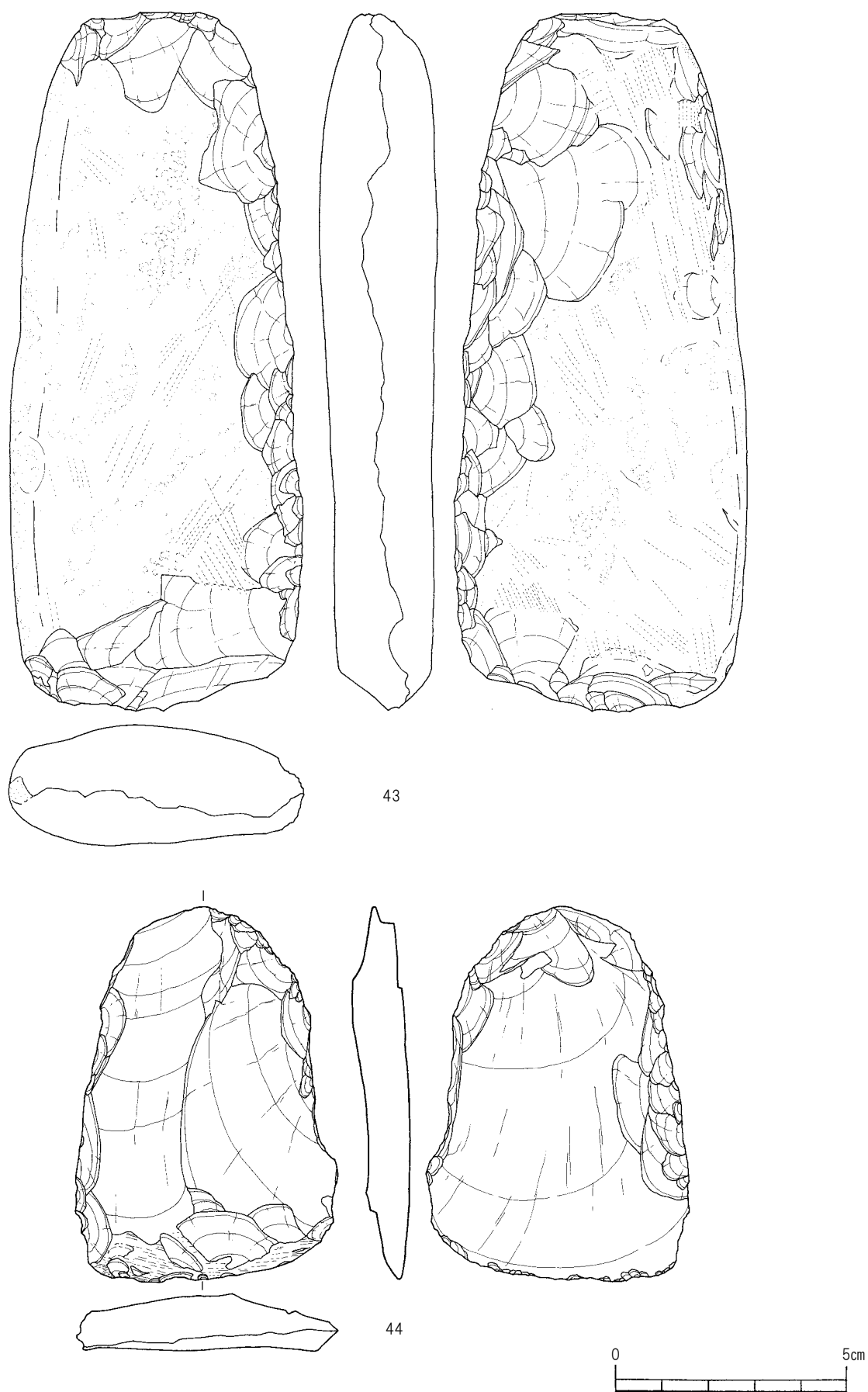
41



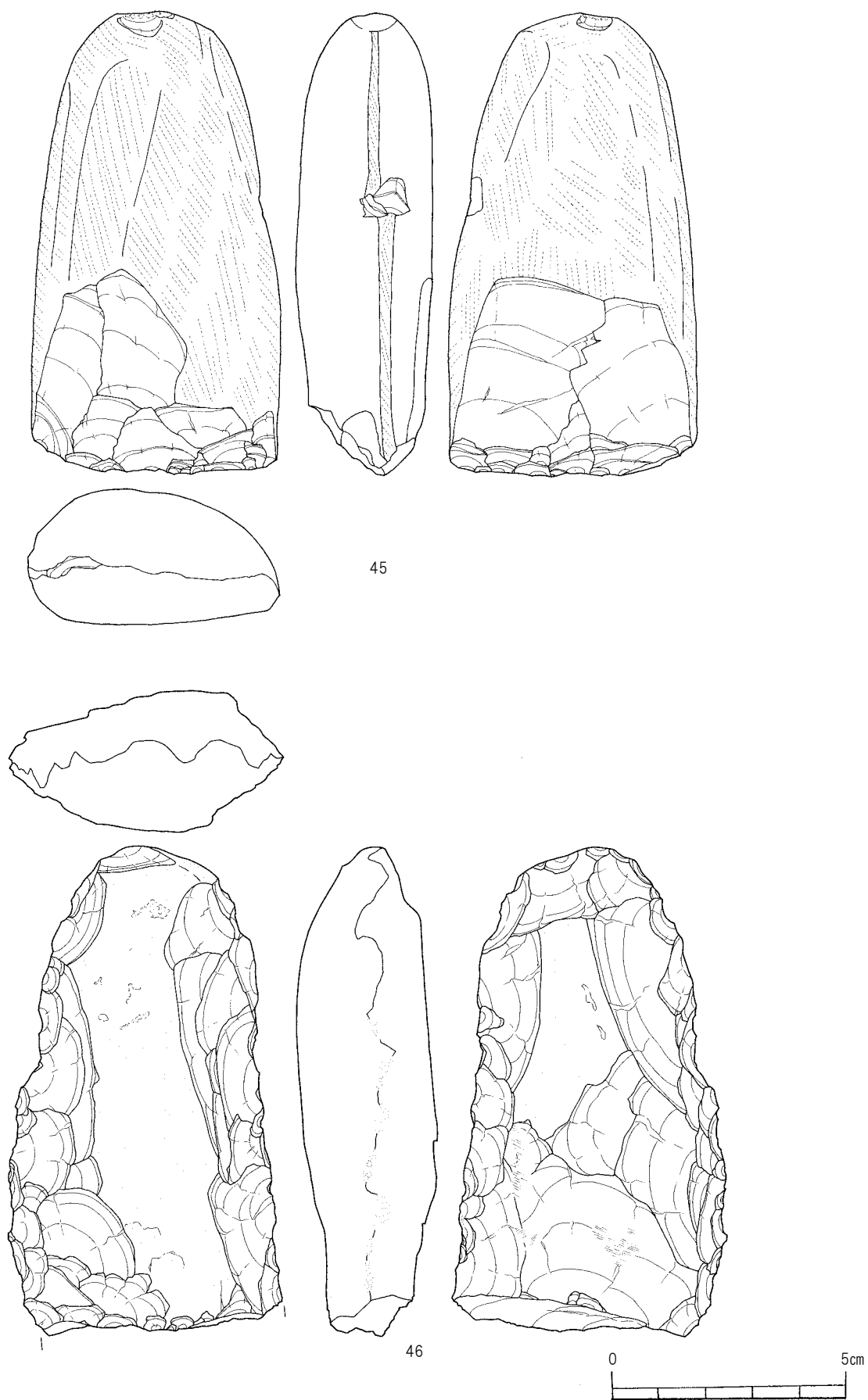
42



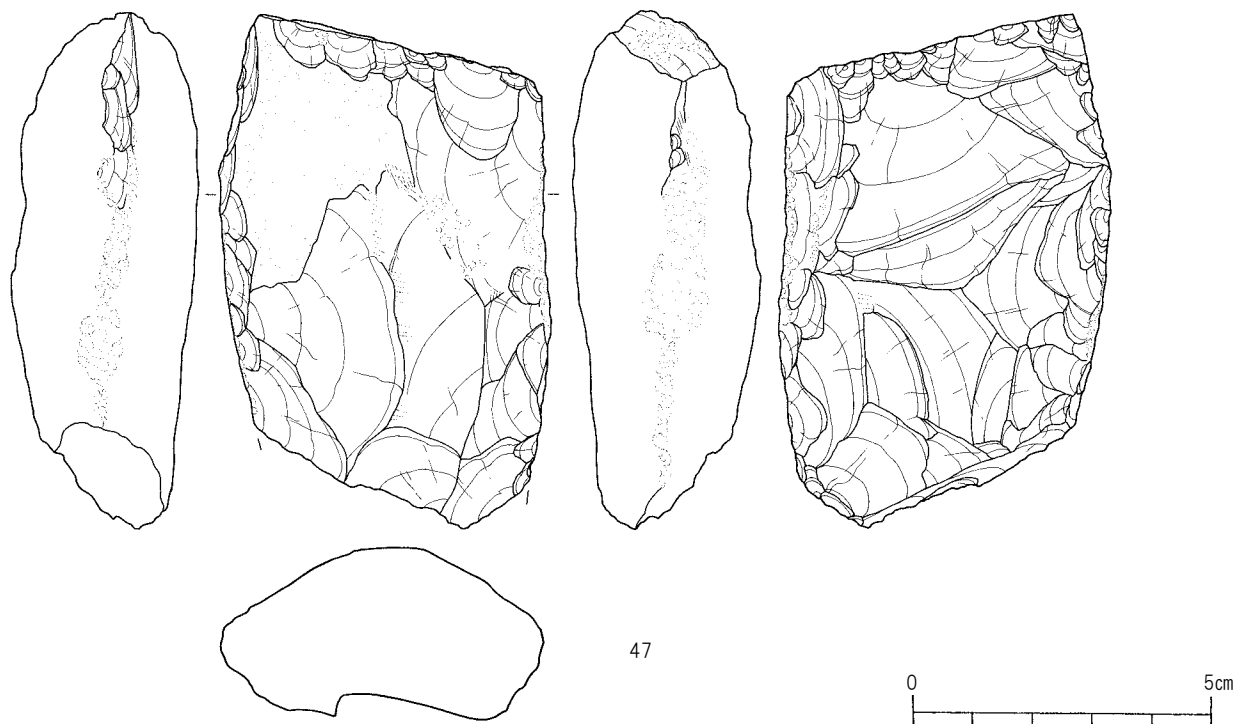
第233図 出土石器 磨製石斧未製品(20)



第234図 出土石器 磨製石斧未製品(21)



第235図 出土石器 磨製石斧未製品(22)



第236図 出土石器 磨製石斧未製品(23)

一方、26～34, 45は胴部下半、刃部を欠損した資料である。12～23と同様な原因での折損であろうが、こちらは柄の中に残ったまま遺跡内に持ち帰られたものであろう。33, 34, 45のように、刃部を再生して作り直す意図もあって持ち帰られたものの、22～32は再加工されることなくそのまま遺棄もしくは廃棄されたものと推定できる。これらのうち、26, 27は乳棒状石斧の刃部欠損品である。この残欠の大きさからすると、元は相当の大きさであったであろうことは容易に推測できる。一時期、このように大きな石斧は、実用品ではない威信財として捉える向きもあったが、この資料で見える限り、実際に使用されて、その使用によって折損したことが分かり、実用品であったことが分かる。ただし、このように超特大サイズの石斧は出土量も極めて少ないことから、特殊な対象物を伐採することに使われたのではないかと推測できる。

33～47は未製品として分類したものである。これらは大きく3つに分類できる。

ひとつは、33～37, 43, 45, 46, 47のグループである。これらは、折損品を再生するための調整途上で終わっているものである。33, 34は頭部の残欠であるが、2や3のようなサイズに再生するため、厚みを減ずる整形剥離を折断面から加えたが、その剥離がうまくいかなかったために遺棄されたのであろう。35～37は刃部の、43, 45は刃部を含めた胴部下半の、大きな欠損を再生するための調整剥離に失敗した結果と推定できる。46, 47は、一旦は使用した完成品の石斧ではなく、新しい石斧を作成する途上で折損したものを、当初のサイズより小さく作り直そうとして失敗したものであろう。なぜなら、いずれも整形剥離と周縁調整で終わっており、敲打調整や研磨が施された痕跡がない。整形剥離の様態や形状の面で考えると、このサイズを意図して整形されてはいないからである。

つぎに、33～40のグループである。これらは、新品の石斧を作る途上、整形剥離、周縁調整の段階で終わっており、敲打、研磨が施されていない。33については先に述べた。39、40はさして瑕疵はないように見受けられるが、39は胴部下半の厚みのバランスに難があり、40は刃部中央と頭部左の周縁調整の失敗が原因で遺棄されたのであろうか。なお、この39、40を打製石斧に分類せず、磨製石斧未製品として分類したのは、側面形状と頭部形状からの判断である。このサイズの打製石斧は側面観の器軸は緩い湾曲を示し、磨製石斧は直線である。頭部形状では、打製石斧には挟りが入るが、磨製石斧には入らない。39、40の両者は側面観の器軸も直線で、側縁も挟りが入らず直線である。

最後が、41、42、44のグループである。これらは、新品の石斧を作る途上、整形剥離、周縁調整が終わり、敲打や研磨の工程で失敗したものである。41、42は側縁に敲打調整が残るものの、器面全体には敲打が施されていないことから、おそらく側縁の敲打調整の際折損したものであろう。44については先に述べた。

3 打製石斧

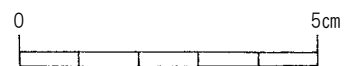
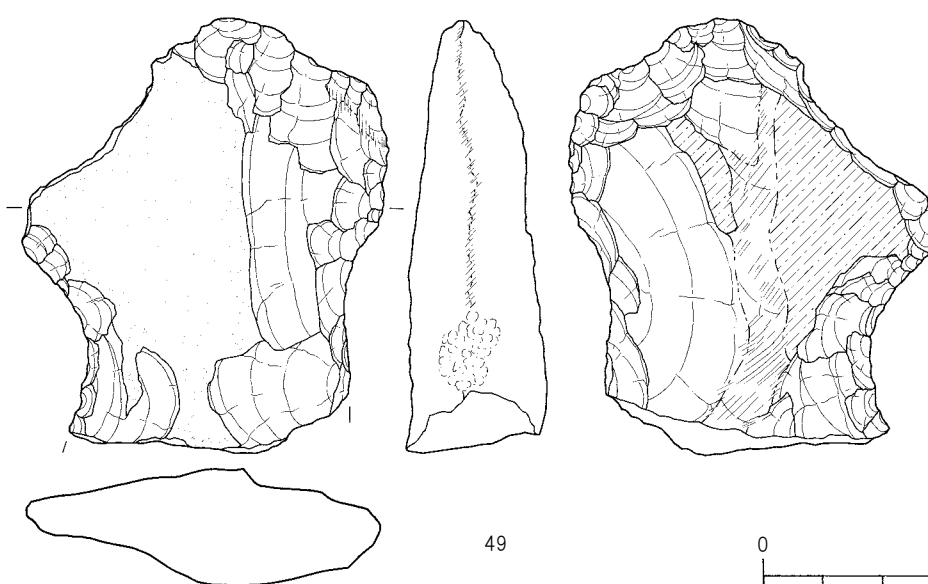
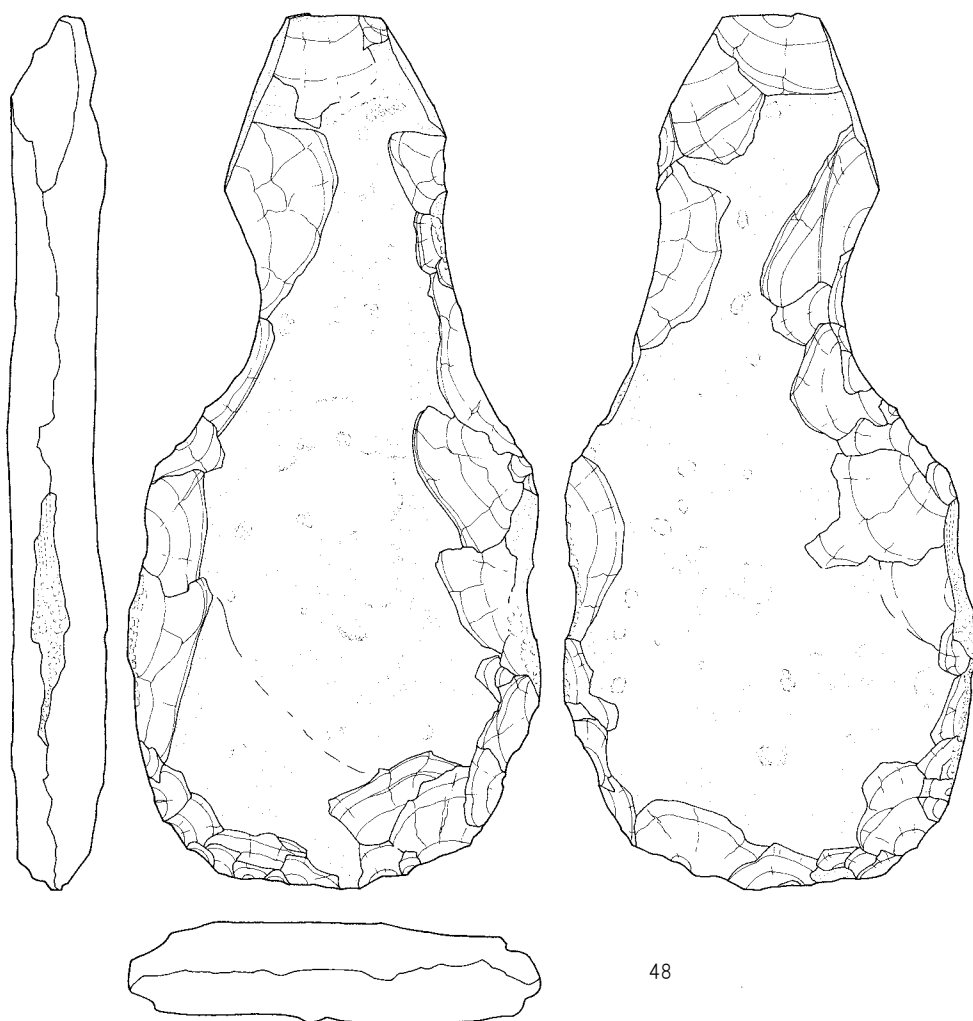
ここで示したのは48～96までの49点である。「石斧」の名称を付けてはいるが、樹木の伐採、加工に使用される道具を意味せず、従来の「打製石斧」の名称を借用したに過ぎない。機能・用途から名称を付与するならば、従来の「石鋬」がもっともふさわしいであろう。以下、その理由を述べる。

まず第一にその石質である。木を対象とする磨製石斧は、片麻岩、石英脈岩、頁岩等の変成岩が選択される。なぜなら、変成岩は比重が大きく、一定の大きさに対して十分な重量を確保でき、重いものほど衝撃力が強くなり、伐採等の際に有利に働くからである。同時に、変成岩は粘りが強く、伐採等に伴う衝撃にも耐えうる強度を有するからである。この49点のほとんどは安山岩であり、変成岩のような比重、強度を持たない。木を対象物にするには、安山岩製の道具は脆弱である。

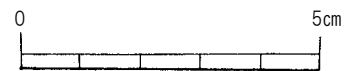
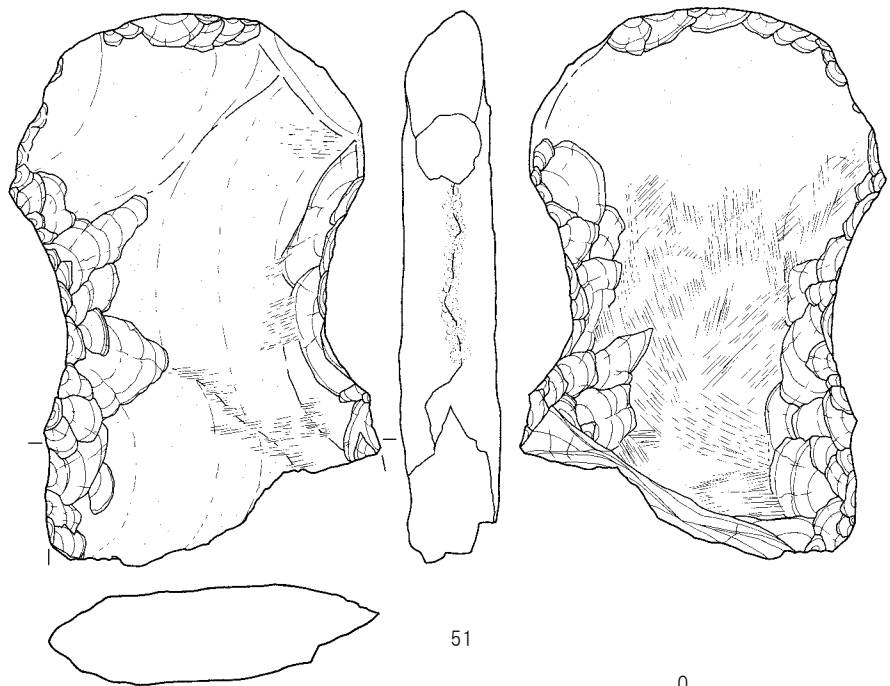
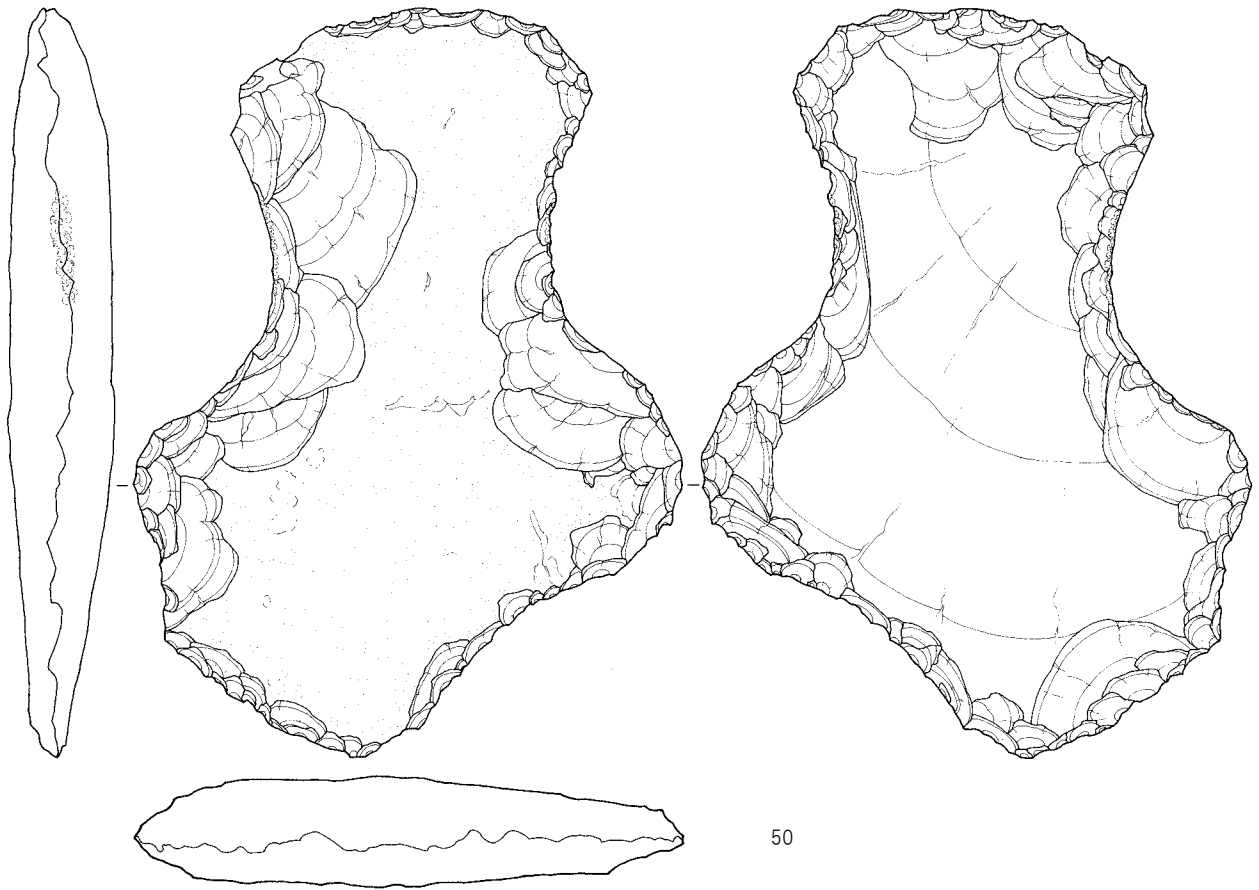
次にその平面形状である。木を対象とする磨製石斧は、伐採等に伴う衝撃を吸収するための頭部を包み込むようなソケット状の柄を必要とするため、着柄しやすい直線的な形状を必要とするから、そのような頭部形状をしている。この49点は側縁に挟りが入っており、ソケット状の柄は付いていないと判断できる。換言すれば、伐採ほどの衝撃が加わらないから、ソケット状の柄は必要なかったといえる。この49点は、挟り部を利用して、棒もしくは角材状の柄に緊縛されるような着柄が推定できる。

今ひとつは、刃部である。磨製石斧は、伐採等に用いられるので、鋭くかつ多少の衝撃では刃こぼれしないような頑丈さを兼ね備えるよう、研磨によって刃部形成されている。一方、この49点は鈍く脆い刃しか持たない。しかし、ほとんどの刃部には使用痕と思われる磨耗や細かな剥離が見られる。このような磨耗、小剥離をもたらす対象物は地面であろうと考えられている。すなわち、土を耕す作業に使用した結果の使用痕である。

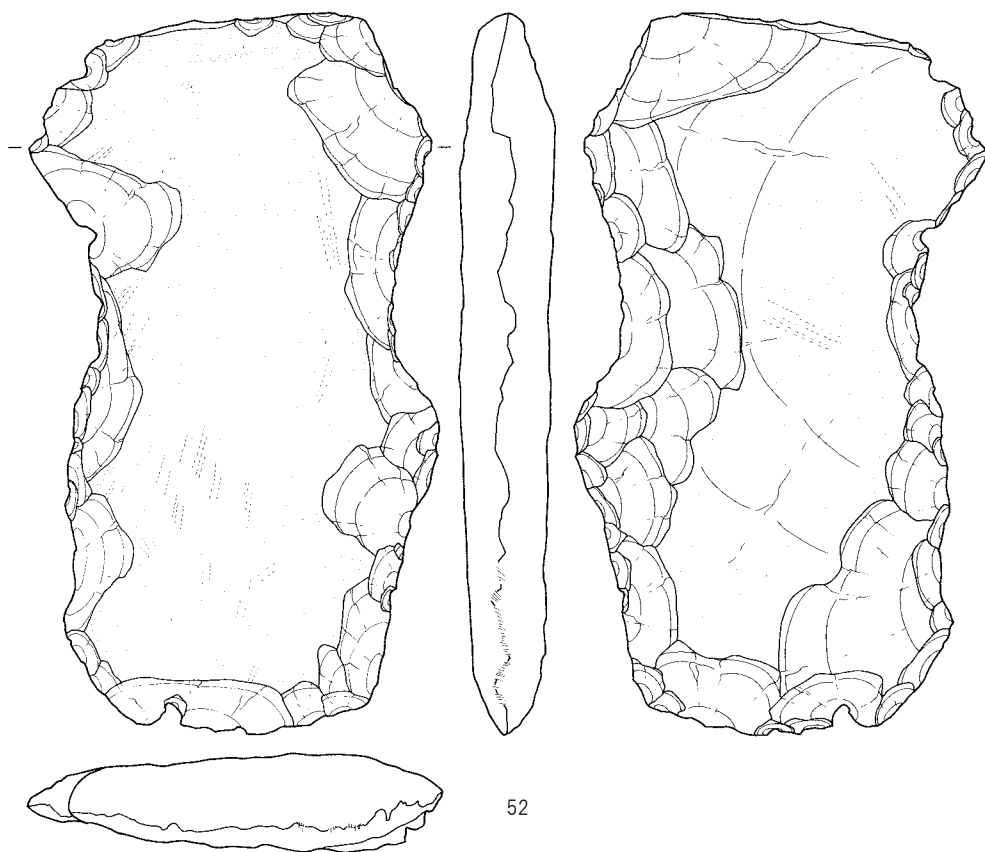
対象が土であれば、安山岩のような脆い石質でも耐えられるし、着柄のありようもふさわしいものである。故に、この49点は機能、用途から見た場合、「石鋬」と称されてきた石器と同じであると考えられる。「打製石斧」の名称はその形態及び製作の方法からの分類項である。



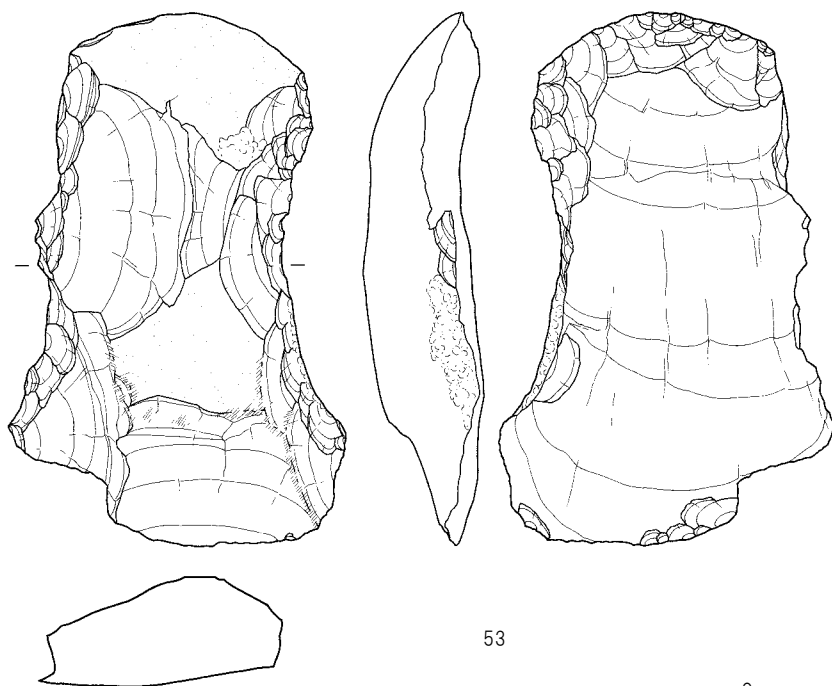
第237図 出土石器 打製石斧(1)



第238図 出土石器 打製石斧(2)



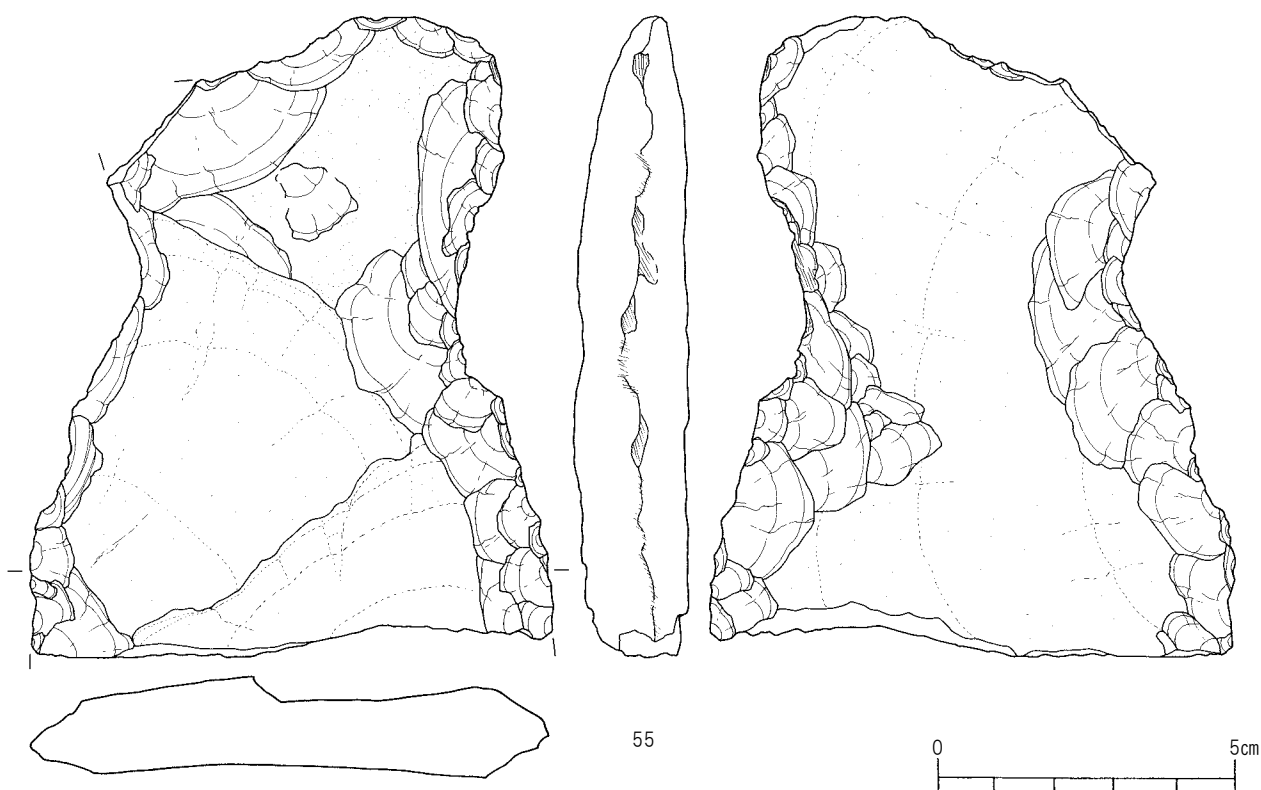
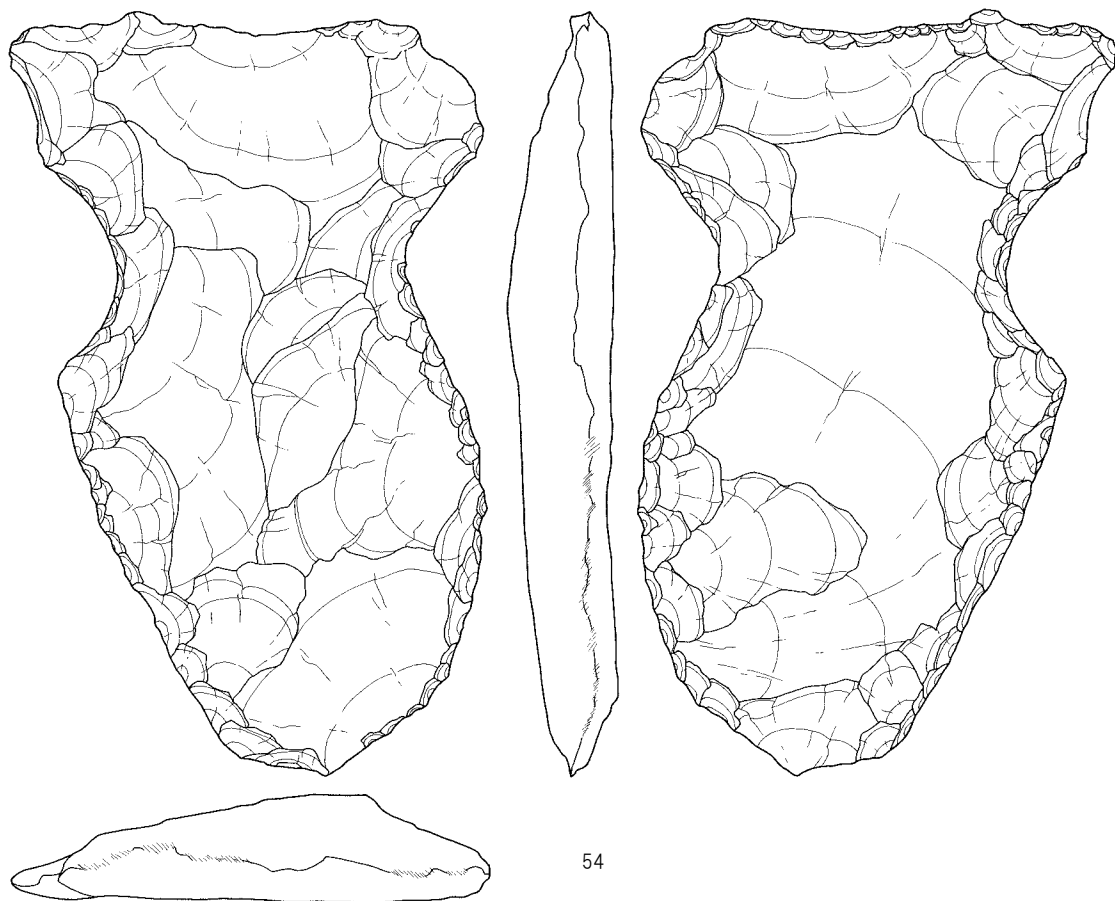
52



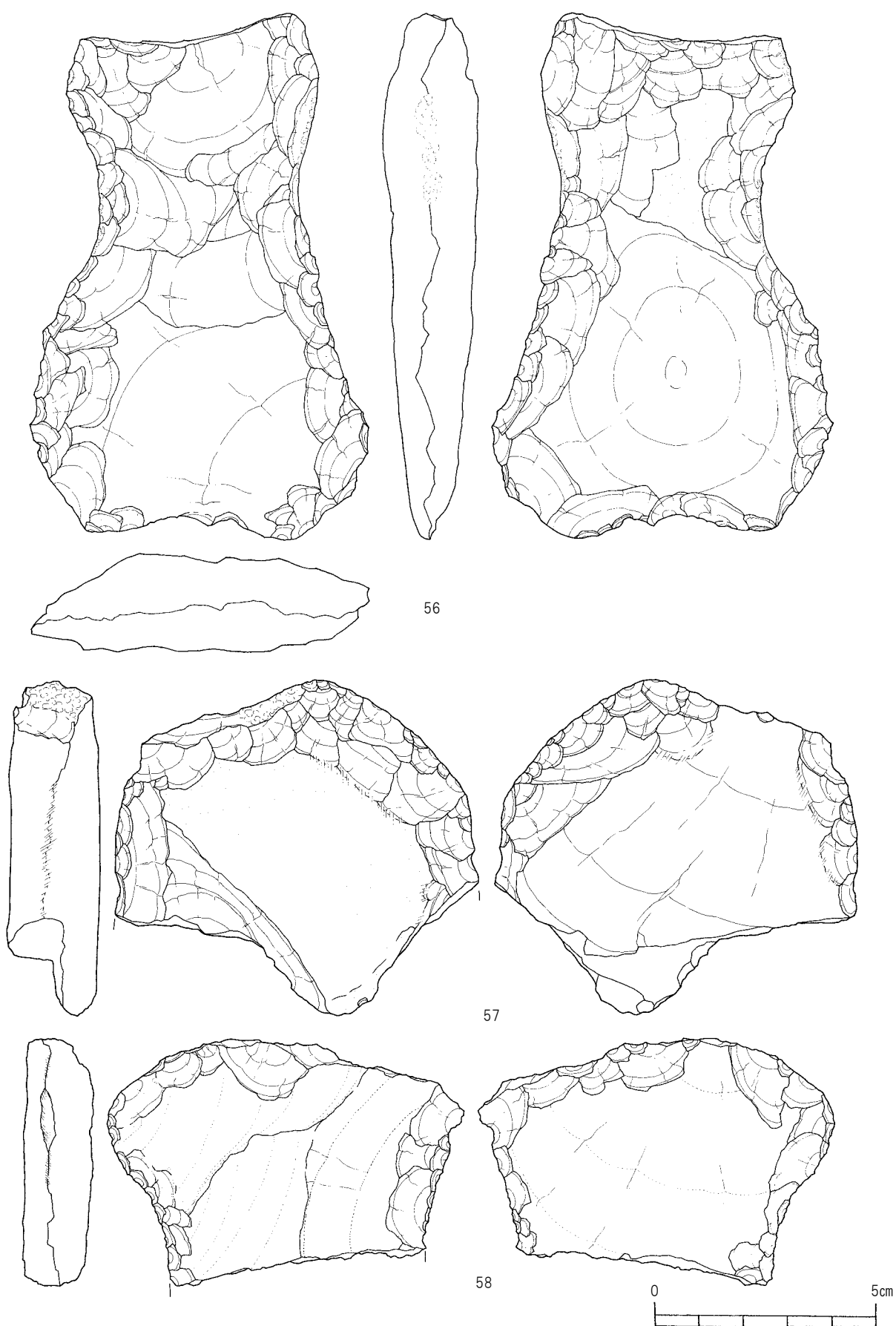
53



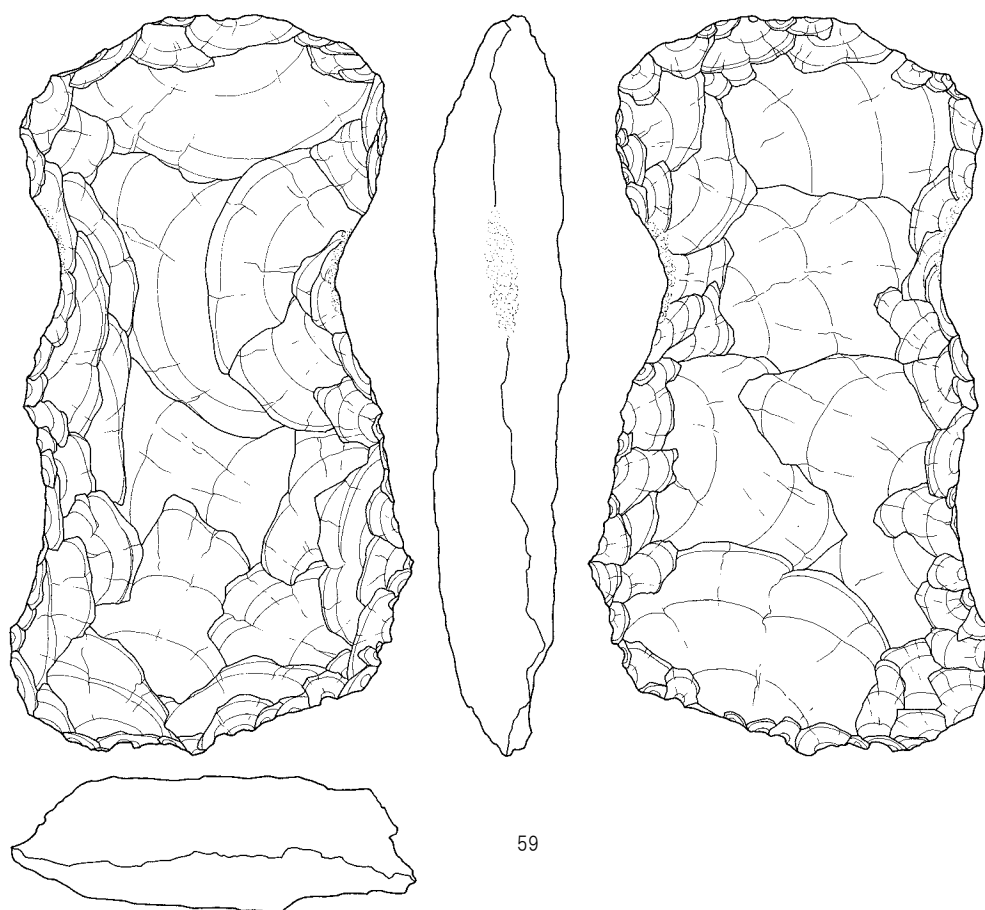
第239図 出土石器 打製石斧(3)



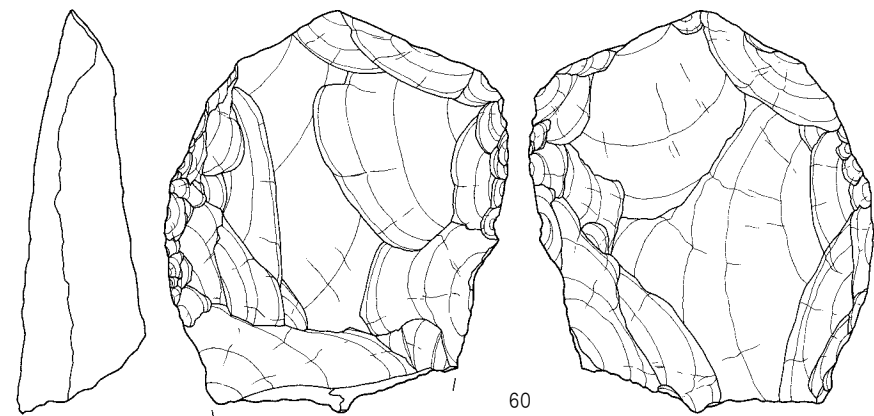
第240図 出土石器 打製石斧(4)



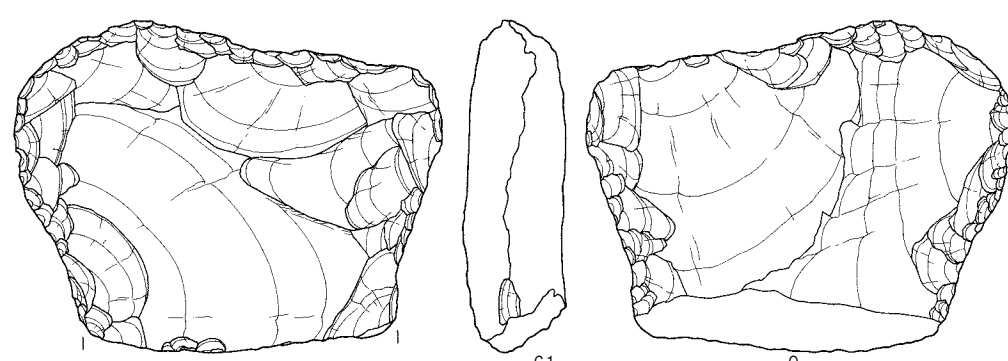
第241図 出土石器 打製石斧(5)



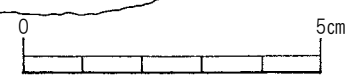
59



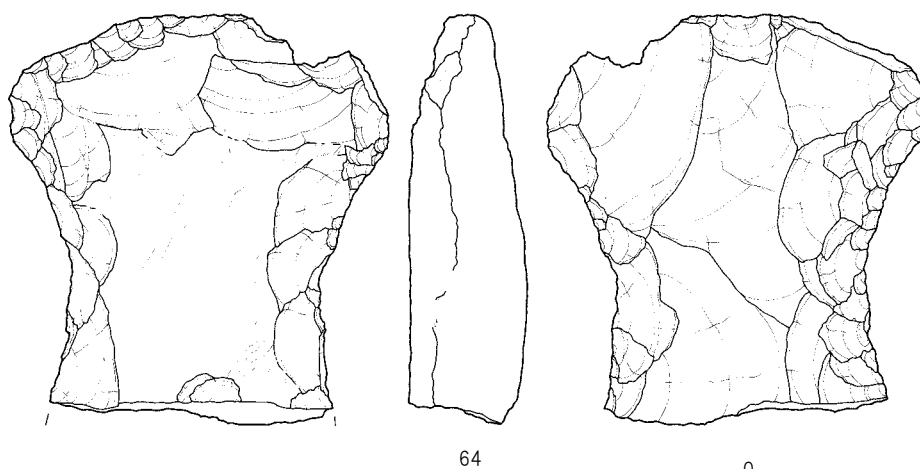
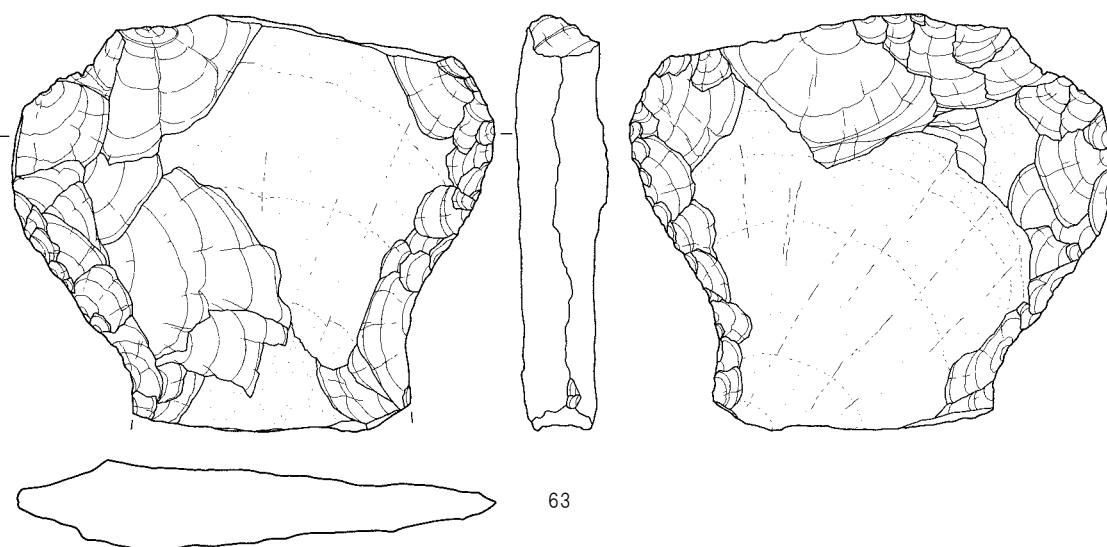
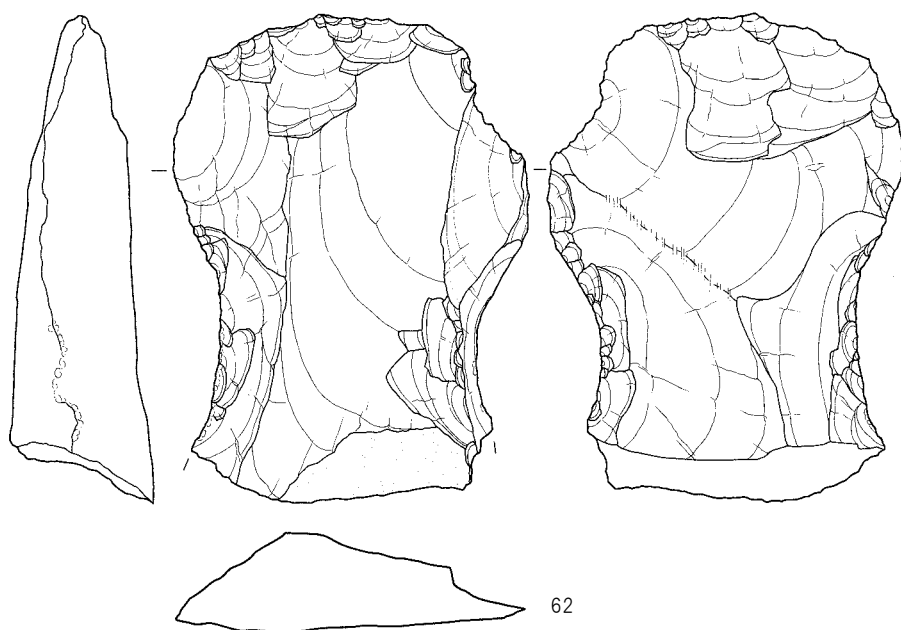
60



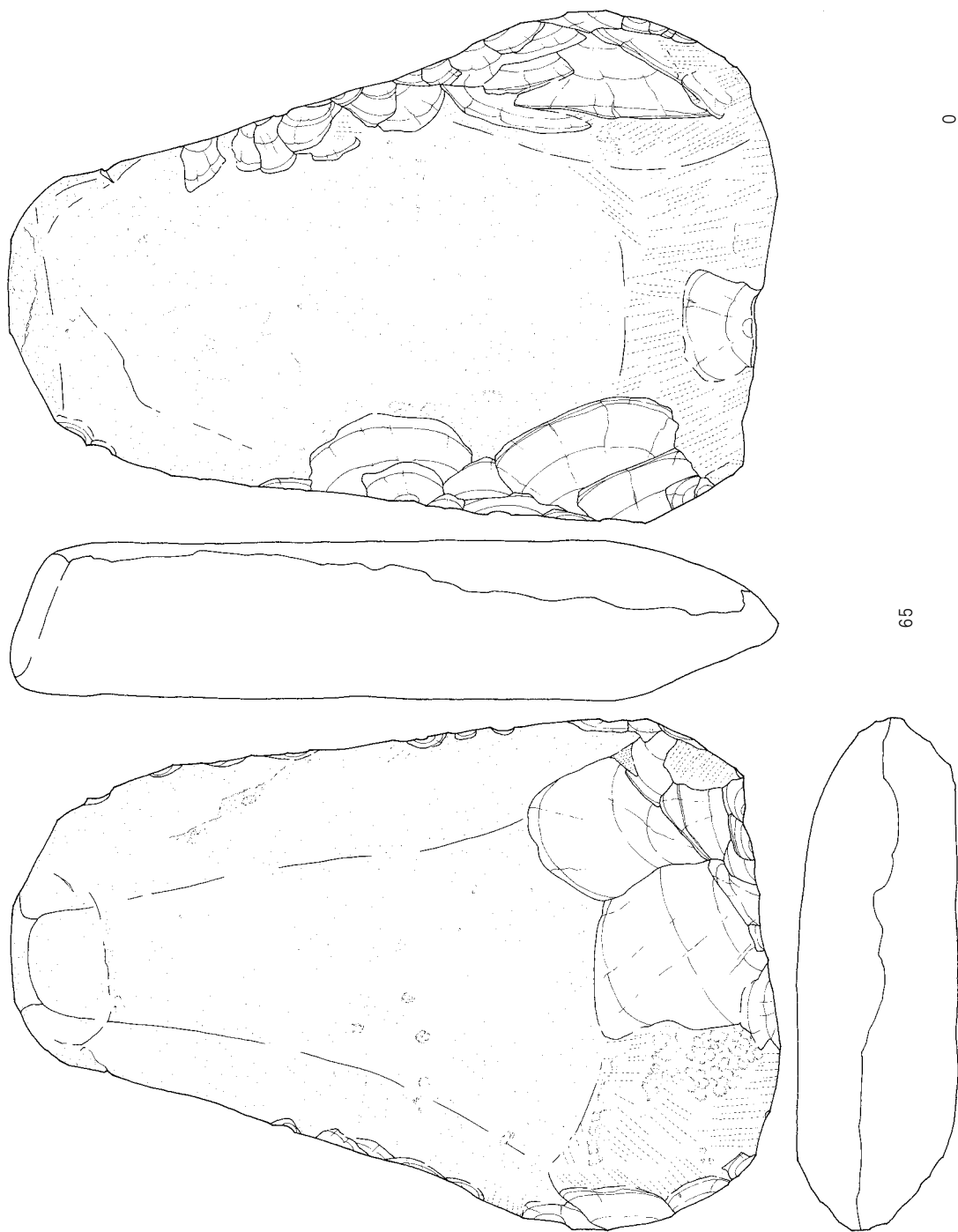
61



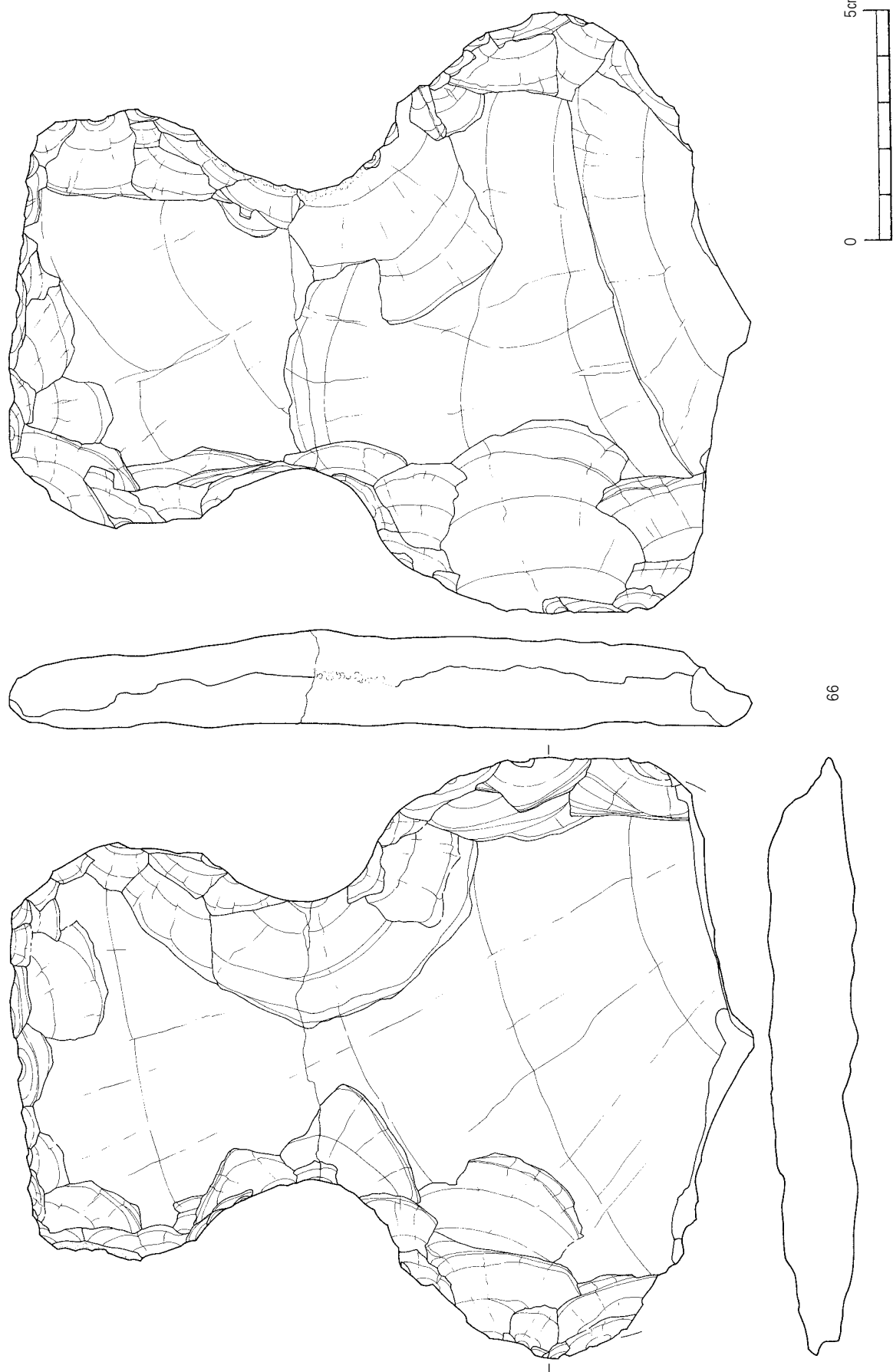
第242図 出土石器 打製石斧(6)



第243図 出土石器 打製石斧(7)

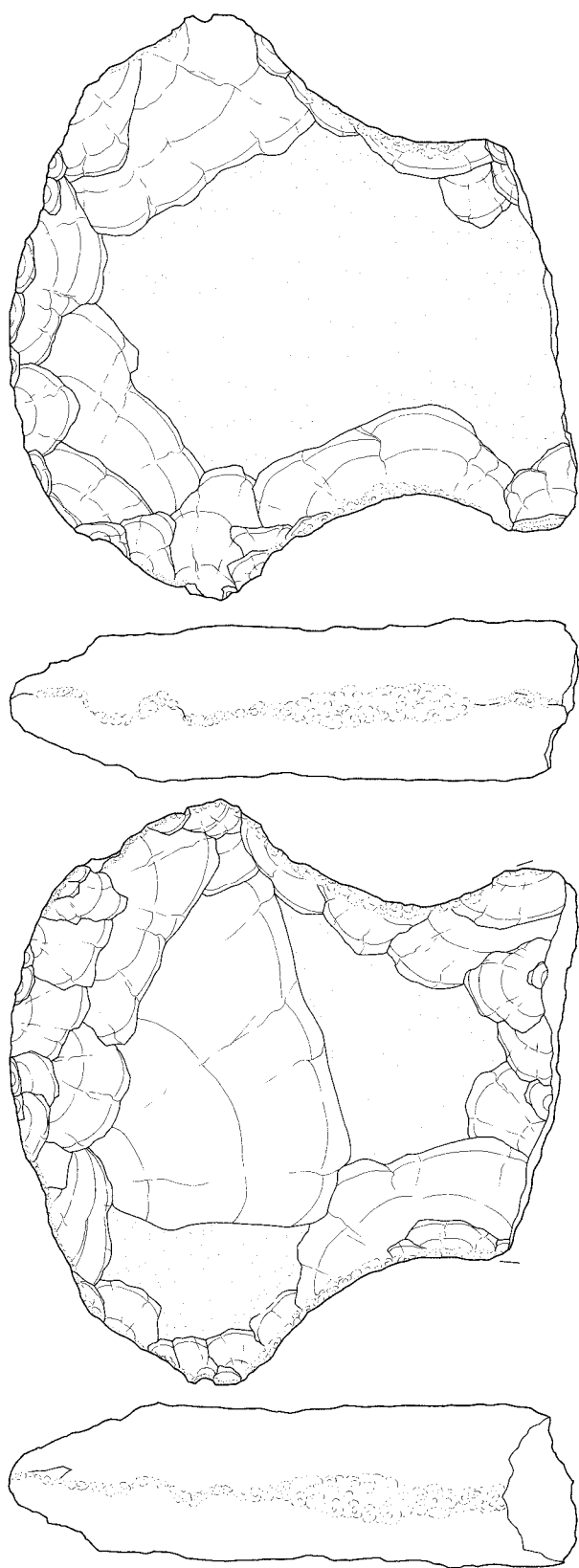


第244図 出土石器 打製石斧(8)

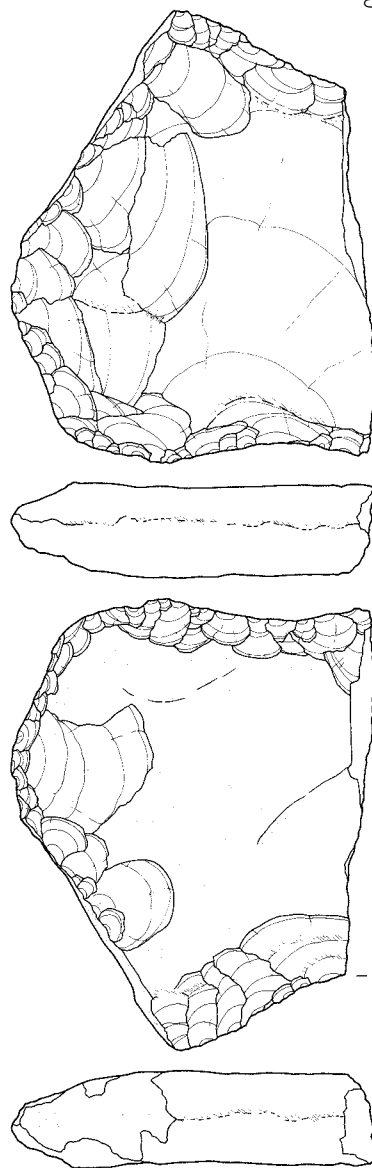


66

第245図 出土石器 打製石斧(9)



67



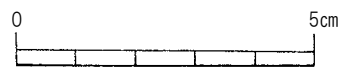
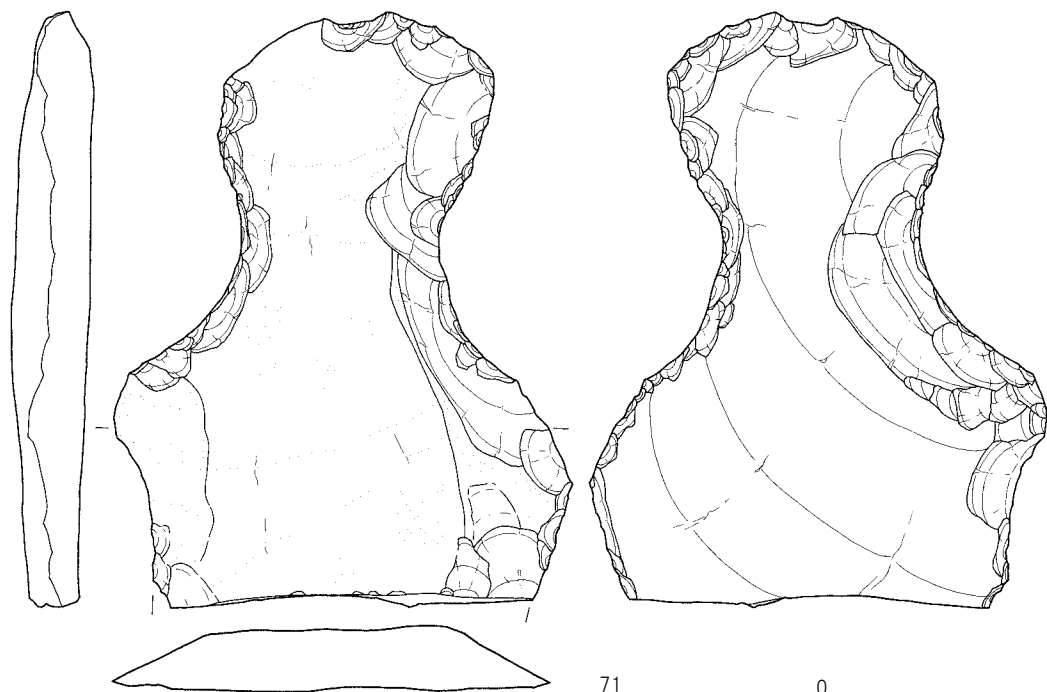
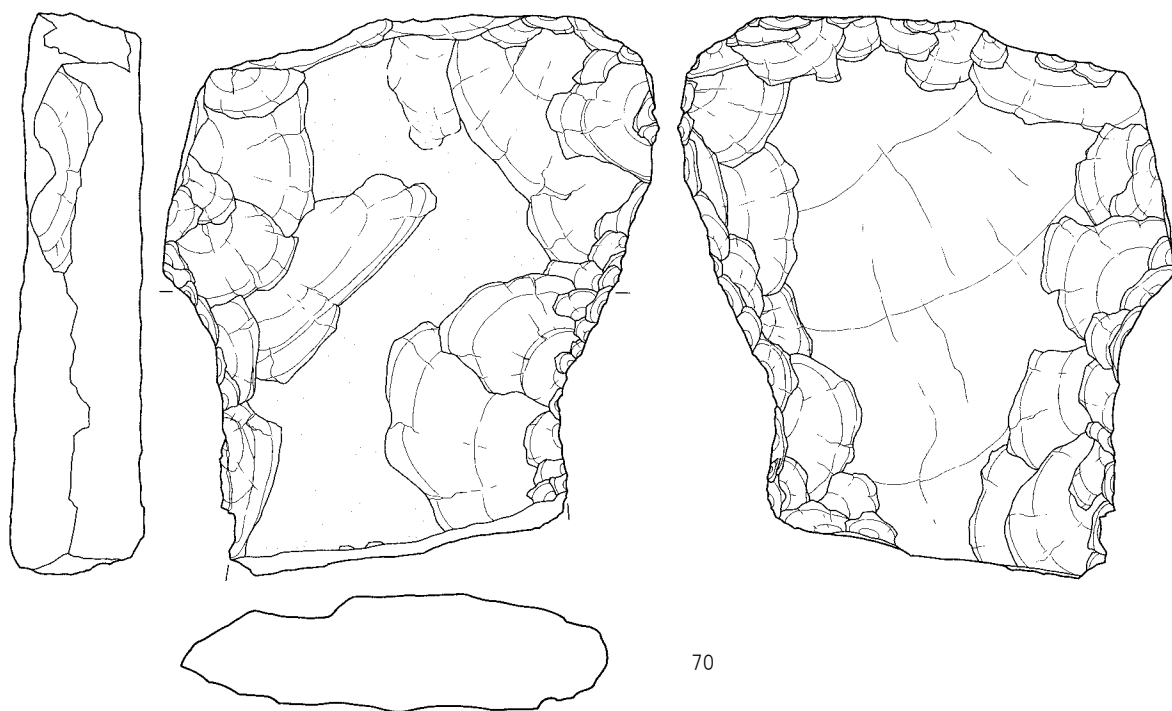
68



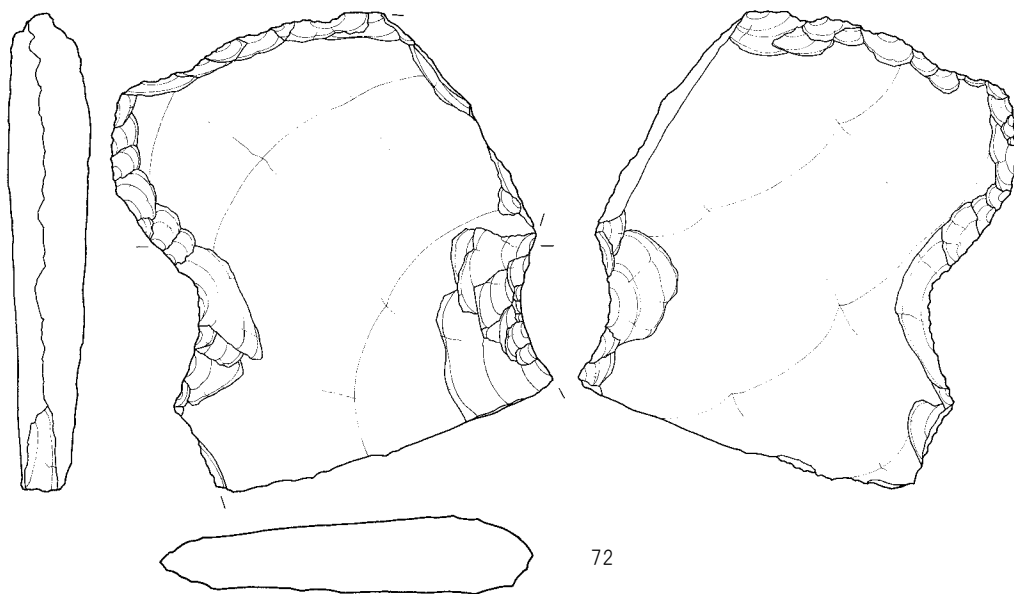
第246図 出土石器 打製石斧(10)



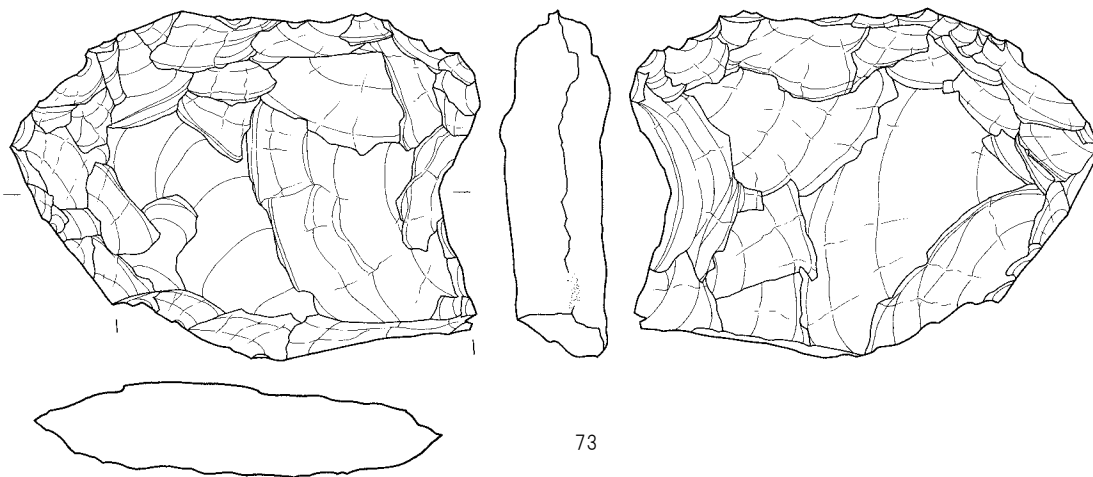
第247図 出土石器 打製石斧(1)



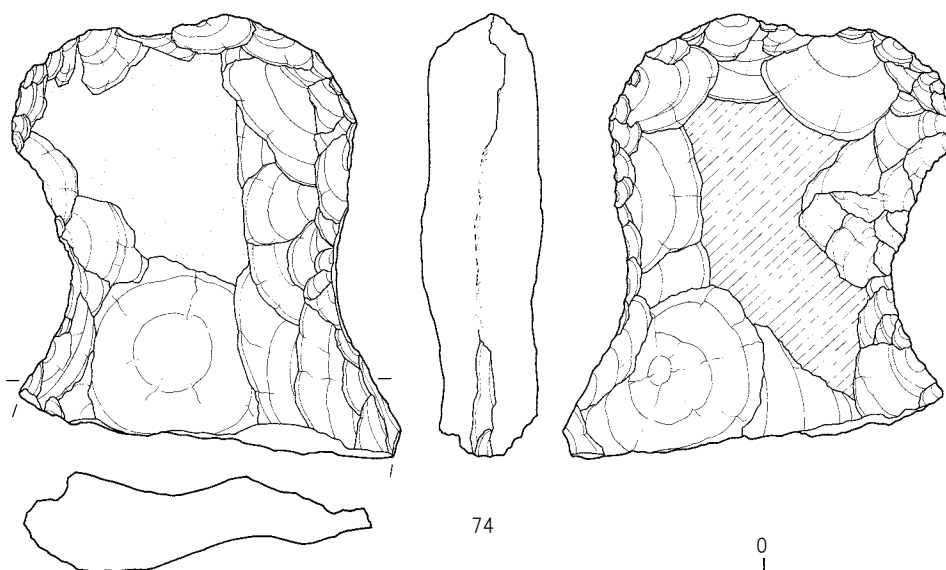
第248図 出土石器 打製石斧(12)



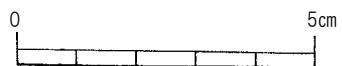
72



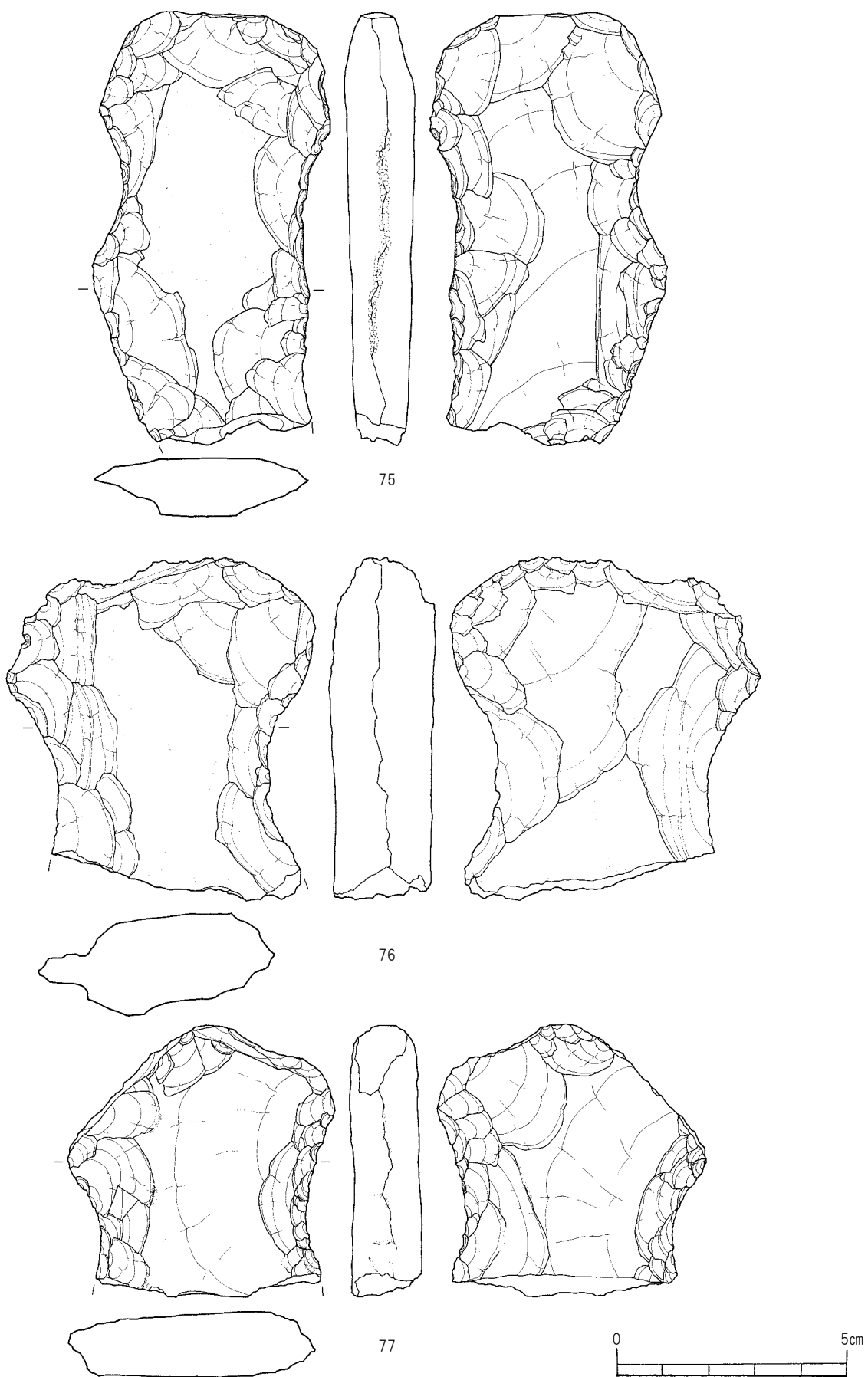
73



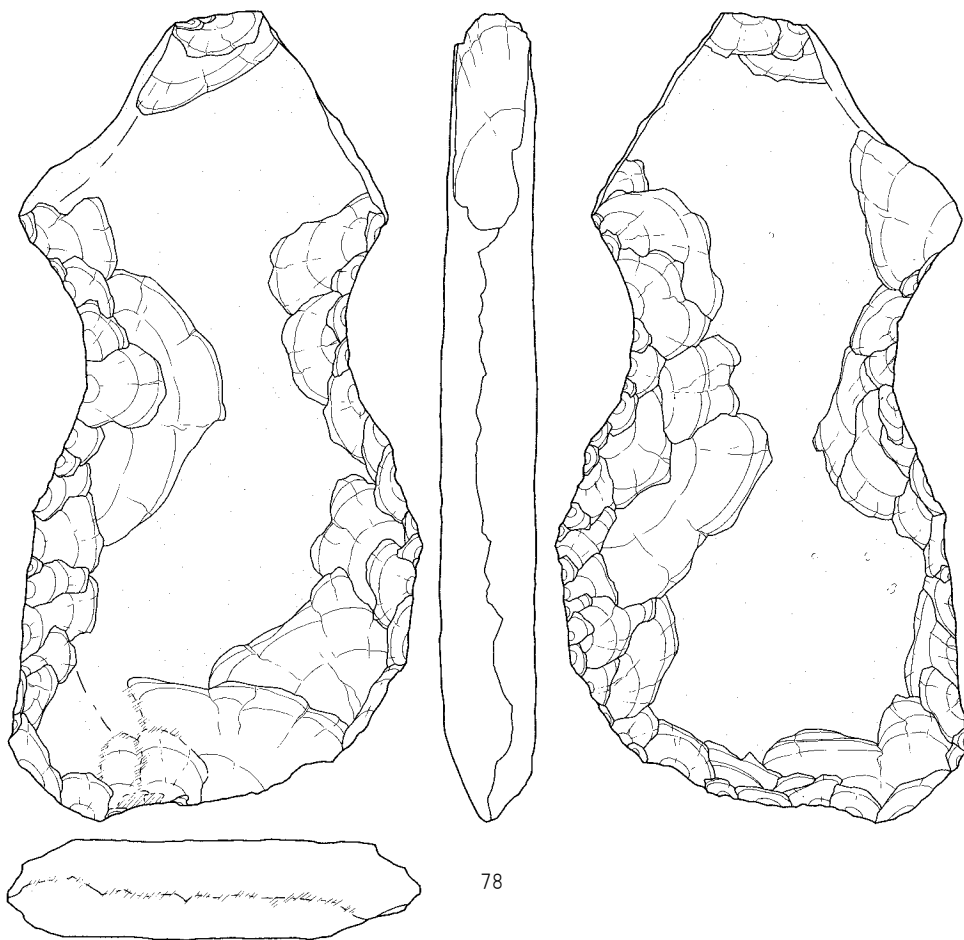
74



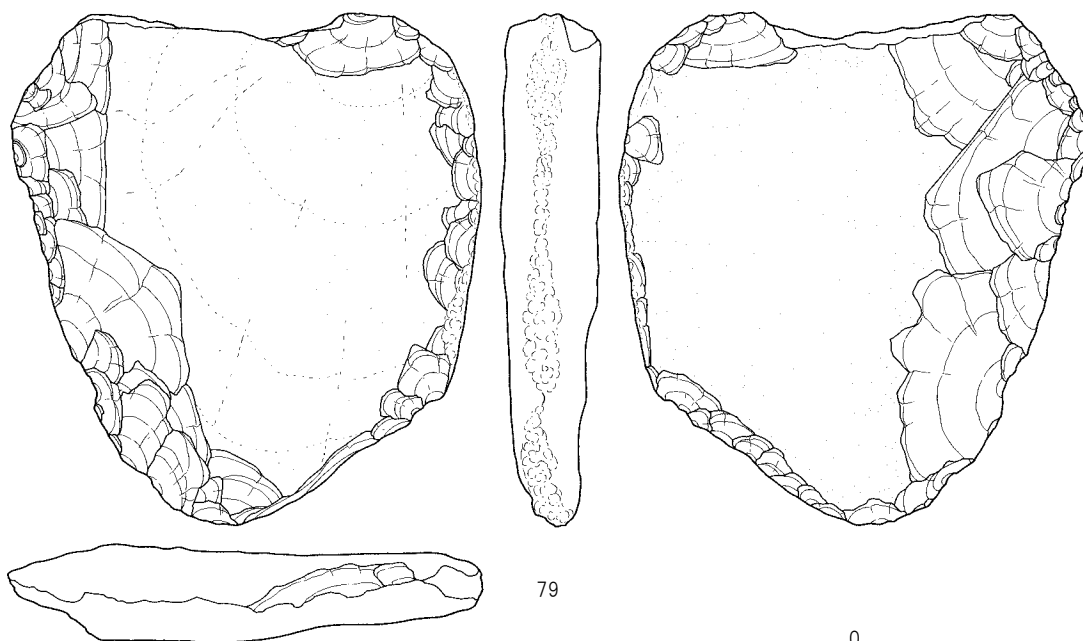
第249図 出土石器 打製石斧(13)



第250図 出土石器 打製石斧(14)



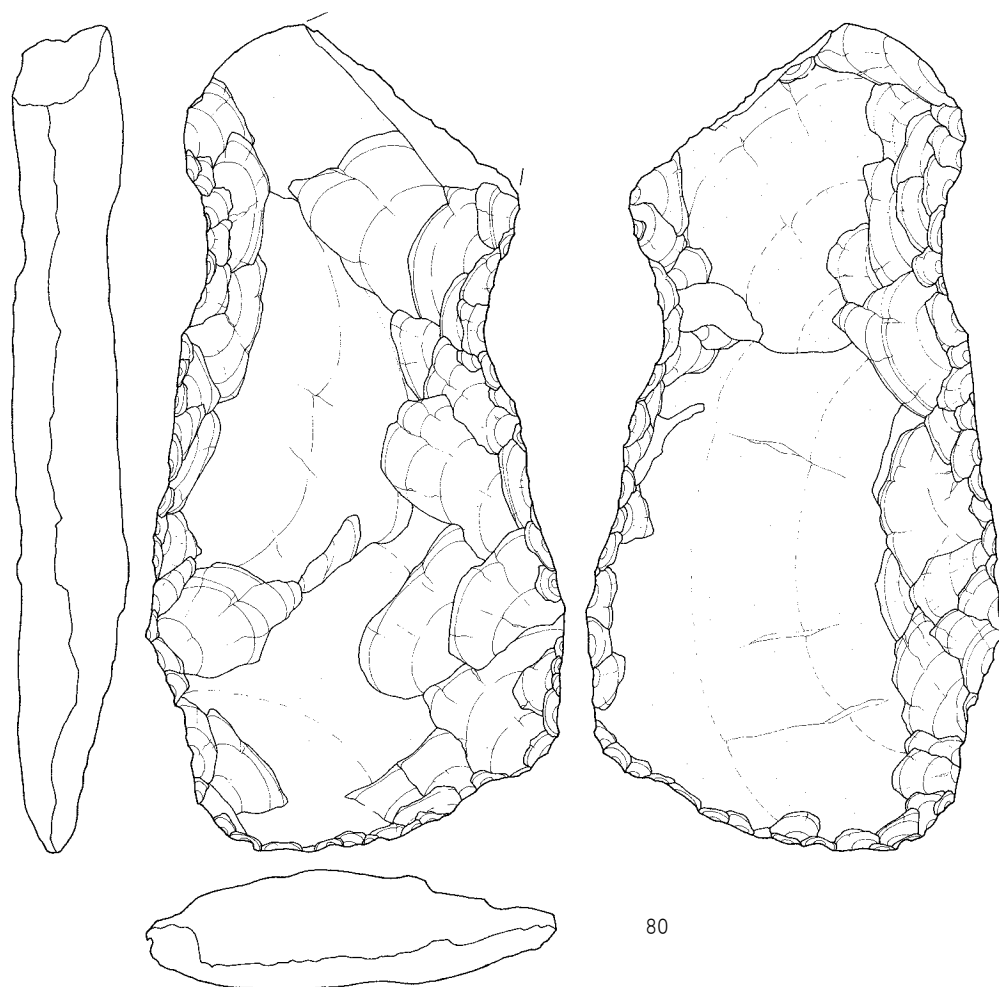
78



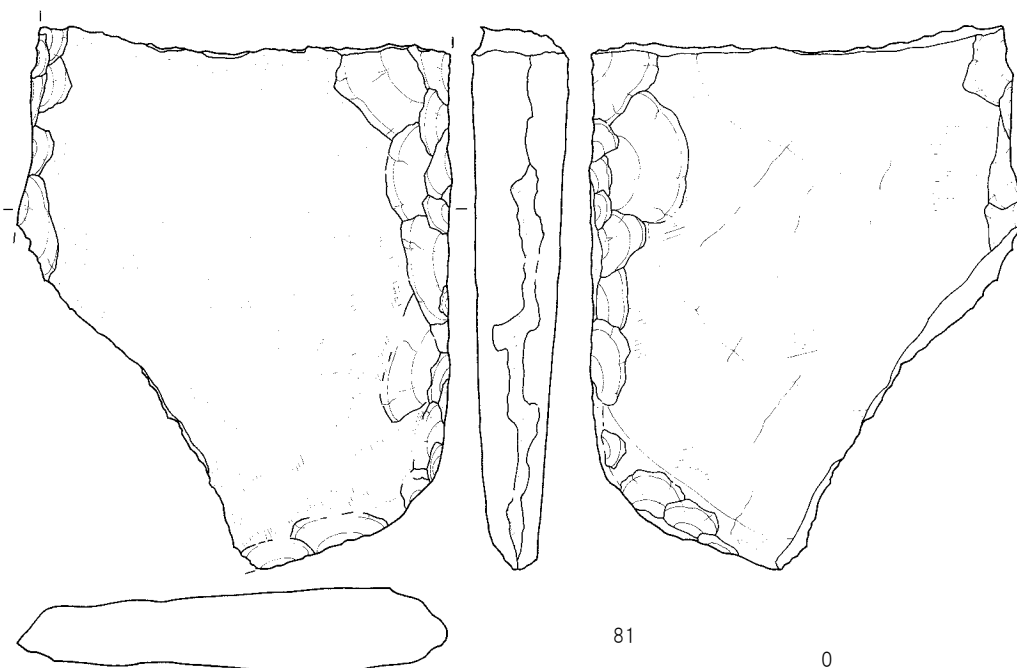
79



第251図 出土石器 打製石斧(15)



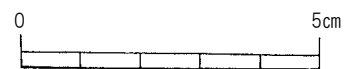
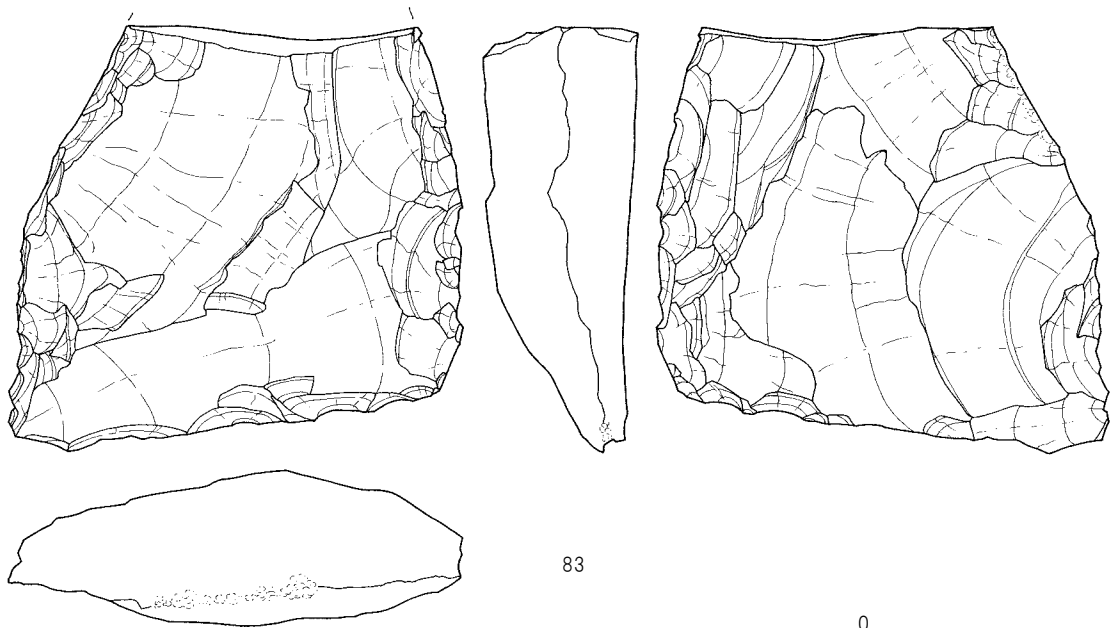
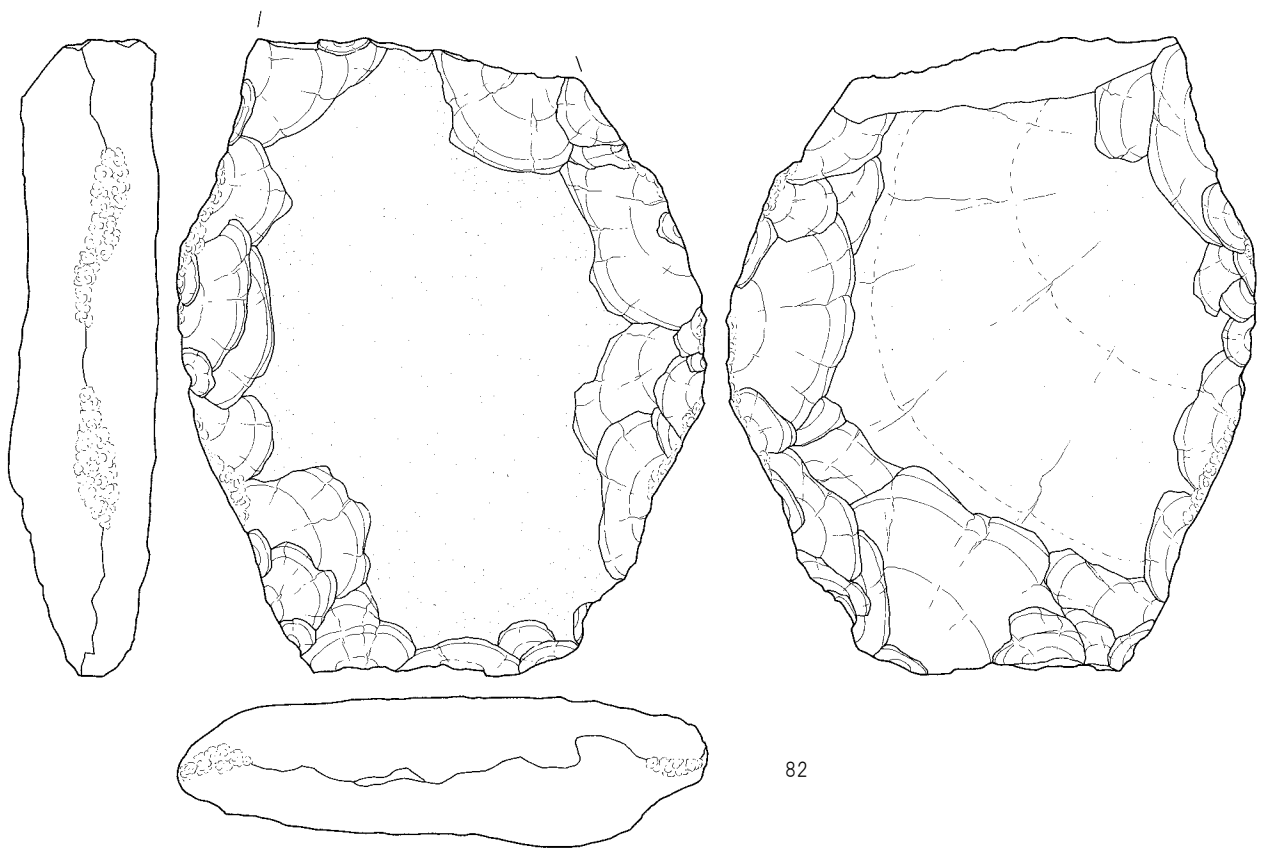
80



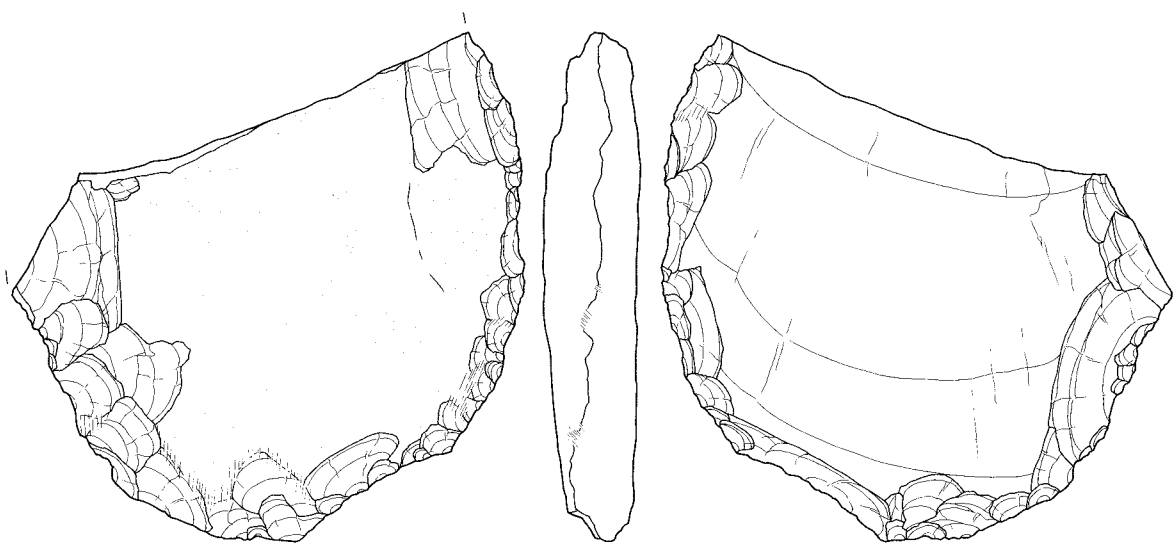
81



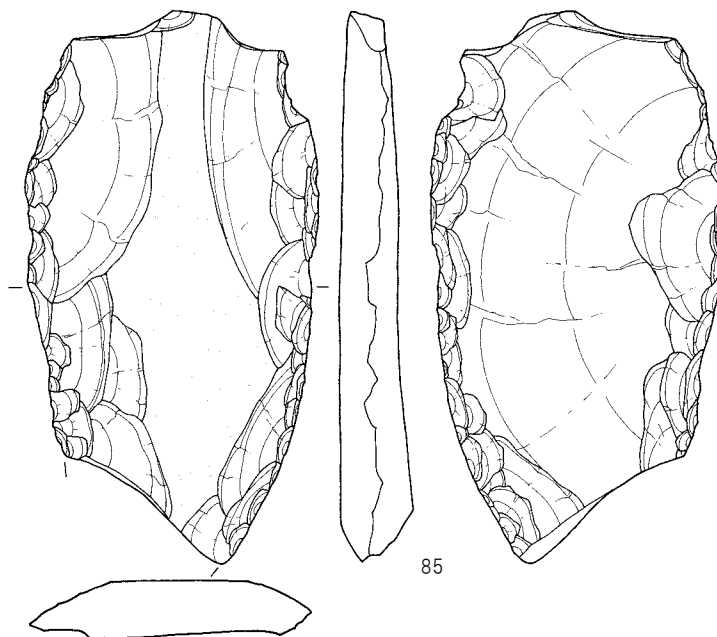
第252図 出土石器 打製石斧(16)



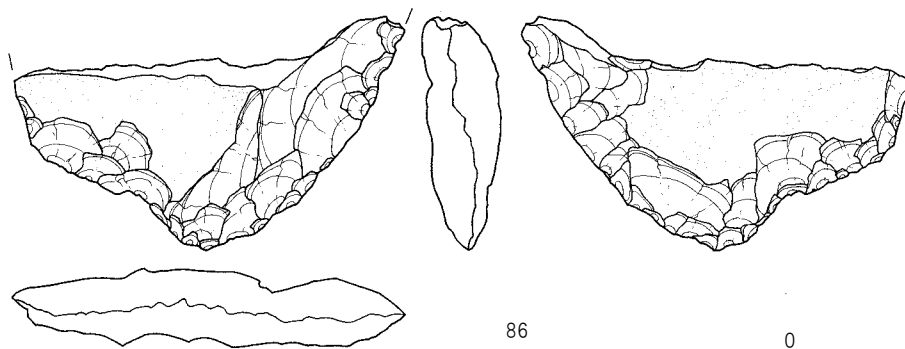
第253図 出土石器 打製石斧(17)



84



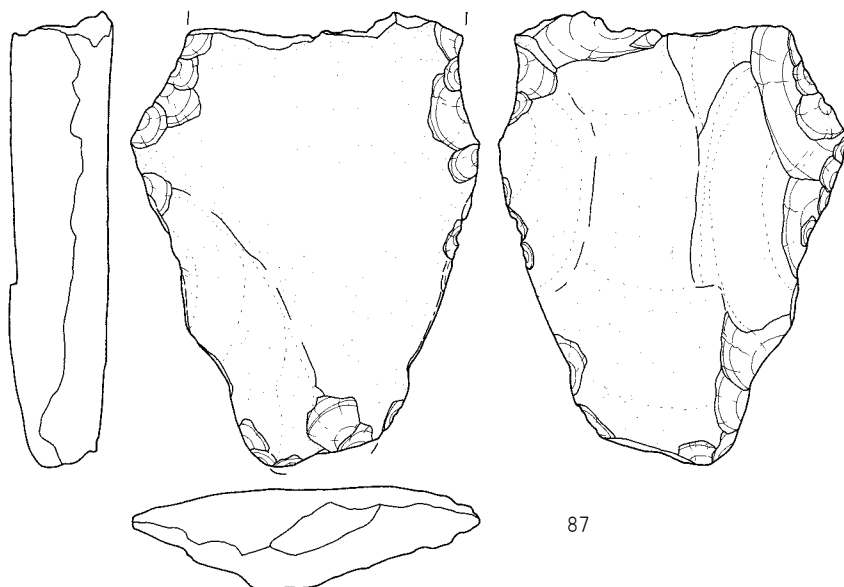
85



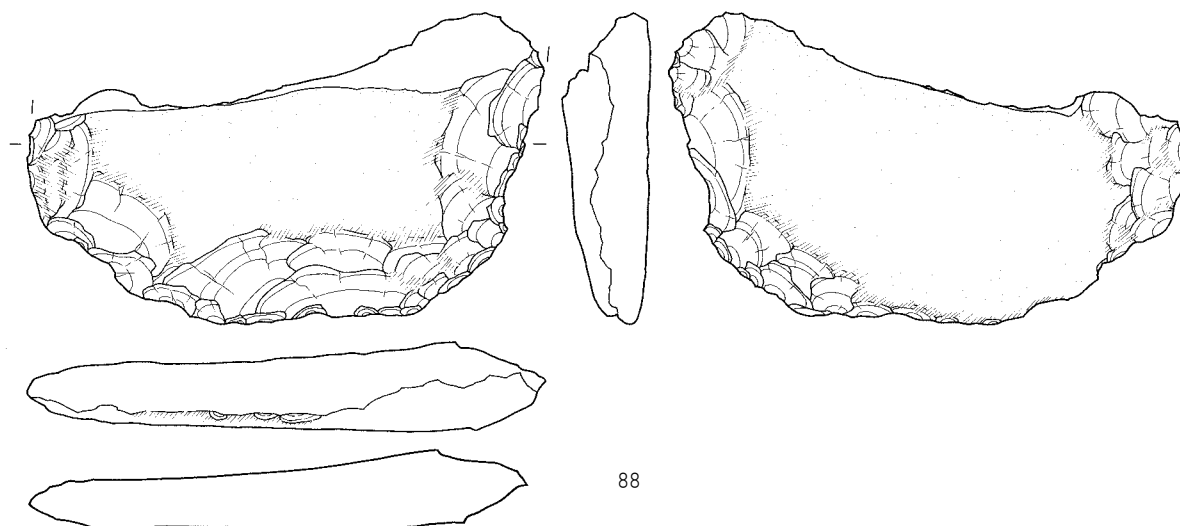
86



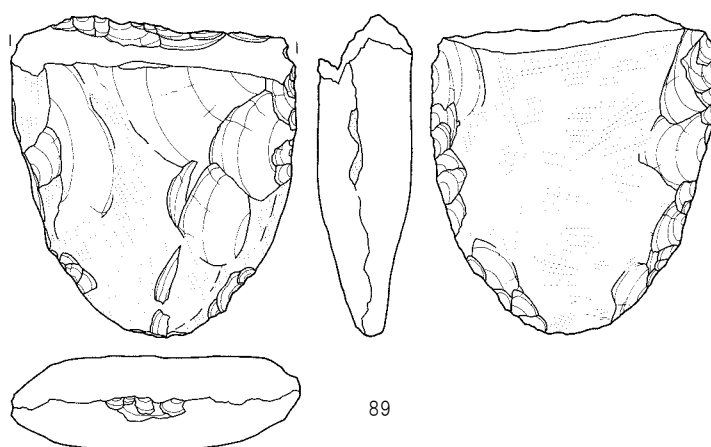
第254図 出土石器 打製石斧(18)



87



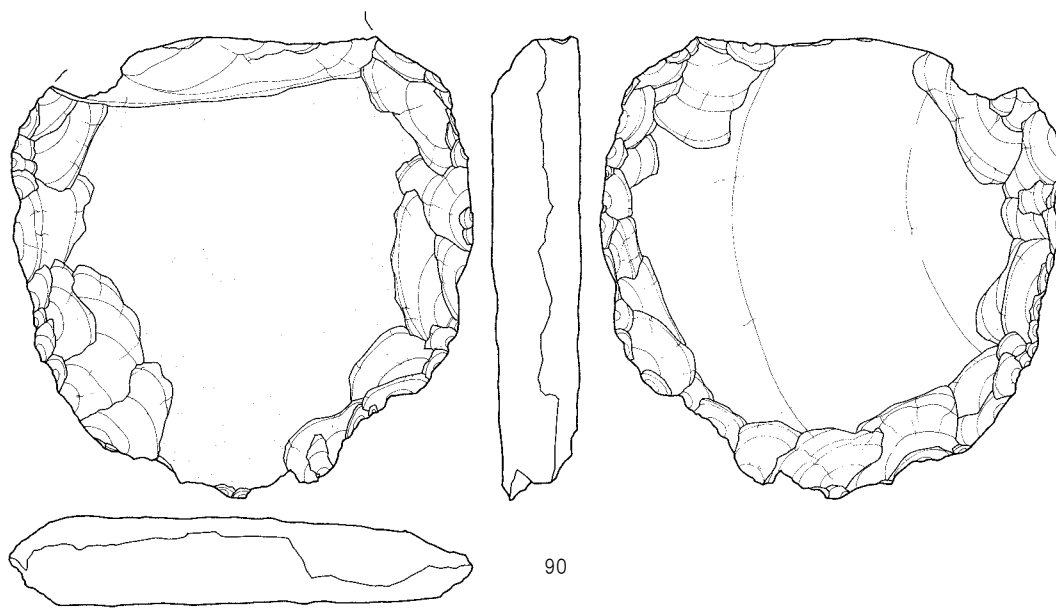
88



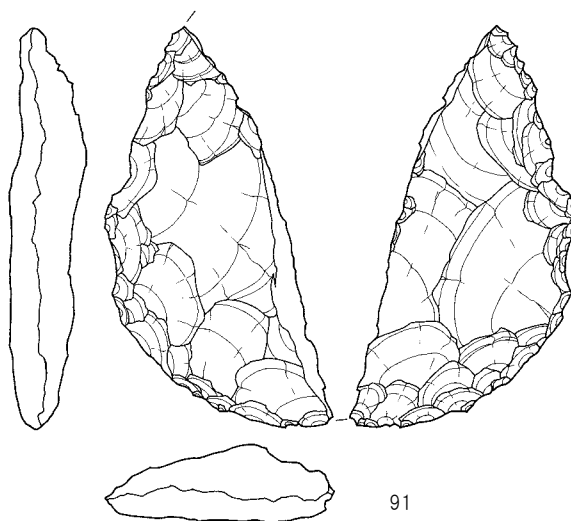
89



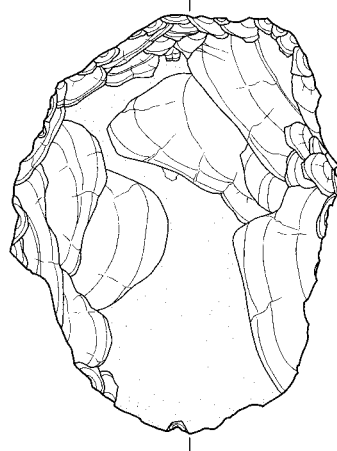
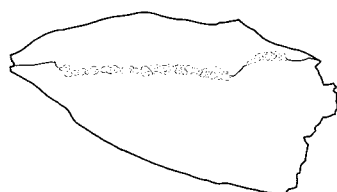
第255図 出土石器 打製石斧(19)



90



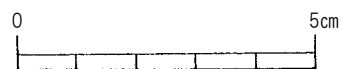
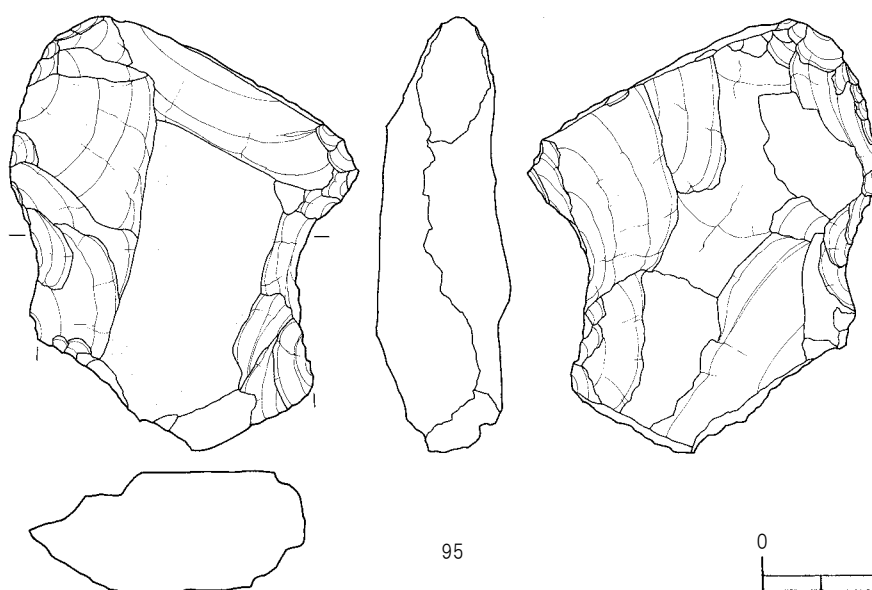
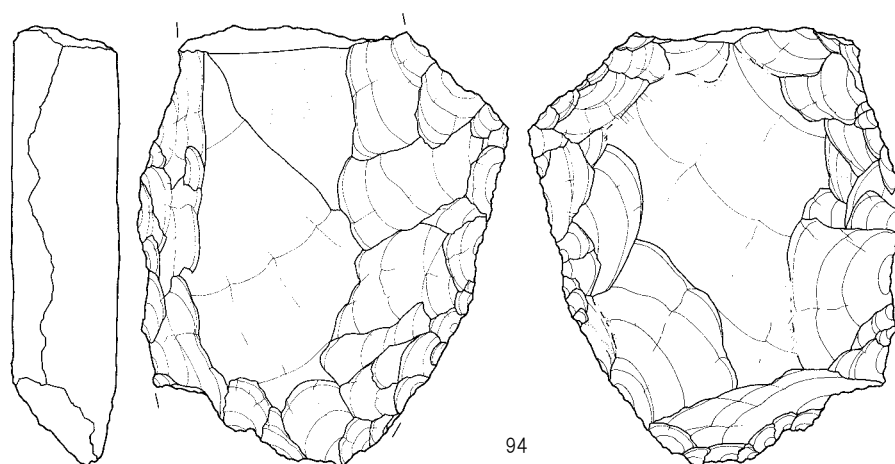
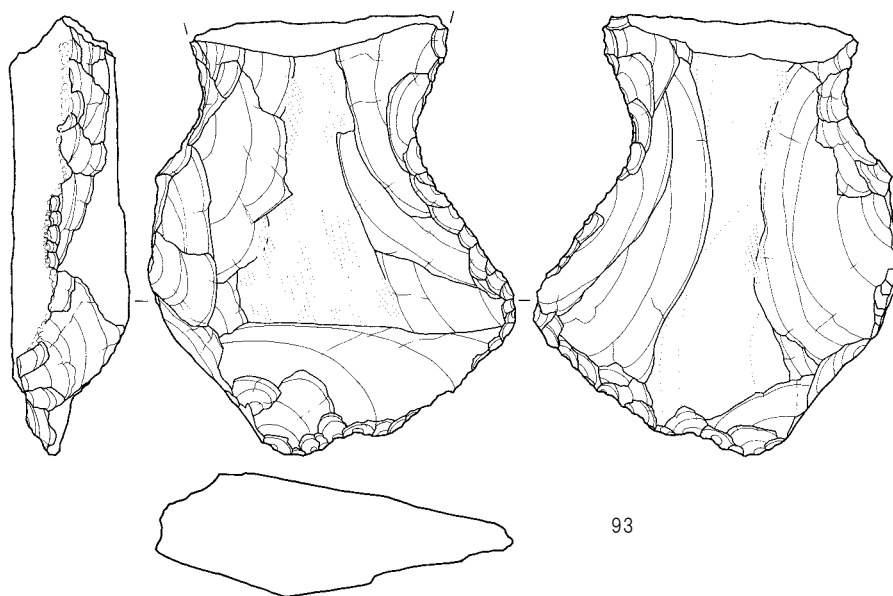
91



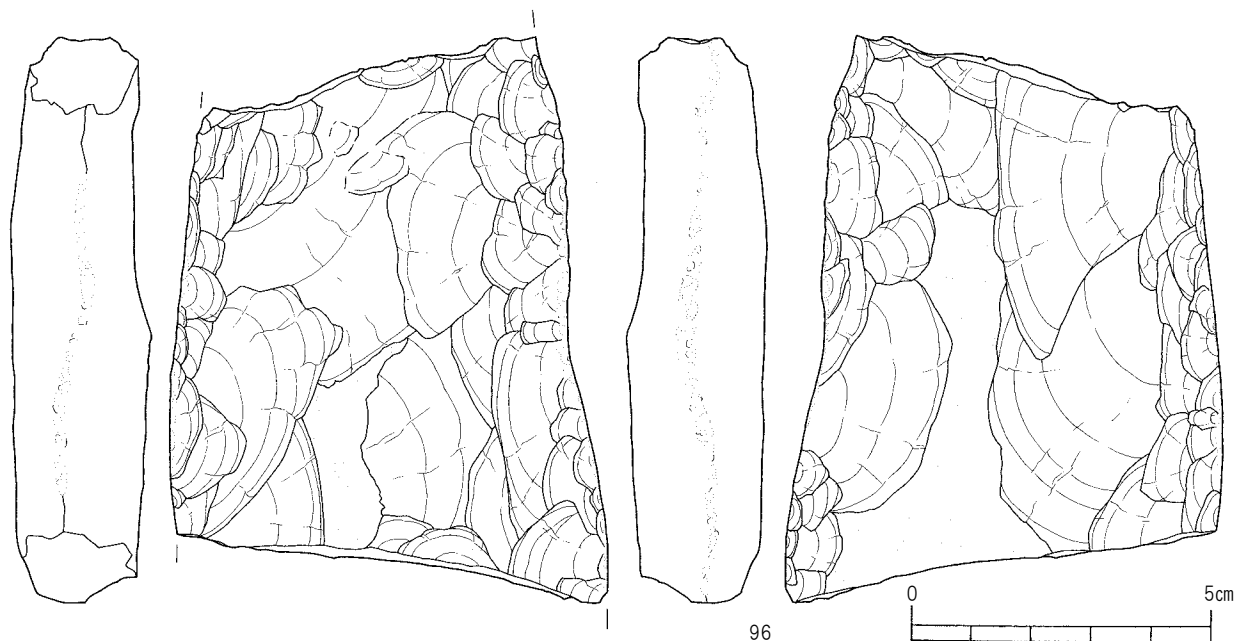
92



第256図 出土石器 打製石斧(20)



第257図 出土石器 打製石斧(21)



第258図 出土石器 打製石斧(22)

さて、49点のうち全形を留めているのは48, 50, 52, 54, 56, 59の6点のみである。しかも、このうち、50, 52, 56は刃部を大きく欠損しており、ほぼ完全形で残っているのは48, 54, 59の3点に過ぎない。消耗の度合いが激しいことが推測される。

先に述べたように49点全てが側縁に挟りが入る形状であることは共通するが、この6点を見ると形態的にさらに3類に分類できそうである。①挟りより上＝頭部の幅が、挟りより下＝体部の幅より狭く、頭部がすぼまるもの。②頭部の幅が体部より狭いがすぼまらないもの。③頭部の幅が体部と同じ幅かより広いもの。48は①、50は②、52・54・56・59は③である。①と②の違いは、体部を狭くするか、広くするかの違いであって、山鋏と畝立て鋏のような違いがあるのではなかろうか。③と①との違いは着柄を①より強固にする必要があってこのような形状になるのではなかろうか。これら6点以外はほとんどが頭部もしくは体部のみである。しかも、挟入部での折損であることが特徴的である。このことは、挟入部が着柄部位であることを意味するのであろう。先に述べたようにこの部位で棒状もしくは角材状の柄に緊縛されるのではないかと推定できる。

49, 51, 53, 57, 58等は頭部の破片でありほぼ挟入部で折損している。使用中に折損し、柄と共に居住域に持ち帰られ、そこで放棄されたことが窺える。一方、69や71のように体部で欠損しているものもある。土中の石などに斜めに当たって折れたのであろうか。また、刃部が欠けるような欠損は石などにあった際の刃こぼれであろう。

また、78, 80は頭部の一部を欠損している。79, 81, 82等は体部のみの破片である。78, 80のような頭部の欠損はどのようにして起こるのか。肘柄の内側に着柄されており、土中の木根もしくは石に当たった衝撃で欠損することが推測される。79, 81, 82のような破片は頭部だけの破片と同じような理由によるのであるが、それが居住域にまで持ち帰られていることが分かる。新たな疑問ではあるが、今後の検証にゆだねたい。

4 石匙

石匙は117点を図示した。従来、石匙は縦型、横型の二類型に分けられてきたが、本遺跡ではそのどちらとも決めがたいものが多くあった。そこで、本遺跡の類型を定義しておきたい。

- ①縦型 つまみを形成する二つの挟りを結ぶ線とほぼ直交する長軸を持ち、この軸長が最大長になる。この長軸とほぼ平行する刃部を持つ石匙。つまみは長軸上に位置する。
- ②横型 つまみを形成する二つの挟りを結ぶ線とほぼ平行する長軸を持ち、それとほぼ平行する刃部を持つ石匙。つまみは短軸上に位置する。
- ③斜型 つまみを形成する二つの挟りを結ぶ線とほぼ直交する長軸を持つが、下端がこの軸上に乗らず、この長軸が最大長にならない。その結果、長軸に斜行する刃部を持つ石匙。つまみは長軸上に位置する。
- ④上野原型 つまみを形成する二つの挟りを結ぶ線とほぼ直交する長軸を持ち、それとほぼ直交する刃部と、平行もしくは斜行する刃部を持つ石匙。つまみを除く体部は台形もしくは長方形を呈する。つまみは長軸上に位置する。

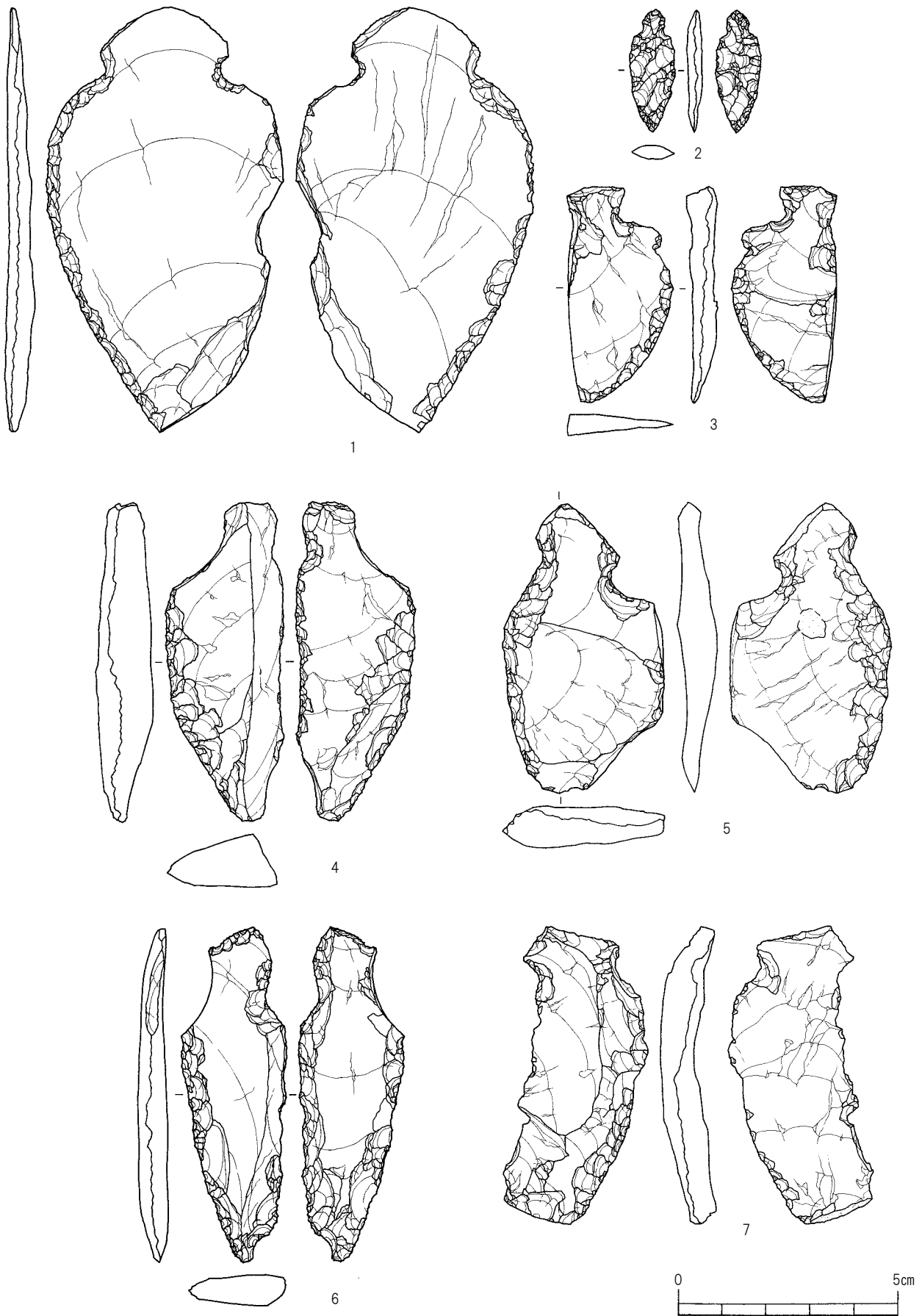
1～49を縦型とした。1は粗製、大型のものであり、左側縁に刃部を作ってある。右側縁は大きく壊れたものか。2はもっとも小型のものであり、1との比較のためこの位置に掲載した。両面調整によって体部が整形され、ゆるく湾曲する両側縁の刃部が下端で尖端を形成する。このような両面調整が施された丁寧な作りの縦型石匙は、本遺跡ではこれと32があるが、32は刃部を大きく欠損し、よく分からない。他は刃部調整だけではあるが、例えば3や4のように刃部はシャープな作りである。これら縦型石匙の素材剥片は多様であり、6や7、23のように縦長剥片を用いたもの、5や25、29のように横長剥片を用いたもの等様々である。縦長剥片素材でも、7のように素材剥片の打点が生端になるものもあり、斉一性はほとんどない。横長剥片素材も同様である。

51、52は、縦型、横型等いずれとも判断しかねるが、このようなつまみを持つ石器は石匙以外にはないので、ここに分類した。

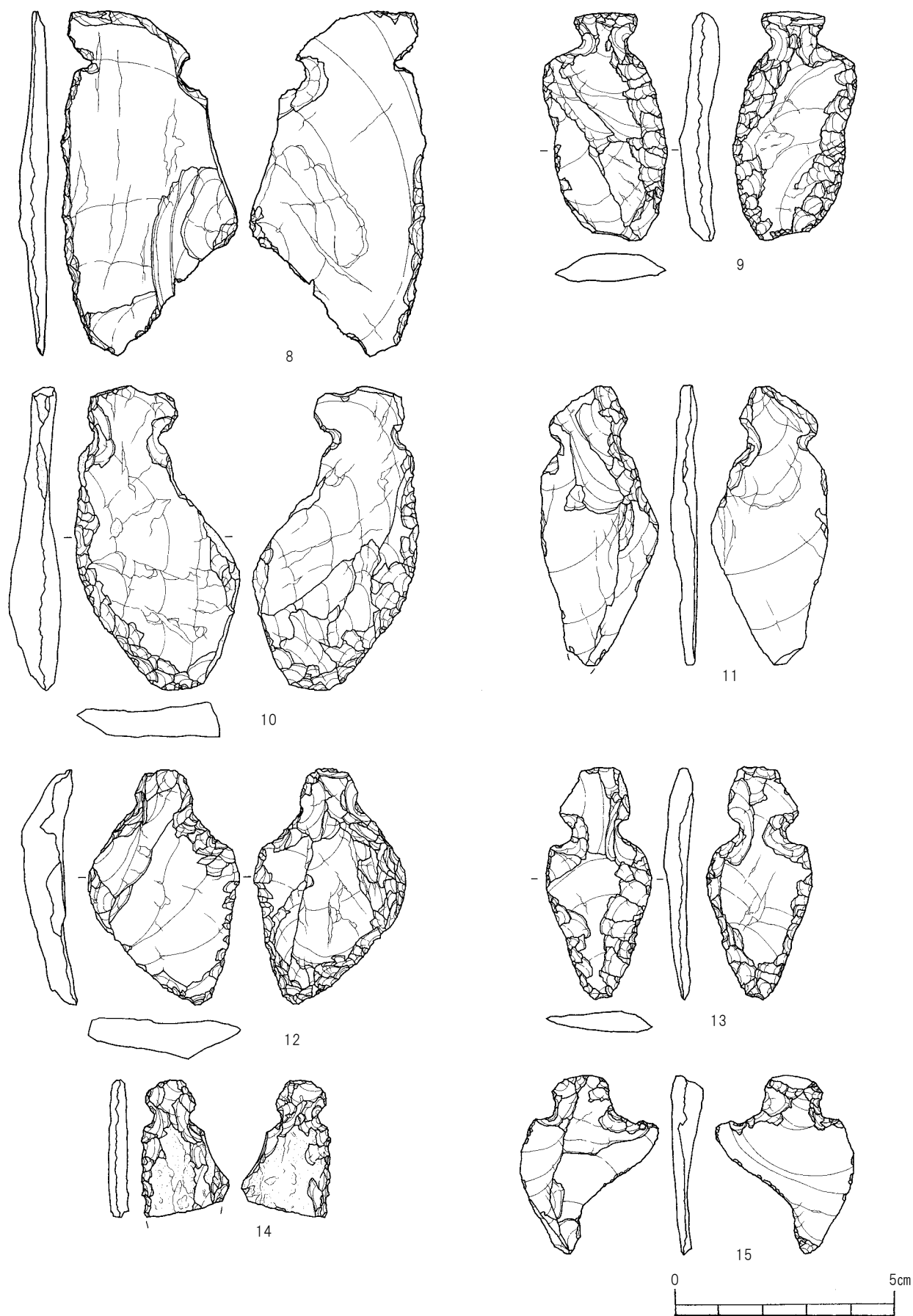
53～101を横型に分類した。縦型と比較して、54、55、58、70～75等のように両面調整の丁寧な作りのものが多い。ただし、88のような粗製、大型もある。また、91～95のように、刃部調整のみのものも多い。横型という形態上当然ながら、素材剥片は横長剥片を用いたものがほとんどである。

102～105を斜型に分類した。先に定義したように、二つの挟りを結ぶ線と直交する軸の上に下端が乗らず、左右いずれかに片寄る結果、最大長が先の軸とずれることになる。いわば、縦型の体部を斜めに切るような刃部を付けているタイプである。両面調整の丁寧な作りのものはない。刃部調整と挟りによるつまみの作り出しが主な整形である。ただし、器面調整は、102の両側縁に見られる、薄くするための剥離は施されるようであり、その必要のない薄い剥片を素材とする場合は、器面調整の剥離は省略される。

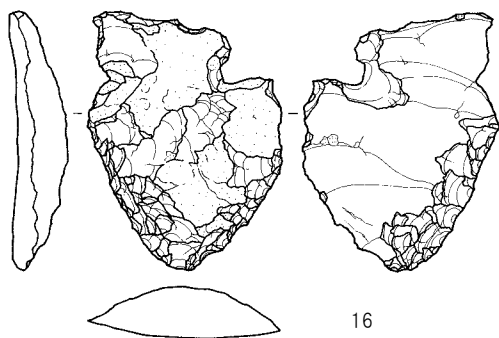
116、117は上野原型である。先に定義したように、台形もしくは長方形の体部を持つのが最大の特徴である。また、両面調整が施された丁寧な作りのものだけであることもこのタイプの特徴である。本遺跡の石器の中に、上野原遺跡で数多く発見されたような異形石器（第332図）と共にこのタイプの石匙が見出されたことは興味深いことである。



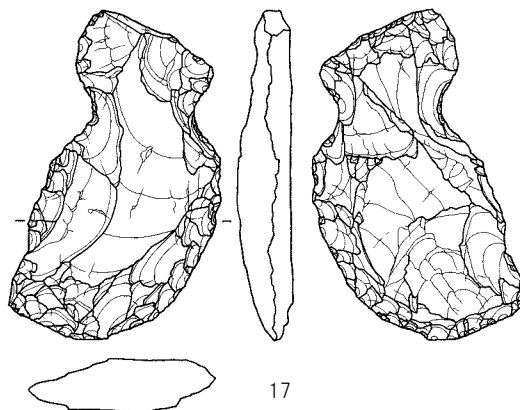
第259図 出土石器 石匙(1)



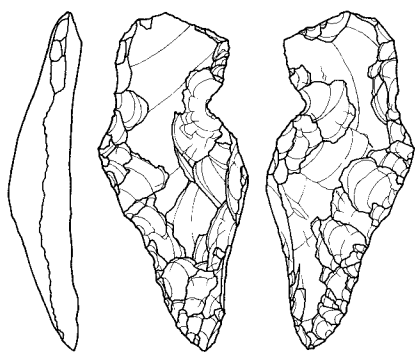
第260図 出土石器 石匙(2)



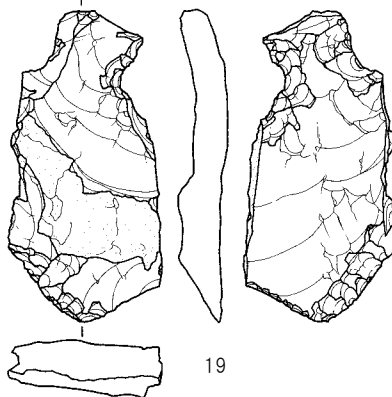
16



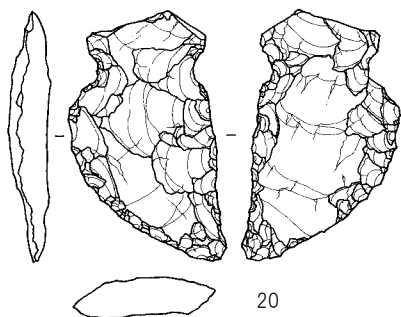
17



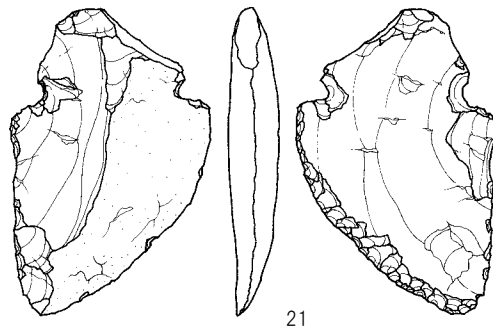
18



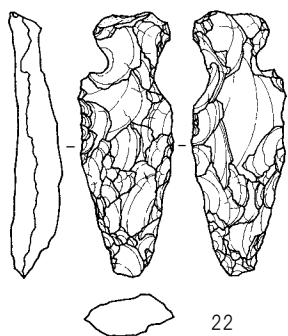
19



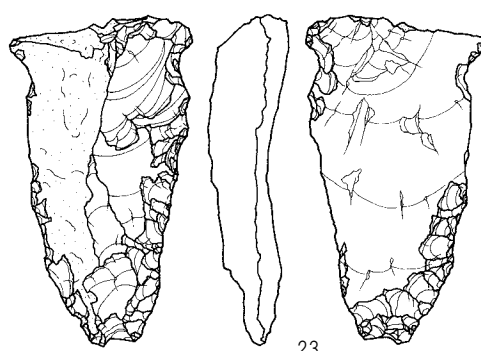
20



21



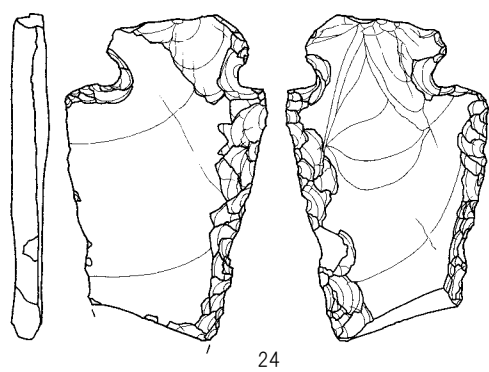
22



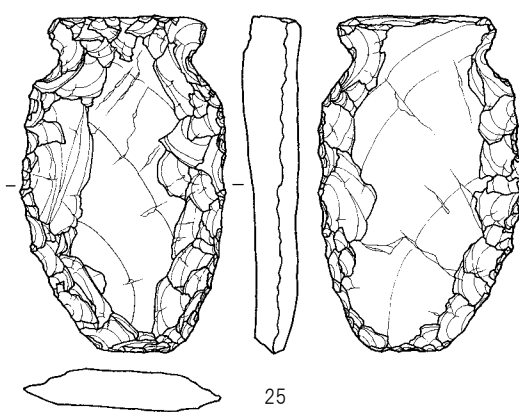
23



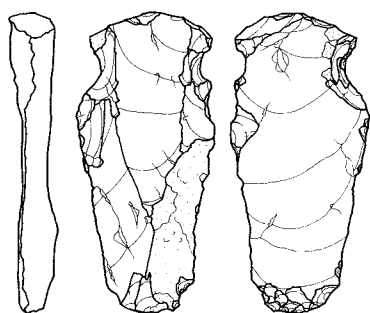
第261図 出土石器 石匙(3)



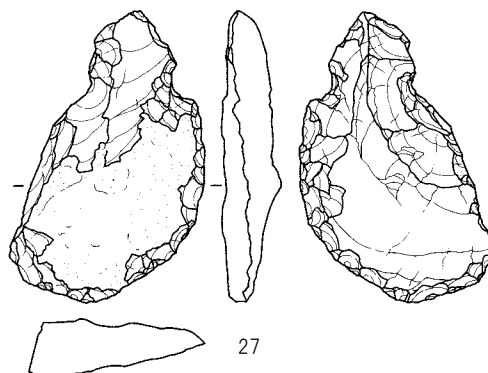
24



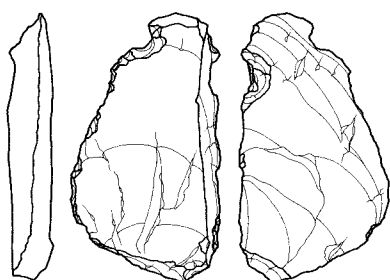
25



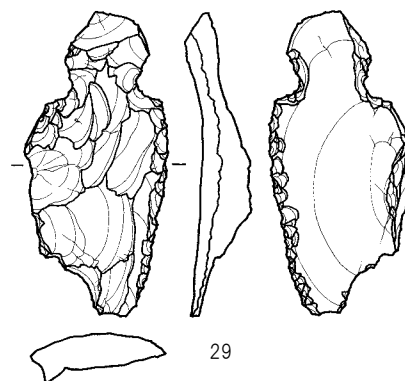
26



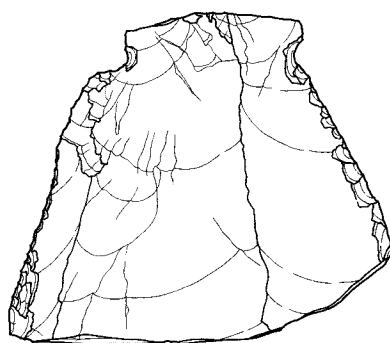
27



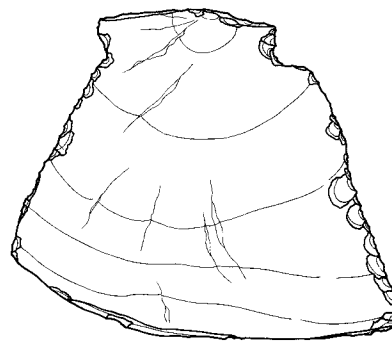
28



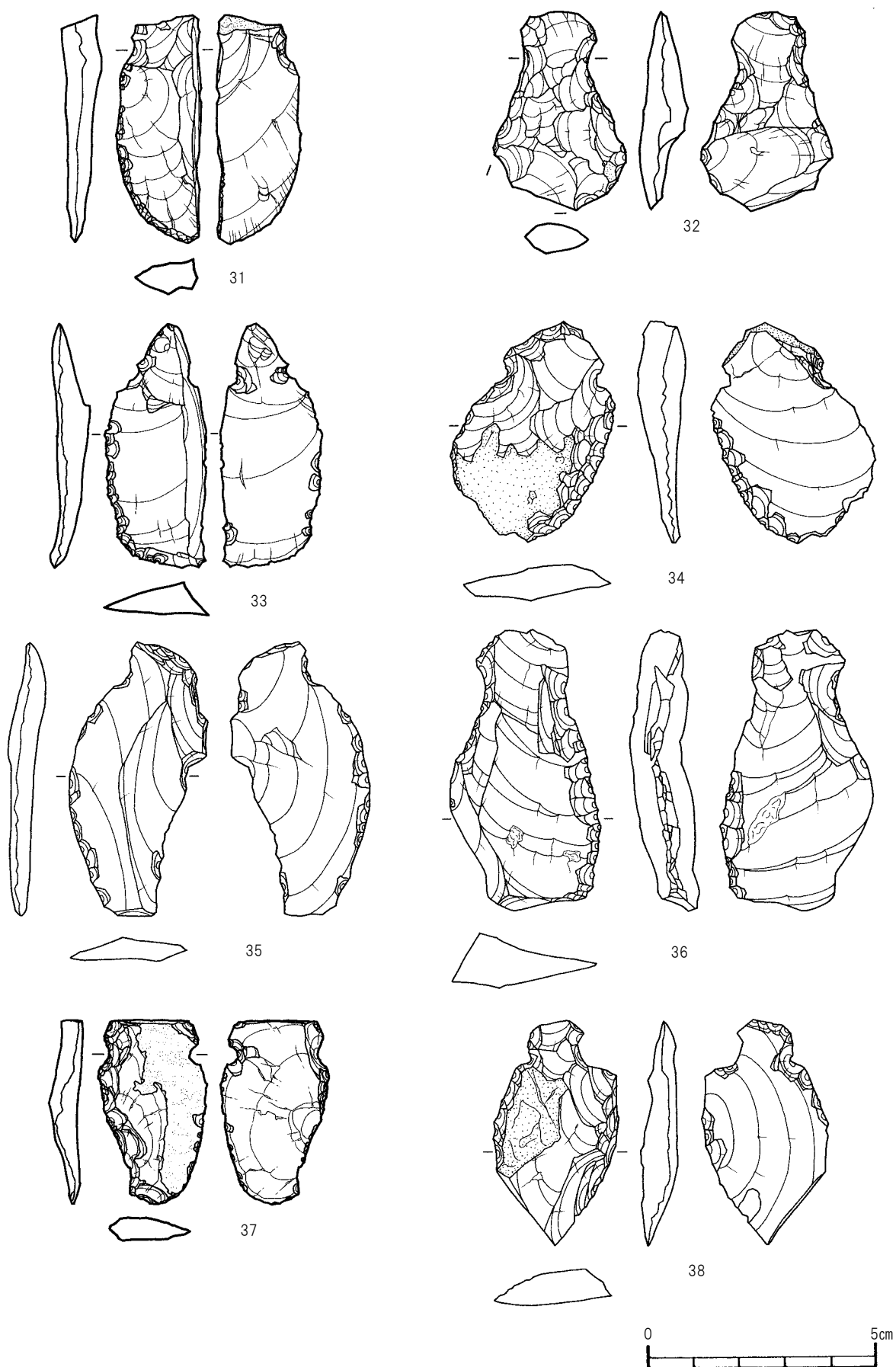
29



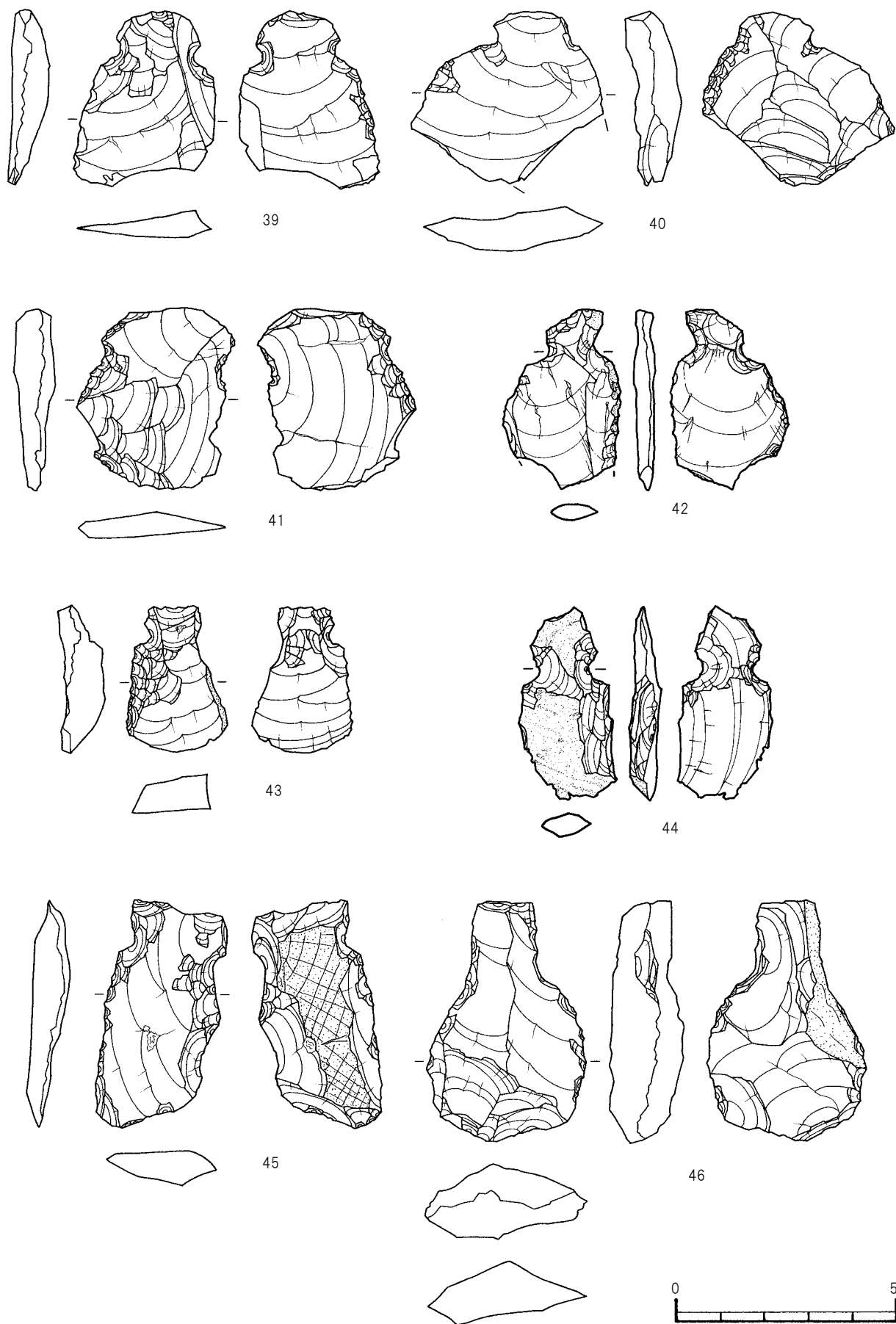
30



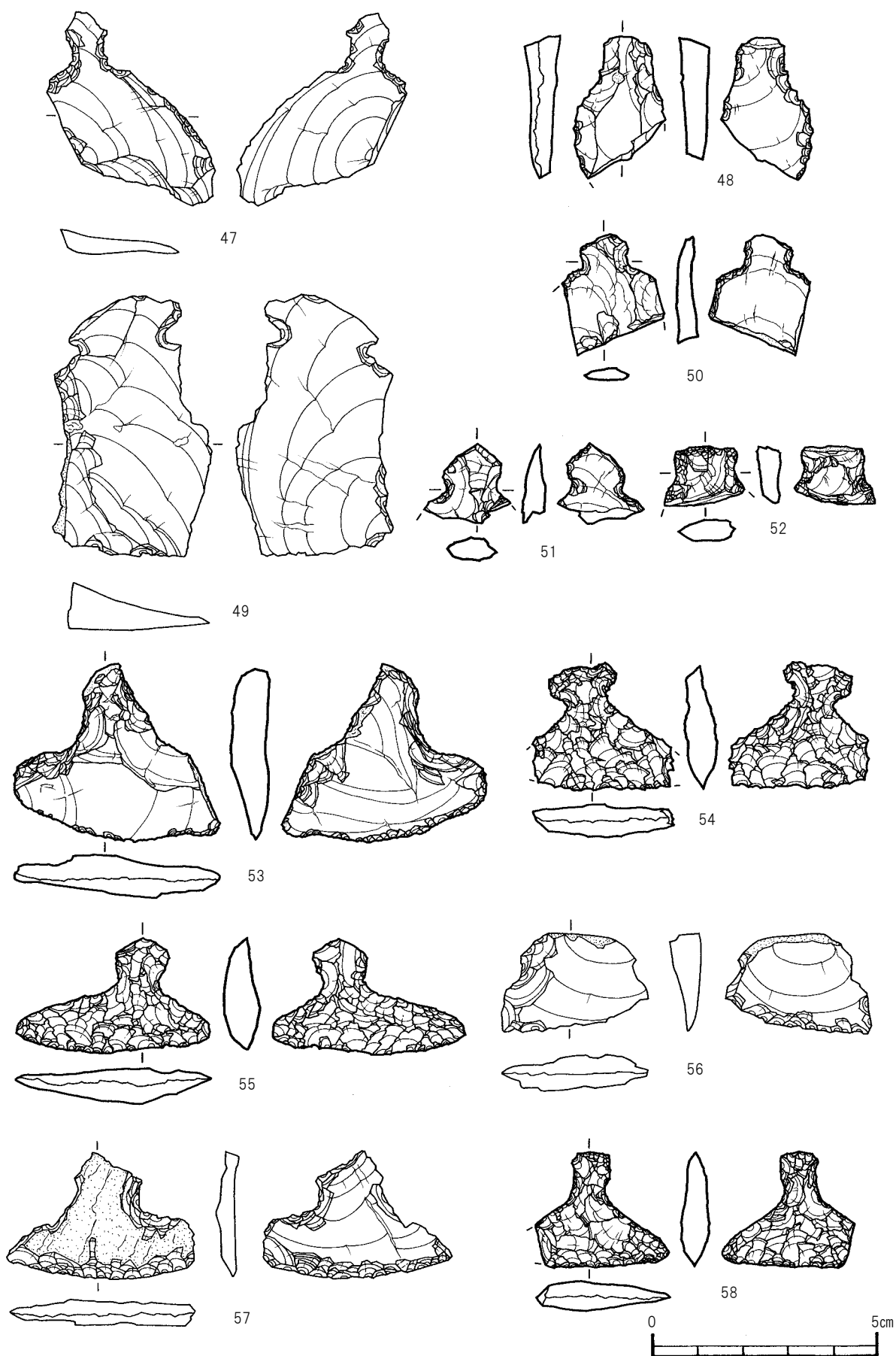
第262図 出土石器 石匙(4)



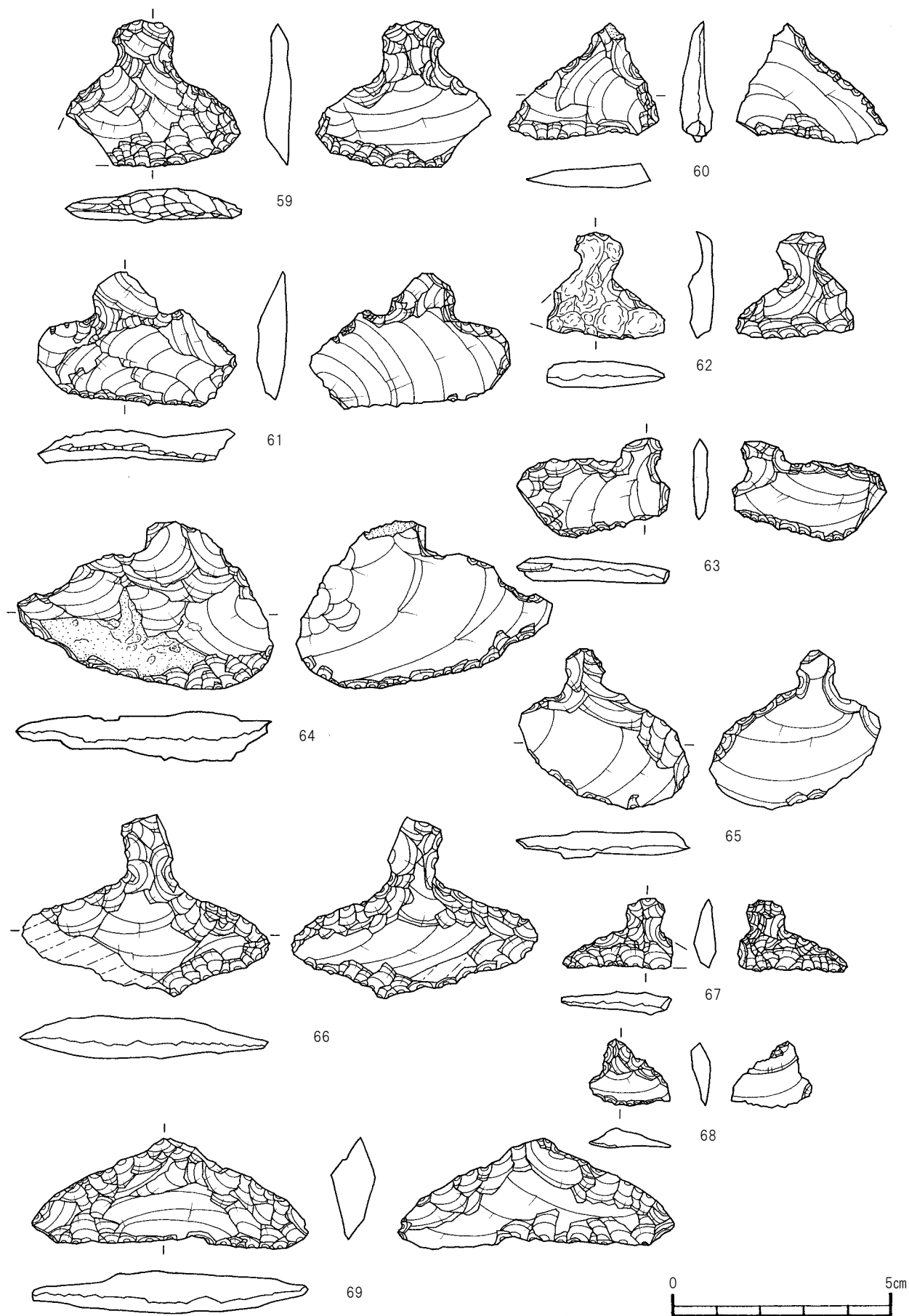
第263図 出土石器 石匙(5)



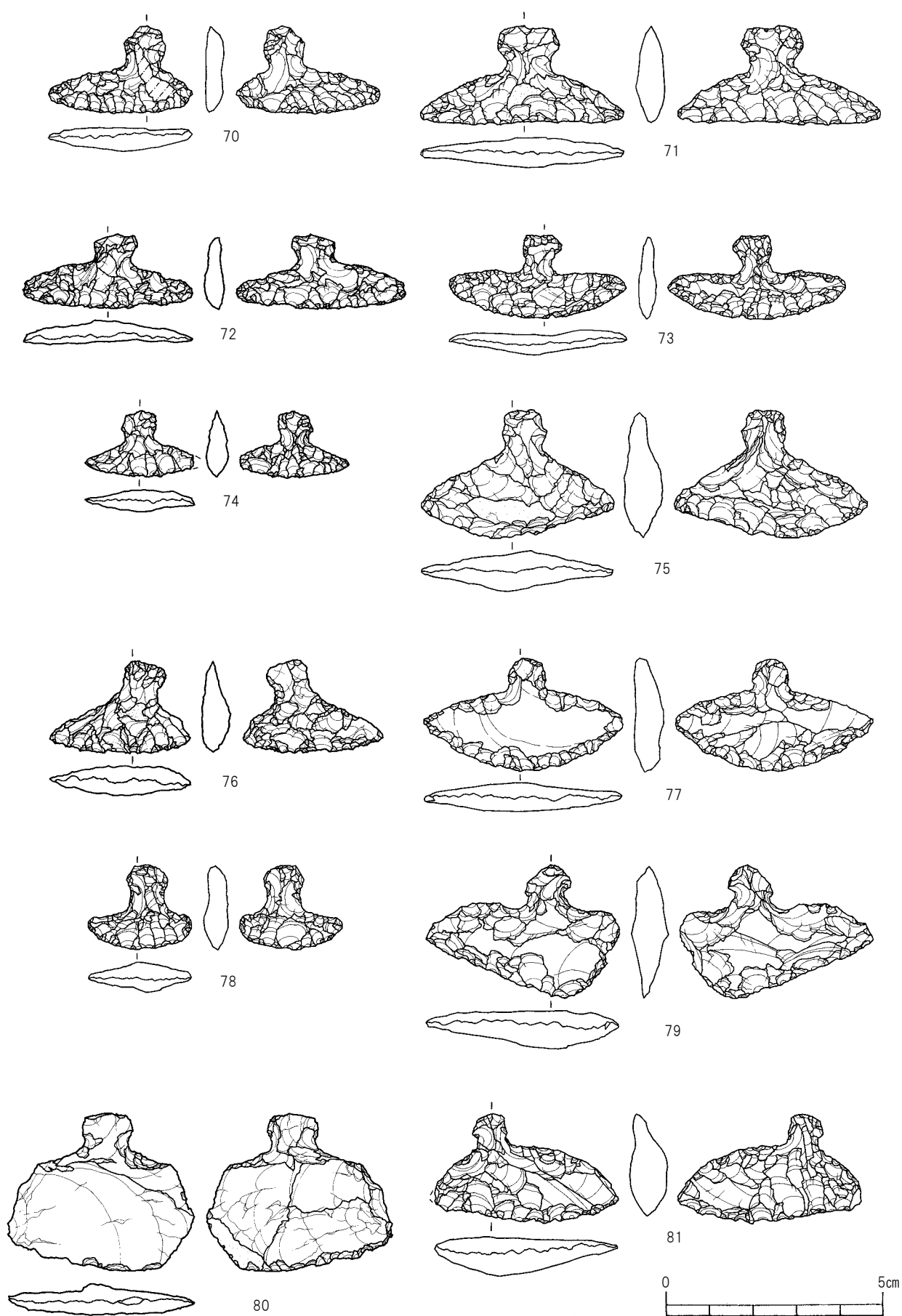
第264図 出土石器 石匙(6)



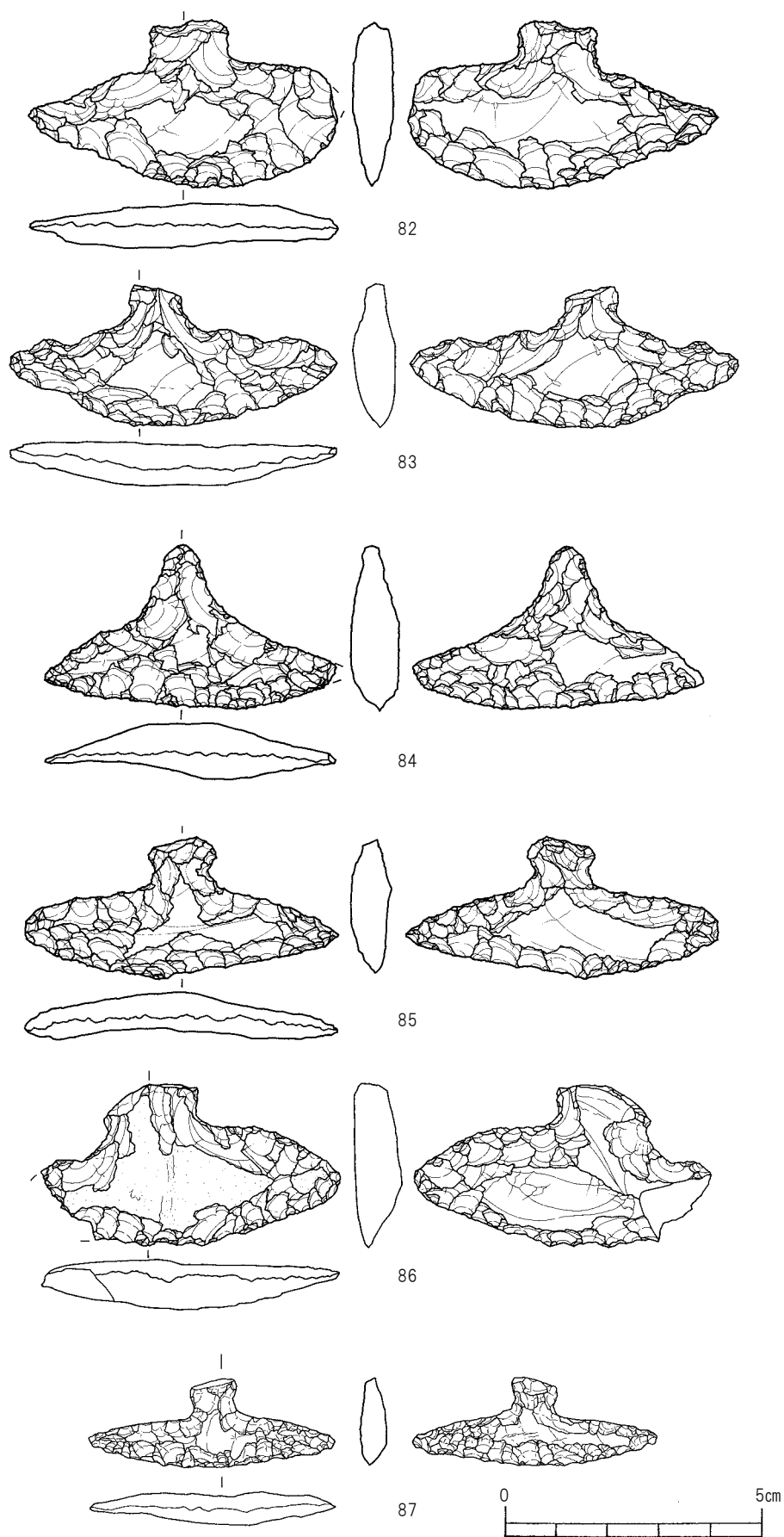
第265图 出土石器 石匙(7)



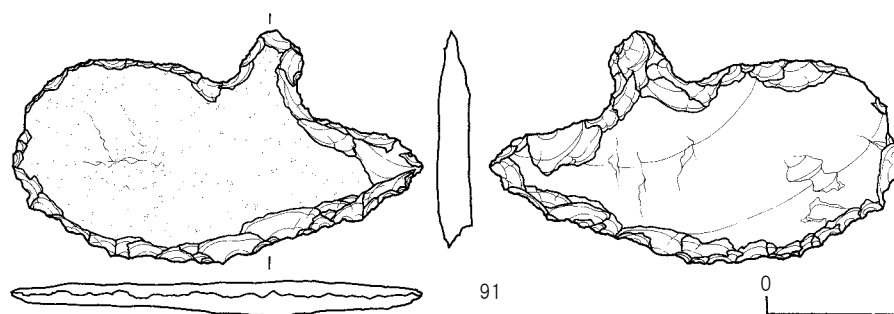
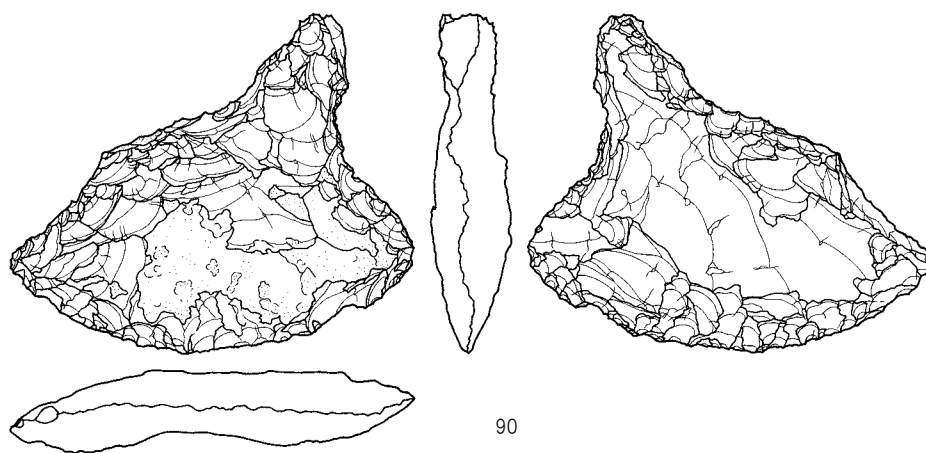
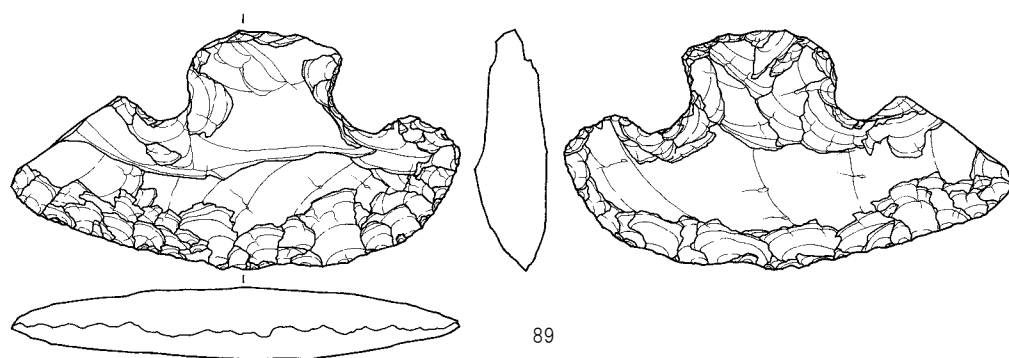
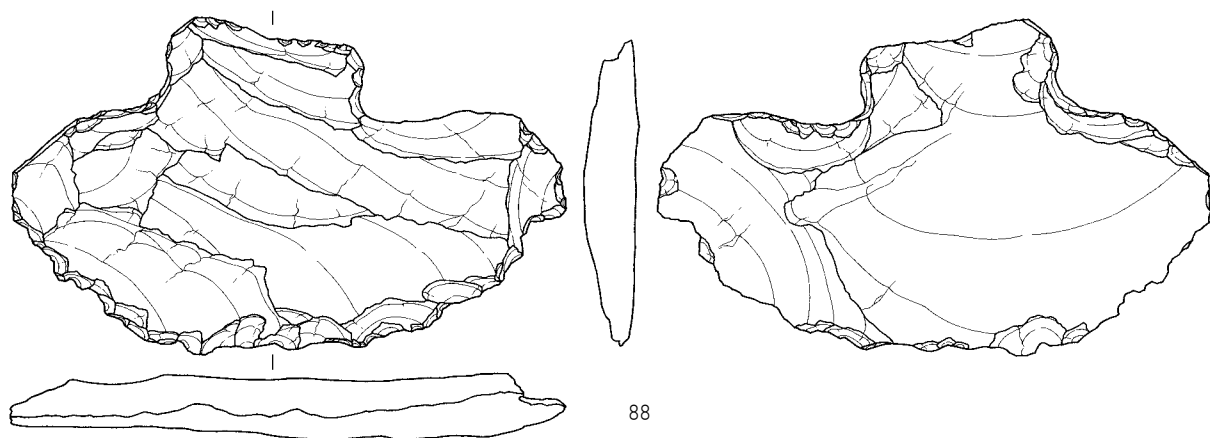
第266図 出土石器 石匙(8)



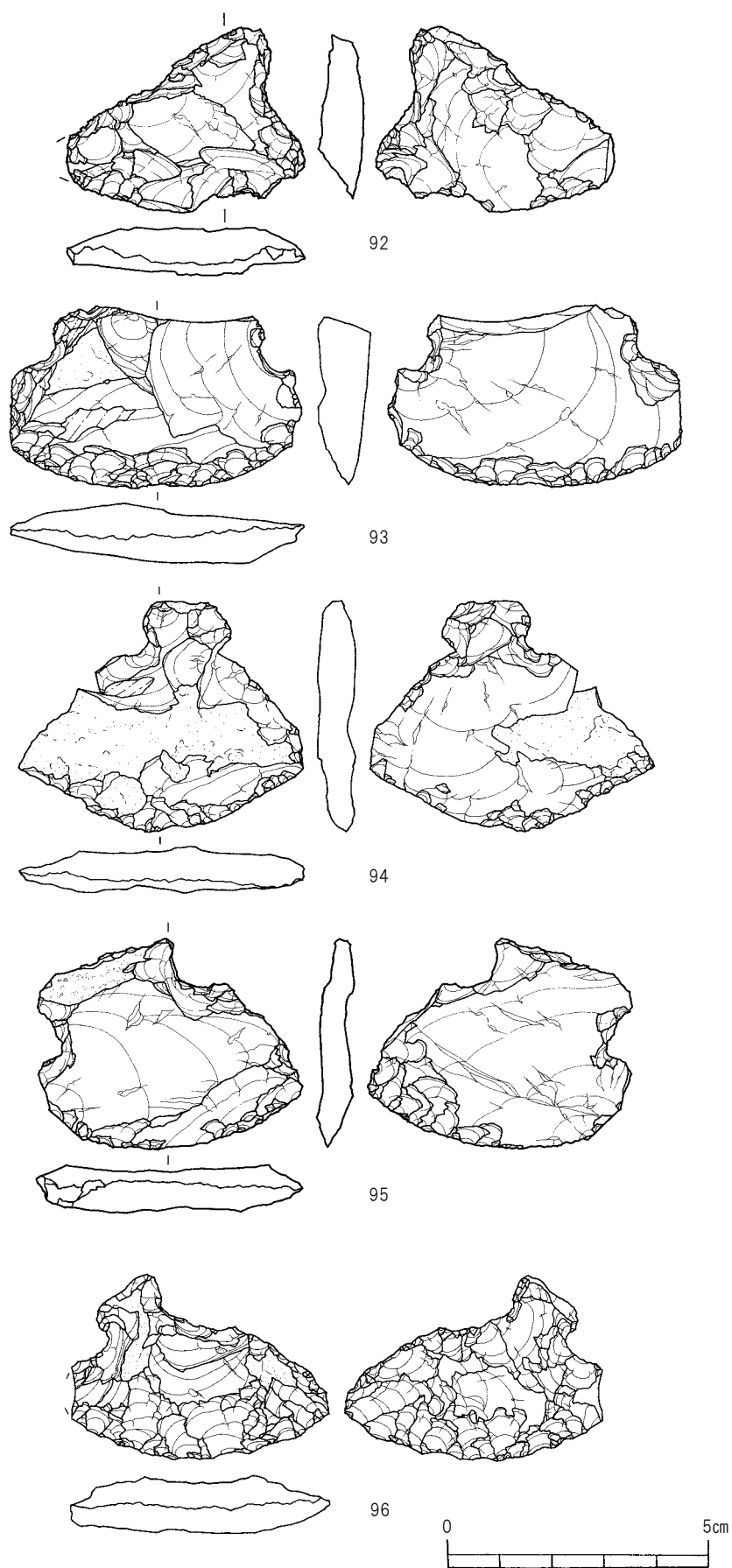
第267图 出土石器 石匙(9)



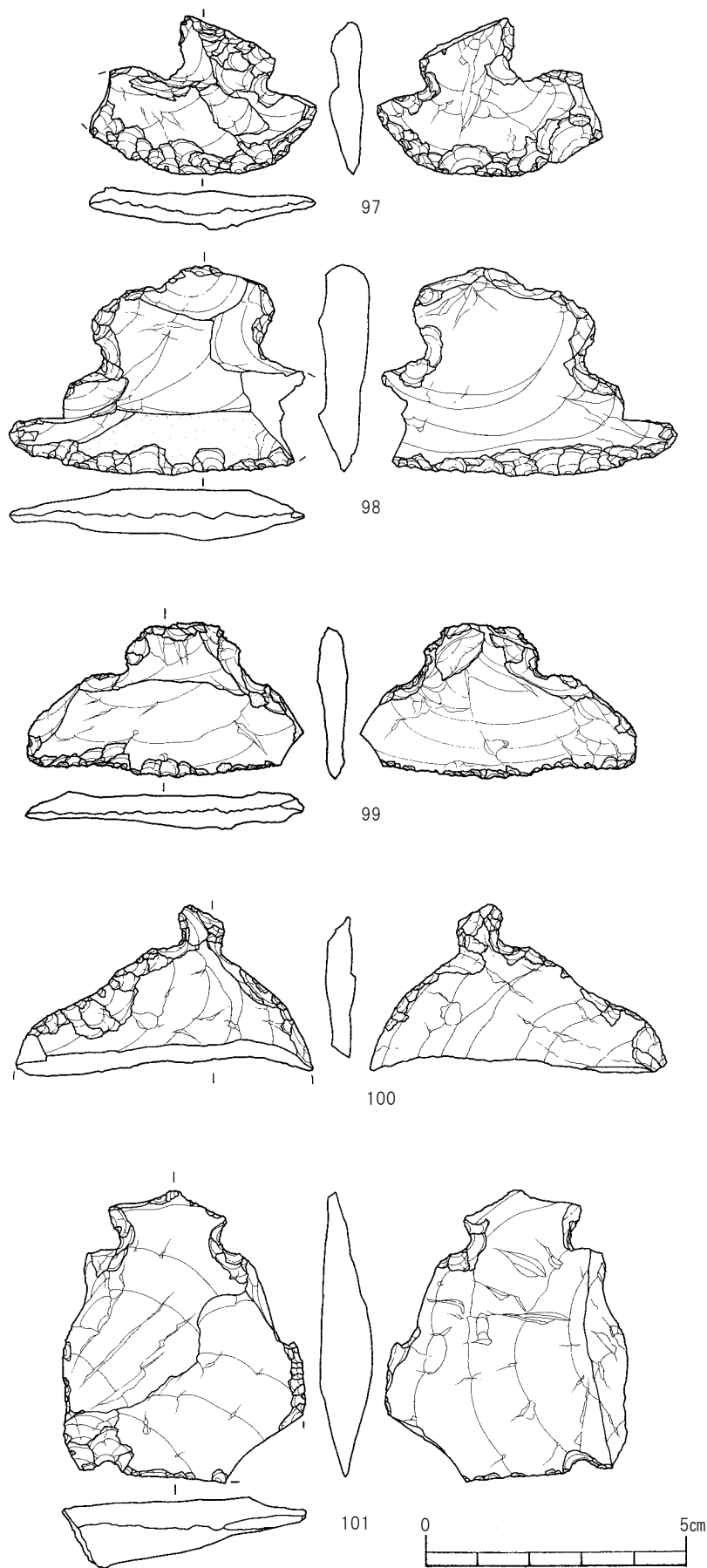
第268図 出土石器 石匙(10)



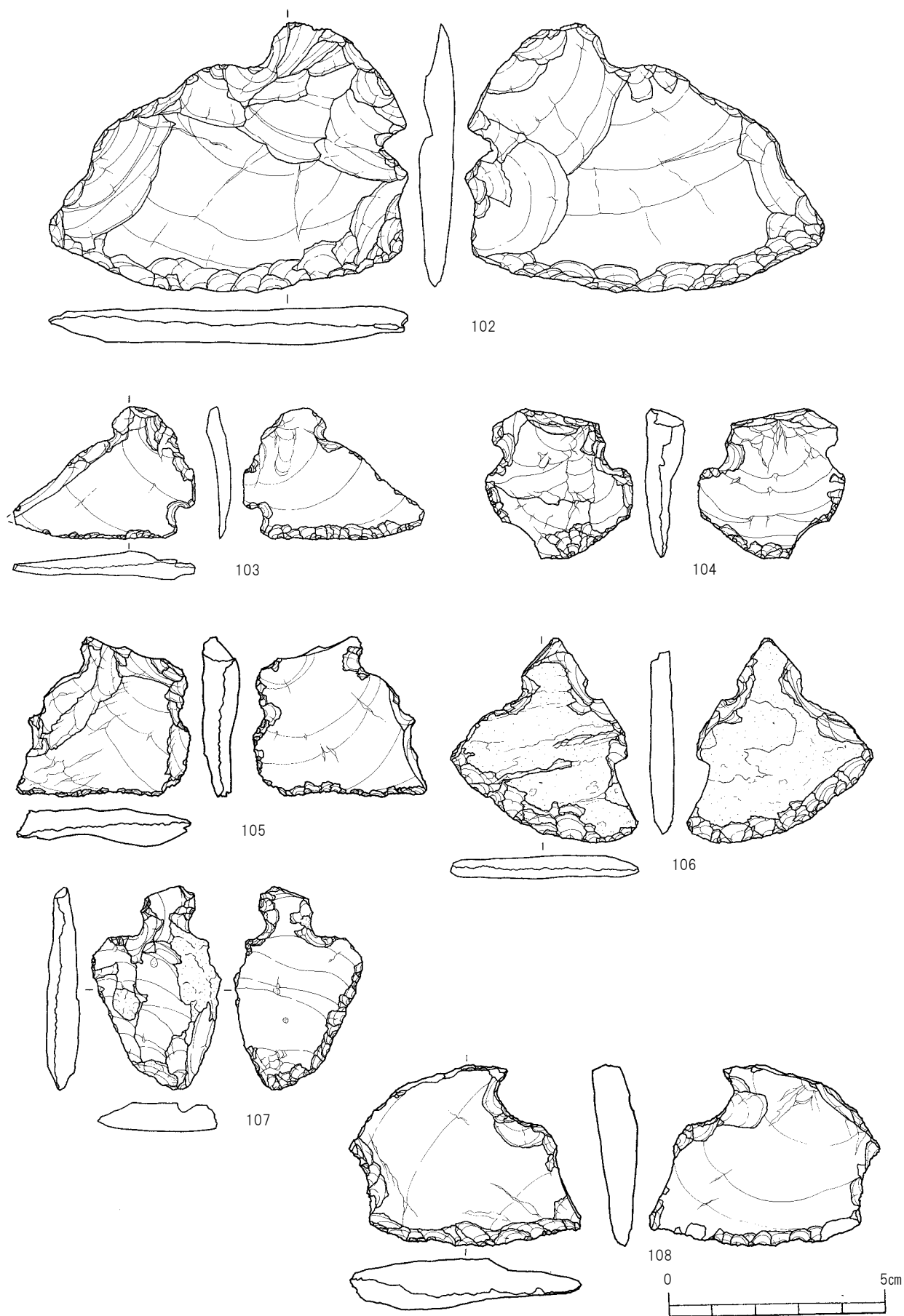
第269図 出土石器 石匙(11)



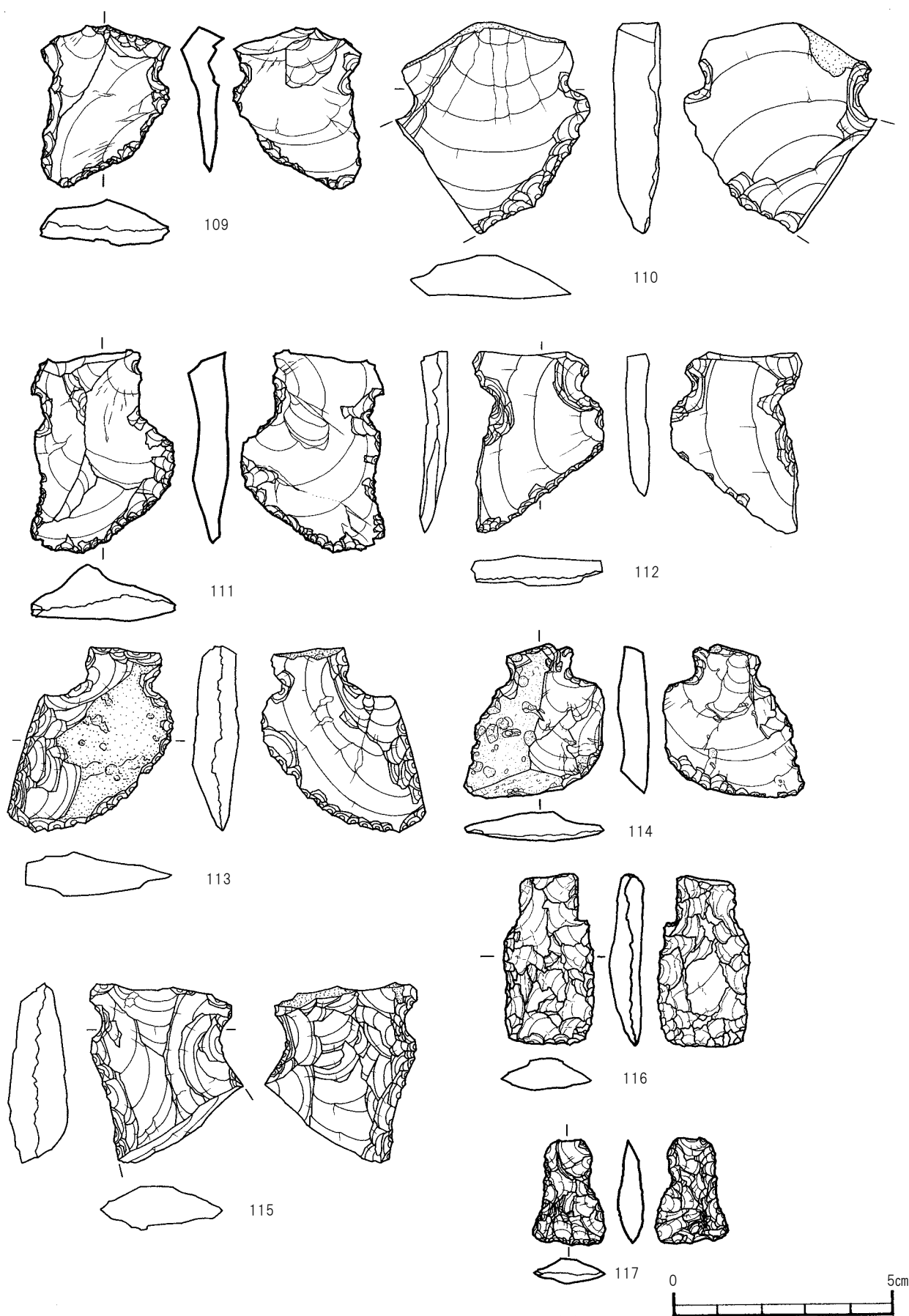
第270図 出土石器 石匙(12)



第271図 出土石器 石匙(13)



第272図 出土石器 石匙(14)



第273図 出土石器 石匙(15)

5 石槍

1点だけ出土した。頁岩の縦長剥片を素材とし、器面調整は施されず、周縁調整のみで整形されている。形状、調整剥離とも、岩本式土器などに伴って出土する尖頭器によく似ている。これと石鏃の1や2とは、大きさのほかに器面調整と周縁調整の仕方に明瞭な差異が認められるからであり、石鏃の場合は石鏃特有の調整剥離である。

6 組合式石銛

これも1点だけ出土している。鋸歯縁を構成する凸部が、やや丸みをおびるものの、縄文時代後期に散見される、組合式石銛の側刃である。海岸部に立地しない、海岸線まで約2km離れた遺跡であるにもかかわらず、この石器が出土したことは、生業の中に海での漁労が組み込まれていることを意味する訳で、大変意義深いことである。両面調整によって整形されているため素材剥片の形状は分からない。

7 石鏃

未製品も含めて561点を掲載した。おそらく縄文時代全時期の石鏃が網羅されていることと思われる多様性に富んだ資料である。大別すると、①長茎もしくは凸基、②平基、③凹基の3者に分けられる。

①は1～4の4点である。長さ（推定長）6cm未満で石鏃特有の調整剥離がほどこされている。このような基部形状の石鏃は縄文時代早期後葉の上野原遺跡でも発見されているが、2～4は、上野原遺跡例とは若干異なった平面形態である。

②は5～73までの69点である。この中には、14～19等のようなややラフな器面調整と、厚みのある形態の、「石銛」と呼ばれる石器も入っているが、一方では43や44、48のような小形三角形鏃もある。これらを同じ細分類で括るのは、繁雑な細分類を避け、単純に基部形状のみで細分した結果である。

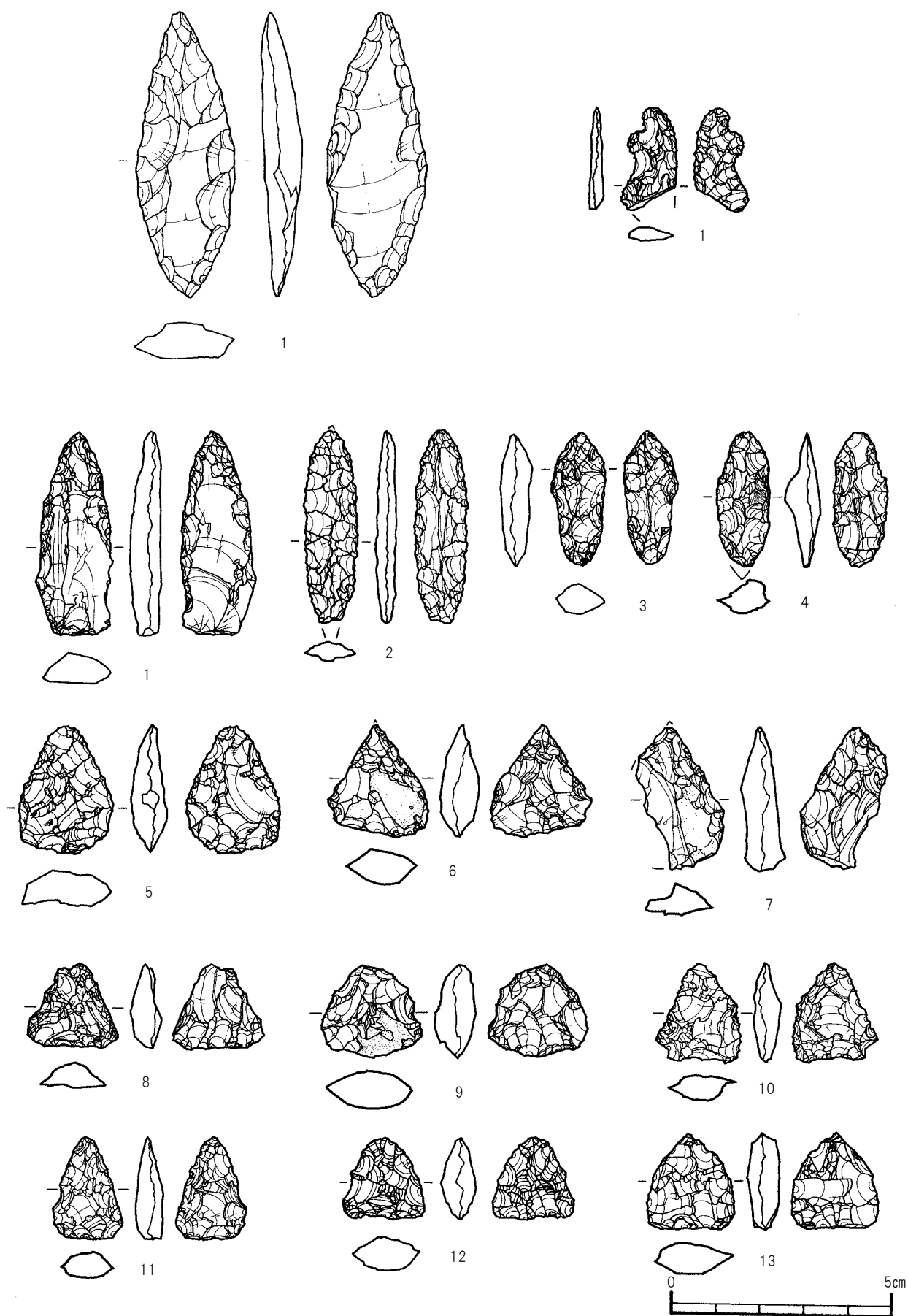
③は74～497までの424点である。これらは74や78のように連続する剥離で浅い凹基に作るものと、231や234のように凹基のまん中に強い1回の剥離で凹基を強調するものとに大別できる。数的には後者の方が多く、側縁形状もさらにバラエティに富むような感じを受ける。中でも277や317、347等のような有肩とでも称すべき形状は早期後葉までには見当たらないもので、前期以降の所産ではないかと思われる。

この有肩鏃を別にすれば、鋸歯縁鏃や円脚鏃等のバラエティは早期後葉段階で既に出そうことが先にも挙げた上野原遺跡例で明らかになっており、細分による編年上の位置づけは出来ないことが明白である。よって、本遺跡の報告では細分を避けた次第であり、細かな形態分類は、別に機能、用途等と併せて考察すべきものである。

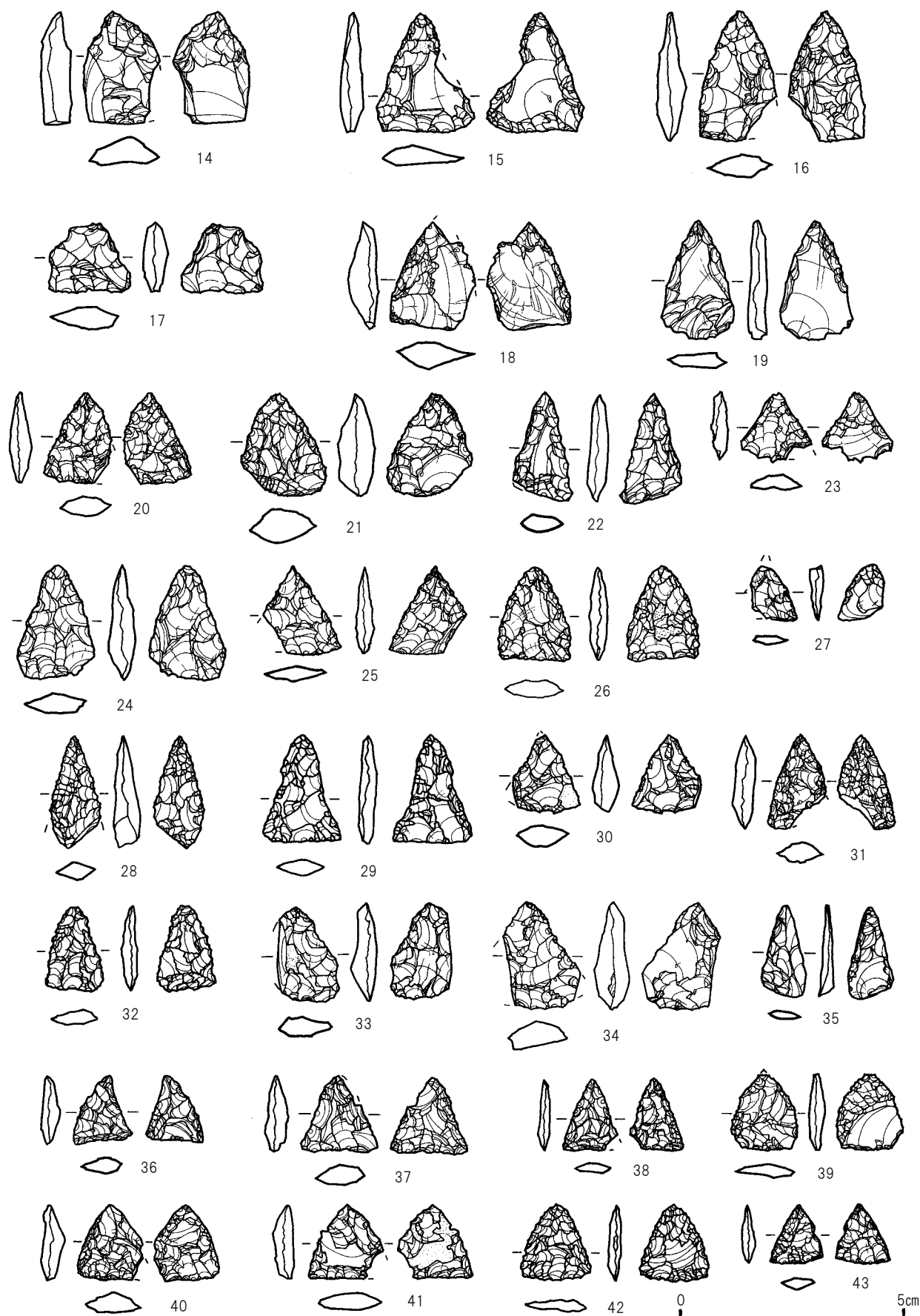
ただし、本遺跡では、いわゆる早期前葉段階に盛行し、鱗状剥片に周縁調整だけ施して作られる「小形剥片鏃」が他遺跡に比し極端に少ないことは特徴の一つとして留意すべきことであろう。

なお、498～523は基部を欠損した個体であり①～③のいずれにも分類できない。519と520は①の2、4に近い形状、調整剥離であるが、基部を欠くため確定できない。

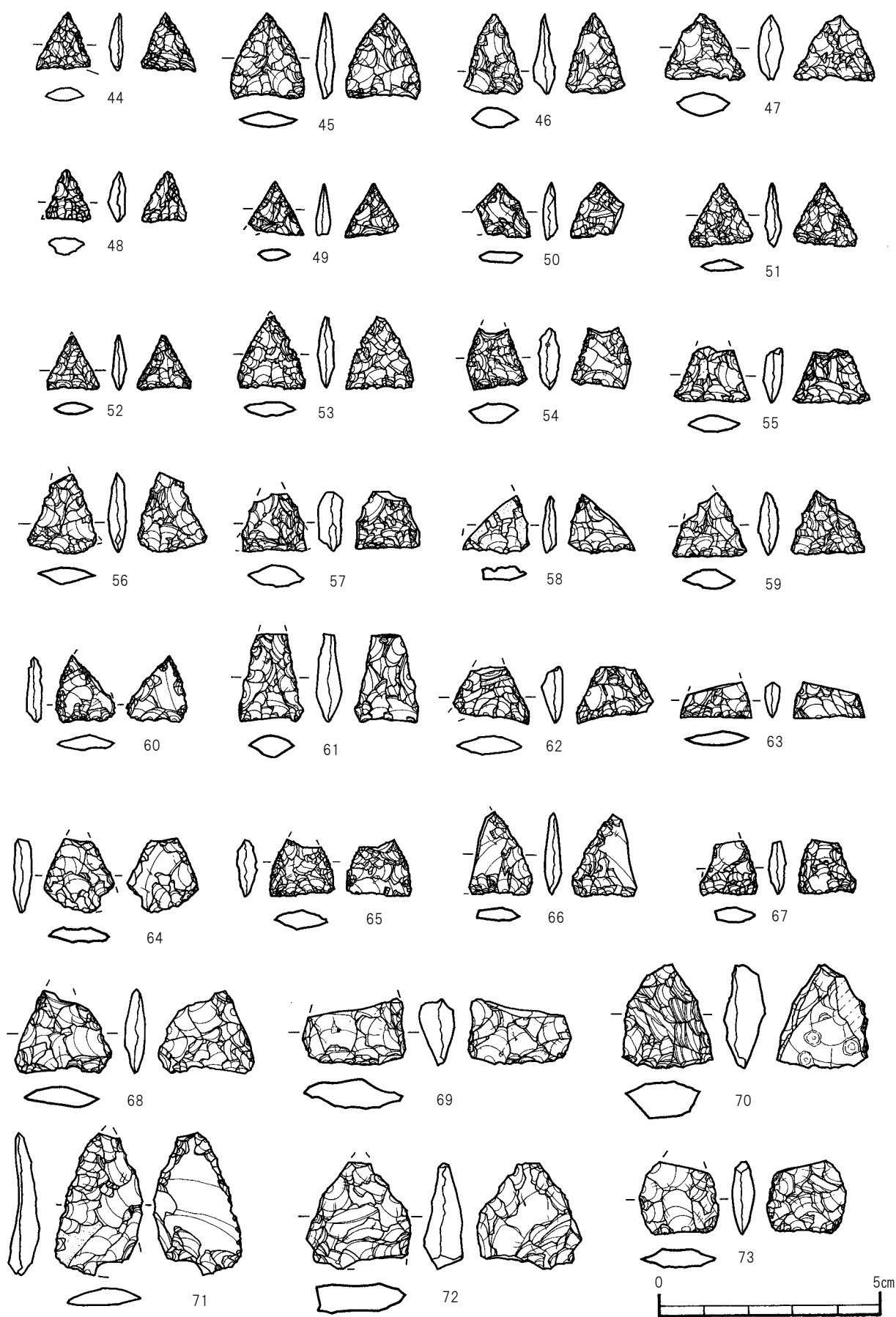
本遺跡の石鏃でもう一つ特徴的なことは、524～561の「未製品」としか分類のしようがないものの数の多さである。



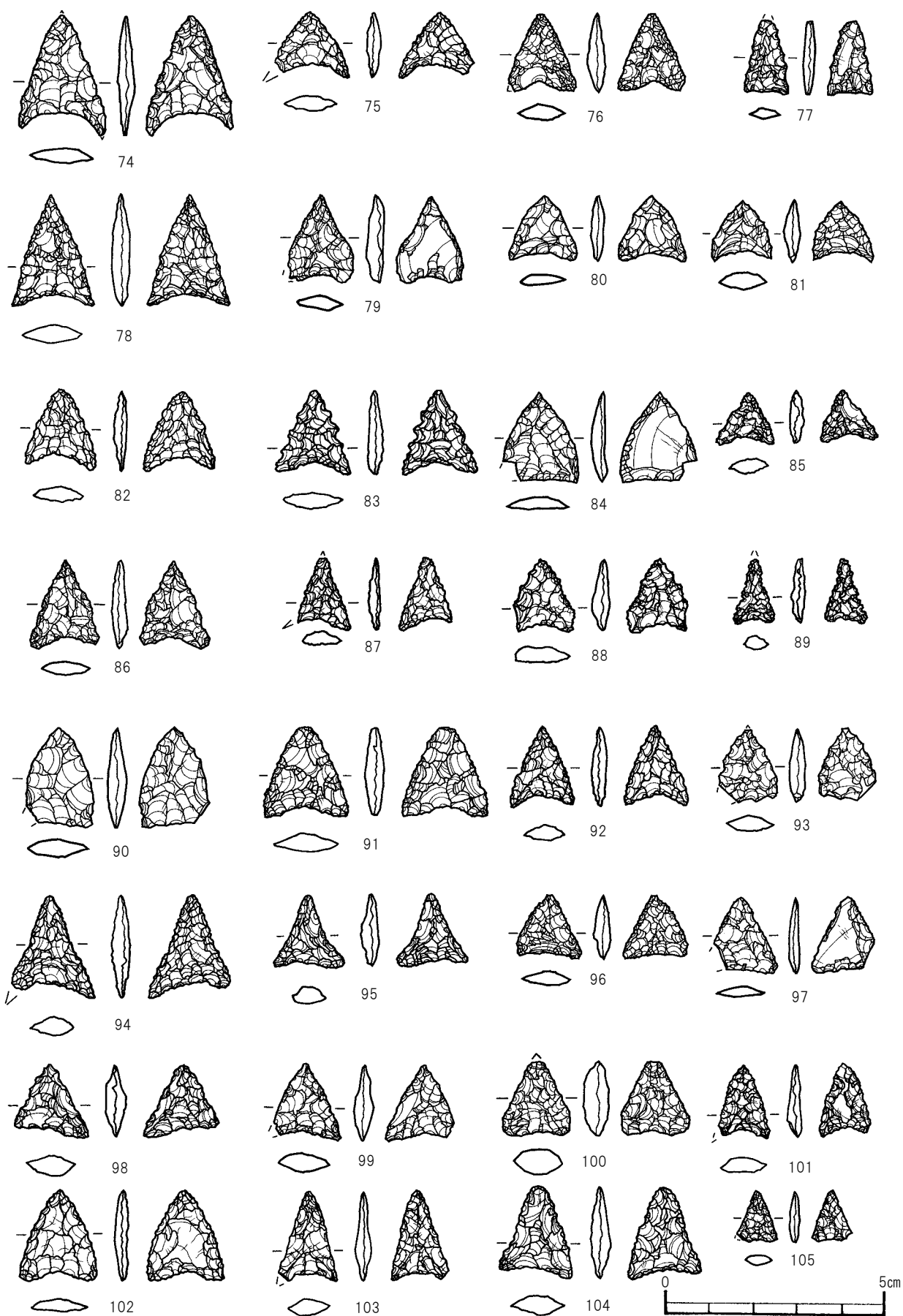
第274図 出土石器 石槍，組合せ式石鋸，石鏃(1)



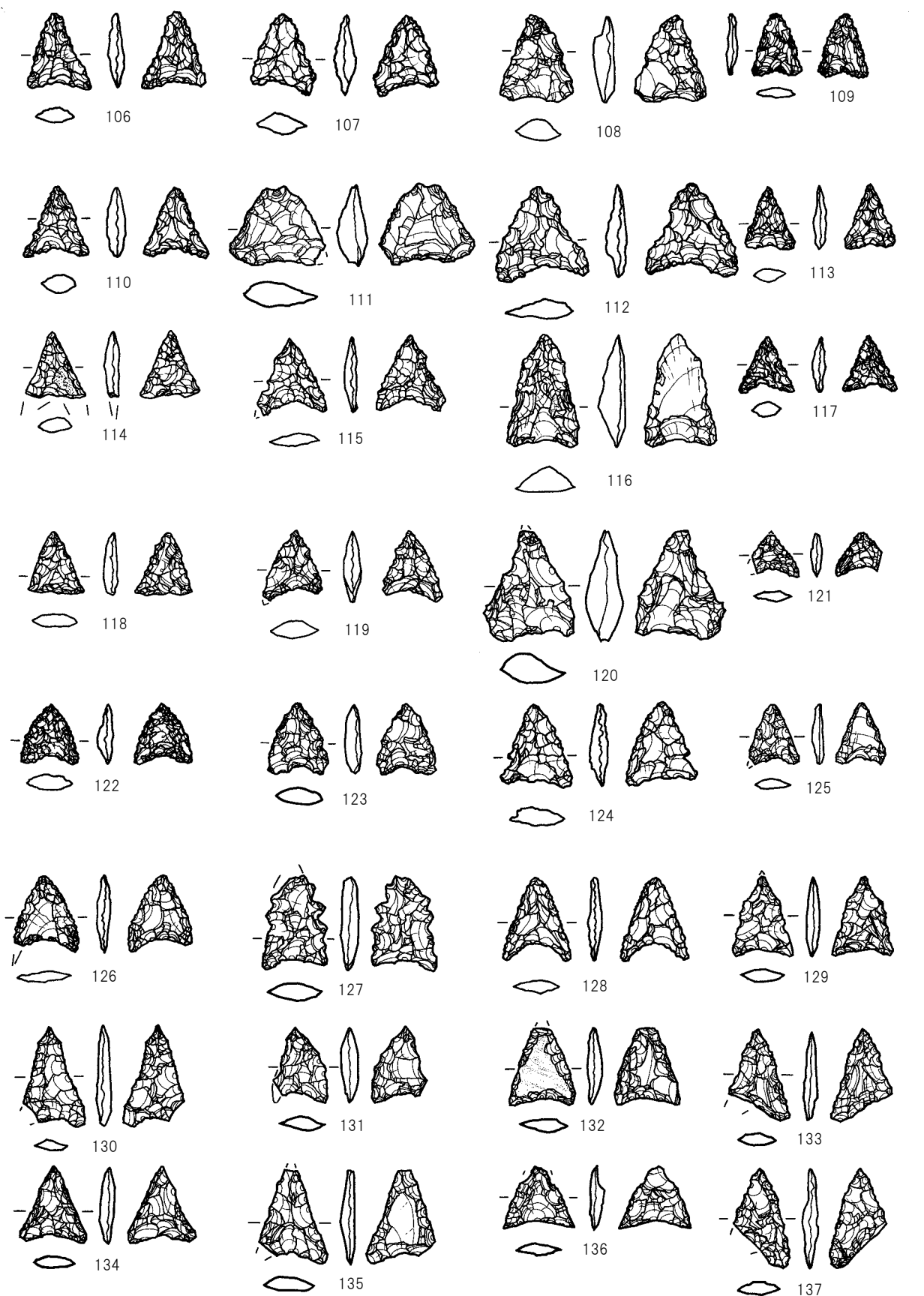
第275図 出土石器 石鏃(2)



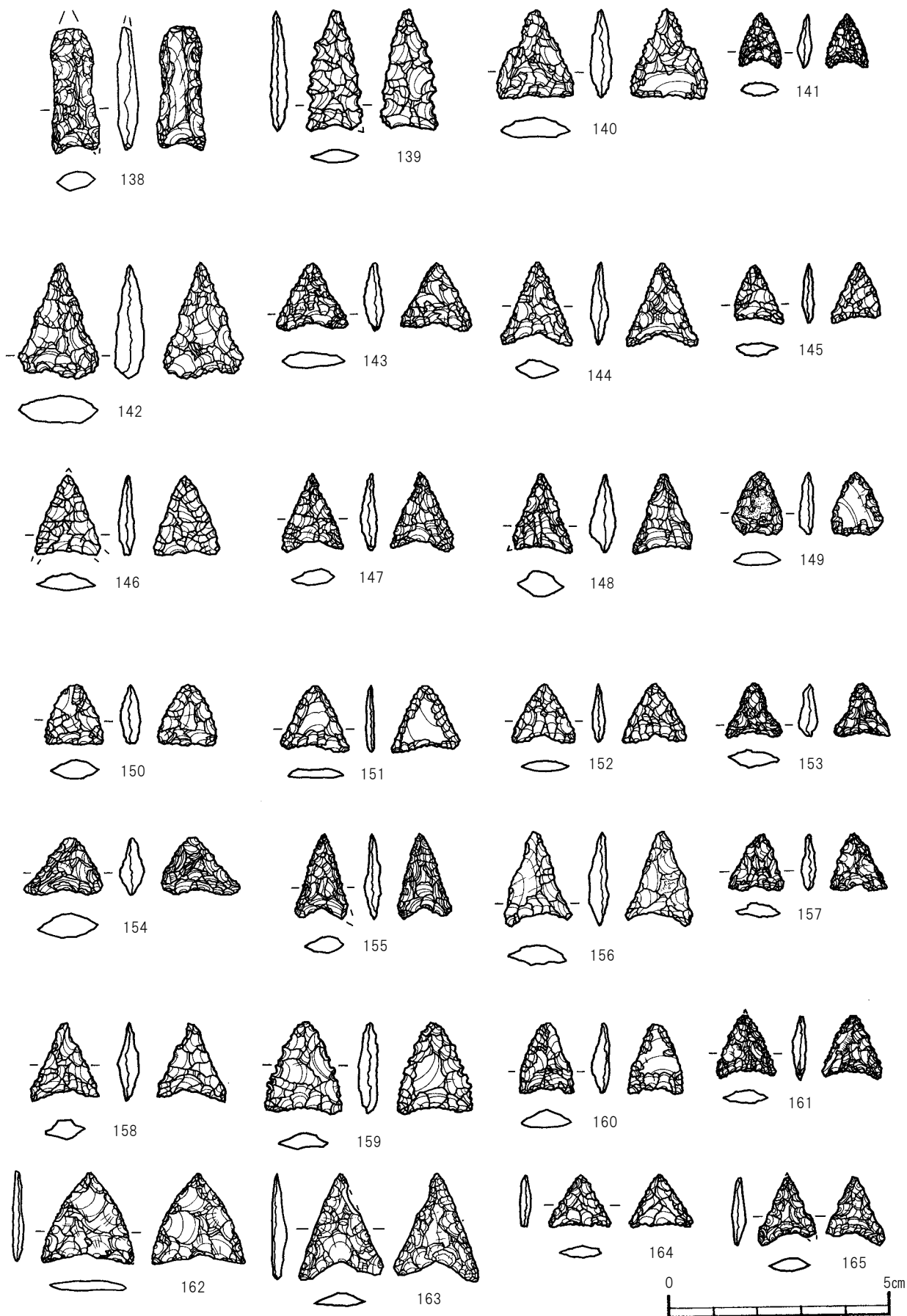
第276図 出土石器 石鏃(3)



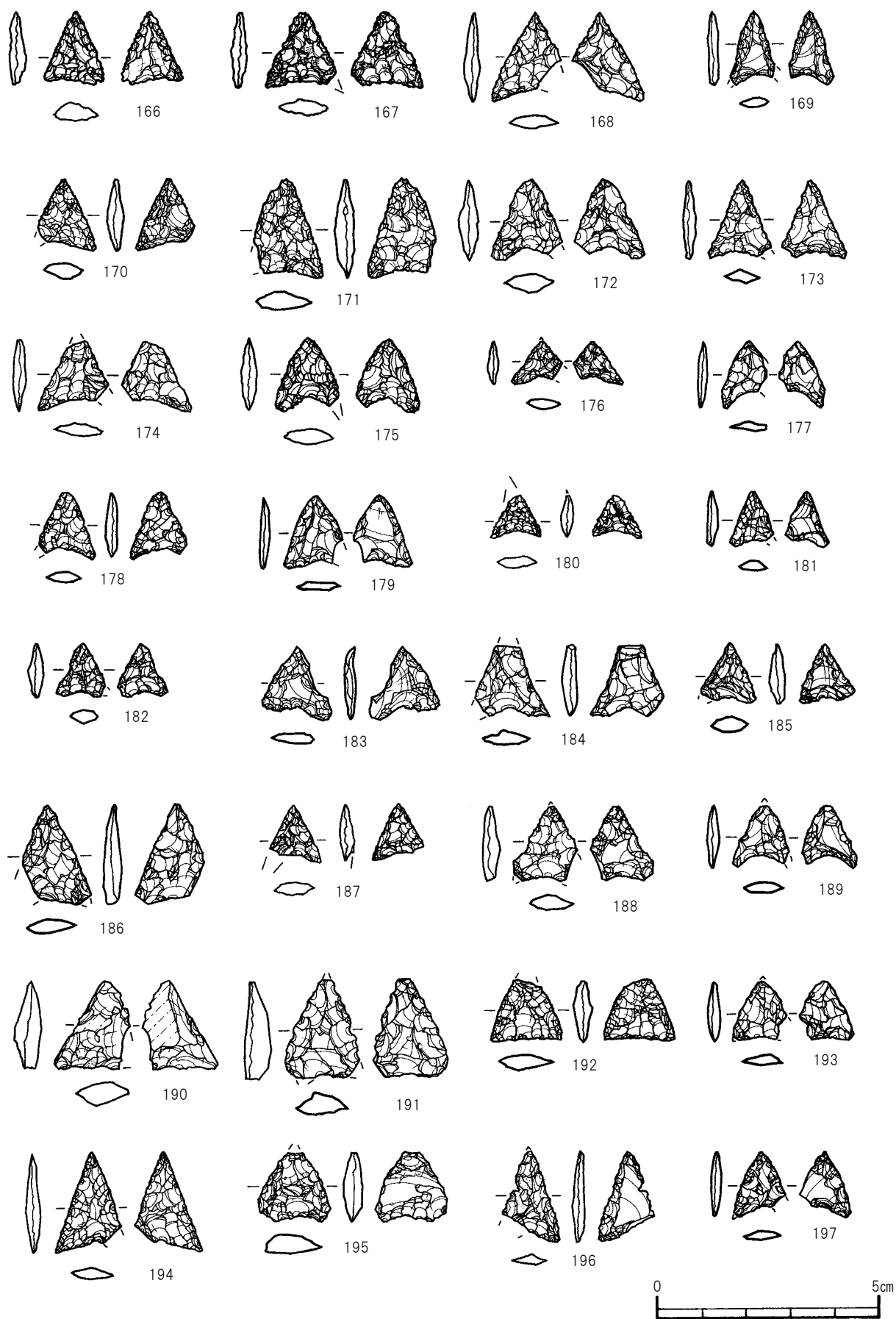
第277図 出土石器 石鏃(4)



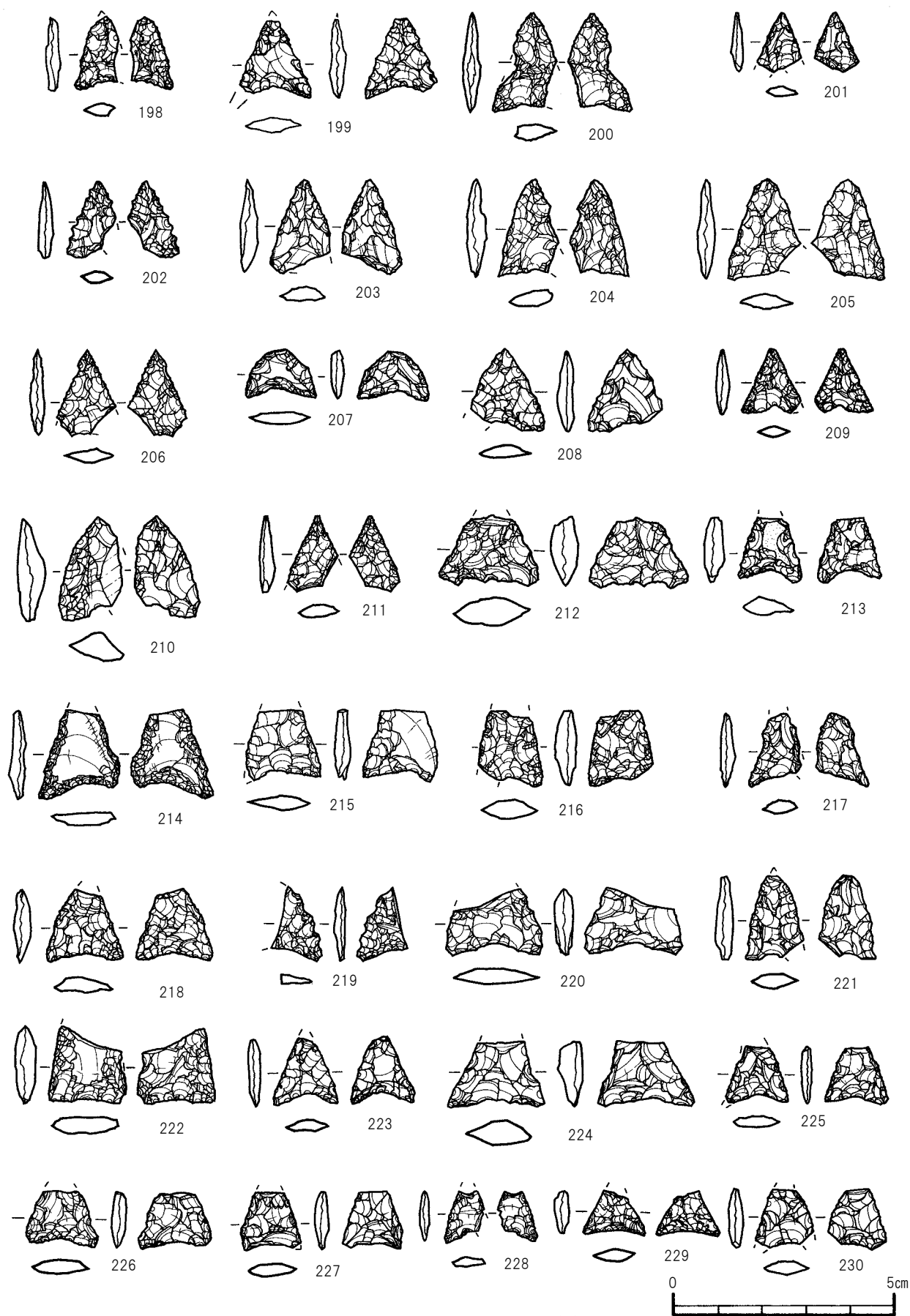
第278図 出土石器 石鏃(5)



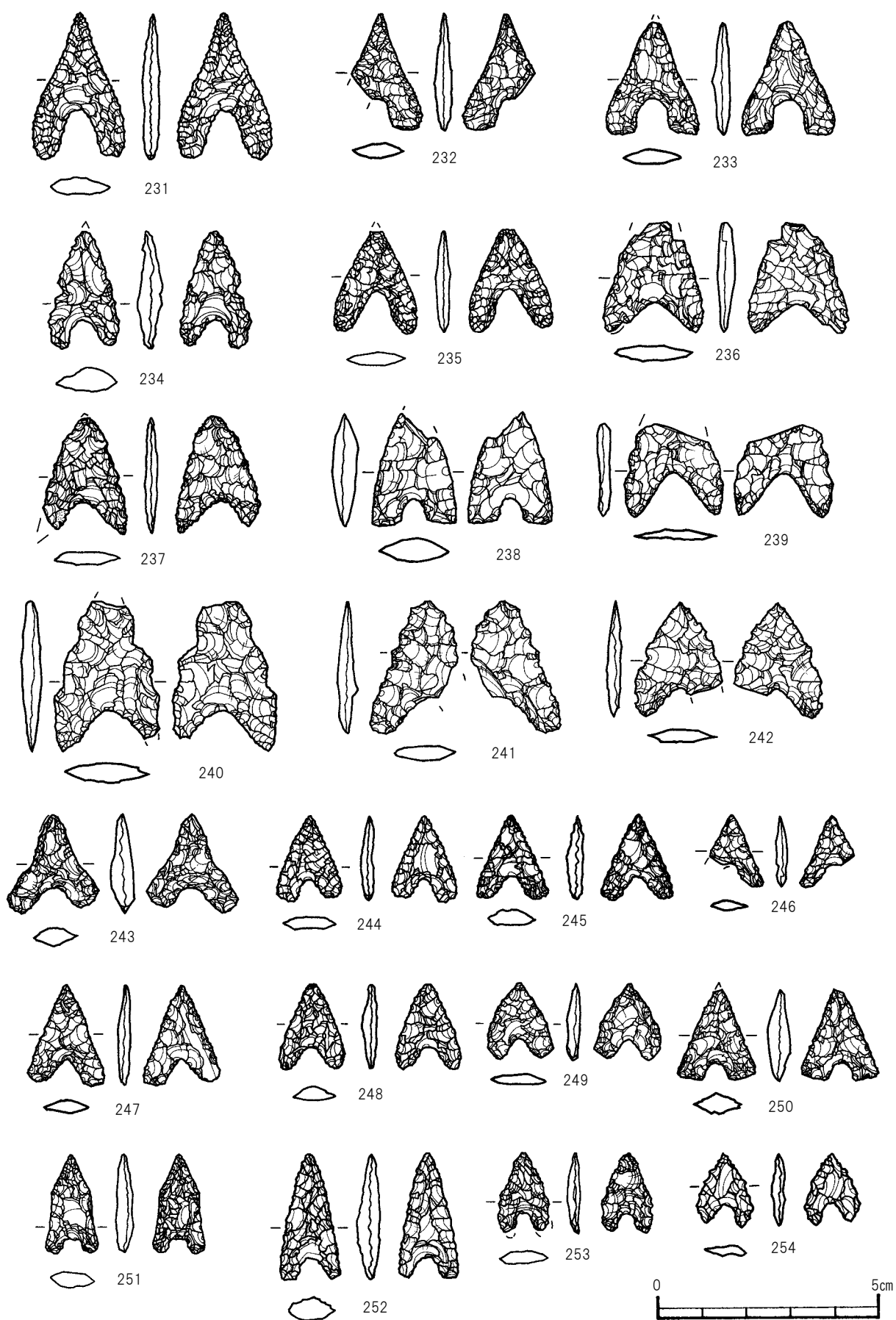
第279図 出土石器 石鏃(6)



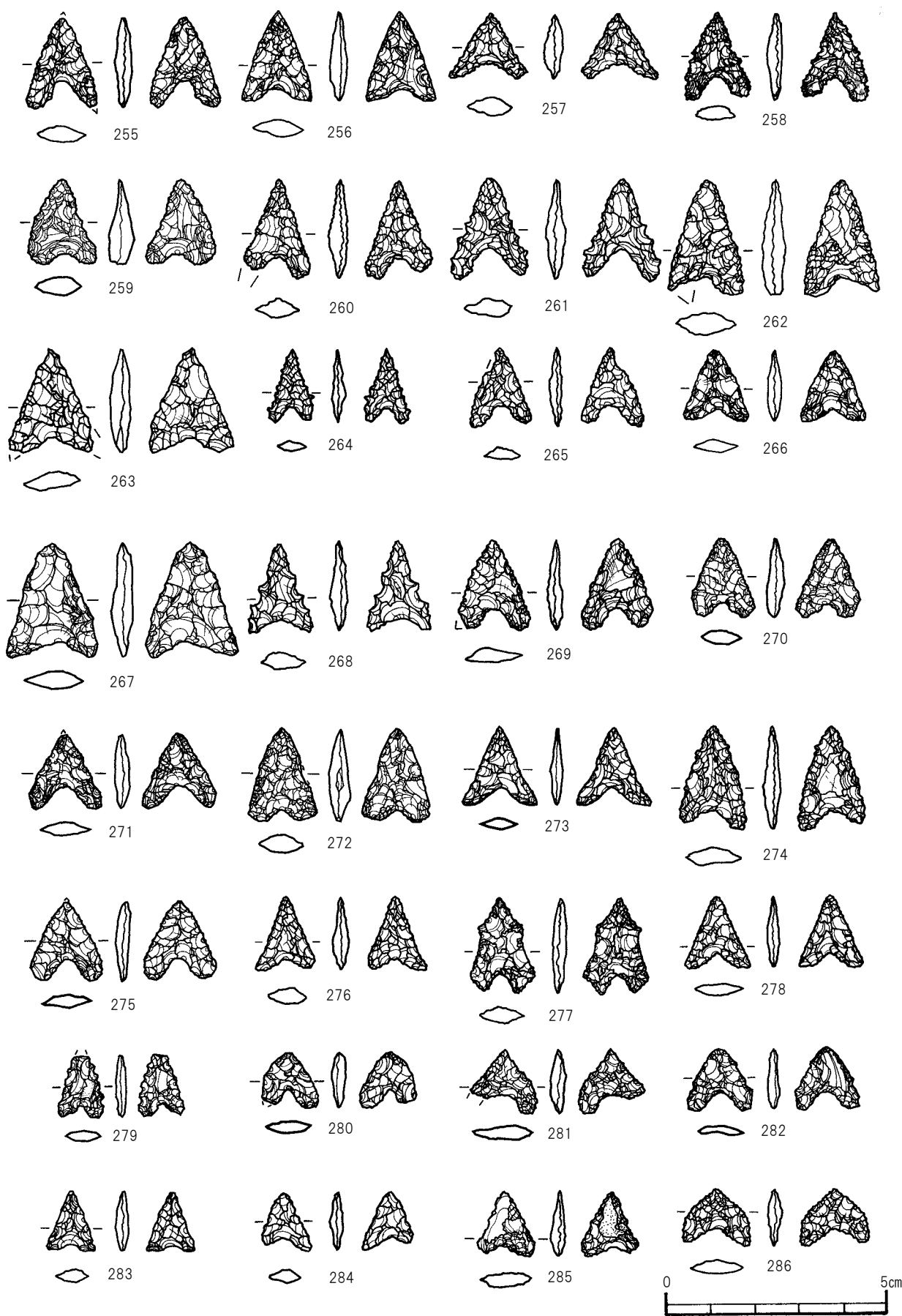
第280図 出土石器 石鏃(7)



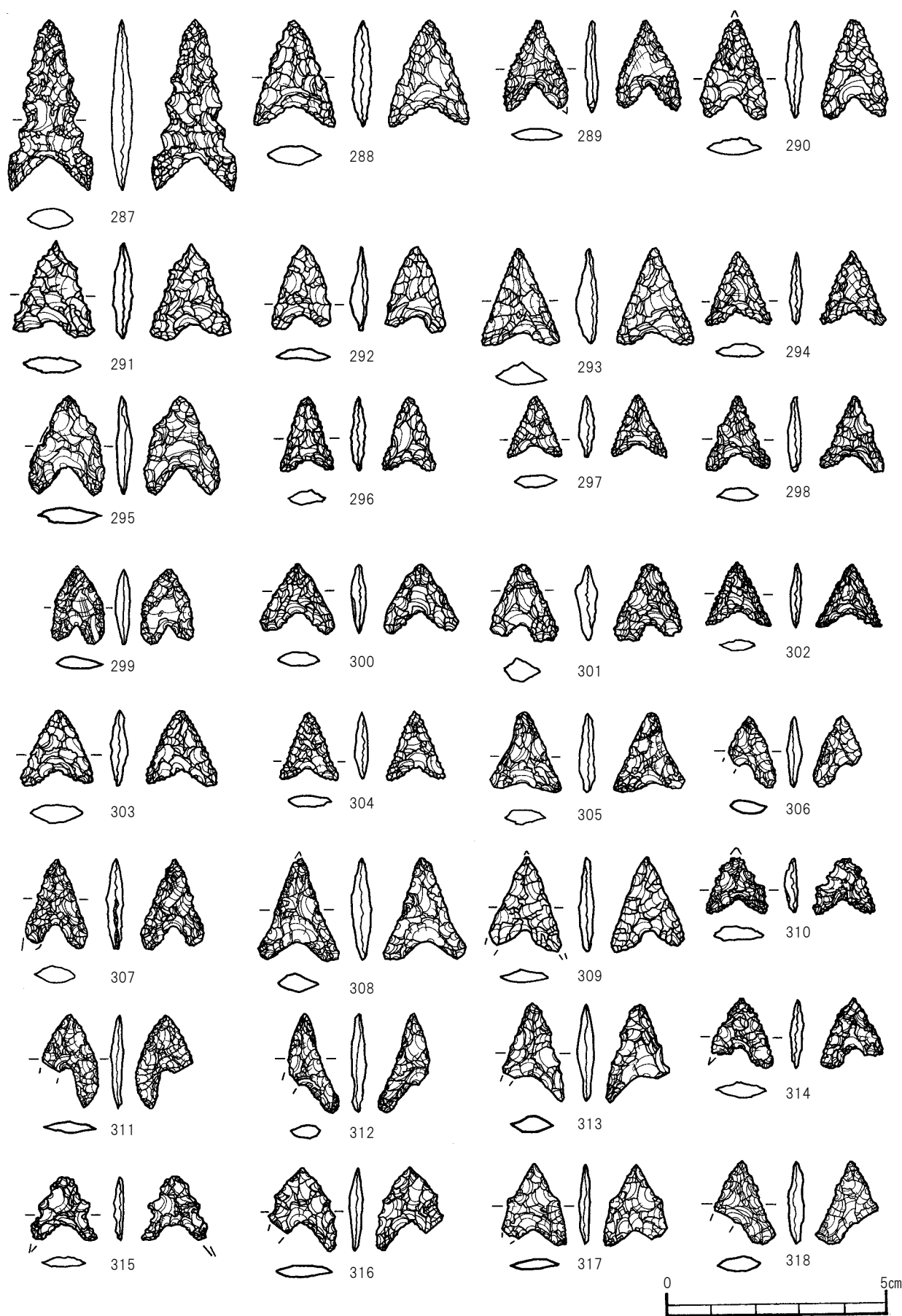
第281図 出土石器 石鏃(8)



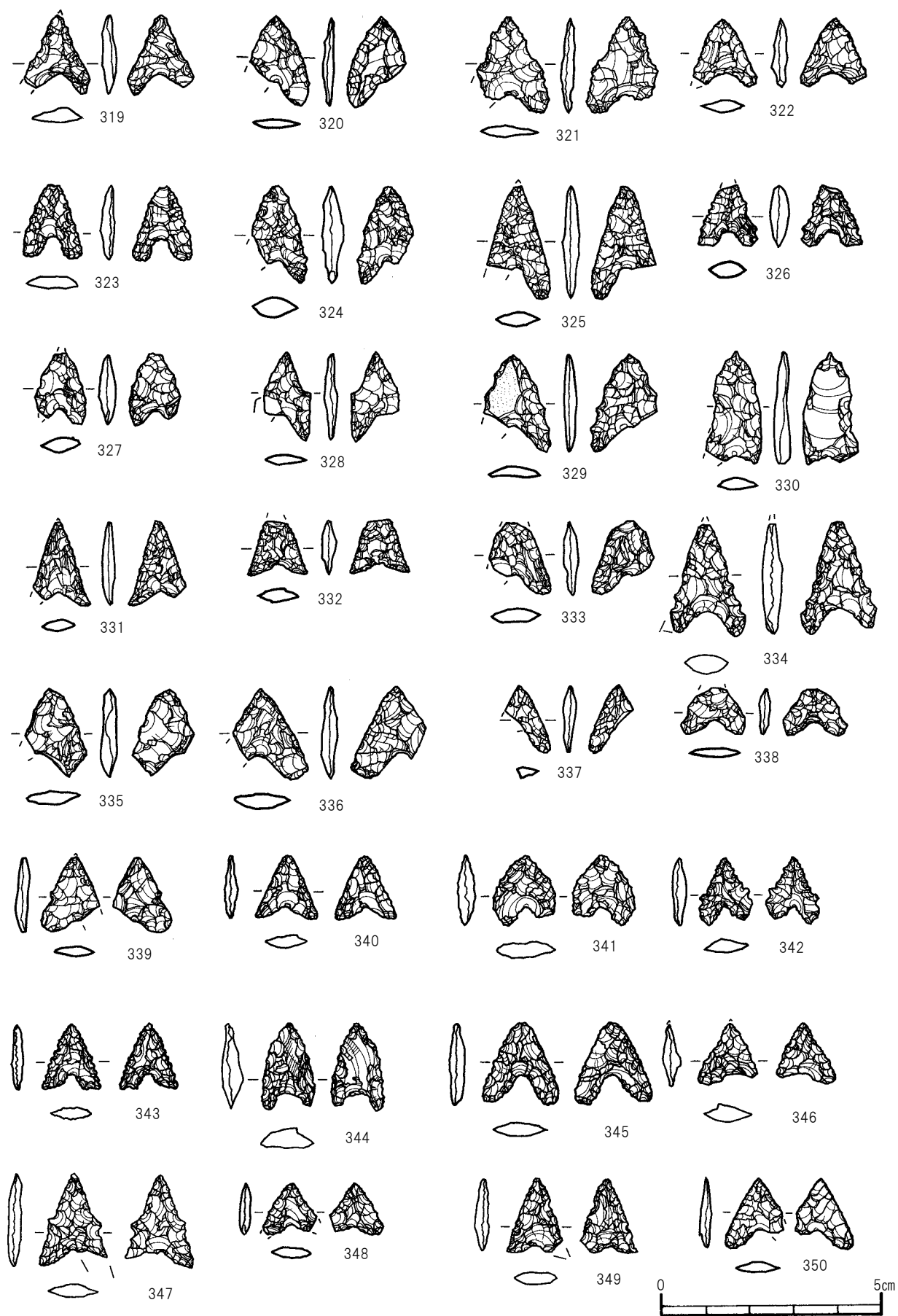
第282図 出土石器 石鏃(9)



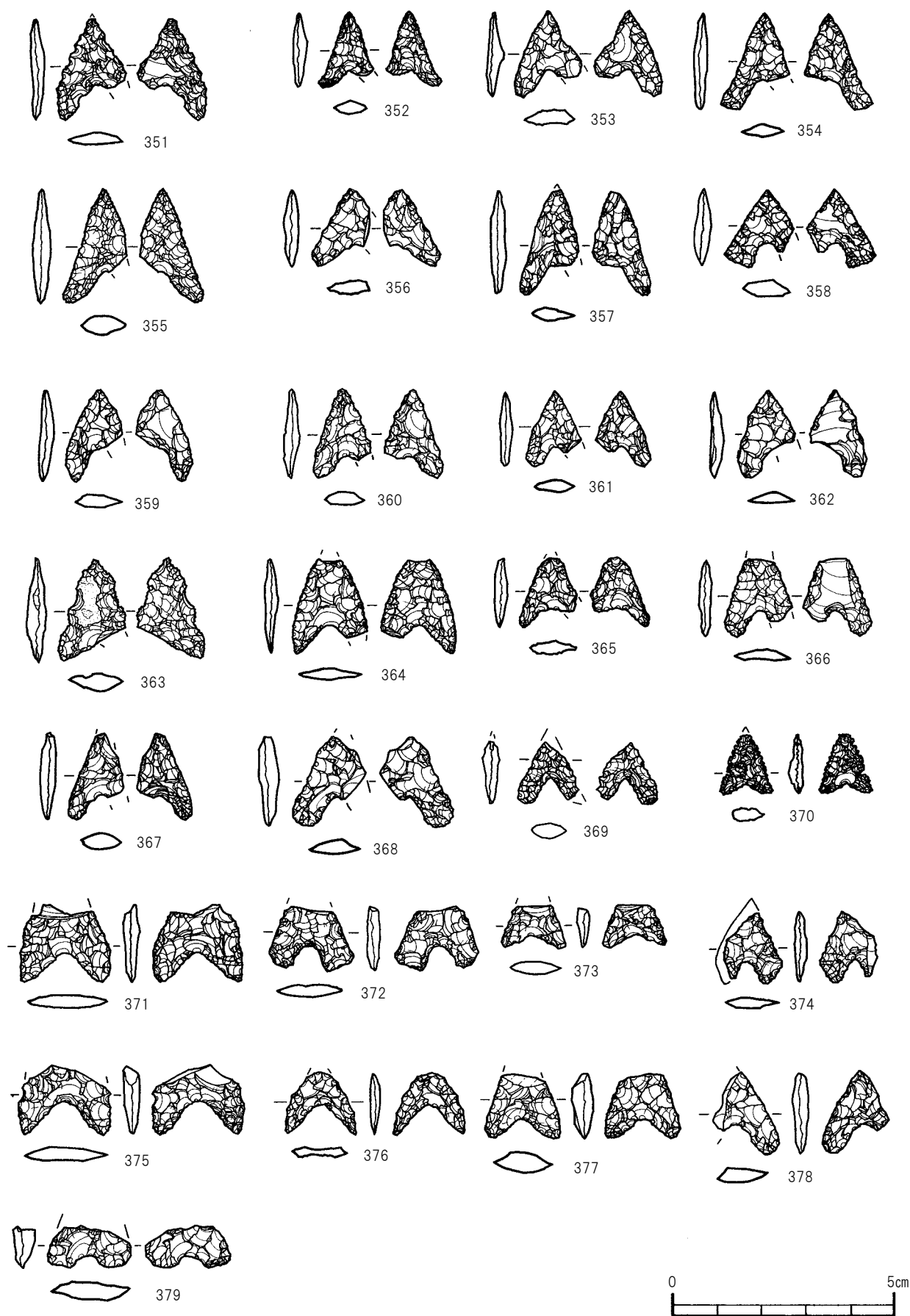
第283図 出土石器 石鏃(10)



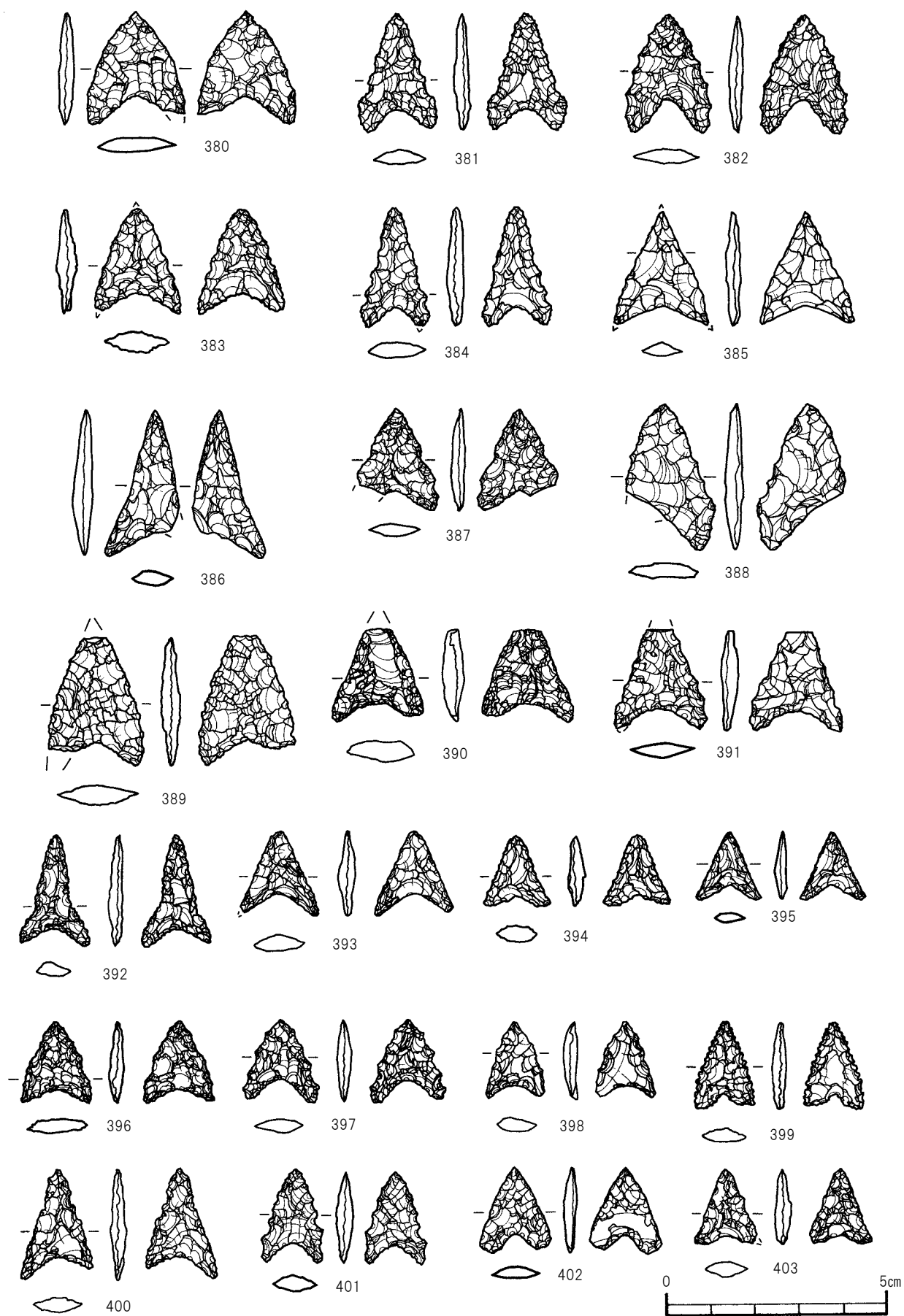
第284図 出土石器 石鏃(11)



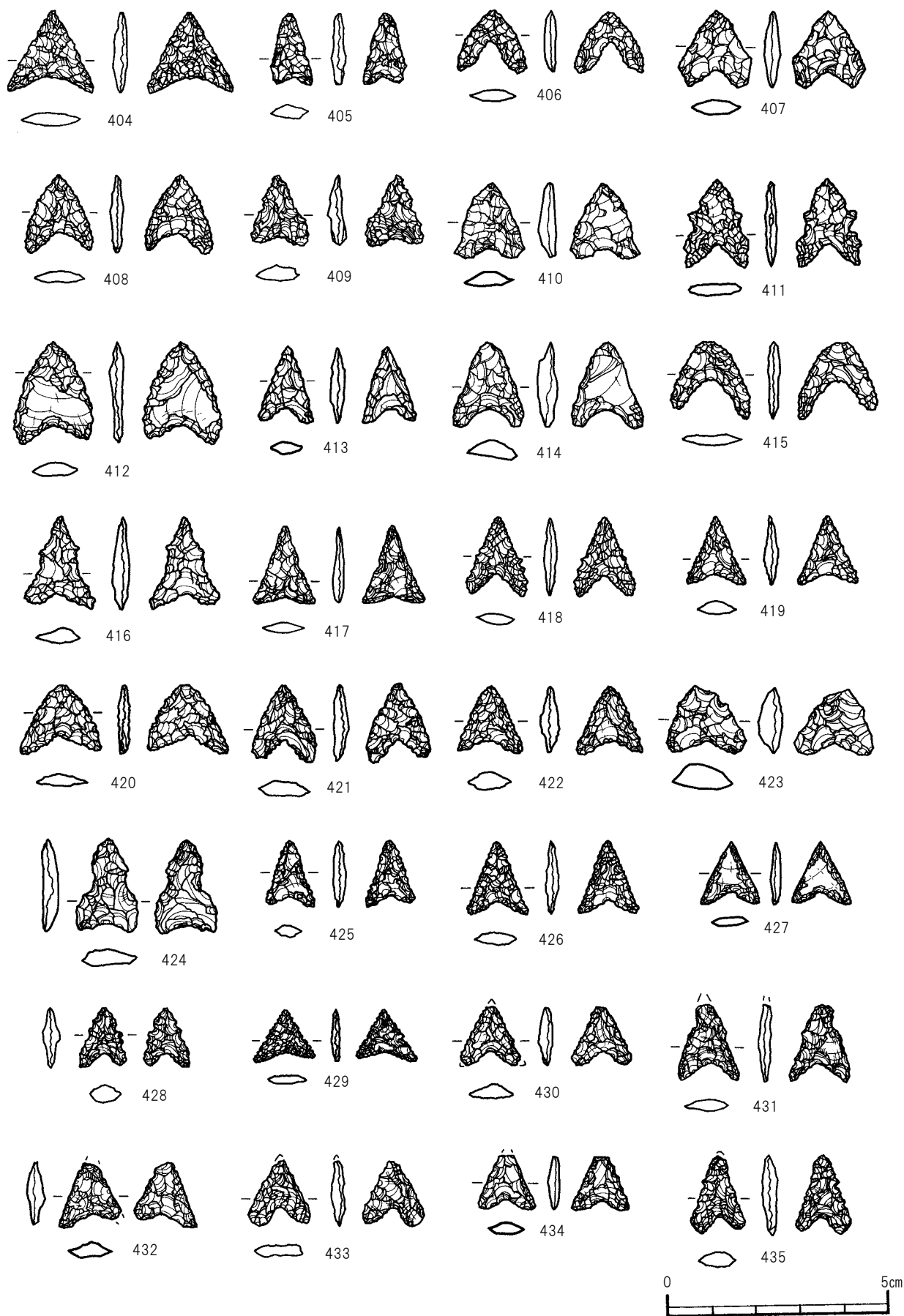
第285図 出土石器 石鏃(12)



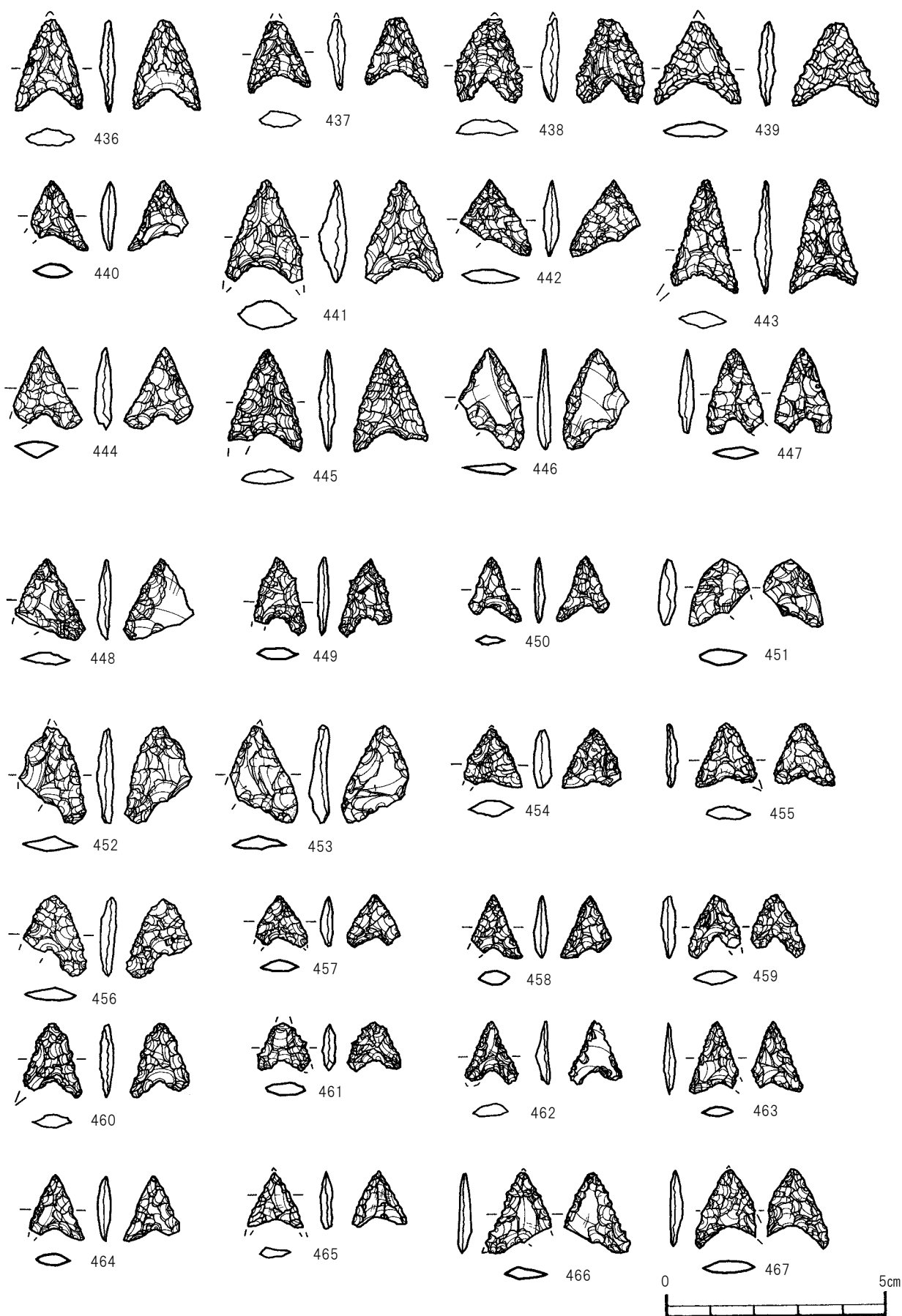
第286図 出土石器 石鏃(13)



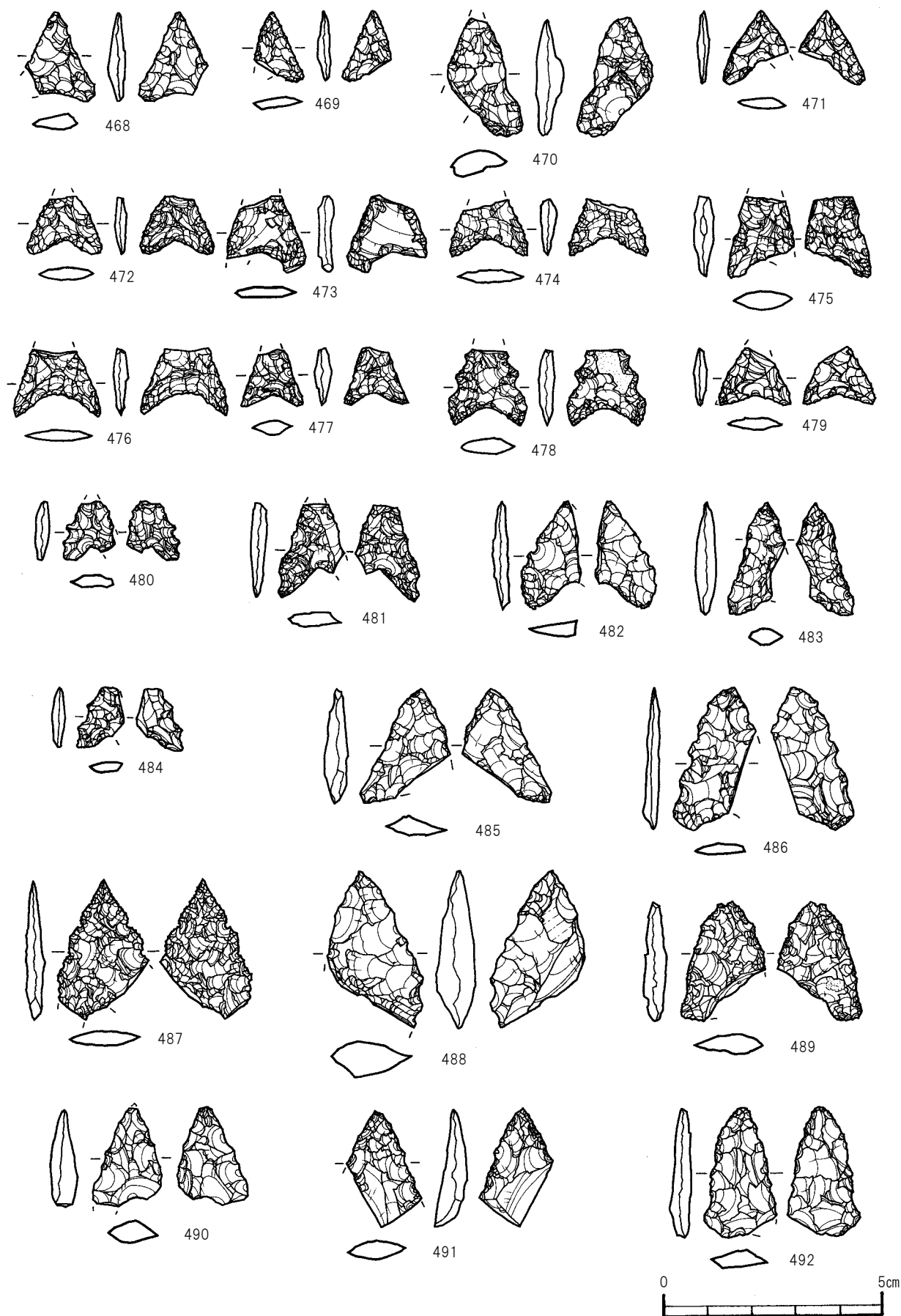
第287図 出土石器 石鏃(14)



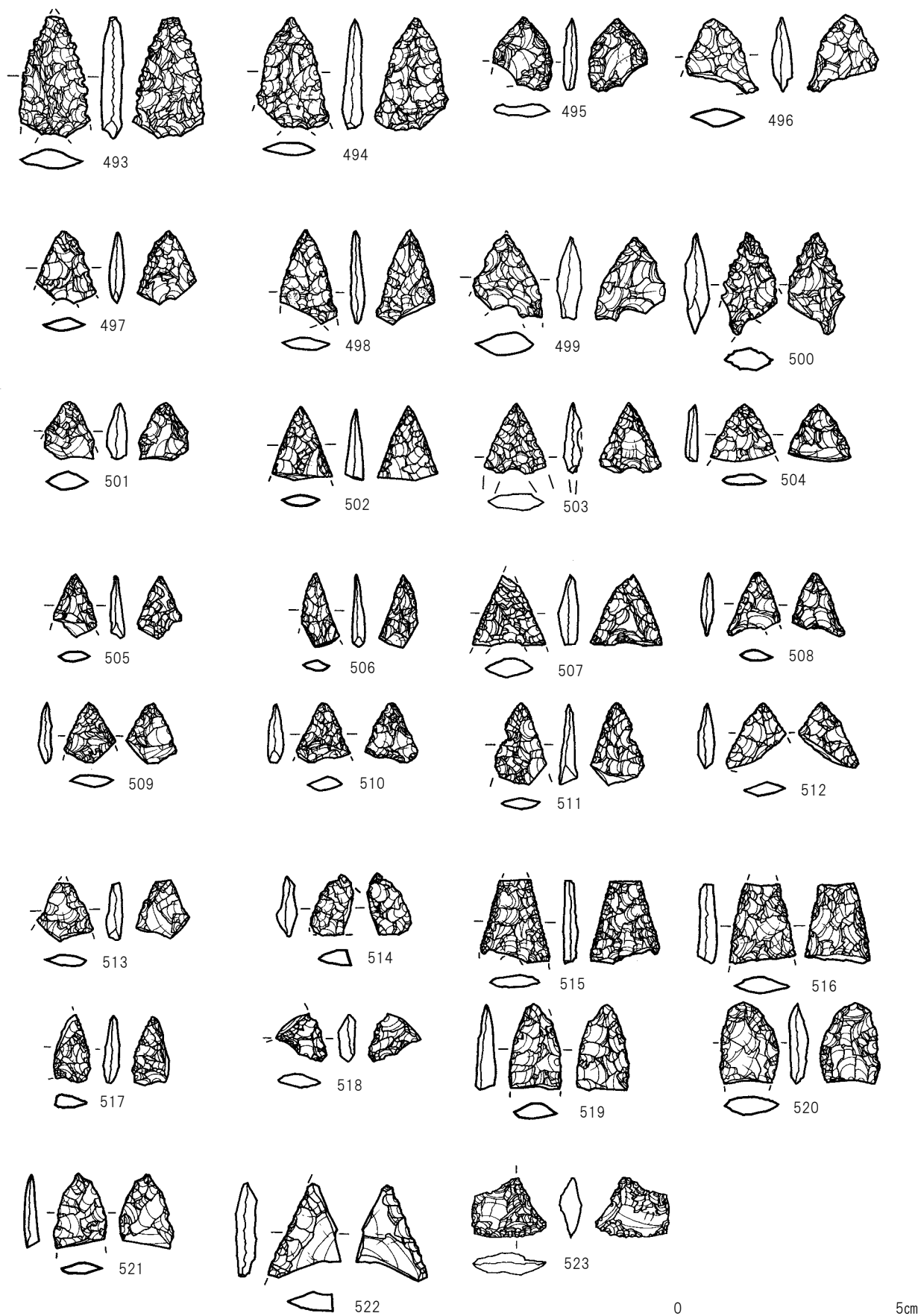
第288図 出土石器 石鏃(15)



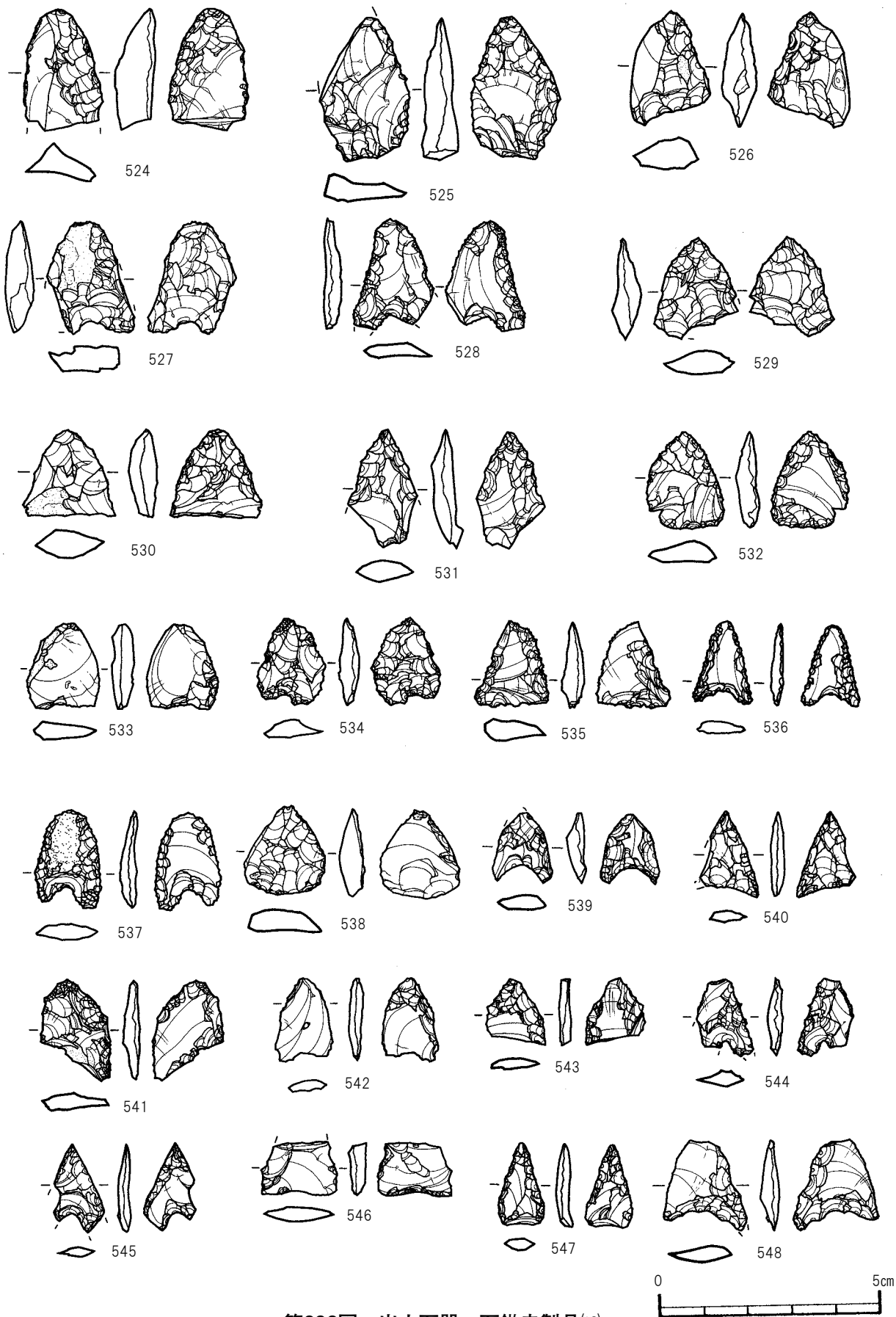
第289図 出土石器 石鏃(16)



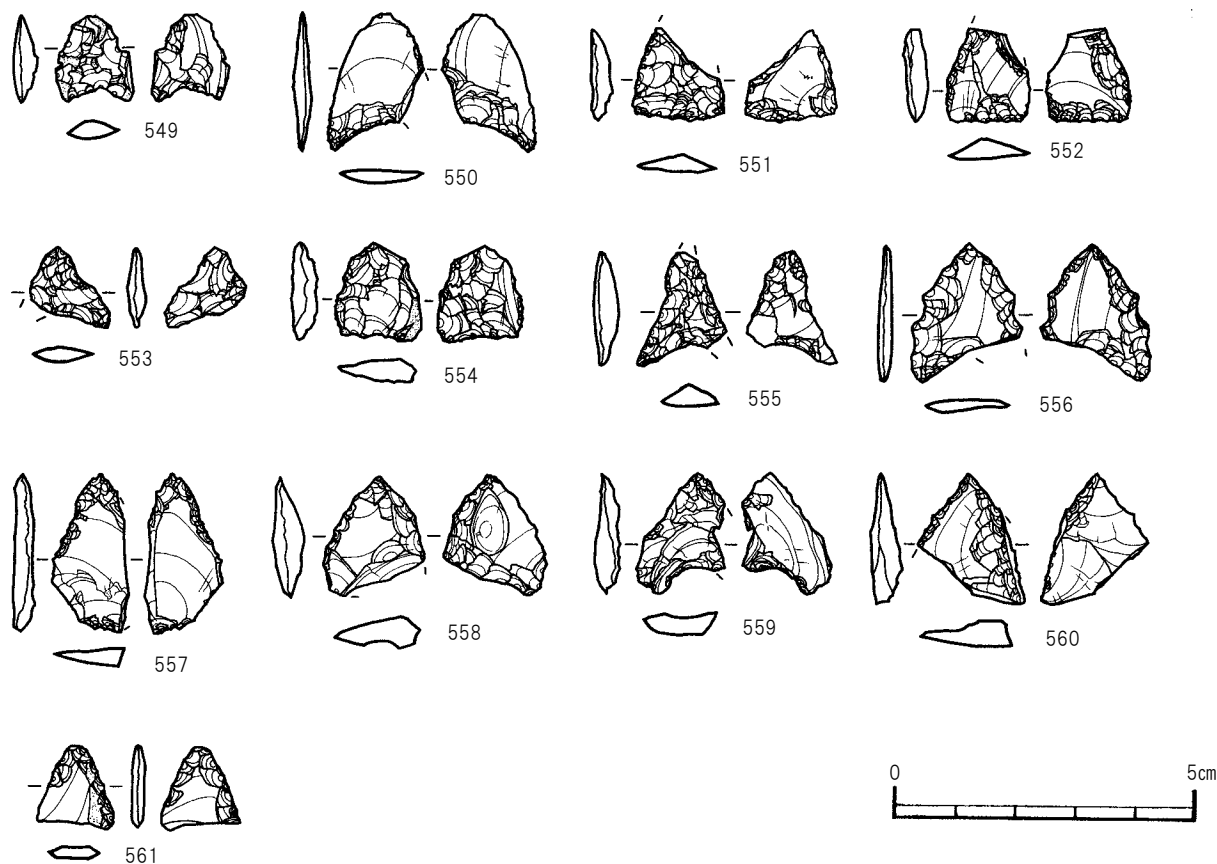
第290図 出土石器 石鏃(17)



第291図 出土石器 石鏃(18)



第292図 出土石器 石鏃未製品(19)



第293図 出土石器 石鏃未製品(20)

ここに38点を掲載したが、素材剥片とその用い方に斉一性は見られない。例えば、533, 538, 551は同じ鱗状剥片を素材としているようであるが、素材の打点が、533では右側縁に、538では基部中央に、551では基部右端に来ると言ったように、用い方が共通する個体は少ない。538と559とが、542と551とが共通するものの、それぞれ形態的には一致しないであろうことが推察される。

次に作り方であるが、個体を背面右 (R), 同左 (L), 同基部 (B), 腹面右 (r), 同左 (l) 同基部 (b) と6分割してその分割面ごとの器面調整の前後関係や、周縁調整の前後関係、さらには基部の挟りがどの段階で施されるか等について全く斉一性が見られない。

524ではR-lと進んで放棄、525ではl-r-B, 526ではr-l-R-B-b, 527ではR-l-B-b, 530ではr-lとなるように、作り方に共通する部分がないようである。おそらく、縄文時代全期間、多種の土器型式に渡るからであろう。

逆の言い方をすれば、縄文時代の石鏃の作り方は、時期 (共伴する土器型式) によって異なるであろうという予測も成り立つ。しかしながら、作り方=製作手順を完成品から復元するのはなかなか困難であり、かつ土器型式ごとの製作手順の復元を確定するのも、共伴する土器型式が限定されなければ困難であろう。また、基部形状や側縁形状等などによる細分類と製作手順とを結びつける

ことは出来ない。例えば、537や539は凹基式になるであろうが、側縁形状は不明としか言いようがない。同じく、546、547は凹基式に作られないとは断言できない。

8 搔器

搔器は35点を掲載した。これらも縄文時代の所産であろうが、細かな土器編年上への位置付けのみならず、早期、前期、中期等の時期別も判然としない。総体として、「縄文時代の搔器」として捉えるしかない。

しかしながら、本遺跡の搔器については興味深い事実を指摘できる。

まず第一に、大きさの多様性である。1や2のように大振りなものから、14、16のように拇指状スクレイパーまでの違いがある。

次に、刃部形状の多様性である。たとえば、1～3等のように浅い弧状の刃部、4、6等のように深い弧状の刃部、20～28、32等のように直線的な刃部、8～10等のような、いわゆるラウンド・スクレイパーになるもの、33～35のように内湾する刃部の5種類がある。

また、素材剥片も様々であり、数的に一番多いのは横長剥片であるが、その他に、14は寸詰まりの縦長剥片、25は礫皮面を残す縦長剥片、8は鱗状剥片等、様々である。さらに、素材剥片と刃部位置の関係に至っては、横長剥片素材の中でも様々であり、斉一性は見られない。例えば、1、3等は打点に対向する長辺に刃部を作るが、9、30等は打点を含めた短辺の一つに刃部を作る。また、10、11等は短辺の一つから長辺にわたって、ラウンドする刃部や深い弧状の刃部を作る。

以上のような搔器の多様性も、先に石鏃で概観したように、縄文時代の中でも多数の時期にまたがっていることも原因であろうが、それよりも、用途もしくは対象とする皮の種類、例えば猪の皮、鹿の皮等のような違いや、毛皮かそうでないのか、幼獣か成獣かの違いなど、皮のなめし作業だけでも違いが生じるからではなかろうか。さらに、対象物が皮以外の場合はないのであろうか。

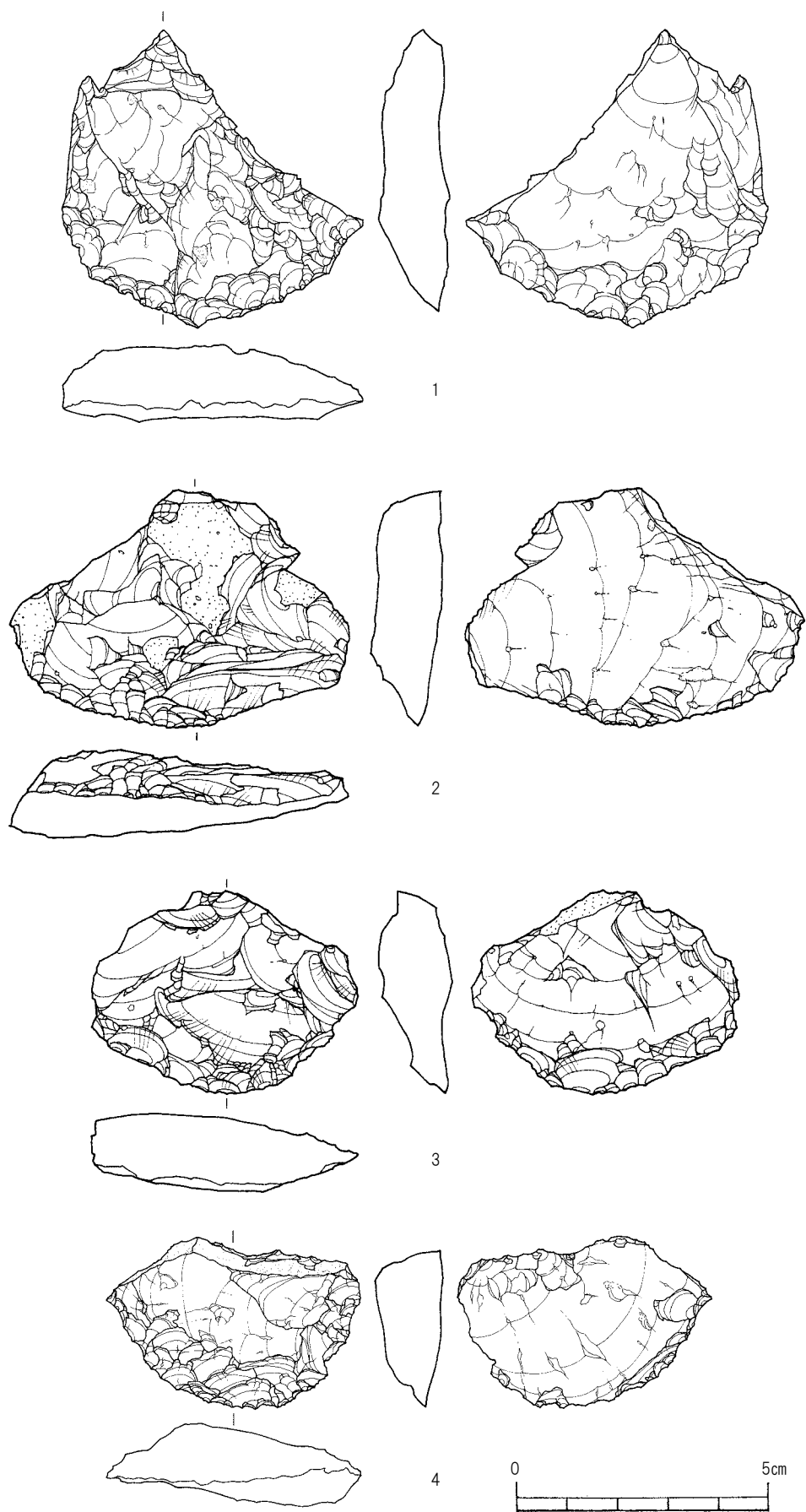
搔器においても、時期的、地域的な、形態的あるいは技術形態的相違があるのではなく、機能、用途による相違を想定した方が、より実態に近いのではないかと考えさせる資料である。

9 彫器

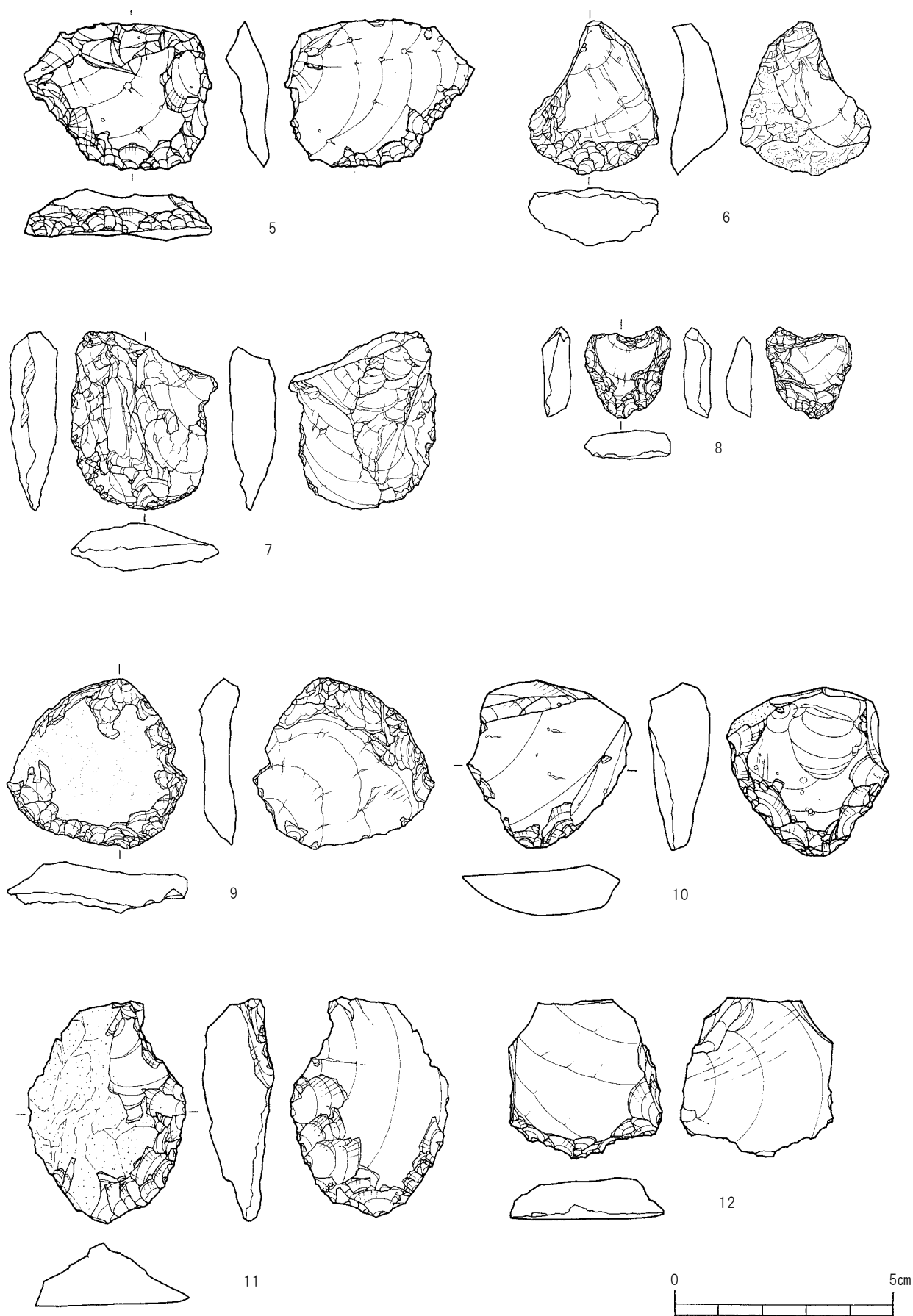
2点のみ分類した。縄文時代における彫器の存在は、これまでにいくつかの遺跡で指摘されてきたところである。本遺跡でも彫刀面を持つ石器を抽出できた。

1には1条の彫刀面が作られている。ただし、この彫刀面は、右側面の細かな調整剥離によって切られており、この石器の最終剥離ではない。素材となったのは、第338図石核(1)の4や5のような石核の残核であろう。三角錐状になる残核を利用して、周縁調整を施したのち、先端に彫刀面を作り出している。

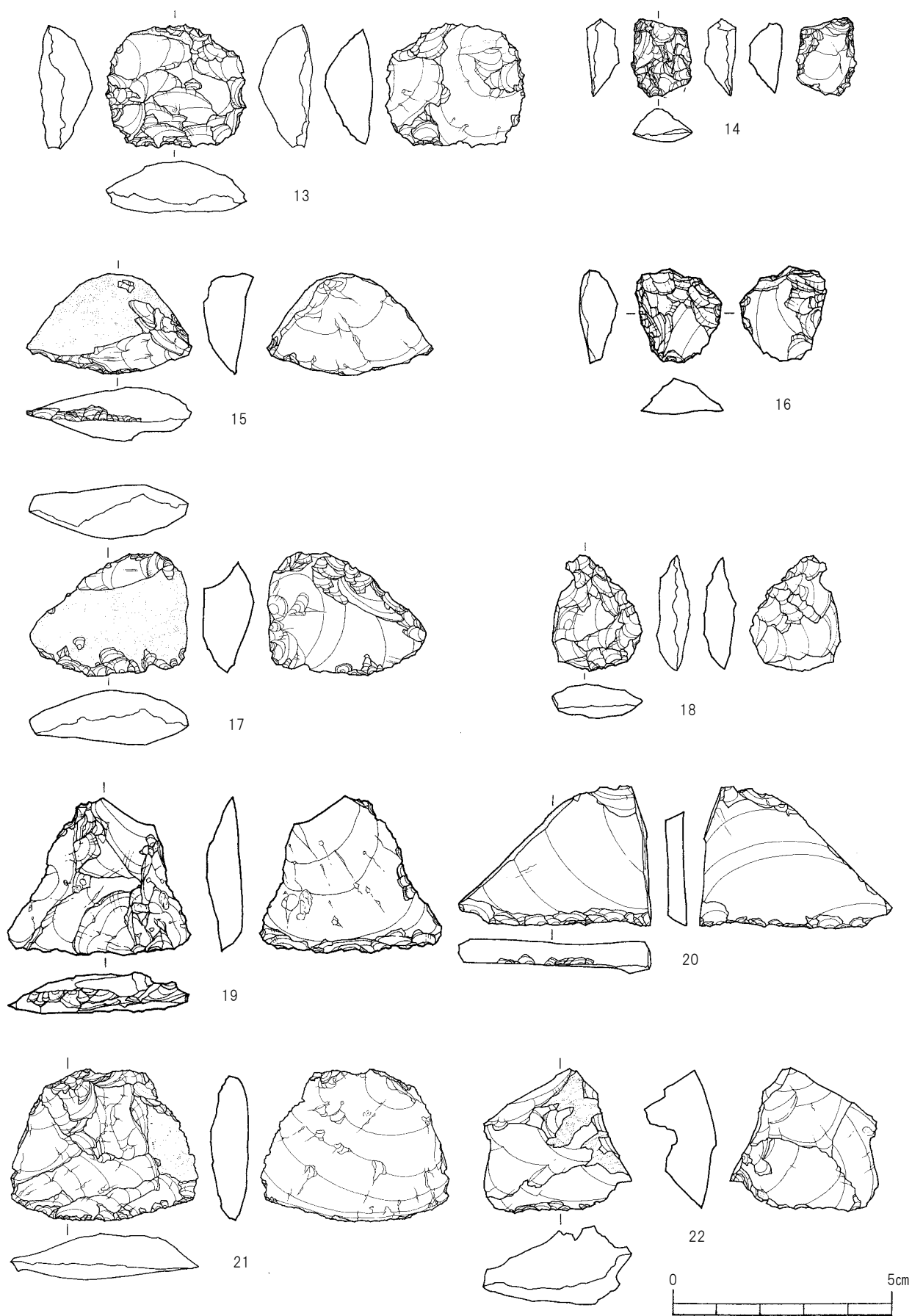
2にも1条の彫刀面が作られており、旧石器時代の荒屋型彫器を想起させるような槌条剥離である。素材として用いられたのは縦長剥片であるが、彫刀面が作られている末端は、蝶番剥離になっていたようであり、そこに1条の調整をした後、槌状剥離を施している。また、左側縁には調整は施していないものの、微少な剥離が連続しており、使用によるものであろう。



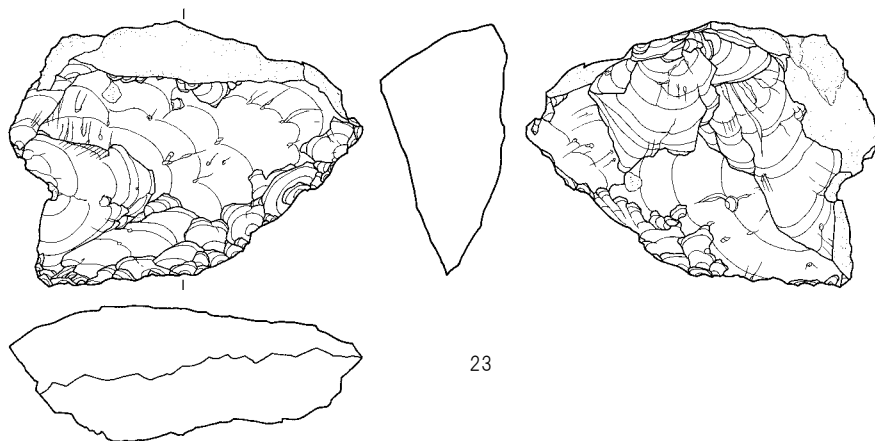
第294図 出土石器 搔器(1)



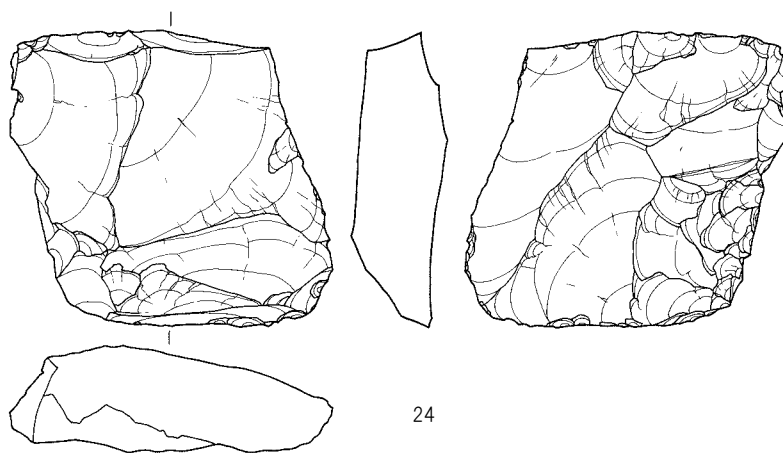
第295図 出土石器 搔器(2)



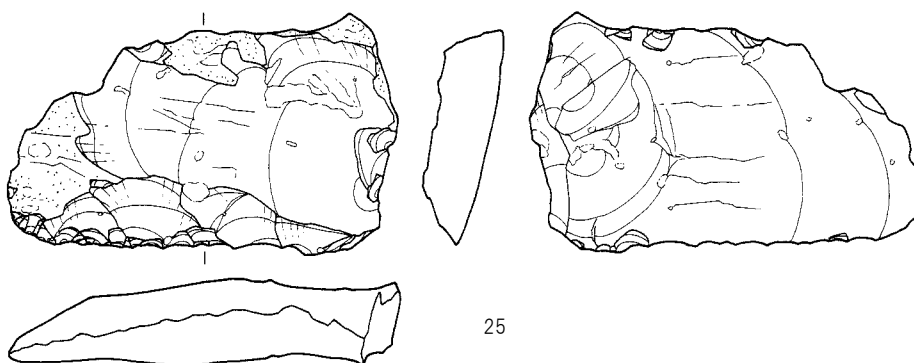
第296図 出土石器 搔器(3)



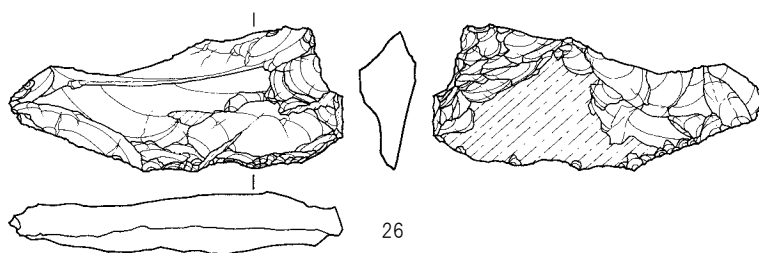
23



24



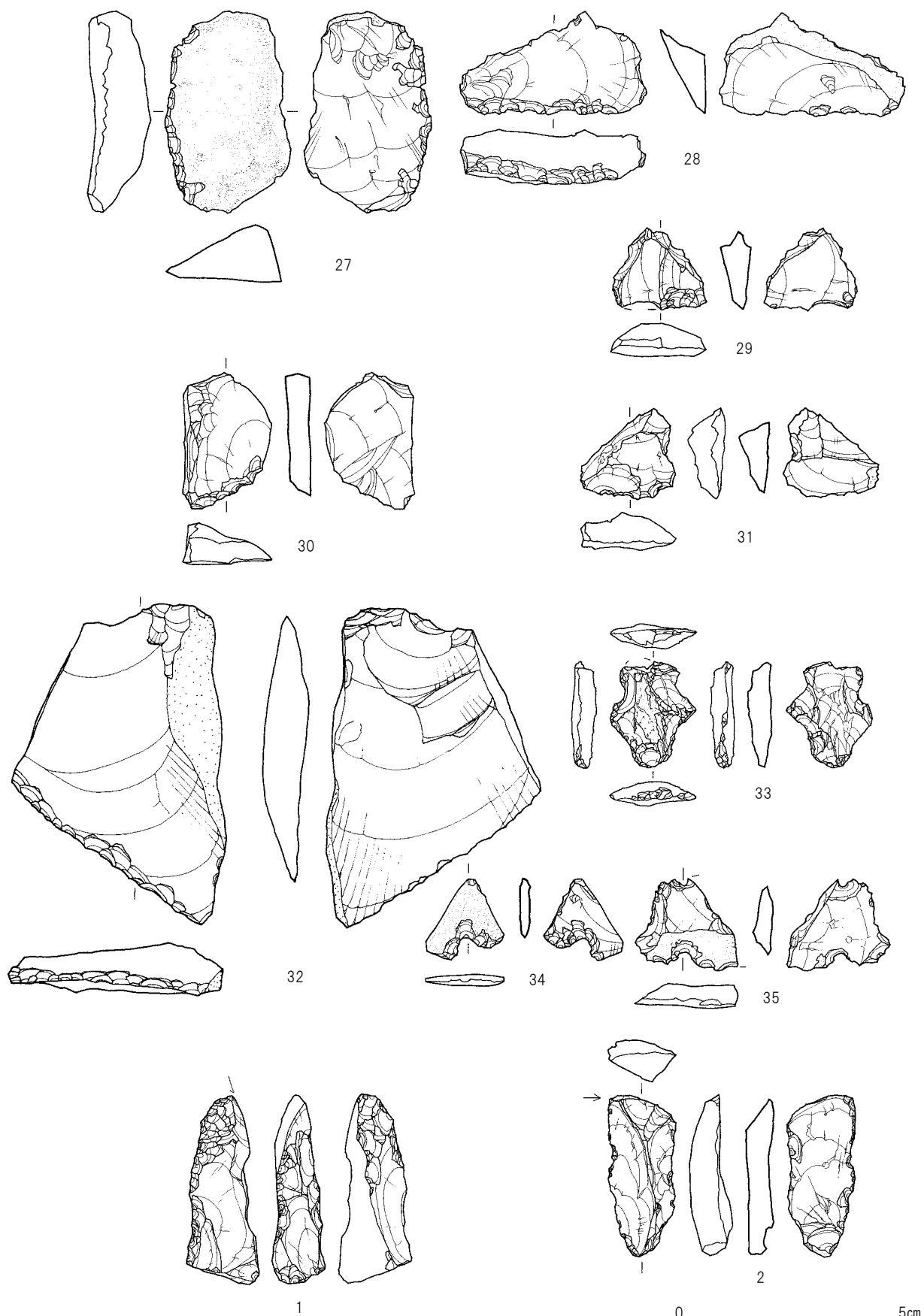
25



26



第297図 出土石器 搔器(4)



第298図 出土石器 搔器(5), 彫器

10 削器

削器として112点を分類したが、このうち、110や111、112は石匙として分類しても妥当であるかも知れない。この3点を石匙に分類しなかったのは、つまみの作り方が一般的な石匙と異なっているからである。一般的な石匙のつまみは、挟りによって体部と明瞭に分離され、一端すぼまったのち膨らんだ平面形状となる。この3点は、挟りが施されることなく、体部からなだらかな曲線を持ってつまみとなっている。この挟りがあるか、ないかによってこのような分類としたのである。112は110や111のつまみ部であろう。

さて、この3点以外の109点であるが、かなり多様性に富んだものである。

1～3は大型粗製である。1は流紋岩の、2、3は頁岩の大型剥片を素材とし、ラフな器面調整とやや緻密な周縁調整、刃部調整がほどこされている。この3点は次のような点で礫器と異なる。縄文時代南九州の礫器は一般に安山岩の岩体から節理によって剥がれ落ちた礫を素材とし、器面調整が施されることなく刃部調整だけで作られているのが、最大の特徴である。この3点はどれもこのような特徴がない。さて、このような粗製大型の削器の用途は何か。堅穴住居の屋根、壁材として「茅」は欠かせないものであろうが、茅は根本で刈り取らないと役に立たない。堅く頑丈な茅の根元を切り取れるのは、本遺跡はもちろん他の遺跡の石器の中でも、このような大型粗製の削器以外には見当たらない。

石鏃、搔器の項でも述べたように、本遺跡の石器は多様性に富んでいるが、削器も例外ではない。

素材も縦長剥片、横長剥片、不定形剥片、残核(89)と多様であり、その大きさもまた然りである。

さらに、剥片のどの部位に刃部を作るかも多様である。長辺の全体を刃部加工するもの、その一部にのみ刃部加工するもの、短辺の全体を刃部加工するものなどである。この観点での非常に特異な例は4と98である。4は、不定形剥片の一端に方形に突出させた刃部を作っており、他の部位には周縁調整すら施されない。98は4よりも小形であるが、不定形剥片の一端に弧状に突出した刃部を作る。このような突出する刃部の削器は早期ではそれほど珍しい例ではない。

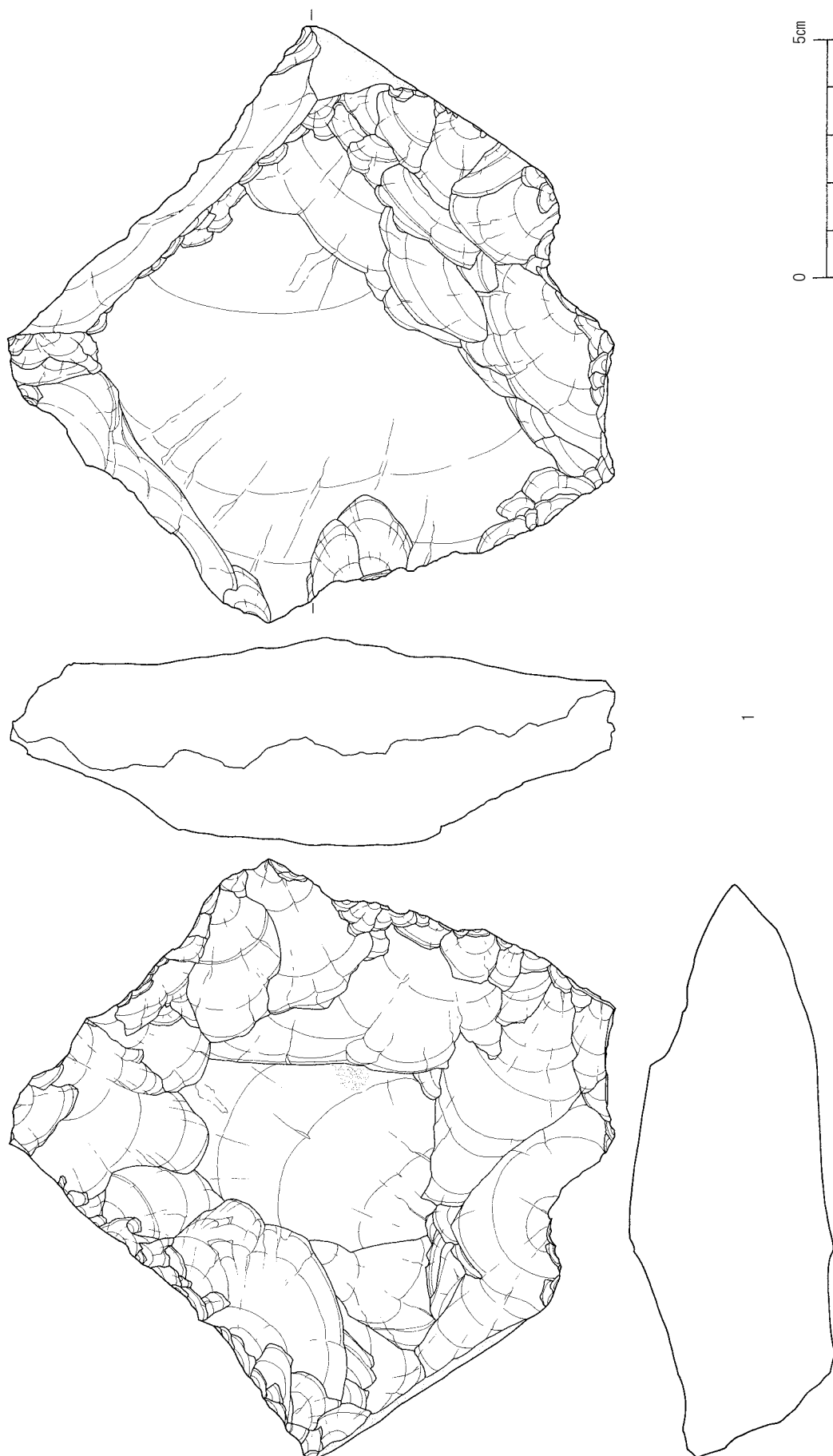
刃部形状も、弧状、直線的なもの、内湾するものなど様々である。この観点で特異なものが81である。これも不定形剥片を用いているが、その長辺に丁寧な刃部調整を行ったのち、その端に意図的なノッチを施している。このノッチは刃部の一部であると見なす以外には、捉えようがない。

相対する位置に同様なノッチがあれば、石匙のつまみとして理解できるが、それはない。おそらく、このようなノッチを持つ刃部が何らかの理由で必要とされるのであろう。これの類例は上野原遺跡に1例ある。

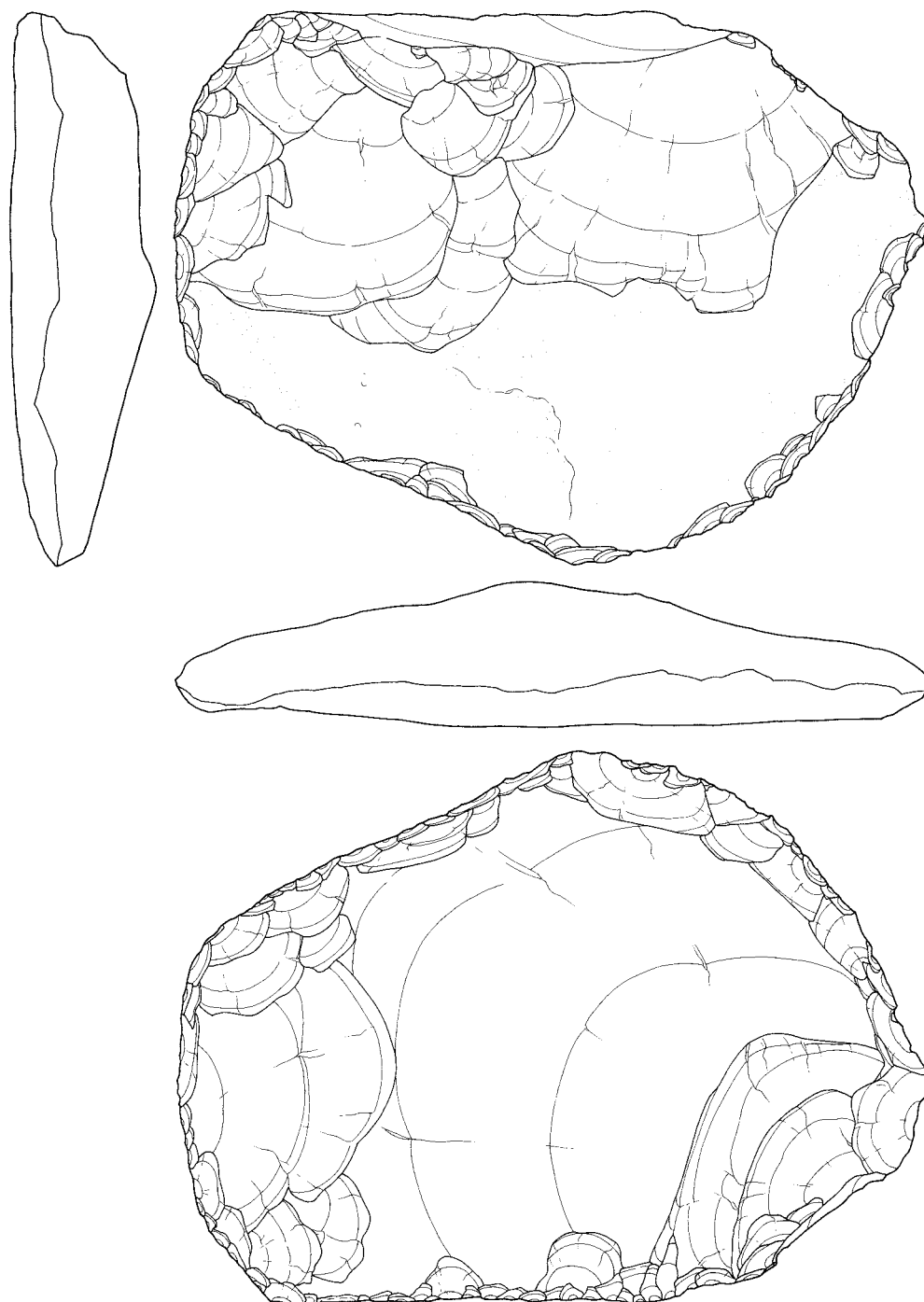
このように多様な削器であるが、これらを2分する分類項がたてられる。それは、器面調整を施すか否かである。ある程度の器面調整を施すものと、素材剥片に刃部調整とわずかな周縁調整を施すものとに2分出来る。おそらく、厚みを減ずる必要がある素材とその必要のない素材の違いであろう。

11 石錐

15点を石錐として分類した。このうち、11～13はやや大型の一群である。特に、体部形状がや



第299図 出土石器 削器(1)

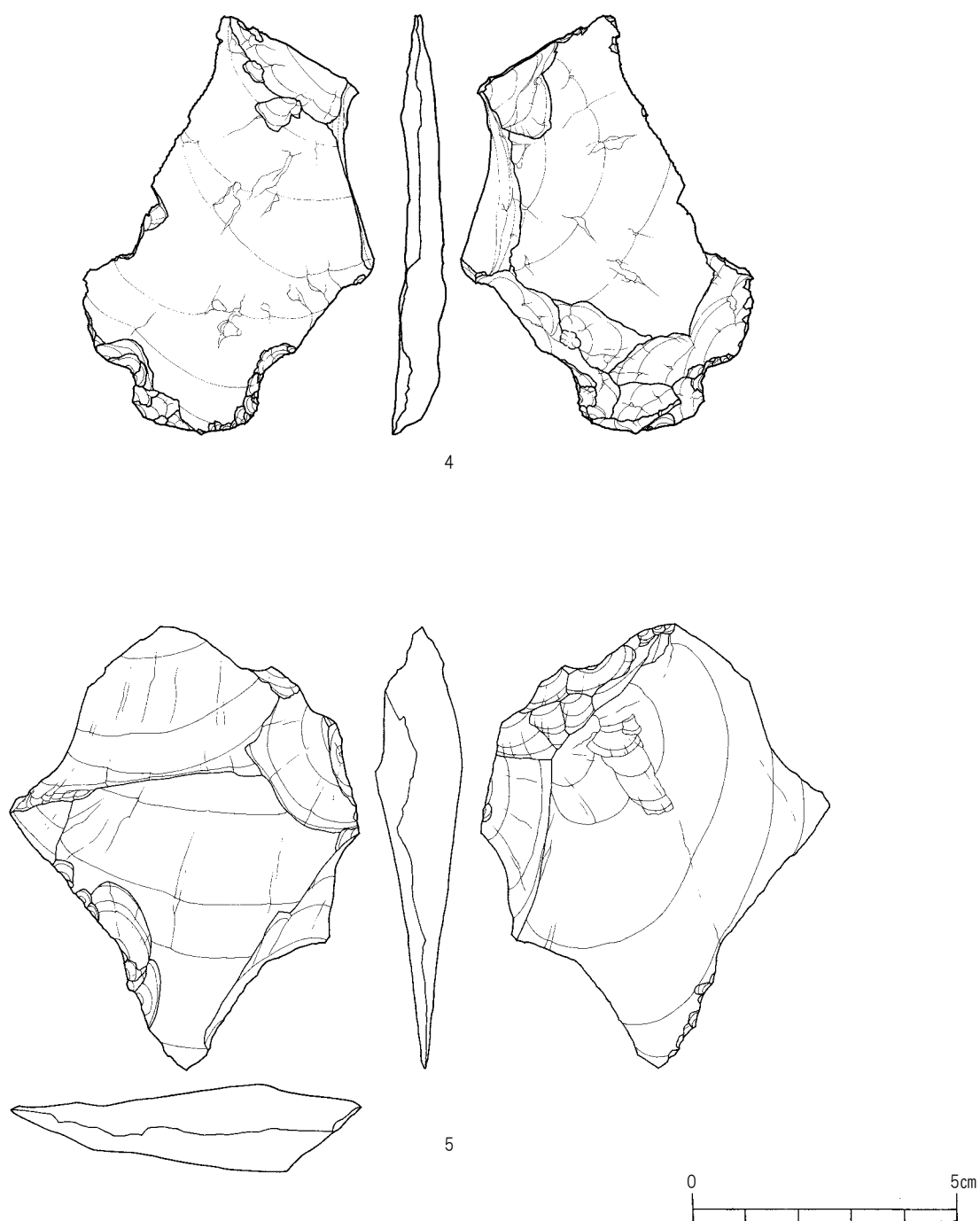


2

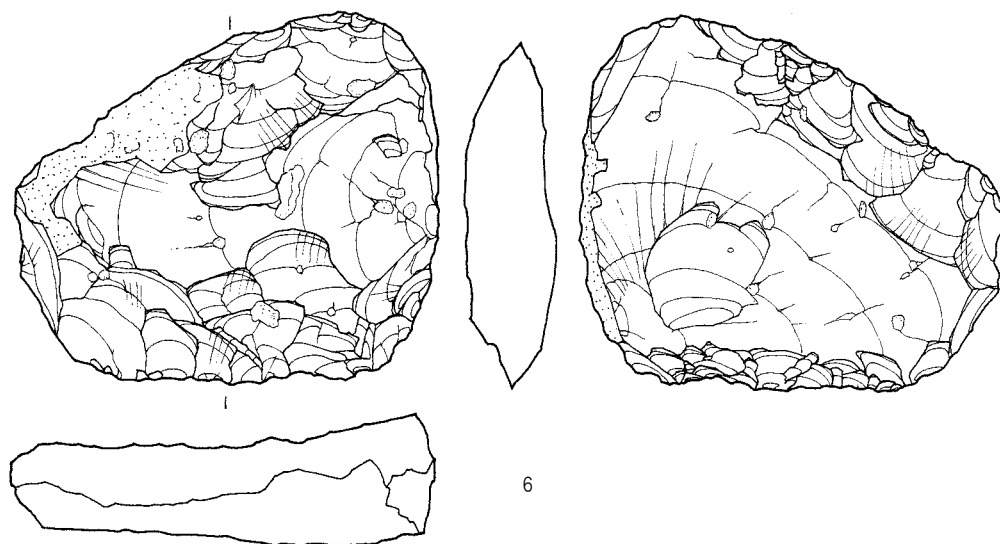
第300図 出土石器 削器(2)



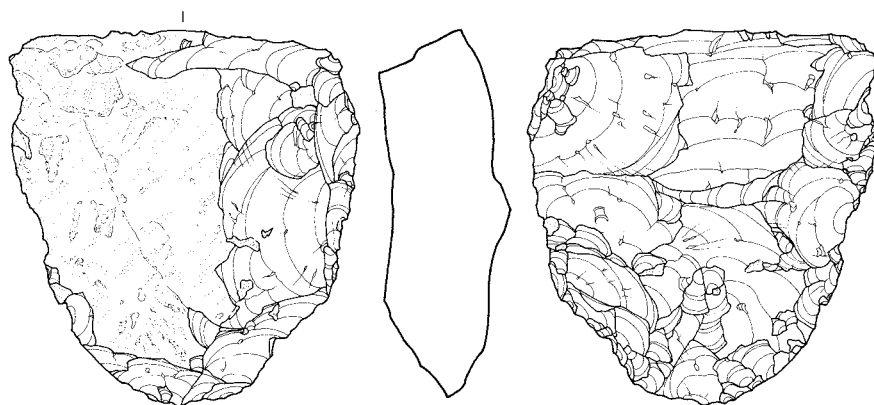
第301図 出土石器 削器(3)



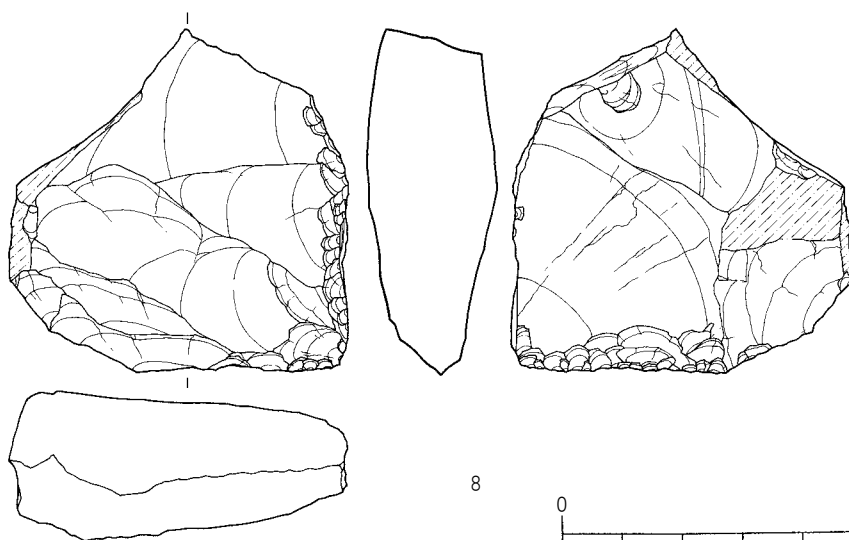
第302図 出土石器 削器(4)



6



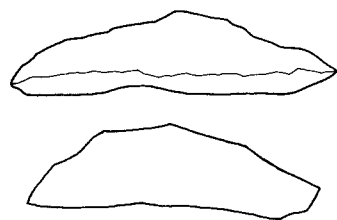
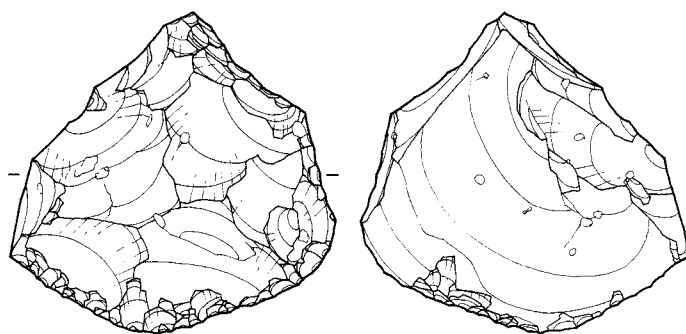
7



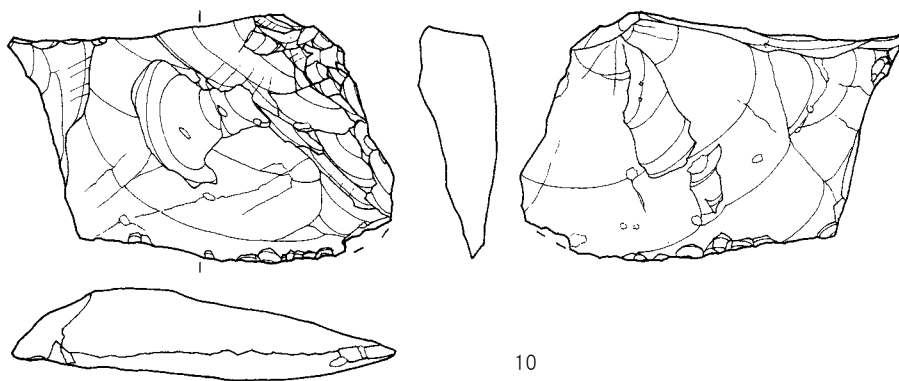
8



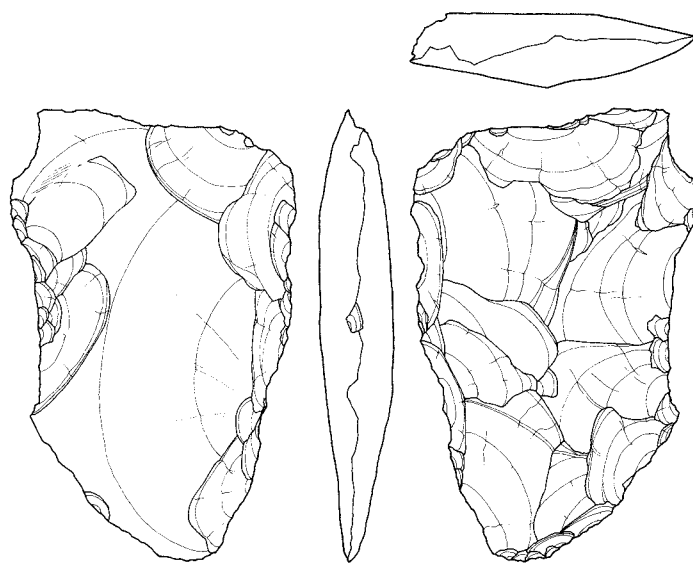
第303図 出土石器 削器(5)



9



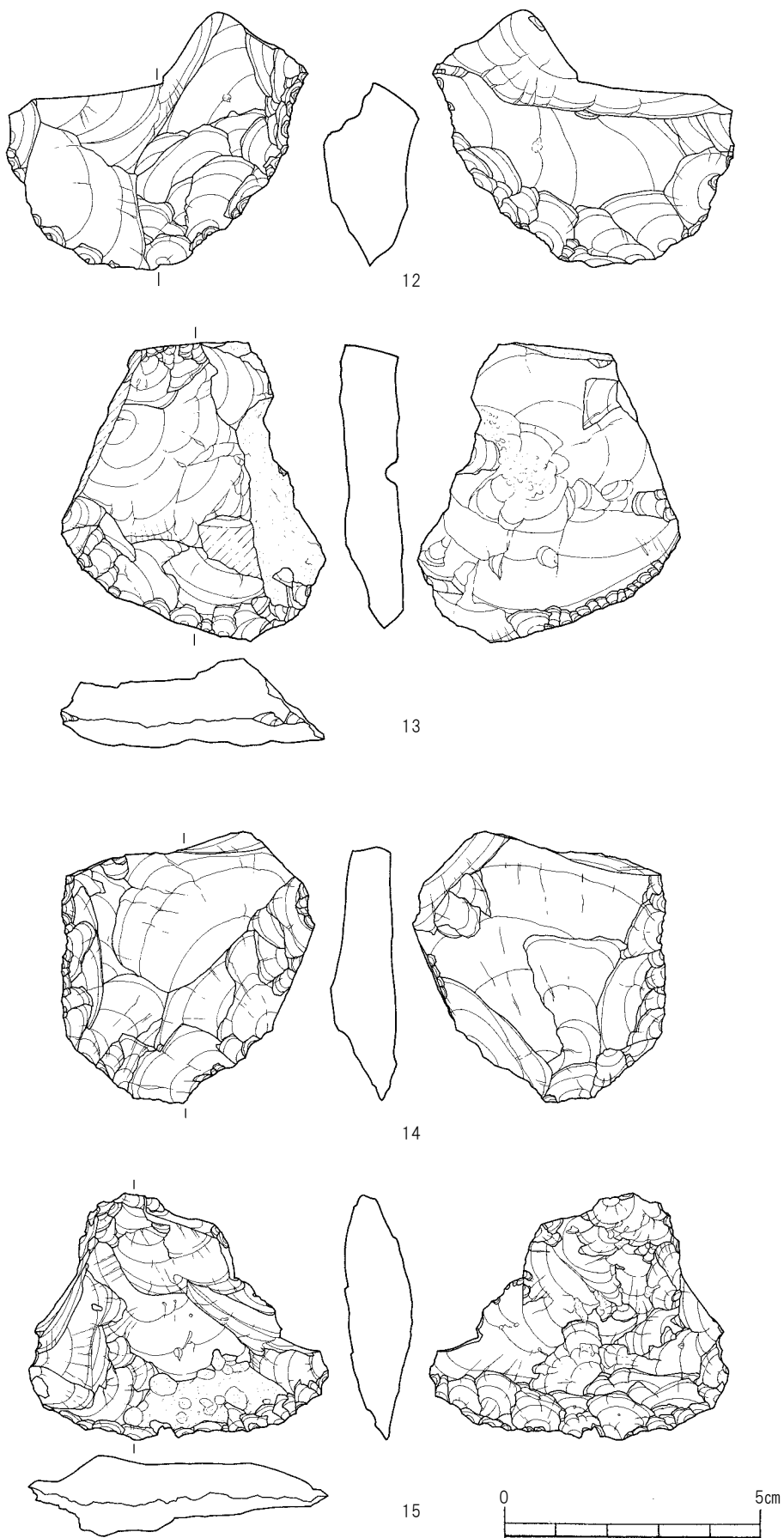
10



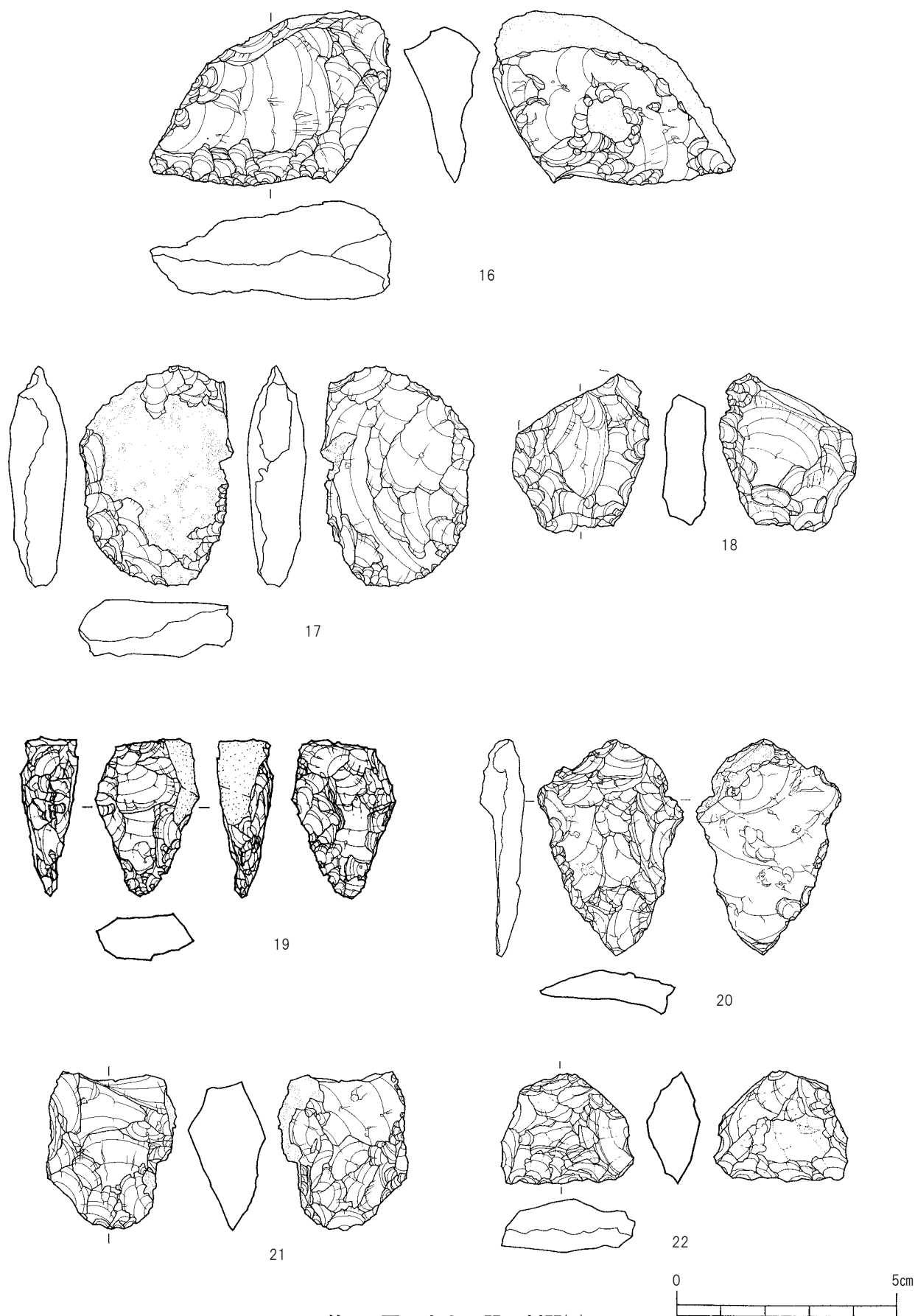
11



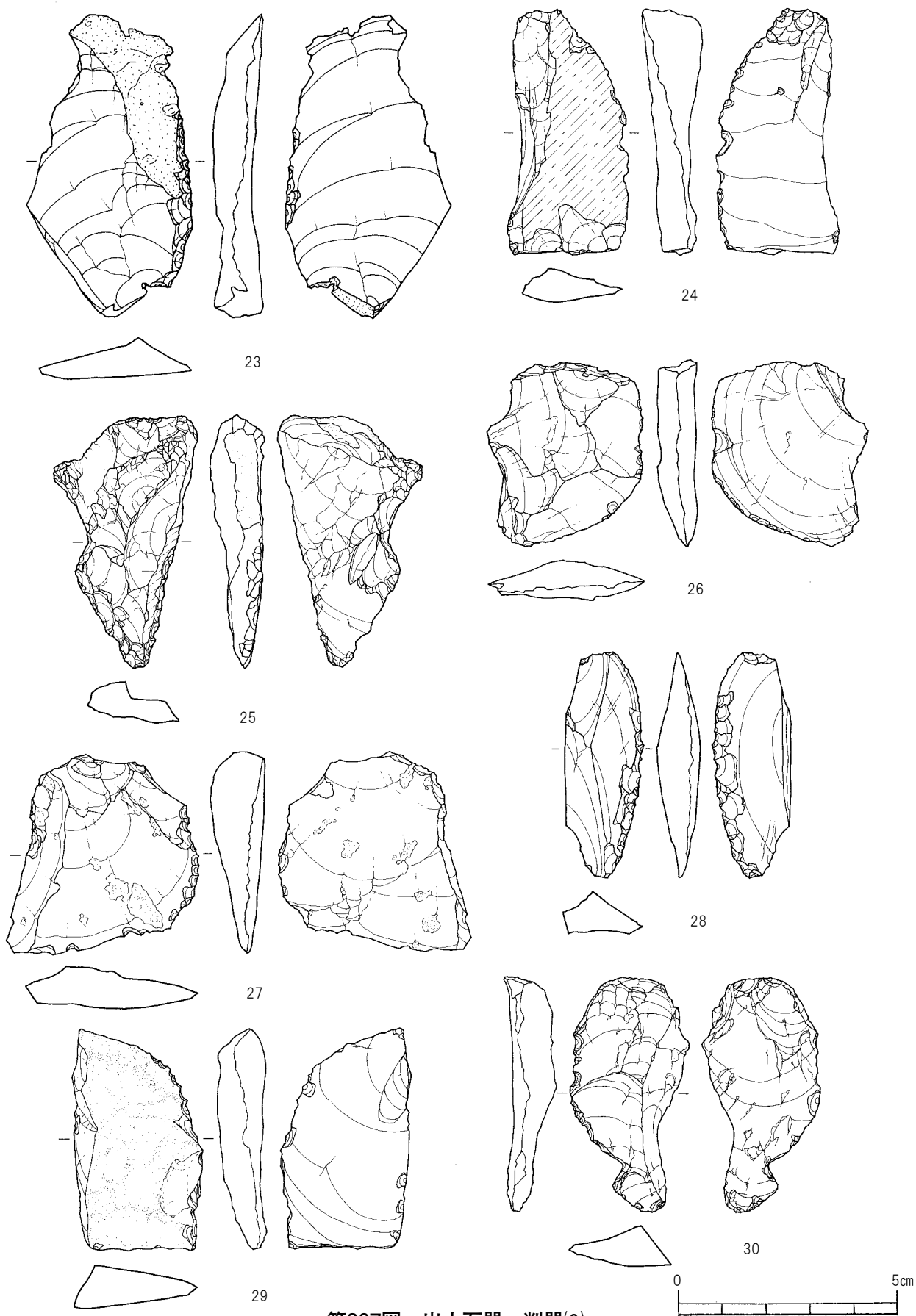
第304図 出土石器 削器(6)



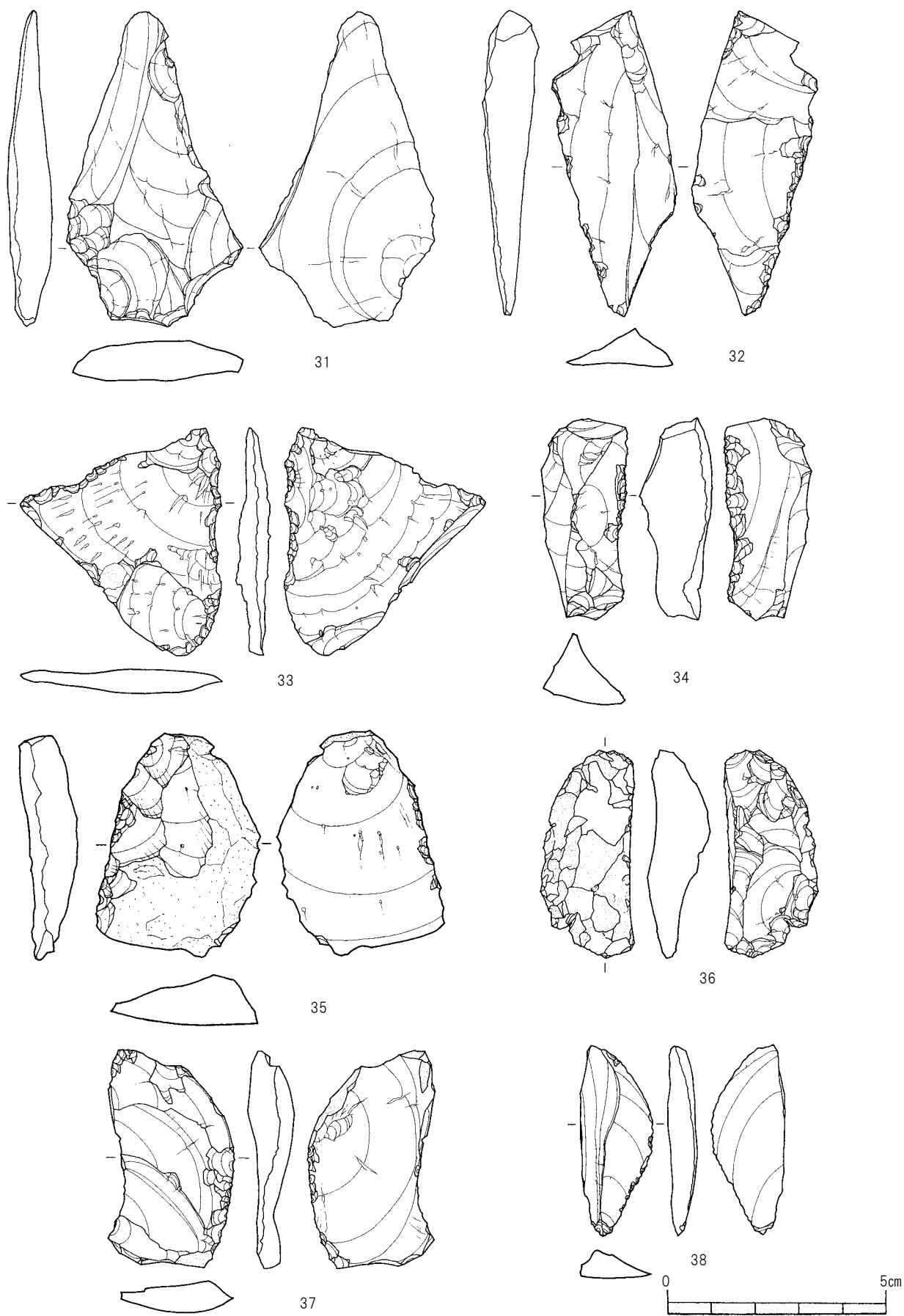
第305図 出土石器 削器(7)



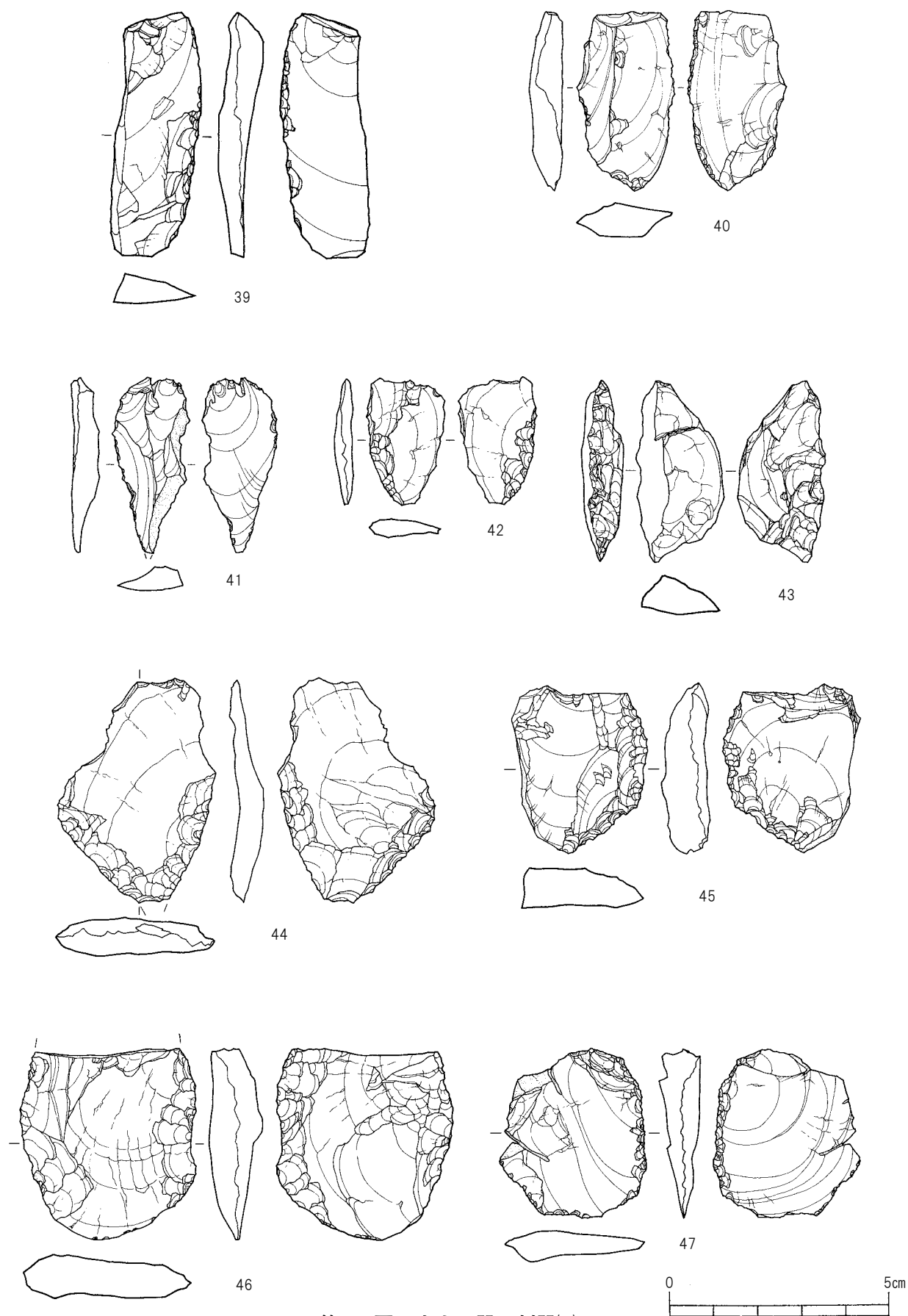
第306図 出土石器 削器(8)



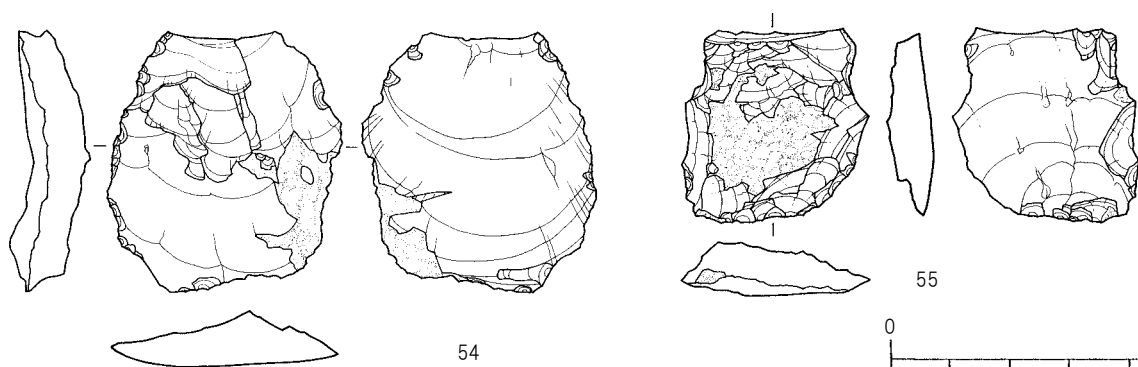
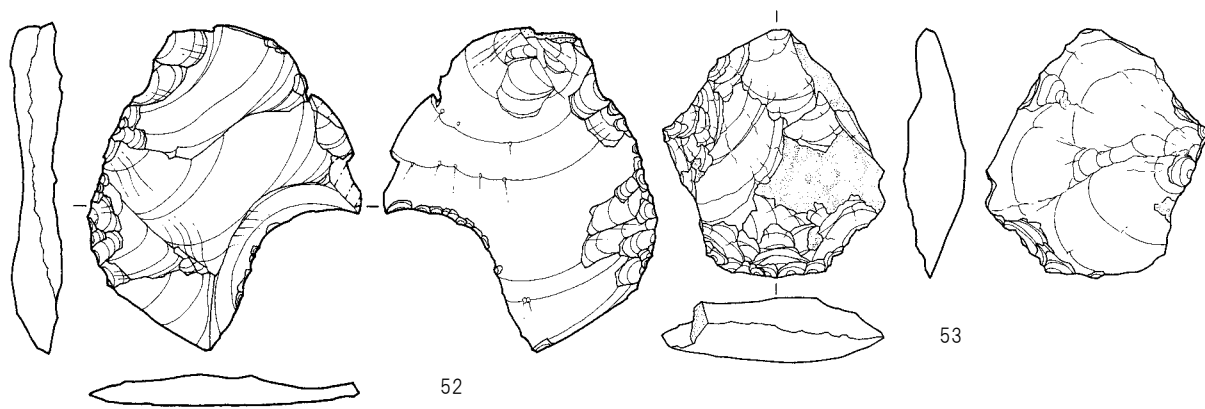
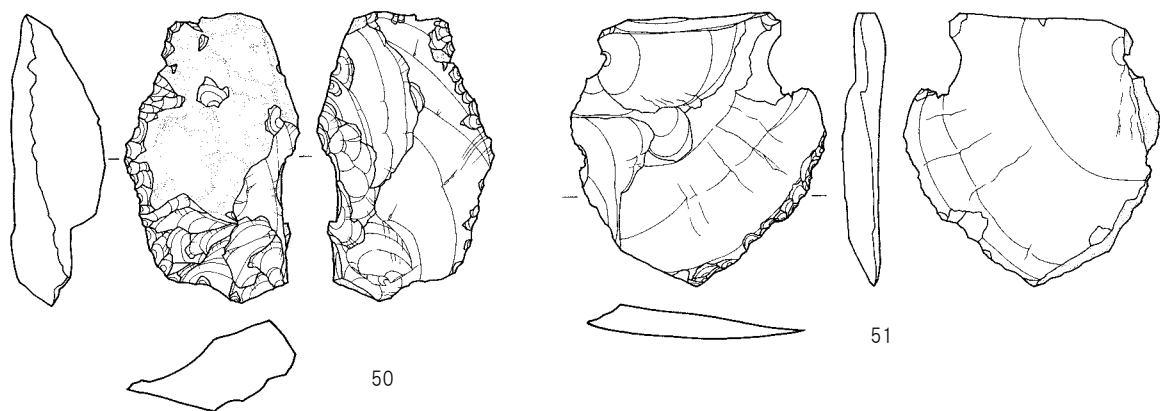
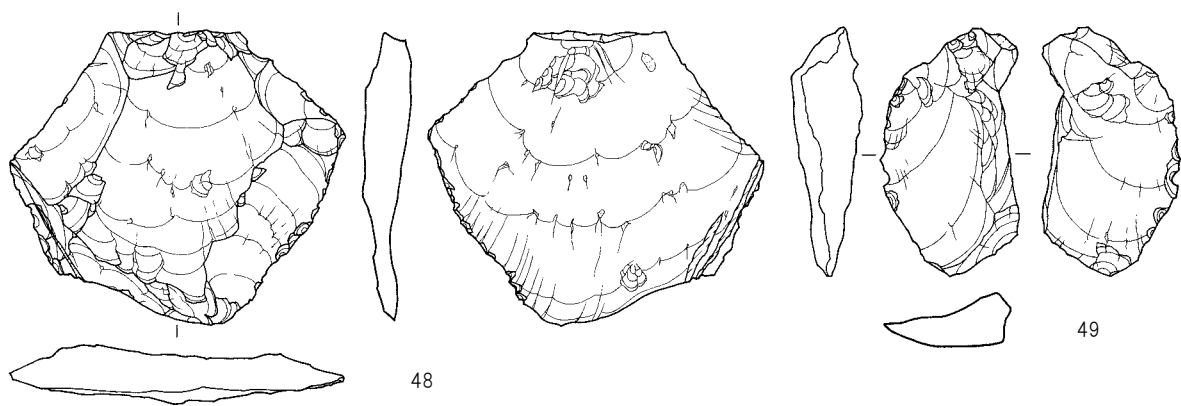
第307図 出土石器 削器(9)



第308図 出土石器 削器(10)



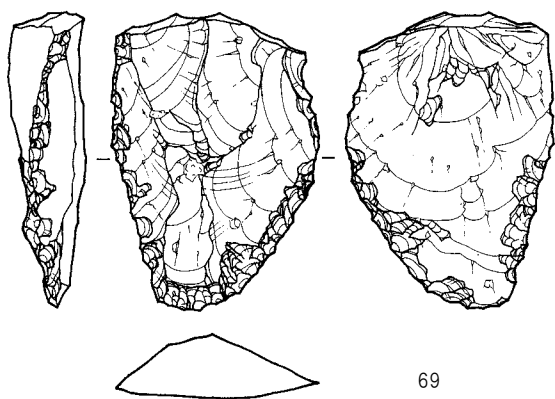
第309図 出土石器 削器(11)



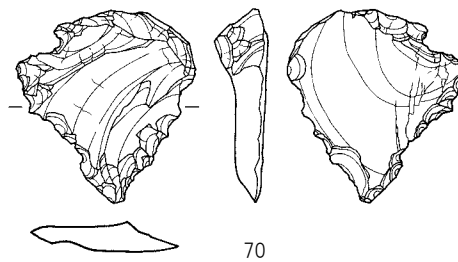
第310图 出土石器 削器(12)



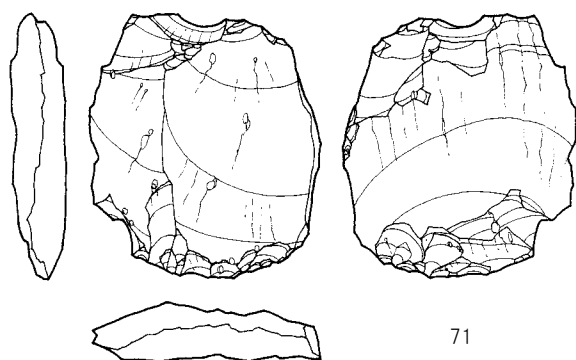
第311图 出土石器 削器(13)



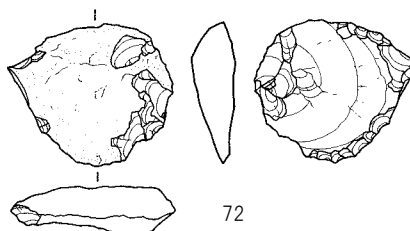
69



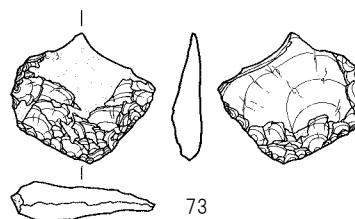
70



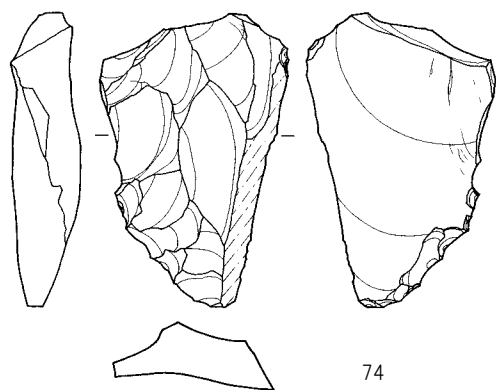
71



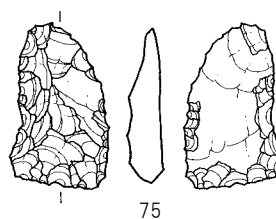
72



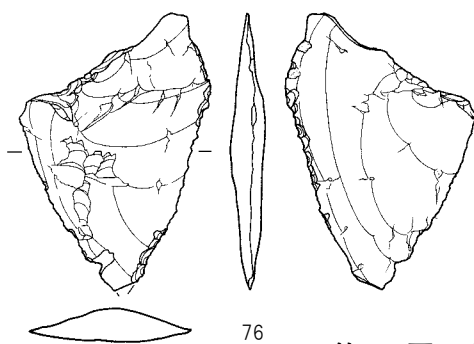
73



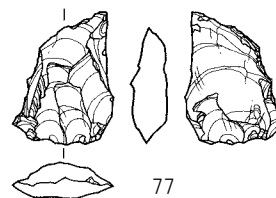
74



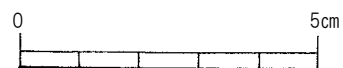
75



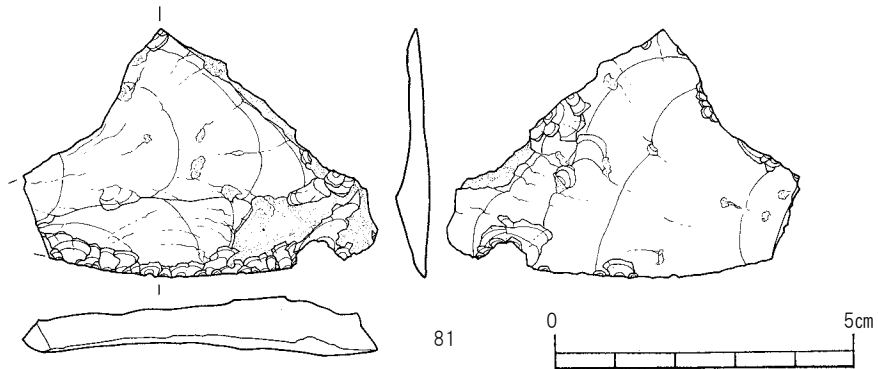
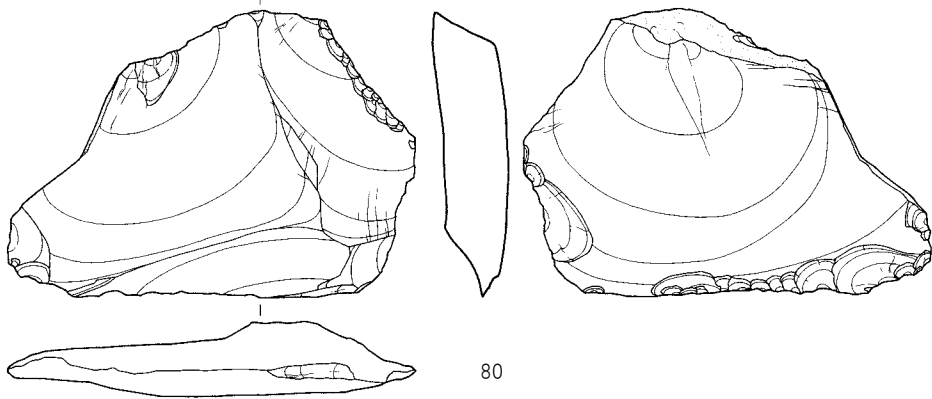
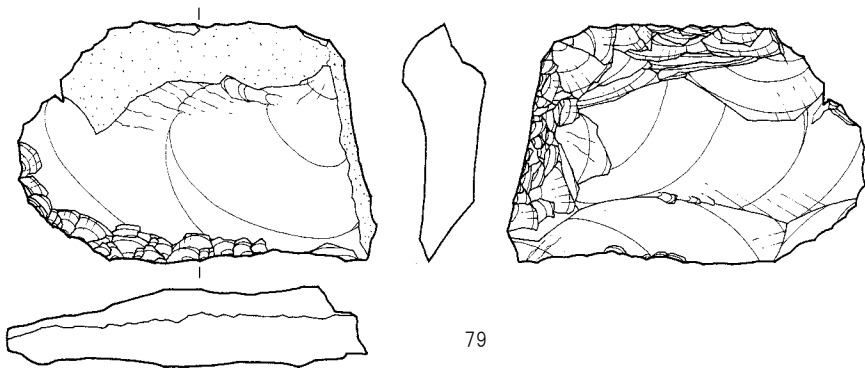
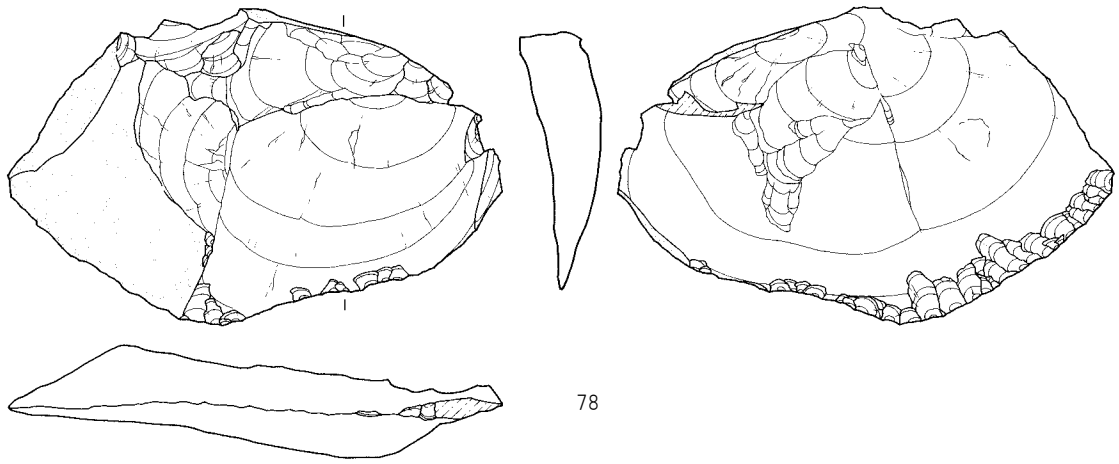
76



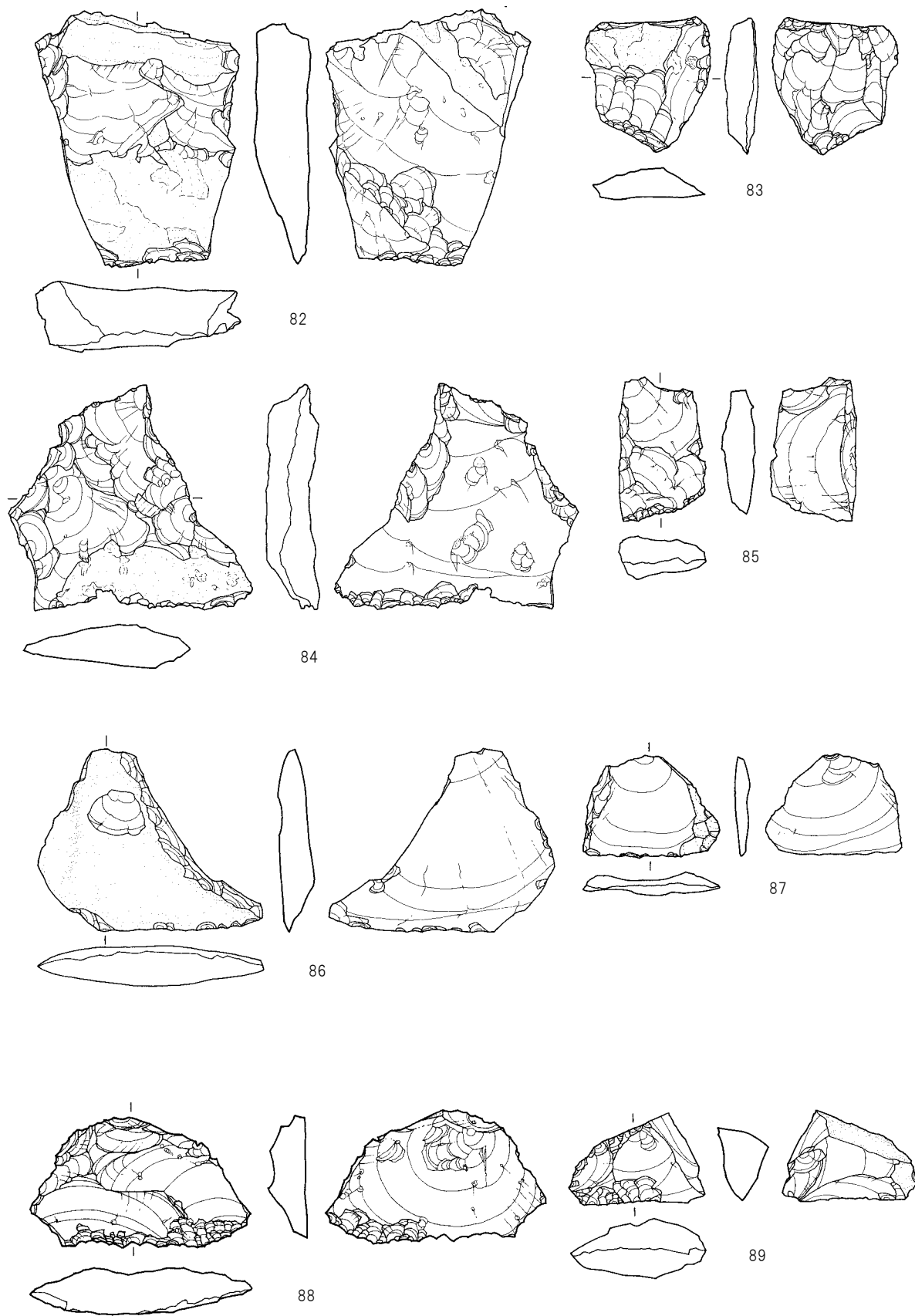
77



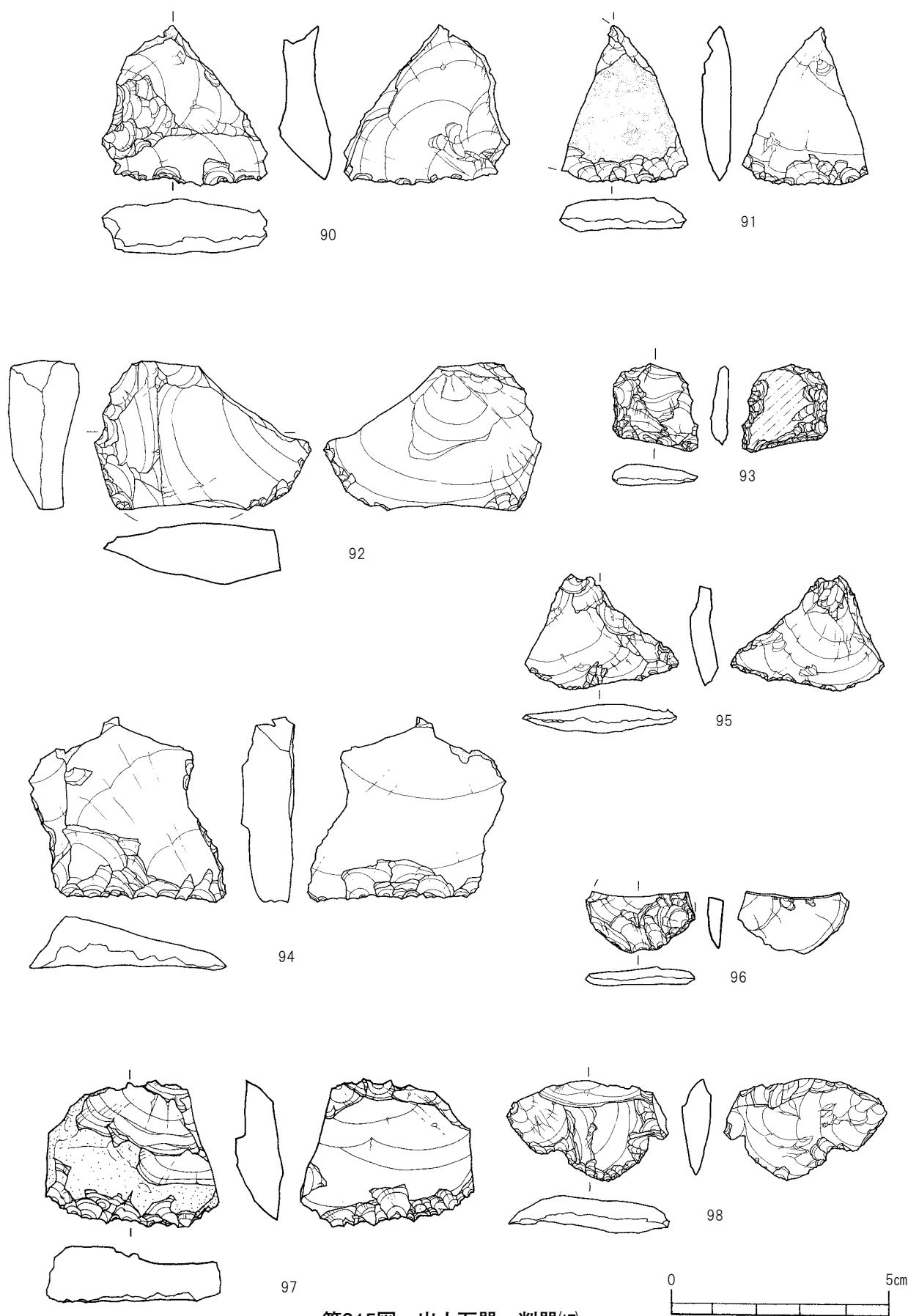
第312图 出土石器 削器(14)



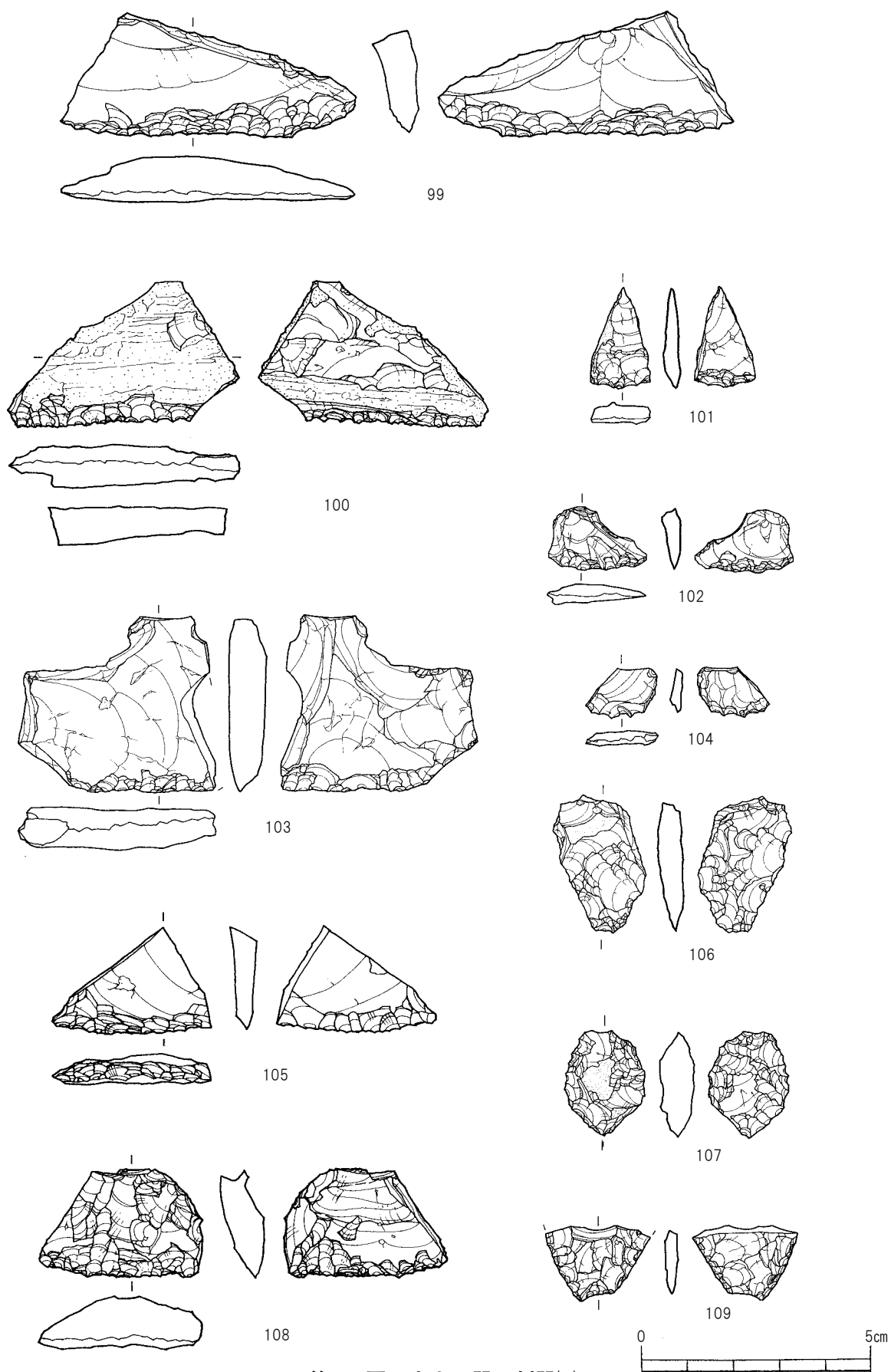
第313図 出土石器 削器(15)



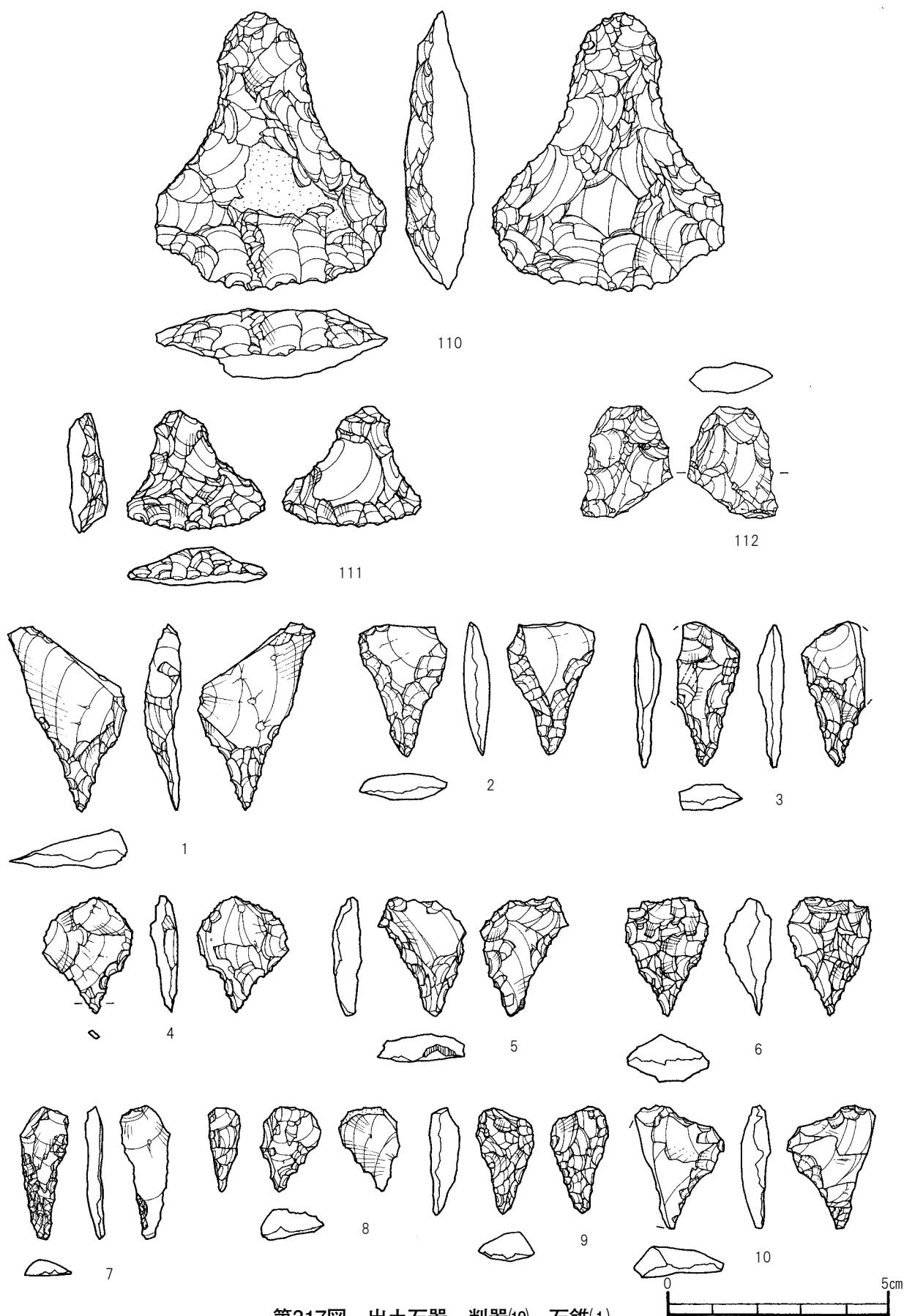
第314图 出土石器 削器(16)



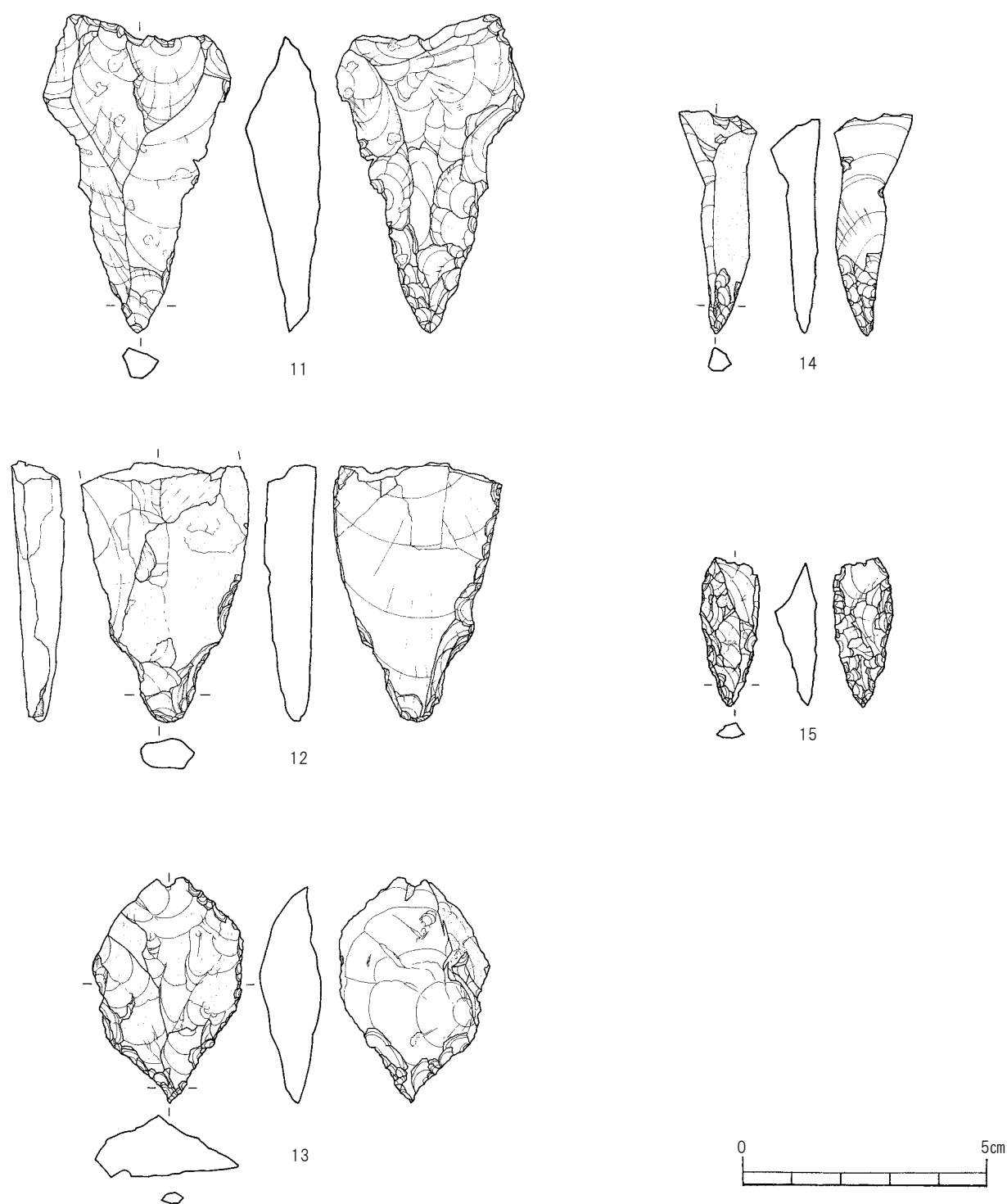
第315図 出土石器 削器(17)



第316图 出土石器 削器(18)



第317図 出土石器 削器(19), 石錐(1)



第318図 出土石器 石錐(2)

や異なるものの、錐刃部は弥生時代以降の攻玉用の石錐に似る。これら以外は、小形の剥片を素材とし、その一端に小さく鋭い錐刃を作る。2, 5, 9等はやや鋭さに欠けるが、使用の結果このようになったであろうと、その使用痕から判断できる。7, 14, 15は体部が狭小であり、他は幅広となるような違いがある。石錐もまた他の石器と同様多様性を持つのである。

12 篋状石器

両面調整によって素材剥片の形状を大きく変え、周縁に両刃の刃部を持ち、先端がない石器が6点あった。これを篋状石器として分類したが、東日本の縄文時代遺跡で出土する「石篋」あるいは「篋状石器」との類似からである。

1, 2は黒色安山岩の大型剥片を素材とし、大まかな整形剥離ののち周縁調整、刃部調整を施して仕上げてある。2は少しかけているが、この二つは丸みをおびてやや尖り、シンメトリーとはいえない挟りが基部両側縁にあることが他とは異なる。この挟りは着柄のためであろう、1の挟り部は潰れが顕著である。主要な刃部はそこから先端にかけての部位である。なお、この1, 2は形態的類似から打製石斧としての分類も考えられるが、打製石斧は安山岩や砂岩等のを素材とし、この二者は黒色安山岩であり脆いことから、打製石斧としての機能、用途をもたないと考えられる。

3は、挟りが顕著ではなく、基部がすぼまるため、1及び2と相似形として捉えがたいが、浅い挟りが両側縁にあること、先端が丸みをおびてやや尖る刃部形状から、1, 2と同じように、柄の付いた刃物として使われた道具であろう。

4, 5は下縁の刃部に特徴がある。素材となった剥片のフェザー・エンドのエッジを生かした鋭い刃部と両側縁の周縁調整とで整形されている。両者とも、下端には使用の結果であろう微細剥離がある。6は、4, 5の刃部の当たる部位に整形剥離があり、素材剥片のエッジのままではないが、4, 5と同様な形態のものとして捉えうる。

着柄して側縁を刃部とする1～3と、着柄しないで下縁を刃部とする4～6とに2大別できる。

時期的な位置付けは不明としか言いようがないが、上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期後葉、塞ノ神・平栴式土器段階で37点出土していることから、この時期に位置付けることが妥当かと思われる。ただし、1～3のようなタイプは出土していない。

13 楔形石器

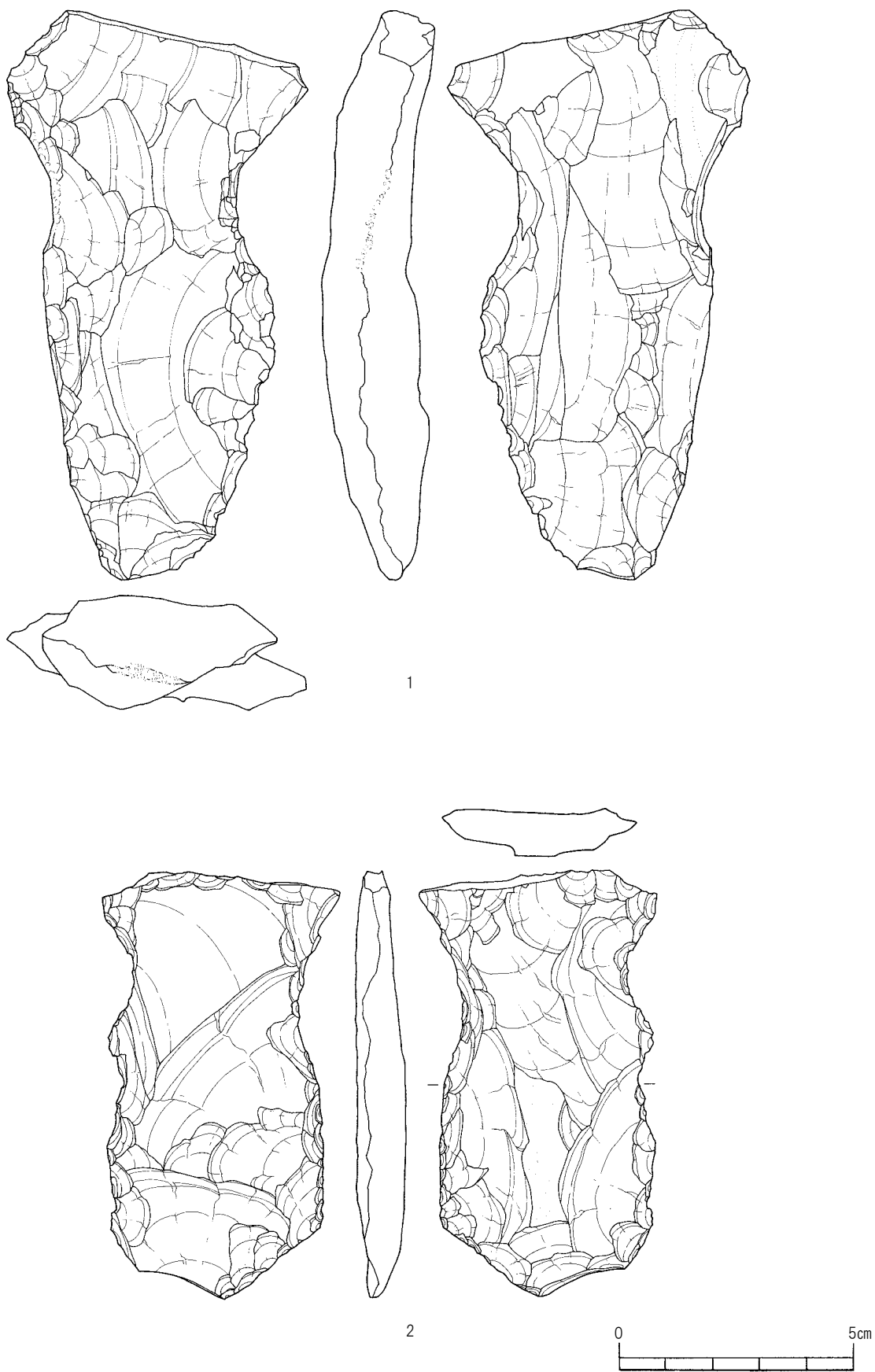
対向する2辺に階段状剥離がある小形の両面調整石器が25点あり、これを楔形石器として分類した。断面形は紡錘形であり、5や21は特に使い込まれた印象を受ける。

この器種は旧石器時代から縄文時代前期頃までに渡ってみられるので、層位による時期的位置付けが困難な本遺跡では、その幅の中で捉えるしかない。

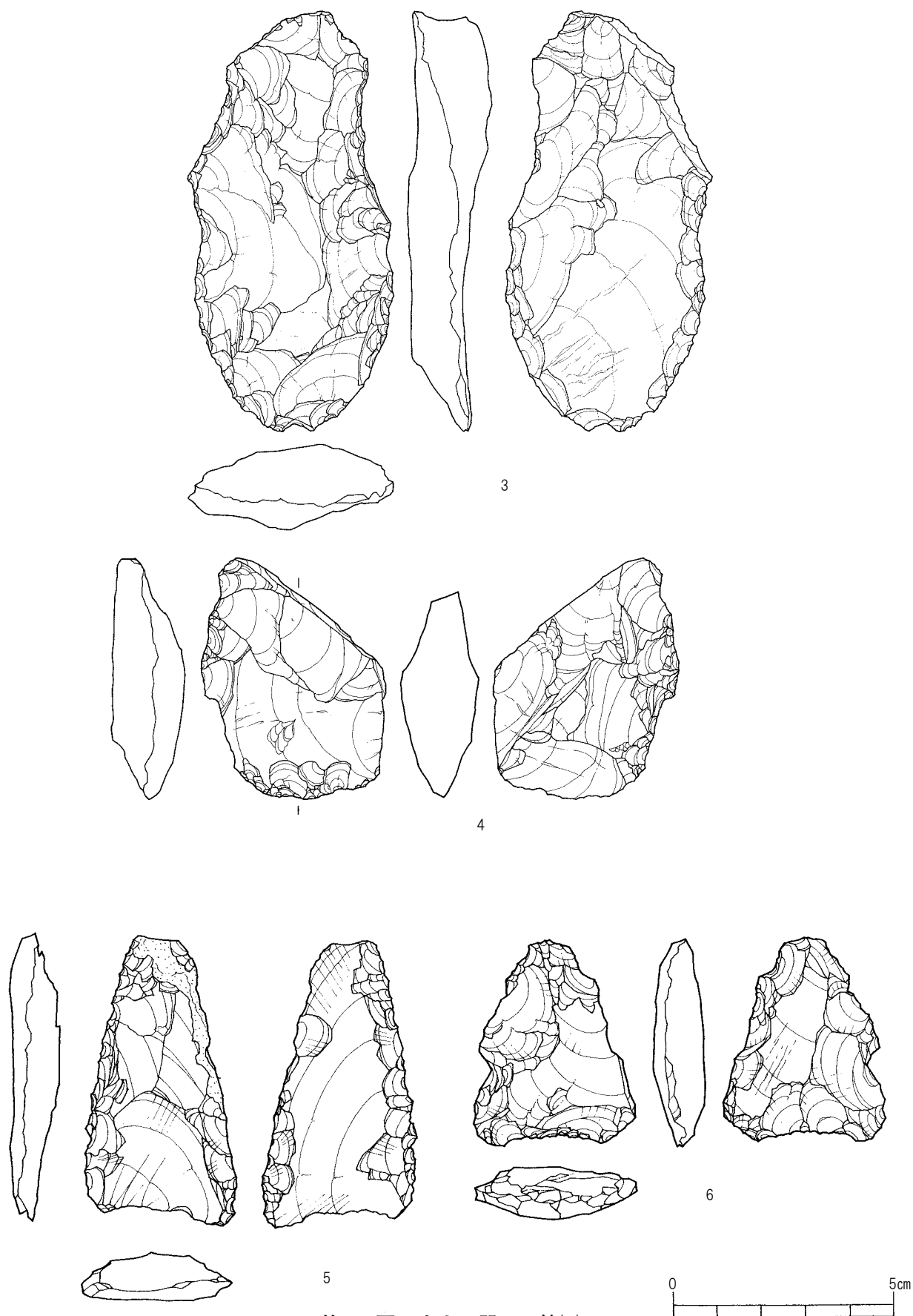
なお、大きさによって、1, 3のグループ、2, 4～8のグループ、9～25のグループに分けられるが、対象物の違いであろう。

14 小形両面調整石器

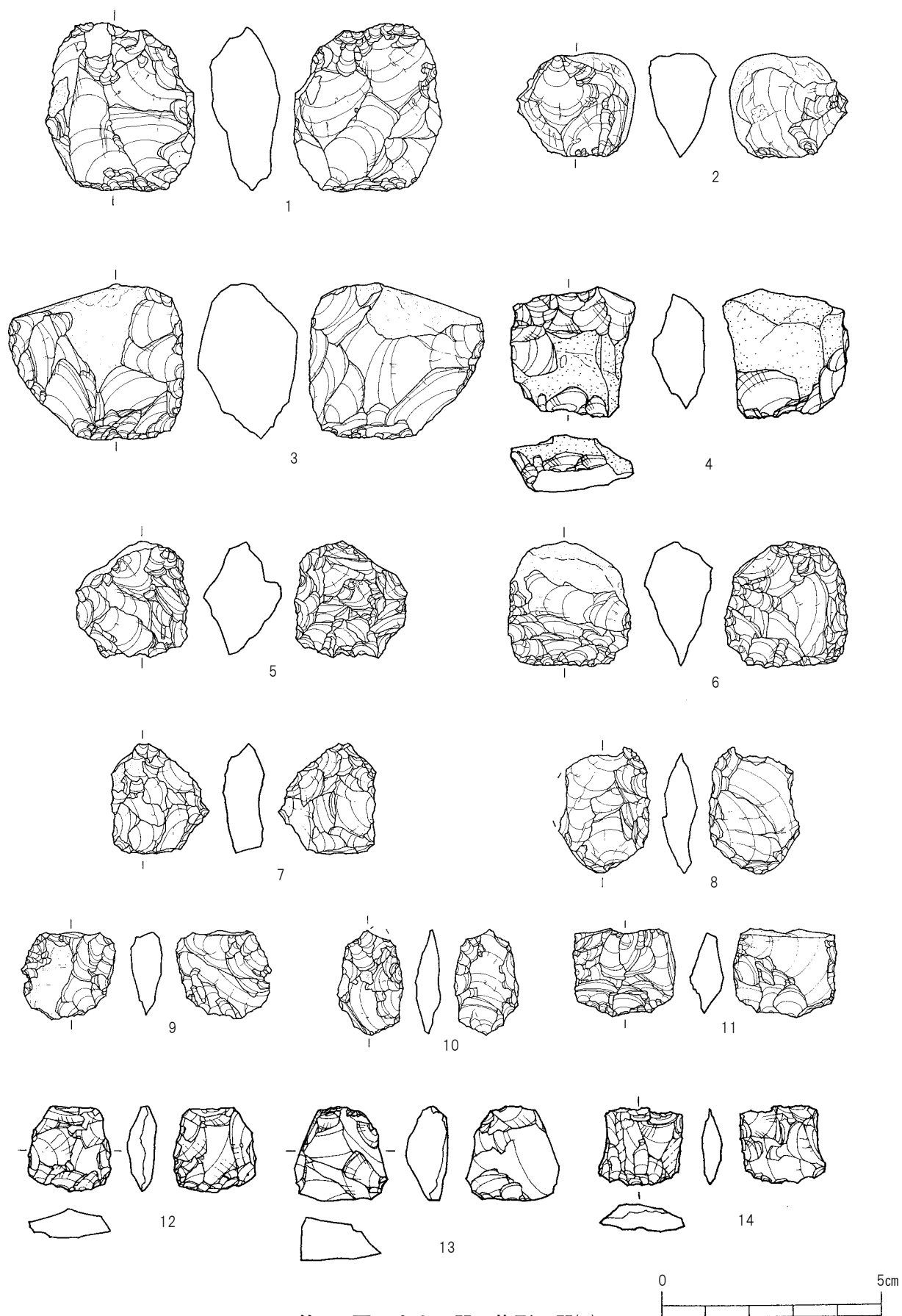
基本的に楔形石器と同様の整形が行われ、形態的にも同一であるが、対向する2辺に階段状剥離が見られないものを小形両面調整石器として分類した。3点ある。削器として分類するにも刃部が鈍く、「刃物」としての刃部とは理解しがたい。1, 2は、大きさや整形剥離の在り方からは、楔形石器の使用前の姿と解釈するのが妥当であろうか。



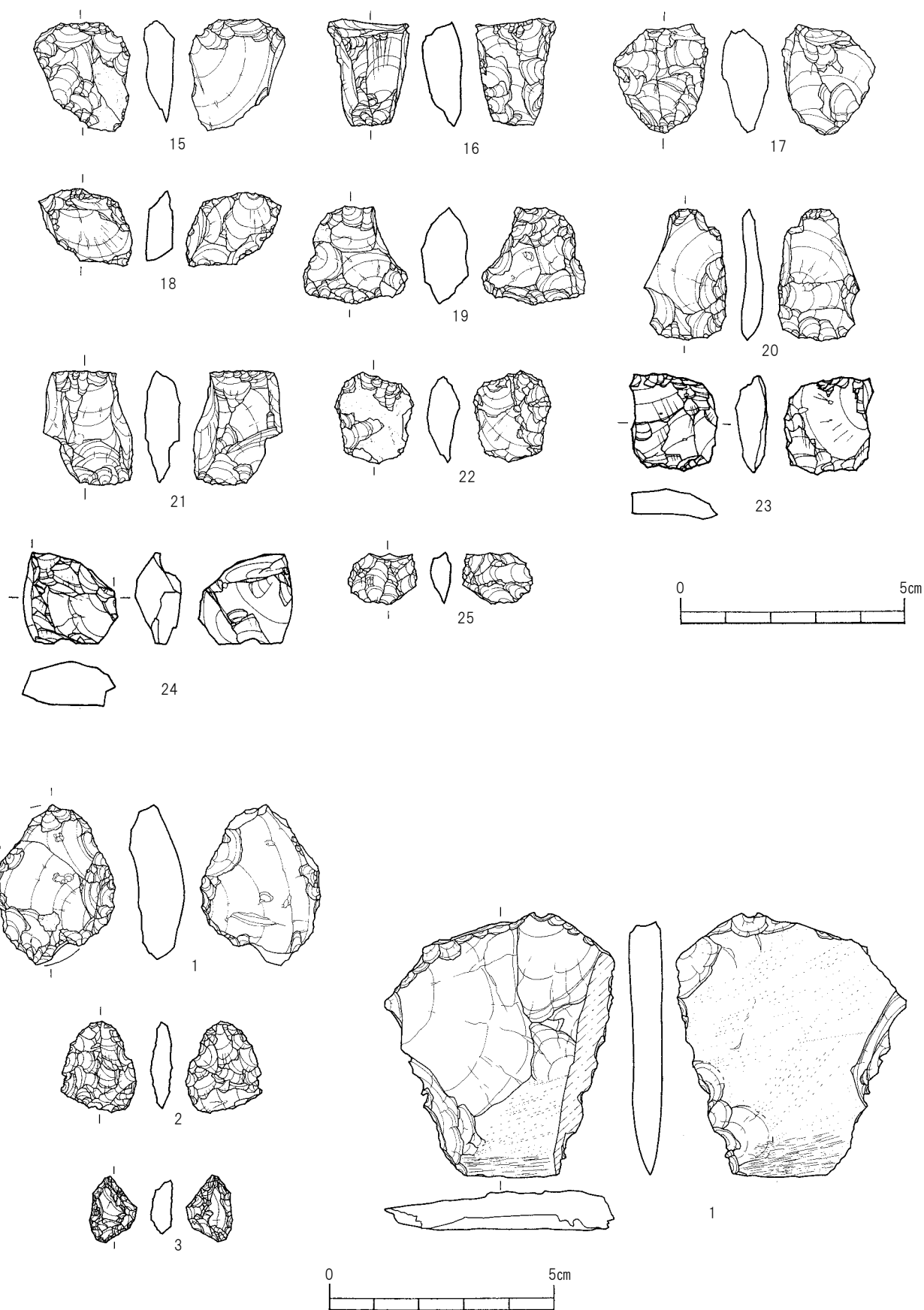
第319図 出土石器 石籠(1)



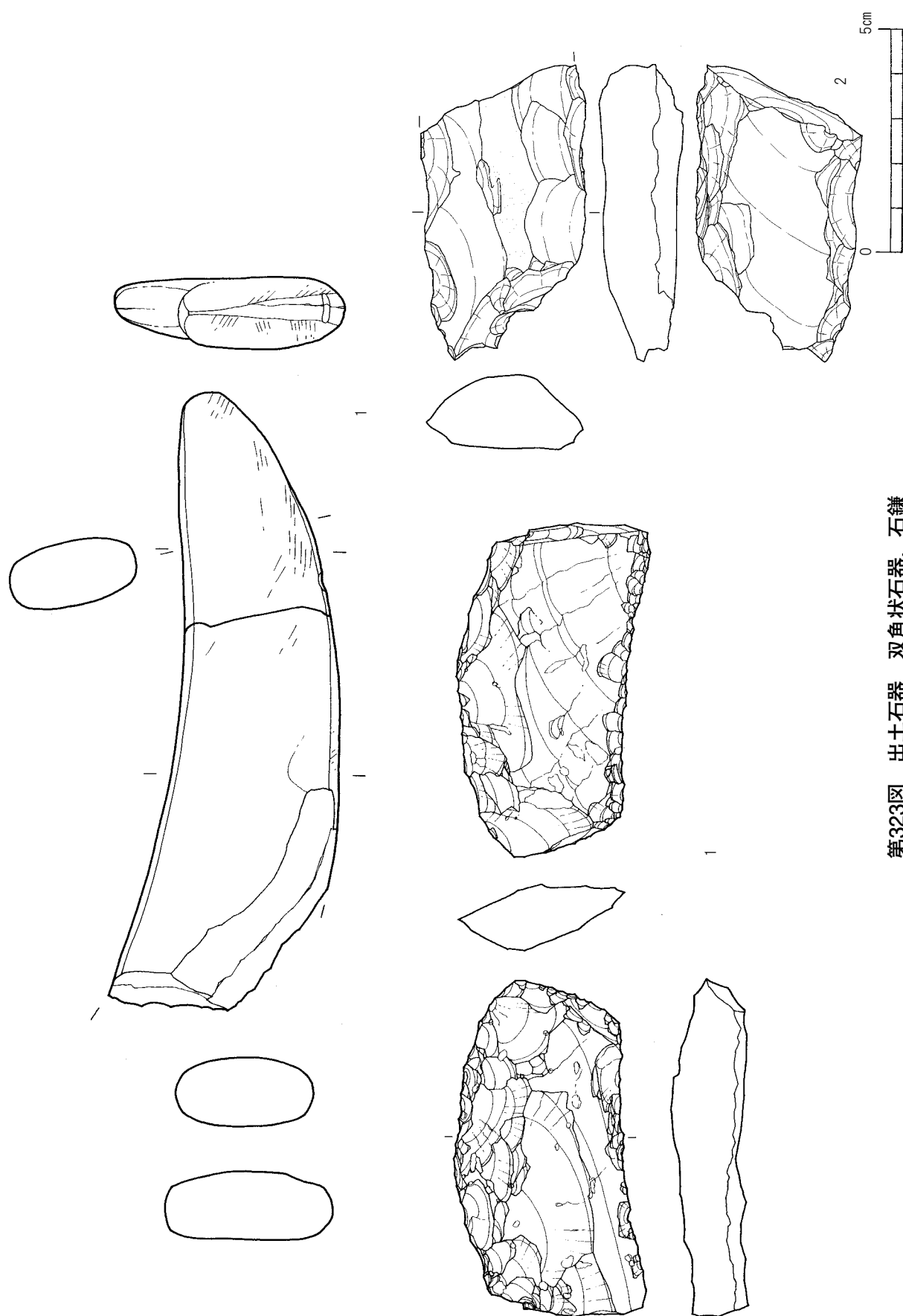
第320図 出土石器 石籠(2)



第321図 出土石器 楔形石器(1)



第322図 出土石器 楔形石器(2), 小型両面調整石器, 石鋸



第323图 出土石器 双角状石器，石鎌

15 石鋸

片麻岩の剥片の一辺に、研磨による両刃の刃部が付けられた石器が1点出土している。従来、攻玉もしくは擦切り用の石器として理解されてきた。縄文時代の所産であれば、玦状耳飾り、獣状勾玉、蛇紋岩製磨製石斧等が想定できるが、本遺跡ではそれらは出土していない。弥生時代の所産であれば、磨製石庖丁の未製品が1点出土しており、それに擦切り痕が残されており、その製作に使われたものであろう。

上野原遺跡では、同じ石鋸が2点出土しており、縄文時代の所産であることを否定することは出来ない。対象物は遺跡外に搬出されたのであろう。

16 双角状石器

旧枕崎市鞍谷遺跡で出土した独鈷石と同一の石器の残欠である。平面形状は牛角をつなげたような形になり、断面は図示したようにやや角張る長楕円形を示す。研磨によって仕上げられているが、おそらく、整形剥離、敲打整形、研磨仕上げの手順を踏むものと推測される。

従来この器種は、利器ではなく祭祀具として「飾られるもの」であった可能性を指摘されており、本遺跡のこの石器も、明瞭な使用痕がどこにも残っていないことからその用途であろうと推測できる。

17 石鎌

黒色安山岩の剥片を利用し、整形剥離、周縁調整によって「鎌刃」形に作り、内弯する側縁には削器に似た刃部が付けられている。1、2とも残欠であるが、縄文時代後期頃に見られる石鎌と見て間違いはなかろうと思われる。

18 礫器

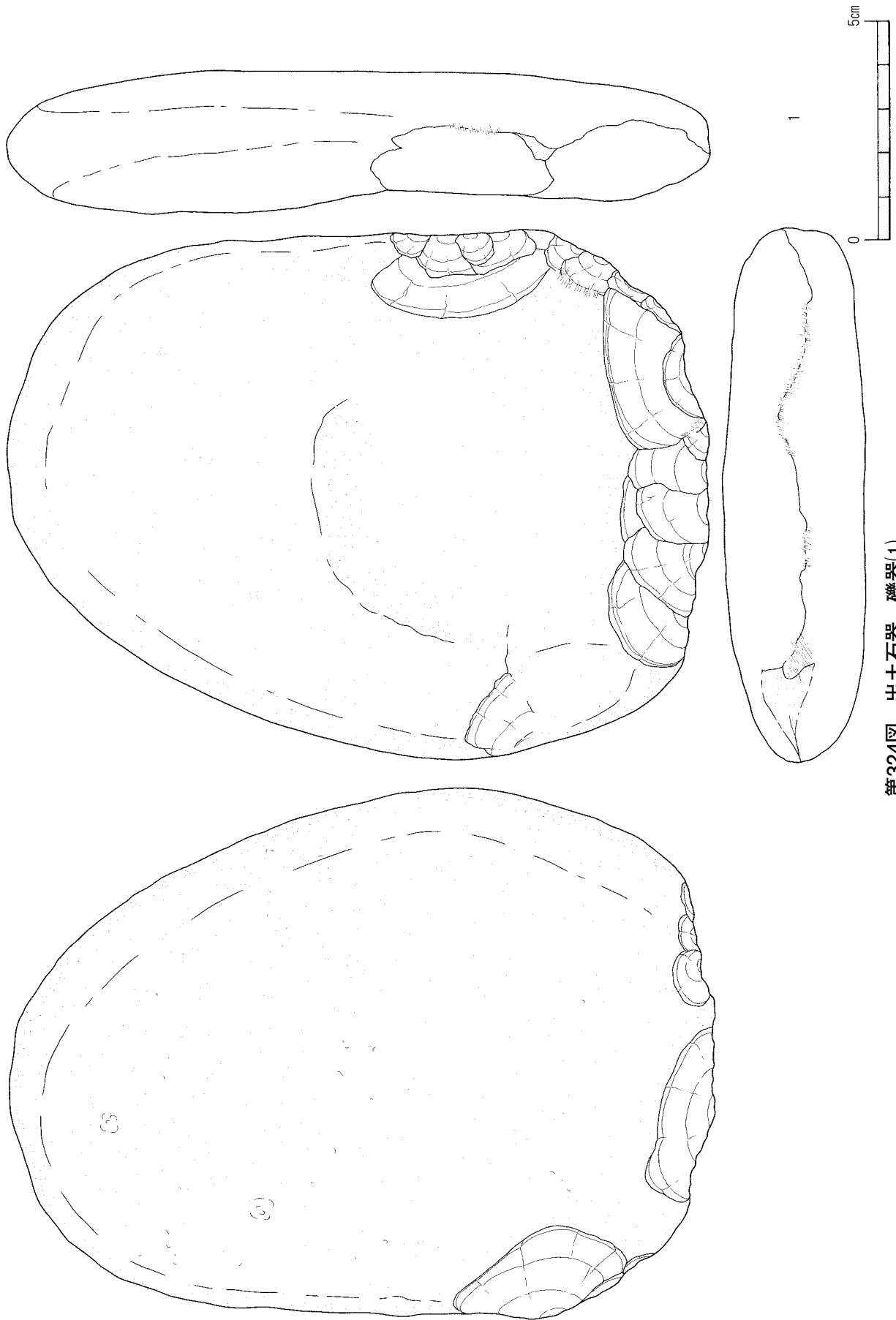
安山岩、砂岩等の礫の一端に粗い刃部を付けた石器である。2、5、6、7のように大型の剥片のような素材も安山岩の岩体から節理等によって剥落したもので、その偽主剥離とも呼ぶべき面は風化した礫皮面であり、背面も同様である。刃部の粗い剥離面の風化の度合いと全く異なる。

1、8だけが砂岩の円礫を素材とし、一端にラフな剥離によって片刃の刃部が付けられている。刃部形状は異なっているものの、その刃部が磨耗していることは共通している。

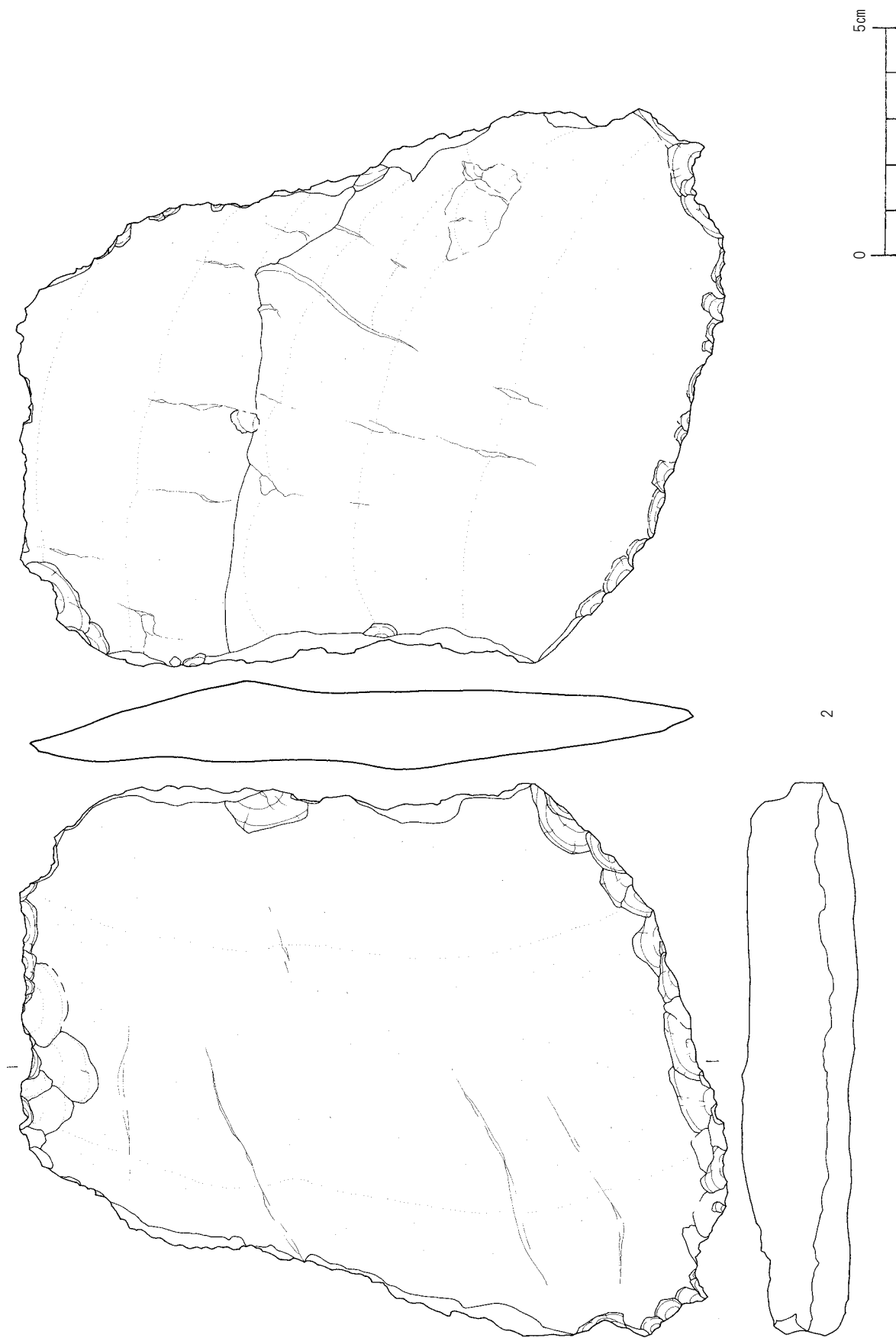
2、4～7は先に述べた安山岩の板状の礫を素材としたものであり、粗い刃部調整剥離のみが施されている。このような素材、形状のものは縄文時代早期に多々見られ、刃部調整の剥離の稜に磨耗が見られることが共通する特徴である。このような磨耗は打製石斧によく見られるものであり、共通する使用方法が想定できる。つまり、土掘り具としての用途を想定したい。

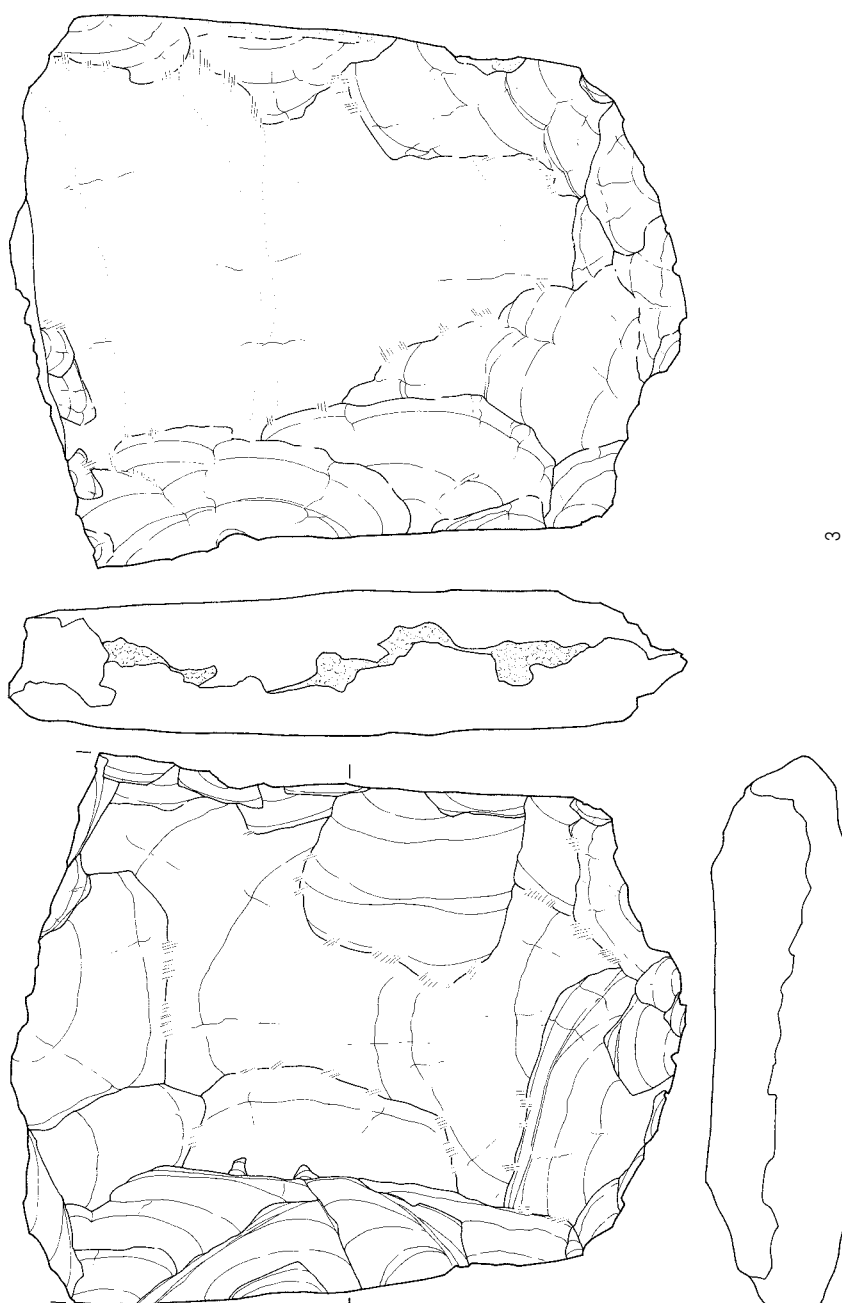
11～13も2、4～7と同一の素材、加工であり、礫器に分類したが、形態的には打製石斧に分類しても差し支えない。

10も安山岩の板状の礫を素材とするものであるが、このようなタイプの礫器は上野原遺跡で大量に出土しており、その中のE類に相当する。木を割る際の楔として用いられた可能性がある。

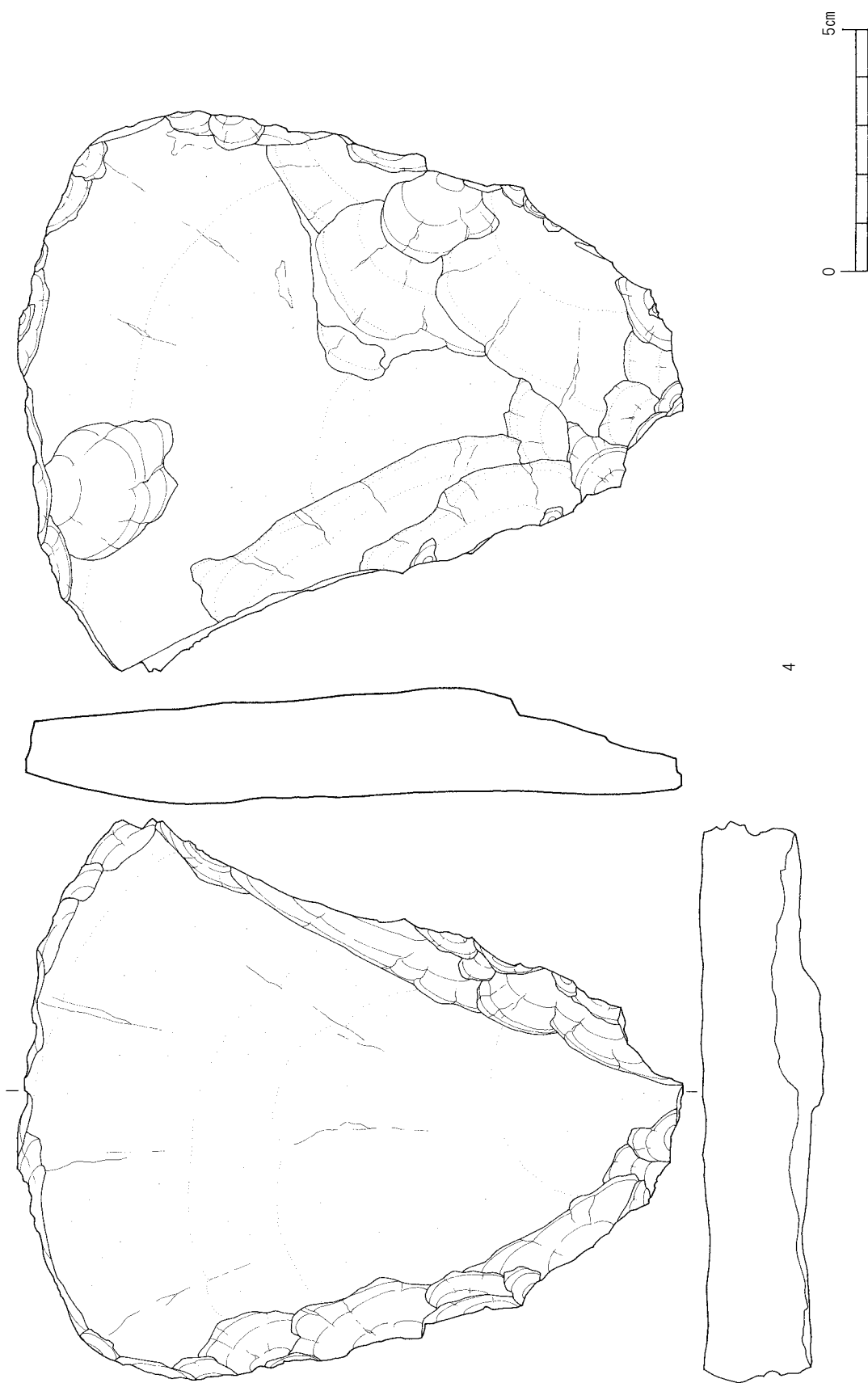


第324図 出土石器 礮器(1)

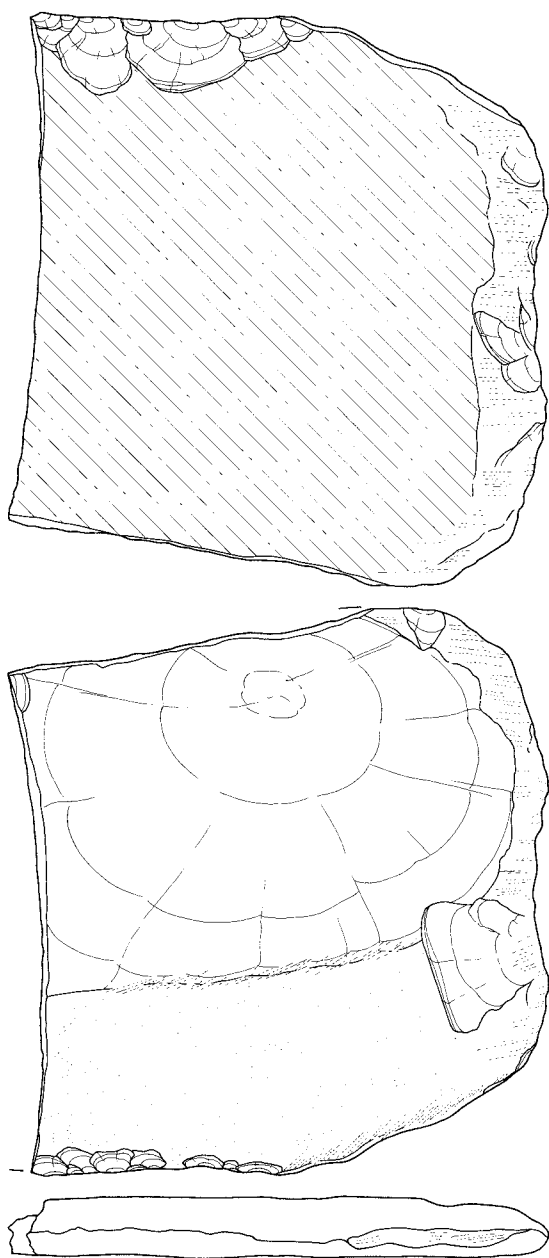




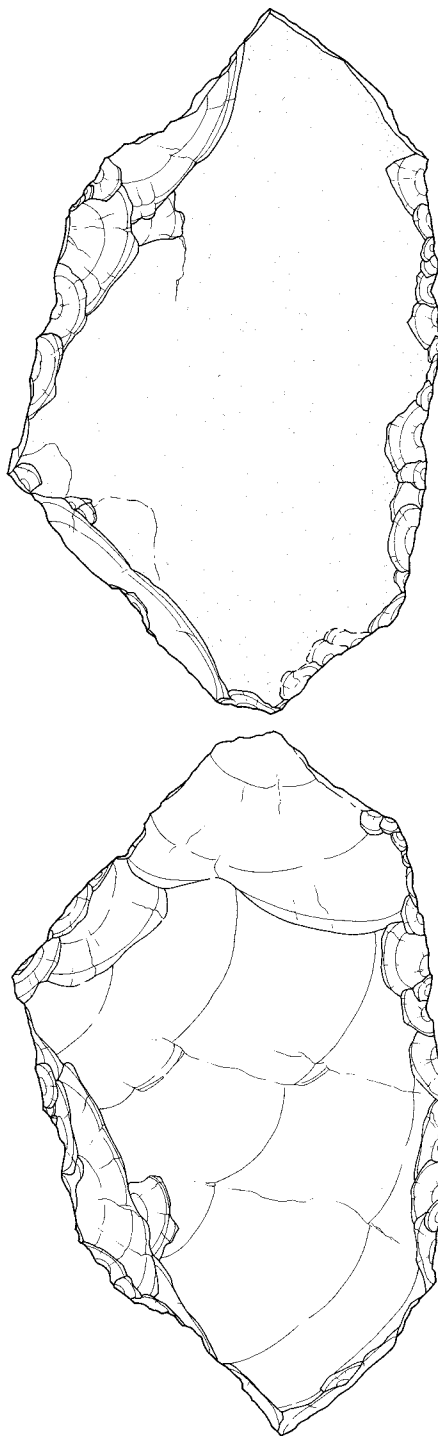
第326図 出土石器 礫器(3)



第327図 出土石器 礫器(4)



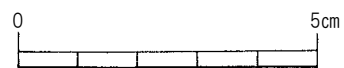
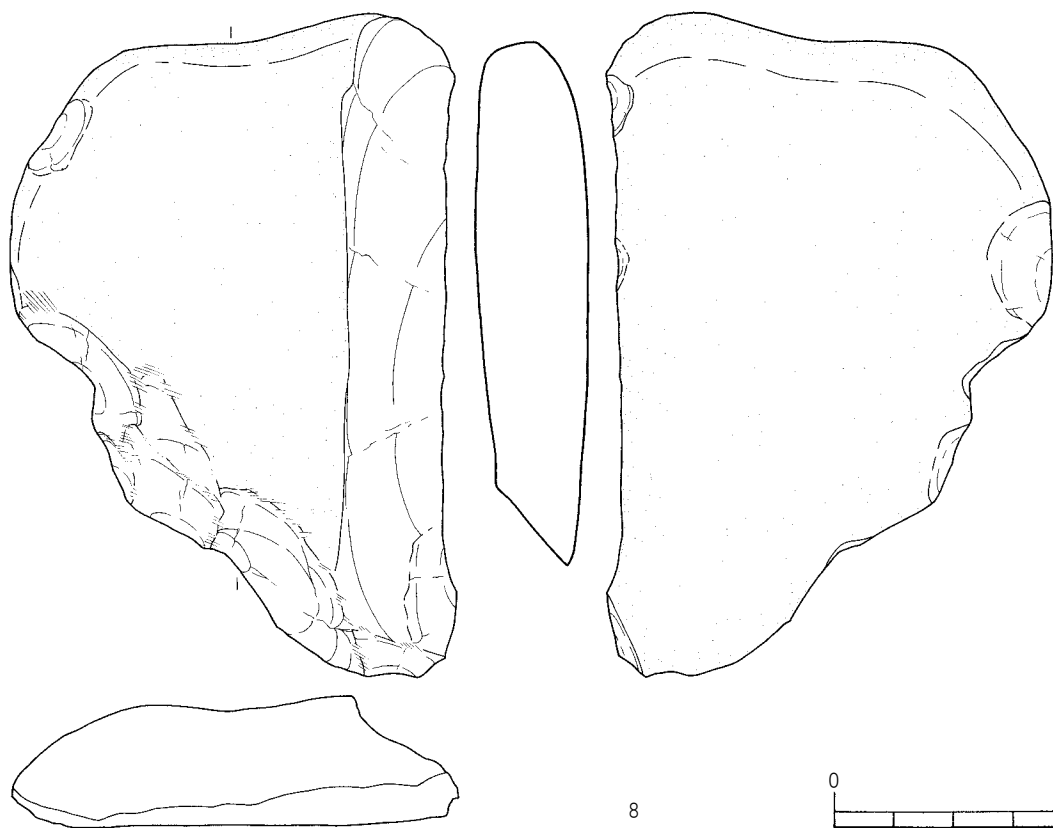
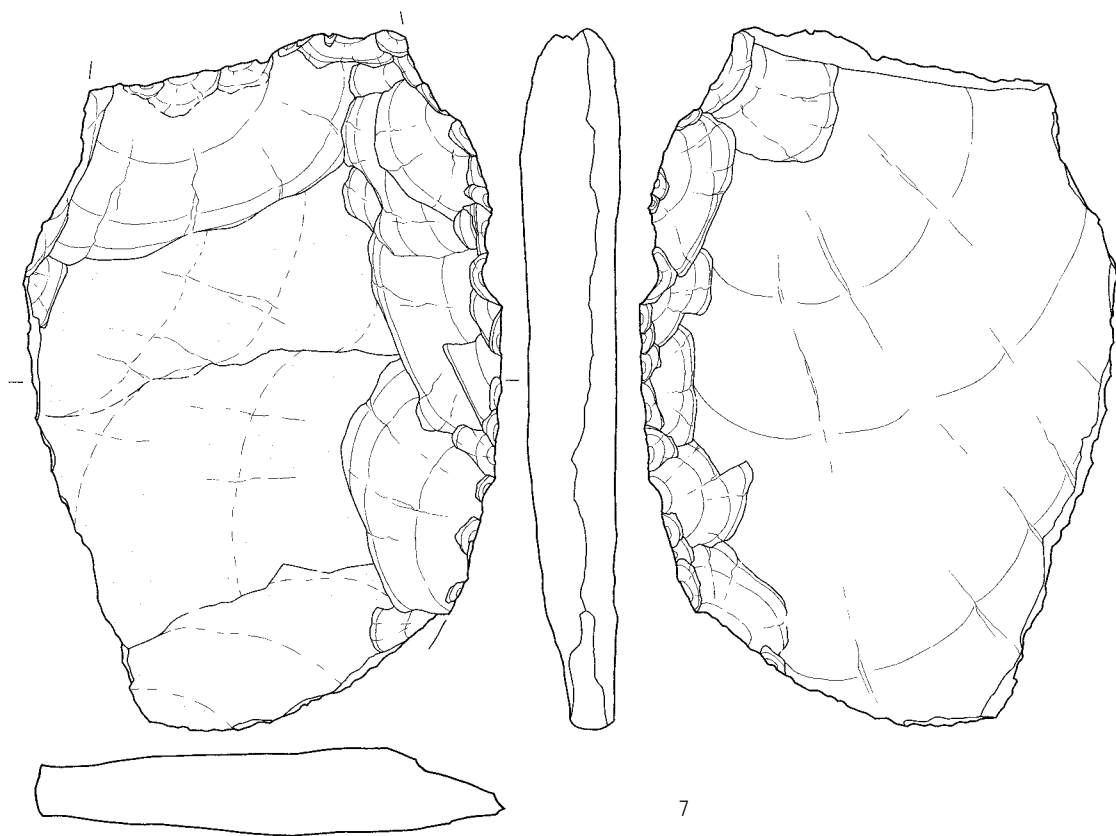
5



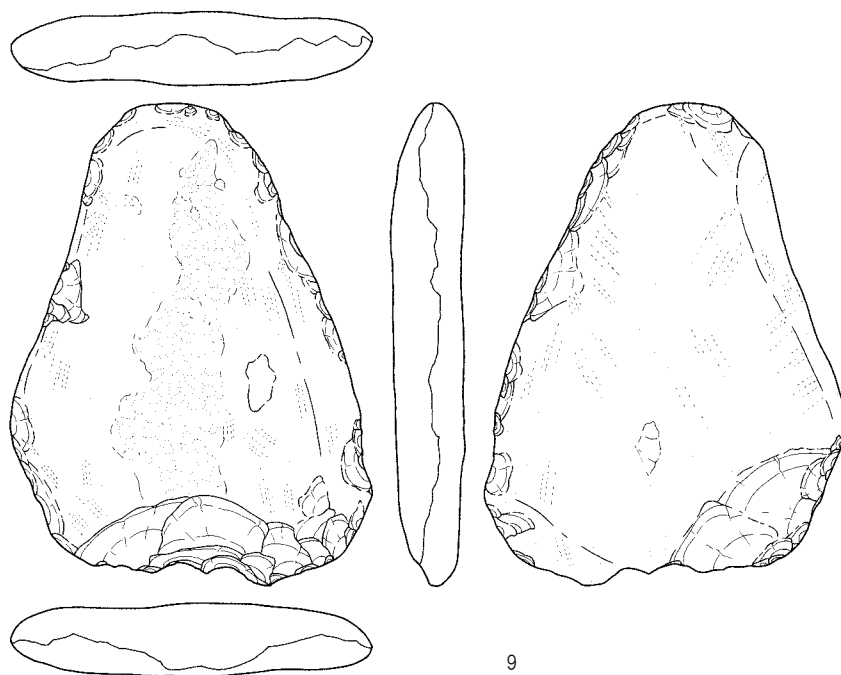
6



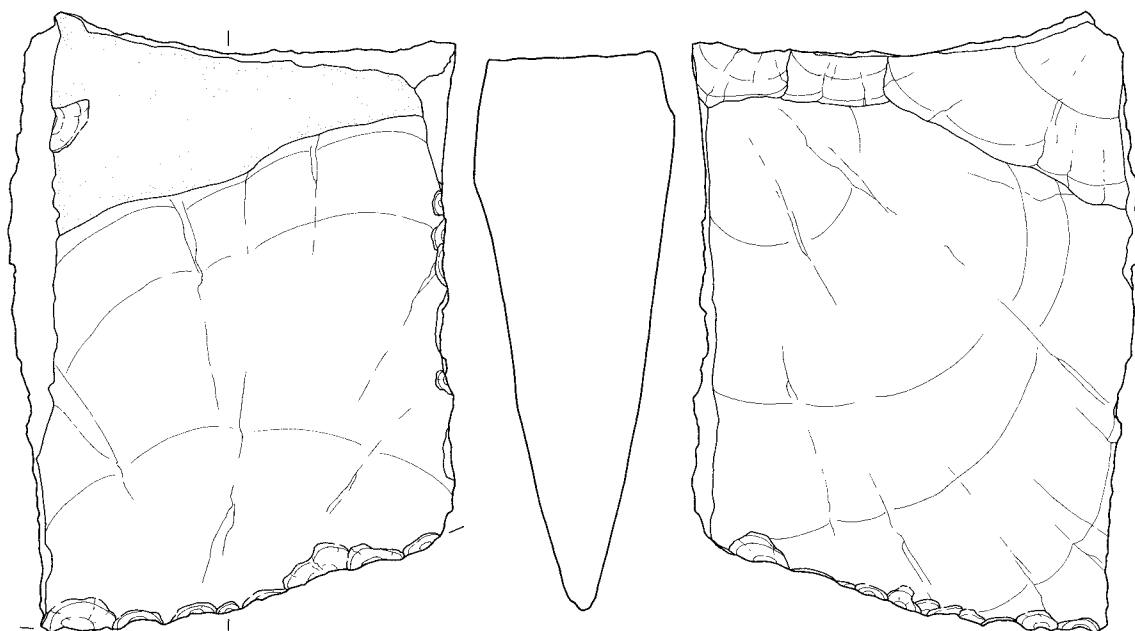
第328図 出土石器 礫器(5)



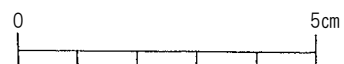
第329図 出土石器 礫器(6)



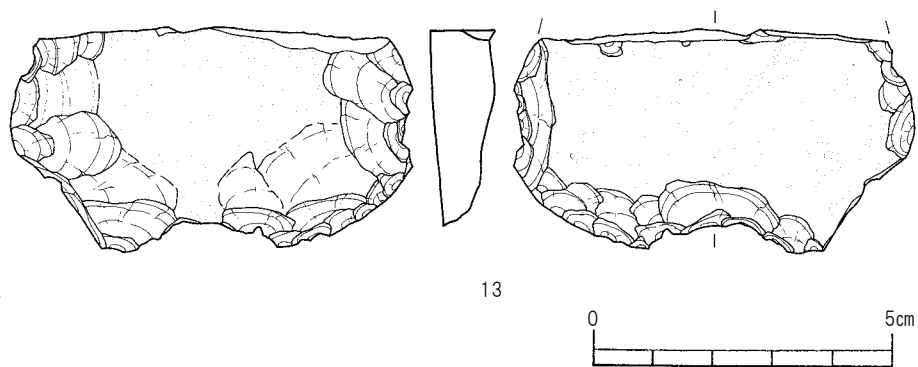
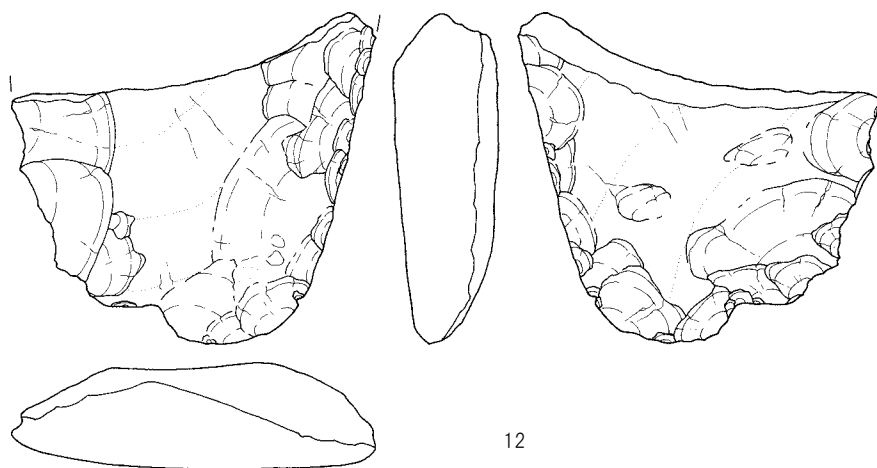
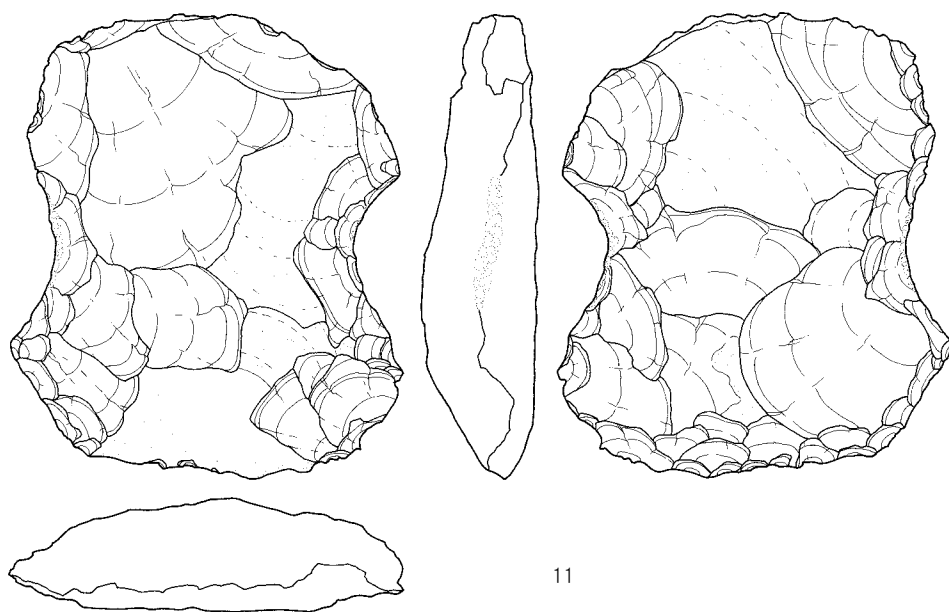
9



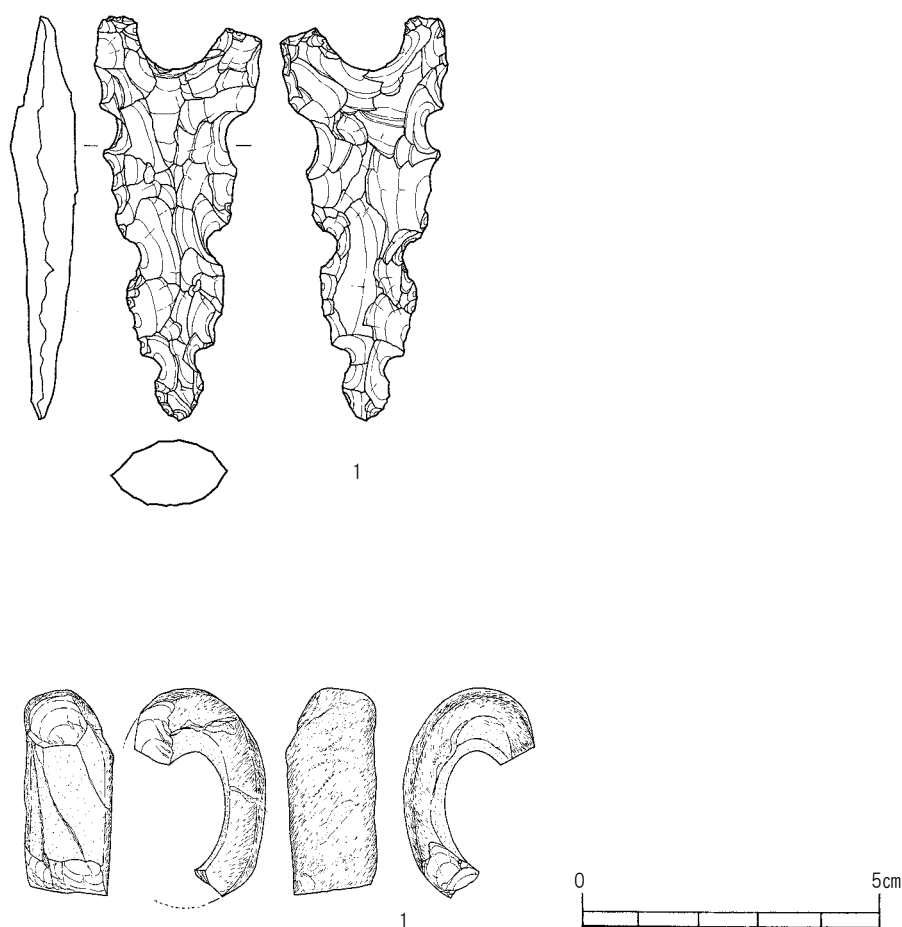
10



第330図 出土石器 礫器(7)



第331図 出土石器 礫器(8)



第332図 出土石器 異形石器, 穿孔礫

19 異形石器

1点だけ出土した。縄文時代早期後葉，塞ノ神・平杵式土器の段階の上野原遺跡で20点まとまって発見された異形石器と同類である。

黒色安山岩の剥片を用いて作られており，周縁の複数の抉入とほぼシンメトリーになる逆三角形になる形状に最大の特徴がある。

上野原遺跡例では，又状部，体部，尾部と三部位に分けて，その強調，省略の有り様から二大別，三小分類したが，そのうちのAⅡ類にあたる。これは，体部が長大化し，又状部と尾部とは省略されないグループである。又状部と体部を分ける抉入，体部と尾部を分ける抉入のほかに，体部に一つの抉入がはいるが，これは上野原の例に比べると少ない。上野原遺跡の例では二つ以上である。また，尾部がこのような小さくなるものは上野原遺跡の例では見当たらず，角張ってもっと大きいか，下端中央に抉入が入る例だけであった。

以上のような些細な相違はあっても，上野原遺跡で出土した異形石器と同一のものであることに疑義を挟む余地は全くない。本遺跡を残した人達と上野原遺跡を残した人達の文化伝統は同じものである事を証明するといつて，過言ではない。

20 穿孔礫

もともと穴の開いた砂質ホルンフェルスの小礫を利用して、その穴をさらに大きく加工したものであり、穴の半ばには加工痕はない。その意味に置いては「穿孔礫」の名称は正しくないが、他に適切な名称を思いつけない。

この石製品も上野原遺跡との結びつきを強く想起させるものである。上野原遺跡でもこのような穴の開いた礫が多数発見されており、何らかの祭祀行為に用いられたものと考えられている。

本遺跡例も同じような想定をしてもよいであろう。

21 石庖丁未製品

1点だけ出土している。粘板岩の剥片を薄く整形し、両側穿孔によって孔があげられている。穴を開けた薄い粘板岩の剥片であるので、磨製石庖丁の残欠と見なしたのであるが、全形を想定しづらいのも事実である。なぜなら、正面左下の直線となる縁辺には擦切り痕が残し、これを延長すると右縁辺との角度が開きすぎて半月状の石庖丁の形態にはならない。

おそらくは、右縁辺を上にして、図の天になっている辺を下にして、弦が刃部になるような半月状石庖丁と見なすのがもっとも妥当であろうか。

石庖丁未製品の残欠とみなすのであるから、弥生時代のものであるといわねばならないであろう。

22 加工痕・使用痕剥片

31点の加工痕剥片、使用痕剥片を掲載した。

これらの剥片の形状は、当然ながら次項の石核の類別を反映したものであり、剥離の方向が背面と腹面とが同一のもの、異なっているもの、背面に求心的な剥離痕が残るものに分けられる。また、形状もさまざまである。ただし、19、23、30は鱗状剥片であろうかと思われるが、加工が進んでおり断定できない。また、2は磨製石斧の大きな刃こぼれの破片であるが、正面右側縁、腹面右側縁等に加工があり、ここに掲載した。何らかのツールへの加工を試みたのであろう。

このほかの剥片にも使用によると思われる微細剥離や、何らかの加工が施されており、なにかしら道具として使った、もしくは道具にすべく加工を試みたものである。4は削器への加工かと思われるが、刃部に相当する側縁が切断面であり、刃部形成をあきらめたものか。7は石核のC類を転用したもので、正面上下側縁に、目的剥片剥離ではない加工が残っている。22～30は石鏃の未製品かとも思われるが、確証がない。31は厳密に言うと加工痕剥片ではない。石鏃を作った際の碎片である。背面の剥離痕や断面の曲がり具合でそのように判断できる。

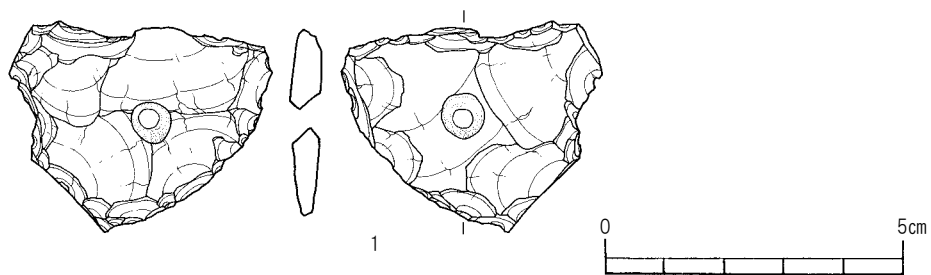
23 石核

101点の石核を掲載した。これらの石核はおおよそ次のように分類できる。

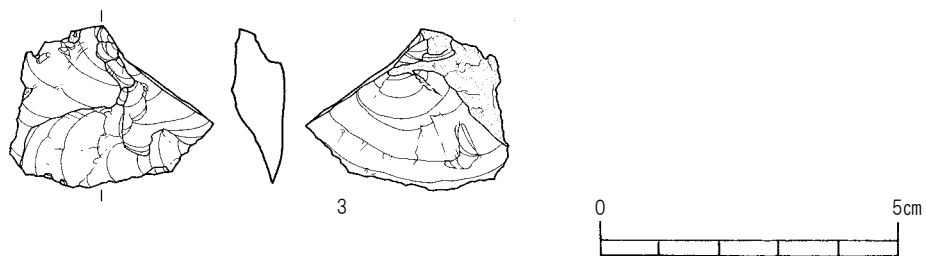
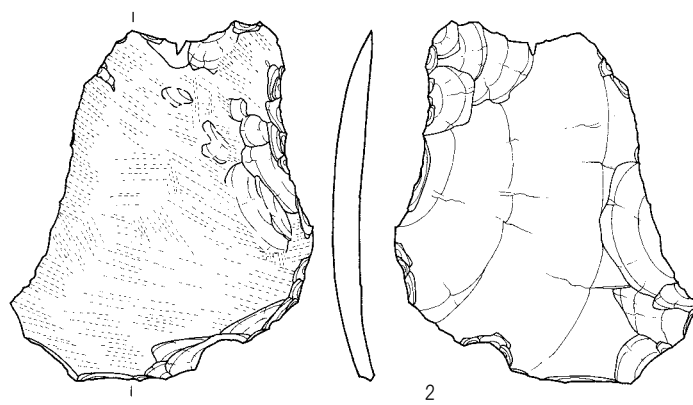
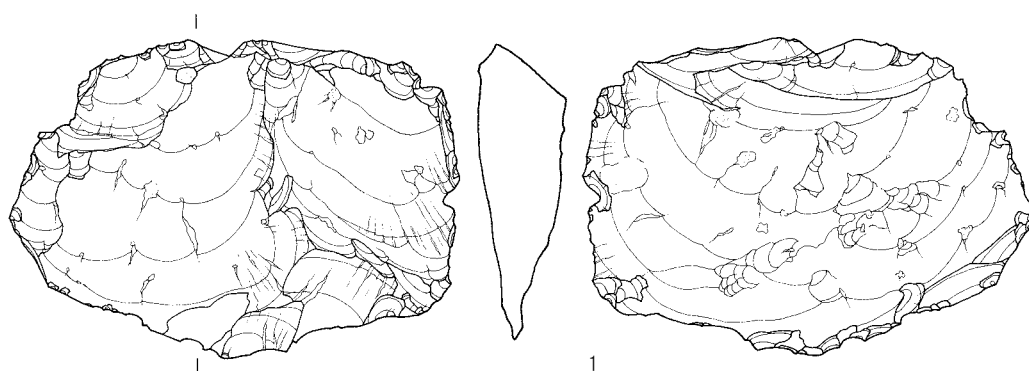
A類：1～4（4個）

縦長剥片を得るために、素材に細長い礫もしくは厚手の剥片を選択し、その長軸の面を作業面とする。

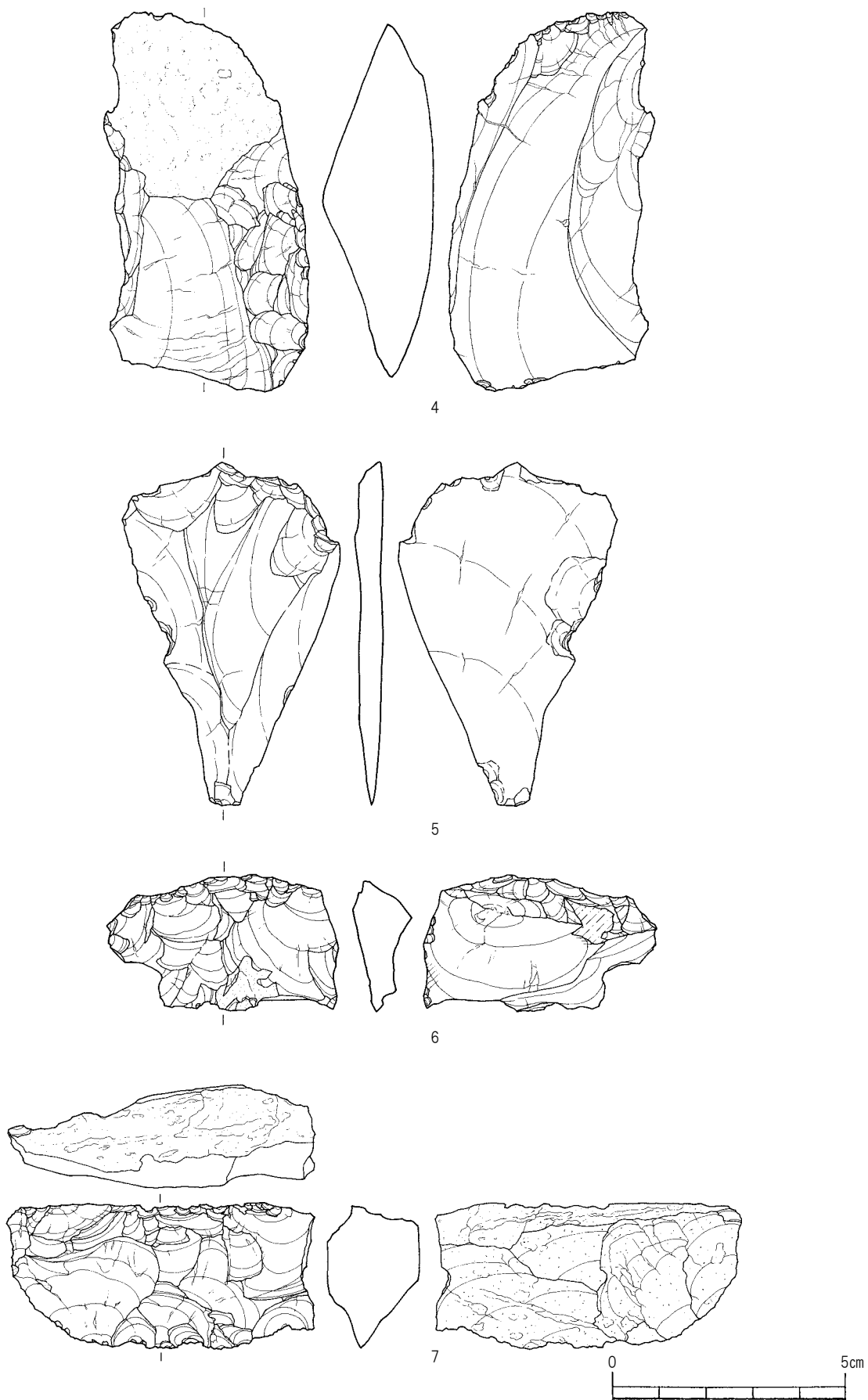
B類：5～77（73個）



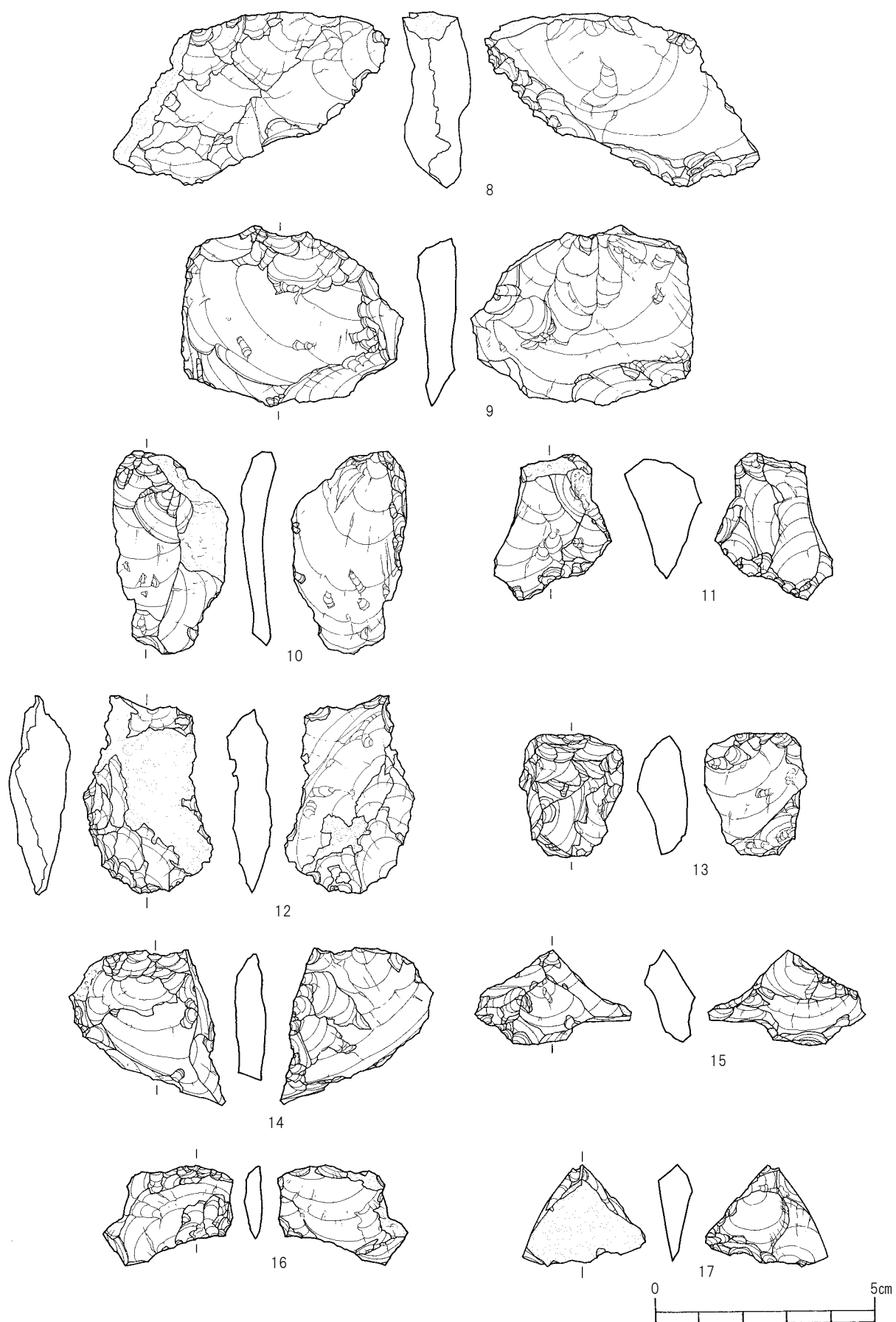
第333図 出土石器 磨製石庖丁未製品



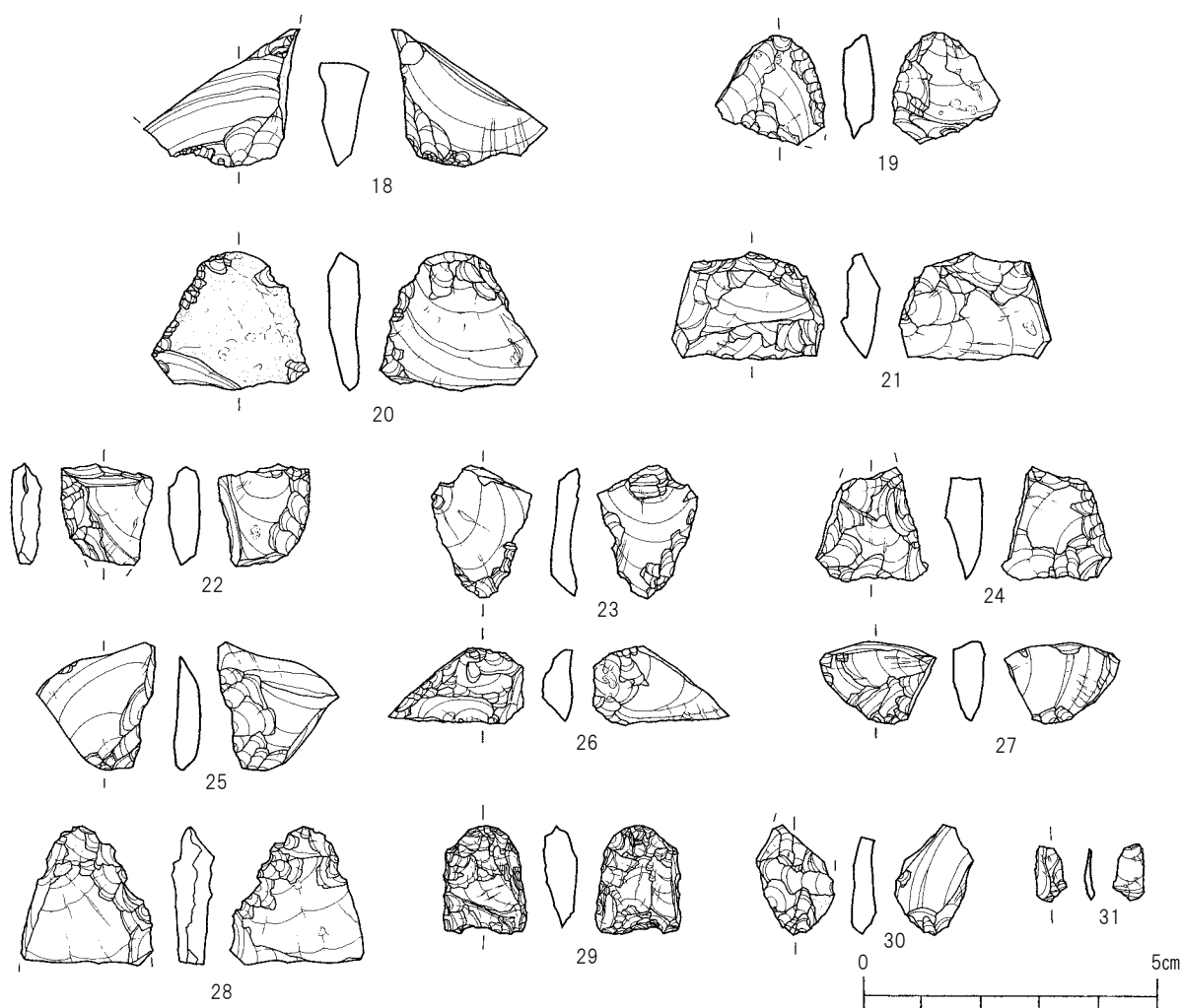
第334図 出土石器 加工痕・使用痕剥片(1)



第335図 出土石器 加工痕・使用痕剥片(2)



第336図 出土石器 加工痕・使用痕剥片(3)



第337図 出土石器 加工痕・使用痕剥片(4)

横長剥片もしくは不定形剥片を得るために、素材に任意の礫もしくは厚手の剥片を選択し、その短軸の面を作業面とする。小さな礫が素材であった場合、打面転移は行われる事は少ないが、やや大きめの礫が素材であった場合、打面転移が頻繁に行われる個体が多いのが特徴である。数量的にも一番多く、基本的な石核であると言える。

C類：78～101（24個）

いわゆる盤状石核（タビュラー・コア）であり、A・B類に比べ打角が小さくなり、得られる剥片は不定形剥片であることが多い。拳大以上の礫もしくは厚手の剥片を素材とする個体が多いが、B類石核の剥片剥離が進行した結果としてC類となる個体もある事が観察された。

以下、類別に観察していく。なお、石材、石質による類別の偏りはないようである。

A類：1～4

1が典型的なA類である。直方体の礫の長軸の木口面を作業面とし、打面は礫面のままである。2も1と同様であるが、作業面右側の剥離面は下からであり、天地をひっくり返す打面転移が行われた事が分かる。また、1と異なるのは、短軸の木口面で打面作製を行っている事である。おそら

く、目的剥片の大きさが確保される場合は打面作製が行われるのではないかと推察される。3・4はB類石核が小さくなり、直方体もしくは紡錘体の形状になったものが選択されている。ほぼ同じ長さの縦長剥片が得られている。

B類：5～77

このうち5～19までは打面転移、作業面転移が1回以下のもので、20～77は頻繁な打面転移、作業面転移を行っているものである。

5・6はピンポン玉大の礫の分割礫が素材となっており、得られる剥片も小さいので、おそらく石鏃作製のための剥片が目的剥片であろう。礫皮面もしくは分割面を打面とし、横長剥片もしくは不定形剥片を剥離している。7も同様であるが、これは厚手の剥片素材であることが5・6と異なり、打面となっている面はA類の作業面であった蓋然性も高い。8以下は、やや大きい礫、分割礫もしくは厚手の剥片素材であり、得られる剥片も大きくなる。最大のものが18・19である。これら大きいサイズのものも、剥片剥離のありようは基本的に小さいサイズのものと同じであるが、個数が多いだけにややバリエーションが生じている。16は板状の礫を素材として、その木口面を作業面とし横長剥片を剥離している。10、13もそれに近いが16と比較した場合、縦横比が10、13より16のほうが大きく16は特異であるとも言える。

18と19を比較すると、このB類の基本的な剥片剥離のありように気付く。それは、素材の用い方である。18は分割礫の木口面を作業面とし、19は板目面を作業面としており、その結果として得られる剥片の規格が異なるのである。19は背面が不整形であり、木口面を剥離すると剥片の規格が維持しにくいからこのように用いたのであろう。換言すれば、大きめの縦長剥片を得るためには、このような素材礫が選択されたと言えようか。18は剥片剥離が始まったばかりであり、このような形態から、打面転移を頻繁に行うようになり、20以下のようなになるのであろう。

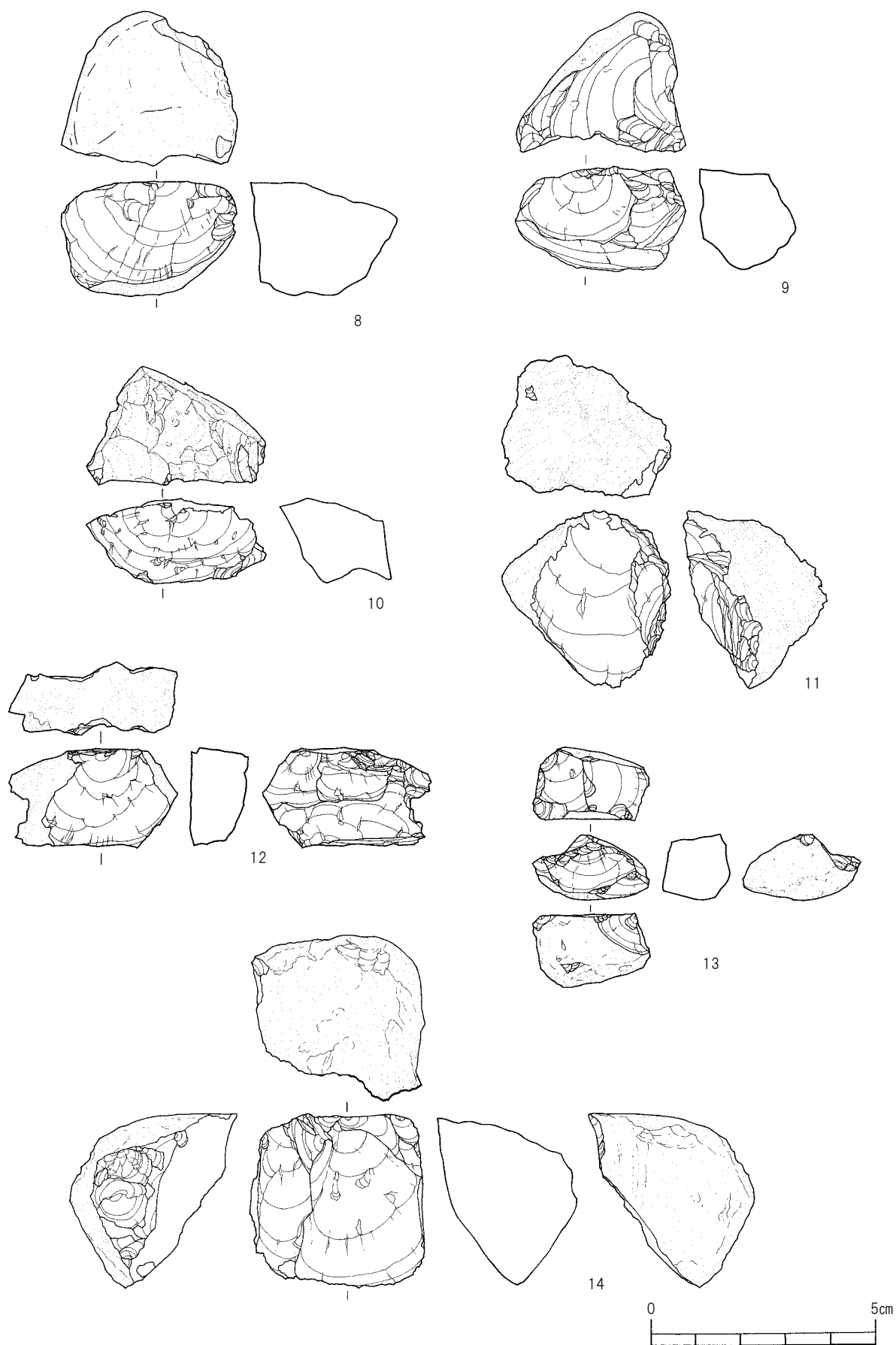
20以下は打面転移、作業面転移が複数回行われるようになった石核である。20は、底面－上面（左側に残る）－背面－上面－正面と作業面が転移、それにつれて打面も転移している。このような4面に渡る転移の仕方は、その順序に斉一性は窺えないものの他の個体にも共通する。そしてそれが進行した結果が27、30、48、57などである。48の底面は上下からの剥片剥離が残されており、作業面は同一で打面転移のみが行われている。このような剥片剥離の進行はC類への移行を推察させるものである。つまり、作業の進行につれて石核が薄くなれば、C類とした盤状石核になると考えられる。

C類：78～101

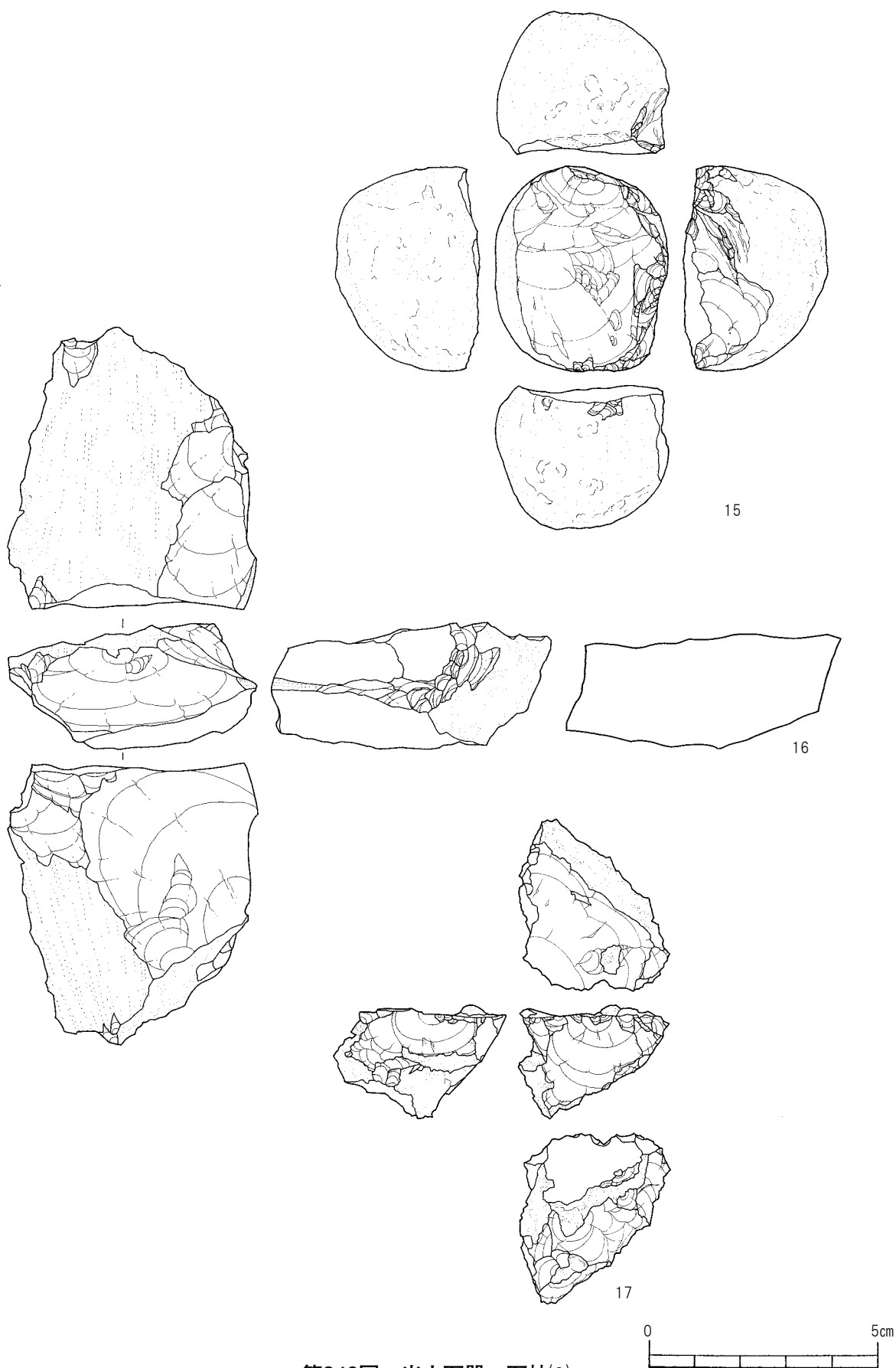
78～82は48によく似ており、B類とさほどの違いはないが、27、30より薄くなっており、C類として分類したもので、求心的な剥片剥離がある。83はそれが両面にあり、84は背面は凹凸のある礫面であるためか、ほとんど剥離されていない。このような求心的な剥離でもって目的剥片剥離を行うC類の典型例が90、97と93、95、98、99などである。前二者は両面で求心的剥片剥離を行っており、後四者は片面のみで行っている。この差異は背面の凹凸ではなかろうかと推察している。98、99のように凹凸が強ければその調整に手間がかかるので、省力化のため片面のみ進行させたのではないかと推察している。その根拠は、96は背面の礫皮面の稜上を剥離しているが、3～4回の剥離で終了していることである。92でも同じような傾向が伺える。



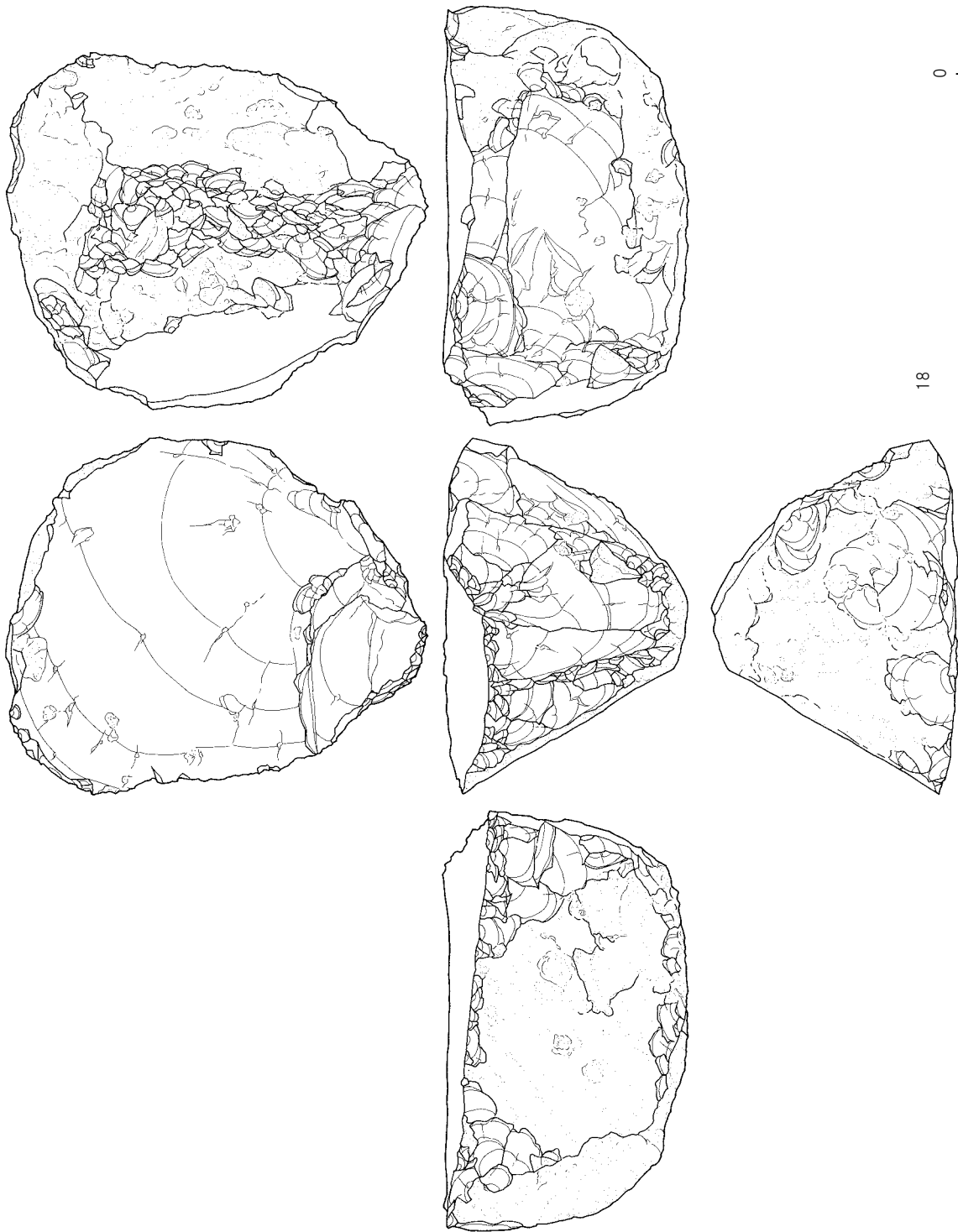
第338図 出土石器 石核(1)



第339図 出土石器 石核(2)

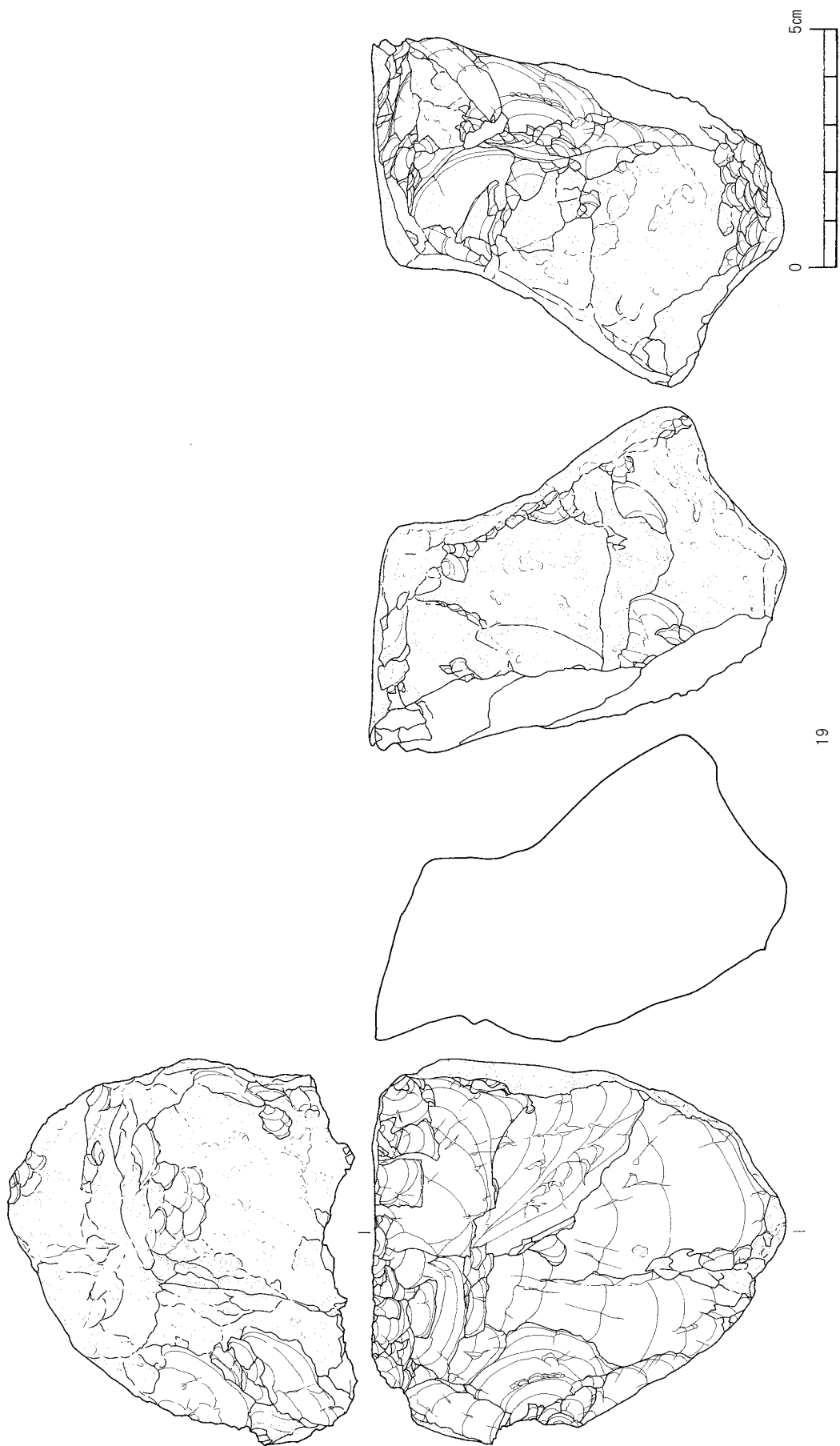


第340図 出土石器 石核(3)

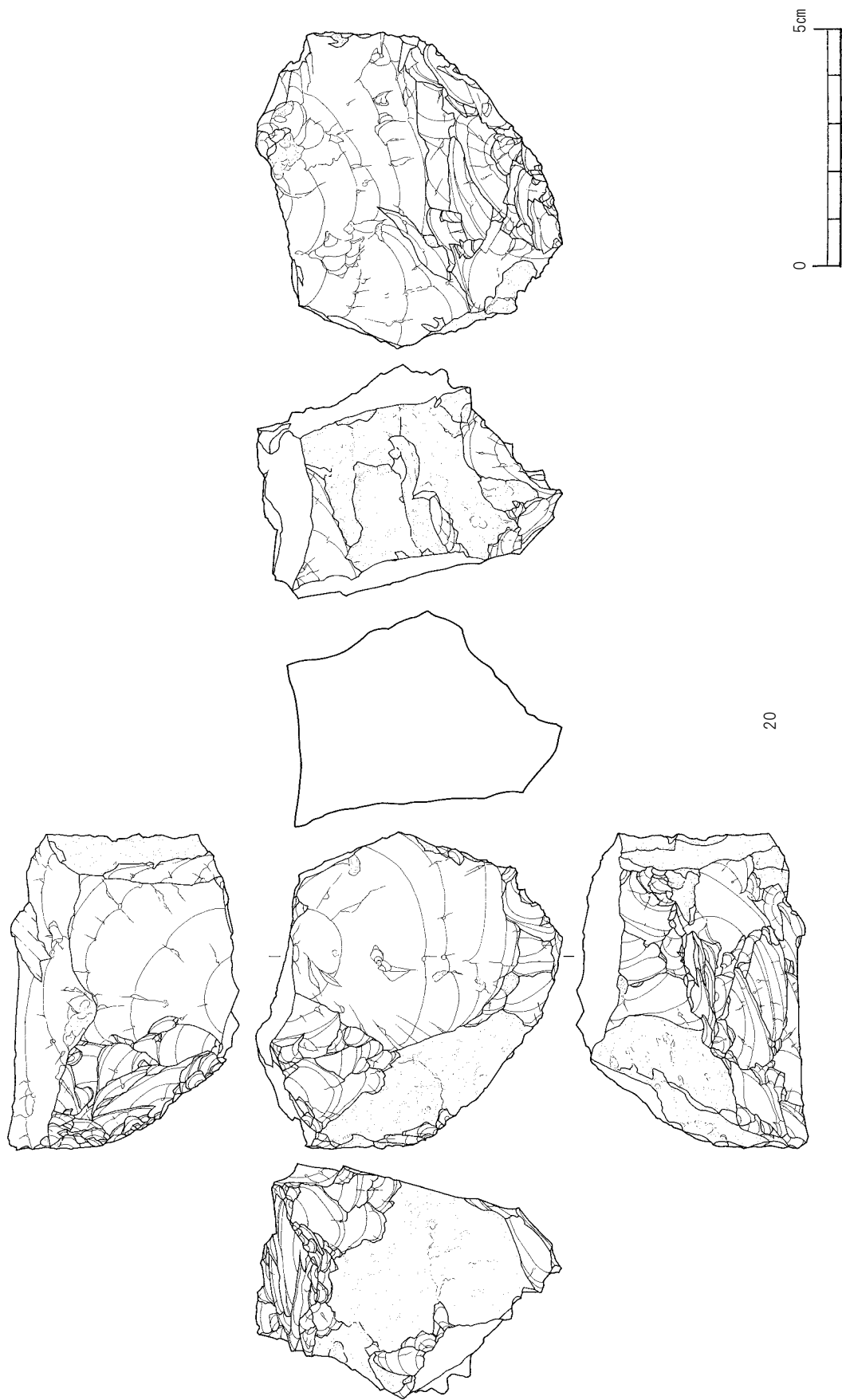


18

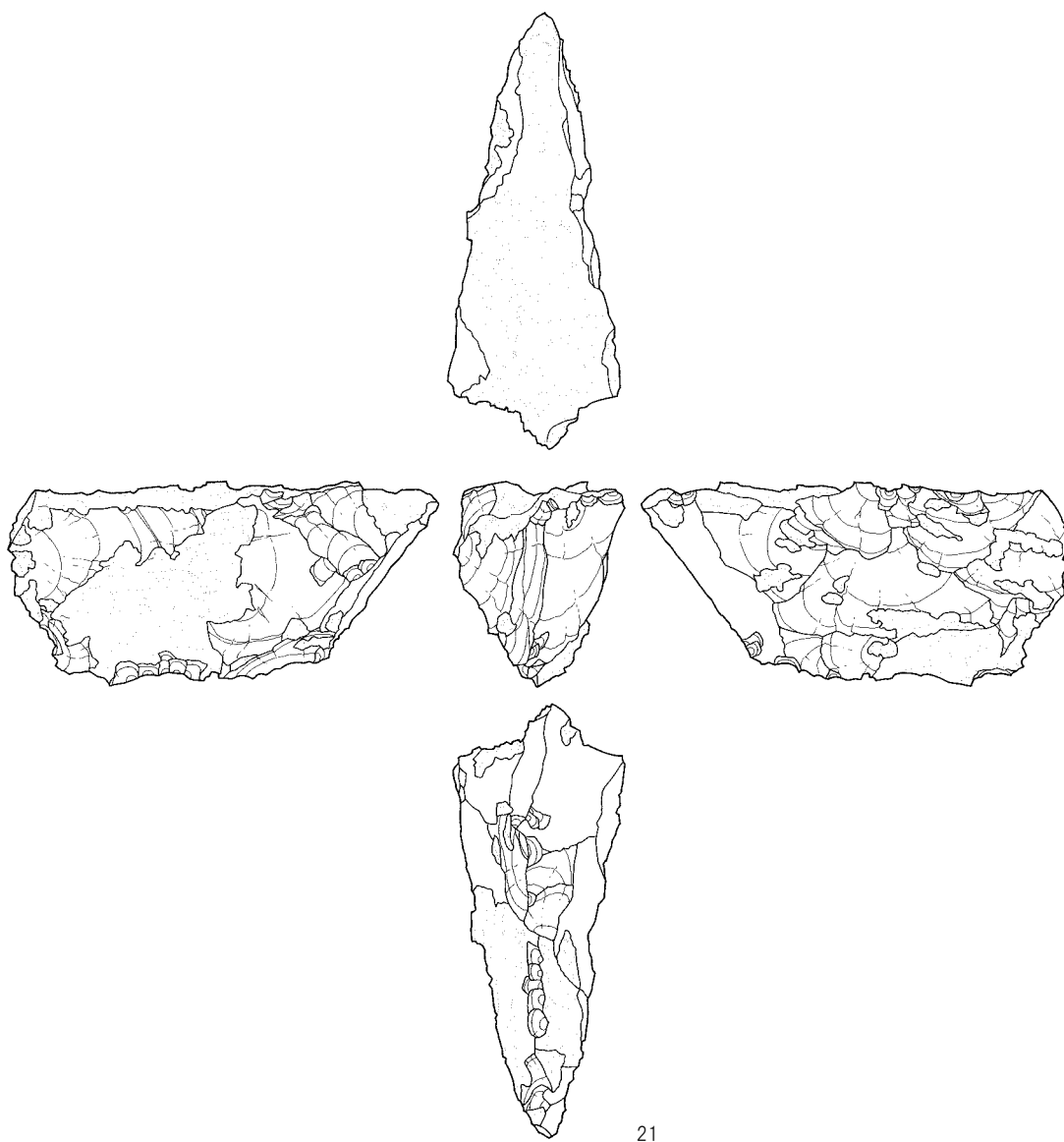
第341図 出土石器 石核(4)



第342図 出土石器 石核(5)



第343図 出土石器 石核(6)



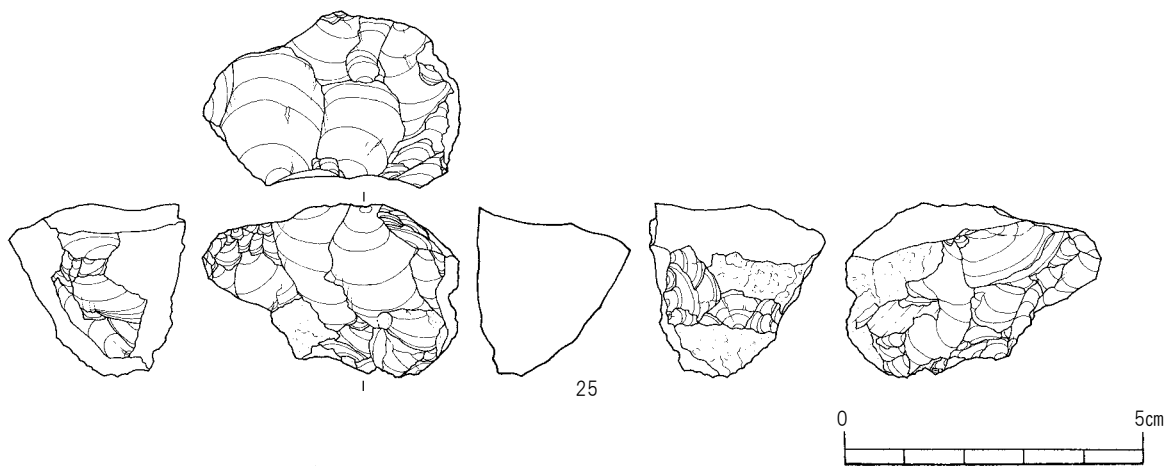
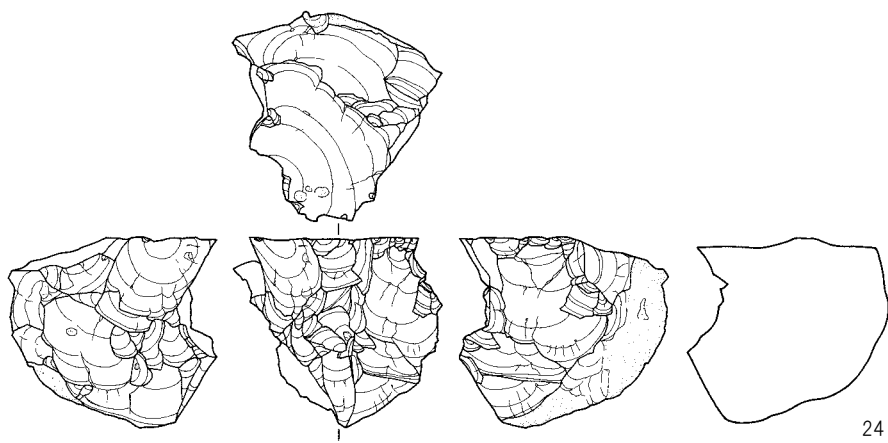
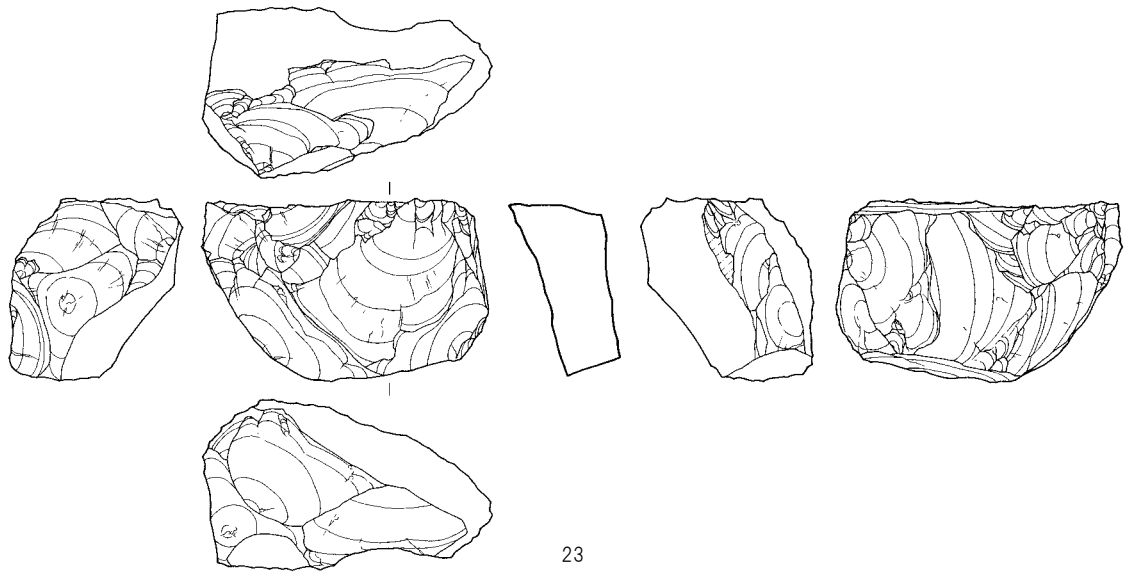
21



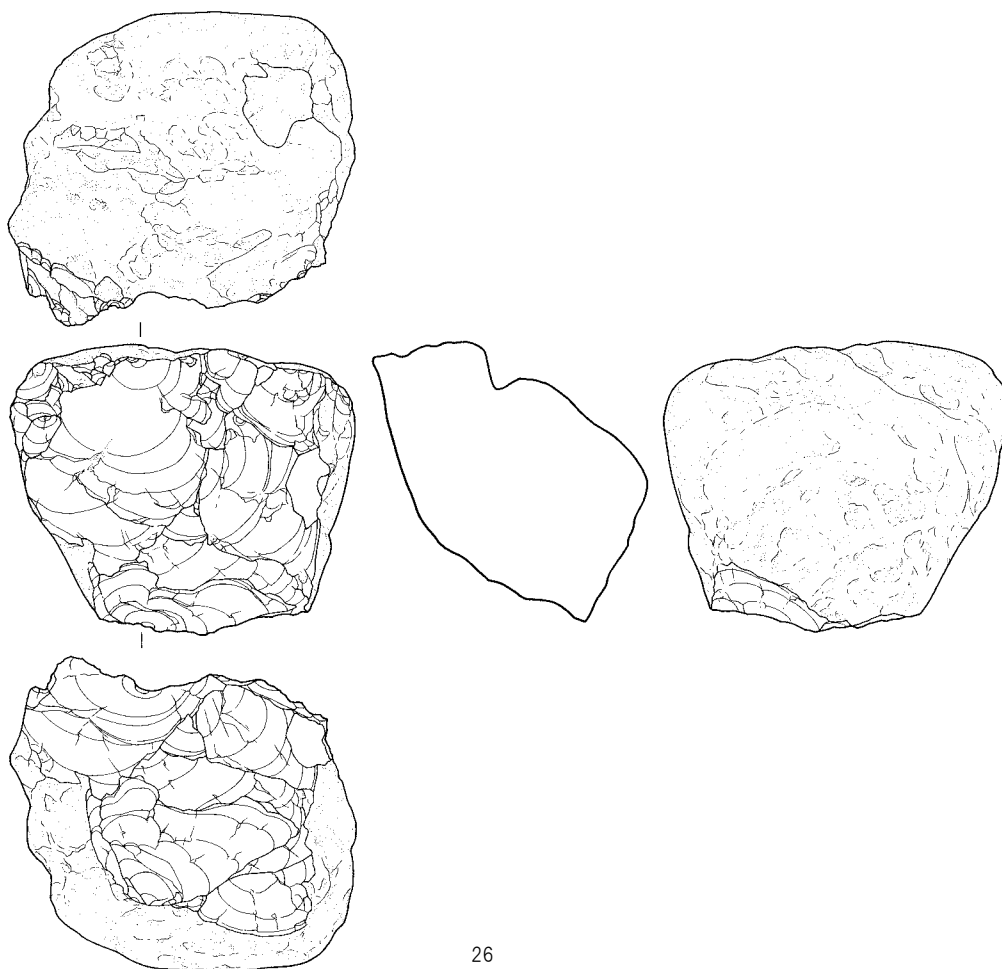
22



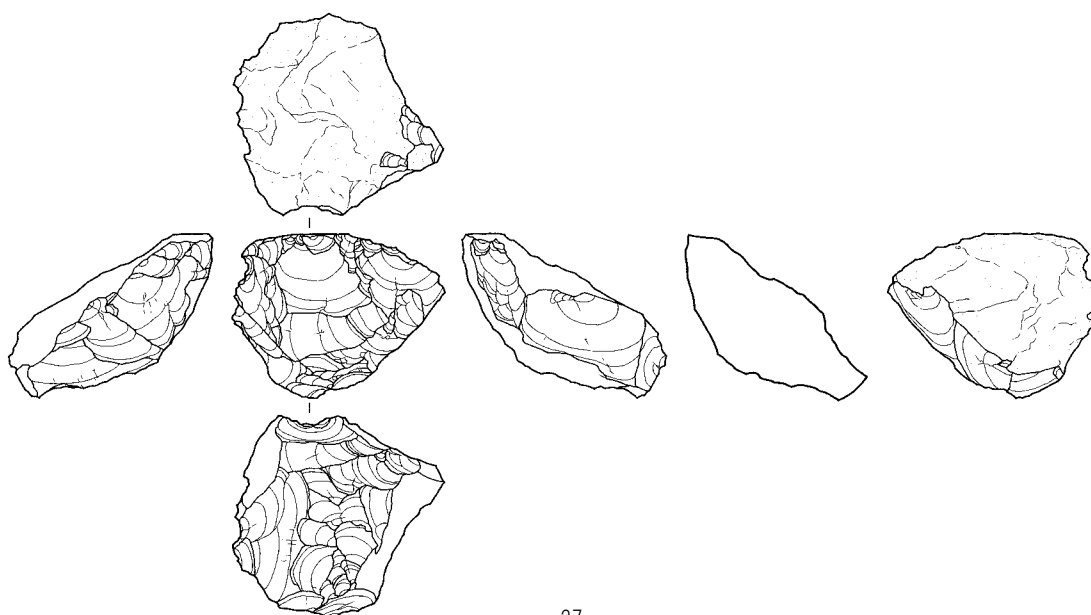
第344図 出土石器 石核(7)



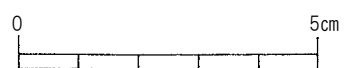
第345図 出土石器 石核(8)



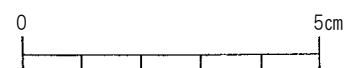
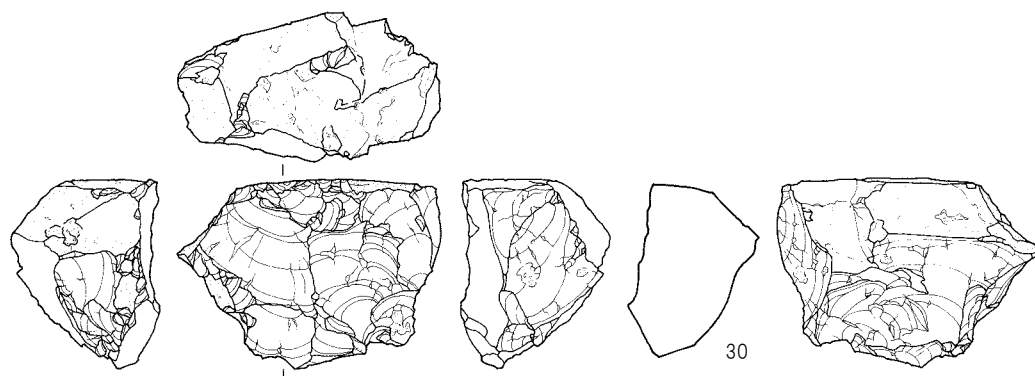
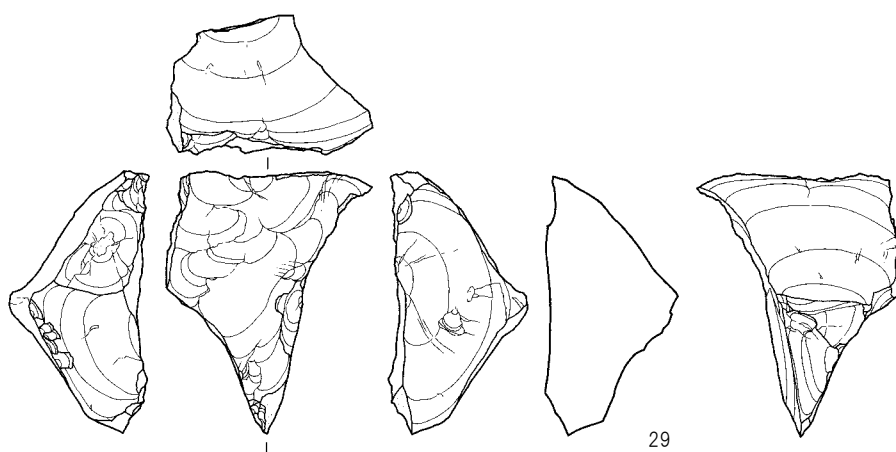
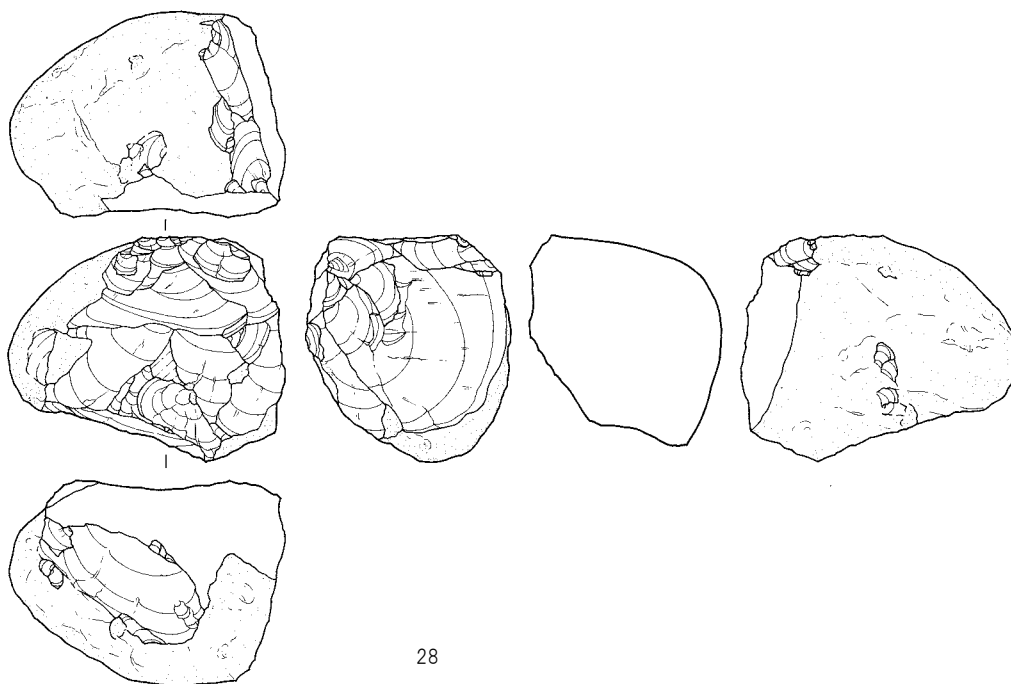
26



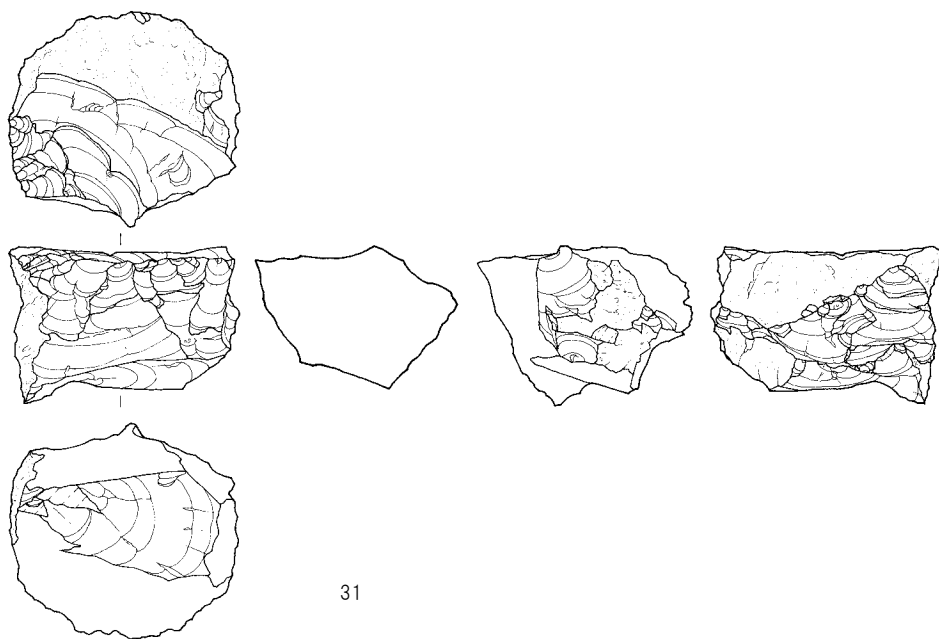
27



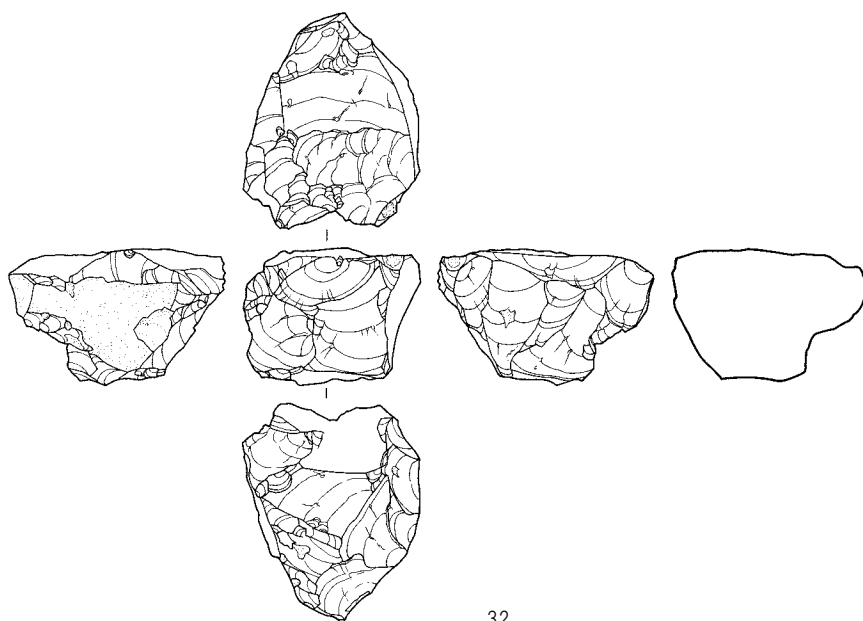
第346図 出土石器 石核(9)



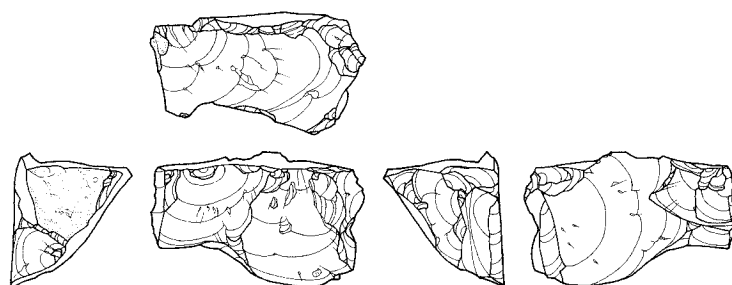
第347図 出土石器 石核(10)



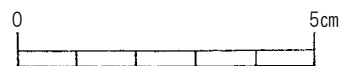
31



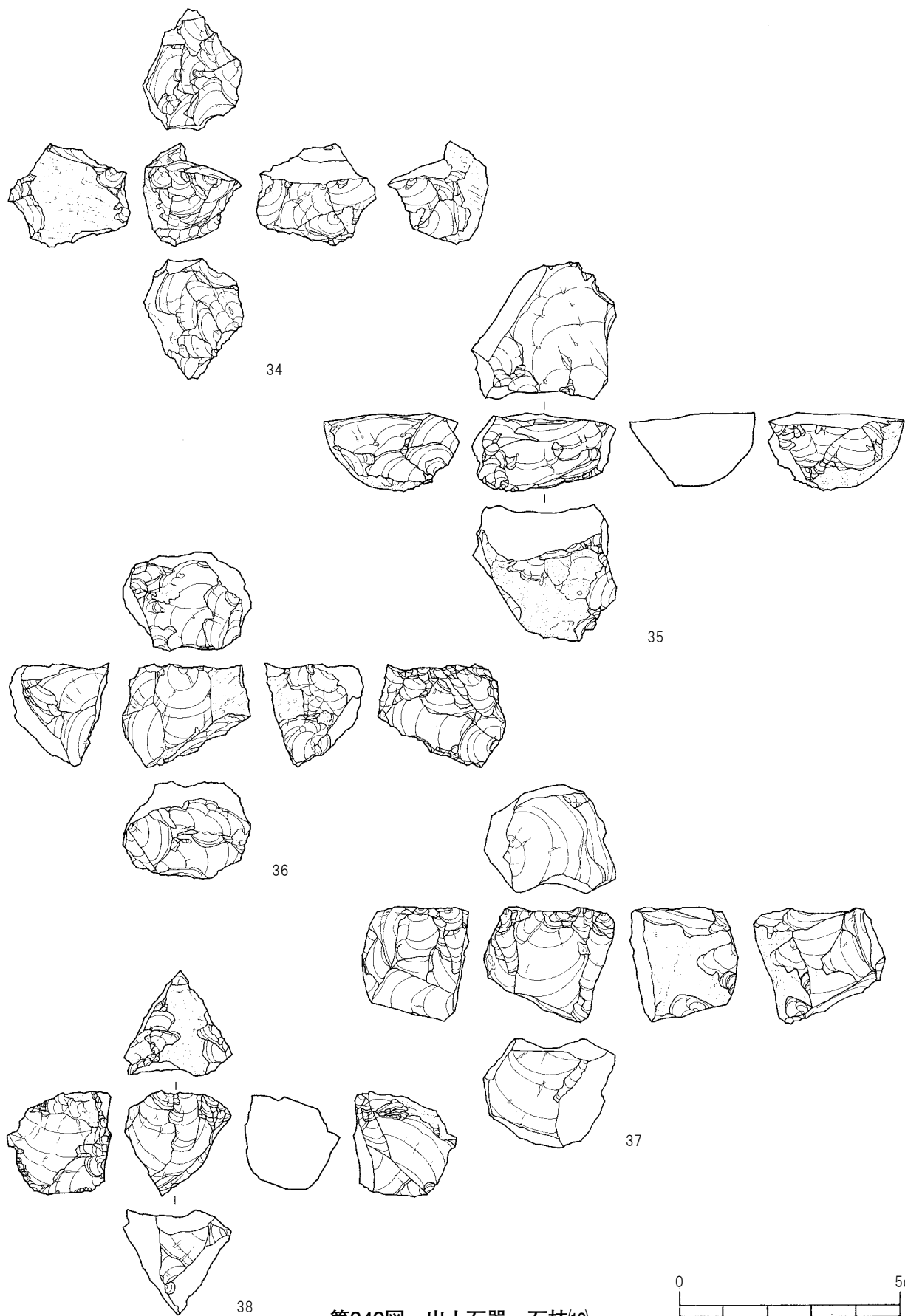
32



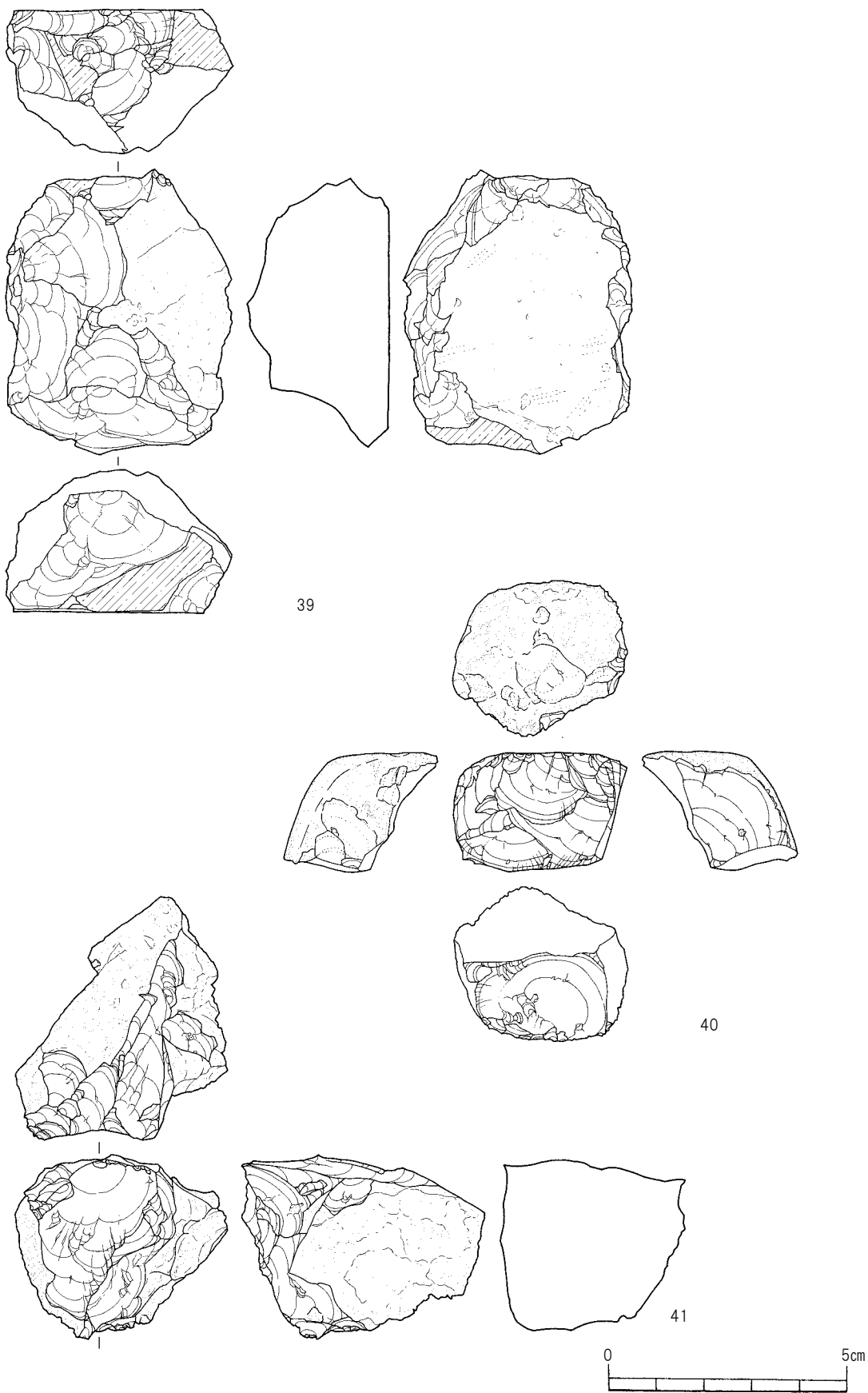
33



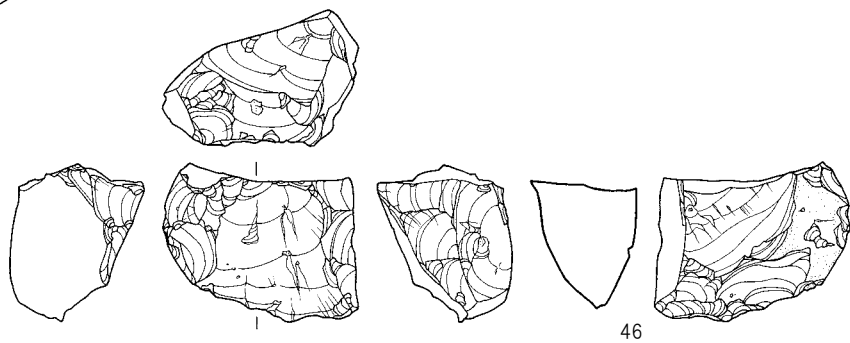
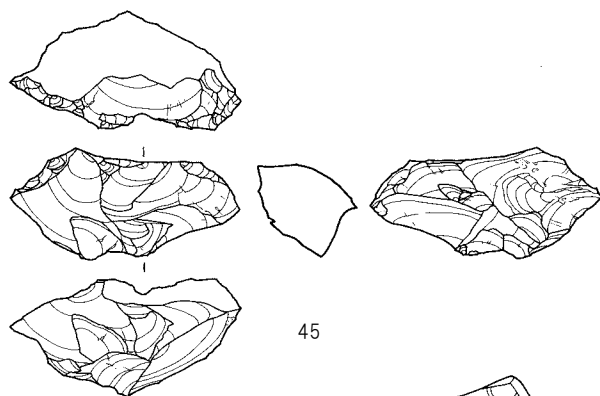
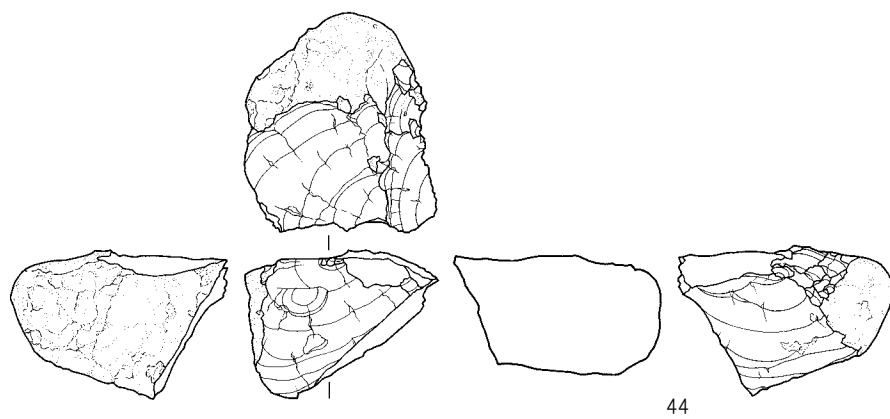
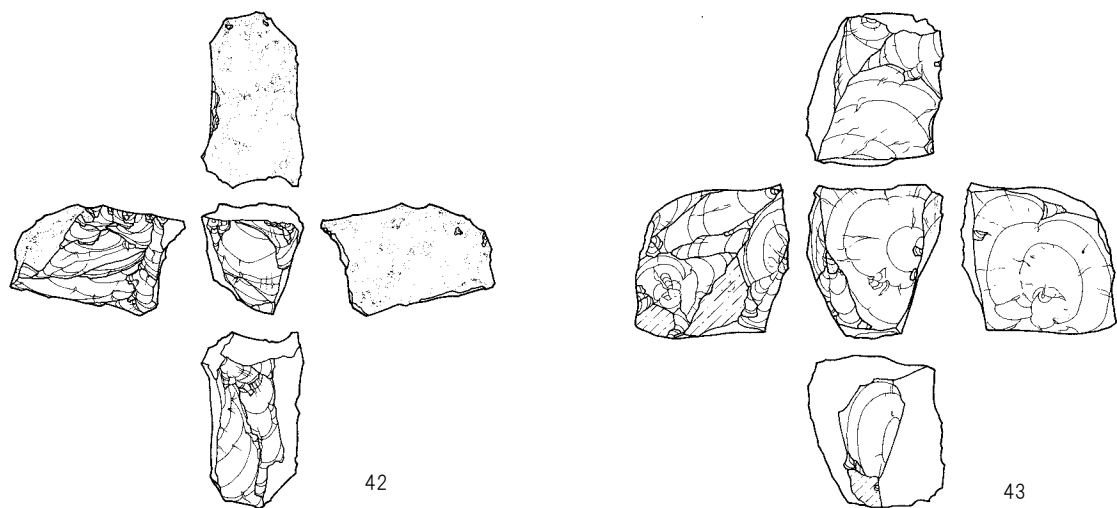
第348図 出土石器 石核(11)



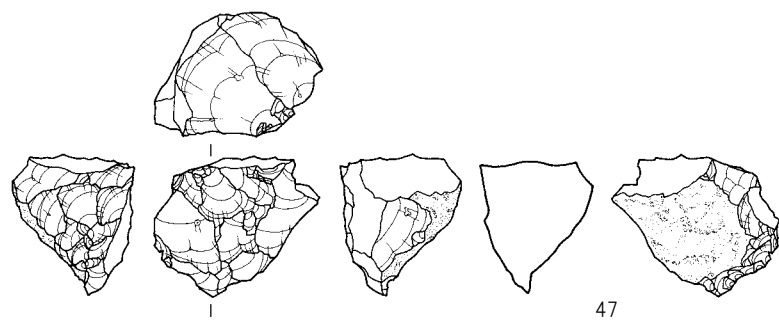
第349図 出土石器 石核(12)



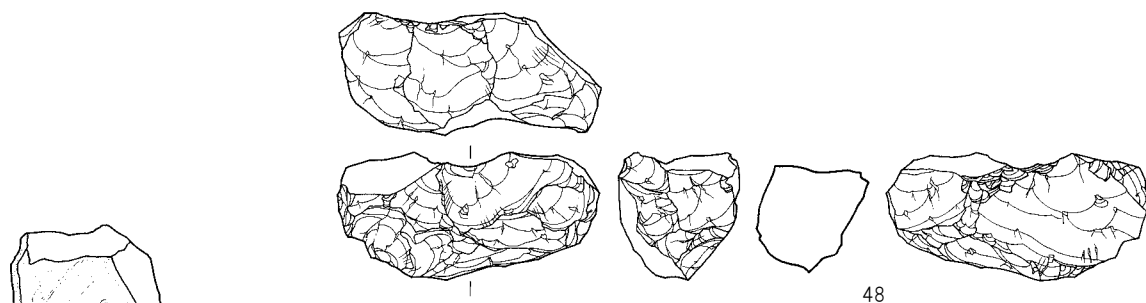
第350図 出土石器 石核(13)



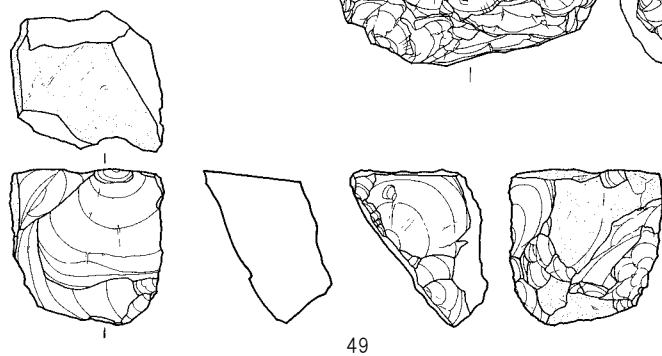
第351図 出土石器 石核(14)



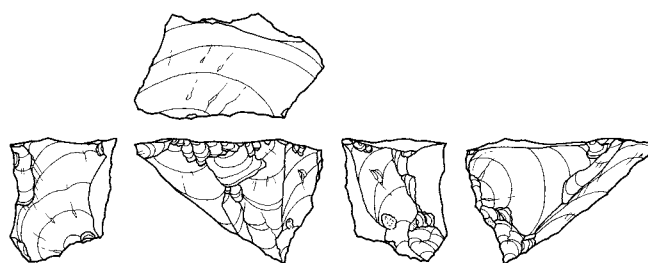
47



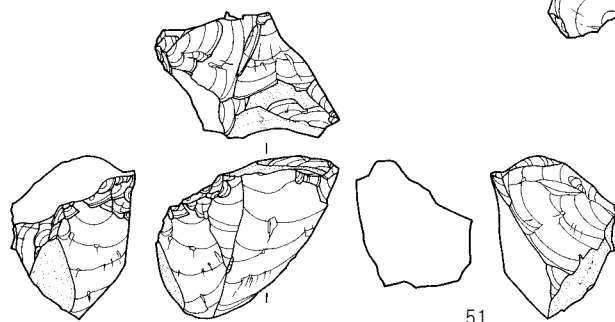
48



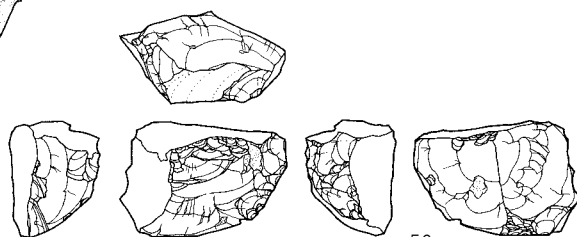
49



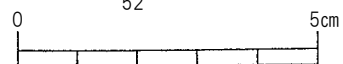
50



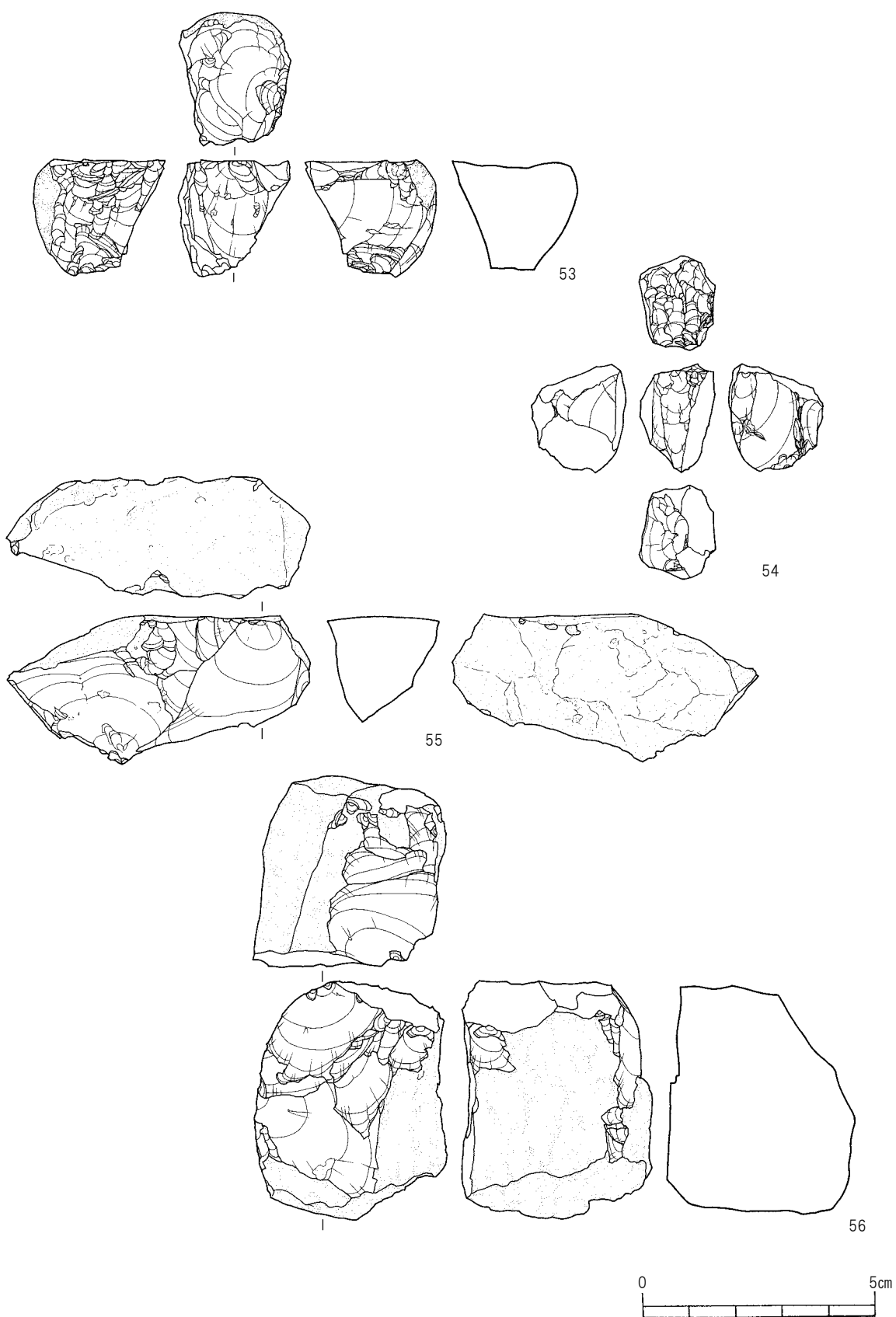
51



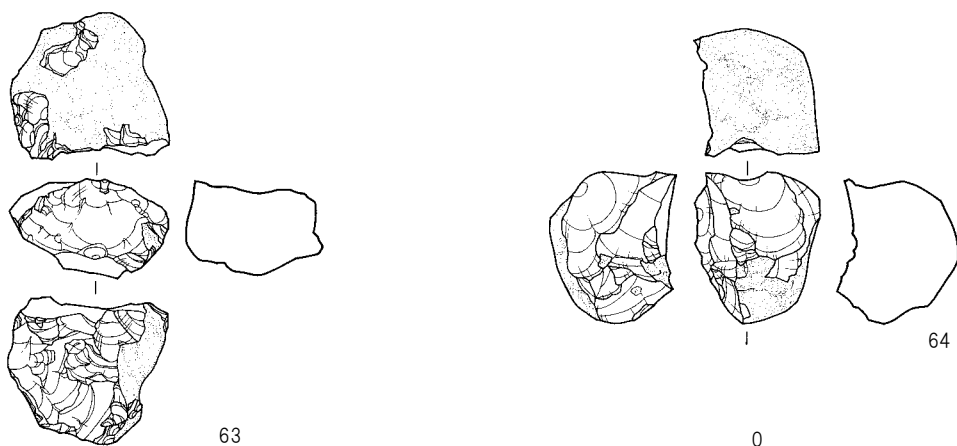
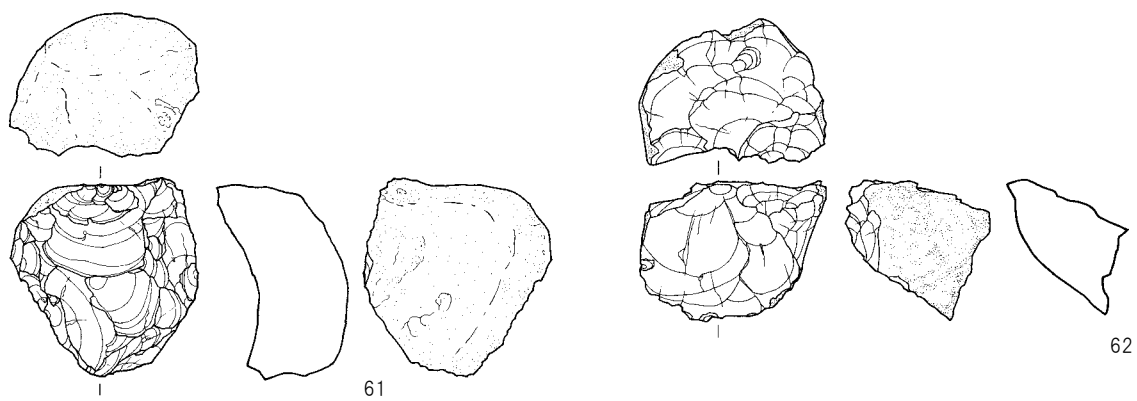
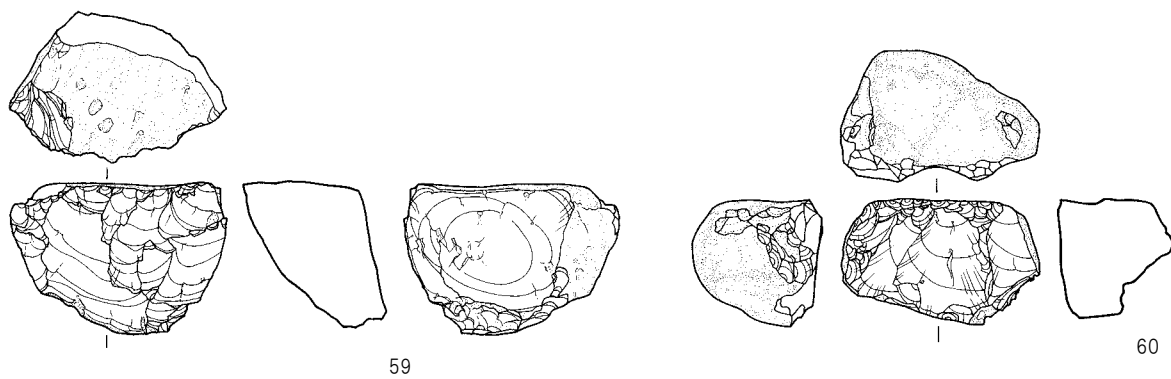
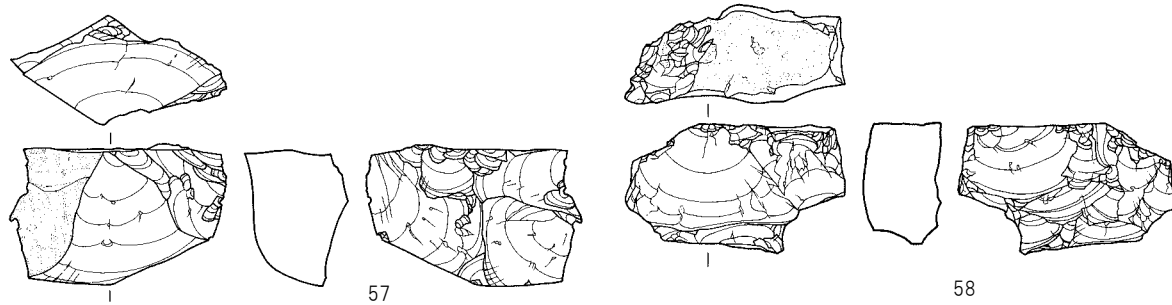
52



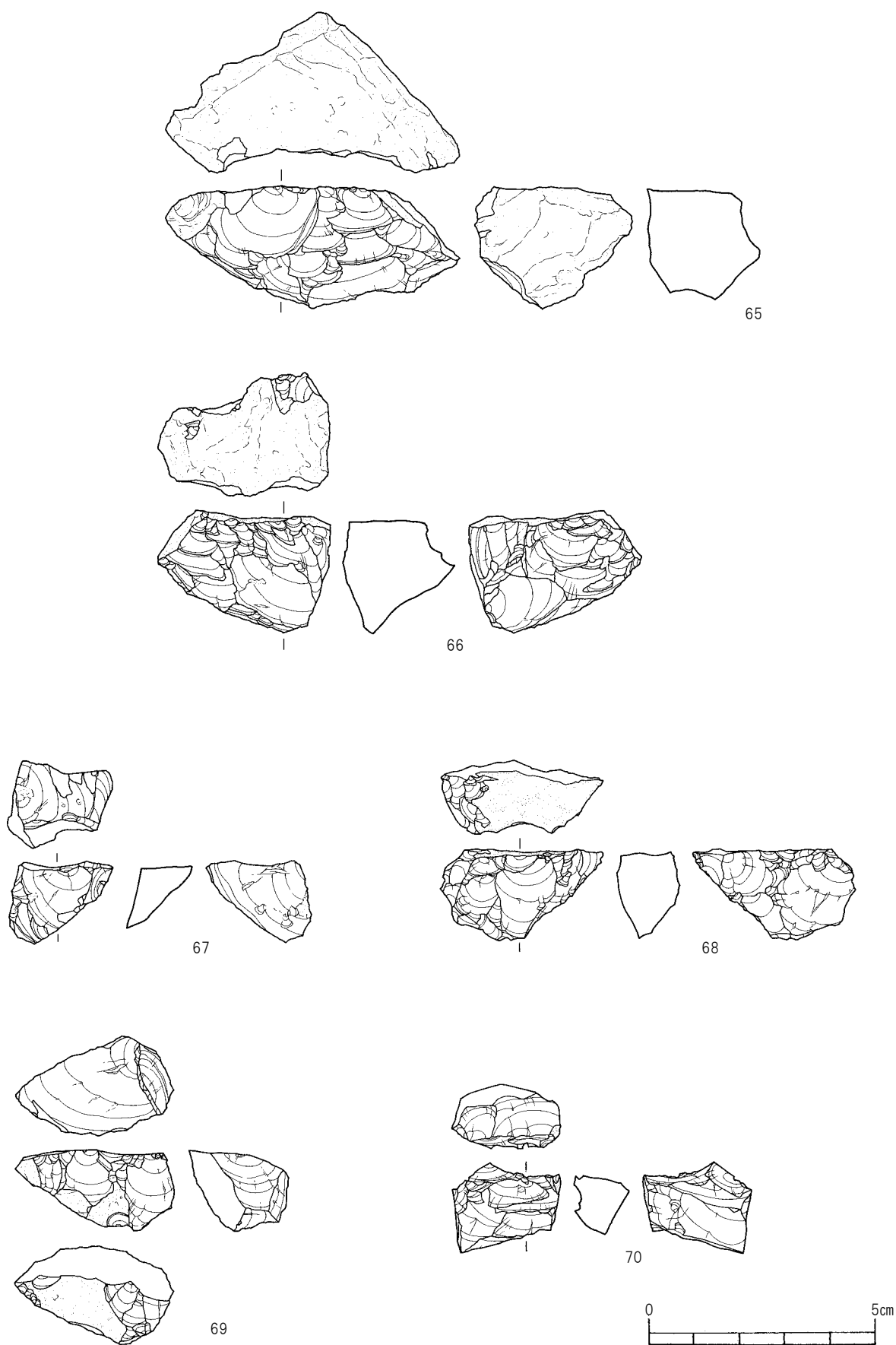
第352図 出土石器 石核(15)



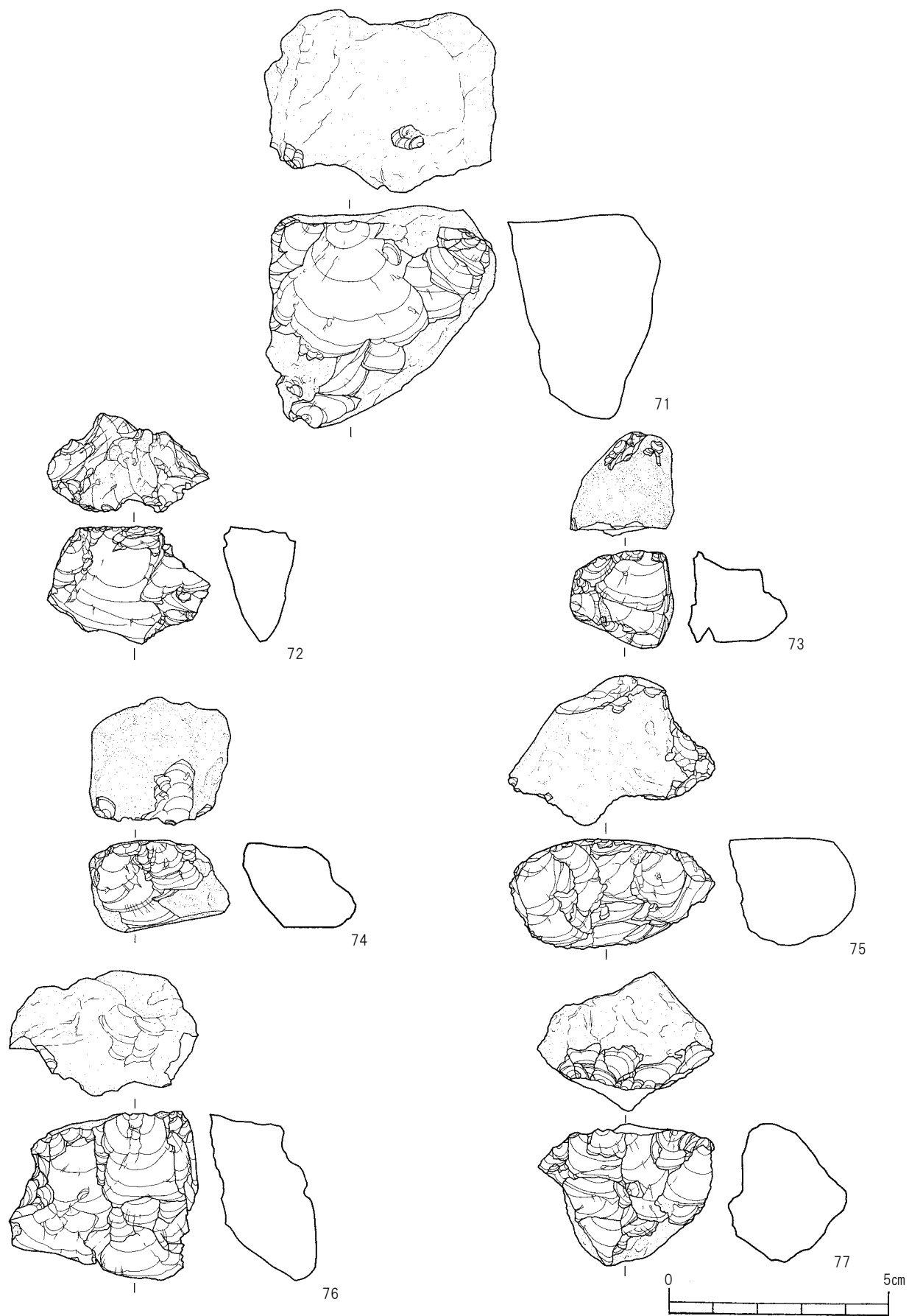
第353図 出土石器 石核(16)



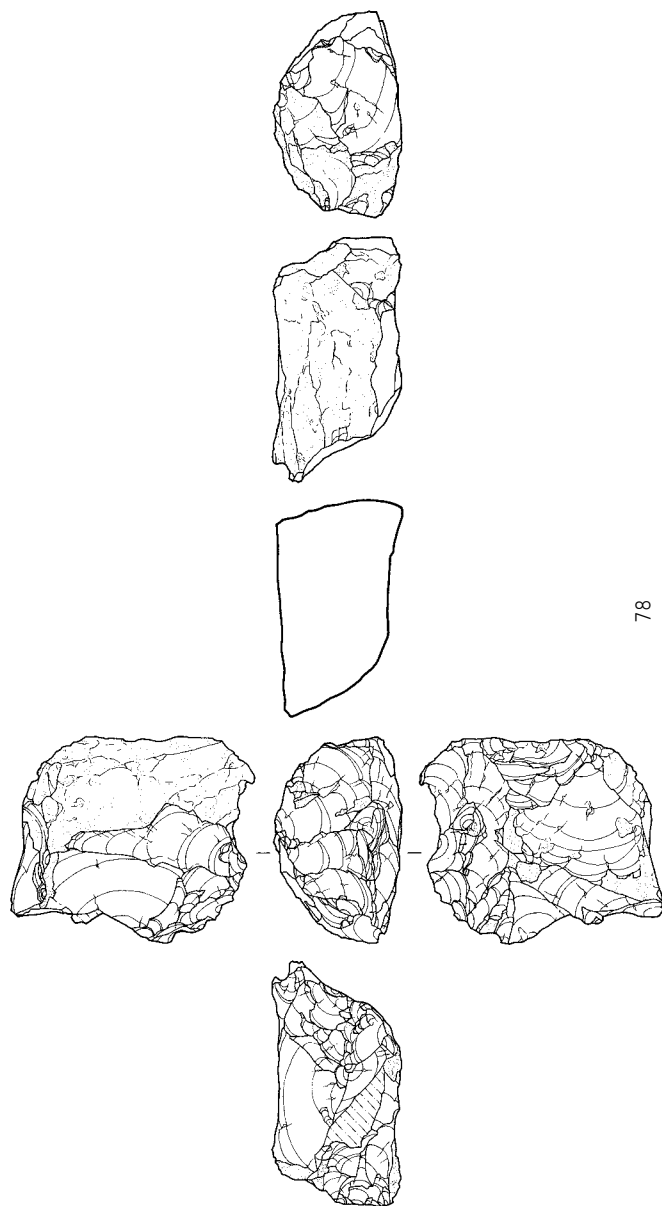
第354图 出土石器 石核(17)



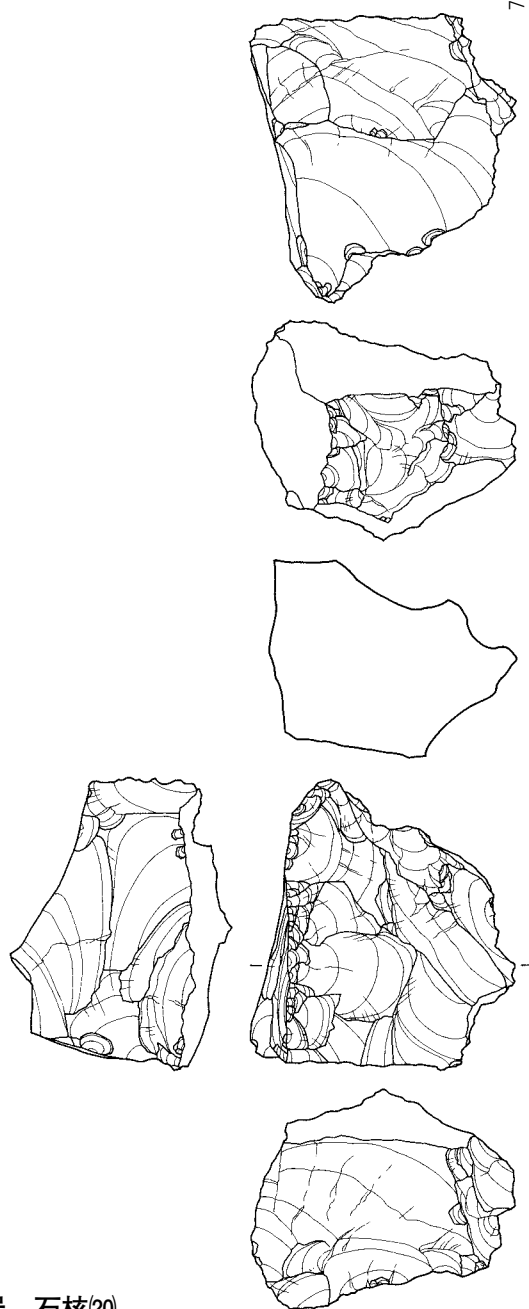
第355図 出土石器 石核(18)



第356図 出土石器 石核(19)

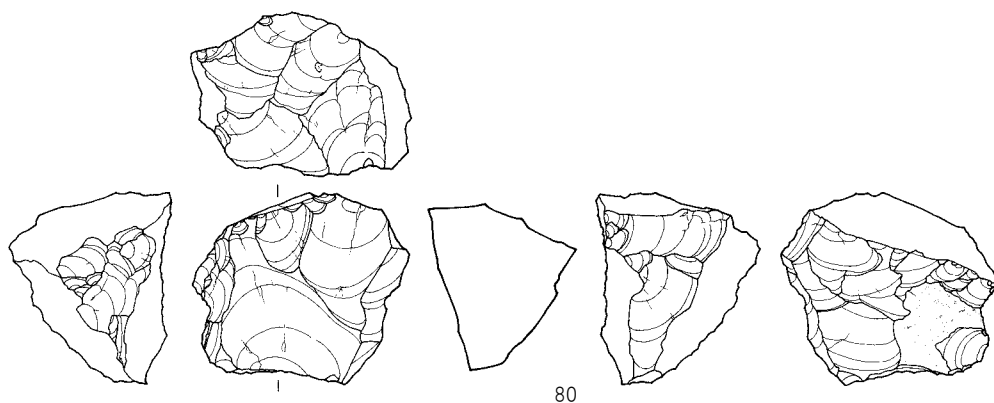


78

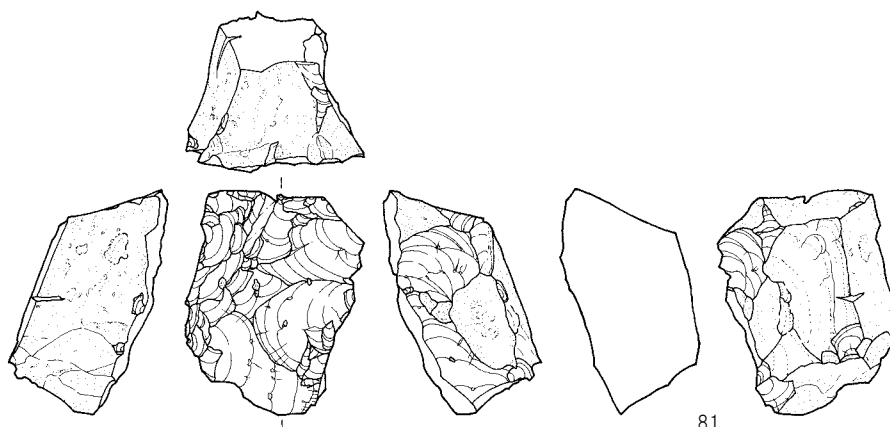


79

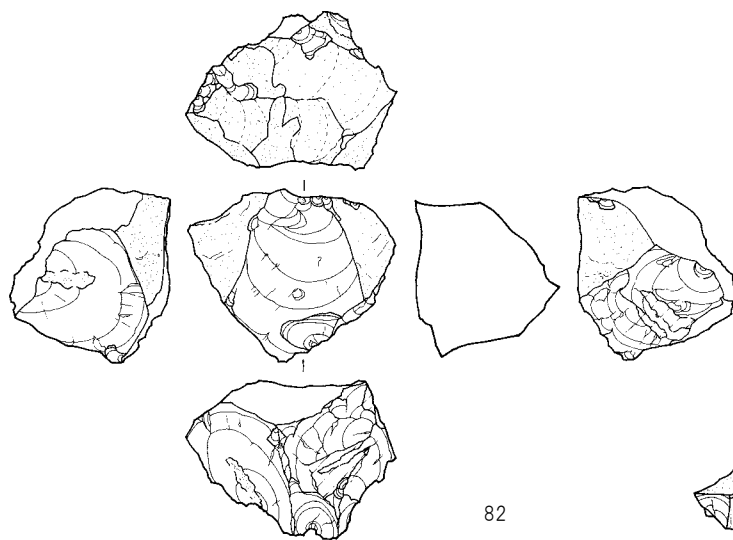
第357図 出土石器 石核(20)



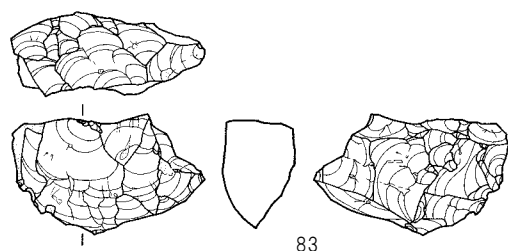
80



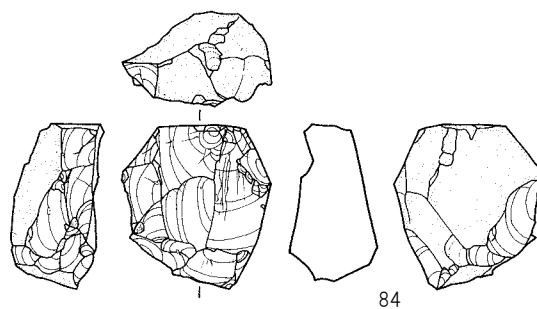
81



82



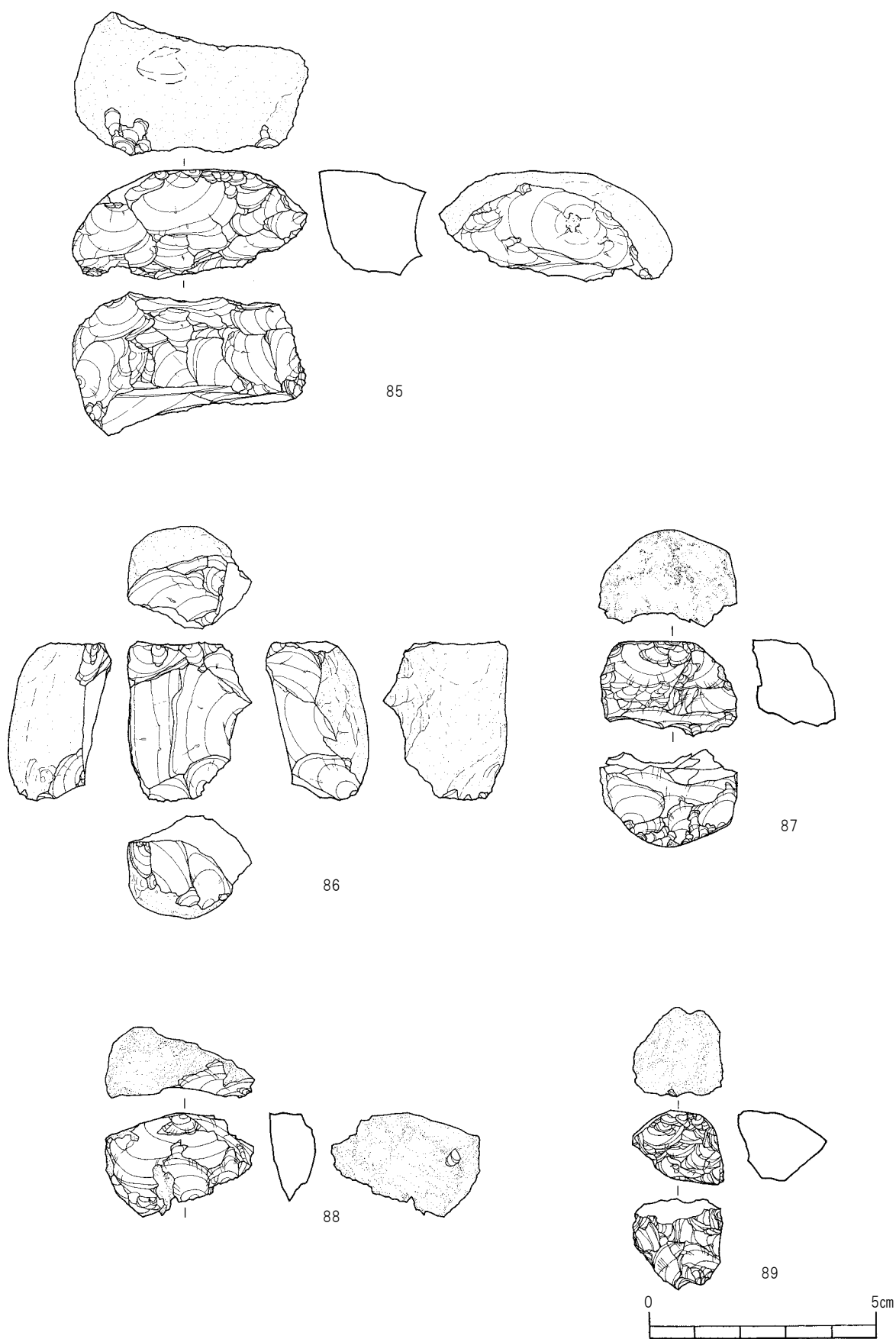
83



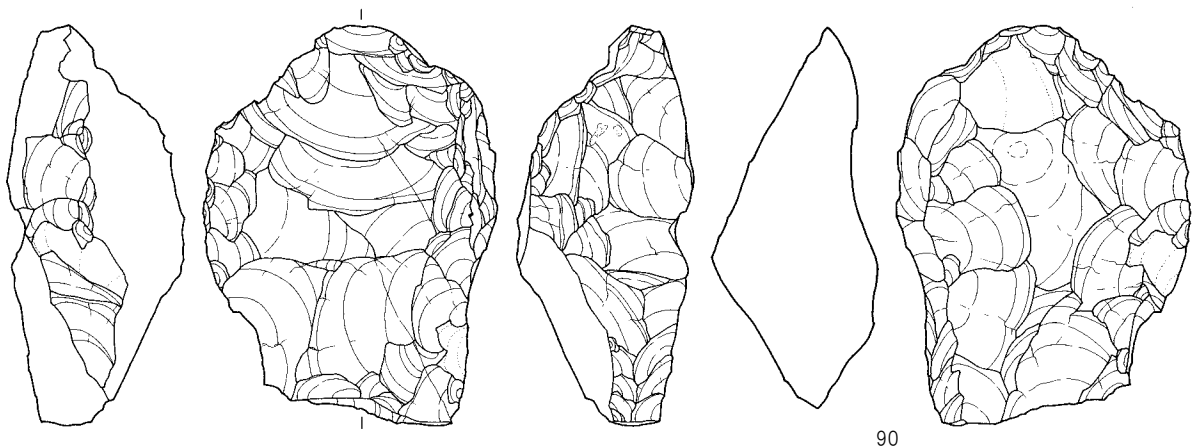
84



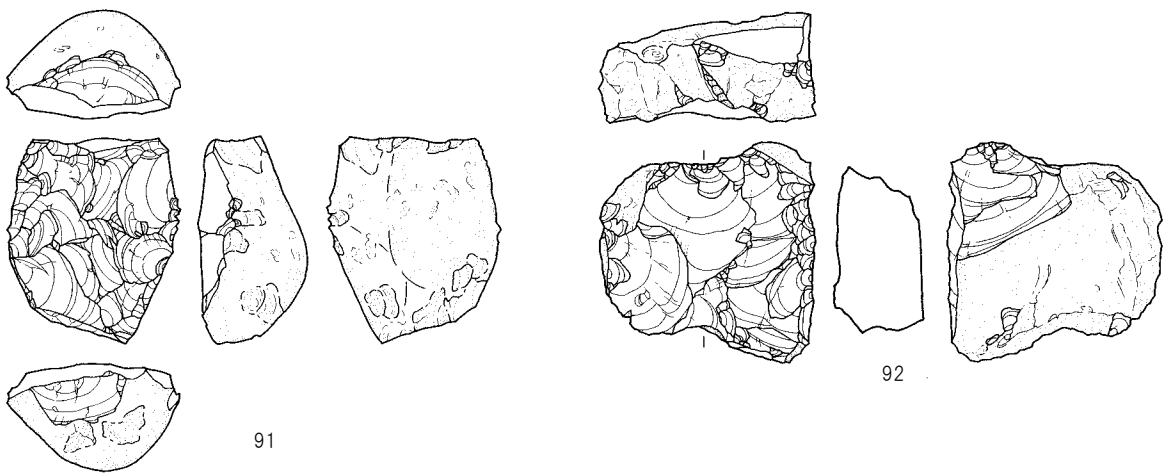
第358图 出土石器 石核(21)



第359図 出土石器 石核(22)

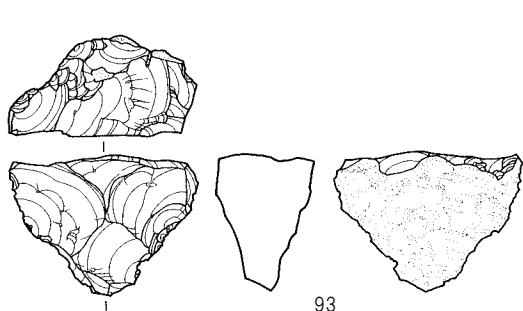


90

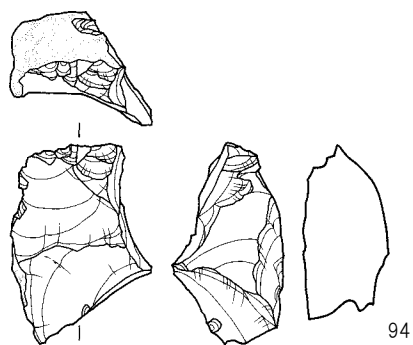


91

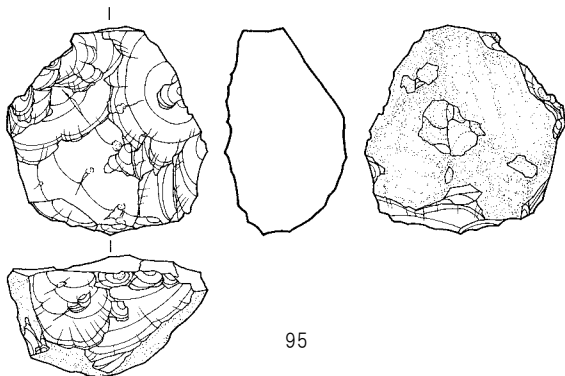
92



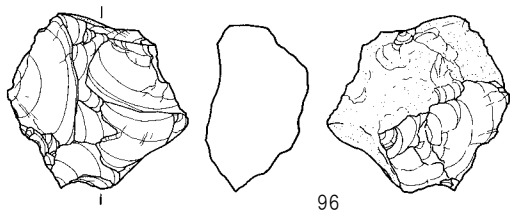
93



94



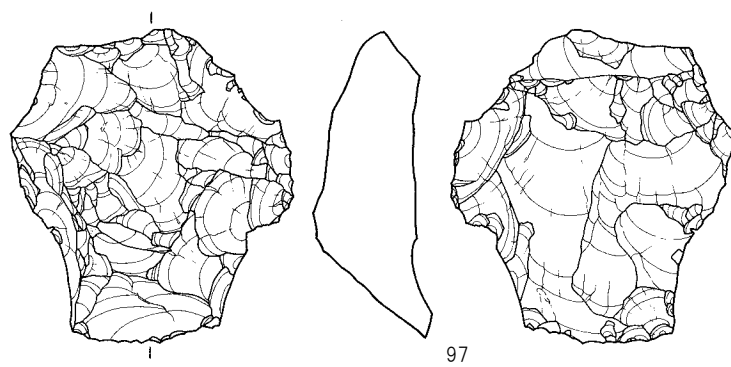
95



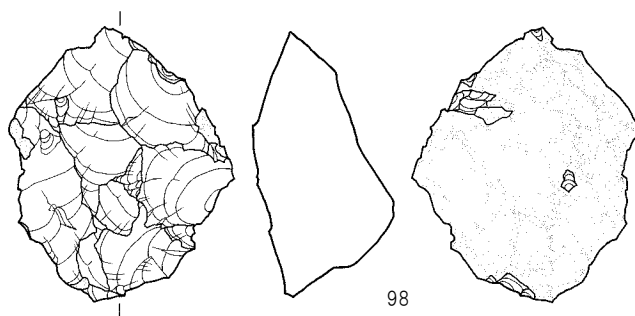
96



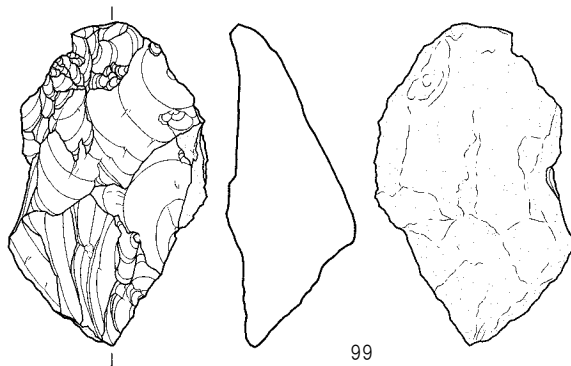
第360图 出土石器 石核(23)



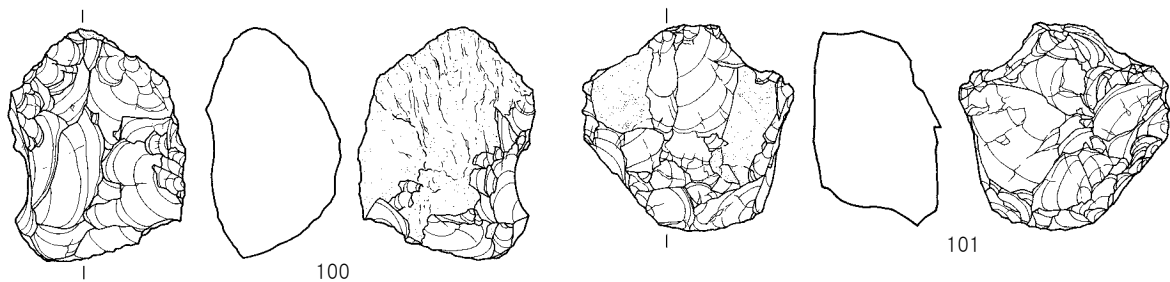
97



98

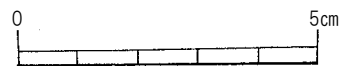


99



100

101



第361図 出土石器 石核(24)

24 三角櫛型石製品（第362図）

市ノ原遺跡第5地点、同第4地点では三角櫛型土製品が1点、三角櫛型石製品が4点、発見されており、この第3地点の1点を含めると土製品、石製品合せて6点となる。

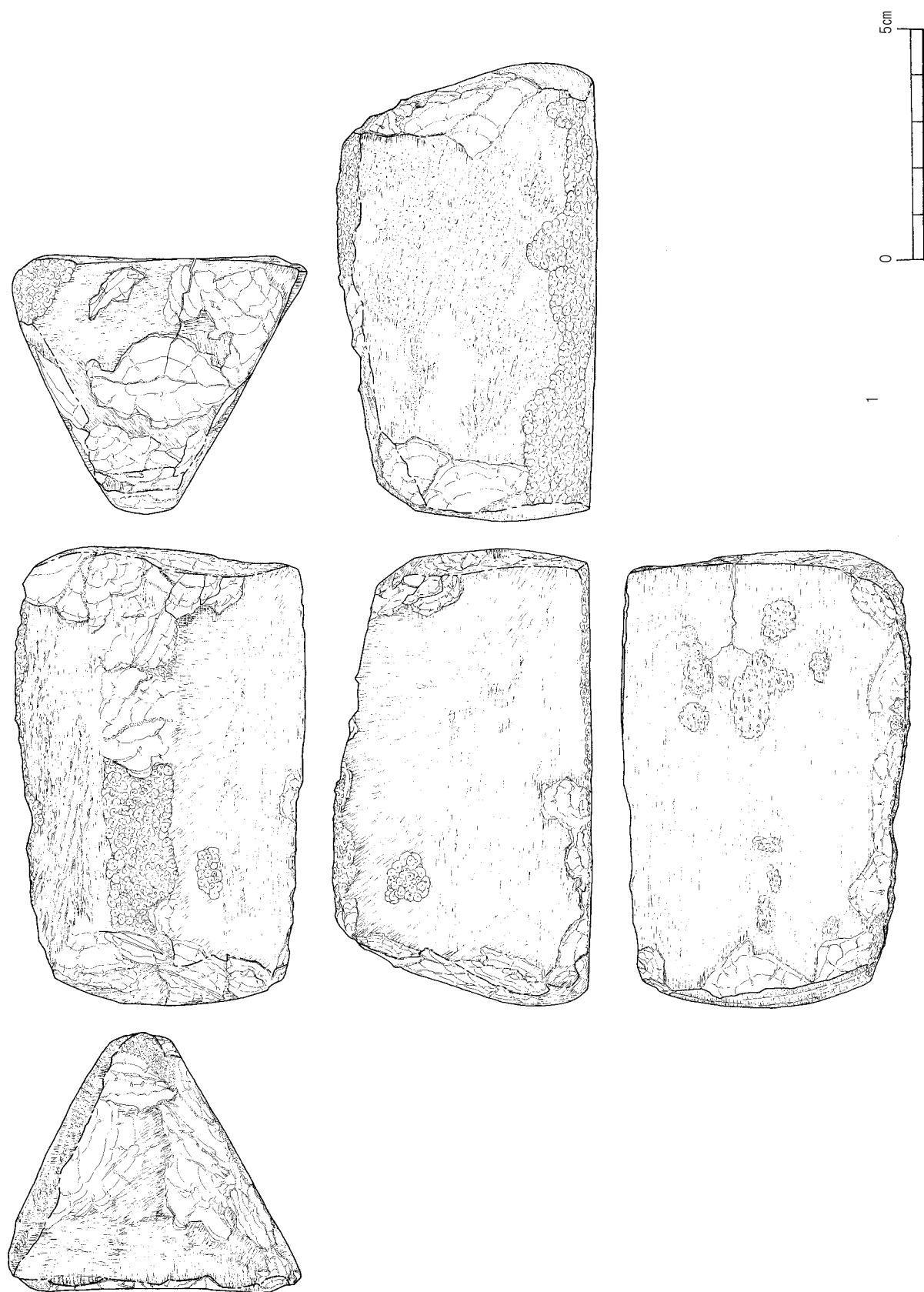
さて、この三角櫛型石製品の素材となったのは、節理によって岩体から剥落した安山岩の角礫であり、形状は三角柱である。二つの底面は、緩やかな曲面を作るよう、整形剥離、敲打、研磨によって調整されており、研磨痕はやや光沢がある。三つの側面は、礫皮面を残したまま研磨され、底面よりも光沢がある。三面とも曲面ではなく平面であるが、風化による礫皮面の厚さの範囲内に収まるかすかなねじれ（使い込まれた磨石のような）がある。側面を形成する三つの稜は、一つは研磨によって形成されたシャープな稜であるが、他の二つは激しい敲打によって、丸く潰れている。この敲打痕と側面の研磨は部位によって切ったり切られたりしており、敲打と研磨が交互に施されたことが分かる。

以上のことをもとに、この石器の用途を考えてみたい。第5地点、第4地点では、東北・北陸地方の三角櫛型土製品、石製品との形態的類似から祭祀具としての用途が想定された。

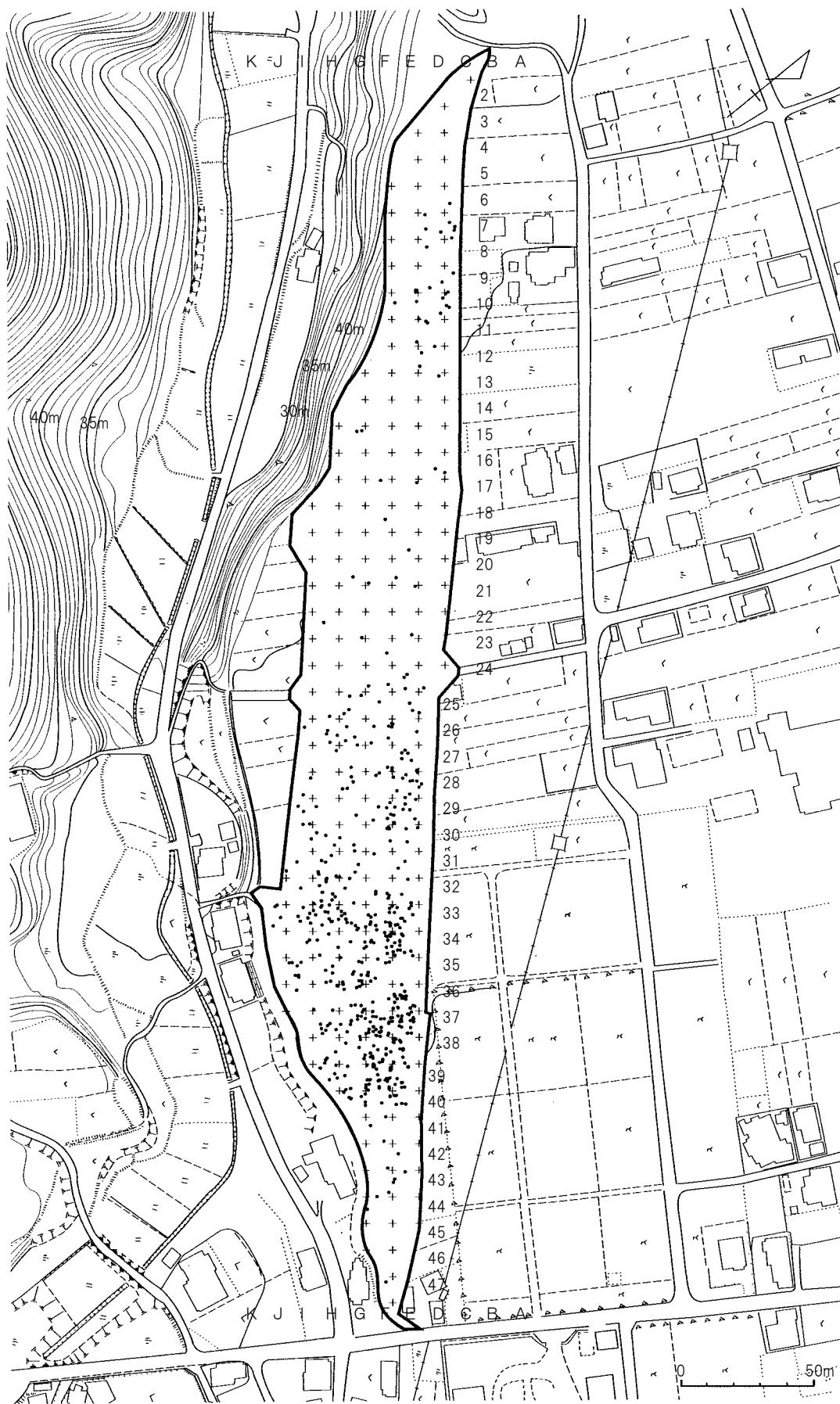
しかし、祭祀具としては捉えるには難点がある。それは、側面の三面とも礫皮面を残すことである。光沢が出るほど研磨するならば、礫皮面を研磨するよりも、礫皮面を除去した後で研磨したほうが、より光沢が得られる。礫皮面を研磨したのではなく、礫皮面のざらつきを使って何かを研磨もしくは擦った結果、礫皮面に光沢が生じるほどの研磨痕が残った、と考える方が自然であろう。そして、柔らかい礫皮面が光沢をおびるほど磨かれるのは、対象物がもっと柔らかいからである。木や骨角の場合、礫皮面は簡単にはげ落ちるから、それよりも柔らかいものであろう。つまり、皮革、植物繊維（その集合体としての糸、布）が対象物として考えやすい。また、側面がごくかすかに捻れているのは、平らな台の上で、そのような対象物を擦った結果であろうし、光沢が出るほど平滑になって、礫皮面のざらつきがなくなったから、「擦る」作業に向かなくなって廃棄されたのではないか。

稜に残される敲打痕はどうか。研磨と敲打が交互に施されるのは、稜で敲きつつ、側面で研磨した結果であって、敲打によって丸みをおびた稜を形成した後研磨し、完成品としたのではない。また、敲打を考える時、三角柱の稜と、円礫の敲石や亜角礫の稜・面とを比較した際の利点は、所定の長さとの幅の狭さであろう。三角柱の稜は底面が正三角形に近ければ、60度に近いのであり、直方体の90度の稜より、潰れた場合でも加撃面がより狭く、効果的な敲打が出来る。つまり、敲打する場合、対象物をたたき切るほど鋭くはなく、潰れても狭い範囲に加撃でき、一定の長さを保てる利点が三角柱にはある。樹皮もしくは草本類の茎を敲いて繊維を取り出す際の利点とはならないだろうか。稜の一つが鋭さを保っているのは、樹皮もしくは草本類をしごくためと考えられる。

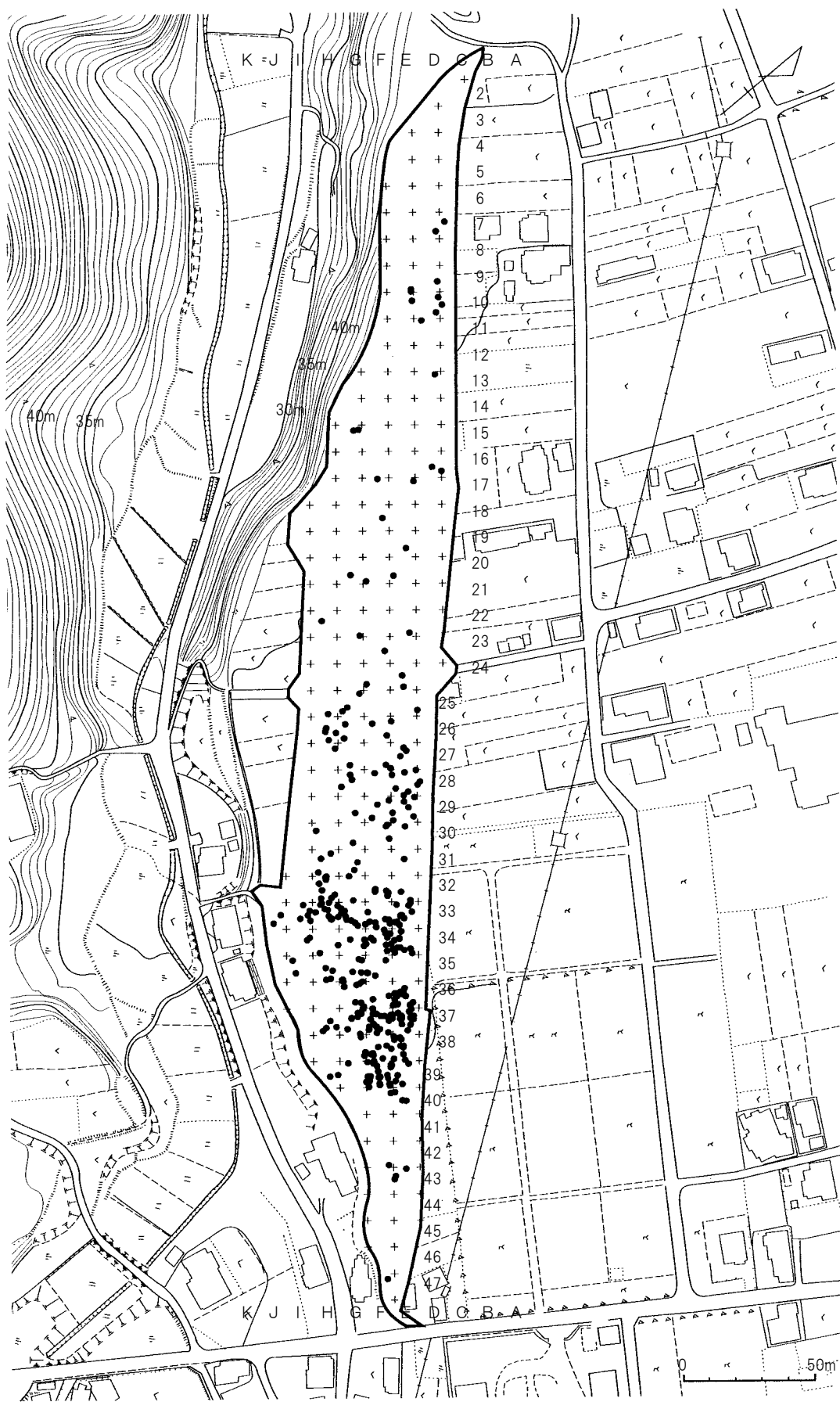
このような解釈を取ると、東北・北陸の三角櫛型土製品・石製品と形態的には類似していても、全くの別物であると言わざるを得ない。ただし、類例が少ないことは、極めて希少な皮革製品、植物繊維（その集合体としての糸、布）製品を対象としたであろう事を推定させるもので、そうであるならば、祭祀に関わる皮革製品、植物繊維製品が対象であった蓋然性を高めるので、祭祀に関わる道具であることを全く否定するわけにはいかない。



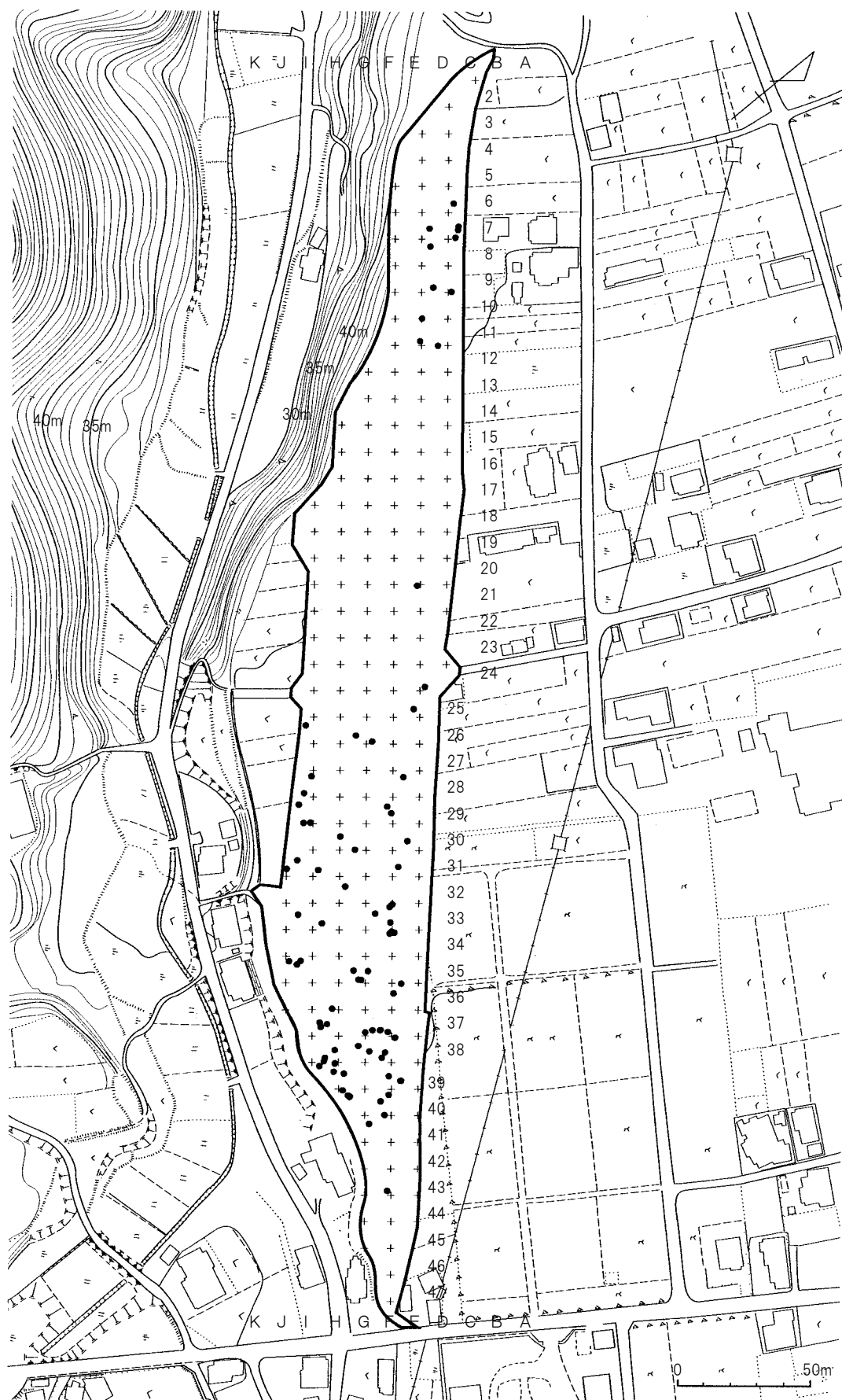
第362図 出土石器 三角礪形石製品



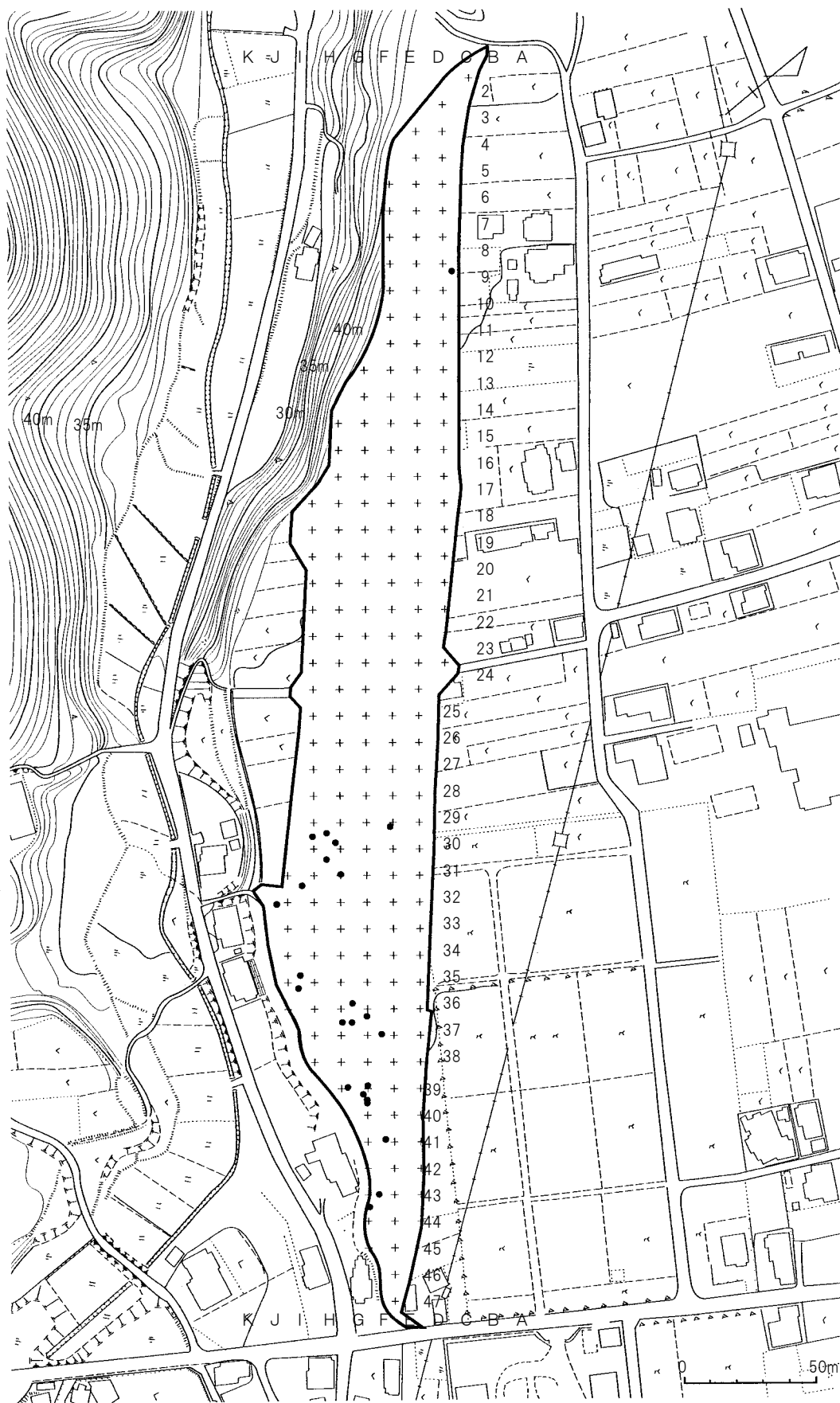
第363図 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層磨石・凹石出土状況



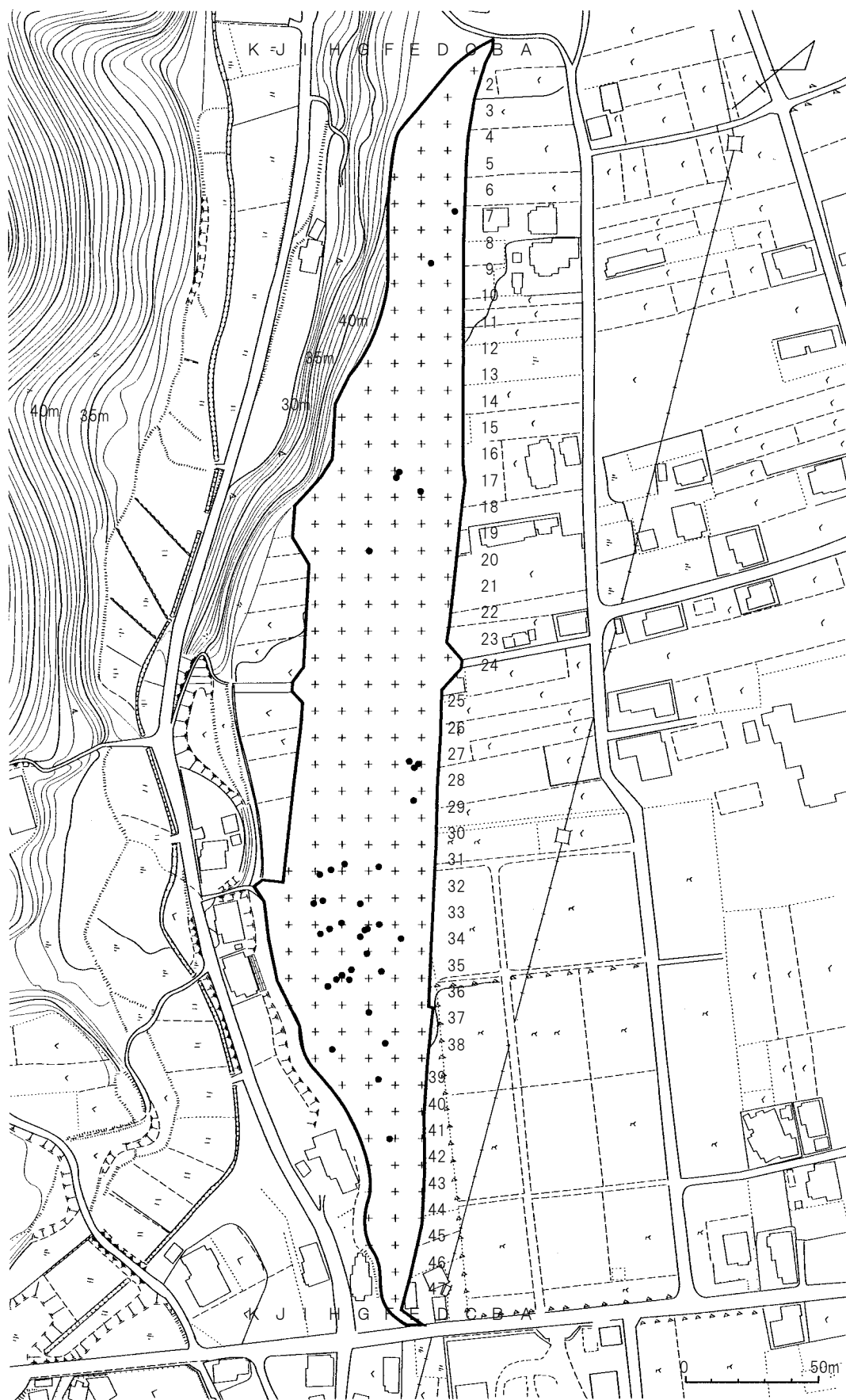
第364図 Ⅲ層磨石敲石凹石出土状況



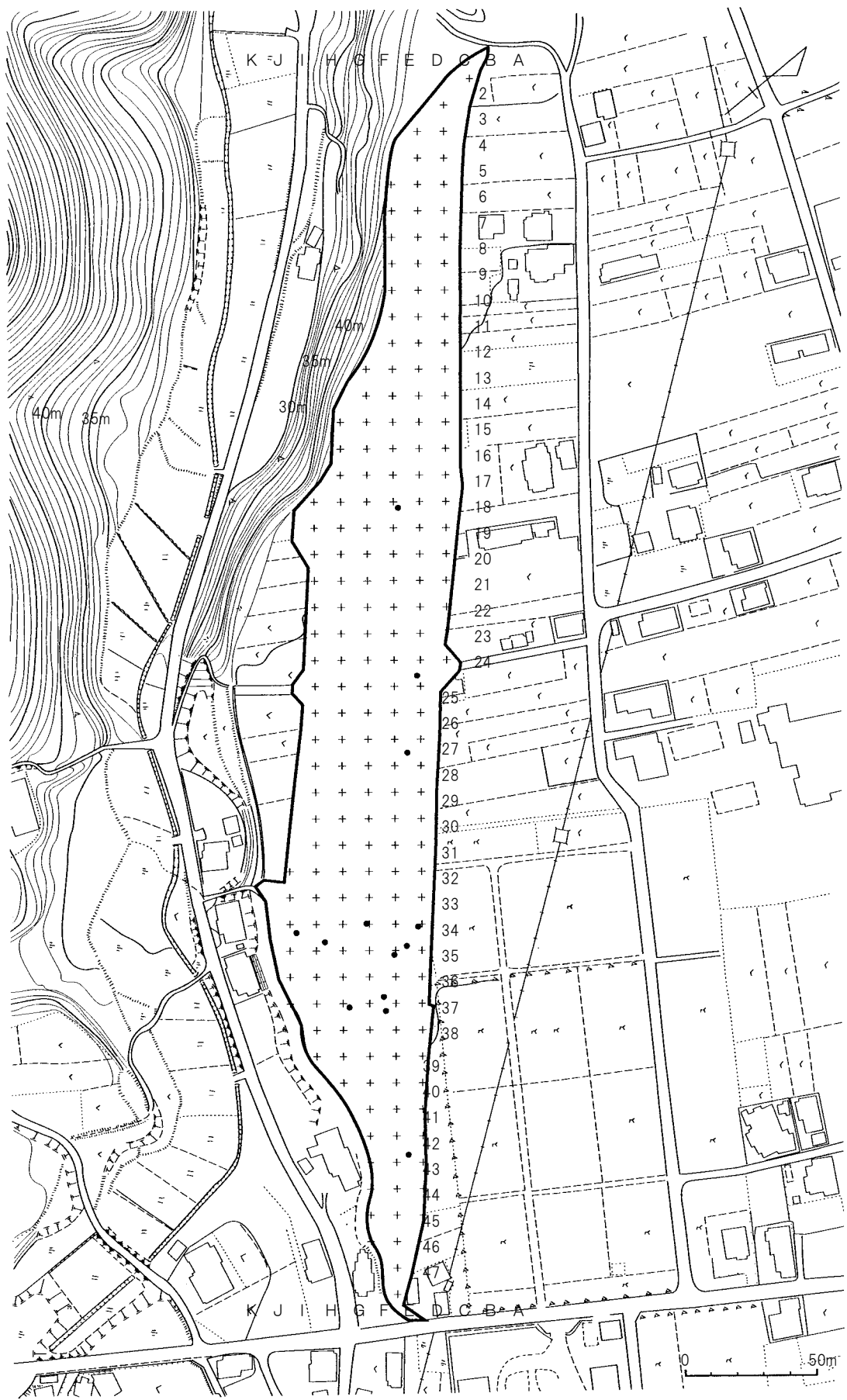
第365図 IV層磨石敲石凹石出土状況



第366図 V層磨石敲石凹石出土状況



第367図 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層石皿出土状況



第368図 軽石製品出土状況

砥石、石皿、磨石・敲石・凹石、軽石製品

これらの石器については層位が時期毎に明確に分かれている状態ではなかったためここに一括して掲載したい。磨石・敲石類・凹石については形態と使用状況で分類した。

25 砥石（第369図1～6）

6点を図化した。1は使用面が6箇所確認される。3は火熱を受け破碎している。6は古代の提砥である。

26 石皿（第370図～第377図）

25点を図化した。12、24は完形であるが、それ以外は欠損しており、全体形状は不明である。3、4は使用面の中に更に深く使い込まれた範囲が観察される。6、12の使用面には敲打に伴うと考えられる痘痕状の剥離が数箇所確認できる。7、9は火熱を受け破碎している。7は側面も細かく割れている。8、15の側面は石皿整形の際に、敲打調整が施されている。11は砂岩製である。表面・裏面共によく使い込まれており、凸レンズ状に大きく窪む。21は表面・裏面共に使用の際に生じた窪みがあり、台石として使用したことが考えられる。24の重量は31kgを超え、最大長は44.7cmを測る。節理により自然形成された砂岩をそのまま利用している。

27 磨石、敲石、凹石（第378図～第418図）

磨石等は253点を図化した。石材は安山岩・砂岩等が多く、遺跡周辺や近くの川原や海岸で採取したものを使用していると考えられる。

I類

円礫、楕円礫を用い、磨面を有し、平坦面や側縁部に敲打痕を有する磨石をI類とした。更に磨面のみのものをI a類、磨面を有し、平坦面や側縁部の一部に敲打痕を有するものをI b類、磨面を有し、側縁部の全面に敲打痕を有するものをI b類とした。

II類

磨石の両端を打ち欠いて石錘へ転用したものをII類とした。2点のみの出土である。

III類

石斧の転用品を含む縦長の敲石をIII類とした。

IV類

棒状の楕円礫を用い、敲打痕を有する敲石をIV類とした。更に棒状礫の一部に敲打痕を有するものをIV a類、磨面を有し、長軸の端部に敲打痕を有するものをIV b類、長軸の端部に敲打痕を有するものをIV c類とした。

V類

円礫、楕円礫を用い、平坦面と側縁部に敲打痕を有する敲石をV類とした。更に平坦面のみに敲打痕を有するものをV a類、平坦面と側縁部の一部に敲打痕を有するものをV b類、平坦面と側縁部の全面に敲打痕を有するものをV c類とした。

Ⅵ類

円礫，楕円礫を用い，側縁部に敲打痕を有する敲石をⅥ類とした。更に側縁部の一部に敲打痕を有するものをⅥa類，側縁部の全面に敲打痕を有するものをⅥb類とした。

Ⅶ類

敲打により，丸く窪んでいるものをⅦ類とした。

Ⅰ類（第378図1～第400図141）

141点を図化した。4，31，69は両面共に使用による摩滅が顕著で，断面は三角形に近い形状を呈する。7，23，39，78，98，105，115，126は両面共に使用による摩滅で，平坦になっている。18，81，123の下面は使用による摩滅で，平坦になっている。57，95は火熱を受け赤く変色し，割れている。59，94は両面共に使用による摩滅が顕著に見られる。80，124は両端部に敲打痕を有する。82の側面は使用による摩滅によって平坦になっている。101，129の両面と側面は使用による摩滅によって平坦になっている。140，141の両面と側面は使用による摩滅によって平坦面を有し，石鹼のような形状を呈する。

Ⅲ類（第401図1～第404図7）

2は転用品ではないが，両側面に剥片石器を作る際のチップング痕が観察される。6は両側面と下面に，7は全側面に使用痕を残す。

Ⅳ類（第405図8～第406図21）

14点を図化した。12は両端に敲打痕を有する。

Ⅴ類（第406図22～第412図64）

43点を図化した。60は両側面が使用による摩滅によって平坦になっている。63は側面の広い範囲に敲打痕を有し，上面観は菱形状を呈する。

Ⅵ類（第413図65～第418図106）

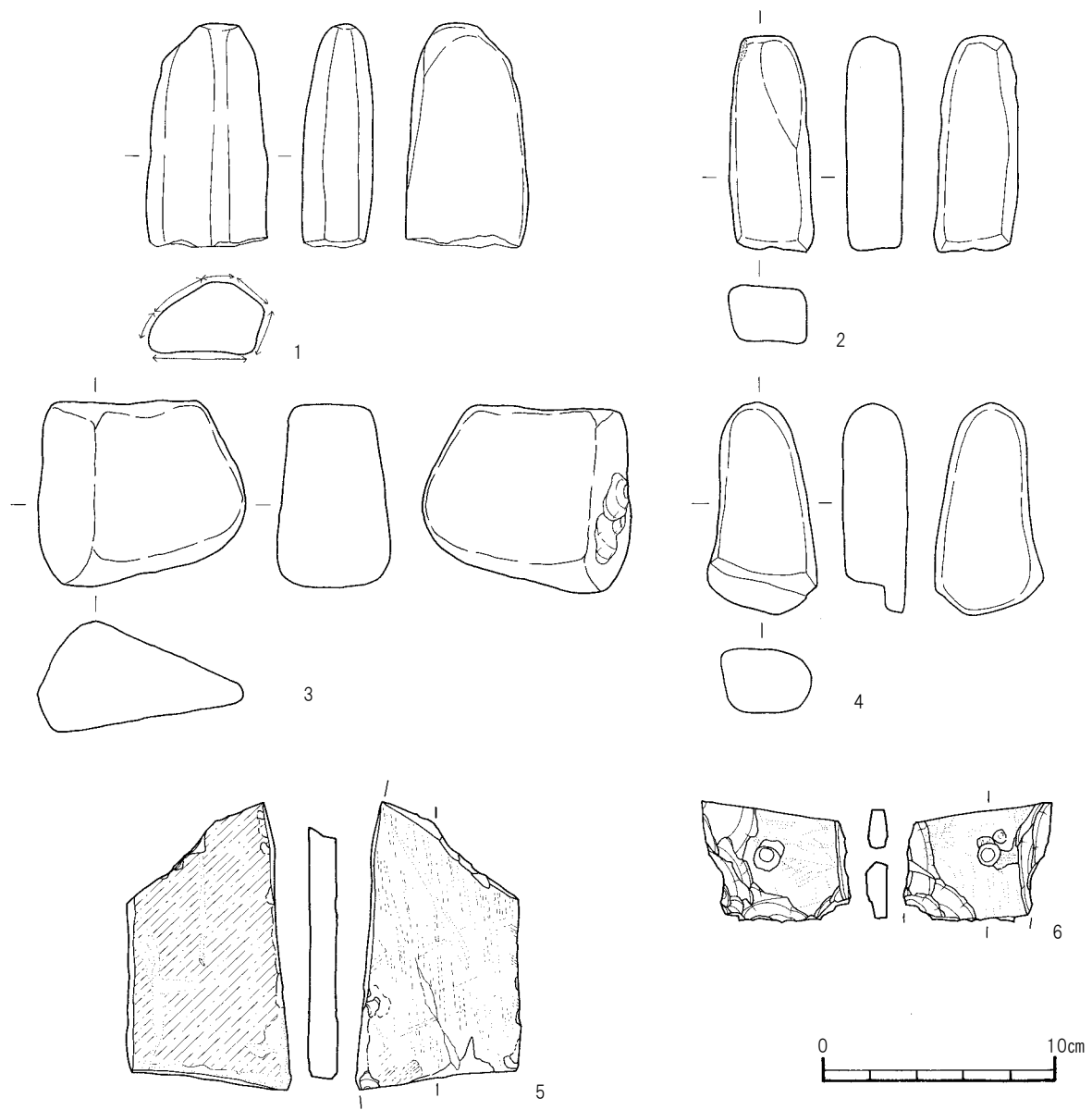
42点を図化した。78は掲載遺物のなかでは大きさが最小のもので，両端に敲打痕を有する。81は両面共に使用による摩滅が顕著に見られる。82は両面共に使用による摩滅が顕著で，平坦になっている。

Ⅶ類（第418図1～4）

4点を図化した。2の両面は敲打により，特に深く窪んでいる。

28 軽石製品（第419図～第420図）

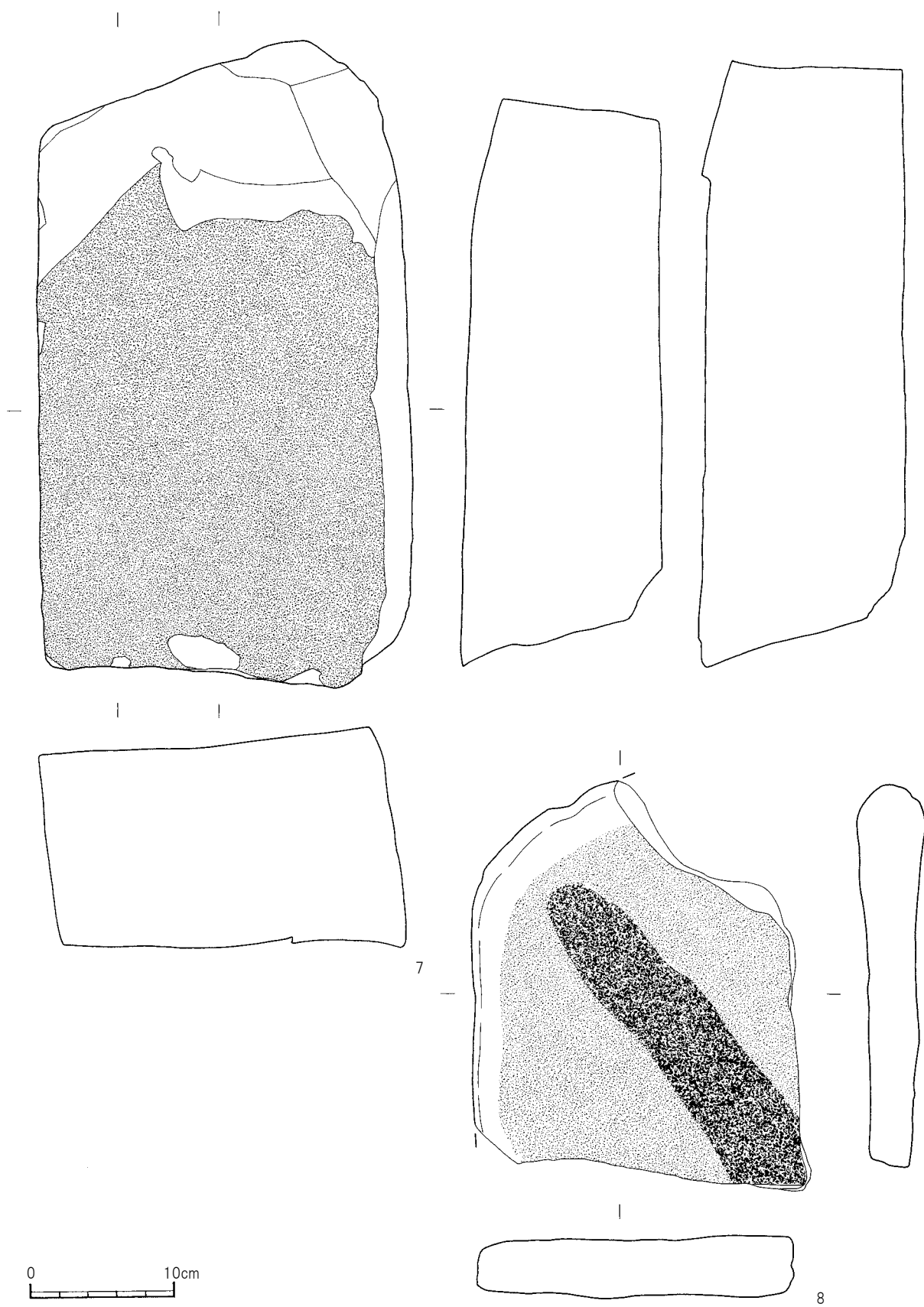
軽石製品は小破片が多く，個体数も不明であるが，穿孔や線刻等の加工痕が明瞭に認められるものを5点だけ図化した。いずれも使用目的は不明である。5は表面・裏面共に平坦面を持ち，整形の痕が窺われる。欠損しており，全形が明らかでないので正確な本数は不明であるが，7本の線刻が観察できる。



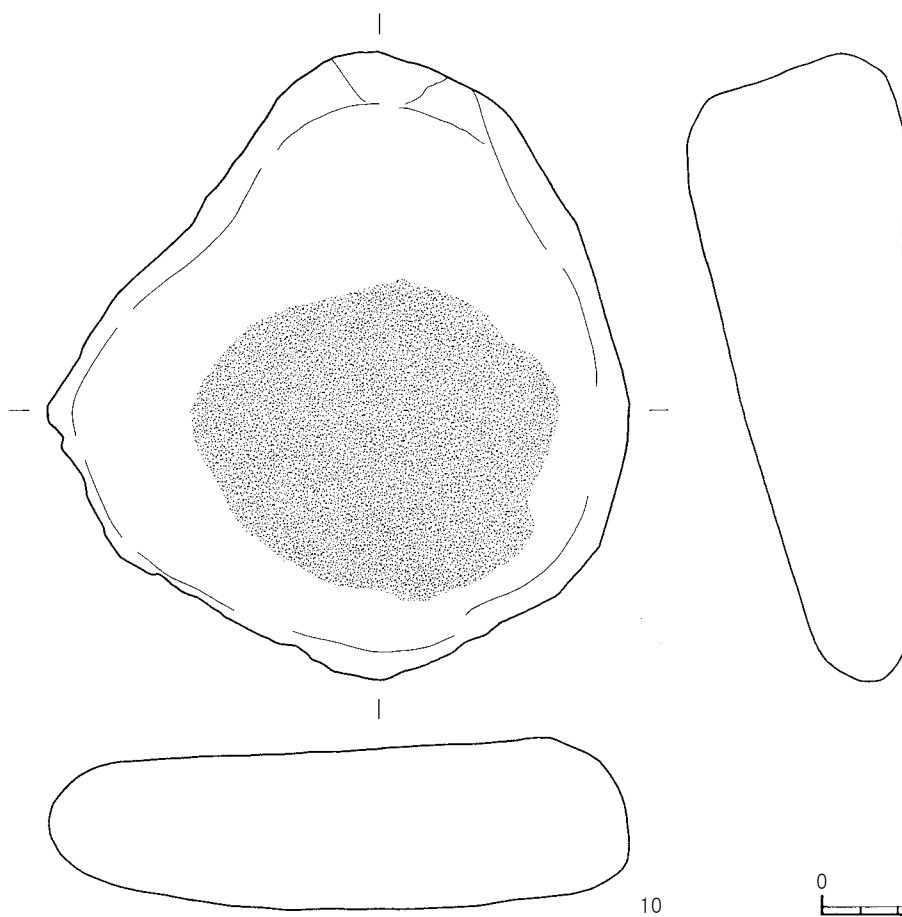
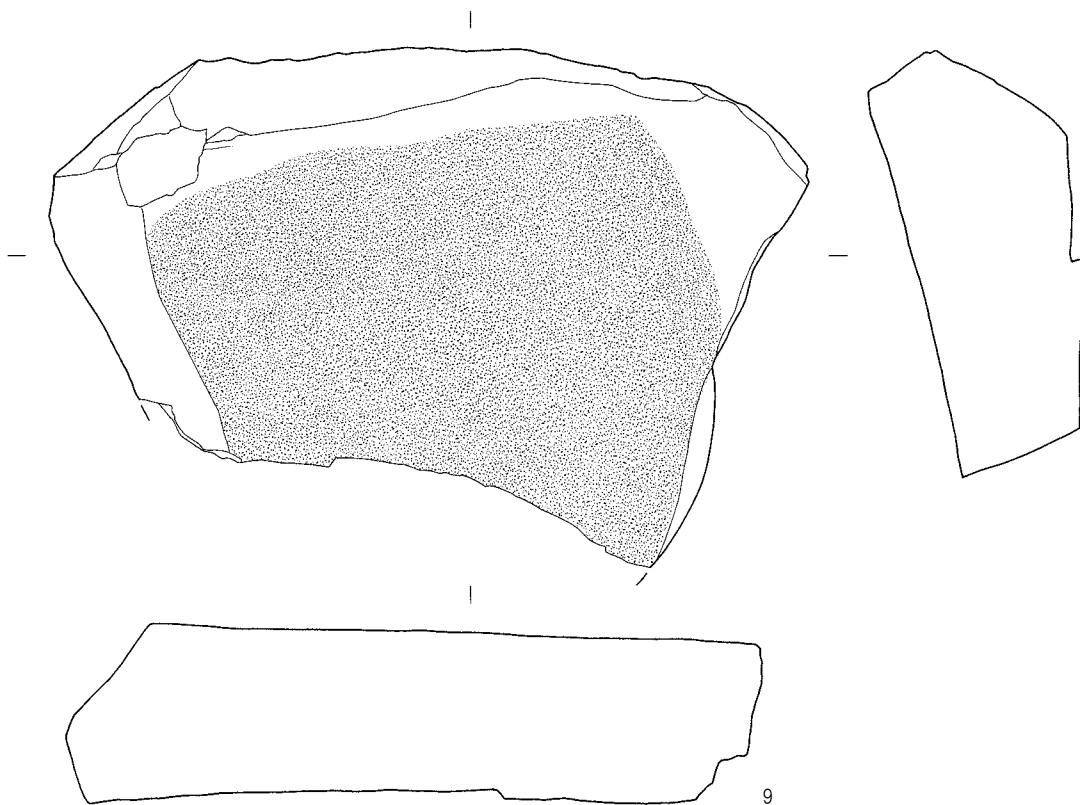
第369図 出土石器 砥石



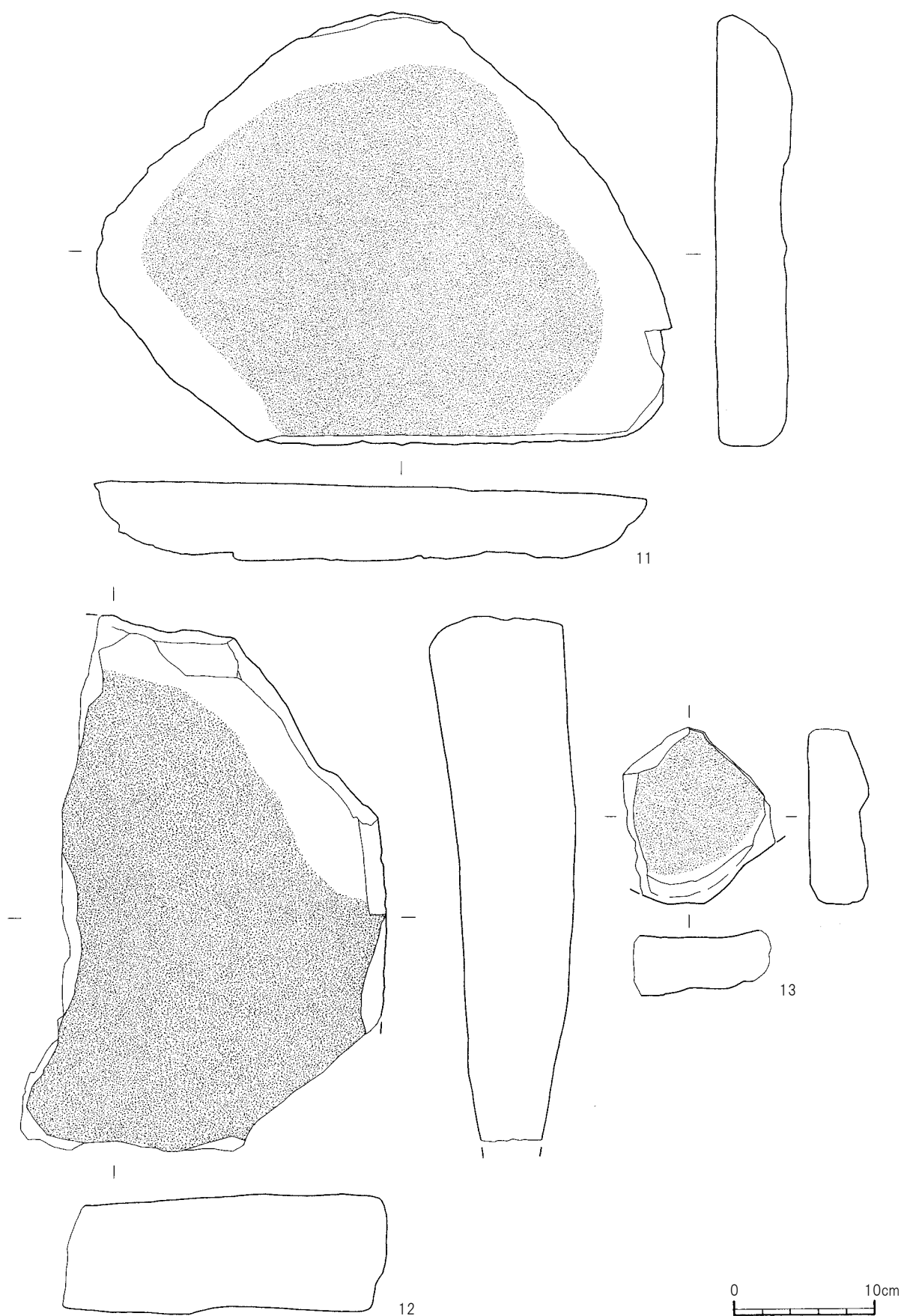
第370図 出土石器 石皿(1)



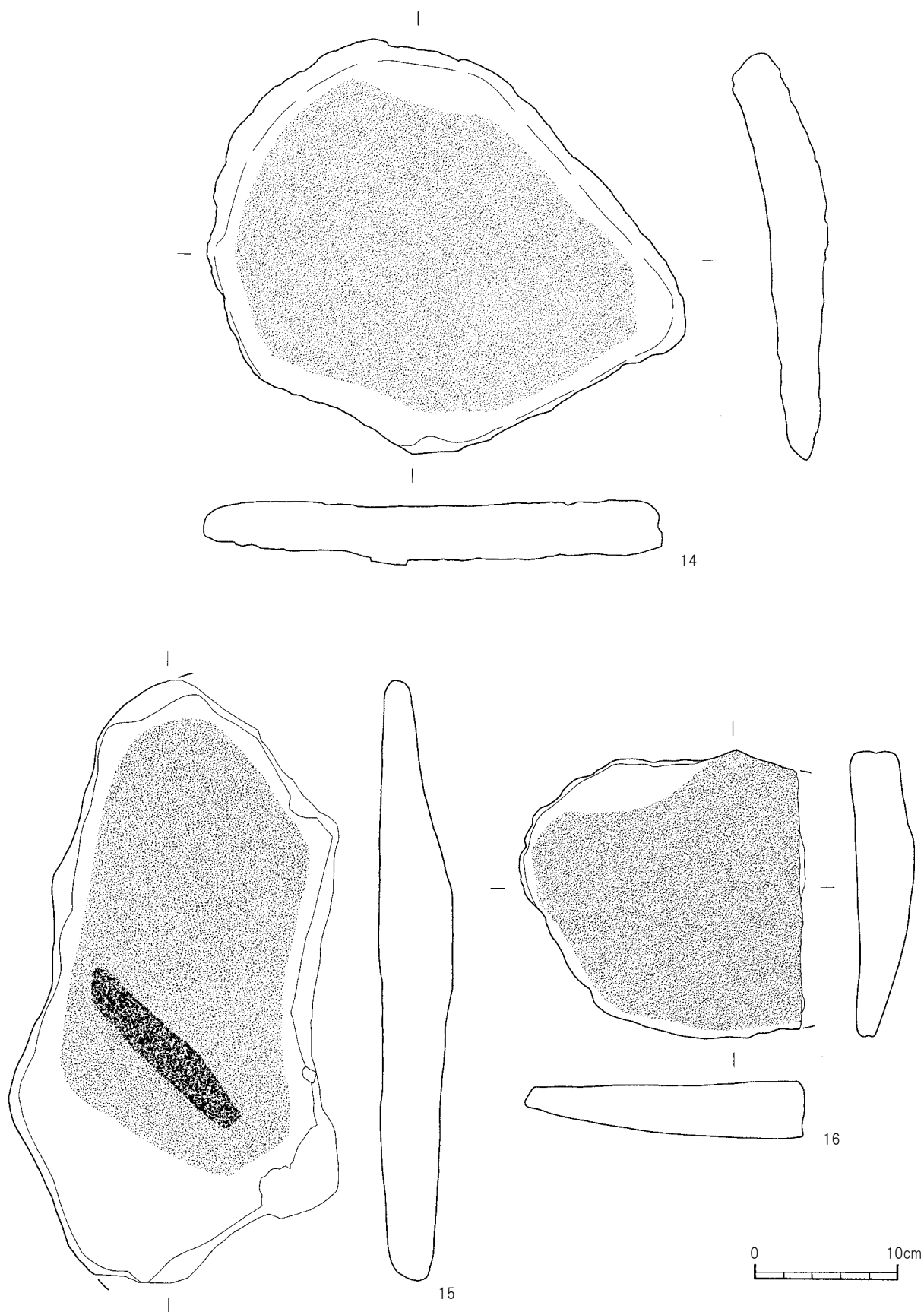
第371図 出土石器 石皿(2)



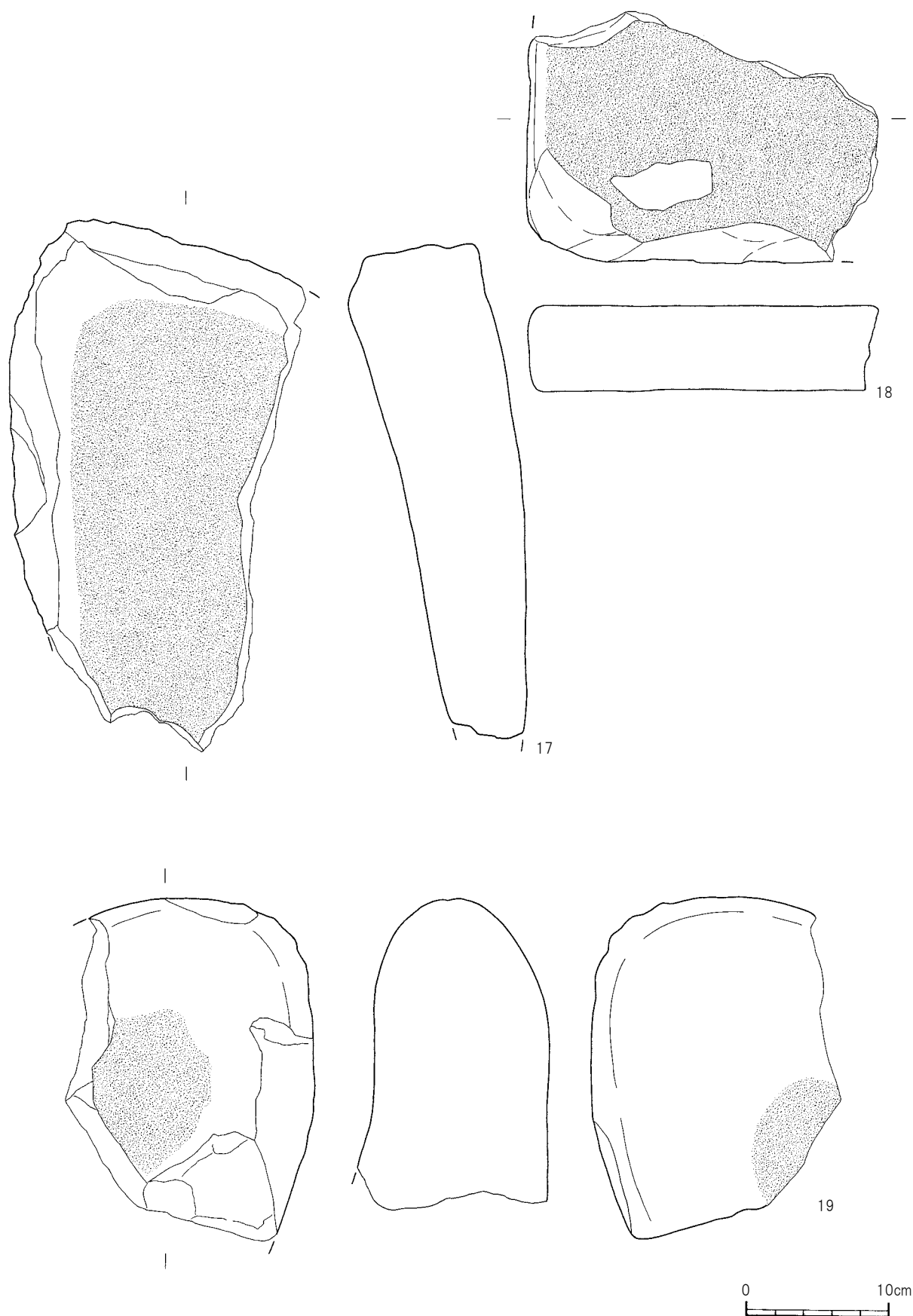
第372図 出土石器 石皿(3)



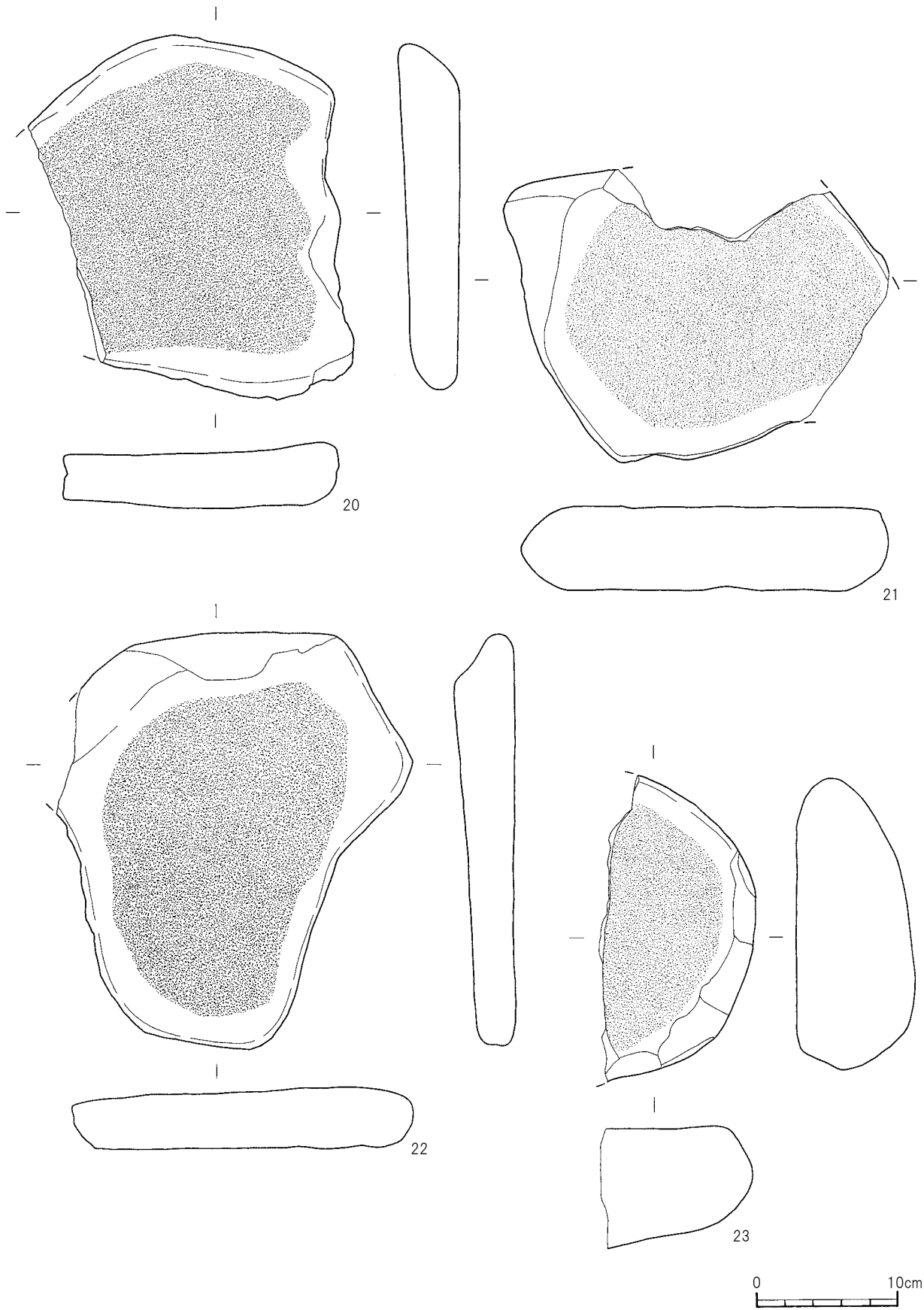
第373図 出土石器 石皿(4)



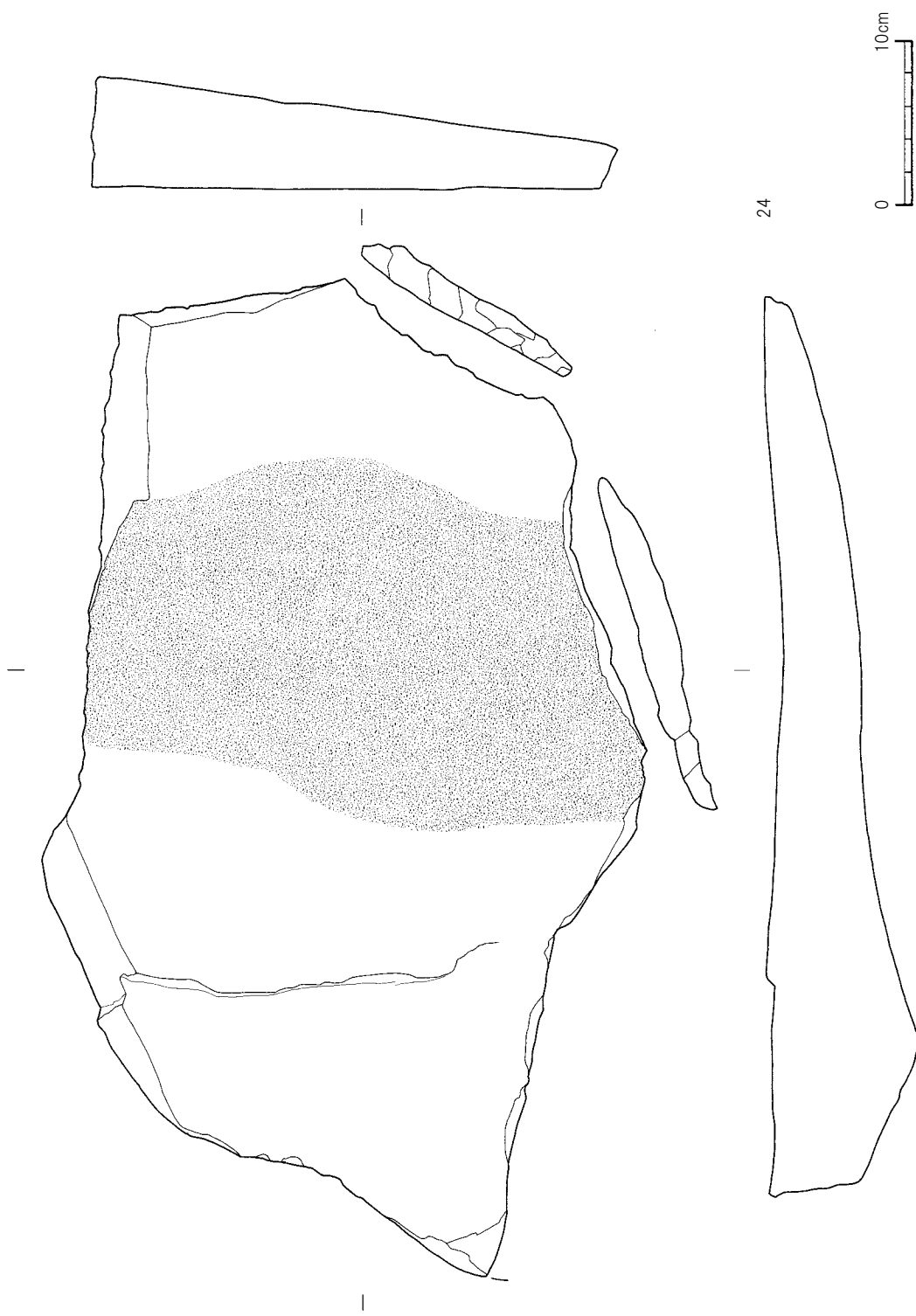
第374図 出土石器 石皿(5)



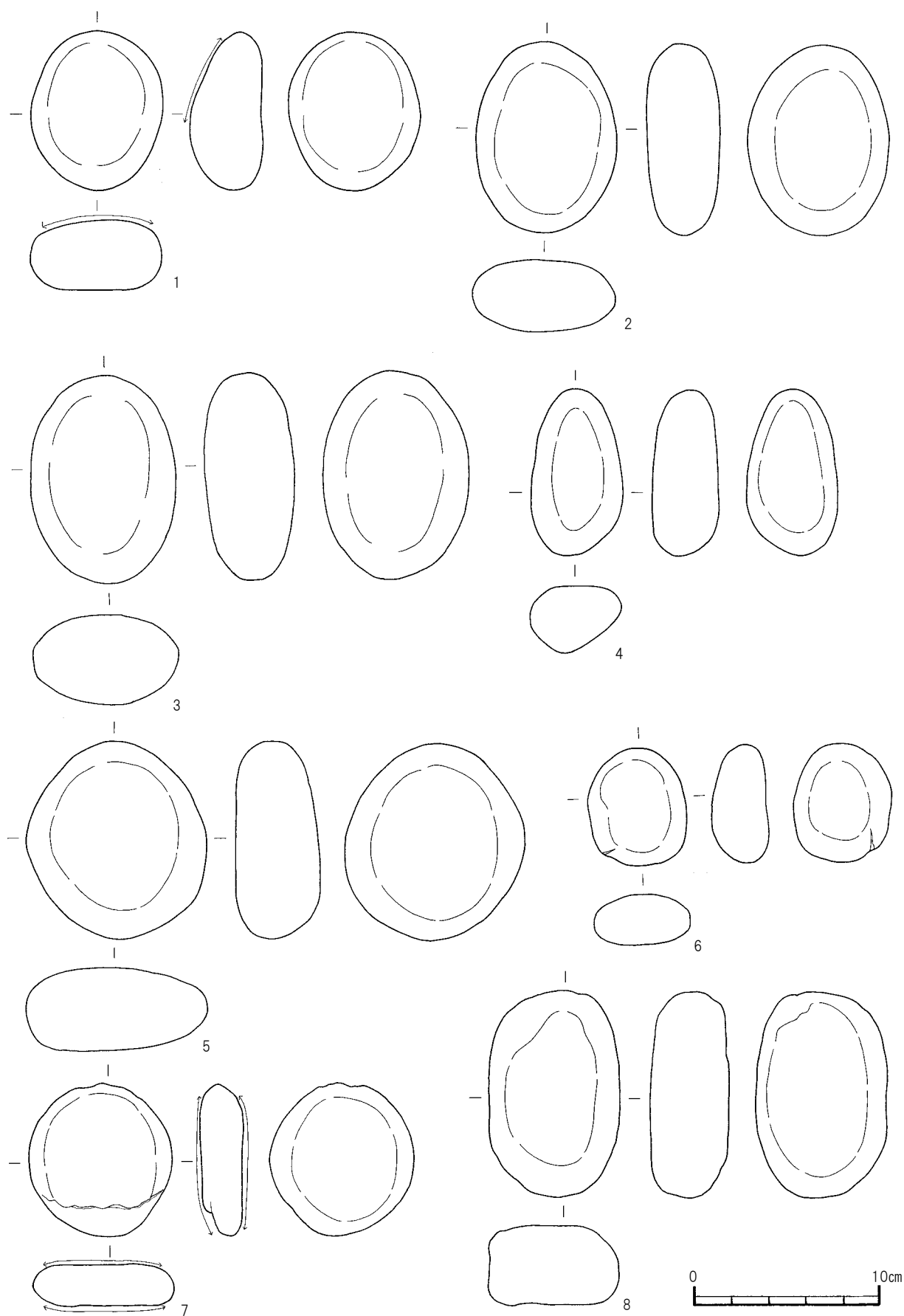
第375図 出土石器 石皿(6)



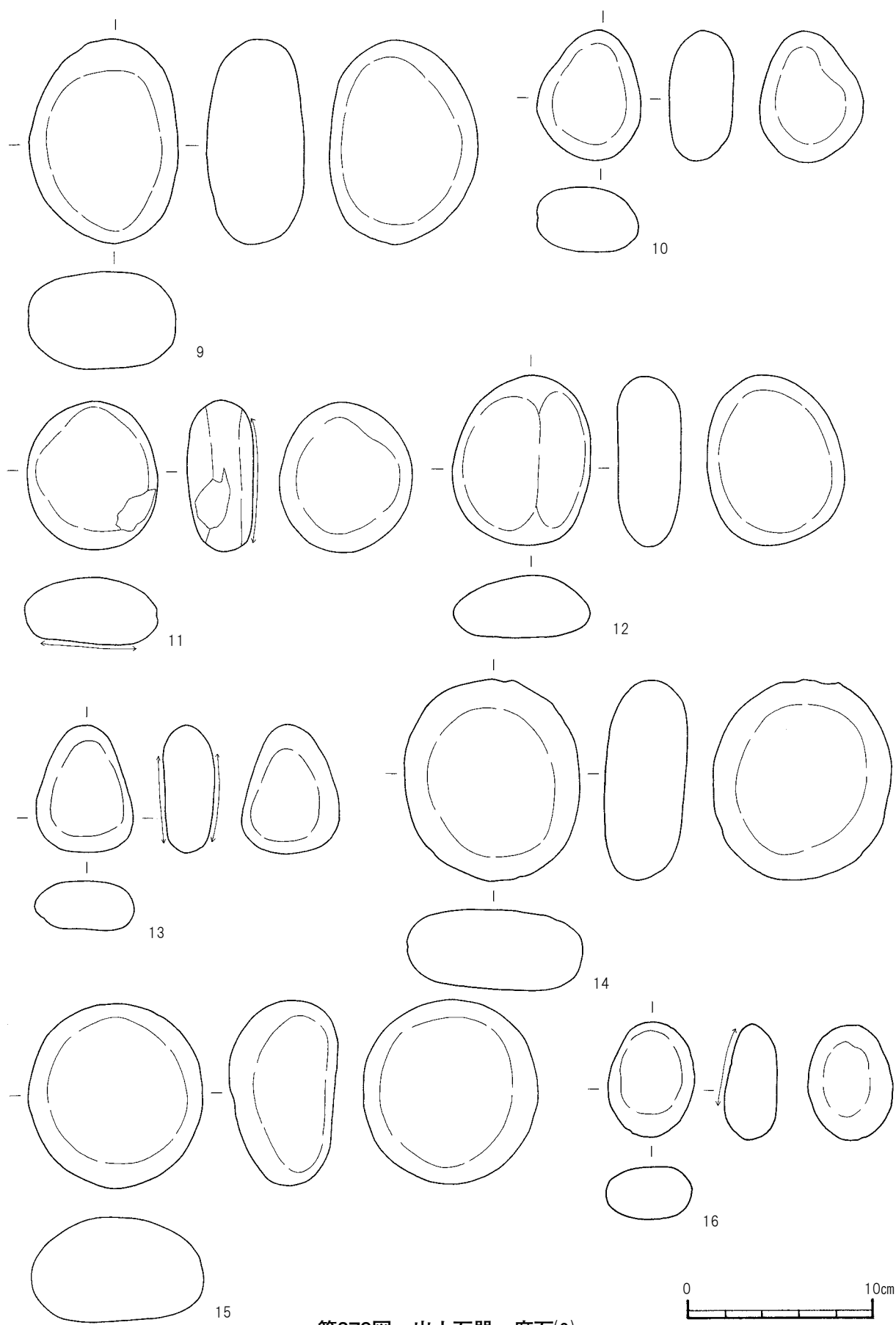
第376図 出土石器 石皿(7)



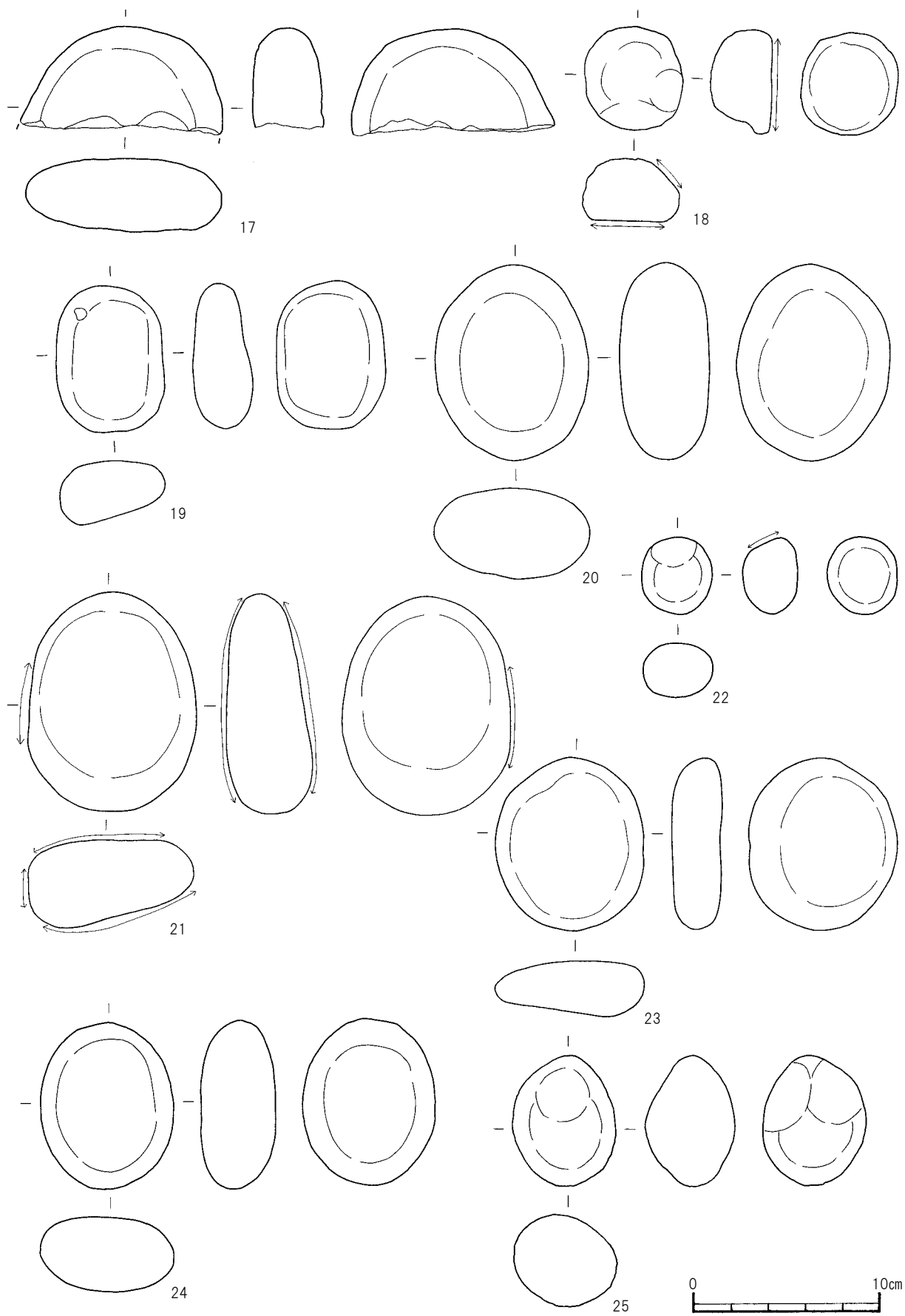
第377図 出土石器 石皿(8)



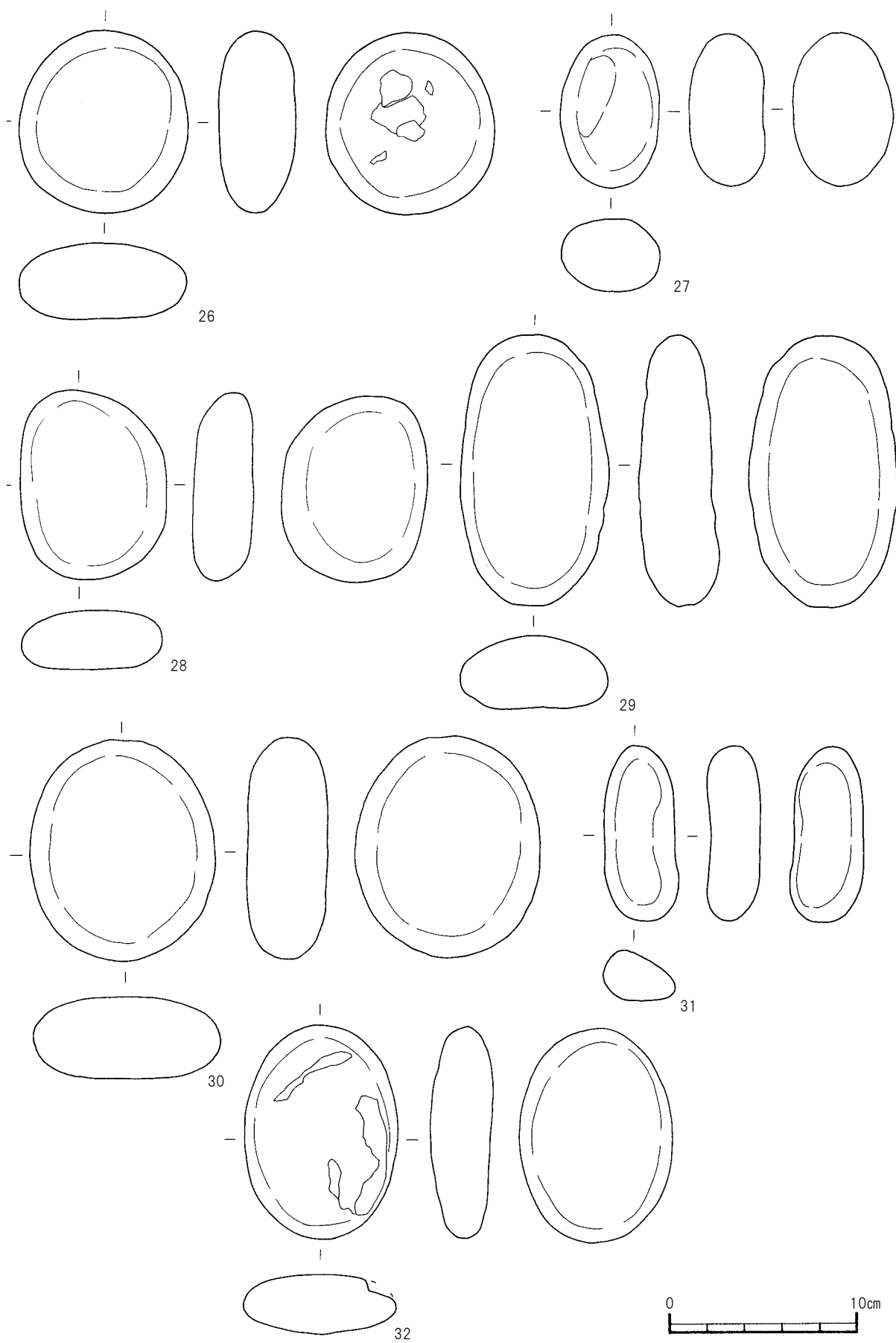
第378図 出土石器 磨石(1)



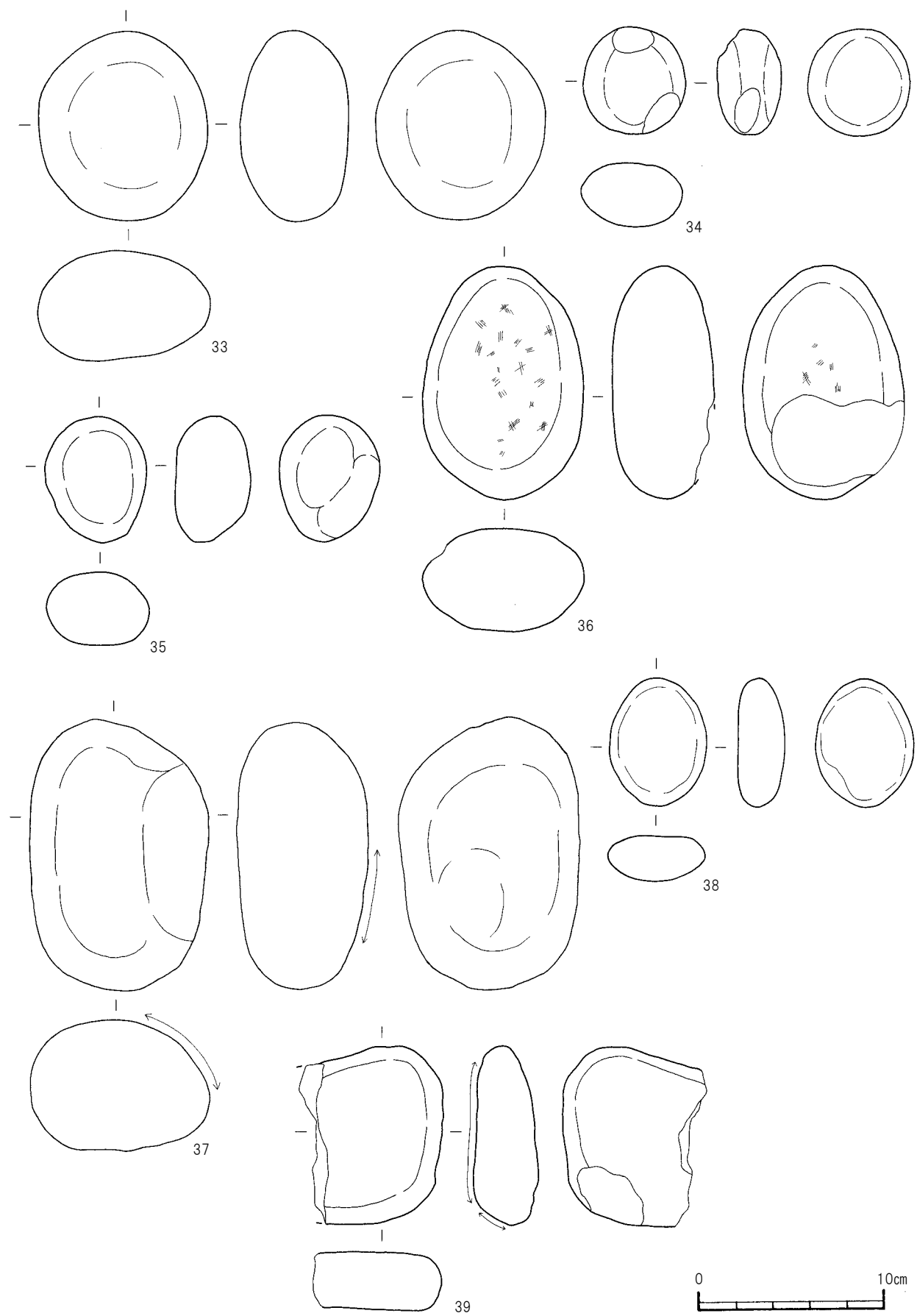
第379図 出土石器 磨石(2)



第380図 出土石器 磨石(3)



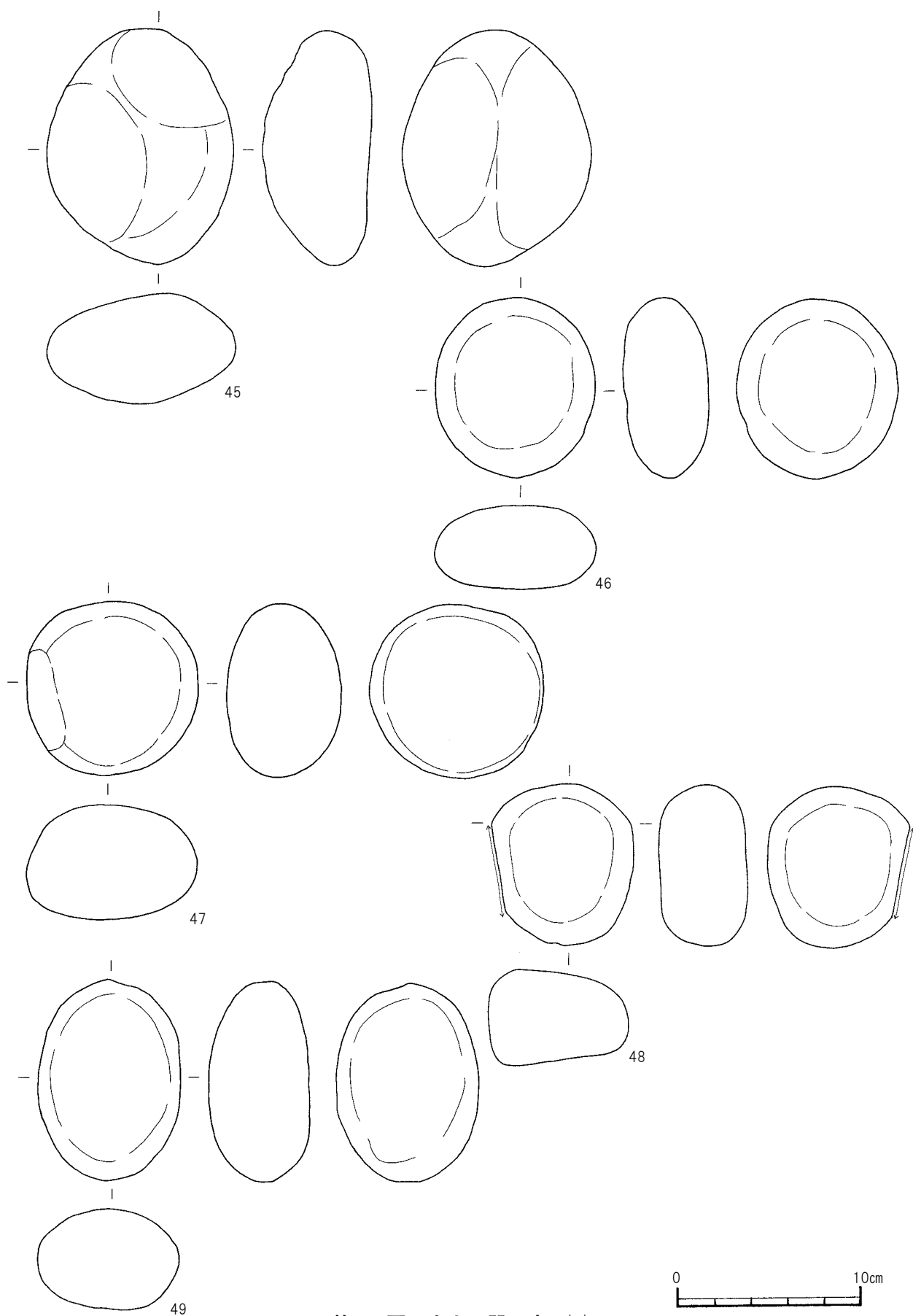
第381図 出土石器 磨石(4)



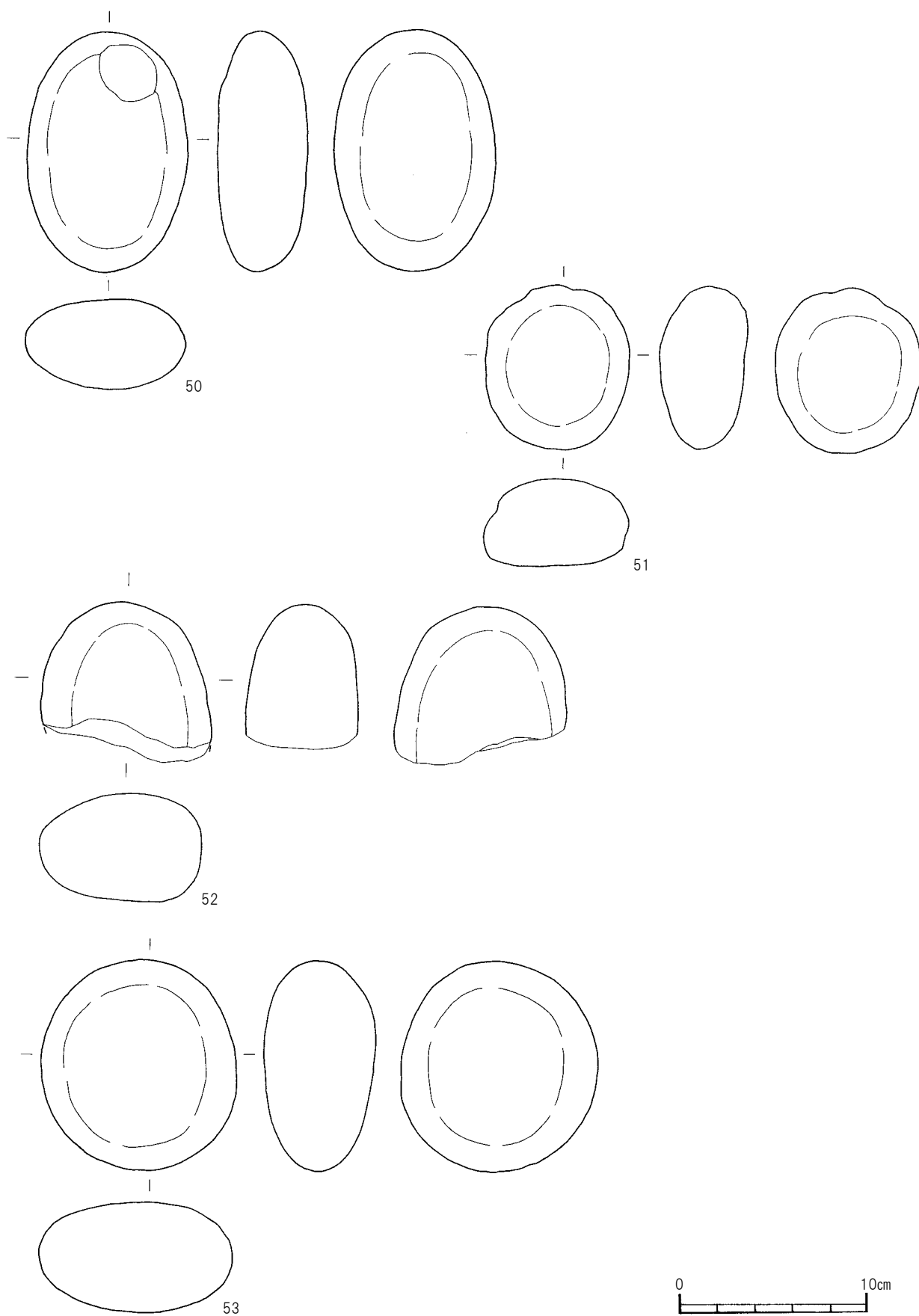
第382図 出土石器 磨石(5)



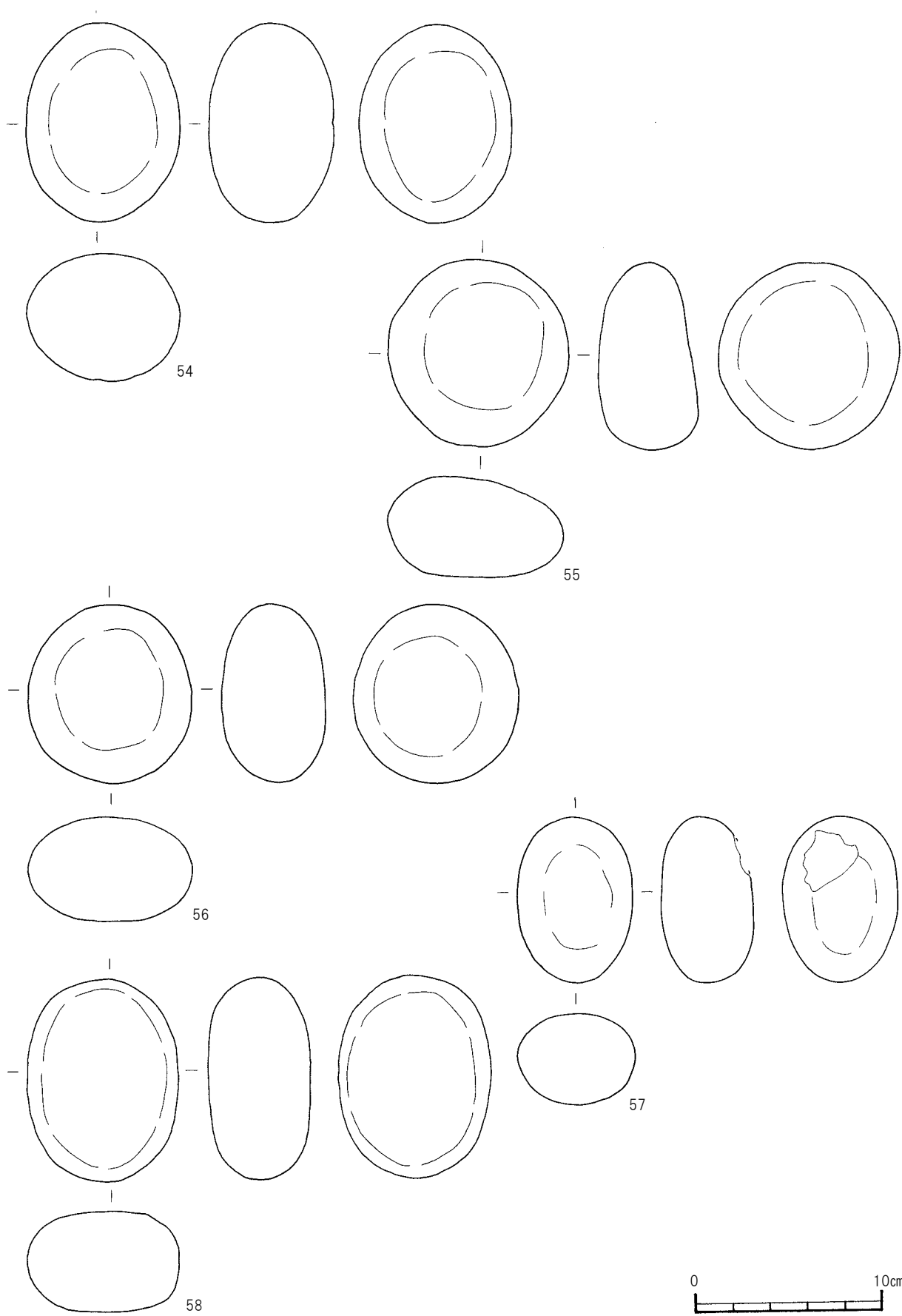
第383図 出土石器 磨石(6)



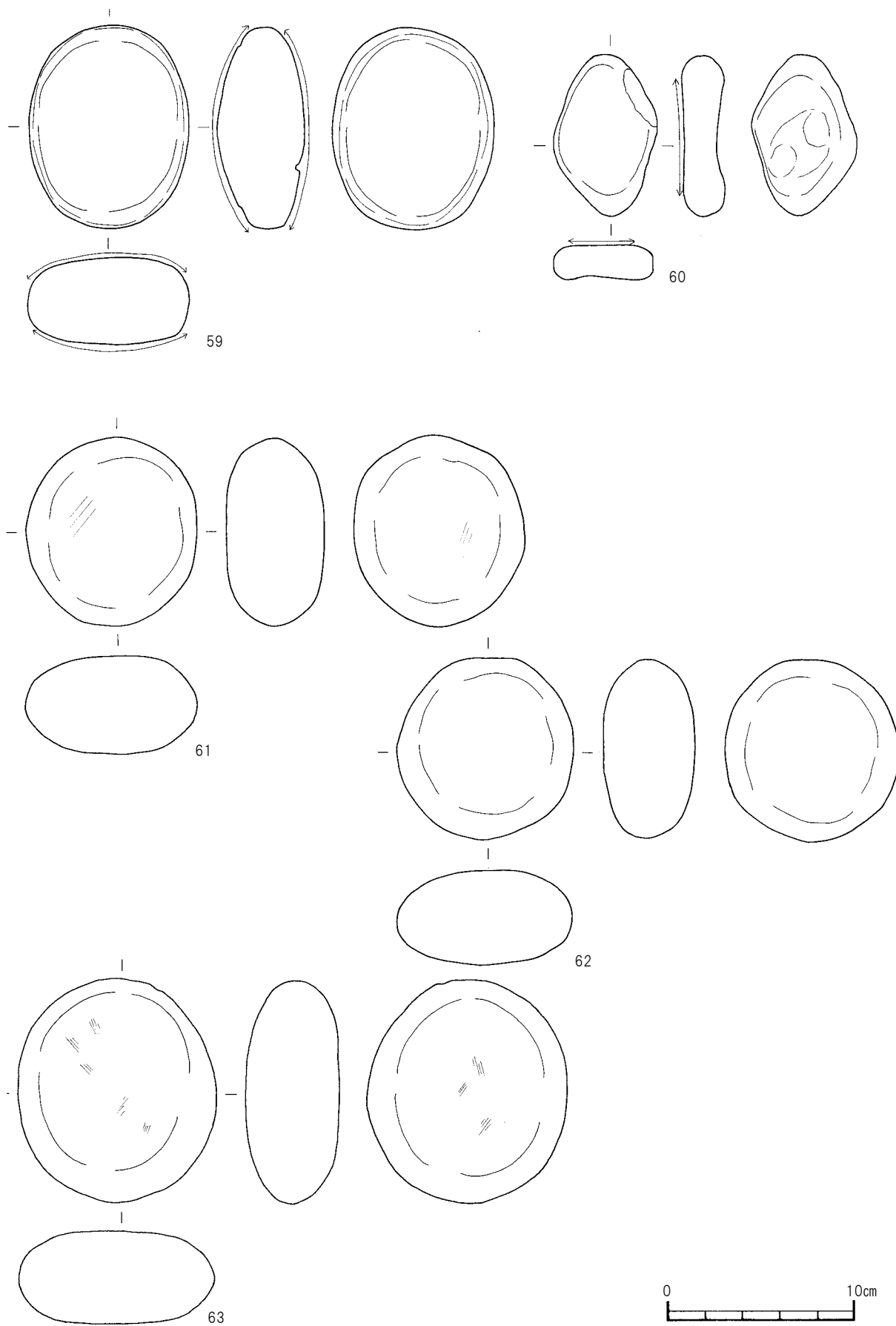
第384図 出土石器 磨石(7)



第385図 出土石器 磨石(8)



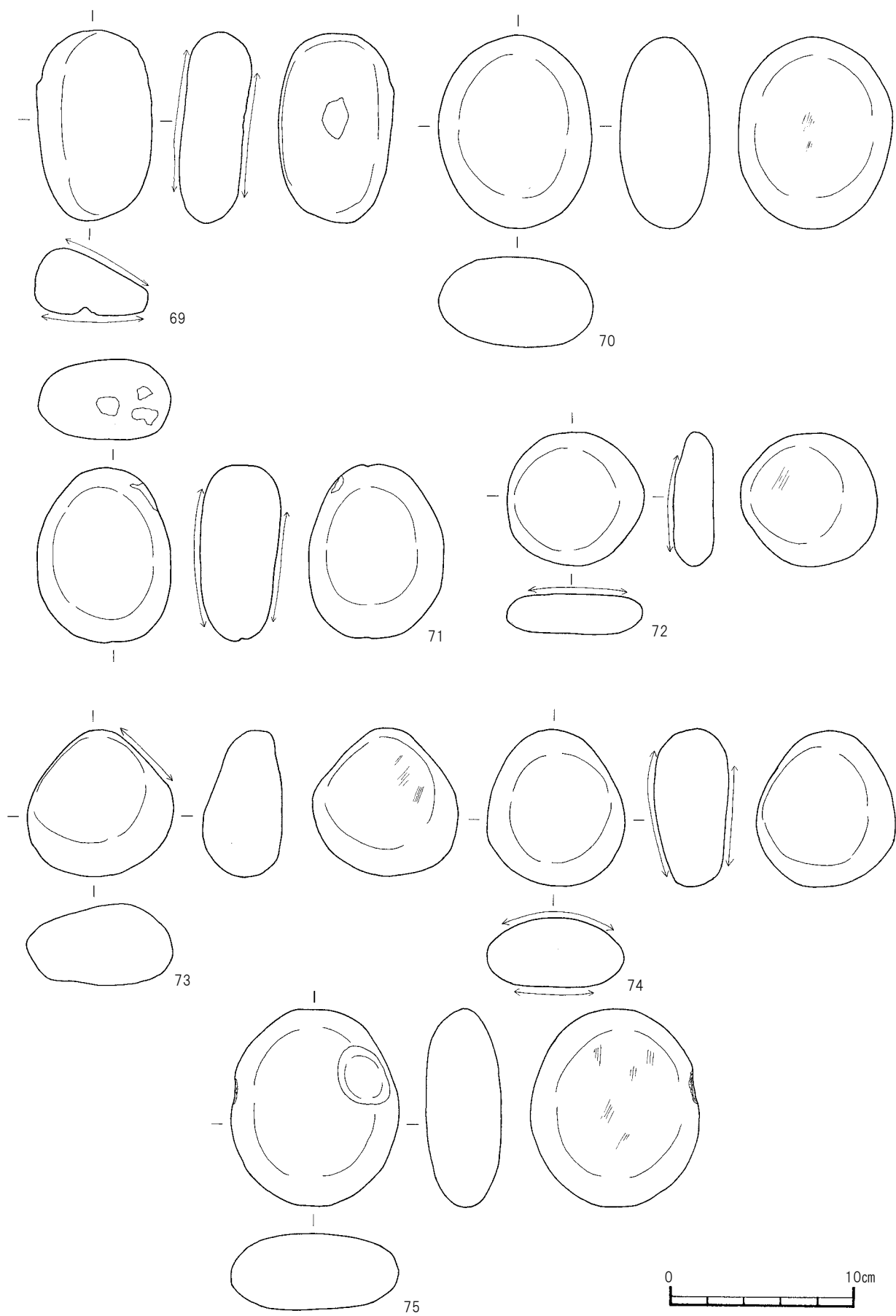
第386図 出土石器 磨石(9)



第387図 出土石器 磨石(10)



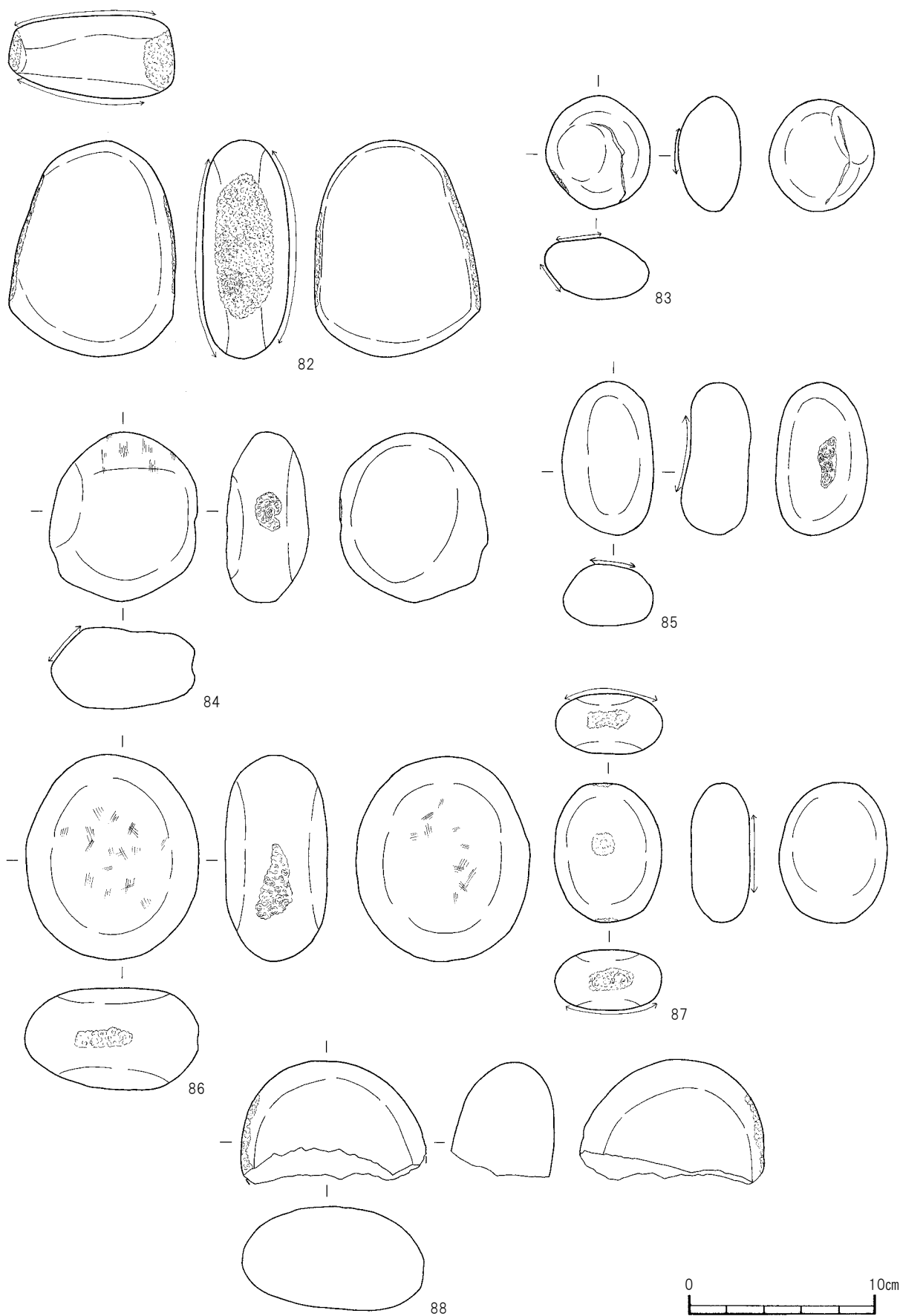
第388図 出土石器 磨石(11)



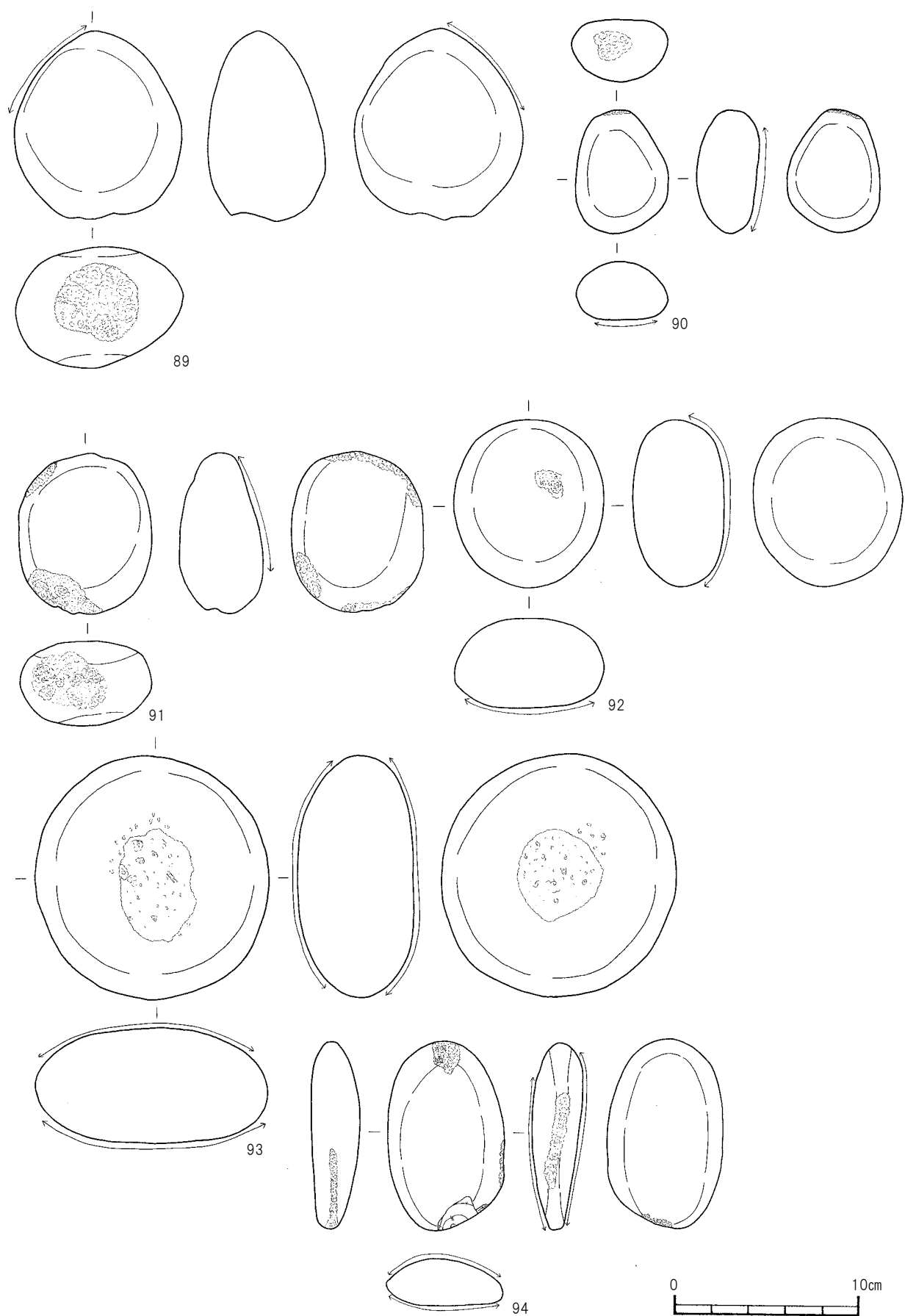
第389図 出土石器 磨石(12)



第390図 出土石器 磨石(13)



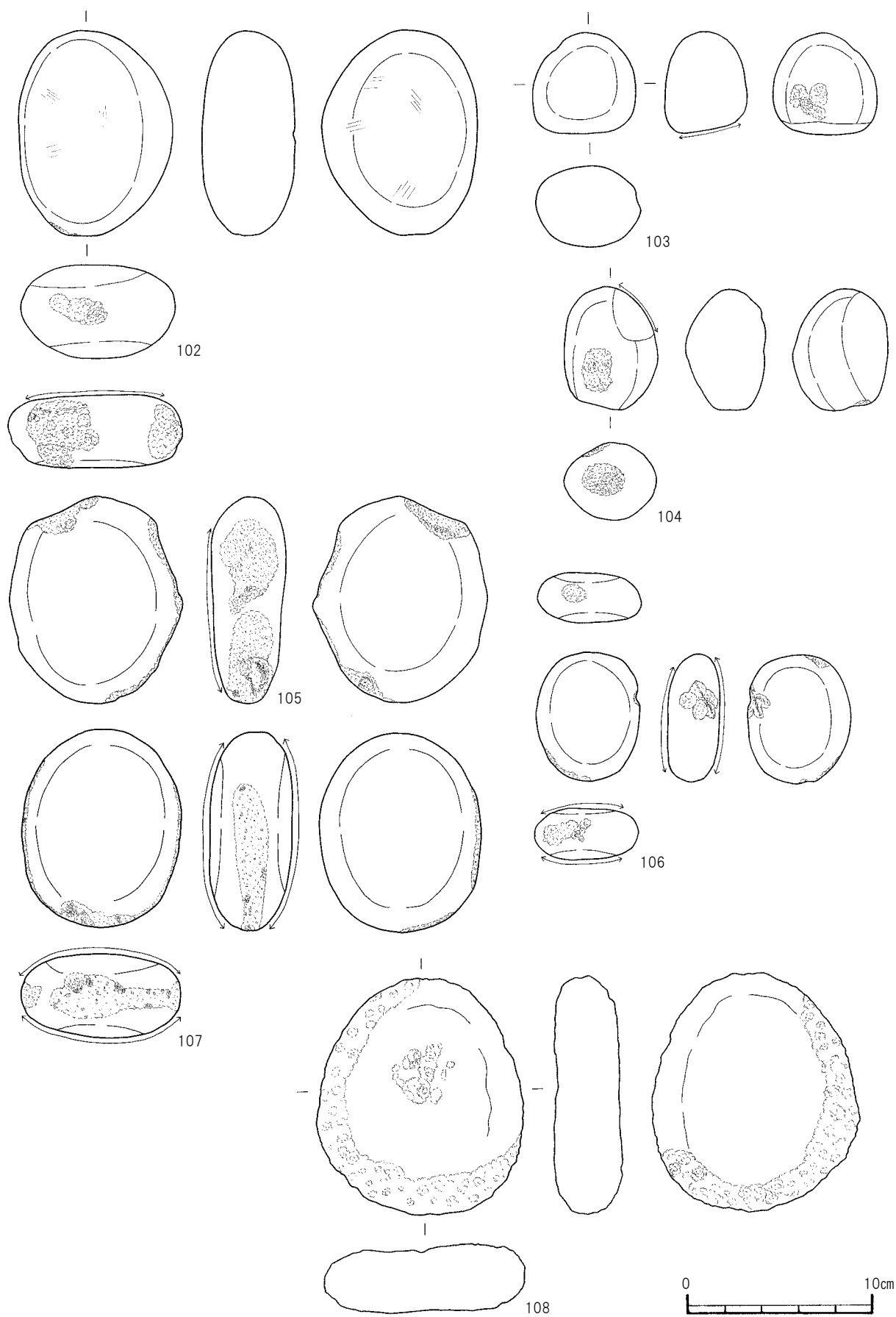
第391図 出土石器 磨石(14)



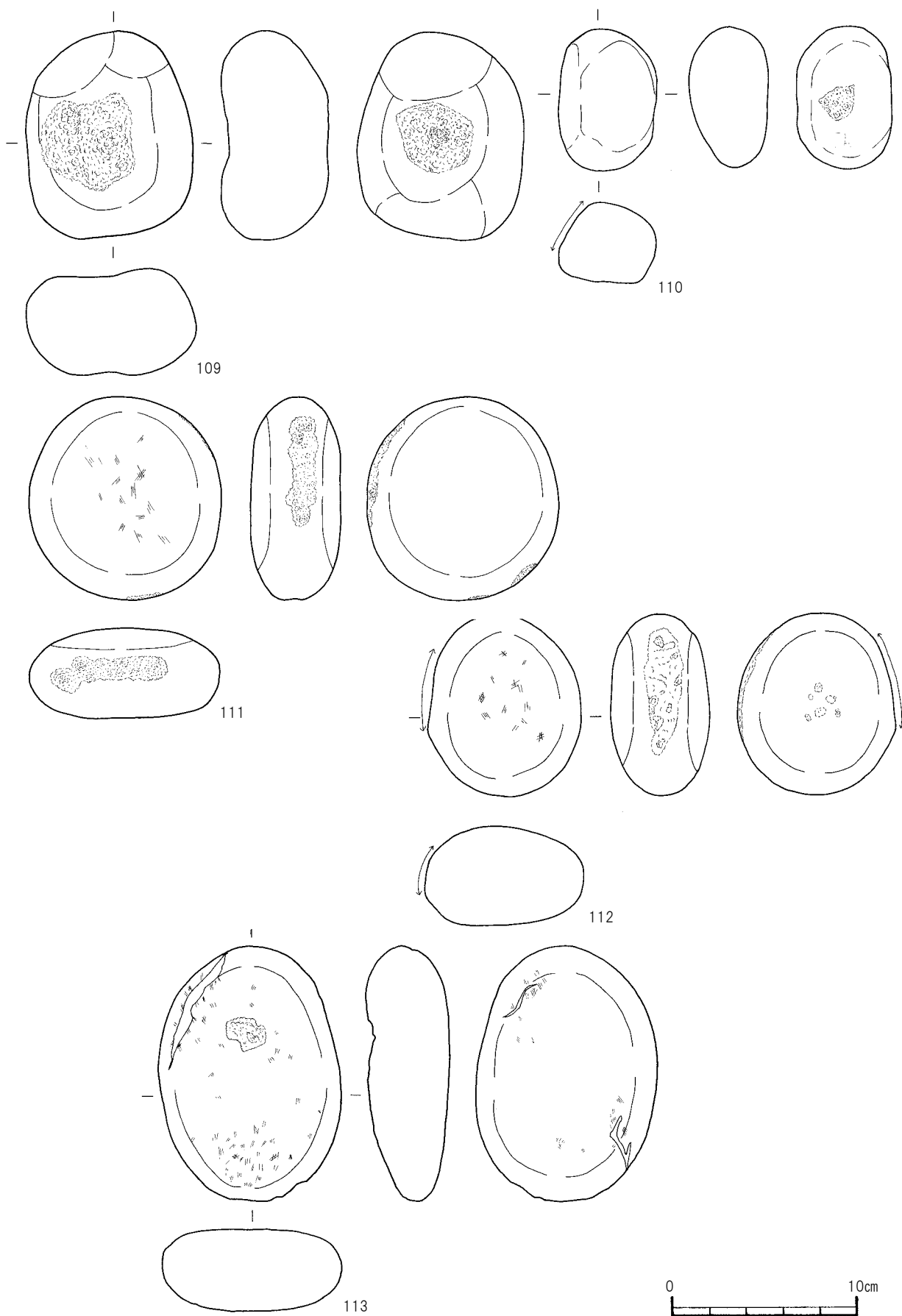
第392図 出土石器 磨石(15)



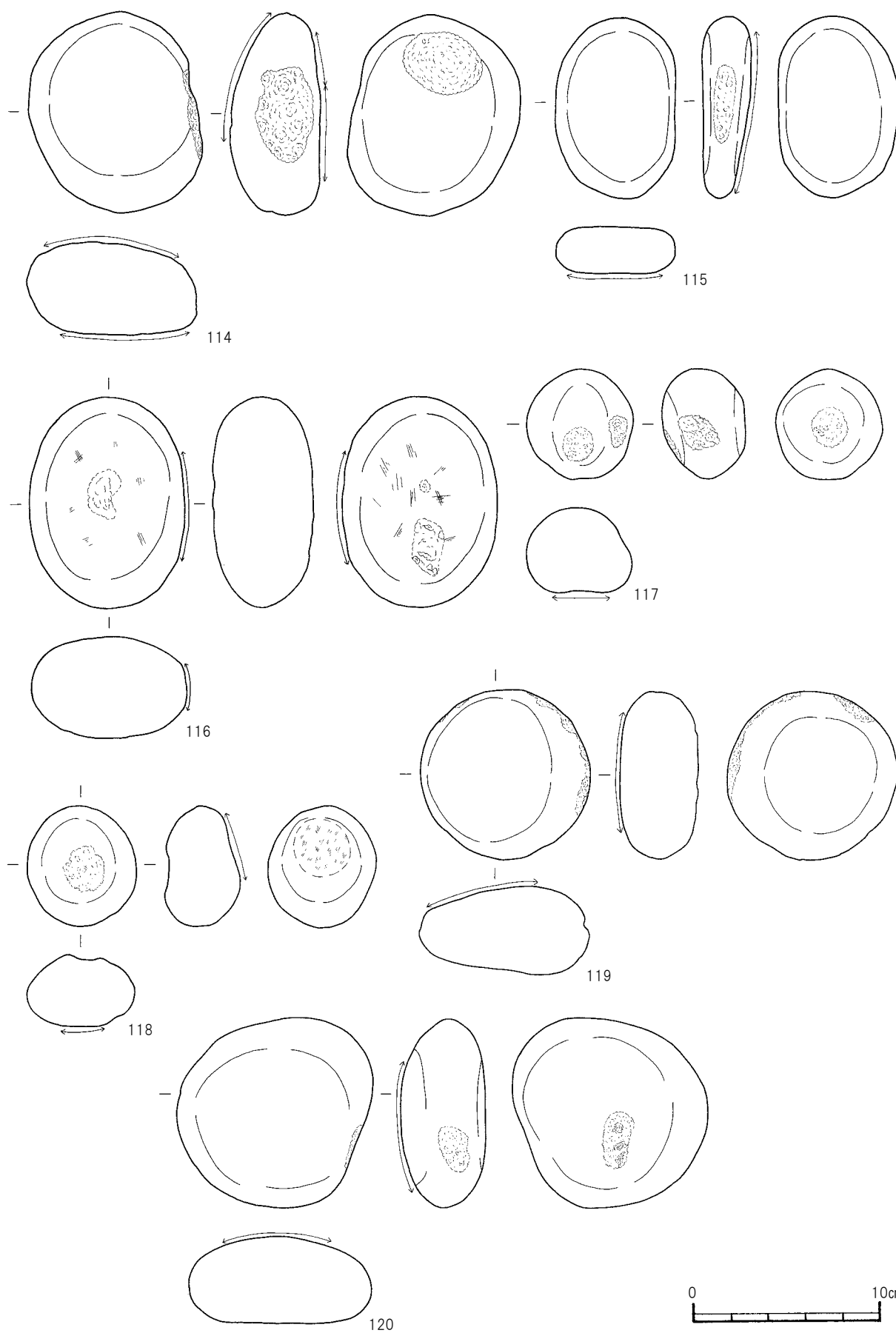
第393図 出土石器 磨石(16)



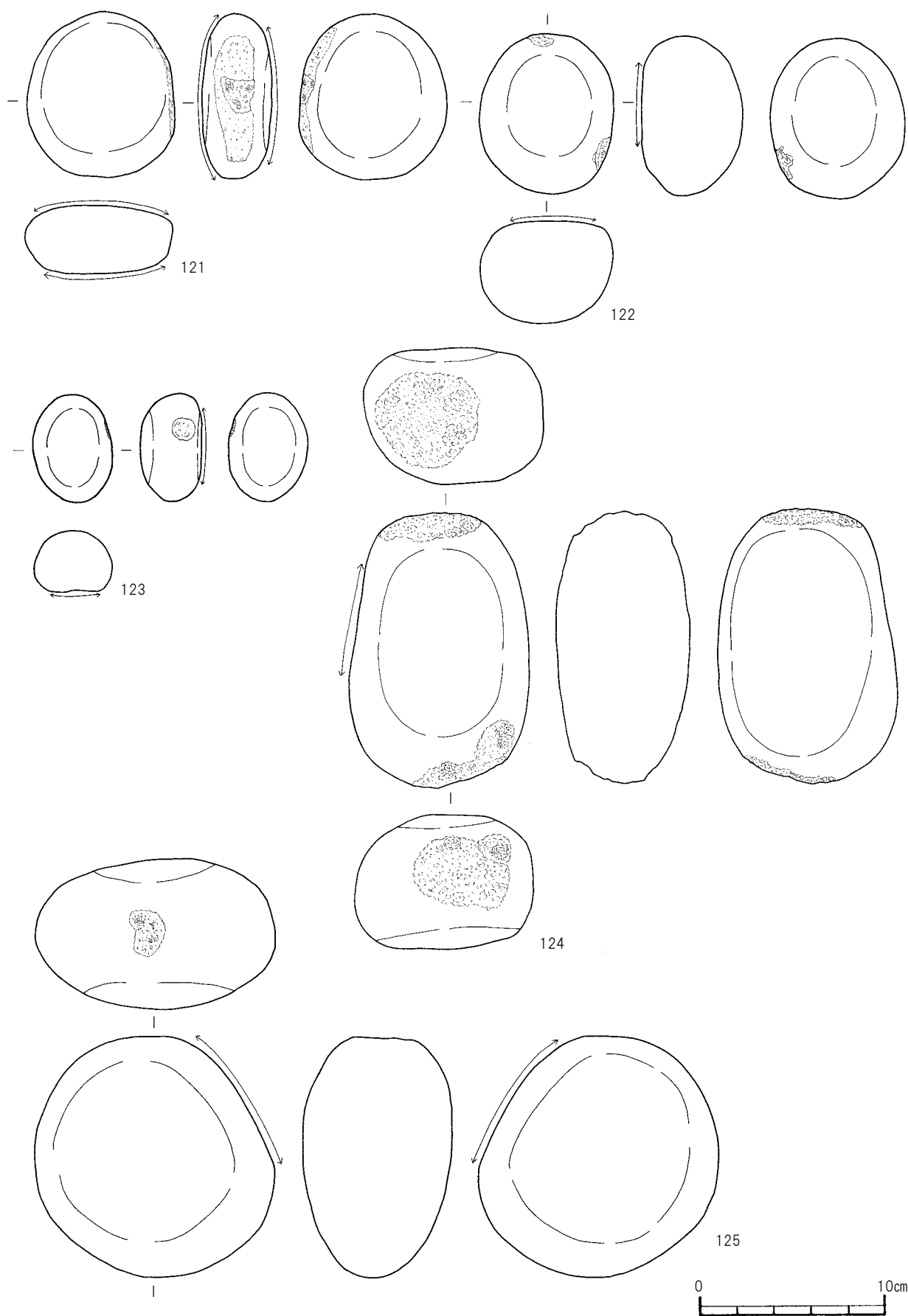
第394図 出土石器 磨石(17)



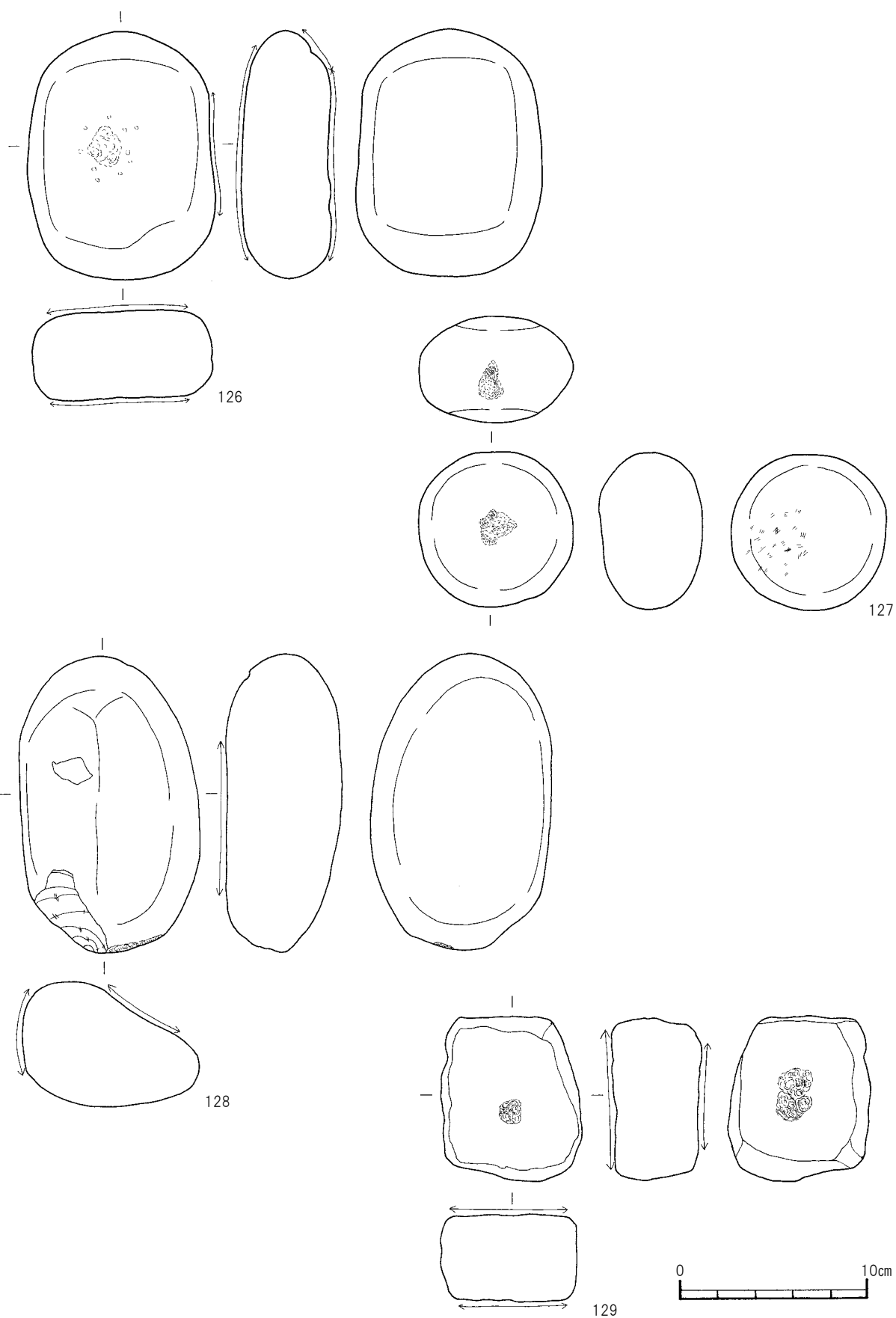
第395図 出土石器 磨石(18)



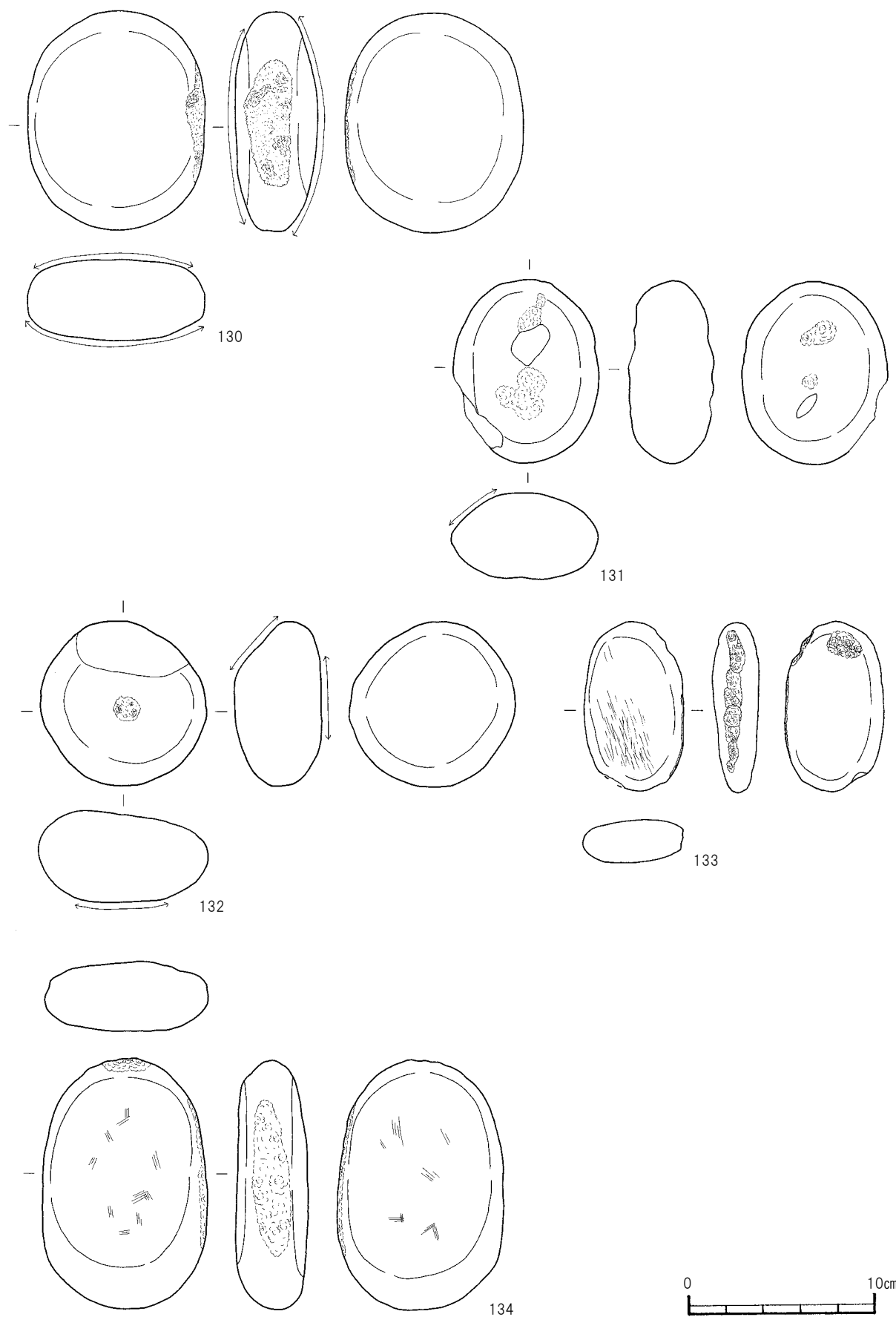
第396図 出土石器 磨石(19)



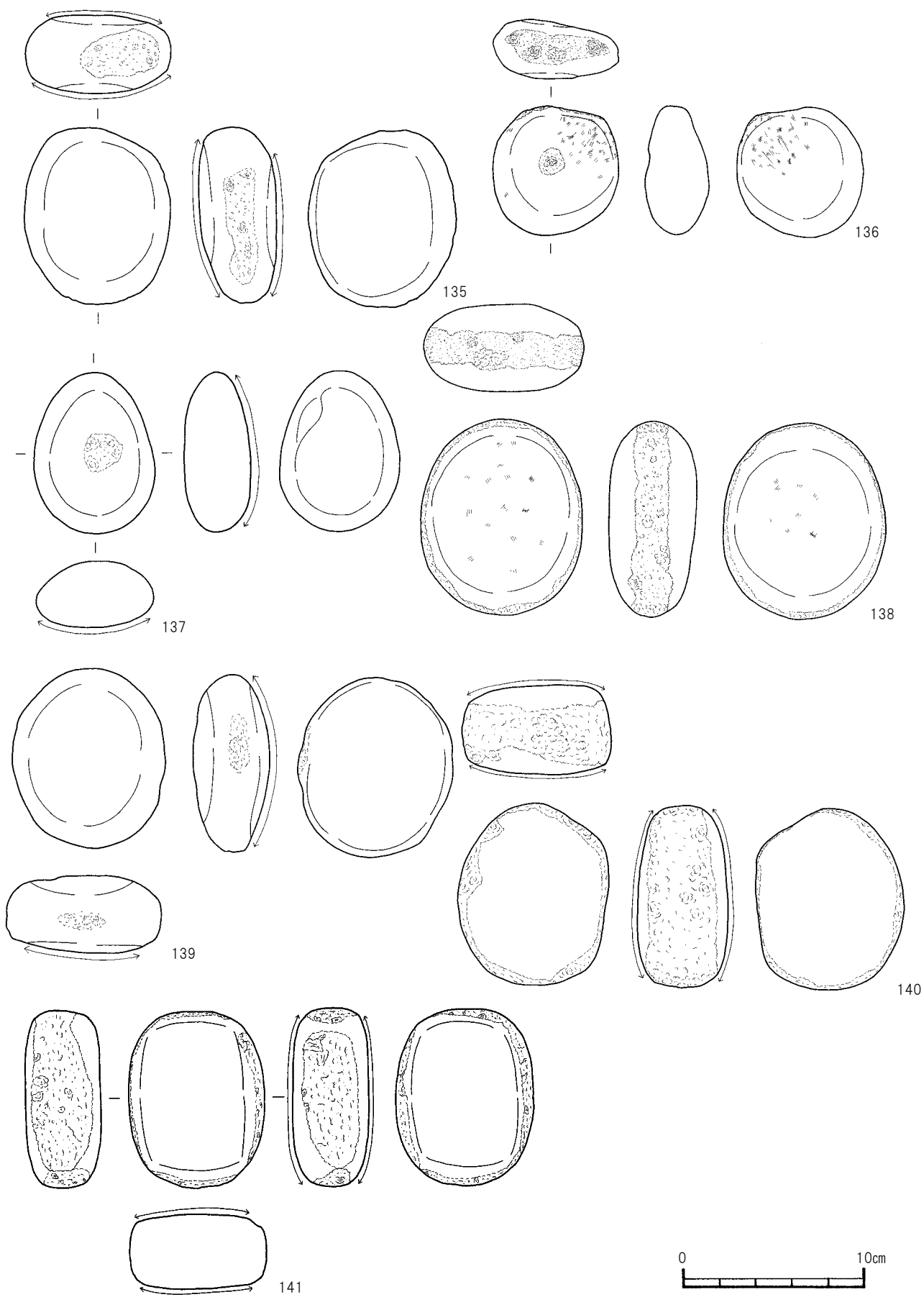
第397図 出土石器 磨石(20)



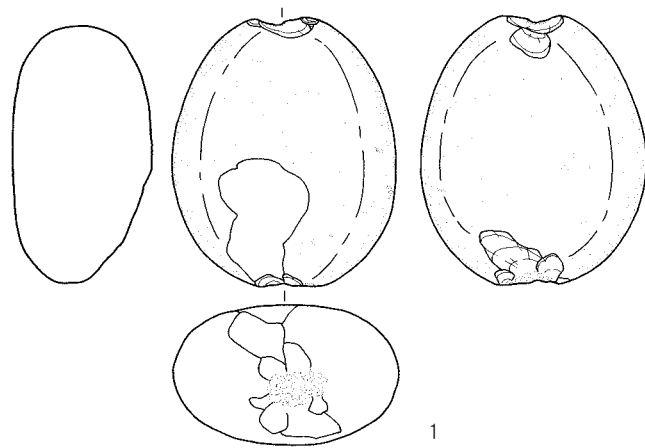
第398図 出土石器 磨石(21)



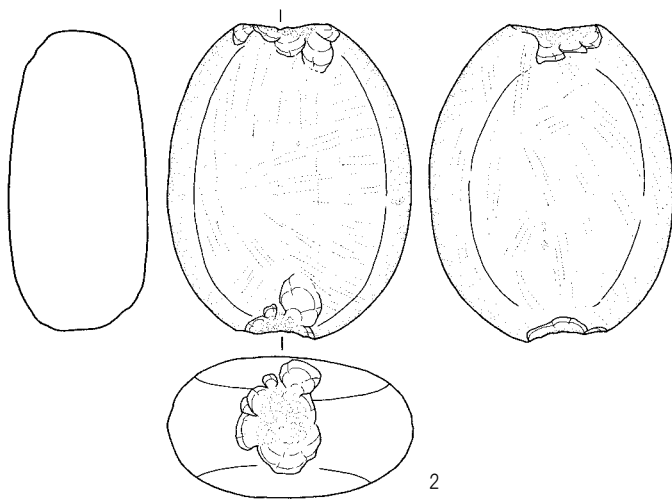
第399図 出土石器 磨石(22)



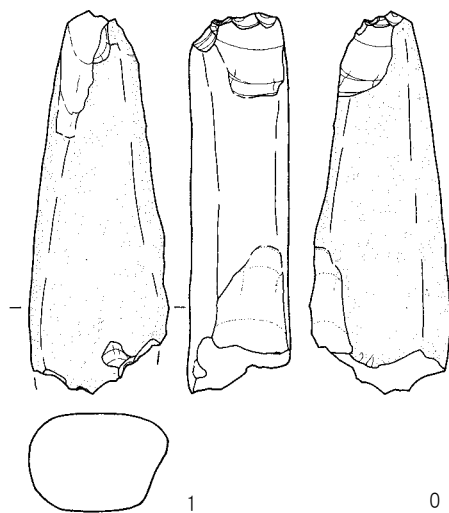
第400図 出土石器 磨石(23)



1



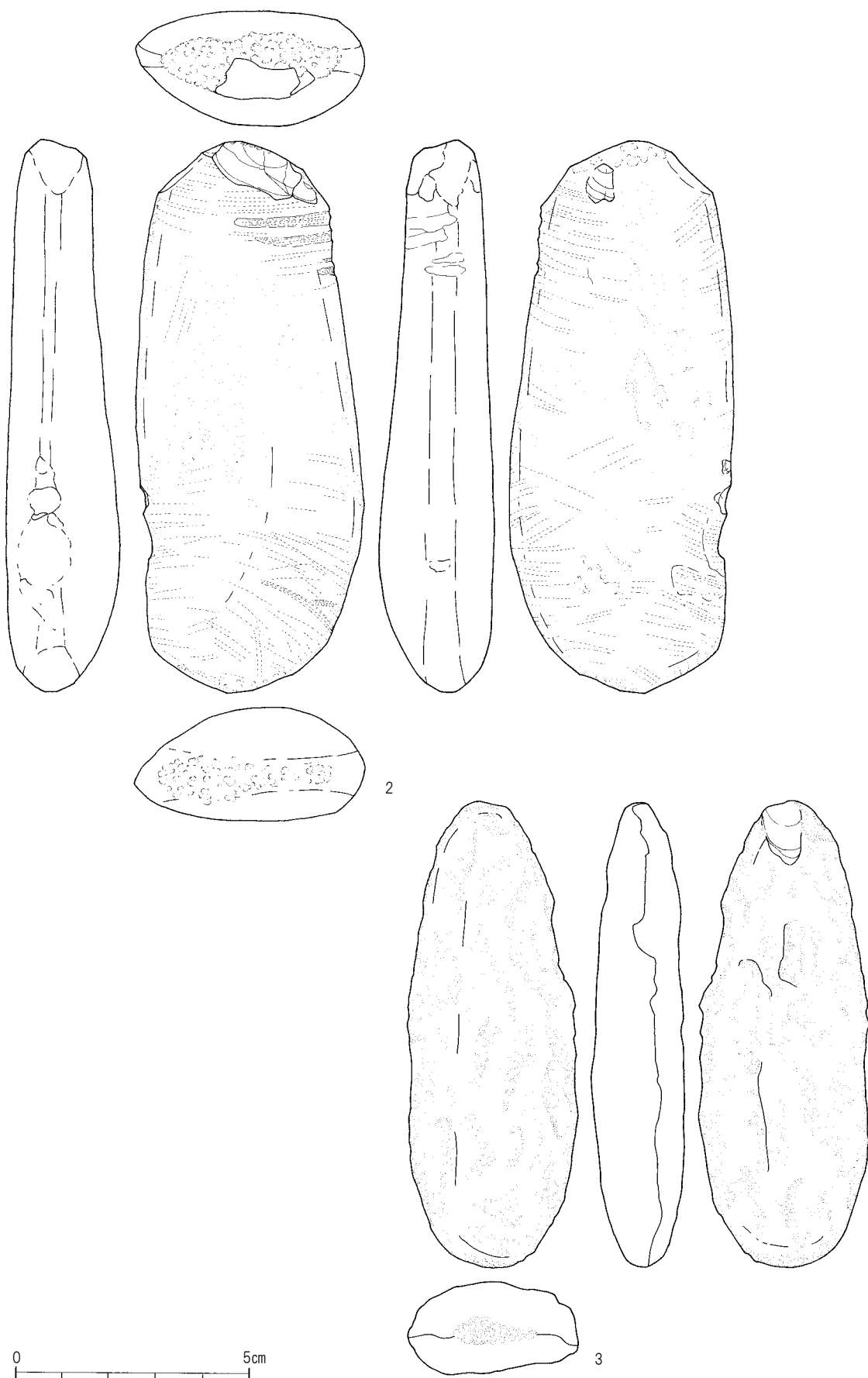
2



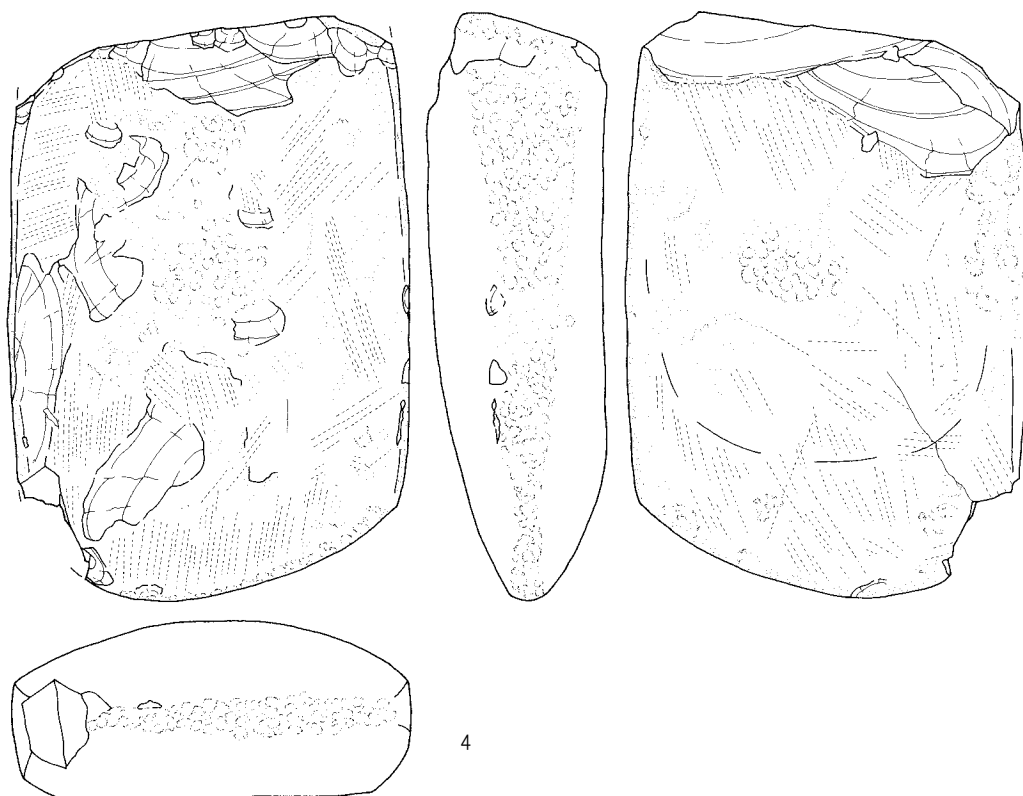
1



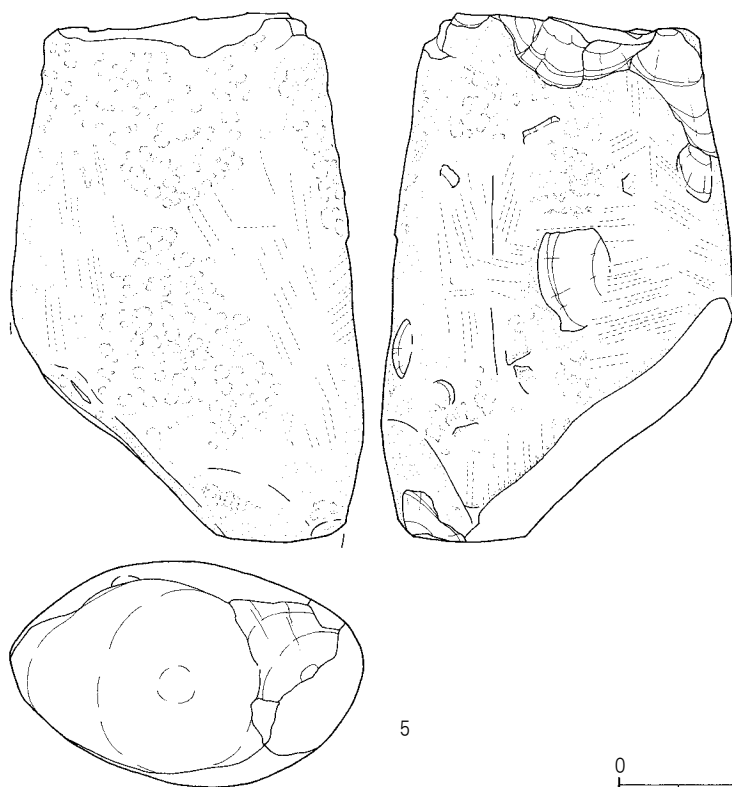
第401図 出土石器 石錘, 敲石(1)



第402図 出土石器 敲石(2)



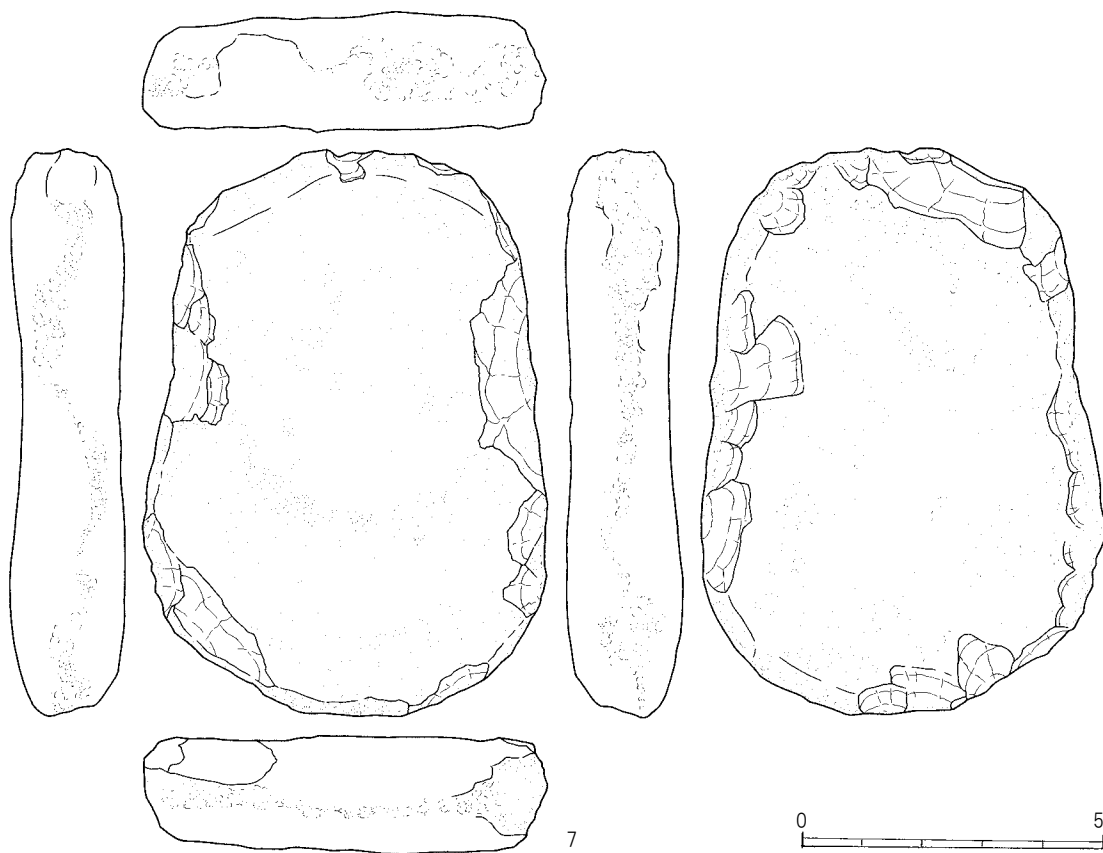
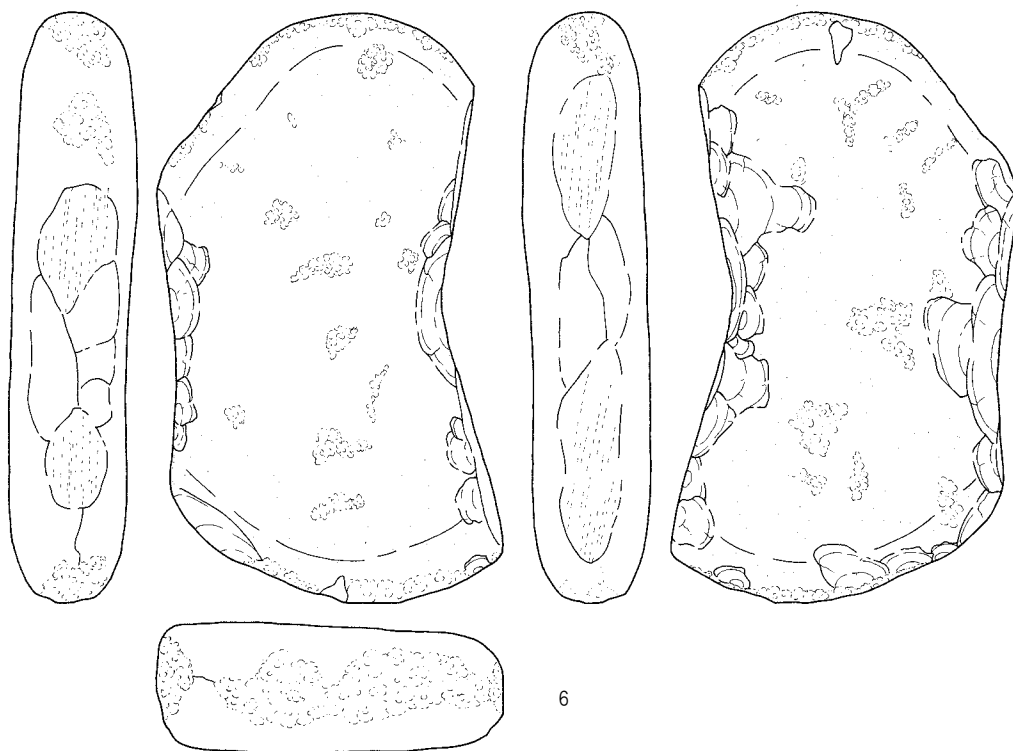
4



5

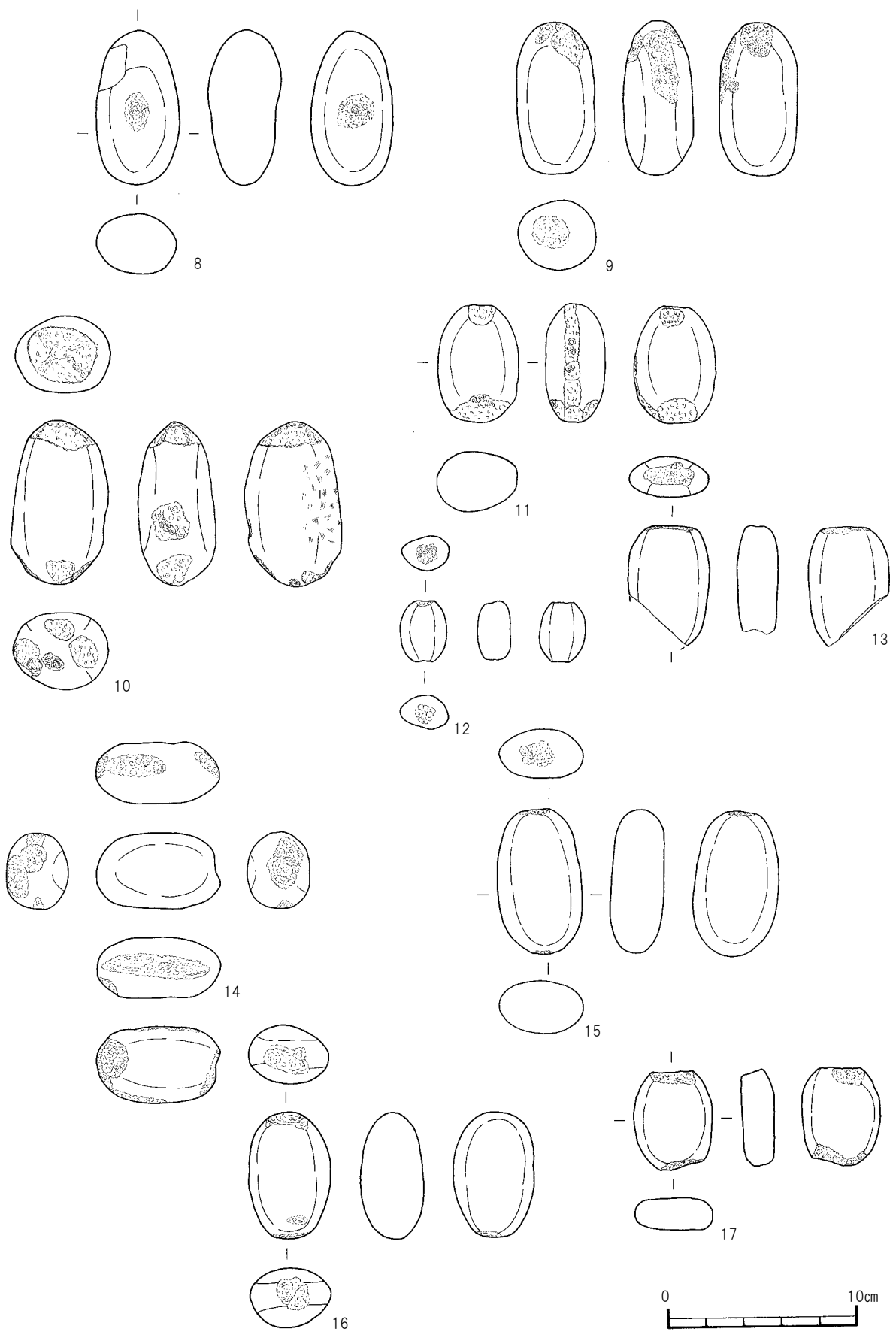


第403図 出土石器 敲石(3)

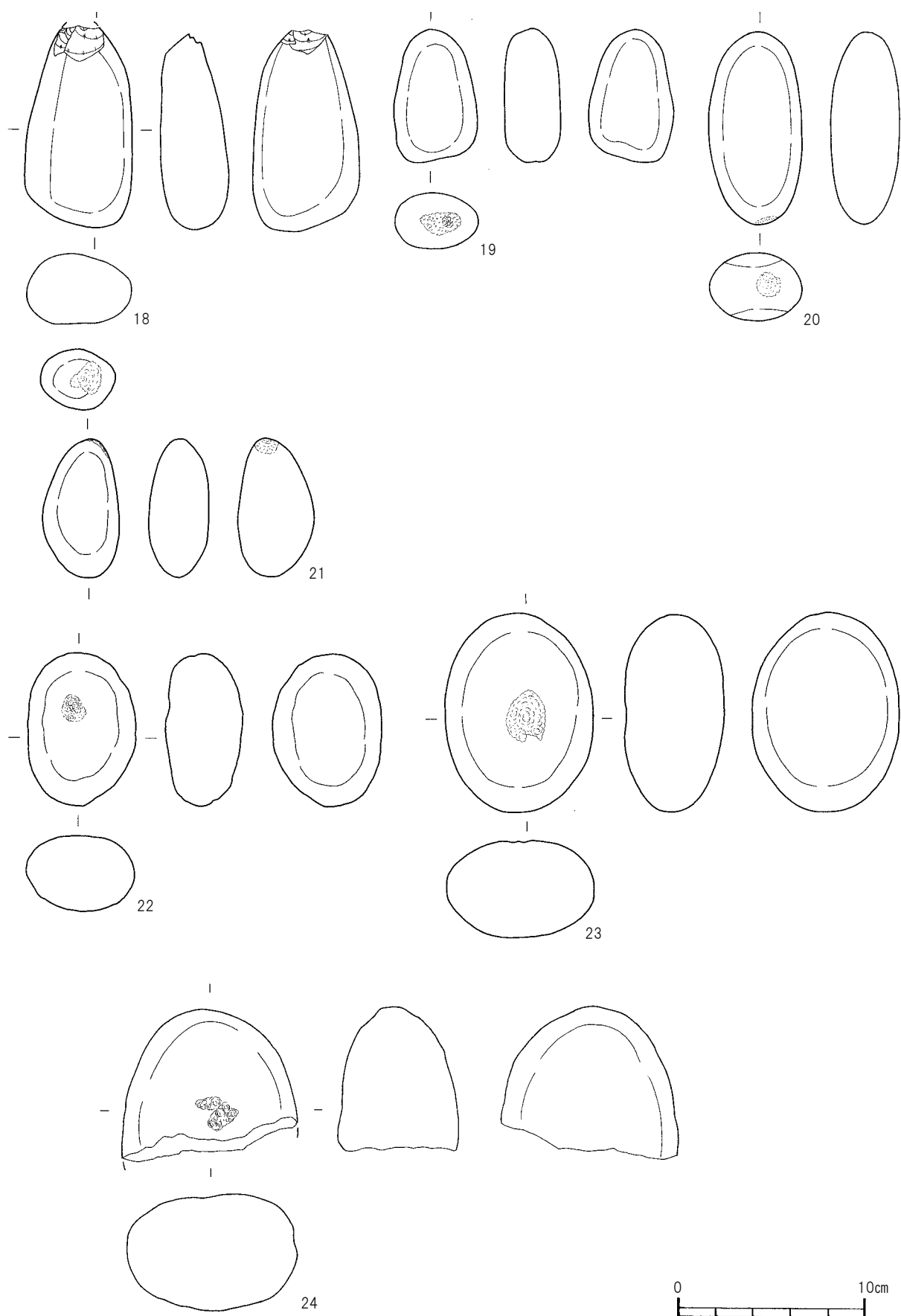


0 5cm

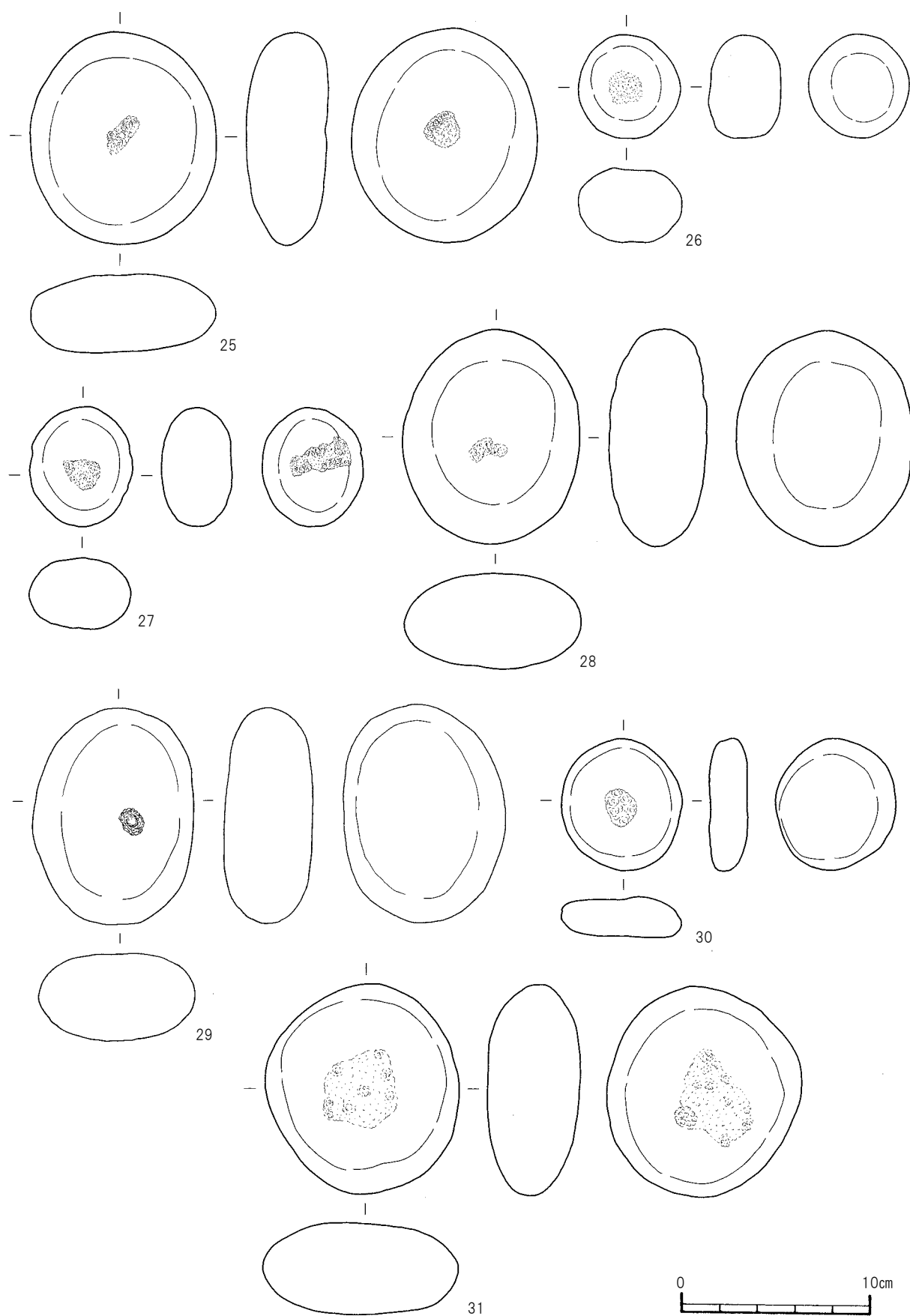
第404図 出土石器 敲石(4)



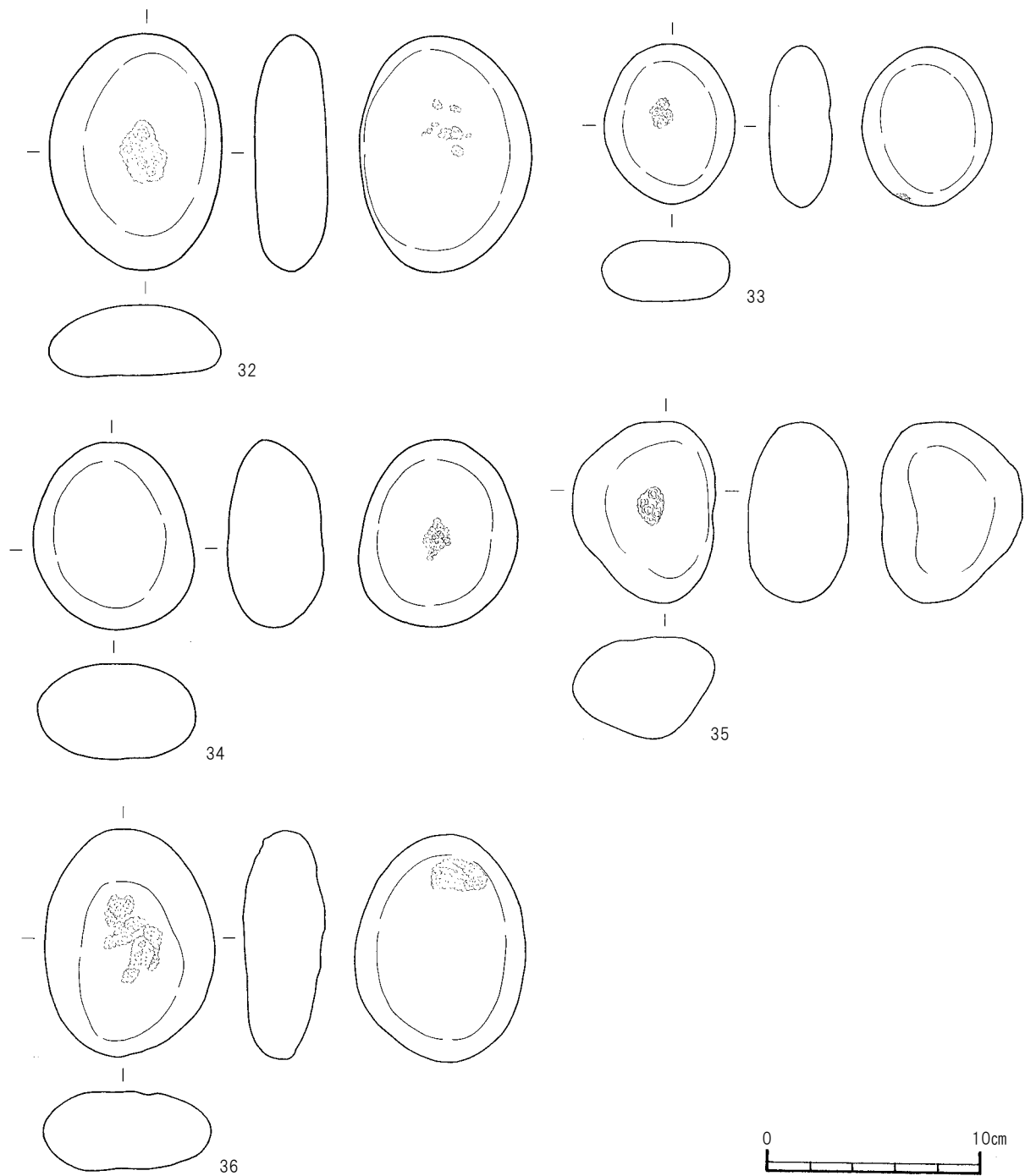
第405図 出土石器 敲石(5)



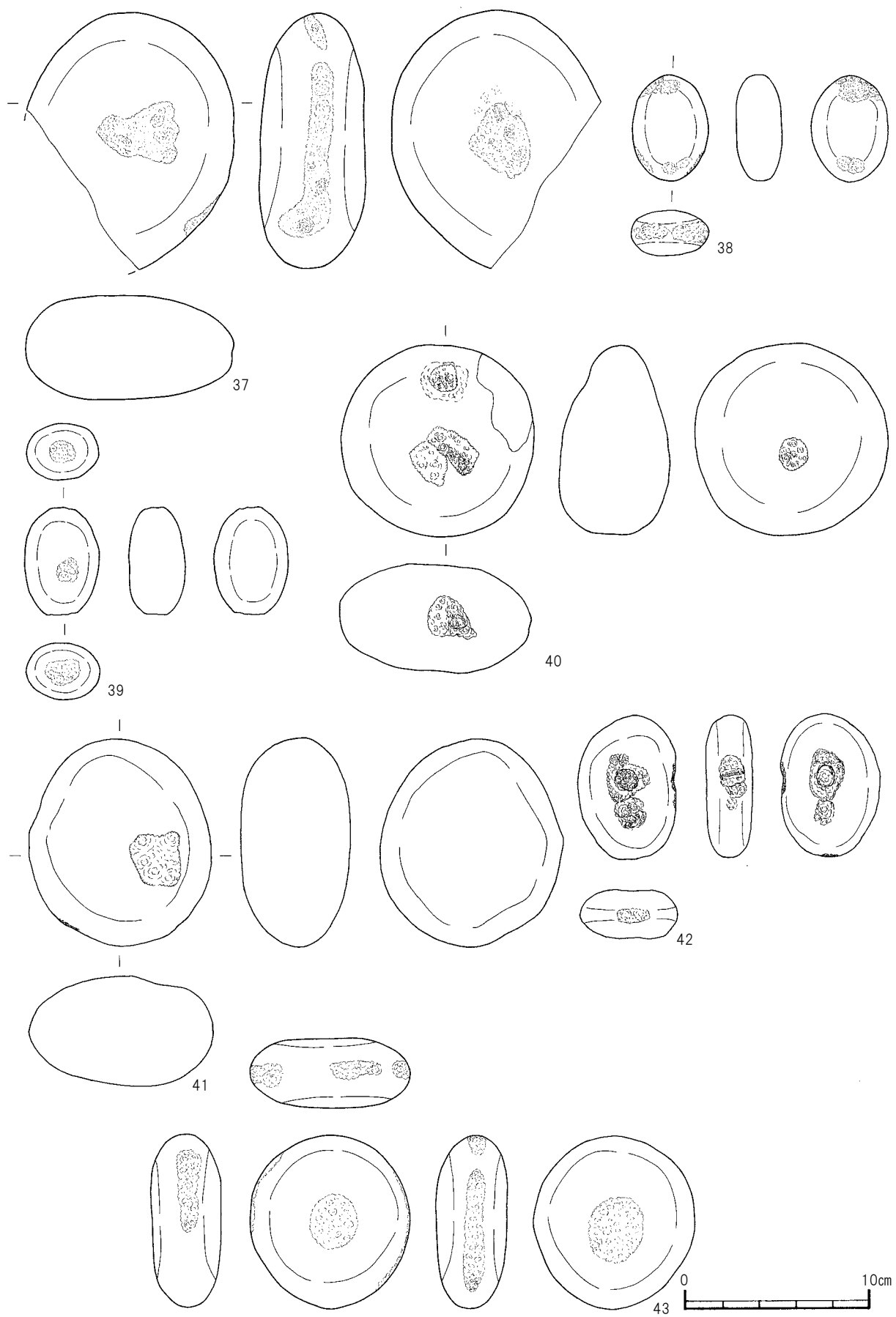
第406図 出土石器 敲石(6)



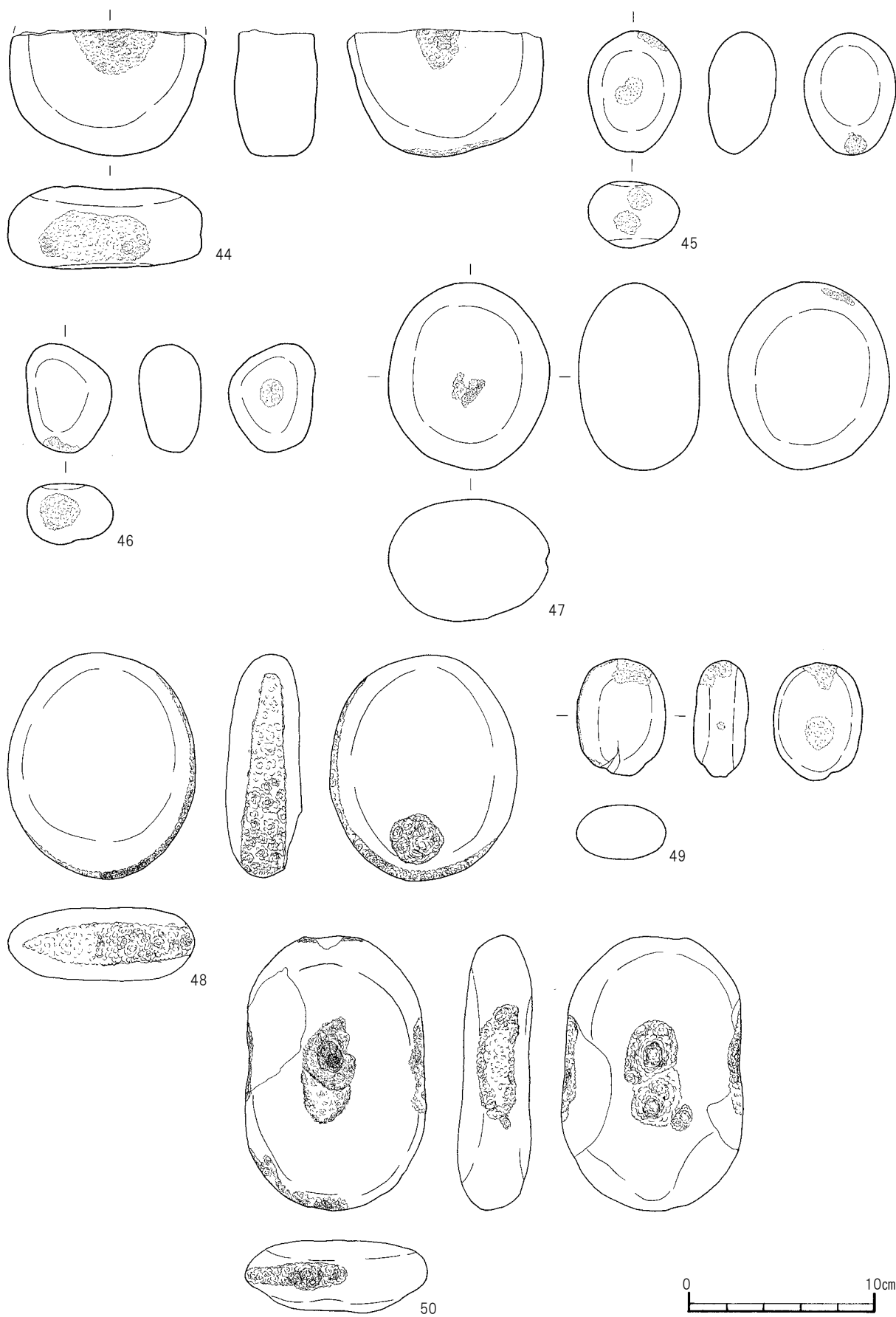
第407図 出土石器 敲石(7)



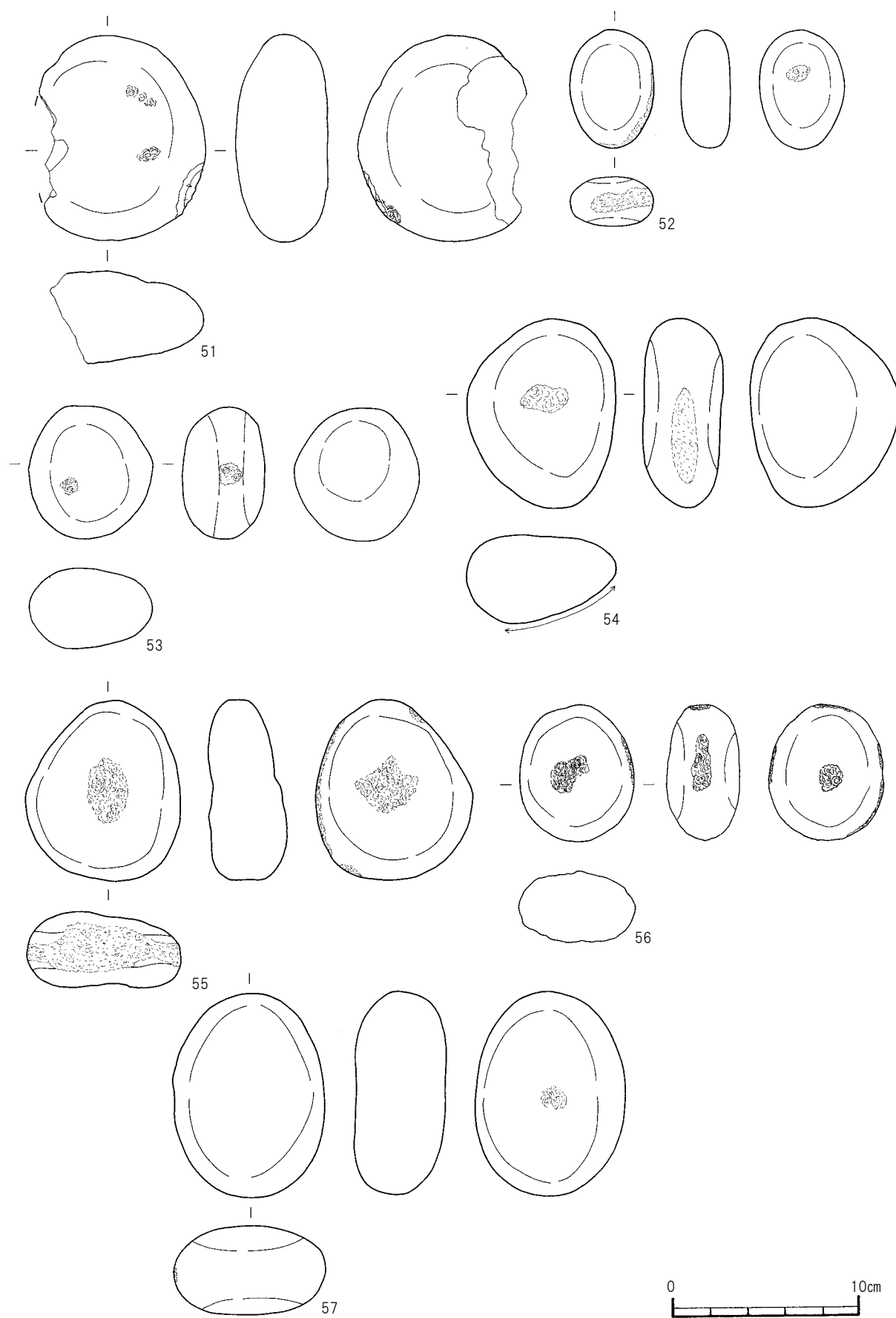
第408図 出土石器 敲石(8)



第409図 出土石器 敲石(9)



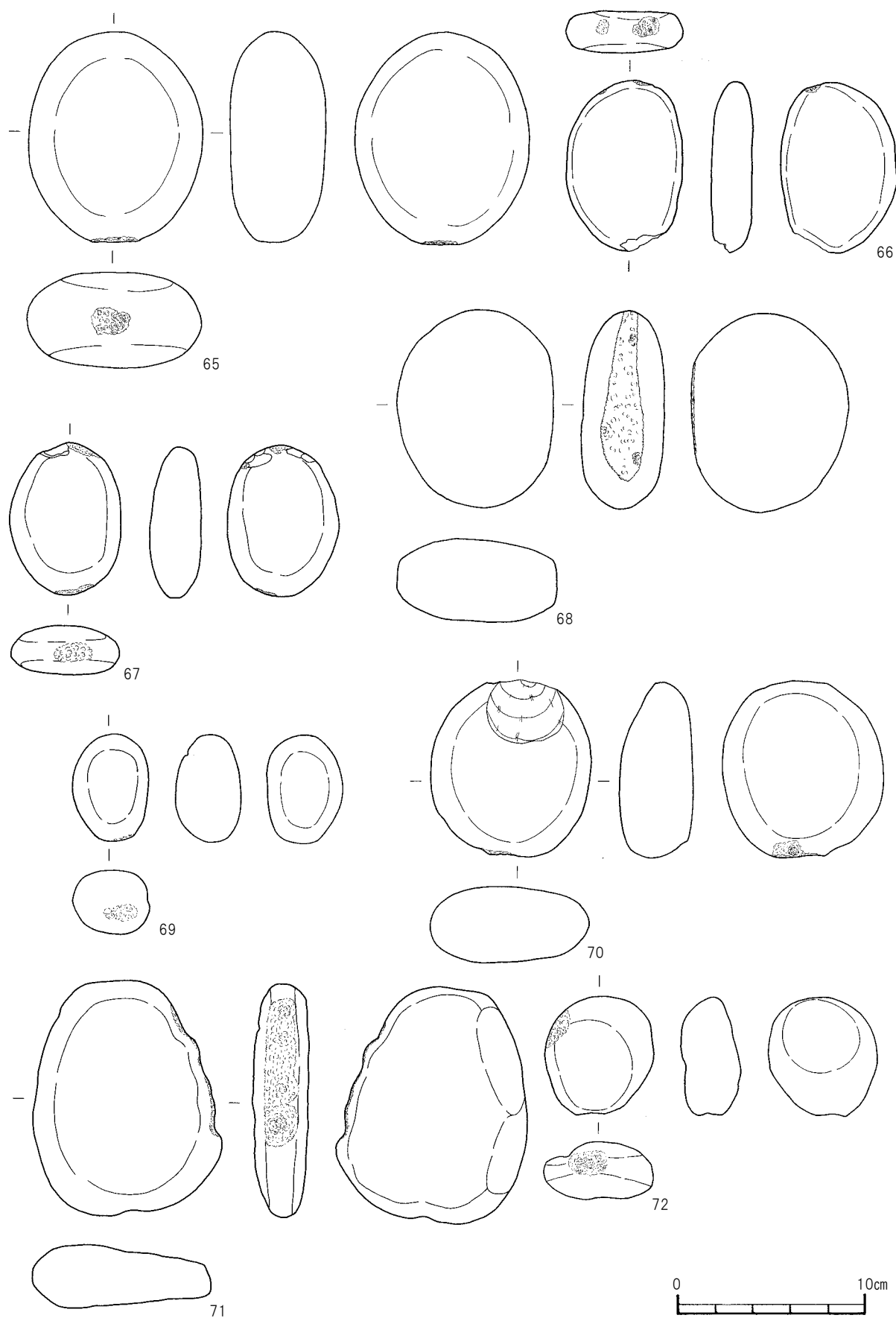
第410図 出土石器 敲石(10)



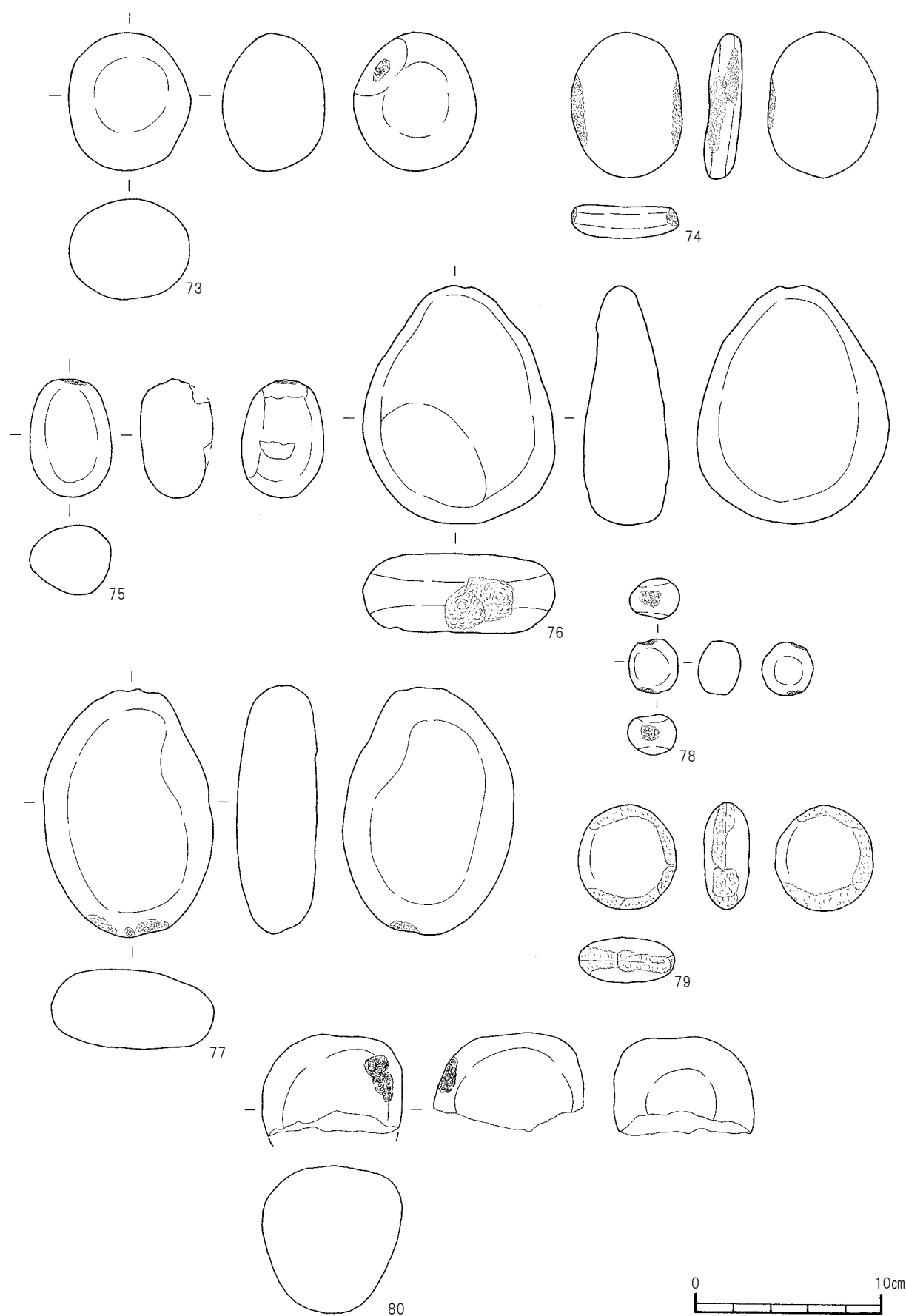
第411図 出土石器 敲石(11)



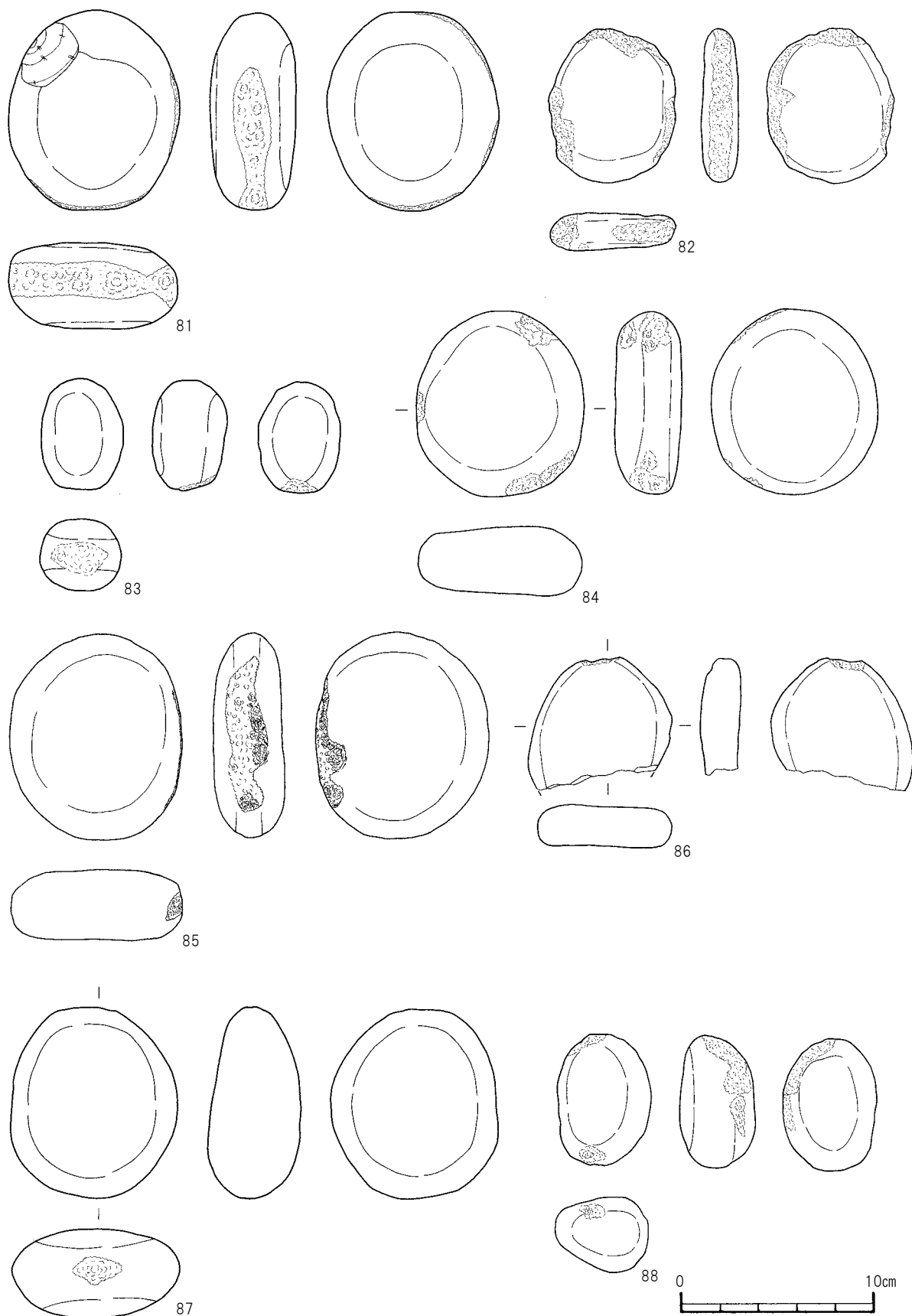
第412図 出土石器 敲石(12)



第413図 出土石器 敲石(13)



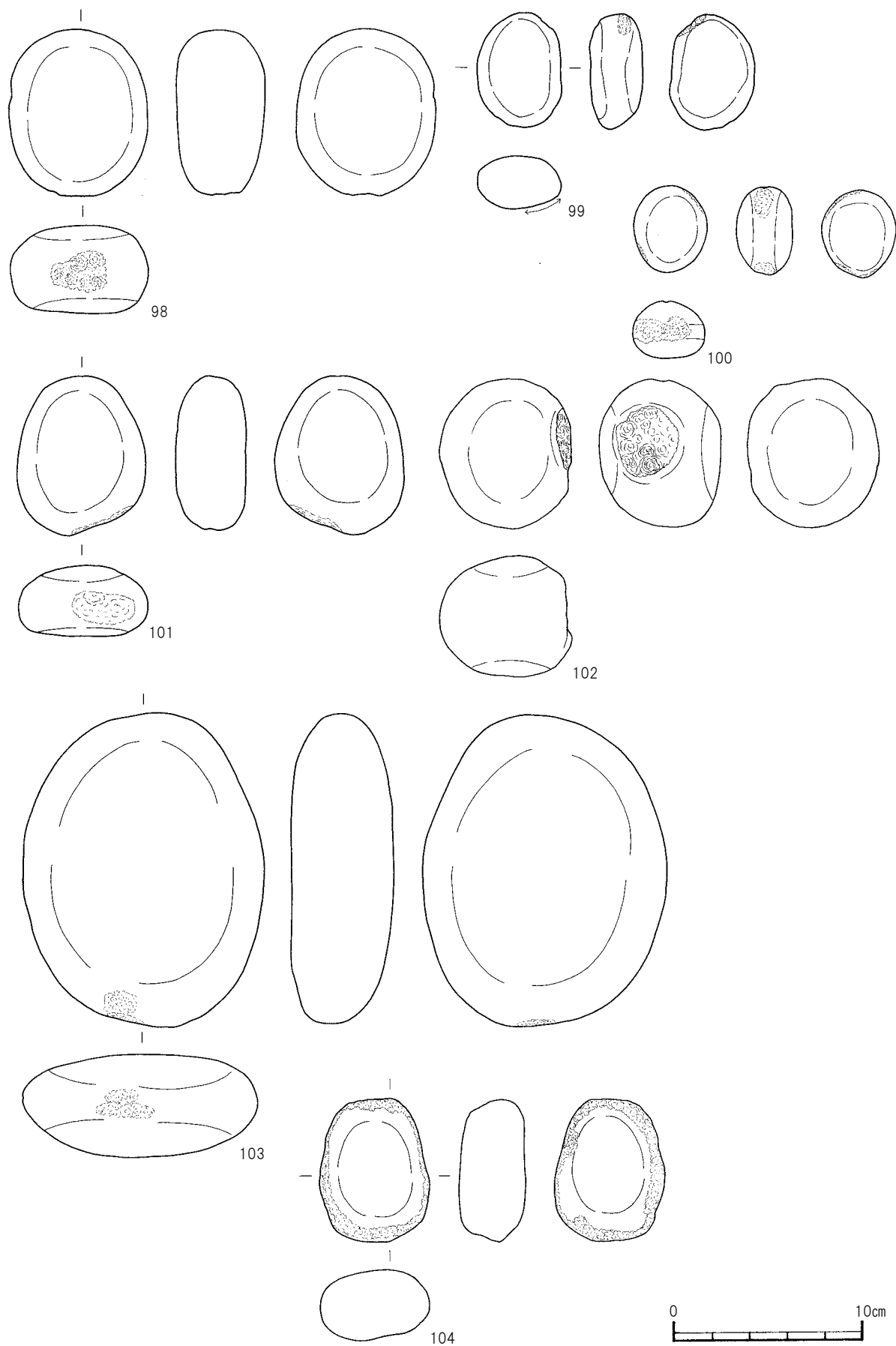
第414図 出土石器 敲石(14)



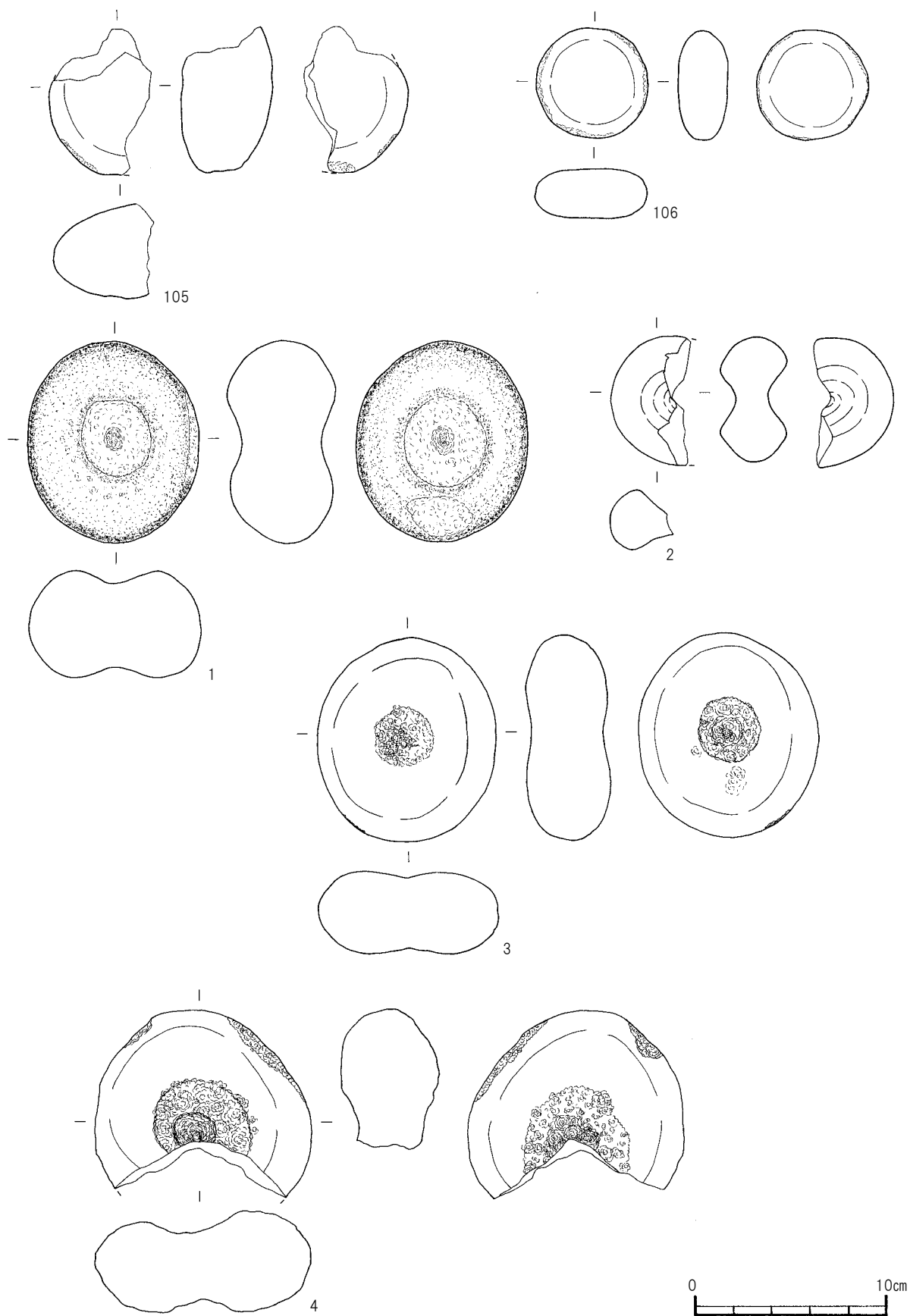
第415図 出土石器 敲石(15)



第416図 出土石器 敲石(16)



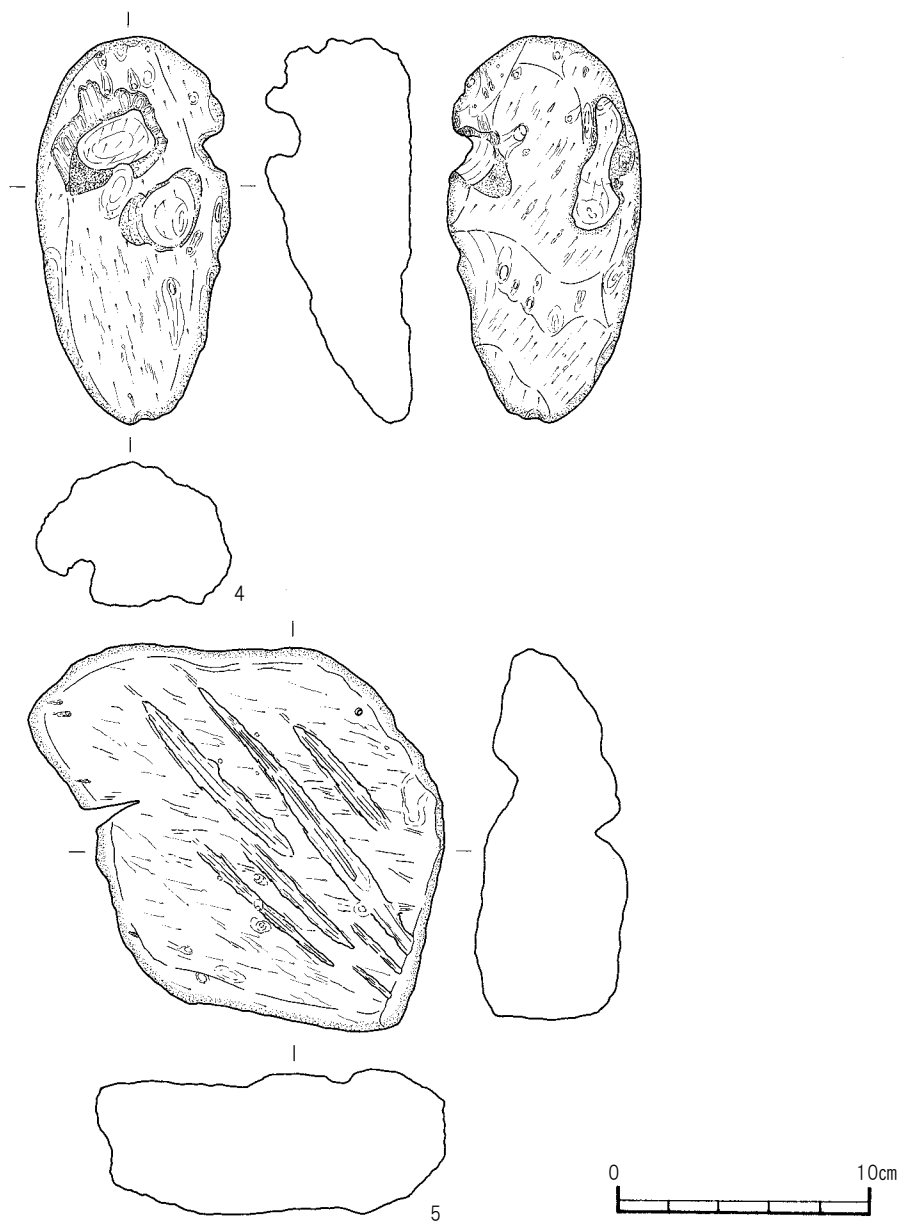
第417図 出土石器 敲石(17)



第418図 出土石器 凹石



第419図 出土石器 軽石製品(1)



第420図 出土石器 軽石製品(2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(140)
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(X X IX)

市ノ原遺跡(第3地点)【第Ⅱ分冊】

発行日 2009年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
電話番号 0995-48-5811

印刷 (株)イースト朝日
〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄3丁目30-7
電話番号 099-266-5522

